
千億の星、千億の光

かーき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千億の星、千億の光

【Nコード】

N88580

【作者名】

かーき

【あらすじ】

ガンダムSEED DESTINY再構成。
ルナマリア主人公。
ネタ多め。

*この作品は以前2chに投稿した物です。
arcadiaさんにも同時投稿させていただいております。

第1話「超種運命の大戦<1>

CE73年9月末日

「やれやれ、地球連合との折衝は、疲れる」

オーブ連合首長国宰相ウナト・エマ・セイランは椅子にどっしりと腰を下ろすため息をついた

「お疲れ様です。父さん」

息子の宰相補佐官、ユウナ・ロマ・セイランが労わりの声をかける。「どうなのです？ ブルーコスモスの新たな盟主、ロード・ジブリールという人物は？」

「なにしろ前大西洋連邦国防産業理事だったムルタ・アズラエルは基本が商人だったからね。利害と銭勘定で、交渉もできた。しかし、ムルタ・アズラエル以上にロード・ジブリールはプラント憎しで凝り固まっておる。やりにくいよ。もっともそこを突いて、プラント対策でオーブに大掛かりな援助を引き出せたのだから、そう悪い事ばかりでもないがね。有能な事は確かだな。ムルタ・アズラエル亡き後のブルーコスモスを見事に立て直した」

「さすがに、ダメージを受けていても大国の底力はすごいですね。まさかあつという間にマストライバーが再建されるとは」

「このまま冷戦、と言うのがオーブの国益にとってはいい事なのかもしれんな」

コンコンっと音がする。

「失礼します」

ノックの音と共にスーツを着た男が入ってきた。セイラン家の家令だ。

ウナトに書類を渡すと、お辞儀をして退出していく。

「ほう」

ウナトは軽く驚いた声を上げる。

「なんなのですか？」

「エリカ・シモンズが、極秘にモバイルスーツを作っているらしいよ」「へえ。それはすごい」

どこか実感のこもらない声でウナトは応じる。

なにしろジャンク屋がごろごろモバイルスーツを所有している世界だ。一個人が趣味でモバイルスーツを開発ぐらいしていても、いいのかもしれない。

「コストがすごいで。M1アストレイが20機は揃えられる」

「もしか、アス八家関わっているんでしょうか？」

以前、ヤキン・ドゥー工戦後、アス八家の財政から多額の使途不明金があった事をウナトが掴んだ事があったが、アス八家の内部事情だからとそれ以上関わらなかつた事があった。

「いや、財源は国庫だな。この会計からあちらの会計へ、あちらの会計からこちらの会計へ、巧妙にややこしく動かされて、いつの間にか消えていると言う手口だ。アス八家関わっていないと言う事は、エリカ・シモンズ個人の趣味かね？」

「そ、そりゃあ一大事じゃないですか！　すぐに警察に知らせてエリカ・シモンズの身柄を　！」

「まあ、待て……」

慌てだすウナトをウナトが制する。

「ふ……む。この機体の肝は、装甲な訳だな。『ヤタノカガミ』と言つて、ビームを跳ね返すらしい」

「すごいですけど、実体兵器には、どうなんですか？」

「ははは。普通の、発泡金属と変わらないようだ。ビームサーベルにも、無力だよ」

「だめだめじゃないですか！　やっぱり拘束……」

「待てと言つに……。ほう。このシールドはすごいで。中心部は表面にミラーコーティングをしてビームサーベル対策。特殊な力場を発生させて、陽電子砲の直撃にも耐えられるらしい。周辺部はPS

装甲で、実体兵器対策も一応考えてあると言っ訳か……。下部は鋭利に尖らせてあり、打突・投擲武器としての使用も可能とな。……いいだろう、開発を続けさせよう」

「いいのですか？」

「『ヤタノカガミ』、量産してコストが下がれば艦船にも貼れるかも知れん。そうなつたら、すごいぞ。艦船ならば外殻と内殻の間に実体兵器用の装甲などを付ける様にすれば済む。なにしろオーブは技術で食って行かんとな。国益に沿うなら、多少の事は大目に見よう。日本のソニーのある人も「失敗はいちいち上司に言っな、成功してから報告すればいい」と言っているしな、それを実践したのかも知れんよ、ふふ。一応、エリカ・シモンズには細かい事には口を出さないから、秘密に勝手な事はするなと釘を刺しておく」

「父さんがそう言うなら」

「ところで、明日はアス八代表が極秘にプラントに出発する日だったな」

「ああ、どうせ例のボーイフレンドと一緒にでしょ」

「どこか投げやりに、不貞腐れたようにユウナは答える。

「お前ね。自分の方に振り向かせてやるとか、気概は持てんのか」

「んー……」

「まあ、いい。会談の内容は知っているな？」

「まあね。『先のオーブ戦の折に流出した我が国の技術と人的資源の、プラントでの軍事利用を止める』でしょう？ 前々からカガリがプラントに要求している」

「その通りだ。どうにも現実的ではないがな」

「あはは。『先のヤキン・ドゥーエ戦役で流出したプラントの軍事技術を使用するな』と言われたらどうしよう。モビルスーツ、使えなくなつちゃうよ」

「まあ、アス八代表が何を言おうが適当にさせておけ。と言っ訳で、お前も行って来い」

「僕もですか!？」

「ああ。要は名目は何でもよい、ギルバート・デュランダル議長と顔を繋いどけと言う事だ。その他にもついでにやってもらいたい事もあるがな」

「了解しました。父さん」

……

ユウナが出て行ってしばらくした後、ウナトがふと部屋の隅に目をやると、一人の男が立っていた。

一体いつの間に部屋に入ったものか。

「やあ、こんにちは」

その男がしゃべった。

ウナトは驚く様子も無くその男性に声をかけた。

「ようこそ、灰田さん……」

「なんでユウナまで来るんだよ」

プラントがL4に新規に建設したコロニー「アーモリーワン」に向かうシャトルの中、オーブの代表首長カガリ・ユラ・アスハは露骨に不機嫌な視線をユウナに浴びせる。

こいつ……ボーイフレンドとお楽しみ旅行でもする気だったのか？

ユウナはむかついた。

「父から言われたものでね」

「ウナト宰相が？」

ちつと舌打ちの音がする。

ほんとにむかつく……

更にユウナのむかつきが高まった。

「ところでカガリ、プラントとはどんな交渉をするんだい？」

「わかってるくせに。先のオーブ戦の折に流出した我が国の技術と人的資源の、プラントでの軍事利用をやめさせるんだ！ 再三再四

言っているのにプラントは応じようとしなない！
カガリは力説する。

「……おい、ユウナ。反対なのか、お前は？」

黙っているユウナが気になったのか、カガリは不安そうな顔をしてユウナに尋ねた。

「んー。受け入れられないと思うよ。論破されるよ、きつと」

「なんでだよっ」

「い、いやあ……。あ、アレックス君」

「え？ は？ 自分ですか」

そうそう、驚いた顔をするサングラスをかけたカガリのボディーパードの君だよ！

ユウナはうんうんとうなづく。

「君は、どう思う？ カガリの要求が、プラントに通じると思うかい？」

「は、えー。難しいでしょうね。確かに」

「お前までそう言うのか……。はあ。私は何のために……」

カガリは、しょぼーんとして肩を落とす。

「まあまあ！ でも言うのは無料だから、言ってみれば？ どうせ要求は通らないだろうから、代わりにプラントからの技術供与とかも申し込んでみたらどうかかな？」

ユウナはカガリの肩を叩いて励ます。

どうせ顔繋ぎが目的だからね。

ユウナは心の中でペロっ舌を出す。

「そうか？ じゃあ、言ってみる。何が欲しいんだ？」

「んー。水中用モビルスーツの技術とかどうか？ 一応地球連合からディープフォビドゥンとか購入して水中戦力を整えているけどね、我が軍の装備生産が他国に握られてるのはあんまりおもしろくないんでね」

「わかった」

そう言うと、カガリは通路を挟んだ反対側の席に行き、時々アレック

クスと小声でしゃべってる。
くそう、いちやつきやがって！
ユウナは舌打ちをした。

カガリ達はアーモリーワンに着いた。

「服はそれでいいのか？ ドレスも一応は持ってきているよな？」
アレックスが港のエスカレーターでカガリに声をかける。

「な、なんだっていいよ。いいだろう？ このままで」

！

ユウナの胸を電気が走った。

「そうそう！ それだよ！ いい事言うねえ、アレックス君！」

「え。はあ、必要でしょうから、演出みたいな事も」

「そうだよ！ 若い女性が会談にスーツ姿なんてさあ！ 無理して
突っ張ってるようにしか見えないよ？ カガリはオーブの品格って
物も代表してきてるんだ」

「お、お前ら〜！」

「解ってるだろ？ バカみたいに気取ることもないが、軽く見られ
ても駄目なんだ。今回は非公式とはいえ、君は今はオーブの国家元
首なんだからな」

「わ、わかったよ」

「やったあ！ ん？」

はしゃぐユウナの耳に階下かららしい、会話が耳に飛び込んできた。

「パパ！ 船は？」

「軍艦なの？ 空母？」

「やっぱり必要ですものね」

「ああ、ナチユラル共に見せつけてやるともさ」

……。

「はあ。嫌な会話聞いちゃったな」

ユウナは眉をひそめた。カガリもアレックスも、眉をひそめている。「……すみません」

突然アレックスが謝った。

そう言えば、こいつは元プラント……ザフトだったな。

ユウナはアレックスの出自を思い起こした。

本名アスラン・ザラ。元ザフトのエース。評議会議長の息子。戦争を終結させた英雄。

それが、自分相手に過剰に気を使っている。それはユウナにとってあまり面白い気分ではなかった。

「……いや、気にするな。考えてみたら、たいして悪意のある台詞じゃなかった」

ユウナは軽く手を振ってやった。

「明日は戦後初の新型艦の進水式ということだったな。こちらの用件は既に御存知だろうに。そんな日にこんな所では、恐れ入る」
港湾部から居住区へ向かうエレベーターの中で、カガリがプラントの警護人達に軽く皮肉を飛ばす。

おいおい、この人達に言った所でしようがないだろうに。

ユウナがたしなめようとしたその時。

「内々、且つ緊急にと会見をお願いしたのはこちらなのです、アス八代表。プラント本国へ赴かれるよりは目立たぬだろうと言う、デユランダル議長の御配慮もあつての事と思われませんが」

「ああ……」

アレックスにたしなめられ、肩を落とすカガリ。

なんか、萌えるぞー！

ユウナの心の中で妙な情熱が広がる。

「その通り。お……！」

エレベーターの通路が透明な材質に変わり、居住区の景色が眼前に広がる！

「見てみなよ、カガリ！ 壮観じゃないかね！」

カガリが頭を上げ、ほうつとため息を漏らす。

「綺麗だ……」

「ああ、綺麗だな」

「……君もだよ、カガリ……。オーブの海みたいでほんとに綺麗だ……」

青と白を基調にした細身のドレスが光に映えて、ユウナの視線を釘付けにする。

ヘアエクステンションで長髪になった姿はまことにユウナの好みである。

一見少年のような凛々しい風貌であるが、男性のそれとは違う華奢な骨格、瑞々しく肌理細やかな光る肌、襟元から覗くふっくらと膨らみかけた白い双丘が醸し出す艶かしい青い色香が、その身体が少女である事を控えめに自己主張している。

ユウナはため息をつく。

「ば、馬鹿言ってるな！ ユウナ！」

カガリは赤くなると、ユウナに向かって声を張り上げる。

「いや、ほんとに……」

「そんなに見つめるなっ」

「いや、ごめん。君から眼が離せなくて」

「変な台詞で謝るなっ」

「いや、ごめん……」

……

……

「やあ、これは姫　！お美しいですなあ！　遠路お越し頂き申し訳
ありません」

「やあ。議長にもご多忙の所お時間を頂き、有り難く思う」
ほう。さすがに一国のトップに立つ男だ。驚いた顔は見せても……
目は平常心か。

日ごろ政治家、官僚との腹の探り合いに慣れているユウナは見て取
った。

「御国の方は如何ですか？　姫が代表となられてからは実に多くの
問題も解決されて、私も盟友として大変嬉しく、また羨ましく思っ
ておりますが」

「まだまだ至らぬことばかりだ」

「で、この情勢下、代表はお忍びでそれも火急な御用件とは？　一
体どうしたことでしょうか？　我が方の大使の伝えるところでは、
だいぶ複雑な案件の御相談、と言う事すが」

「……私には、そう複雑とも思えぬのだがな。だが、未だにこの案
件に対する貴国の明確な御返答が得られない、と言う事は、やはり
複雑な問題なのか？　我が国は再三再四、彼のオーブ戦の折に流出
した我が国の技術と人的資源の、そちらでの軍事利用を即座に止め
て頂きたいと申し入れている。なのに何故、未だに何らかの御回答
さえ頂けない？」

「……ふうむ」

デュランダルは考え込む様子を見せた。

「あ、そろそろ式典の時間です。歩きながら話しましょう」

「ああ」

ザフト軍人、ルナマリア・ホークはうきうきしてアーモリーワンの

商業地区をシヨッピングしていた。

なにしろ明日進水式が行われる戦後初の新型艦『ミネルバ』の乗員に選ばれたのだ。それも、新型機のパイロットとして。これが喜ばずにいられようか。

ルナマリアは鼻歌を歌った。

「お前もバカをやれよ、バカをさ！」

曲がり角の向こうから、声が聞こえて来る。なんだろう？

ルナマリアは好奇心のままひょいと顔を出した。

……そこには、くるくる回って踊ってる？ グレイの髪の青年が笑いながらくるくる回ってこちらに向かってくる。

「……あ」

変なのと目が合っちゃった。

「……あ！」

その青年がバランスを崩す！

「あ！……きゃー！ てめー！ なに人の胸握ってんだよ！ いてーんだよ！」

ルナマリアは、倒れこんだ拍子にルナマリアの胸を握り締めたその青年を蹴り飛ばす。

その青年は慌てて逃げて行った。

「ラッキーだったわね、あの青年」

新型艦で同僚になる、マユ・アスカがルナマリアの後ろから声をかける。

「ラッキーって？」

「ルナの胸触れた事と、ルナの暴力から無事に逃げられた事の二つ！」

「あんだねえ……」

「ふふふ！」

マユは笑うと駆け出した。

「あ、待ってよー！」

ルナマリアも手早く落ちた荷物をまとめると、マユの後を追って駆け出した。

「お兄様、日本からいいお茶が手に入りましたのよ。お飲みになりませんか？」

セトナ・ウィンタースはロード・ジブリールに言う。

「ほう、それはいいな。一杯もらおうか」

ジブリールは答えた。

『お兄様』と呼ばれていても本当の兄妹ではない。セトナは火星のオーストレール・コロニーの生まれである。

火星から地球へ密航して来て、ひよんな事からジブリールの世話になっているのである。

「じゃあ、今日はちょっと贅沢な飲み方をしましょうか」

セトナは鼻歌を歌いながらお茶の用意をする。

ジブリールはくすりと笑った。

実はセトナはコーデイネーターである。しかも、プラントの歌姫ラクス・クラインに生き写しときている。

ジブリールも最初は微妙な感情だった。しかし、今はジブリールは断言できる。セトナの方がずっと可愛いと……！

妹とはこんな物かな、と思う。

コーデイネーター嫌いの自分が、皮肉な事だ、とジブリールは思う。だが、それも悪くないかなとも思う。

まあ、自分が出資したプラントを乗っ取った奴らは今でも憎っただしいが。

ジブリールは目を閉じ猫のフェリックスの背中を撫ぜながら、セトナがお茶を運んで来るのを待った。

第2話「超種運命の大戦<2>

ふうん。ずいぶんとハンガーが並んでいるな。カタログで見ただけの新型機も多い。

ユウナは周囲を見て感心しながら歩いた。

「姫は先の戦争でも自らモビルスーツに乗って戦われた勇敢な御方だ」

「……………」

「また最後まで圧力に屈せず、自国の理念を貫かれたオーブの獅子、ウズミ様の後継者でもいらっしゃる。ならば今のこの世界情勢の中、我々はどうかあるべきか、よくお解りの事と思えますが？」

「我等は自国の理念を守り抜く。それだけだ」

「他国を侵略せず、他国の侵略を許さず、他国の争いに介入しない？」

「そつだ」

「それは我々も無論同じです。そうであれたら一番良い。だが、力無くばそれは叶わない。それは姫とて、いや姫の方がよくお解りでしょう？」

「……………」

「だからこそオーブも軍備は整えていらっしゃるのでしょうか？」

「……………」その姫というのは止めて頂けないか？」

「これは失礼しました、アス八代表。しかしならば何故、何を怖がつてらっしゃるのです？ あなたは」

「……………」

カガリは無言でデュランダルを睨み返す。

「大西洋連邦の圧力ですか？ オーブが我々に条約違反の軍事供与をしていると？ だがそんな事実は無論ない。彼のオーブ防衛戦の折、難民となったオーブの同胞達を我等が温かく迎え入れたことはありました。その彼らが、此処で暮らしていくためにその持てる

技術を活かそうとするのは仕方のないことではありませんか？」

「だが！ 強すぎる力はまた争いを呼ぶ！」

とうとう感情が激したのか、カガリは声を大きくする。

まあ、オーケー。だめ元。オーブ以外の力が減るなら大歓迎さ。

ユウナは見守る事にした。

「いいえ姫。争いが無くならぬから、力が必要なのです」

しかし、しれっとデキュランダルは切り替えした。

『ウヴィーン！ ウヴィーン！』

突如として警報が鳴った。

あちこちで爆発音が！

「うわぁ！」

「カガリ！」

「あう」

「議長！」

ユウナはカガリを押し倒すと、かばうためにその上に身を伏せた。

こう言う時はまずは伏せるんだよな。爆発物を頭上に放り投げられ

でもしない限り立っている方が、あぶない。

辛い軍事教練だったが、こういう時に冷静に行動できるのは助かるな……。

ユウナは自分を厳しく鍛えてくれたヒサヨシ・ツゲ教官に心の中で感謝した。

とりあえず近くの爆風は過ぎ去ったようだ。ちらつと隣を見ると、カガリと同じようにSPに押し倒されていたデキュランダルが立ち上がりかけていた。

ユウナは立ち上がると、カガリが立ち上がるのに手を貸す。

「発進急げ！」

「六番ハンガーの新型だ！ 何者かに強奪された！」

「モビルスーツを出せ！ 取り押さえるんだ！」

「なんだと!？」

デュランダルが作り物でない、驚いた顔を見せる。

ザフトめ。ざまあみる、と言いたい所だが、まずは安全にならないとな……。

ユウナは先の戦役時のヘリオポリスでのモビルスーツ強奪事件を思い起こしていた。

「あれは！」

「ガンダム！」

カガリとアレックスの二人が驚きの声を上げる。

「ほう？」

遠目に見える強奪されたらしい3機のモビルスーツの頭の形状は、通称ガンダムヘッドと呼ばれる、オーブのモビルスーツにも付けられている頭部の形状と似ていた。

しかし、ザフトが地球軍の真似をしてガンダムヘッドとはねえ。実用的な何かが、あの形状にあるのかな？

ユウナはこのどこか現実感がない光景を眺めていた。

「姫をシエルターへ。エヴァンスは!？」

デュランダルが指示を飛ばす。

「ああ……」

カガリの脳裏を、ヘリオポリス崩壊の時の記憶が甦る。

「こちらへ」

ザフト兵から指し示されても、カガリは動けない。

「あ……」

「カガリ！」

ユウナは強引にカガリの手を握った。

「あ……ああ……」

「では、議長もご無事で！」

「ああ、ありがとう。……なんとしても抑えるんだ！ ミネルバにも応援を頼め！」

「はあはあはあ……」

！

目の前で、強奪機にザフトのモビルスーツがやられた！
走るユウナ達に爆風が襲い掛かる！

「ぐっ！」

「うっ！」

「うわぁ！」

吹き飛ばされる彼ら。起き上がるが、案内のザフト兵が起き上がって来ない。見ると、首が妙な角度に曲がっている。

「おい、あんた！ おい！」

ユウナは脈を取る。

「だ、大丈夫か？」

カガリが恐る恐る尋ねてくる。

ユウナは首を振った。

「だめだ。脈がない」

「ああ……」

「どうする？ アレックス君？」

ここは、戦場慣れした彼に任せるのが良いだろう。

ユウナはアレックスに指示を仰いだ。

「こっちだ！」

アレックスはさーっとあたりの様子を把握すると、方向を指示して

駆け出す。

！

前方に、黒い獣型のモビルスーツが行く手を塞ぐ。どうする！？ と思った時、空中からザフトのモビルスーツが現れる！ だが……。

強奪犯は、やはり、並みの腕前じゃないな。

ユウナは思った。

空中のモビルスーツが次々にやられ、爆発する！

「伏せるー！」

「うつ！」

「あつ！」

軍用車の陰でやりすごす。

カガリはアレックスの腕の中だ。

くそつたれ！

ユウナは心の中で悪態をついた。

「くつそー！」

「なんで……なんでこんな……」

「大丈夫だ、カガリ……」

アレックスがカガリに微笑む。

だから僕の前でいちやつくんじゃないよ！ くそつたれ！

ユウナはまた、心の中で悪態をついた。

「やれやれ、あいつらのおかげですっかり焼け野原だ。どうする？」
「くつ……」

アレックスは額に汗を浮かべてきよろきよろと周囲を見回す。

「来い！」

「え！？ ああ……」

ユウナ達はアレックスの指示により、仰向けに倒れこんでいるザフトのモビルスーツまでやってきた。乗員は脱出したのだろうか？

ハッチが開いている。

ユウナはこの緑色に塗装されたモビルスーツの名前を知っていた。ザクウオーリア ユニウス条約締結後ブランドで開発された次世代モビルスーツ群「ニューミレニアムシリーズ」に属する、ジンやゲイツに代わって今後ザフトの主力を担っていくであろうモビルスーツである。

「乗るんだ！」

「え？」

そうだ！ ここで男を見せれば！

ユウナは決心した。

「僕が操縦する！」

ユウナは操縦席に飛び込んだ。

「え？ あ！？ くっそー！ カガリ、早く！」

アレックスはカガリを抱えて、ユウナの後に続いてコクピットに入る。

ユウナはスイッチを入れていく。

「何考えてるんですか、あなたは！？」

「僕にだって、モビルスーツの操縦経験くらい、ある！」

「へえ！？」

アレックスは、ちょっとユウナに感心した。

「うわ、うわわ！ 立ち上がった！ おい！ 何よろついてんだ！

ユウナ！」

「 あつぶない！ カガリ！ ほら！ よろめいたおかげで敵のビーム避けれたよ！」

「いいから！ 今のうちに操縦替わってください！ コーディネーター用なんですよ！ これ！」

アレックスはユウナに感心した事を後悔した。

ユウナは操縦席の左に入り込んだアレックスによって強引にコーディネーターの馬鹿力で操縦席から下ろされた。

ユウナしょぼーん。

「ええい！」

突然機体が左側に飛ぶ！

「うわ！」

「うぶっ！」

ユウナの頬がアレックスの左肘にまともなぶつかった。ユウナの口の中に血の味が広がる。

「ぶつからないでください！ 邪魔！」

ユウナはまたアレックスに怒られた。

ユウナ更にしょぼーん。

「こんなところで君を死なせるわけにいくか！」

アレックスはシールドを構えて突進した。

ふらふらした動きから急に機敏な動きを見せるアレックス達のモビルスーツに敵の黒いモビルスーツは一瞬虚を突かれ。吹っ飛ばされる。

敵は、ビームライフルでは避けられると見たのか、ビームサーベルを抜くと切りかかってくる。

アレックスもビームトマホークを抜いて応酬する。

カガリはアレックスの動きに合わせて、「はっ」とか「ふっ」とか言っている。しかし。

しょぼーんとしたユウナはどこか二人に取り残された思いで戦いを見ている。

だからだろうか。ふと見回したスクリーンの端に、一機の緑のモビルスーツが降りて来るのを一番最初に見つけた。

強奪された奴だ！

「後ろにもう一機、敵だ！ アレックス！」

ユウナは叫んだ。

アレックスは後ろに向かってシールドを向けた。

間に合った。もう一瞬遅ければ、左腕を落とされていたろう。

その時！ 頭上から敵モビルスーツ目掛けてビームが降り注ぐ！

敵機は、軽くジャンプしてかわす。続けざまにビームが放たれる。

その度に、緑色の敵機との距離が開いていく。
ありがたい！

ユウナは感謝の念を込めて頭上のスクリーンを見上げる。
そこには、赤い戦闘機が飛んでいた。

その赤い戦闘機は急降下してくると、モビルスーツに変化した。
モビルスーツだったのか！

ユウナは軽い驚きと共に、そのモビルスーツの行動を見守る。

『…………』

通信機から音が聞こえて来る。若い女性の声だ。

『なんでこんな事……また戦争がしたいの！？ あんた達は……！』
そう叫ぶ声が聞こえると、その真紅のモビルスーツはビームサーベルを抜き、敵機に切りかかっていった！

「いやに時間がかかったじゃないか」

お茶を運んで来たセトナにジブリールが声をかける。

「ふふ。特別な飲み方と言ったでしょう？ 氷水でお茶を淹れましたのよ」

「ほう、氷水……器も、小さいな」

セトナが持ってきたのは小さなショットグラスだった。

「お待ち頂いた、だけの事がありますわ」

セトナが一滴一滴、ゆっくりとショットグラスにお茶を注いでゆく。

「さあ、どうぞ」

「うむ、頂こう」

ジブリールはその液体を口に含んだ。

「ほう、これは……………！」

冷たい中に、爽やかな旨味と甘味が広がる。

「甘露だな。これは……」

ゆっくり舌の上を転がすようにお茶を楽しむジブリールを、セトナはにこにここと眺めていた。

第3話「超種運命の大戦<3>

「いやあ、なかなかやるねえ、彼女」

「ええ……」

突然現れた真紅のガンダムは、うまく敵をあしらっている。もう一機現れた敵の機体、水色のガンダムと合わせて3機を相手にしてもだ。

「油断はするなよ、アスラン」

カガリがアスランに注意する。

「ああ、わかっている」

『ルナマリア！ 命令は捕獲だぞ！ 解ってるんだろっな！ あれは我が軍の……』

指揮官だろうか？ 場をわきまえん通信が入る。

彼女は複数を相手に戦っていると言っのに。

コウナは義憤を感じた。

『解ってます！ でも出来るかどうか分かりませんよ。大体何でこんなことになったんです！』

通信の間も、止む事のない立ち回り。

『なんだってこんな簡単に！ 敵にっ！』

「今はそんなお喋りしてる時じゃないでしょ！ 演習でもないのよ！ 気を引き締めなさい！」

明日進水式が行われるはずだった新型艦、ミネルバの艦長、タリア・グラデイスはルナマリアを叱責すると、アーモリーワンの管制室に通信を繋いだ。

「強奪部隊ならば外に母艦が居るはずですよ。そちらは？」

その頃アーモリーワンの程近く、ユニウス条約で禁止されたはずのミラージユコロイドに身を包み、ある艦が息を潜めていた。

「よし行こう！ 慎ましくな」

指揮官らしき仮面の男が声を上げる。

「ゴットフリート1番2番起動」

「ミサイル発射管、1番から8番、コリントス装填」

「イザワ機、ハラダ機、カタパルトへ」

「主砲照準、左舷前方ナスカ級。発射と同時にミラージユコロイドを解除。機関最大。さーて、ようやくちよつとは面白くなるぞ、諸君！」

仮面の男は陽気な声を上げた。

「ゴットフリート、てえ！」

その隣に座っている、艦長らしき男が発砲の命令を発する。

「ああ！？」

ザフトのナスカ級高速戦闘艦フリーエの乗員は、いきなり僚艦ハ―シエルが爆発した事に一瞬頭が真っ白になった。

「本艦にミサイル多数、向かってきます！」

「後方に不明艦出現！」

「なんだと！？ 迎撃しろ！ 熱紋ライブラリ照合！」

「熱紋ライブラリ照合、該当艦なし！」

「なんだと？ 一体どこの艦だ？ くそっ」

！

ズズッと地面全体が、揺れる。

「アスラン！」

「外からの攻撃だ。港か？ く……」

「あ、おい！ 赤いモビルスーツが！」

とうとう、吹き飛ばされ、尻餅についてしまった！

「あっ！」

「アスラン！？」

「くっ。掴まっている！」

アレックスは水色のモビルスーツにタツクルし、尻餅を着かせた。

返す刃で、向かってくる黒いモビルスーツにビームトマホークを投げ、牽制する。

「あぶない！」

コウナは思わず叫んだ。水色の奴の胸部が光る！

アレックスは咄嗟にシールドをかざした。だが、大威力だったビームにシールドを吹き飛ばされる！

「うっツ！」

激しく揺さぶられるコクピット。カガリが倒れこむ！

「あ！ ……カガリ！ ……あ！」

アレックスがカガリの頭に手をやると、血が、その手に付いた。

「おい！ もう武器は無い！ 撤退するんだ、アレックス！ カガリを無事な場所へ！」

コウナは叫ぶ。

「わかってますよ！」

アレックスはスラスターを吹かして、この場を立ち去る事に成功した。

ルナマリアはザクが撤退に成功するのを見てほっとした。

自分が救われた相手が目の前でやられては、寝覚めが悪い。

1対3。

だが、ルナマリアはここでやられるつもりはない。ここは味方の基地だ。時間を稼げばいいのだ。

「さあ、行くわよ！ あんた達！」

ルナマリアは強奪された3機のモビルスーツに切りかかった。

『医療チームD班は第七工区へ！』

『45号ストレージの弾薬庫に注水しろ！』

アレックス達はザフト兵の集っている所に下りた。

「どうする？ アレックス？」

「ちよつと、聞いてみます。おおい、こちらには負傷者が乗っている。手当ては可能か？」

『動ける機体はミネルバのドックへ行ってくれ！ そう、負傷者もだよ！』

「ミネルバとは？」

「馬鹿野郎！ 明日お披露目の新型艦じゃねえか！ さつさと行け！」

「やれやれ、だね」

「そうですね」

「あ……………」

「あ！」

その時、カガリが目を覚ました。

「ア……………」

「大丈夫か？」

「ああ……………うーん……………」

「すまなかった……………つい……………直ぐに安全に降りられる場所を探すから」

「……………いや……………」

「おい！ あれ、デュランダル議長じゃないか？」

ユウナは口を挟んだ。

こんな所でラブシーンを演じられては堪らない。

「ん……………拡大してみます……………ですね。デュランダル議長です」

拡大されたモニターにはバギーに乗るデュランダル議長の姿が見えた。

「そちらへ行くこう。この状況だ。議長は安全な所へと避難している途中だろう」

「了解です」

アレックスは壊れたモビルスーツのスラスターを吹かすと、デュランダル議長の後を追った。

「ナスカ級撃沈」

アーモリーワンを襲った不明艦のオペレーターは少し高揚が混じった声で報告する

「左舷後方よりゲイツ、新たに3！」

「アンチビーム爆雷発射と同時に加速20%、10秒。1番から4番、スレッジハンマー装填、モビルスーツ呼び戻せ！」

艦長らしき男が指示を飛ばす。

「彼等は？」

仮面の男が聞く。

「まだです」

「ふむ……」

「失敗ですかね？ 港を潰したといってもあれは軍事工廠です。長引けばこっちが保ちませんよ？」

艦長らしき男は横に座っている仮面の男に問う。

「解ってるよ。だが失敗するような連中なら、俺だってこんな作戦最初っからやらせはせんしな。……出て時間を稼ぐ。艦を頼むぞ」
仮面の男はふわりと席を立つ。

「はっ！ 格納庫！ エグザス出るぞ！ いいか！」

エグザス それはメビウス・ゼロの後継機として開発された地球連合軍のモビルアーマーであった。

「やれやれ、これがミネルバか」

「そのようです。議長はここに入りました」

アレックス達に乗ってきたモビルスーツは艦のドックに入ると片膝をついた。

「ああ、カガリは僕が先に降ろそう。何しろ僕はコーディネーターのモビルスーツは詳しくないんでね」

「あ……う……わかりましたよ」

先程の言葉を見事に一本取られた形のアレックスだった。

「動くな！ 何だお前達は。軍の者ではないな！ 何故その機体に乗っている！」

降りたユウナ達は、いきなり銃を突きつけられた。栗色の髪の少女だ。

「ああ……！」

カガリは息を呑む。

ユウナはカガリを安心させるようにカガリの背中をぽんと叩いた。

「物騒だなあ」

ユウナは敵意が無いことを示すように両手を広げた。

「どうか銃をおろしてくれたまえ。僕は、オーブ連合首長国、宰相補佐官のユウナ・ロマ・セイランド。こちらにいらっしやるのは、オーブ連合首長国代表首長、カガリ・ユラ・アス八様。ああ、後、上に残ってるのは随員のアレックス・ディノだ。デュランダール議長と会見中にこの騒ぎに巻き込まれ、やむなくこの機体を借りた。代表は怪我をされている。手当てを願いたい。それから、デュランダール議長もこちらに来られたのだろう？ 落ち着いてからでいいのであらためてお目にかかりたい。君、よろしく頼むよ」

「はあ……」

栗色の髪の少女 マユ・アスカは思っても見なかった相手の台詞

に、ぽかんと口をあけた。

「では、まずは手当てさせましょう。救護室へどうぞ。警護の者は付きますが、我慢してくださいね」

「わかってるって。じゃあ、よろしく頼むよ」

カガリ達はマユの案内で救護室へ向かった。

「まーったく！ まだ進水式も終わっちゃいないってのに、今日はお客さんがいっぱい困っちゃうよ」

救護室の軍医は参ったと言うように両手を広げた。

「ははは。兎角この世はままならず……お互いにね」

「お偉いさんなんだって？ このお嬢さん？ 頭をぶつけたって？

一応念のため、CT取るか」

軍医はカガリの頭の傷の手当をするとCTスキャナーの準備を始めた。

「すまないね。しかし、CTまであるとはねえ」

ユウナは感心する。

「ははは。何しろ最新鋭艦だから」

軍医は自慢げに答える。

……撮影が終わった。

「ん……脳内出血も無し、骨にも異常無しだ。行っていいぞー！」

「どうも、ありがとさん！」

ユウナ達は救護室を後にした

「では、事態が落ち着くまで士官室でお休みください」

マユが先頭に立ちユウナ達を案内する。

「くっそー……どごよー！」

コロニー外部からの攻撃に合わせて、強奪された3機のモビルスーツはコロニー外壁を破壊、宇宙に脱出していた。

ルナマリアは破壊された入り口からコロニーを出、彼らを探す。

「ルナマリア！ 一旦退くんだ！ 闇雲に出ても……！」

同僚のモビルスーツパイロット、レイ・ザ・バレルが白いザクファントムに乗りルナマリアを追って来る。

！

レイ、一人！？

「マユは！？ マユはどうしたの！？」

同じく同僚のマユ・アスカのザクウォーリアの姿が無い事にルナマリアは気づいた。

まさか、やられてしまったの？

嫌な予感がルナマリアの胸を過ぎる。

「安心しろ」

レイは言った。

「マユは機関の不調で引き返した」

「そう……」

ルナマリアは安堵した。

「相手は数がわからない。二機だけで探すのも不安ね、戻りましょう」

ルナマリアは機首を返そうとした。

「ん！？ この感じは！ 待て、ルナマリア！ 近くに敵がいる！」

レイは叫ぶと戦闘態勢を取った。

『システムコントロール、全要員に伝達。現時点を以て、LHM-BB01、ミネルバの識別コードは有効となった。ミネルバ緊急発進シークエンス進行中。A55デフロック警報発令。ダメージコントロール、全チームスタンバイ。ゲートコントロールオンライン。ミネルバリフトダウン継続中。モニターBチームは減圧フェイズを

監視せよ』

廊下を進むカガリ達の耳に、突如、警告音と共にアナウンスの声が入ってくる。

「避難するののか？ この艦？ プラントの損傷はそんなに酷いのか

……」

カガリの胸に、ヘリオポリスが崩壊した時の記憶が蘇る。

『ミネルバ発進。コンディションレッド発令、コンディションレッド発令』

「「え！？」」

「ミネルバ発進」の声にアレックスとマユはぎょつとして立ち止まる。

『パイロットは直ちにブリーフィングルームへ集合して下さい』

「戦闘に出るののか！？ この艦は！」

「アスラン！」

つい、カガリはアレックスの本名を呼んでしまう。

「あ……」

アレックスは、うろたえた。

「あ！ アスラン！？」

マユは、アスランの名前を知っていた。先の大戦を終わらせた、英雄……。

「あ……」

カガリとアレックスは、うろたえて咄嗟に言葉が返せない。

「君……」

つ……とユウナがマユの顔を覗き込んだ。

「え？ はい？」

「彼の名前はアレックスだ。アレックス・ディノ。……いいね？」

「は、はい……」

ユウナの瞳に何か逆らえない物を感じて、マユは頷いた。

第4話「超種運命の大戦<4>

「くっ……どこから？」

モビルスーツなんて見えない。

まるで何も無い空間からただビームが襲って来るような感覚。

「ルナマリア！」

「大丈夫よ、レイ！」

何か……何かあるはずだ。ビームを撃って来る物が！

ルナマリアは空間に目を凝らした。

戦闘機形態になると、ランダムな飛行を開始する。

！

敵の攻撃が、レイのザクファントムを襲う。

「レイ！」

「気をつける！ この敵は！ 普通とは違う！」

「……！ 見えた！ ガンバレルよ！」

「本体がいるはずだ！ 俺はそいつを探して叩く！ お前は機動性

でドラグーンを引き付ける！」

「了解！」

ルナマリアは先程見つけたガンバレルに追隨する。

「そこ！」

セイバーのMA-7B スーパーフォルティスビーム砲が連射され、
ついに弾幕がガンバレルを捕らえる！

爆発するガンバレル。ルナマリアは急上昇して爆発をかわす。その
セイバーが飛び去った空間をビームが通り過ぎる。

「なるほどねえ。これは確かに俺のミスかな」

ルナマリアと交戦しているエグザスのパイロット、仮面の男はルナ
マリアの戦闘に感心したようにつぶやいた。

「気密正常、FCSコンタクト、ミネルバ全ステーション異常なし」
ミネルバの副長、アーサー・トラインはアーモリーワンより出撃したミネルバの状態を報告する。

「索敵急いで。セイバー、ザクの位置は？」

タリアは先に宇宙に出たルナマリアのセイバー、レイのザクの位置を尋ねる。

「インディゴ53、マーク22ブラボーに不明艦1、距離150」

「それが母艦か？」

「そのようです。所見をデータベースに登録、以降対象をボギーワ
ンとする」

タリアはデュランダルに答えると、指示を飛ばす。

「同157、マーク80アルファにセイバーとザク、交戦中の模様」
オペレーターの新が報告する。彼はマユの弟だ。

「呼び出せる？」

ほんとに顔も声も可愛い子。一服の清涼剤ね。

タリアはシンの後姿を見つめると微笑んだ。

「駄目です。電波障害激しく通信不能」

「敵の数は！？」

「1機です。でもこれは……モビルアーマーです！」

「モビルアーマーが一機だけ？」

タリアは驚いた。

「そこか！」

ルナマリアは照準にガンバレルを捕らえ、MA-7B スーパーフ
ォルティスビーム砲を連射した。

爆発！ 同時に、コクピットに衝撃が走る。

「……下から！？ シールドに当たらなければあぶなかったわ」

別のガンバレルが、下方からセイバーを狙ったのだ。
容易ならぬ相手だ。モビルアーマーと舐めてはいけない。
ルナマリアの額に冷や汗が生じる。

「ボギーワンを撃つ！ ブリッジ遮蔽、進路インディゴデルタ、加
速20%、信号弾及びアンチビーム爆雷、発射用意！ ……アーサ
ー！ 何してるの！」
タリアが叫ぶ。

「あ！ ああはい！ ランチャーエイト、1番から4番、ナイトハ
ルト装填。トリスタン、1番2番、イゾルデ起動！照準ボギーワン
！」

「彼等を助けるのが先じゃないのか？ 艦長？」
デュランダルがタリアに尋ねる。

「そうですね。だから母艦を撃つんです。敵を引き離すのが一番早
いからです。この場合は」

「艦？ ちつ……欲張りすぎは元も子もなくすか」
ミネルバの姿を確認し、仮面の男はつぶやく。
「帰還する！」

エグザスは残ったガンバレルを収容するとガンバレルのスラスター
をブースターとして不明艦の方へ帰還して行く。

ミネルバから、帰還信号弾が放たれ、宇宙に光を放つ。

「……ミネルバ？」

「帰還信号？ なんで！」

「命令だ。帰るぞ、ルナマリア」

「……ええ」

「ナイトハルト、てえ！」

ルナマリア達が宙域から撤退したのを確認して、ミネルバから放火が放たれる。

「エンジンを狙って！ 足を止めるのよ！」

「エグザス着艦！」

ミネルバからの放火に回避行動を取る不明艦に、エグザスが着艦する

「撤収するぞ！ リー！」

仮面の男が叫ぶ。どうやら艦長らしき男はリーと言っただけだった。

「ボギーワン、離脱します！ イエロー７１アルファ！」

「セイバー、ザクは？」

タリアはルナマリア達の帰還を確認する。

「帰投、収容中です」

「急がせて。このまま一気にボギーワンを叩きます。進路イエローアルファ！」

「大佐！」

不明艦のブリッジに仮面の男が飛び込んで来た。どうやら階級は大佐らしい。

「すまん、遊びすぎたな」

「敵艦、尚も接近！ ブルー0、距離110！」

「かなり足の速い艦のようです。厄介ですぞ」

「ミサイル接近！」

「取り舵！かわせえ！」

「ええい、両舷の推進剤予備タンクを分離後爆破！ アームごとでいい！ 鼻つ面に喰らわせてやれ！ 同時に上げ舵35、取り舵10、機関最大！」
仮面の男が指示を飛ばす。

「ボギーワン、船体の一部を分離！」

「ん！？」

「撃ち方待て！ 面舵10、機関最大！」

嫌な予感がする。

その予感に従ってタリアが指示をした時、不明艦の切り離された推進剤予備タンクが爆発、閃光を放った！

「きゃあああ！」

「うっ！」

「ええい………」

手に嵌ったか………」

デュランダルは舌打ちをした。

「何！？」

突然の衝撃に、ミネルバに帰還したルナマリアは叫ぶ。

「何だ！」

「被弾したあ！？」

「ブリッジ、どうした！？」

レイはブリッジとの通信機を手取る。だが向こうも騒がしい音が聞こえるだけだ。

「……ちっ！」

レイは通信機を元に戻すと、格納庫からブリッジへと向かう。

「バート！ 敵艦の位置は！？」

爆発の衝撃からすばやく立ち直るとタリアは不明艦の位置を掴もうとする。

「待って下さい、まだ……」

閃光でセンサー類がまだ攪乱されていた。

「シウス起動、アンチビーム爆雷発射！ 次は撃つて来るわよ」

タリアは不明艦からの攻撃に備える。

「見つけました。レッド88、マーク6チャーリー、距離500」

「逃げたのか？」

アーサーは不明艦の位置に軽く驚いた。こちらを攻撃できるような位置ではない。

「やってくれるわ、こんな手で逃げようとは」

「だいぶ手強い部隊のようだな」

デュランダルは唸る。

「ならば尚の事このまま逃がすわけにはいきません。そんな連中にあの機体が渡れば……」

「ああ」

「今からでは下船頂く事もできませんが、私は本艦はこのままあれを追うべきと思います。議長の御判断は？」

「私のことは気にしないでくれたまえ、艦長。私だってこの火種、放置したらどれほどの大火になって戻ってくるか……それを考えるのは怖い。あれの奪還、もしくは破壊は現時点での最優先責務だよ」

「ありがとうございます。トレースは？」

「まだ追えます」

「では本艦は此より更なるボギーワンの追撃戦を開始する。進路イ

エローアルファ、機関最大」

「進路イエローアルファ、機関最大」

ミネルバは不明艦を追い増速した。

「ブリ……議長！？」

その時ブリッジに入ってきたレイが、デュランダルを見て驚きの声

を上げた。

「全艦に通達する。本艦は此より更なるボギーワンの追撃戦を開始する。突然の状況から思いもかけぬ初陣となったが、これは非常に重大な任務である」

アーサーが全艦に通達する。

「各員、日頃の訓練の成果を存分に発揮できるよう努めよ」

「ブリッジ遮蔽解除。状況発生までコンディションをイエローに移行」

「ブリッジ遮蔽解除！」

シンが、少しほっとした物が混じる声でブリッジの遮蔽を解除する。

「コンディションイエローに移行」

「議長も少し艦長室でお休み下さい。ミネルバも足自慢であります。敵もかなりの高速艦です。すぐにどうと言う事はないでしょう。レイ、御案内して」

「はっ！」

その時、通信機の画面が開くと、マユの顔が現れた。

『艦長！』

「どうしたの？」

『戦闘中の事もあり、ご報告が遅れました。本艦発進時に格納庫にてザクに搭乗した3名の民間人を発見』

「え？」

『これを拘束したところ3名は…… オープ連合首長国代表ガリ・ユラ・アスハと宰相補佐官ユウナ・ロマ・セイラン及びその随員と名乗り、傷の手当てとデュランダル議長への面会を希望致しました』
メモを見ながらマユが報告する。

「オープの……」

「彼女が……何故この艦に？」

『僭越ながら私の独断で傷の手当てをし、今士官室でお休みいただ

いておりますが……状況が落ち着いたら議長にお会いしたいと
事です』

「……んー……」

期せずして、デュランダルとタリアは同時に呻った。

「どうやら成功、というところですか？」

不明艦の艦長、イアン・リーは仮面の男に話しかけた。

「彼らは使い物になったようですね。前大戦時はブーステッドマン、最近じゃエクステンデッドなんてのが居るようですが、そいつらより世代は古いようですが」

「ああ。前大戦じゃ薬やら使った奴らがいたって言うけどねえ、データ見ればそう言う奴ら、戦死しなくてもどの道精神崩壊で終わってたっていうじゃないか。僕もそう言うの、苦手でね。兵士は金かけてんだ。長く使えなきゃあ、仕方ないじゃないか。その点今の奴らは投薬は実験された程度だ。訓練で実力をしっかり身につけている。そう言う奴らはいいぞお」

「確かに」

「ポイントBまでの時間は？」

仮面の男がオペレーターに尋ねる。

「2時間ほどです」

「まだ追撃があるとお考えですか？」

「判らんね。判らんから、そう考えて予定通りの針路をとる。予測は常に悪い方へしておくもんだらう？ 特に戦場では」

「ネオー！」

その時ブリッジに女性のパイロットが駆け込んできた。ショートカ
ットで目を強調したメイクが特徴的な女性である。彼女の後ろに二
人の男性が続く。

仮面の男 実は地球軍のネオ・ロアノーク大佐と言う。この艦の
名はガーティー・ルー。地球連合軍第81独立機動群 通称ファ

ントムペインに所属する宇宙戦艦である。

「おー！ お前達！ よくやった！ まあ信じてたけどな、お前らならやれるって！」

ネオは飛びついてきた女性の背中をぽんと叩きながら彼らを労った。そう、彼らがザフトの新型モビルスーツを強奪した犯人である。

グレイの髪の毛きりつとした顔立ちの男性がスウエン・カル・バヤン中尉、黒い肌で眼鏡をかけているのがシャムス・コーザ中尉、ネオに抱きついた女性がミューディー・ホルクロフト少尉である。

「どうだったかい？ ザフトの新型は？」

「ん〜、コロニーの中だからよかつたけどー」

黒いモビルスーツ 4足獣型のモビルアーマー形態への可変機構を備えているガイアに乗ったミューディーが答える。

「宇宙空間じゃ変形なんて役立たずじゃない。地球に降りても活用できそうなのは平地だけでしょ？ あたしは、あたしのブルデュエルの方がいいなあ」

「アビスもですね」

水色のモビルスーツ アビスに乗ったシャムスも答える。

「ビーム砲やらなんやらがいっぱいあるのはいいですが、あれ、水陸両用でしょう？ 水中での攻撃手段が魚雷4門と近距離しか使えない連装砲4門だけってのは、どうなんでしょうね？」

「きやはは、やっぱコーディネーターって馬鹿じゃない？」

ミューディーがけたたましく笑う。

「こらこら、コーディネーターってひとくくりにするんじゃない。

地球軍にもコーディネーターはいるんだ」

「あー。そうね。じゃ、プラントの人間もどき達」

ネオの指摘を受けてミューディーは言い直した。但し、よりひどく

「まあ、アビスは揚陸作戦用らしいからな」

「しかし、ここの新型機の特徴を見るとプラントは再び地球に侵攻する気満々ですね」

「ああ、だが、地球軍も油断しちやいないさ。だから俺達に任務が

下ったんだらう？ スウエン、お前はとうだった？」

残る一機、緑のモビルスーツ　カオスに乗ったスウエンにネオは聞いた。

「なかなかいい機体でした」

「ほう」

「ドラグーンのような機動兵装ポッドが2個、それでエグザスのようなオールレンジ攻撃ができるのは、なかなか楽しい」

「へえ」

あまり笑わないスウエンが『楽しい』と表現した事がネオの興味を引いた。

「ですが、それを生かせるのは宇宙だからこそでしょう。地球に降りてもそれなりに戦えると思いますが、汎用性ではストライクノワールの方を私は選びます」

「お前もか。どうも、ザフトの新型機は特定の環境に特化しすぎてるな。ま、奪ってきた機体は技術開発局の連中に渡せばミッシェンコンプリートだ。ご苦労だった。休んでいいぞー」

「はい」

彼らが出て行くと、ネオは顎を撫ぜた。

「さてさて、どう出てくるかな？ ザフトの諸君は？」

第5話「超種運命の大戦<5>

応接室でカガリ達とデュランダルはあらためて顔をあわせた。カガリはスーツに着替えて身軽になっている。

「本当にお詫びの言葉もない。姫までこのような事態に巻き込んでしまうとは。ですがどうか御理解いただきたい」

デュランダルは軽くカガリに会釈する。

「あの部隊についてはまだ全く何も解っていないのか？」

「ええまあ、そうですね。艦^{ふね}などにもはつきりと何かを示すようなものは何も。しかし、だからこそ我々は一刻も早く、この事態を収拾しなくてはならないのです。取り返しのつかない事になる前に」

「ああ、解ってる。それは当然だ、議長。今は何であれ世界を刺激するような事はあつてはならないんだ。絶対に！」

「ありがとうございます。姫ならばそう仰つて下さると信じておりました」

デュランダルはにこやかな微笑を浮かべる。

「よろしければ、まだ時間のあるうちに少し艦内を御覧になって下さい」

「議長……」

同席しているタリアが驚いた声を上げる。

「一時的とは言え、いわば命をお預けいただく事になるのです。それが盟友としての我が国の相応の誠意かと」

タリアの反論を封じるように、デュランダルは立ち上がった。

「オーブのアスハ!？」

マユから、カガリがミネルバに乗って来た事を知らされてルナマリ

アが驚きの声を上げる。

「ええ、私もびっくりした。こんなところで先の大戦の英雄に会うなんてね。でも何？ あのザクがどうかしたの？」

アレックス達が乗ってきたザクを、ルナマリアは気になるようだった。

「ああ……ミネルバ配備の機体じゃないから、誰が乗ってたのかなって」

「操縦してたのは護衛の人らしかかったわよ。アレックスって言うってたけど、でも、もしかしたら、『あの』アスランかも!？」

「え？」

「アス八代表がそう呼んだのよ、咄嗟に。その人の事をアスランって。そしたら、お付の人に彼はアレックス・デイノだって念を押されて。怪しいでしょ？ アスラン・ザラ、今はオーブに居るらしいって噂だし」

「アスラン……ザラ……」

そうつぶやくと、ルナマリアは何かを考えるかのように無言になった。

「しかし、この艦もとんだ事になったものですよ。進水式の前日にいきなりの実戦を経験せねばならない事態になるとはね」

デュランダルはカガリ達を連れて艦内を案内する。

「ここからモビルスーツデッキへ上がります」

「ええ!？」

通常は新型艦の機密に当たる物。それをあっさり案内されてアレックスは小さく驚きの声を上げる。

「艦のほぼ中心に位置するとお考え下さい。搭載可能数は無論申し上げられませんし、現在その数量が乗っているわけでもありません」

扉が開く。

「あ……………」

「ああ……………」

カガリ達は目の前に広がる光景に息を呑む。

モビルスーツが並んでいる光景はさすがに壮観だ。

「ZGMF-1000。ザクはもう既に御存知でしょう。現在のザフト軍の主力の機体です。そして可変戦闘機型モビルスーツのセイバー。モビルスーツではどうしても戦闘機に負ける部分がありますからね。それを補完しました。モビルスーツ形態時の敏捷性と戦闘機形態時の加速性と言う特性の異なる高い機動力を使い分けた空戦能力は他の機体を凌駕しています。工廠で御覧になったそうですが……………」

「ええ。なかなか良いパイロットだと思いましたよ」

黙ってばかりのカガリに代わってユウナが答えた。

「そう評価していただけるとは嬉しいですね。後でパイロットに伝えてやりましょう」

「ところで、強奪された3機、この艦と一緒にお披露目するおつもりでした？」

「ええまあ、そうですが……………」

ユウナの発言の意図がわからず、デュランダルは語尾を濁す。

「では、よろしければ、どのような特徴を持っているのかお聞かせ願えませんか？」

「まあ、いいでしょう。カオスは宇宙での高機動戦闘を主眼に置いておいたモビルスーツです。分離可能な機動兵装ポッドを利用した立体的な攻撃が特徴でしょうか。アビスは水中用の潜水艇型モビルアーマーへの可変機能を有しています。今までの純粋な水中用モビルスーツよりも汎用性が高まっています。ガイアは陸戦型モビルスーツバクウを参考にした4足獣型のモビルアーマー形態への可変機構を備えています。陸戦における機動力は純人型であるモビルスーツを凌駕するでしょう」

「ほうほう、どれも素晴らしい」

ユウナはにこやかに微笑んだ。

「ところで、先程アーモリーワンでも代表が話されましたが、先來からの我が国からの要求、『先のおーブ戦の折に流出した我が国の技術と人的資源の、プラントでの軍事利用の停止』、受け入れてもらえるのでしょうか？」

ユウナは笑顔を崩さず尋ねた。

「え？ はあ、ちよつと……それは前にも言いました通り、個人の自由意志でしている物を国の力で強制など……」

「では、その代わりにオーブに技術を提供して頂くとするのは、どうですか？」

「ほう？ どのような？」

「例えば水中用モビルスーツの技術などはいかがですか？ ご存知の通り、先の大戦の後我が国も水中戦力を整えています。しかしそのモビルスーツは大西洋連合から購入した物ばかりです。我が国が水中用モビルスーツの配備を自国で行えるようになるのは、プラントにとつても益ある物と思いますが？ それから、我が軍でも可変戦闘機型モビルスーツを導入しましたが、セイバーですか、先程のあの戦闘機型になるモビルスーツも面白いですね」

「ほう……」

デュランダルのユウナを見る目に鋭い物が混じる。

「じっくり話したいですね、その事は。……しかし、やはり姫にはお気に召しませんか？ こう言う話は？」

デュランダルは黙ったままのカガリに話を振る。

「議長は嬉しそうだな」

カガリはむつつりと答えた。

「嬉しい、と言う訳ではありませんがね。あの混乱の中からみんなで懸命に頑張り、ようやくここまで力を持つことが出来たと言うのは、やはり……」

「力か。争いが無くならぬから力が必要だと仰ったな、議長は」

「ええ」

「だが！ ではこの度の事はどうお考えになる！」

「ああ……」

「あのたつた3機の新型モビルスーツのために、貴国が被ったあの被害の事は！？」

「だから、力など持つべきではないのだと？」

「代表……」

アレックスがたしなめるが、カガリはすっかり熱くなっていた。

「そもそも何故必要なのだ！ そんなものが今更！」

ほんとにねえ。

ユウナは思った。

オーブも軍拡なんかより民生に資金を回したいのに……。

あのタケミカツチもだ。一体何に使うのだ。

苦々しく最近就航したオーブの空母を思う。

オーブは空母なんか欲しくなかったのだ。すっかり高価になった化石燃料を使い、わざわざパトロールする場所など、ソロモン諸島の小国のオーブに在りはしない。

空母の建設費用の捻出に苦慮していた父、ウナトを思い出す。

オーブが空母を建設した理由は大西洋連邦の圧力だった。 お前

の所も作れ、との。

大西洋連邦の目的は、軍事予算の確保。

どうやら最近またぞろ軍事拡張路線に入っている東アジア共和国の空母で仮想敵は十分だろう、とユウナは思うのだが、空母の建設技術が途絶していた東アジア共和国の作った空母などでは性能が違いすぎて予算確保のネタとしては今ひとつ、と言う事らしかった。

その点、大西洋連邦の技術が導入されたタケミカツチは、なかなかの性能だった。

だが、その裏で支払ったパテント料を思うとまたむかつ腹も立って

くる。

タケミカツチは一応艦載機も配備された物の、燃料がもつたいないのでオノゴロ島近海で訓練に明け暮れるばかりである。

いつそ使い道がないのなら、大西洋連邦との付き合いでよそに売れは出来ないだろうが、レンタルにでも出せないもんな……。

ユウナの思考が妙な方向へ向かい始めた頃、カガリは相変わらず熱弁を振るっていた。

「我々は誓ったはずだ！ もう悲劇は繰り返さない！ 互いに手を取って歩む道を選ぶと！」

「それは……しかし姫……」

デュランダルは困ったように苦笑いを浮かべる。

その時、デッキの下から声が聞こえてきた。

「さすが綺麗事はアスハの御家芸よね！」

「ああ？」

カガリ達が下を見ると、そこには憎しみの籠った瞳でカガリを見つめる赤毛の少女がいた

「ルナマリア！」

レイはルナマリア目掛けてデッキから飛び降りた。

その時警報が響いた。

『敵艦捕捉、距離8000、コンディションレッド発令。パイロットは搭乗機にて待機せよ』

「ああ……」

カガリ達は息を呑む。

「最終チェック急げ！ 始まるぞ！」

「だあやべえッ！」

「……っ」

ルナマリアはレイの手を逃れると、自分の乗機へと飛んでいってしまふ。

「ルナマリア！ 申し訳ありません議長！ この処分は後ほど必ず
！」

レイもお辞儀をすると自分の乗機へと向かう。

「……………」

「本当に申し訳ない姫」

立て続けの事に言葉を失っているカガリに、デュランダルは謝罪する。

「ん？」

「彼女はオーブからの移住者なので」

「ええ……………！？」

「よもやあんなことを言うとは思いませんでしたのですが」

「あ……………」

思いもよらない事にカガリは絶句した。

ミネルバがガーティー・ルーを捕捉した時、ガーティー・ルーでも
ミネルバを確認していた。

「やはり来ましたか」

イアンがネオに話しかける。

「ああ。まっザフトもそう寝ぼけてはいないという事だ。ここで一
気に叩くぞ！」

ネオはいたずらを仕掛ける子供のように唇を歪めた。

「総員戦闘配備。パイロットはブリーフィングルームへ！」

そう告げるとネオはさっと席を立ちブリッジを出て行った。

「向こうも、よもやデブリの中に入ろうとはしないでしょうけど。危険な宙域での先頭になるわ。操艦頼むわよ」

「はっ！」

ここはすでに航行に危険なデブリ帯の近傍。タリアは何としてもここで相手の足を止める気だった。

「ルナマリアとマユで先制します。終わってるわね？」

「はい！」

「目標まで6500」

シンが緊張した声で告げる。

着々と、敵艦との距離が縮まっていく。

その時、ブリッジの扉が開く。現れたのはデュランダルだった。後ろにカガリ達3人を従えている。

「議長……」

「いいかな？ 艦長。私はオーブの方々にもブリッジに入っていた
だきたいと思うのだが」

「え！？ あ……いえそれは……」

さすがにブリッジに部外者を入れるのを、タリアは躊躇う。

「君も知つての通り、代表は先の大戦で艦の指揮も執り、数多くの
戦闘を経験されてきた方だ。そうした視点からこの艦の戦いを見て
いただこうと思ってる」

「解りました。議長がそうお望みなのでしたら」

「ありがとう、タリア」

「目標まで6000」

会話をしている間にも、敵艦との距離が近づく。

「ブリッジ遮蔽！ 対艦対モビルスーツ戦闘用意！」

戦闘に備えて、ブリッジが沈みこんでいく！

「あの新型艦だった？」

出撃の準備をしながらシャムスが聞く。

「ああ。さすが最新鋭艦と言う所か」
スウェンが答える。

「ねえ、あの赤いの、来るかな？」

ミューデーが尋ねる。

「ああ、かなりの腕利きだったな。俺ならそうする。精鋭で一気に叩く」

「生け捕りにできるかな？ できなきゃやっつけちゃってもいいけどお」

「ザフトを侮るな、ミューデー！。俺達の任務は出てくる、おそろく精鋭の足止めだ」

「ああ、敵艦をやっつけるのは他の奴らに任せればいい。母艦さえ落とせばいくら腕利きだろうとバッテリー切れさ！」
力強くシャムスは断言した。

「アンカー撃て！ 同時に機関停止。デコイ発射！ タイミングを誤るなよ」

ブリッジでネオが矢継ぎ早に指示を飛ばす。
ミネルバを仕留める作戦の開始だった。

「マユ・アスカ、ザクウオーリア発進スタンバイ。全システムオンライン。発進シークエンスを開始します。お姉ちゃん、頑張って！」

ルナマリア・ホーク、セイバー発進スタンバイ」

シンがモビルスーツの出撃準備を進めていく。

「目標、針路そのまま、距離4700」

「ザク、セイバー発進！」

タリアが発進命令を下す。

「ガナーザクウォーリア、カタパルトエンゲージ」

マユのザクはガナーウィザードを装備する。

ウィザードシステム　ザクウォーリア、そして上位機種であるザクファントムの最大の特長であるバックパック換装システムである。用途の異なるウィザードを戦況や作戦目的に応じて交換する事で、ザクという単一の機種に複数の機能を持たせる事に成功している。今回装備されるガナーウィザードは遠距離砲撃用であり、大型ビーム砲『M1500　オルトロス高エネルギー長射程ビーム砲』と専用エネルギータンクで構成される。

『マユ・アスカ、ザク、行きます！』

「続いてセイバー、どうぞ！」

『ルナマリア・ホーク、セイバー、出るわよ！』
セイバーに続いて、2機のザクが発進していく。

「ボギーワンか。本当の名前は何というのだろうね。あの艦の？」

ふいに、デュランダルがアレックスに話しかける。

「はあ？」

「名はその存在を示す物だ。ならばもし、それが偽りだったとしたら……。それが偽りだとしたら、それはその存在そのものも偽り、と言う事になるのかな？　アレックス、いや、アスラン・ザラ君」
「……」

果たしてデュランダルは何を意図した物が……。わからないまま、アレックスは沈黙で持って答える。

「議長！　それは……！！」

カガリが焦った様に立ち上がりかける。

「御心配には及びませんよ、アス八代表。私は何も彼を咎めようと言つのではない。全ては私も承知済みです。カナーバ前議長が彼等に執った措置の事もね」

「ならば、それを無にするような発言はしないで頂きたい。彼はも

う、オーブ人アレックス・ディノとして生きているのですから」
ユウナが横合いから口を出す。

「いや、他意はないのだ、セイラン宰相補佐官」

デュランダルは慌てる様子も無くユウナに手を振ると、アレックスの顔を覗き込む。

「ただどうせ話すなら、本当の君と話しがしたいのだよ、アスラン君」

「……」

「それだけの事だ。ふふ」

アレックスは、無言だった。

第6話「超種運命の大戦<6>

「ボギーワン、捕捉しました」

「ん？」

「オレンジ55、マーク90アルファ！」

「敵艦に変化は？」

「ありません。針路、速度そのまま」

「よし。ランチャーワン、ランチャーシックス、1番から4番、エスパール装填。シウス、トリスタン起動。今度こそ仕留めるぞ！」
アーサーは気負った声で叫んだ。

「あんまり成績良くないんだけどね、デブリ戦」

「向こうだつてもうこつちを捉えてるはずよ。油断するしないで！」
ルナマリアはマユに檄を飛ばした。

「解ってるって。レイみたいな口きかないでよ、調子狂っちゃう」

……

…

おかしい。何で。何でまだ何も。

敵艦はまったく反応を示さない。ルナマリアの胸に微かな警告音がした。

「セイバー、ボギーワンまで1400」

「未だ針路も変えないのか？ どう言う事だ？」

「何か作戦でも！？」

「はっ！ しまった！」

「デコイだ！」

タリアとが同時に叫んだ。

視線がアレックスに集まる。アレックスは首をすくめた。

「よし、そろそろ行くぞ」

スウェンが告げる。

「おう！」

「オーケー！」

「まず一機に集中攻撃だ！」

スウェン達3機の攻撃が、ミネルバから出撃してきたモビルスーツの一機に向かう。

完全な奇襲だった。

！

「ああ！」

突如として、僚機の一機が爆発する。

「チアキ！ うっ！」

それに驚く間も無く、更なる攻撃が襲って来る。

「散開して各個に応戦！」

ルナマリアは咄嗟に指示を飛ばす。

「くっそー！ 待ち伏せか！ ん？ ボギーワンが……ロスト!?」

「ボギーワン、ロスト！」

「何い!?」

「くっ……」

自分の予想が悪い方向に当たってしまった。
アレックスは口を歪め右下方を睨みつける。

「チアキ機もシグナルロストです！ イエロー62ベータに熱紋3
！ 判別不能！」

シンの報告にタリアは舌打ちすると指示を飛ばす。

「敵急いで。本当のボギーワンを早く見つけるのよ！」

「かかったようすな」

リーはネオに、にやりと笑う。

「ああ、どうやらうまくいったようだ」

ガーティ・ルーはデブリとアンカーを使い進行方向を制御し、ミネルバの後方に遷移する事に成功していた。

ネオが片手を上げる。戦闘の開始だ。

それを見てリーは指示を下す。

「ダガー隊発進、機関始動！ ミサイル発射管、5番から8番発射
！ 主砲照準、敵戦艦！」

「ブルー18、マーク9チャーリーに熱紋！ ボギーワンです！
距離500！」

「ええっ！」

「更にモバイルスーツ2！」

「後ろ？」

「やられた！」

タリアの胸に口惜しさが広がる。

「測的レーザー照射、感あり！」

「アンチビーム爆雷発射、面舵30、トリスタン照準」

「駄目です！ オレンジ22デルタにモビルスーツ！」

「くっ！ 機関最大！ 右舷の小惑星を盾に回り込んで！」

「う……うう……」

操舵手が慣性に耐えながら必死に舵を回す。

「うわああ！」

艦内が傾き、悲鳴があがる。

「マユ！ ルナマリア達を戻して。残りの機体も発進準備を！」

「はい！」

「マリク！ 小惑星表面の隆起を上手く使って直撃を回避！」

「はい！」

「アーサー、迎撃！」

「ランチャーファイブ、ランチャーテン、ディスプレイ、てえ！」

ミネルバは迎撃用ミサイルを発射する。

「弱そうな奴から叩け！」

「おーけー」

スウェンの指示に気の抜けたような返事をしながらミューディーのブルデュエルは一機のザクに近づく。

ブルデュエル 前大戦時に開発されたG兵器を基にした、エースパイロット用カスタマイズモビルスーツ開発計画、通称「アクタイオン・プロジェクト」の成果の1つとして生み出された機体群の一つである。

スウェンは装備換装機構「ストライカーパックシステム」によって、多様な戦場に適応可能な汎用性を発揮するストライクを基にしたストライクE。ノワールストライカー I・W・S・P・統合兵装

ストライカーパックのコンセプトを継承しその万能性を殺さず、特性を近接格闘に振り向け特化させた物を付けた今は通称ストライクノワール。
シャムスは砲撃戦用のバスターを基にし、大幅な火力の増強が行われたヴェルデバスター。
そしてミューデーは近接白兵戦闘用のデュエルを基に、機動力、攻撃力、防御力に格段の向上が成されているブルデュエルが乗機である。

「くそう、よくも、よくも僕のチアキを！」

緑のザクがビームトマホークを抜き前に行く。

「馬鹿！ 迂闊に出るな！ ミツオ！」

『もーらい！』

「あ！」

ミツオのザクは、打ち合う間も無く、敵のビームサーベルに斬られ、爆発する。

「ミツオ！ だから！ 馬鹿が！」

ルナマリアは逸って戦死してしまった部下を罵倒する。

「あつと言う間に二機も……」

「くっそー！」

マユはM1500 オルトロス高エネルギー長射程ビーム砲を発射するが、避けられてしまう。

お返しの様に4本の火線が襲って来て、慌てて避ける。

「ん？ ルナ！ ミネルバから！」

「ミネルバから帰還命令！？ あたし達まんまと嵌ったって訳！？」

「ええ、そう言う事ね。けどこれじゃあ戻れったって……敵の方が多い！」

「そうね、可能な限り耐久する！ あたしが戦闘機になって引っ掻き回す！ マユは後方から支援を！」

「ナイトハルト、てえ！」

主砲が使えない状況で、アーサーは宇宙用ミサイルの発射を指示する。

「後ろを取られたままじゃどうにも出来ないわ！ 回り込めないの？」

「無理です！ 回避だけで今は……！」

「レイのザクを！ 残りのザクを全部出して……！」

「これでは発進針路も取れないわ！」

アーサーの進言を言下にタリアは却下する。

「はあ……！」

「残る赤いの2機、動きがいい。連携もいい」

「ああ。シャムス、後ろの赤いザク任せろ。戦闘機型になったのは機動性でこちらが負けている。ミューデーと俺、2機で押さえ込む」

「任しとけ！」

そう答えると、シャムスは再び砲を放った。

「うわあ!」「」

ミネルバの乗員が悲鳴をあげる。また被弾したのだ。

「これではこちらの火器の半分も……!」

「浮遊した岩に邪魔されてこちらの砲も届きません!」

「粘りますな」

リーがネオに言った。だが、その口調には余裕が感じられた。

「ああ、だが、艦は足を止められたら終わりさ。奴がへばり付いている小惑星にミサイルをぶち込め! 砕いた岩のシャワーをたっぷりとお見舞いしてやるんだ! 船体が埋まるほどにな!」

「はっ!」

「出て仕上げてくる。あとを頼むぞ」

「はっ」

ネオはふわりと立ち上がると、エグザスの格納庫へ向かう。

「ミサイル接近! 数6!」

「うう……」

アレックスは呻る。先程から一方的にやられている。しかし自分は何も出来ないのだと歯噛みをする。

「迎撃!」

「でもこれは……」

「直撃コースじゃない? はっ! まずい!」

アレックスは敵の意図に気づき焦る。

「艦を小惑星から離して下さい!」

「え？」

突然のアレックスの声に瞬間タリアは呆ける。

！

今までに無い、ミサイルではない、重い衝撃が艦を揺らす。

「うわああ！」

「右舷が！ 艦長！」

「離脱する！ 上げ舵15！」

「更に第二派接近！」

「減速20！」

エグザズで出撃したネオは、半ばトンネルのようになった小惑星の
挟まれた部分を飛びながら気合を入れる。

「さて、進水式もまだと言うのに、お気の毒だな。仕留めさせて
もらおう！」

「4番、6番スラスタ破損！ 艦長！ これでは身動きが！」

アーサーが悲鳴のような声を上げる。

その時、一際大きい岩塊がミネルバの目の前に漂って来る。

「針路塞がれます！」

「更にモビルアーマー、モビルスーツ接近！」

このままではそいつらにやられる！

タリアは残ったモビルスーツを出す事を決心した。

こちらにも、なんと少しでも出さなければ、あぶない。

「エイブス！ レイ達を出して！」

「はっ！ しかしカタパルトが……」

「歩いてでも何でもいいから急いで！ ルナマリア達は？」

「セイバー、ガナーザクが、依然敵モビルスーツ3機と交戦中です！ ミツオ機はシグナルロスト！」

「この艦にもうモビルスーツは無いのか！ もう少しはあるはずだろっ！？」

焦った声でデュランダルが声を上げる。つい、機密に近い事まで口走ってしまう。

「パイロットが居ません！」

「あっ……！」

パイロット。自分がいるじゃないか。

アレックスはそう思った時に思わず声が出ていた。

自分が出れば、あるいは……だが。

アレックスは思いを飲み込む。

「艦長、タンホイザーで前方の岩塊を撃てば……」

アーサーがタリアに進言する。

「吹き飛ばしても、それで岩肌抉って同じ量の岩塊を撒き散らすだけよ！」

「あ……ああ……」

だめか……。

皆の顔に焦りと失望が走る

第7話「超種運命の大戦<7>

ミネルバのハッチから、白いザクファントムが現れた。レイの乗機だ。

カタパルトが使えないので歩いてである。

ウィザードはブレイズウィザード 多数のスラスターを備えた宇宙用高機動型ウィザードを装備している。

後ろにシヨンとゲイル、2機のザクウォーリアが続く。

ミネルバにはギルが乗っているんだ。絶対にやらせるものか！
レイは心に誓う。

ギル ギルバート・デュランダルの事である。

人には話さないが、二人は親しい間柄である。デュランダルはレイにとって親代わりと言ってもいいかもしれない。

大切な人のために……レイは出撃する！

「右舷のスラスターは幾つ生きてるんです!？」

アレックスはタリアに尋ねる。閃いた事があったのだ。

「え？ 6基よ。でもそんなのでノコノコ出たって、またいい的にされるだけだわ」

「同時に、右舷の砲を一齐に撃つんです！ 小惑星に向けて!」

「ええっ!」

アーサーが驚きの声を上げる。

「爆発で一気に船体を押し出すんですよ！ 周りの岩も一緒に!」

「あ……」

「馬鹿言っな！ そんな事したらミネルバの船体だって……」

「今は状況回避が先です！ このままここに居たって、ただ的にな

るだけだ！」

「タリア……」

やってみよう。

そんな思いを込めてデュランダルはタリアに声をかける

「確かにね。いいわ、やってみましょう」

「えー！ 艦長！」

アーサーは、また驚いた声を上げる。

「この件は後で話しましょう、アーサー。右舷側の火炮を全て発射準備。右舷スラスター、全開と同時に一斉射。タイミング合わせてよ！」

「右舷側火炮、一斉射準備」

「合図と同時に右舷スラスター全開」

「くっ、デブリが。でも！」

敵機2機がこちらに向かって来る。戦闘機形態で相手の後方にダッシュ！

後方に位置する、マユと撃ちあっている砲戦仕様機にビーム砲を連射！

敵機2機がルナマリアの事をあきらめ、マユの方に向かおうとする。ターンする！ ！ 大きな岩！

ルナマリアは、目の前に大きな岩塊が現れると、モビルスーツ形態になり、一瞬の間に開けた空間を見つけ、再び戦闘機形態になってダッシュする。

敵機2機に、後ろからビーム砲を連射する。相手もわかっているのか、避けられる。

マユから引き離さなきゃ！

あえて挟み撃ちの形で後方から撃つ！ 2機が充分マユから離れる。ルナマリアが挟み撃ちに遭いそうになる。一気にダッシュしてター

ン！

それを繰り返す。

じりじりする思い。

いや、うまくいつてるのだ、と言い聞かす。

確か昔読んだ『大空のサムライ』にこんな場面があったはず。硫黄島上空でフクロにされそうになった時……。

そうだ。

まだ自分もマユもやられていない。むしろ、戦法を変える方が、危険。

ルナマリアは自分に言い聞かせる。

「……！」

レイは何かを感じた。咄嗟に回避行動を取る。ザクファントムがいた場所を、ビームの光が貫く。

「あれは……ドラグーン？ いや、地球軍ならガンバレルか！」

小さな紫の物体が、ヒュンヒュンと飛び回りビームを撃ってくる！

「うわぁ」

「……つつう！ なんだ、こいつは！」

「無事か！？」

「機体中破、無事です」

「同じく小破、まだまだやれます！」

部下達の無事を確認してレイは安堵する。

「シヨーン！ ゲイル！ お前達は下がれ！ こいつは並みの相手じゃない！」

「し、しかし……」

「いいから戻れ！」

そう言っている間にも小さな物体は攻撃を続けてくる。

「邪魔な奴！」

避けながら、レイはビームライフルを発射する。敵のモビルスーツ

が一機、爆発する。

「この隙だ！ 行け！」

「何なんだ君は一体！？ 白い坊主君！」

ネオは少し焦った。ガンバレルを使ったオールレンジ攻撃に少しは自信を持っていたのだ。それが……。

緑のザク2機は撃墜は出来なかったものの撃破した。たいした相手じゃない。しかし、白いモビルスーツはこちらがどこに撃つのかわかっていくかのように、避ける。

！

相手も撃ってきた！

「ああ！ フクダ！ フクダがやられた！」

部下の機が一機、爆ぜる。

「下がれ、モロサワ！ こいつは手強い！ お前は艦をやれ！」

「はっ！」

残る部下一機は敵艦攻撃に向かう！

敵モビルスーツ一機は撃墜した。もう一機は……離脱してミネルバの方向に向かう！？

「させるか！」

レイは自分も機首を反そうとすると、またあの小さいのが攻撃してくる。

「ちいっ！」

レイは舌打ちをする。

小さいのをどうにかしなければ！

レイは機体の両側スラストアーム先端部に内蔵されたAGM1

38 ファイヤビー誘導ミサイルを全弾発射する。
次々と浮遊物に当たり、炸裂、デブリが増える。

！
小さい奴がデブリを避けるように遠ざかっていく。今だ！

レイはMMI-M633 ビーム突撃銃を構え、ミネルバに向かう
敵機に狙いを付ける。

……！
ビームは過たず、敵機を貫いた！

「さて、とどめだ」
戦況を見ていたリーは、敵艦が動けなくなっているのを確認して、
言った。

「岩塊に邪魔されて直撃は期待できませんが……」
「追撃不能にまでに追い込めばいい。大佐は面白くないかもしれないが、こちらのモビルスーツもそろそろパワーが辛いだろうからなあ」
「ガーティ・ルーは敵艦に接近を開始する。とどめを刺すために……」

「ボギーワン、距離150」

「総員、衝撃に備えよ。行くわよ！ 右舷スラスタ全開！」

「右舷全砲塔、てえ！」

タリアの指示と同時に、アーサーは右舷全砲塔の発射を指示する。

「うわあ！」

艦が、大きく揺さぶられる！

「回頭30！ ボギーワンを撃つ！」

「タンホイザー照準、ボギーワン！」

「てえ!!」

「うわあ!!」

ミネルバの動きを見たりリーの咄嗟の回避指示で、間一髪、タンポイザーはガーティー・ルーの右舷を掠めるだけに終わった。それだけでも結構な被害をもたらしてくれたが。

そのまま反対方向にすれ違うように指呼の間をガーティー・ルーと敵艦はすれ違い、離れていく。

「ええい! あの状況からよもや生き返るとは!」

その様子を見ていたネオは毒づく。

「こうなったら俺が……うっ!!」

攻撃に向かおうとすると、敵艦を守るように、白いモビルスーツが立ちふさがる。

「くっ! 潮時か!」

ネオはそのモビルスーツとやり合いながら、徐々に距離を取り、作戦終了の信号弾を上げる。

「またいつの日か、出会える事を楽しみにしているよ。白い坊主君。そしてザフトの諸君!」

そう言うと、ネオはガーティー・ルーに帰還していった。

「カル・バヤン達に帰還信号を。宙域を離脱する!」

ネオの上げた信号を見ると、リーはスウェン達に帰還の指示を出す。

「やれやれ」

リーは額の汗を拭いた。

「手強い相手でしたね」

副官が声をかける。

「ああ、まったくだ」

「再戦の日まで健在なれ、と言う所ですか」

「いやいや、あんな手強い相手とは出来ればやりたくないね。ははは」

リーは笑う。

「ふふふ」

副官も笑う。

「ちつ、2機落とせただけか」

帰還信号を見たシャムスが悔しそうに言う。

「仕方ない。帰るぞ」

「ああ……」

スウェン達も、敵のモビルスーツと徐々に距離を取りながら、ガ―ティ―・ルーへと向かう。

「ボギーワン、離脱します」

「セイバー、ザク、マユ・アスカ機、パワー危険域です」

シンが安堵と緊張の混じった声で報告する。

「艦長、さっきの爆発で更に第二エンジンと左舷熱センサーが！」

「グラデイス艦長。もういい。後は別の策を講じる」

デュランダルがタリアに告げる。

タリアは悔しそうな顔をして下を向く。

「私もアスハ代表をこれ以上振り回すわけにはいかん」

「申し訳ありません」

タリアは頭を下げた。

「はあはあ……あいつら、行っちゃったよね？」

敵モビルスーツが去った宙域で、ルナマリアは荒い息をついていた。さしものルナマリアも長時間の空戦機動で体に負担が溜まっていた。

「ええ、行っちゃったわ。ミネルバも無事みたい」

「ああ……、よかったあ！ マユ！ あんたもよくやったわ！ 偉い！」

「ふふ……これが私は実質初めての実戦ね」
ルナマリア達も、ミネルバへと帰還する。

ミネルバのブリッジの遮蔽が解かれ、通常位置へと替わる。

カガリ達は、ブリッジを出て士官室へと向かう。

「本当に申し訳ありませんでした。アス八代表」

廊下を歩きながらデュランダルがカガリに謝罪する。

「こちらの事などいい。ただ、このような結果に終わった事、私も残念に思う。早期の解決を心よりお祈りする」

「ありがとうございます。そう言えば、本国ともようやく連絡が取れました」

「既にアーモリーワンへの救援、調査隊が出ているとの事ですので、うち一隻をこちらへ皆様のお迎えとして回すよう要請してあります」
タリアが報告する。

「ありがとうございます」

部屋に着いた。カガリとユウナは部屋に入る。

その時、デュランダルがタリアに話しかける。

「しかし先ほどは彼のおかげで助かったな、艦長」

「え……はあ……」

アレックスは振り向く。と、ドアが閉まりアレックスだけ取り残された形になってしまった。

「さすがだね、数多の激戦を潜り抜けてきた者の力は」

「いえ……出過ぎた事をして申し訳ありませんでした」
アレックスは謝罪して見せるが、タリアは優しく言う。

「判断は正しかったわ。ありがとう」

「……」

「では」

タリアはアレックスに敬礼すると、踵を反す。デュランダルも不思議な笑みを浮かべてアレックスを見つめると、タリアの後に続いて去っていく。

先程の戦いの最中に覚えた感情がアレックスの中に甦る。

ザフトを……プラントを、捨てたはずなのに……。

ふいにやりきれない思いが突き上げてくる。

「くそっ」

アレックスは唇を噛み締め、部屋に入らず踵を反すと一人休憩室へと向かった。

「さあ、お兄様。今日はラザニアを作りましたのよ」
セトナはジブリールに声をかける。

「すまないな、せつかくの休日に色々させてしまって」

「ふふ。私料理も好きですもの。さあ、召し上がって?」

「では、頂こうか。……うん、これはうまい!」

その時、猫と言うには大きい、体長1メートル程の、ちゃんちゃんこ風の赤い服を着た猫が寄ってきた。

「あら、ブータニアス。お前も食べたいの? でもこれはタマネギを使ってあるからだめよ。ディーンズのレトルトをあげますからね」
セトナはレトルトパウチを開けると皿に盛り、猫のブータニアスの前に出す。

ブータニアスはガツガツとそれを食べだす。

「ふふ……」

セトナはそれをにこにここと眺める。

穏やかな時間が過ぎていく……。

第8話「超種運命の大戦<8>

休憩時間に入ったシンは、パイロット控え室へ向かう。

「あ！」

ちようど出て来た兄達と会う。

「お姉ちゃん！ ルナ！ レイ！ お疲れ様。大丈夫？」

「ええ、なんとかね。でも、くたくたよ」

「シヨーンとゲイルは？」

レイが、先に帰った部下の事を尋ねる。

「少し怪我してたから、手当てして、部屋で休んでいるみたいです」

「そうか」

レイはほっと息を吐いた。

「……チアキにミツオ……」

ルナマリアが守れなかった部下の事を思い出し、俯く。

「ああ、ほら！ 仕方ないじゃん、戦闘なんだし。軍人になったからには覚悟してたわよ」

マユがルナマリアを励ます。

「ああ、そう言えば、ブリッジですごいニュースがあっただんだ！」

シンが、空気を変えるかのように、明るい声を出した。

「アスラン・ザラ？ あいつが？」

ルナマリアが驚いた声を出す。

「やっぱりねー。そうだと思った！」

マユは、わかったように頷く。

「でも、ほんとに名前まで変えなきゃなんないもんなのかな？ だってあの人前は……」

「そりゃそうよ、シン。いくら昔……」

マユが休憩室に入ろうとする時に急に立ち止まったのでルナマリア

は蹈躑を踏んだ。

「あ！　うう……………」

休憩室には、先客がいた。それは…………。

オーブの、アスラン・ザラ。

ルナマリアの胸に奇妙な、辛い、重苦しい思いが襲って来て、横を向いた。

「へえー、ちょうど貴方の話をしていた所ですよ、アスラン・ザラ。まさかと言うかやっぱりと言うか、伝説のエースにこんな所でお会いできるなんて光栄です！」

マユは明るく彼に声をかけた。

「…………そんなものじゃない。俺はアレックスだよ」

「だから、もうモビルスーツにも乗らないんですか？」

「……………」

「よしなさいよ、マユ。オーブなんか居る奴に…………何も解ってないんだから」

「ん？」

棘のある声に、アレックスは顔を上げた。

だが、ルナマリアは踵を反すと休憩室の入り口から去って行った。

「失礼します」

レイも、しかし、きちんと敬礼をして去っていく。

「ああ、もう！」

マユはもつとアレックスと話をしていたようだった。

「でも、艦の危機を救って下さったそうですね。ありがとうございます！　ありがとうございました！」

マユも、敬礼をすると慌ててルナマリア達の後を追った。

「アスランはどうしたんだ？」

「部屋の外見たけど、いないよ？　デュランダル議長達と急な用事

でもできたかな？ それよりカガリ」

「ん？」

「アレックス！ アレックス・デイノ！ カガリが気をつけていないとばれるだろ？ まあ、今回はデュランダル議長が問答無用で正体明かしてくれちゃったけどね。はは」

「うう……気をつける……」

カガリはうな垂れた。が、すぐにぱつと顔を上げる。

「ユウナ！ お前も変な事するなよ！ 死に掛けたじゃないか！」

「え、ええと、なんの事だい？」

「モビルスーツを操縦しようとしただろ！」

「ああ……。あれか……。うまくいくと思っただよー。オーブのモビルスーツはちゃんと操縦できたのになあ。やっぱりOSが……」

「え？ほんとに動かせたの？ お前？」

「ああ。オーブは国民皆兵、満18歳で男も女も兵役に付くだろう？ これでも一応予備役將軍だ。定期訓練で操縦している。最新鋭機もね」

「そうか。意外としつかりやってんだな」

「『意外と』は余計だよ」

「そう言えば、議長とモビルスーツについて話してたな。男はやっぱりああ言うの好きなのか？」

「いや、まあ。心に響く物はあるけどね。父に頼まれた仕事の話さ。……カガリ、こんな事言いたくないけどね。プラントが、戦争が終わって皆心を入れ替えて平和な国になりました、なんて考えてないよね？」

「考えてるなら文句付けに来ないよ」

「はは。そうだな。デュランダル議長が話したザフトの新型機の特徴、覚えているかい？」

「え、えーと」

「はあ」

ユウナはため息をついた。

「あ！ 水中がどうこう言ってたじゃないか！」

「ああ。可変戦闘機型のセイバー、宇宙高機動用のカオスはともかく、後の二機、アビス、ガイアは問題だね」

「何がだ？」

「アビスは水中型モビルスーツなんて言っているが、あのたくさん
のビームを見ただろう？ ビームは水中では使えない。どう見ても
揚陸作戦用だ」

「あー！」

「ガイアもね。なんで今更機動性の高い陸戦型モビルスーツなんて
必要なんだ？ 基地を防御するだけなら、防御力と火力を揃えれば
いい。陸上での機動性が必要とされるのは侵攻作戦の時さ。バクウ
が地球侵攻の為に設計された事を忘れちゃいけない」

この事は、第二次世界大戦のドイツの戦車ティーガーIIを思い起
こしてみればいいだろう。戦局が悪くなってから開発されたティ
ーガーIIは、防御陣地に配備されればその重装甲の効果を遺憾なく
発揮したが、攻撃面においてはそれほどの効果を発揮できなく、ヒ
トラーを激怒させた。

「……まあ、我が国も先の大戦では変な事をしてたけど。ははは」
ユウナが笑ったのは、『高い機動性により敵の攻撃を回避する』と
言う思想で開発されたオーブのM1アストレイの事を指している。
もっとも先の大戦後、M1アストレイが飛行能力を備えた、あるい
は飛行能力を持った新型機が開発されてからは、オーブのモビルス
ーツの特徴とも言える装甲を削った軽量化もそれなりに意味を持つ
物となっている。

オーブ攻防戦でオノゴロ島、カグヤ島に甚大な被害を受けたオーブ
としては、できるだけ島から遠い海上で敵を迎撃する事が防衛計画
の基本となっていた。

あるいは、植民地の防衛のために装甲を削り、航続力と居住性にま
わした古の大英帝国の軍艦の事情に似ている部分があるかもしれな
い。

「つまり……」

「ザフトの方から始める気かどうかはわからない。しかし、地球侵攻の用意にはおさおさ抜かりがないって事だね」

「……」

カガリはむっつりと考え込んだ。

「そうそう、カガリ。顔に出ないように気をつけてね。君、出やす
いから」

「……」

カガリの頬が、少し、膨れた。

「ねえ、ルナ」

寝る支度をしているルナに先にベッドに入ったマユが声をかけた。

「なあに？」

「アスラン・ザラってやっぱり素敵よね！ さすが前大戦時の英雄
って感じだわ」

「そう？ あんな奴……」

ルナマリアは感心しない口ぶりで言った。

「そう、よかった！」

「なにが？」

「ルナと取り合うのは、嫌なもの。きやは！」

「え？ ちょっと、変な事……」

マユはシーツをすっぽり被って寝てしまった。

タリアの部屋の通信機の呼び出し音が鳴った。

「ふう」

気だるい感じでタオルケットを身体に巻きつけると、タリアは音声

オンリーにして受話器を取る。

「なに？」

「艦長、デュランダル議長に最高評議会よりチャンネル1です」
シンからだ。

タリアは後ろに振り向く。

その視線の先に……デュランダルがガウンを纏って座っていた。

「うん」

デュランダルは頷いた。

そう、二人はこういう関係である。

元々恋人だった。しかし、デュランダルとの間では子供が出来にくい事がわかり、子供が欲しかったタリアはデュランダルと別れ、別の男と結婚し、男の子を産んだ。

しかし、「子はかすがい」にならず。相手の男は「俺は種馬じゃない！」と言つ言葉を残して別居、そして離婚。

そんな訳でお互い疚しい事も無く、独身。焼け木杭に火が付く事があってもいいかもしれない。

シンと、どっちがいいかしらね。

タリアは、初めてシンにキスをしてあげた時の事を思い出す。
びっくりしていた。新鮮な反応だった。

タリアは含み笑いをする。

それにしても、議長の場所を明らかにしておく事は、国家の危機管理上必要。

だが、それを艦の中でやれば。艦のみんなに行為を知られる事でもある。それがまたちょっとした背徳感と羞恥心を煽って、余計に燃えたりする……。

だがしかし。最高評議会から飛び込んできた知らせはそんな浮ついた気持ちを吹き飛ばす物だった。

緊急の知らせと言う事で、デュランダルとタリアがカガリにも知らせに来た。

カガリ達は慌てて応接室へと向かう。

「なんだって！？ ユニウス7が動いてるって、一体何故？」

事態を説明されたカガリが驚きの声を上げる。

「それは分かりませんが。だが動いているのです。それもかなりの速度で。最も危険な軌道を」

ユニウス7 前大戦時に唯一破壊されたプラントのコロニーの残骸である。

残骸と言っても、大きい。直径8キロもある。

「それは既に本艦でも確認致しました」

タリアもデュランダルの情報を捕捉する。

「しかし、何故そんな事に？ あれは1000年の単位で安定軌道にあると言われていたはずのもので……」

アレックスが、混乱した顔で問いたです。

「隕石の衝突か、はたまた他の要因か。兎も角動いてるんですよ。

今この時も。地球に向かってね」

「……落ちたら、落ちたらどうなるんだ？ オープは……いや地球は!？」

カガリは叫ぶかのように問う。

「あれだけの質量のものです。申し上げずとも、それは姫にもお解りでしょう」

「うう……」

カガリは、言葉も出さず、呻く。

「地球の諸国への警告は？」

ユウナが聞く。

「もちろん、すでにしてあります。原因の究明や回避手段の模索に今プラントは全力を挙げています。またもやのアクシデントで姫には大変申し訳ないのですが、私は間もなく終わる修理を待ってこのミネルバにもユニウス7に向かうよう特命を出しました」

「あ……………」

「辛い位置も近いもので。姫にもどうかそれを御了承いただきたいと」

「無論だ！ これは私達にとっても…いやむしろこちらにとつての重大事だぞ。私…私にも何かできる事があるのなら……………」

「お気持ちは解りますが、どうか落ち着いて下さい、姫。お力をお借りしたいことがあればこちらかも申し上げます」

「難しくはありますが御国元とも直接連絡の取れるよう試みてみます。出迎えの艦とも早急に合流できるよう計らいますので」

「……………ああ……………すまない」

無力さに力ガリは肩を震わせた。

「ふーん。けど何であれが？」

ルナマリア達は休憩室で休憩を取っていた。整備の者達も手すきな者が合流している。

「隕石でも当たったか、何かの影響で軌道がずれたか」

「地球への衝突コースだつて？ 本当なの？」

マユはシンに聞く。

「バートさんがそうだつて」

「はあ、アーモリーでは強奪騒ぎだし、それもまだ片づいてないのに今度はこれ？ どうなっちゃってんの」

ルナマリアはため息をついた。

「で、今度はそのユニウス7をどうすればいいの？」

「でも、どうすればいいんだ」

応接室から士官室へ向かう途中で、耐え切れなくなった様子で力ガリが誰にも無く尋ねる。

ユウナも、アレッククスも無言だった。

国にいれば、色々やる事もあるんだろうけどな。

ユウナは思った。

避難民の誘導、災害への備え……。まあ、そこらへんは父上がうまくやるか。

先の大戦の被害からオーブを復興させた手腕……。ウナトのそんな所の手腕をユウナは信頼していた。

「……砕くしかない」

アレックスが、ふいに言った。

「砕くしかない」

レイがふいに言った。

「砕くつて？」

「あれを？」

「軌道の変更など不可能だ。衝突を回避したいのなら、砕くしかない」

再び、レイは断言する。

「でもデカいぜあれ？ ほぼ半分くらいに割れてるって言っても最

長部は8キロは……」

「そんなもんどつやつて砕くの？」

「それにあそこにはまだ死んだ人達の遺体もたくさん……」

「だが衝突すれば地球は壊滅する。そうなれば何も残らないぞ。そ

こに生きるものも」

「「……」」

第9話「超種運命の大戦<9>

休憩室は静まり返る。

「地球、滅亡……」

「だな」

「そんな……」

「はあー、でもま、それもしようがないっちゃあしょうがないかあ？」

「……！」

カガリは、通りがかった休憩室から聞こえて来る会話に、足を止めた。

「不可抗力だろう。けど変なゴタゴタも綺麗に無くなって、案外楽かも。俺達プラントには……」

「くっ！」

「カガリ！」

アレックスが止めたが、遅かった。

「よくそんなことが言えるな！ お前達は！」

カガリは休憩室に飛び込んだ。

「しょうがないだど！？ 案外楽だど！？ これがどんな事態か、地球がどうなるか、どれだけの人間が死ぬことになるか、ほんとに解って言うてるのか！？ お前達は！？」

「すみません……」

不適切な発言をした張本人、メカニクのヨウラン・ケントが謝る。

「くふっ……やはりそういう考えなのか、お前達ザフトは！？ あれだけの戦争をして、あれだけの思いをして、やっとデュランダルの議長の下で変わったんじゃないのかっ！？」

「よせよカガリ！」

アレックスがたしなめる。

マユはカチンと来た。

なんなの？　このお姫様は。

「失礼ながら、よろしいでしょうか？」

「なんだ！？」

「ヨウランの発言が不適切であつた事は謝罪致します。しかし彼も場を和ませようとしての事です。それを考慮せず、いきなり仲間内の会話にしゃしゃり出て頭ごなしに怒鳴りつける、しかも他国の人間がされるのはどうかと思います」

「な！？　だけど私は！！！」

「それから、『やはりそういう考えなのか、お前達ザフトは！』と言われましたね。『やっと変わったんじゃないのか』とも！お言葉ですが、宣戦布告されたのも、プラントに核を撃たれて民間人を虐殺されたのもプラントが先ですが！　ニュートロングジャマーキャンセラーの技術が漏洩してから、すぐさま、また核攻撃されましたが！　私こそ聞きたい！　『地球に住む人々は変わったのか？』と！　ザフトが地球などどうでもよかつたのなら、前大戦時に、部下の反乱にも合わずにザラ議長は地球を滅ぼしていたでしょう！　ともかくあなたがザフトに対してどう言う考えを持っているかはよく分かりました。この事は是非議長にもお伝えしたく思います」

「なんだとっ！」

「カガリ！」

マユの皮肉に激昂するカガリをアレックスが止める。

「マユ、言葉に気を付ける」

ザフトもレイがマユをたしなめる。だが……。

「そうよおマユ。この人偉いんですもん。オーブの代表でしたもんねえ」

ルナマリアが、恨みのこもった視線で、挑発的な言動をし、煽る。

「お前えっ……………」

「いい加減にしろ！ カガリ」

「くっ……………」

「君はオーブがだいぶ嫌いなようだが、何故なんだ？」

アレックスが、ルナマリアに尋ねる。

「昔はオーブに居たという話したが、下らない理由で関係ない代表にまで突っかかるというのなら、ただでは置かないぞ」

「下らない？ ……下らないなんて言わせない！ 関係ないってのも大間違いよ！ 私の家族はアスハに殺されたのよ！ 父さんも、母さんも、妹のメイリンも！」

「う……………」

「国を信じて、あんた達の理想とかつてのを信じて、そして最後の最後に、ボロボロで殺された！」

「え……………」

ああ、そうか。オーブ攻防戦の……………。

ユウナは得心がいった。

先ほどの口調だけは丁寧な少女より、よほどオーブを責める資格があるな。うん。

「だから私はあんた達を信じない！ オーブなんて国も信じない！ そんなあんた達の言う綺麗事を信じない！ この国の正義を貫くって……………あんた達だってあの時、自分達のその言葉で誰が死ぬ事になるのかちゃんと考えたの！？」

「……………」

カガリは唇を噛み締め、俯く。

「何も解っていないような奴が、解ってるような事、言わないで欲しいわね！」

「君ね……………」

ユウナは、割って入るとパシッと軽くルナマリアの頬を叩いた。

「あ……」

ルナマリアはあっけに取られたように目を見開き口を開ける。

「じゃあ、言つてあげるよ。まず君だ。地球連合に攻められたオールの僕がこんな事を言うのもおかしいがね。第三者から見ればこうも見えると知っておきたまえ」

ユウナはマユに指を突きつけた。

「確かに宣戦布告をしたのは地球連合が先だ。しかし、それ以前にプラントの数々の違法行為がある。そもそもプラントは理事国が作り、理事国が運営していた、その名の通り工場だ。そこに集まった君らは言わば唯の雇われ人に過ぎない。理事国が運営していたからには規則がある。しかし、自治権を認められ、コンピューターに政治の候補者を選ばせると言う僕には理解できないプラント独自の運営をしていたからには、それも緩やかな物のようだったがね。だが、プラントは、その些細な規則さえも破った。戦略物資である食料を独自に運び込もうとし、プラントを違法に農業実験プラント　ユニウス7に改装した。一体なんだ？　君達は？　雇われ条件が気に入らなければ、他へ行けばいいだけだろう。それを人様の工場を乗っ取る？　独立？　テロリストじゃないか！　……まあ、そこはここまでにしておこう。次はヤキン・ドゥー工戦役だ。君も言ったように、宣戦布告をしたのは地球連合だ。その後の攻撃は当然だろう。油断していた方が悪い。それにはるかに強い宇宙放射線が飛び交っている宇宙では核爆弾は唯の威力の大きい爆弾と言うに過ぎない。核攻撃をコロニー一基、それも実験施設に絞ったのは警告の意味もあつたとも思える。次に、君らの反撃　ニュートロンジャマーの投下についてだ。血のバレンタインからエイプリルフルクライシスまで二ヶ月も無い。そのため僕は開戦前から地上侵攻のためにニュートロンジャマーを量産してた疑惑を感じてしまうのだが、どうかな？　血のバレンタイン2月14日　約一週間で戦闘への試験投入が2月22日、エイプリルフルクライシスが4月1日だ。そうそう、地球上へのニュートロンジャマーの投下が決議された時の

議長は『穩健派』とされるシーゲル・クラインだったね。何の皮肉かね？ 冗談かね？ これは？ 更に！ その投下は地球上に無差別にだ！ オーブも小なりと言えど被害を被った！ 中立国になんの恨みがある！？ 君達こそが地球上すべての人類に悪意があったと思われてもしょうがなかるう！」

「もういい！ ユウナ、もういいから！」

激したユウナを見て自身は冷静になったのか。カガリがユウナの服の裾を引っ張る。だがユウナは止まらない。

「ふう。本当はもっと言つてやりたいが、一応ユニウス条約でけりがついている事だ。ここまでにしよう。次は君だ」

ユウナはルナマリアに向き直った。

「国の運営をしているとね、いつも感じているよ、自分の身体のようにね。つねにぎりぎりの綱渡り気分さ。政治家が国の頭なら、通貨や人材は血液、常に血液をもっと、もっとと叫んでいる地方、部門は手足だ。……あの時何があつたのか話してあげよう。国の理想？ そんな物、あの時一顧だにされなかつたさ！ なにしるオーブの中立政策自体が、単にオーブを戦争から遠ざけようとする、単なる一方策に過ぎなかつたのだからね！」

ルナマリアは驚いた顔で、頬に手を当てユウナを見ている。ユウナは続けた。

「オーブ本土の人口に対する軍人比率は14%。経済に影響を与えないぎりぎりまで徴兵していた。それでも軍は現役5万人、予備役まで召集してもやつと28万人。対して大西洋連合は平時の軍人比率がなんとたつたの0.5%だ。それでも現役だけで100万人を超える。まるで相手になるわけ無いだろ。降伏する事は決定してただよ」

「……じゃあ、どうして最初から降伏しなかつたのよ！？」

「最初から降伏しようと言う者もいたよ。それが、国民に最も被害が少ないと言つてね」

「だつたらー！」

「……だが、それは当時の状況ではオーブのコーディネーターを切り捨てる事になっていたとわかっていているかい？」

「……！」
「国民を守らない国になんの価値がある？ 結局、あの時の閣僚達は、ウズミ様は決めたんだけだ。コーディネーターも、誰も切り捨てない」と 敗北するとも戦う事でオーブは国民を守ると言う意思を示すと 。さあ、教えてくれ。もっといい方法があつたのなら。どうすればよかつたのか」

ユウナの顔はどこか懇願しているような、顔をしていた。

「な それを考えるのが政治家の仕事でしょう！？ なんで私が考えなくちゃいけないのよ!？」

「……は。はははは!」

ユウナは笑った。

「いや、失礼。プラントでは成人だと言っても、君は、まだ子供なんだねえ。世の中は、誰か英雄が現れて全て良くしてくれなくてはいけないと思つている。白馬の王子様も信じてるかな？ 幸せはきっと誰かが運んでくれると信じて疑わない」

「……なんで、あんなにそこまで言われなきゃいけないのよ!」

ユウナが意識を失う前に見たのは、怒つたルナマリアの顔と迫ってくる握られた拳だった

「……」

ユウナが意識を取り戻した時、目の前は白いもやがかかっていた。それに、冷たい？

「気がついたのか？」

カガリの声だ。

「ん……まあね。僕は一体どうしたんだ？」

「ばーか」

白いもやが、消える。白いもやの正体は、どうやらカガリが手に持っている白いハンカチらしかった。

「後で鏡を見てみる。痣になってる。まだ冷やしとけ」
額に、再び濡れたハンカチが押し当てられる。

「まったく、馬鹿だよ。コーディネーターに喧嘩売るからだ」
そう言いながら、カガリはどこか嬉しそうだった。

「なに……。話がカガリの事になったからさ。これでも姫のナイトを自任しているんでね」

「ばーか」

カガリは笑ったようだった。

「……しかし、私はまだ未熟だな。お父様があんな事を考えていたなんて……。私はお父様の言った事だからと、中立政策を金科玉条のように思いすぎていたかも知れない」

「未熟を自覚できれば、一人前さ」

ユウナは、先の大戦の事を思い出していた。

予備士官として招集され、逸った自分。拡大された過失。

ユウナのかつての上官は、ユウナのした失敗すべてをユウナの前で一つ一つ指摘し、叱責した。

だが、戦争が終わった時ユウナの犯したミスをすべて被ったのはその上官だった。确实だと目されていた将への昇進をあきらめる事態になっても、ミスは一人の予備士官のしでかした事だとは言わなかった。結局彼はユウナの失敗すべての責任を負って、将になる事無しに退役した。

あの時から自分は変わったのだと、ユウナは思っている。

「君には僕がいる。僕の父もいる。君にこき使われるためにね。思う存分、こき使ってもらっていいよ」

「ふふ」

白いもやの向こうでカガリが吹き出したようだった。

「さてと、とんでもない事態じゃの」

ジブリールは北アメリカに渡り。とある邸宅に向かった。そこで口ゴスの面々と顔を合わせる。

口ゴス　イルミナーティと言った方がいだろうか。古い組織である。中世の石工組合が起源であるとも言う。中世において、キリスト教の大聖堂、修道院、宮殿などの建築、増築、修復などのプロジェクトは数十年、あるいは数百年もの年月要することも珍しくなかった。職人達は自分達の仕事の権利を守るため、仕事の方法を秘密にし、詐欺師に欺かれないように仲間内で握手の方法や独自の用語などの暗号を考案していったと言う。また、城砦などを建設した際に城の秘密を守るため口封じされる事がないように団結したのだとも言う。イルミナーティのシンボルはピラミッドに目のシンボルである。このシンボルはエジプトに由来し、ホルスの目と呼ばれる。このシンボルは権力構造のヒエラルキーと全てを監視する支配者を表しているとされる。大西洋連邦の紙幣にこのシンボルがある事は良く知られている。

「まさに未曾有の危機。地球滅亡のシナリオですな」
そう言いながら、のんきにビリヤードをやっている者も、いたりする。

「ふ。書いた者がいるのかね」

「それはファントム・ペインに調査を命じて戻らせました。一応。ちょうどユニウス7に近かった部隊がいるもので」
ジブリールは答えた。

「大丈夫なのか？」

「大丈夫ですよ。彼らの能力なら」

「なんぞ役に立つのかなそんなものを調べて」

「それを調べるのじゃないか！」

老ブルーノ・アズラエルが吼える。この館の主だ。

「しかしこの招集はなんだ、アズラエル。まあ、大西洋連邦を始め

とする各国政府が、よもやあれをあのまま落とすとも思ってはおらんが。一応避難や対策に忙しいのだぞ、みんな」

「……この事態には、私も大変シヨックを受けている。ユニウス7が、まさかそんな、一体何故とな？」

「前置きはいいよ、アズラエル」

「いいや！　ここからがが肝心なのだ！」

「ん？」

「やがてこの事態は世界中の誰もがそう思う事となるだろう」

「んん……」

「ならば我々はそれに答えを与えてやらねば」

「んん」

「プラントのデュランダルは既に地球各国に警告を発し、回避、対応に自分達も全力を挙げるとメッセージを送ってきた」

「早い対応だったな」

「奴等も慌てていた」

「ならばこれは本当に自然現象という事かな？　だがそれでは……」

「いや、そんな事も、もうどうでもよいのだ！」

「ほお」

「重要なのはこの災難の後、何故こんな事に、と嘆く民衆に我々が与えてやる答えの方だろう」

「やれやれ、もうそんな先の算段だか」

「無論、原因が何であれ、あの無様で馬鹿な塊が間もなく地球、我等の頭上に落ちて来る事だけは確かなのだ。どういう事だ、これは！　あんなものの為に、この私達までもが顔色を変えて逃げ回らねばならないとは！」

「それは……」

「この屈辱はどうあっても晴らさねばなるまい。誰に！？　当然あんな物を解体もせず以後生大事にほおって置いたコーディネーターどもにだ。違うか？　そもそも今回の事で奴らにユニウス7を管理する能力もなかったのは明らかだ！」

「いやあそれは……」

「それは構わんがな」

まあ、アズラエル老は前大戦で息子を亡くされたからな。ザフトに殺されて。

怒る気持ちも、ジブリールにはわかる。

「だがこれでは被る被害によつては戦争をするだけの体力すら残らんぞ」

「だから今日お集まりいただいたのだ。避難も脱出もよろしいがその後には我々は一気に打って出ねばなるまい。例のプランで。そのことだけは皆様にも御承知おき頂きたくてな」

「なるほど」

「強気だな」

「コーディネーター憎しでかえつて力が湧きますかな、民衆は」

「残っていればね」

「残りを纏めるんでしょ？憎しみという名の愛で」

「ジブリール。先程から黙ってばかりじゃな。どう考える」

ジブリールに話が向けられる。

「んん……」

例のプラン 「武装解除、現政権の解体、連合理事国の最高評議会監視員派遣」などをプラントに、要求。要するに、理事国にとつて真つ当な工場に戻すという事だ。だが……。おそらく受け入れられまい。その場合は、核ミサイルによるプラントの撃滅を図る計画だ。

まあ、いいけどな。プラントの奴らなど。

江戸時代の日本では、10両盗めば死刑だった。時代によっては、憤ましく暮らせば一人が一年食べられたらどうか？

それを考えると、理事国がプラントに注ぎ込んだ資金を考えると、プラント皆殺しでも、到底足りない。

……プラントとその同調者を、人類を滅ぼせないよう『確実に』無力化する。事を起こすに当たってこれは大前提だ。

どっちがいいのかな？

まともには戦って勝って、生き残ったプラント住人を二度と地球に被害を及ぼせぬようにするか？

……死体と同じくらい無力な生者を作るのは、結構大変な気がする。感情とか人道を忘れたら結局皆殺しが最適解になってしまふのではないだろうか。後はプラントというハードウェアの損失を我慢するかどうか……。

ジブリールは熟慮して、プランに賛成する。同時に、プラント以外のコーディネーターはむしろ積極的に保護する事を提案する。

強硬派にも穏健派にも配慮したその意見は受け入れられ、ちよつぴりジブリールの発言力が高まつたりする。

セトナは悲しい顔をするだろうな。優しい娘だから。

ジブリールの胸が少し、痛んだ。

第10話「超種運命の大戦<10>

「ジュール隊のボルテールとルソーがメテオブレイカーを持って既に先行しています」

タリアがデュランダルに報告する。

メテオブレイカー　その名の通り、小惑星などを破砕する装置である。

「ああ、こちらも急ごう」

「地球軍側には何か動きはないのですか？」

アーサーが尋ねる。

「何をしているのか、まだ何も連絡は受けていないが……。だが月からでは艦を出しても間に合わないな。後は地表からミサイルで撃破を狙うしかないだろうな。だがそれでは表面を焼くばかりでさしたる成果は上げられまい。ともあれ、地球は我等にとっても母なる大地だ。その未曾有の危機に我々も出来るだけの事をせねばならん。この艦の装備ではできることもそう多くはないかもしれないが、全力で事態に当たってくれ」

「はっ！」

デュランダルの訓示にミネルバブリッジ一同は答える。

ナスカ級『ボルテール』　前大戦で活躍したイザーク・ジュール率いるジュール隊の旗艦である。

「こうして改めて見ると、デカイな」

実質ジュール隊副官のディアッカ・エルスマンがつぶやく。彼も前大戦で活躍したエースだ。

「当たり前だ。住んでるんだぞ俺達は、同じような場所に」

イザークが答える。口調が親しげである。そう。彼らは士官学校の

同期で前大戦時は同じクルーゼ隊に所属していた仲なのである。

「それを砕けて今回の仕事が、どんだけ大事か改めて解ったって話しだよ」

そう言うとディアツカは格納庫へと向かう。

「いいか、たつぷり時間があるわけじゃない。ミネルバも来る。手際よく動けよ」

「了解！」

ディアツカはドア越しにイザークに色気のある敬礼をしてみせた。

アレックスはやるせない気持ちを抱えていた。
何かをしたかった。

カガリが、ユウナに付いているのも気に入らない。しかし。

自分では、あんな風にカガリのために反論してやれなかっただろう。
自分は元ザフトだしそれに

「あ」

栗色の髪をした少女と、すれ違った。

「ああ、確か、マユ、だったな」

「覚えてもらって光栄です！ あー、大丈夫ですか？ 補佐官さん」

「ああ。大丈夫だろう」

「えへへ。まいっちゃんしましたよ。自分じゃ、いいところ突いた嫌味だっと思ってたんですけどね。立て板に水で怒涛のように反論されちゃうんですから」

「ははは。彼は、それが仕事だからね。あの調子で政治家や官僚連中と遣りあうんだ」

「アスランさんは、どちらに？」

「ああ、ブリッジに、ちよっとね。じゃ、また！」

レイがパイロット待機室に入ると先客がいた。ルナマリアだ。ルナマリアは何かを考えるかのように、眼下のモバイルスーツ格納庫を見下ろしていた。

レイが入ってきた事に気づくと、何かを気にしているかのようにちらちらと見る。

「なんだ？」

レイはルナマリアに尋ねた。

「……ううん、別に」

「気にするな、俺は気にしてない」

「え？」

「お前の言った事も正しい」

その言葉を聞くと、ルナマリアは微かに微笑んだ。

「ユニウス7まで1200」

「光学映像出ます」

「ボルテールとの回線開ける？」

タリアがシンに尋ねる。

「いえ、通常回線はまだ」

その時、アレックスがブリッジに入ってきた。

「どうしたのかねアスラン、いや、アレックス君か」

デュランダルが尋ねる。

「無理を承知でお願い致します。私にもモバイルスーツをお貸し下さい」

「確かに無理な話ね」

タリアは即座に断った。

「今は他国の民間人である貴方に、そんな許可が出せると思って？ カナーバ前議長のせつかくの計らいを無駄にでもしたいの？」

「解っています。でも、この状況をただ見ている事など出来ません。」

使える機体があるならどうか」

アレックスは頭を下げる。

「気持ち解るけど……」

「いいだろう。私が許可しよう。議長権限の特例として」

「議長！ ですが議長……」

「戦闘ではないんだ、艦長。出せる機体は一機でも多い方がいい。腕が確かなのは君だって知っているだろう？」

その頃メテオブレイカーを持って出撃したディアツカ達は、ユニウス7に到着。次々にメテオブレイカーを設置していく。

！

突然、メテオブレイカーを持ったザクが爆発する！

ユニウス7の岩陰から、ビームが次々に撃たれ、被害が続出する！

「なにッ！？ なんだ！ これは!？」

ディアツカはビームライフルで応戦を始める。

「ジンだと!? どういうことだ！ どこの機体だ!？」

イザークの驚きの声上がる。

メテオブレイカーの設置作業はボルテールでも観察されていた。

「アンノウンです！ E F F 応答なし」

「なあに……?」

イザークの胸を不吉な予感が過ぎる。

「ジョン、なんとも情けないな。ここまで来て何もできんとは」

ナイトハルト・ミラー少尉はジョン・ディカー少尉に言った。

「しょうがないさ、ナイトハルト。月から来るとしても、間に合わ

ん。何もできん」

「そうは言っても、ユニウス7が落ちるのを見ているだけと言つのは辛い……」

「ここにザフトのモビルスーツが戦闘中とはどういう事ですかね」
リーはネオに話しかける。

「ガーター・ルーである。ジブリールの命を受け、ユニウス7を観察できる位置まで急行して来たのだ。」

「さあて。もしかしたらこの騒動は、気紛れな神の手に因るものではないのかもしれないな」

「……んむ」

「スウエン達を出せ。状況を見たい。記録も録れるだけ録っておけよ」

『モビルスーツ発進3分前。各パイロットは搭乗機にて待機せよ。
繰り返す、発進3分前。各パイロットは搭乗機にて待機せよ』

「粉碎作業の支援で言ったら何をすればいいのよ？」

シンのアナウンスを聞きながら、マユはメカニックのヨウランに尋ねる。

「それは……」

「ん？」

その時、マユの視界をアレックスが横切る。

「あいつも出るんだってさ。作業支援なら一機でも多い方がいいって」

「へえ、あの人と！ そりゃ、楽しみね！」

「モビルスーツ発進1分前」
「到着後はジュール隊長の指示に従うよう言っただい」
「タリアは指示を出す。その時、オペレーターノバートが緊張した声を上げる。」
「ユニウス7で戦闘と思しき熱分布を検知。モビルスーツです！」
「発進停止。状況変化。ユニウス7にてジュール隊がアンノウンと交戦中」
「……！」
出撃準備中だったパイロット達は一斉にアナウンスに耳を澄ます。
「各機、対モビルスーツ戦闘用に装備を変更して下さい」
「更にボギーワン確認。グリーン25デルタ！」
「え……」
思いもよらない事にタリアは一瞬呆ける。
「あれが!？」
パイロット一同 ……!
「どういう事だ!」
アレックスがシンに尋ねる。
「分かりません。しかし本艦の任務はジュール隊の支援であることに変わりなし。換装終了次第各機発進願います」
シンも困った様子で答える。
「状況が変わりましたね。戦闘ですよ？」
マユはアレックスに通信を繋ぐ。
「……」
「お止めになりますか？」
「馬鹿を言うな。なおさら出なきゃならんだろう!」
「心強いです! じゃ、よろしくお願いします!」
「ルナマリア・ホーク、セイバー、出るわよ!」
「レイ・ザ・バレル、ザク、発進する!」
「マユ・アスカ、ザク、行きます!」
ミネルバ隊のモビルスーツが次々に発進していく。そして。

「針路クリアー、発進どうぞ」

「アスラン・ザラ、出る！」

アスランは発進した。再び戦いに向かって！

ユニウス7　　そこでは謎の集団との戦いが続いていた。

「あ、あっー！」

「隊長おーっ！」

メテオブレイカーを操作するモビルスーツに、被弾が相次ぐ。

「ええい！　下がれ！　ひとまず下がるんだ！」

ディアツカは部下達に指示する。

「ゲイツのライフルを射出する！　ディアツカ、メテオブレイカーを守れ！　俺も直ぐに出る！」

ポルテールで指揮を取っていたイザークは、そう伝えると格納庫へと向かった。

「ジンを使っているのかその一群は？」

デュランダルは軽く驚いて見せた。

「ええ。ハイマニューバ2型のようです。付近に母艦は？」

タリアが尋ねる。

「見当たりません」

「けど何故こんな……ユニウス7の軌道をずらしたのはこいつらって事ですか？」

その時ブリッジに入ってきたカガリとユウナは、その言葉にぎょっとする。

「一体どこの馬鹿が？」

「でもそういうことなら、尚更これを地球へ落とさせるわけにはい

かないわ。レイ達にもそう伝えてちょうだい」

「はい」

「ああ、姫」

デュランダルが、初めて気づいたように、言った。

「ああ、どうも。アレックスの姿が見えないもので、もしやここか
と思ひまして」

ユウナが答える。

「おや？ ご存知なかったのですか？」

「え？」

「彼は自分も作業を手伝いたいと言ってきて、今はあそこですよ
デュランダルは、スクリーンのユニウス7を指し示す。

「ええ…………？」

「…………よろしかったのですか？ その、色々」と

絶句したカガリに代わってユウナが答える。

「ええ。議長権限で許可しました」

「そうですか。いや、彼ならきつとお役に立つでしょう」

「くっ…………」

イザークは呻く。

「うわああー！」

「また一機……………どういうやつらだよ一体！ ジンで……………
ディアツカはばやいた。」

旧式機のはずのジン。それで、こつまでやられている。

「工作隊は破碎作業を進めろ！ これでは奴等の思う壺だぞ！」
イザークが指示を飛ばす。

警告音が鳴る。

「またか！」

モニターは新たなアンノウンの接近を告げていた。

「冗談じゃないぞ！　こんな所で戦闘なんて！」
シャムスが目の前で繰り広げられている戦闘に驚く。

「ああ、ユニウス7が動き出したのはこいつらのせいだったのかい！？」

「俺達の任務は、状況の確認と記録だ。遠くから観察すればいい」
スウエンが冷静に指示する。

「そう言ったって！　地球にあれを落とされようとしてるのにほっとけないよ！」

「ミューデーは、スラスターを増速させる。」

「私も行くぞ！」

「ミラーも後を追う。」

「ちっ」

スウエンも舌打ちすると後を追う。

「いいか、戦闘が行われてるって事は、ユニウス7を落とそうとしてる奴、防ごうとしてる奴がいるって事だ！　迂闊に攻撃するな！」

「どう区別したらいいのよ！？」

「ドリルの様な物が入っている機材が確認できるな？　おそらくメテオブレイカーだ。それを操作してる奴を、守れ！　但し攻撃されたら撃つてもいい！」

第11話「超種運命の大戦<11>

「こいつを守ればいいのね！」

ミューデーは眼下にメテオブレイカーを捉える。

ちよど作業をしてるモバイルスーツに刀を構えて突進していくジンが見える。

「あいつ……！　もしかして守ってる方だったらごめんねえ。あはは！」

「うわー！」

メテオブレイカーの作業をしていたザクに、ジンが斬りかかる。

死の覚悟をしたザクのパイロットは目を瞑った。

……。何も、起こらない？

目を開けると、襲ってきたジンが見知らぬモバイルスーツに切り裂かれていた。

「た、助かった？　どこの機体だ？　ザフトじゃないぞ？」

「無駄口叩くな！　守ってくれるなら味方だろう！　作業を進めろ！」

「ルナ！　あいつら！　昨日の！」

スウェン達を確認したマユは叫ぶ。

「あいつら、今日こそ！」

「落ち着け！　目的は戦闘じゃないぞ！」

アスランが冷静に指摘する。

「でも……！！……！？……メテオブレイカーを……守ってる？　あいつら？」

「昨日戦ったとしても、今はとりあえず味方らしい！　いいな！」

攻撃されるまで攻撃するなよ！」
「わかってます！」

「ユニウス7、更に降下角プラス1.5、加速4%」

「ボギーワンに搭載されていたモビルスーツらしき物を3機確認しました！」

「ええ？」

「これでは破碎作業など出来ません！ 艦長！ 本艦もボギーワンを！」

「落ち着きなさい、アーサー。そのモビルスーツの行動はどうか？」

「……メテオブレイカーを守っている模様。ルナマリア達とは交戦状態に入りません」

「そう……。議長、現時点でボギーワンをどう判断されますか？」

「ん？」

「海賊と？ それとも地球軍と？」

「ん……。難しいな。私は地球軍とはしたくなかったのだが」

「どんな火種になるか解りませんものね」

「この場合は、このままあやふやな存在にしておくのがいいかも知れんな。ボギーワンとコンタクトは取れるか？」

「国際救難チャンネルを使えば」

「ならばそれで呼びかけてくれ。我々はユニウス7落下阻止のための破碎作業を行っているのだと。無駄な戦闘が起こるのは、避けたい」

「私はこれから皆様に重大な事実をお伝えせねばなりません」
その頃、世界中で各国政府が国民に向けてユニウス7の落下してくる事を伝えていた。

そしてオーブでも……。

『既に噂されているとおり、ユニウス7がその軌道を外れ現在地球へ向けて接近中です。我がオーブ政府も直ちに各国政府と連携を取りあい対策を協議して参りましたが、時間も乏しく誠に遺憾ながら未だ有効な対応策を見出せないままです……』

「キラ……」

オーブのアカツキ島の建物で、薄赤い髪の女性が、椅子に座っている男性に声をかけた。

建物の中からはユニウス7落下を伝える緊急会見の様子が流されている。

「そろそろ中に入りませんと身体に毒ですわ」

キラと呼ばれた男性は、身じろぎもしなかった。

「……夕日が……」

「え？」

「夕日が綺麗なんだ……フレイにも、見せたいなあ……今どこにいるのかな？」

「ええ。ええ、そうね。でも、今は中に入りましょう」

悲しそうに女性が手を握り、引つ張ると、男性は抵抗無く立ち上がり、そのまま素直に中へと連れられていった。

彼らはプラントの歌姫と呼ばれたラクス・クラインと前大戦を終結させた英雄と言われたキラ・ヤマト。

2機のジンがミラーのダガーLに斬りかかる。

「くっ」

ミラーは防御に徹し避け続ける。手強いと見てかゲイツが一機やっってくる。

ゲイツから放たれるビームライフルをも、ミラーはシールドを使い防ぎ、決定的なダメージは受けない。だが……もう一機ジンが来た時、さすがにミラーは叫ぶ。

「もう限界だー！ 救援を！」

「よく保った！ 鉄壁ミラーの名は伊達じゃないわね」

ミューデーが飛んできて。ステイレット投擲噴進対装甲貫入弾を3基一度に引き抜き投げつける！

スウェンも来援し、ゲイツに当たる。両手に持ったビームライフルショーティーを連射し、ゲイツを防戦一方に追い込んでいく。

「お待たせ！」

ジヨンが黒い実体剣を抜きジンと戦い始める。

また一つ、メテオブレイカーが地中へと掘り進み始める。

「強いな、あいつら」

「ああ、何もんだ？」

「急げ！ モタモタしていると割れても間に合わんぞ！」

「固定よし！」

「よし！」

メテオブレイカーが、ドリルを使って地中奥深くまで貫入し、爆発する。

いくつもの爆発が地中で起こり、ユニウス7が、大きく二つに割れる。

「グウレイト！！ やったぜ！」

その様子を見たディアツカは歓声を上げた。

「だがまだまだだ！ もつと細かく碎かないと！」
アスランは叫ぶ。

隕石の直径が直径100m以下にならないと、地球上では何らかの

被害が出る、と何かで読んだ気がする。

「アスラン!?」

ディアツカが驚きの声を上げる。

「貴様あ！ こんなところで何をやっている!」

イザークも叫ぶ。

「そんな事はどうでもいい！ 今は作業を急ぐんだ!」

「あ、ああ!」

「わかつている!」

「相変わらずだなイザーク」

懐かしそうにアスランはイザークに声をかける。実は、アスランはイザーク、ディアツカと士官学校の同期であった。前大戦時、イルゼ隊にも同時に配属されている。

「貴様もだ!」

「……やれやれ」

ディアツカも懐かしそうにぼやいた。

「シヤムス、ミューディー、ミラー、デイカー。撤退信号だ」

戦場に、撤退信号が上がった。

「ええ？ もう？ たった二つに割れただけだよ？ もっと碎かなきゃ!」

「ミューディー。限界高度だ。これ以上は、俺達も一緒に落ちてしまっ」

「そっか……」

……

スウエン達はガーティー・ルーへと帰還の道を辿る。

「……なあ、スウエン」

「なんだ?」

「俺達、出来るだけの事はやったんだよな?」

シャムスがどこか沈みがちな声で言った。

「やっぱり貴様は友達だよ」

スウェンは珍しい事に喉をひくつかせ始めた。マイクの奥でくぐもった笑い声が響く。

それは、シャムス、ミューディー、ミラー、ジョンにも伝染した。

5人はガーティ・ルーに戻るまで笑い続けた。

オペレーターが何事かと尋ねてきたが、彼らはまだ笑っていた。

彼らの笑いを理解できる者はひどく限られているのだった。それが証拠に、自分でもエグザスを飛ばすネオ・ロアノークは何も言って来ない。

格納庫に収容された時もまだ、彼らは笑い続けていた……。

「ボーギーワンの不明モビルスーツ撤退しました」

「とりあえずこの場合はボーギーワンと事を起こさずに終わったか……。撤退か、どう言う事かな、これは」

デュランダルがタリアに尋ねる。

「もしかしたら、高度の問題かもしれません」

「高度？」

「そうです。ユニウス7共にこのまま降下していけば、やがて艦も地球の引力から逃れられなくなります。我々も命を選ばねばなりません。助けられる者と、助けられない者」

「そうか……」

「こんな状況下に申し訳ありませんが、議長方はポルテールにお移りいただけますか？」

「え？」

「ミネルバはこれより大気圏に突入し、限界までの艦主砲による対象の破碎を行いたいと思います」

「ええッ！ か、艦長……それは……」

アーサーが驚く。

「どこまで出来るかは分かりませんが。でも出来るだけの力を持っているのに、やらずに見ているだけなど後味悪いですわ」

「タリアしかし……」

「私はこれでも運の強い女です。お任せ下さい」

「わかった。すまないタリア。ありがとう」

「いえ。議長もお急ぎ下さい。ボルテールにデュランダル議長の乗を傳達。モバイルスーツに帰還信号」

「では代表達も」

デュランダルは立ち上がるとカガリに手を差し伸べる。

「私はここに残る」

カガリは拒絶した。

「「え？」」

「アスランはまだ戻らない！」

カガリは悲鳴のような声を上げた。

「それに、ミネルバがそこまでしてくれらるというのなら、私も一緒に！」

「しかし、為政者の方にはまだ他にお仕事が……」

タリアが困ったような声で言う。

「代表がそうお望みでしたらお止めはしませんよ」

「はあ……」

「ユウナ、お前だけでも移れ」

カガリはユウナに言った。

「馬鹿にするな。一緒に死ぬ位の事はできる」

ユウナは言下に拒否した。そして冗談めかして言った。

「安心して下さい、艦長。僕達がいなくなった所でオーブは潰れる様な国じゃありません」

「ちっ！ 限界高度か！」

「ミネルバが艦主砲を撃ちながら、共に降下する!？」
モニターに入ってきた情報にイザークが驚きの声を上げる。

『総員に告ぐ。本艦はモビルスーツ収容後、大気圏に突入しつつ艦主砲による破片破碎作業を行う』

「え?」

思わぬ事に帰還してきたマユは驚く。

『各員マニュアルを参照。迅速なる行動を期待する』

「ん?」

ルナマリアが帰還しようとした時、支えを失ったメテオブレイカーの骨組みの代わりにそれを支えるアスランのザクの姿が目に入った。

「く……」

「何をやってるんです! 帰還命令が出たでしょう。通信も入ったはずよ!」

「ああ、わかつてる。君は早く戻れ」

「一緒に吹っ飛ばされますよ? いいんですか?」

「ミネルバの艦主砲と言っても外からの攻撃では確実とは言えない。これだけでも……」

「……」

「お前は早く戻れ」

「……貴方みたいな人がなんでオーブになんか……」
「ん?」

その時、ジンがアスランに襲い掛かって来た!

『うおおお!』

『これ以上はやらせん! やらせはせんぞお!』

「こいつらまだ!」

「ええい! ああ!」

『我が娘のこの墓標、落として焼かねば世界は変わらぬ!』

「娘……?」

思わぬ言葉にアスラン達は驚く。

「なにを!」

『此処で無惨に散った命の嘆き忘れ、討った者等と何故偽りの世界で笑うか! 貴様等は!』

「……………」

『軟弱なクラインの後継者どもに騙されて、ザフトは変わってしまった! 何故気付かぬかっ!』

「く……………」

『我等コーディネーターにとってパトリック・ザラの執った道こそが唯一正しきものと!』

「はあ?」

思わぬ所で父の名前を聞き、アスランは一瞬呆ける。

「く……………」

その隙を突かれ、アスランのザクは右腕を斬られる。

「アスラン!」

ルナマリアは救援に向かう。だが、一機の片手のジンが立ちふさがる。

「邪魔よ!」

ルナマリアはジンの残った腕も斬りおとす。だが、ジンのパイロットはルナマリアが思ってもいなかった行動に出た。

『たあぁー!』

ジンのパイロットは残った両足で、セイバーに組み付くと自爆した!

「きゃあぁあ!」

衝撃で、ルナマリアの頭が揺さぶられる。

「降下シークエンス、フェイズ2」

「セイバーと彼のザクは？」

「駄目です！ 位置特定できません！」

「アスラン！」

ユニウス7は、大気の圧縮熱で表面が赤熱し始める
！

第12話「超種運命の大戦<12>

『我等のこの想い、今度こそナチュラル共にい！』
「くっ！」

たった一機残ったテロリストのジン。それが、道連れに思ったのかアスランのザクの足を掴む。

「アスランさん！」

一瞬の意識の喪失から回復したルナマリアが、掴まれているザクの足を切り、二機を斬り離し、テロリストの機体を蹴飛ばす。

『うわあ！』

テロリストの機体はユニウスセブンに落下していった。

ルナマリアはアスランのザくを抱え込むと、ミネルバを目指す！

「モビルスーツ全機、帰艦しました」

「そうか。よし」

「大丈夫ですかね？ あの笑いは……宇宙病なんかでは……」

「心配ないよ」

ネオはリーに言った。

「パイロットに特有の、癖みたいなものさ」

「さあ、みんないらっしやい。わたくしに付いてきて下さいね」

オーブ、アカツキ島にある孤児院で、ラクスは子供達に言った。

「なあに？」

「どこ行くの？」

「あーわかった！ おつかい？ また遊びたいよお」

「キラ？」

いつもキラがいるテラスを見たが、いない。辺りを見回してみると、砂浜にキラは佇んでいた。

「キラ。中へ行きましょう。」

「……」

「キラ？」

「流れ星が、きれいだ。大きいのが、ぱあーって」

「そうね。でも、今は中へ行きましょう」

ラクスはキラの手を取る。キラはおとなしく付いて行った。

「間もなくフェイズ3」

「砲を撃つにも限界です！ 艦長！」

「アーサーが叫ぶ！」

「しかし、セイバーとザクの位置が！ 特定出来ねば巻き込み兼ねません！」

「待つて、待つてください。今、ザクとセイバー、上部右デッキに着艦！」

「アスラン……！！」

カガリは嬉しそうに叫んだ。

「タンホイザー起動！」

その報告を聞いて、タリアは命令する。

「照準、右舷前方構造体！」

「タンホイザー照準。右舷前方構造体」

「てえッ！！ 再チャージ急げ！」

ミネルバのタンホイザー 陽電子砲により、細かい破片が、散る。だが、アスランの危惧した通り、表面での爆発ではさほど破壊でき

たようには見えない

表面が抉れた、その箇所に向かってミネルバはもう一度タンホイザ
ーを発射する。

「てえ！」

深く抉られた箇所が耐えられなくなったのか、巨大というしかない
岩塊はいくつかの岩塊に割れる。

歓声上がる。

「フェイズ3、突入しました！」

「うっうっ……」

モニターが消える。

ミネルバ乗員は大気圏突入のじりじりした時間を、耐える。

『繰り返してお伝えします。ユニウス7の破碎は成功しましたが、そ
の破片の落下による被害の脅威は未だ残っています……』

『破片の落下地点は残念ながら未だ特定できません。今すぐ政府指
定のシエルターに避難して下さい』

テレビは相変わらず緊急放送を続けていた。

『現在赤道を中止とした地域が最も危険と予測されています。沿岸
部にお住まいの方は海から出来る限り離れ高台へ避難して下さい』

アカツキ島のマルキオの孤児院の皆も、孤児院に併設されている「
星の知慧派」の教会地下のシエルターに避難していた。

「何が来るの？ ねえ何が来るの？」

「ずっとここにいなきゃいけないのかよお？」

「大丈夫ですわ。いいえ、少しの間です。直ぐに行ってしまいます
からね」

ラクスは皆を安心させるように言う。
キラは、どこか茫洋とした目で座っていた。 が、ふいに立ち上がる。

「フレイは!?! フレイがいない!」

「大丈夫ですわ。フレイさんは別のシェルターに避難してますわ」
ラクスが優しくキラを抱きとめる。

「さあ、座ってくださいな」
キラはおとなしく、座った。

!

衝撃が来た。

「うっ……」

「なにい?」

「うっ……」

「大丈夫ですわ」

怖がる子供達をラクスが宥める。

「うっ……」

「大丈夫ですから」

「うっ……」

「こんーなにーつめーたいー、とばーりのー……」

ラクスが小さな声で歌を歌い始めた。

子供達は、泣き止み、歌うラクスを見つめる。

「ああ、これはまるで……」

「すごい、ね」

ミューディーはガーティ・ルーの窓から見える地上の風景に心を捕らわれているようだだった。

赤熱する破片が長い尾を引いて、またそれが分裂して、地上に降り注ぐ。

それは花火にも似て。だが、その下では何万もの人々が……何億だろうか？ 死んでいるのだった。

ジブリールは、地下のシェルター、モニターの並んだ部屋で、猫のフェリックスを撫でている。

全てのモニターが、緊急放送を、ユニウス7の落下の状況を、伝えている。

突然、ひとつのモニターが、砂嵐になる。その数は、増えていく。

「お兄様、あれは……」

セトナはジブリールに尋ねる。

「ん……。カメラか、放送施設が被害を受けたのだろう」

「悲しいですわ。悲しい……」

セトナは猫のブーツニアスをぎゅっと抱きしめた。

「艦長！ 空力制御が可能になりました」

「主翼展開！ 操艦慌てるな」

「主翼展開します。大気圏内推力へ」

「ふう、これで一安心ね。セイバーとザクを収容して頂戴」

「はっ」

「ルナマリア、助かった。ありがとう」

「いえ、どういたしまして！」

格納庫に収容された、ルナマリアとアスランは、どちらからともなく、微笑んだ。

「アスラン！」

その時、カガリが走ってきた。

「あ！」

押しのけられたルナマリアは、ちょっと顔をしかめる。

！

ドーン！ と言う衝撃音が響いた。

「ん？」

「なに？ まだ何か！？」

「地球を一周してきた最初の落下の衝撃波だ。おそらくな」
レイは、冷静に解説した。

「迎え角良好。フラットダウン。推定海面風速入力。着水チェック
リスト1番から24番までグリーン。グランドエフェクトがシミュ
レーション値を超えています」

「カバーして。警報。総員着水の衝撃に備えよ」

大気圏突入に成功したミネルバは、太平洋に着水する。

着水の衝撃がミネルバを揺さぶる。

「コウツ！」

「着水完了。警報を解除。現在全区画浸水は認められないが今後も
警戒を要する。ダメージコントロール要員は下部区画へ」

「ふう」

シンは、安堵の溜息をついた。

「けど地球か」

ヨウランは、感慨深げに言う。

手すきの者は、物珍しげにデッキに出て海を眺めている。

「太平洋って海に降りたんだろ？ 俺達。うっはは、でけー」

ヨウランと同じくメカニツクのヴィーノ・デュプレがはしゃいだ声

を出す。

「そんな呑気なこと言ってられる場合かよ。どうしてそうなんだ、お前は」

ヨウランが突っ込む。

「でも、すごいな。これが全部海なんて……」
シンはつぶやく。

「だよなー！」

カガリとアスランもデッキに出ていた。ユウナは船酔いとかで部屋に籠っている。

久しぶりに二人だ。

「大丈夫か？ アスラン」

「ああ、大丈夫だ」

「けどほんと驚いた。心配したぞ。モバイルスーツで出るなんて聞いてなかったから」

「すまなかった、勝手に」

「いや、そんなことはいいんだ。お前の腕は知ってるし。私はむしろ、お前が出てくれて良かったと思ってる」

アスランは首を傾げる。

「ほんとにとんでもないことになったが、ミネルバやイザーク達のおかげで被害の規模は格段に小さくなった」

ルナマリアが二人の会話に気づいて、見つめる。

「そのことは地球の人達も……」

「やめなさいよ！ この馬鹿！」

我慢できなくなったように、ルナマリアが叫ぶ。

「あんただってブリッジに居たんじゃ！？」
「だったらこれがどう
いうことだったかわかってるはずでしょ！？」

「ええ……」

「ルナマリア」

アスランがルナマリアをたしなめるが、ルナマリアはカガリを糾弾するのをやめない。

「ユニウス7の落下は自然現象じゃなかった。犯人が居るのよ！落としたのはコーディネーターよ！」

「ああ……」

「あそこで家族を殺されてそのことをまだ恨んでる連中が、ナチユラルなんか滅びろって落としたのよ！？」

「ああ……。わ、わかってるそれは……でも！」

「でもなによ！」

「お前達はそれを必死に止めようとしてくれたじゃないか！」

「当たり前よ！」

「ええ？」

「だが……それでも破片は落ちた」

苦しげな声でアスランは言う。

「俺達は……止めきれなかった……」

「アスラン……」

「一部の者達のやったことだと言っても、俺達、コーディネーターのしたことに変わりない。許してくれるのかな……それでも……」

「う……」

アスランは、デッキから艦内へと入って行ってしまった。

「……自爆した奴等のリーダーが最期に言ったのよ」

ふいにルナマリアは言った。

「え？」

「私達コーディネーターにとって、パトリック・ザラの採った道こそが唯一正しいものだった！」

「……」

カガリは言葉を失う。

「あ！ アスラン……」

カガリはアスランの後を追おうとする。

「あんたってほんと、何もわかってないわよね」

それを遮るように、ルナマリアは言う。

「……………」

カガリは俯く。

「あの人が可哀相よ」

カガリにそう言うルナマリアを、マユは複雑そうに見つめていた。

「くそっ」

パトリック・ザラの採った道、か……。

やりきれない気持ちを抱えてアスランは与えられた部屋に入った。

「うううう……………」

ベッドには、船酔いに苦しんでいるユウナがいた。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃないよ……………」

「ふう。オーブじゃ軍事教練で、海にも出たんでしょう？ その時はどうしてたんです？」

「そりゃあ………… 酔い止めいっぱい持って行ったださ。今回はこんな事になるとは思わなかったから…………。ああ、アレックス、よかつたらタオルを水に濡らして持って来てくれないか」

「はいはい」

まったく、一人で苦悩に浸る事も出来やしなない。

アスランは苦笑した。

第13話「超種運命の大戦<13>

「やれやれ、やはりだいぶやられたな」

ジブリール邸のシエルターのモニターの並ぶ部屋。

この間、アズラエル邸で顔を合わせたロゴスの面々の顔が映る。いわゆるテレビ会議と言う奴である。

「パルテノンが吹っ飛んでしまったわ」

「あんな古くさい建物、なくなったところで何も変わりはありませんよ」

「バチカンは、なぜ無事だったのだ？ 大きな破片が直撃のはずが

……」

「暗黒の雷が地上から天空に放たれたと言っぞ」

「老魔法王の魔力か……」

「恐るべしヨーゼフ・ラッツィンガー」

「桑原桑原」

彼らは、この世に触れてはならない物事があるのを知っているのだ。

「で、どうするのだ、これから」

「デュランダルの動きは早いぞ。奴め、もう甘い言葉を吐きながら、なんだかんだと手を出してきておる」

「ジブリール、ファントムペインが面白い物を掴んだそうだな」

ブルーノ・アズラエルが言う。

「はい、皆さんのお手元にも、もう届くと思いますが。ファントムペインがたいそう面白いものを送ってきてくれました」

「ん？」

「これは？」

「おいおいなんだ？」

ロゴスの面々に送られた動画には、ユニウス7で行われた戦闘の記録が映されていた。

「フレアモーター？」

「やれやれ結局そう言う事か」

「思いもかけぬ最高のカードだな。これは。これを許せる人間などこの世の何処にも居はしない。そしてそれは、この上なく強き我等の絆となるだろう。今度こそ奴等の全てに死を。青き清浄なる世界の為に！」

ブルーノ・アズラエルは嬉しそうに言った。

「やはり駄目です。粉塵濃度が高すぎて今はレーザー通信も」

「そうか、すまない」

カガリはオーブ本土と連絡を取ろうとしていた。

「いえ」

「艦のチエックと各部の応急処置が済み次第オーブへは向かわせて頂きますわ」

タリアは言った。

「ああ、解っている。今更こんな所から話しをしたって、もうあまり意味はない事もわかってはいるんだがな」

「島国ですものね、オーブは。御心配も当然ですわ」

「到着したら、その勇気と功績に感謝してミネルバには出来るだけの便宜を図るつもりでいたが、これでは軽く約束も出来ないな。許してくれ艦長」

「いえ、そのような事は」

「ん？」

アスランがデッキのそばを通りがかると、外で何人が射撃の訓練をしていた。

「っあー……」

マユとか言ったか。集弾がばらけるので残念そうな顔をする。

「ん？ あら！」

マユが、アスランに気づいた。

「訓練規定か」

「ええ、どうせなら外の方が気持ちいいって。でも調子悪いんですよ」

「ん……………」

「あ、一緒にやります？」

「え……………いや俺は……………」

「ん……………。ほんと私達みんな、貴方の事よく知ってるわ」

マユは突然アスランの話題を振る。

「え？」

「元ザフトレッド、クルーゼ隊。戦争中盤では最強と言われたストライクを討ち、その後、国防委員会直属特務隊フェイス所属。ZGMF-X09A、ジャスティスのパイロットの、アスラン・ザラでしょ？」

「……………」

アスランはちよつと面映い表情をする。

「お父上のことは知りませんが、その人は私達の間じゃ英雄だわ。ヤキン・ドゥーエ戦でのことも含めてね」

「ええ……………ああいやあ……………」

「射撃の腕もかなりものと聞いてますけど？」

そう言うと、マユはアスランに銃を差し出した。

「お手本！ 実は私あんまり上手くないんです」

「ふふ」

アスランは銃を受け取る。そして射撃訓練装置のモードを調節し、標的が次々に出てくるモードにする。

訓練がスタートする。次々に出てくる標的を、アスランは、撃つ。撃つ。

全て、急所近くに当たっている。

周囲で見ている皆が、溜息をもらす。

「ああ……………」

「うわー、同じ銃撃ってるのになんで!？」

「銃のせいじゃない。君はトリガーを引く瞬間に手首を捻る癖がある。だから着弾が散ってしまうんだ」

「そうなんだ。ありがとございます!」

「こんなことはかり得意でもどうしようもないけどな」

アスランは苦笑する。

「そんな事ありませんよ。敵から自分や仲間を守るためには必要です」

「……………。敵って……………誰だよ……………」

「あ……………」

いきなりの棘の入った言葉に、マユは言葉が出なくなる。

アスランは艦内に入ろうとする。そこにルナマリアが声をかける。

「ミネルバはオーブに向かうそうですね。貴方もまた戻るんですか？ オーブへ」

「ああ」

「なんでです?」

「……………」

「そこで何をしてるんです? 貴方は? 英雄とも呼ばれた貴方が、お姫様の護衛だなんて、似合いませんよ」

「……………」

アスランは無言で艦内へ入っていった。

「ルナ」

マユは、ルナマリアに声をかけた。

「なあに?」

「ルナ、アスランの事好きなの?」

「……………ば……………馬鹿言わないでよ!」

「そう? そうならいいけど……………。あたしの方が先に好きになったんだからね」

「だから私はなんでもないって!」

「じゃあ、応援してくれるよね？」
マユの目がきらりと光った。

キラは、目を覚ました。

どれくらいの間が経ったのだろうか。少し、眠ってしまったらしい。

窓の外を見ると、もうすっかり暗くなっている。水でも飲もうと階下を下りていくと、話し声が聞こえてきた。

キッチンの方だろうか。

「今まで、本当にありがとう……ラクスさん」

父が、自分の子供のような年齢の相手に、頭を下げた。キラはそんな父の姿を見るのは、初めてだった。

「あれも、感謝していると思います」

「……」

「しかしラクスさん」

「はい」

「私達は、もう疲れてしまった……」

「え……？」

「あれは、大切な物があると、それ以外を切り捨ててしまうような……そんな子でした。しかし、それもまた美徳ではないかと思っ

ていた……。だが……」

父は顔を上げた。

「しかし、これからはあなたの幸せを追ってください……」

「え？」

「縛られてはいけない。それでは、あれと同じです、ラクスさん」

「キラはいつか回復します！ もしかしたら……明日にでも」

「しかし、それは十年後かも知れない」

「……」

「だから……」

「……嫌です……私、嫌です！」

ラクスは烈しくかぶりを振る。

「私、キラの事……絶対に見捨てたく……絶対に……」

「ラクスさん、あなたは若いんだから、こんな風に時間を浪費してたら……」

それまで黙っていた母が、ためらいがちに声をかける。

「浪費だなんて……思ってません！」

「ありがとう……本当に……。しかし、キラはもう病院に引き取ってもらうことにしました」

「え……」

病院？

キラは不思議に思った。

僕はどこも悪くないのに。おかしな話だ。きつと勘違いだな。

「ですから……」

「そんな……」

訂正しないと。

キラはキッチンに足を踏み入れた。

「あのさ……僕、どこも悪くないけど……」

「キラ！」

三人の視線が俺に集まる。瞬間的に空気が変わる。ざらりとして、触れてはいけない空気に触れたような感覚。

「僕、病気なんかしてないから」

「あ、ああ……そうだな……」

「だから、病院に入る必要なんてない」

「わかった……わかったから、もう部屋に戻りなさい」

「おやすみ」

キラは、そのいたたまれない空気から逃げるように部屋に戻った……。

「面舵2度、減速更に20%」

アーサーが、オノゴロ島の港に入るための躁艦指揮を執る。

そう。ミネルバはとうとうオーブに着いたのだった。

「アイ。面舵2度、減速更に20%」

『オノゴロ、オートコントロール1より全ステーションに伝達。ズールアルファ、アライバルを確認。以後ズールアルファは誘導チャネル、イオタブラボーにてナブコムとリンクする。入港シーケンス、ゴー』

「ザフトの最新鋭艦ミネルバか。姫もまた面倒なもので帰国される」
オーブ連合首長国宰相ウナト・エマ・セイランが誰ともなしにつぶやく。

「仕方ありませんよ宰相。代表だつてよもやこんなことになるとは思つてもいなかつたでしょうし、国家元首を送り届けてくれた艦を冷たくあしらうわけにもいきません。今は」

五大氏族マシマ家の族長、タツキ・マシマが答える。

「ああ、今はな」

「あ、ウナト・エマ」

出迎えの人々の中にウナト宰相を見つけると、カガリは声をかけた。

「お帰りなさいませ代表。ようやく無事なお姿を拝見する事ができ、我等も安堵致しました」

「大事の時に不在ですまなかつた。留守の間の采配、有り難く思う。被害の状況などどうなっているか？」

「沿岸部などはだいぶ高波にやられました。幸いオーブに直撃はな
く。……詳しくは後ほど行政府にて」

「ザフト軍ミネルバ艦長、タリア・グラデイスであります」

「同じく副長のアーサー・トラインであります」

タリアとアーサーがウナトに敬礼する。

「オーブ連合首長国宰相、ウナト・エマ・セイランだ。この度は代表の帰国に尽力いただき感謝する」

「いえ、我々こそ不測の事態とはいえアス八代表にまで多大なご迷惑をおかけし、大変遺憾に思っております。また、この度の災害につきましても、お見舞い申し上げます」

「お心遣い痛み入る。ともあれ、まずはゆっくりと休まれよ。事情は承知しておる。クルーの方々もさぞお疲れであろう」

「ありがとうございます」

「では、代表。まずは行政府の方へ。ご帰国そうそう申し訳ありませんがご報告せねばならぬ事も多々ございますので」

「ああ、解っている」

「ユウナ。お前も来い」

「了解しました。あー、君も本当にご苦労だったねえアレックス」

「いえ……」

「は……」

「じゃあ、カガリ。行こうか」

そう言つとユウナはカガリの背中に手をやる。

「あいや……あの……」

「はあ……」

アスランは溜息をついた。

「でも、ほんとのところはどつするつもりなのかしらね」

その様子を眺めている男女がいた。

「ん？」

「セイランは元々大西洋連邦よりだわ。カガリさんが戻ったところで今のこの情勢では……」

「だろうな。とにかく、とんでもないことになったもんだよ。まっ

たく……」

彼らは、先の大戦で活躍したアークエンジェル艦長、マリユー・ラミアスと、エターナル艦長、そして、「砂漠の虎」と呼ばれたアンドリュウ・バルトフェルド。

彼らは戦後、オーブに身を隠していた。

「なんだと！？ 大西洋連邦との新たな同盟条約の締結！？ 一体何を言ってるんだこんな時に！ 今は被災地への救援、救助こそが急務のはずだろ！」

行政府に戻った力ガリを、思わぬ案件が待っていた。

「こんな時だからこそですよ代表」

五大氏族長のタツキ・マシマは言った。

「うう……」

「それにこれは大西洋連邦とはありません。呼びかけは確かに大西洋連邦から行われておりますが、それは地球上のあらゆる国家に対してです」

「……」

「約定の中には無論、被災地への救助、救援も盛り込まれております。これはむしろそういった活動を効率よく行えるよう結ぼうという物です」

「いやしかし……！」

「はあ……。ずっとザフトの艦に乗って居られた代表には、今一つ御理解頂けてないのかもしれませんが」

「あ……」

「地球が被った被害はそれは酷い物です。そしてこれだ」

「ああ……」

モニターに映し出された物 それはユニウス7での戦闘。そしてフレアモニターだった。

「我等、つまり地球に住む者達は皆、既にこれを知っております」

「こんな……こんなものが一体何故……」

カガリはウナの方を見た。

ウナは、自分は知らないよ、と言うように肩をすくめて見せた。

「大西洋連邦から出た情報です。だが、プラントも既にこれは真実と大筋で認めている。代表も御存知だったようですね」

「う……だが……でもあれはほんの一部のテロリストの仕業でプラントは……。現に事態を知ったデュランダル議長やミネルバのクルーはその破砕作業に全力を挙げてくれたんだぞ！ だから、だからこそ地球は……！」

「それもわかつてはいます。だが実際に被災した何千万という人々にそれが言えますか？」

「うっ……」

「あなた方は酷い目に遭ったが地球は無事だったんだからそれで許せ、と」

「うう……」

「今これを見せられ、怒らぬ者などこの地上に居るはずもありません。幸いにしてオーブの被害は少ないが、だからこそ尚、我等はより慎重であらねばなんのです」

「……」

カガリは黙ってしまった。

「理念も大事ですが我等は今誰と痛みを分かち合わねばならぬ物なのか、代表にもその事を充分お考えただかねば。……ウナト宰相？ 先程から黙っておりますが、いかがなされた？」

ウナトは閣議の間、じっと黙って腕を組んで目を瞑っていた。

「……代表が戻られて時間も無い。考える時間が必要だろう。我々もまた、な。情報もまだまだ集めたい。話はまた、明日にしよう」
そのウナトの一言で、閣議はお開きとなった。

第14話「超種運命の大戦<14>

地球圏外縁L4

そこにDSSD 深宇宙探査開発機構 の補給コロニーがある。
今、そこに一隻の宇宙船が接続しようとしていた。

「マーズシップ0357『アキダリア』認識コード確認！ ドッキング許可のシグナル発信」

……

『ようこそマーシヤン（火星入）、地球へ。火星からの旅はどうだった？』

管制官が尋ねる。

マーシヤン 火星人とは、火星にコロニーを作り入植したフロンティアスピリット溢れる人々を指す言葉である。

火星は地球に年に一回使節団を送ってくる。そして希少な鉱物と引き換えに地球の珍しい食材 ウニ、カラスミ（ボラの卵巣の塩漬け）、このわたなまこの腸の塩辛）は元よりハチノコ、イナゴ、ザムシ等と言った物まで持ち帰るのだ。

今回の使節団はオーストレールコロニーの人々が当たっている。

「順調でしたよ。でなければ、ここには到着していない。でしょ？」

使節団の副官、ナーエ・ハーシエルが答える。

『ははは。そりゃそうだ』

「地球の様子はどうですか？」

『うーん、あんまりいい感じではないな。ユニウス7が落下してからこっち、荒れちまつてる。今すぐにも戦争になりそうな雰囲気だ』

「……愚かな！」

ナーエの後ろに座っている男が吐き捨てるように言う。

『……！？ なんだ？』

「いえ、大変ですね。世界は常に動いている、と言う事でしょうか」

？」

ナーエは取り繕うように言う。

『あんたらが来るのは一年に一回だもんな。最近じゃあ一年あれば戦争が終わるし、また始まるさ。ドッキング確認』

「積荷の転送リストを送ってもいいですか？」

『ああ。また地球のうまいもん持ってつてくれ！ じゃあな！』

管制官との交信が切れると、ナーエは後ろを振り向いた。

「……少し自重してください。アグニス。不信感を持たれたらどうしますか？」

ナーエの後ろにいるのはアグニス・ブラーエ。この使節団の団長である。

「また、戦争を始めようなど、愚かでないとしたらなんと言うのだ！」

「それをこれから調べる。それが私達の任務ではないのですか？」

「ああ。だが DSSDの連中が、さも自分達は戦争に無関係だと言う態度も気に食わん！ 俺達の世界で、他と無関係な所などないのだ！」

「アグニス。落ち着いてください。さあ、次の指示はなんですか？」

「惑星間航行ユニット及びコンテナ部切り離し！ アキダリア、メインユニットで地球へ向かう！」

「了解です。まずはどの勢力と接触しますか？」

「まずはプラントへ！」

「え？ 本当？」

ヴィーノは嬉しそうに聞く。

「いやあまだ分からないけどさ、修理で数日って事になるんなら案外出るんじゃないかって。上陸許可」

「出してあげるねって、タリアアさん言ってたよ」

シンが答える。

「うわぁ。この艦長の恋人！」

「恋人なんて……息子代わりに可愛がられてるだけだよ」

「でも、キスはしたんだろう？」

「ん？ ふふ」

シンは自慢げに微笑む。

「こいつうー！」

「ちょっとここまできつかったからなあ実際。なんか夢中で来ちゃったけどむっちゃくちゃだったもんなほんと。ああ！ ねえオーブつてさあ……」

その休憩室から聞こえる声に、廊下を歩いているマユは眉を顰める。マユは、弟と艦長の関係にいい感情を持っていなかった。

「あ、お姉ちゃん！」

「あ。……何よ？」

「お姉ちゃん、なんだか顔が怖い……。もし、上陸許可が出たら、一緒にどっか行かない？」

「いいわよ」

「ルナはどうするのかな」

「お墓参り、したいとかが行ってたけど。私の方で誘ってみるわ。……あんた達、ルナにオーブの名所とかおいしい物とか、浮かれ気分聞かないようにね」

「えー。なんで？」

「……いい思い出ばかりじゃないのよ。ルナにとっては……」

マユが部屋に入ると、ルナマリアがベッドに寝ていた。

「上陸……出来るのかな？」

「出来るらしいわよ。弟の艦長情報によると」

「ふーん。艦長もさあ、いいかげん、シヨタよね」

「やめてよ」

マユは服を脱ぎ捨ててる。

先程のシンの自慢げな顔が甦る。

「不潔よ……」

不快な感情を洗い流すかのようにシャワーを浴びた。

暇が出来たアスランは、高波で家が壊されたラクス達が引越したと言っ家を探しに車を出した。

「ん？ キラ？」

海岸の砂浜に、キラらしき人影を見つけた。子供に囲まれている。ラクスもいるらしい。

アスランは車を止め、降りていった。

「あはは。こっちこっち！ あ？」

「あーアスラン！」

「違うよアレックス！」

「アスランだよ！」

「アレックス！」

「どこ行ってたんだよねえ」

「どこ？」

「カガリは？」

「アスラン」

どこか、ぼんやりとした表情でキラはアスランに声をかけた。

「お帰りなさい。大変でしたわね」

ラクスも、アスランに声をかける。

「君達こそ。家流されてこっちに来てるって聞いて。大丈夫だったか？」

「そっお家なくなっちゃったの」

子供達が、アスランにまとわりつく。

「あああ……」

「あのね見てないけど高波つての来て、壊していつちゃったって！」
「ばらばらー」

「おもちゃもみんななくなっちゃった」

「新しいの出来るまでお引越しだつて」

「そうだよ、お引越すんの」

「あらあら。ちょっと待って下さいなみなさん。これではお話が出来ませんわ」

「そうだな、ちょっと待っていてくれ、みんな」

アスランはラクスをちよつと向こうまで連れ出すと、聞いた。

「キラは相変わらず？」

ラクスは悲しそうに頷いた。

「そうか……」

アスランはため息をついた。

「あいつは優しいからな。心が耐えられなかつたんだろつ」

「ええ」

「だけど、君は前に進まなけりゃいけない。捕らわれるな」

「……ふふ。キラのお父様とお母様にも同じ事言われましたわ」

「そうか……」

「もう少しだけ、時間を下さい」

「ああ」

「ありがとう」

そう言つと、ラクスはキラに向かって言つた。

「キラー！ 子供達を頼めます？ 私は少し先にアスランと帰りま

すわ」

「うん、いいよ。気をつけてね。……さあ、遊ぼうか」

そう言つてキラは笑顔を子供達に向ける。子供のよ様な純粋な笑顔だつた。

「あの落下の真相はもうみんな知ってるんだろ？」

アスランはラクスに聞いた。

「ええ」

「連中の一人が言ったよ」

「え？」

「撃たれた者達の嘆きを忘れて、何故撃った者達と偽りの世界で笑うんだお前は、って。」

「……戦ったのですか？」

アスラン ユニウス7の破碎作業に出たら、彼等が居たんだ。あの時、キラに聞いたんだ。やっぱりこのオーブで」

「ええ」

「俺達は本当は何とどう戦わなきゃならなかったんだ、って」

「ええ」

「そしたらキラが言ったんだ。それもみんなと一緒に探せばいい、って。……でも、やっぱりまだ、見つからない……」

ラクスが慰めるように肩に手を伸ばしてくる。
何をやってるんだろううな。

アスランは思った。

ラクスは、もう俺の婚約者じゃない。気持ちを吐き出すべき相手は、カガリだろうか。だが、カガリも……

やりきれない感情が募る。

俺はオーブに来て何がやりたかったんだ？ ボディーガード？ 馬鹿な！

「プラントへ戻るか……」

「え？」

「ああ、いや、なんでもない」
アイリーン・カナバが半ば厄介払いのように自分をオーブに来る事を認めたのは知っている。

あの女！

あの女がいなければ父も死なずに済んだかもしれない。いや……自分の手で父を殺さねばならなかったかも知れない。

だが……。
アスランの胸の中で父に対する愛憎が渦巻く。
誰が、厄介払いなんかされてやるものか！
アスランはプラントに戻る事を決心した。

キラは、子供達を連れて帰るとマルキオ導師にあずけて、自分の部屋へ帰る。

いつもなら、すぐに出迎えてくれるはずのラクスが現れない。

「ははは……ついに、見捨てられたかな」

でも、それがいいかもしれない。僕なんか……。

少し落ち込んだ気分で、自分の部屋のドアを開ける。

そこに……いた。

「フレイ……」

椅子に座って、向こうを向いている。

長い深い赤色の髪、ぴんと伸びた背筋……。

カーテン越しの淡い陽光が、傾いだ柱を何本も作る。

その光の柱を浴びるようにして、フレイは座っていた。

「フレイ……どうして……生きて……？」

微妙な均衡を保ってきた認識が、ぐちゃぐちゃに混乱していくのかわかる。

これは一体どういうことだろう？ フレイが、フレイがここにいるなんて。

だってフレイは……そうフレイは……。

「フレイ……僕は……。ずっと昔から好きで、守りたくて、大切に……傷つけてしまっ……。だから、だから……僕が言いたいのは……」

言葉に、ならない。

「わかってるわよ、キラ……」

窓を向いたまま、フレイは言う。

「大切に思ってくれてるって、知ってるから」

「ああ、フレイ……」

キラはふらふらと近寄る。背後から、そっと肩に手を触れる。

「……だから、もう終わりにしましょう、キラ」

フレイがゆっくりと立ちあがり、頭に手をかける。する……と髪が流れた。

へアピース？

下から、薄い赤色の本物の髪が現われる。

そして、ゆっくりと振り返ったその顔は。

「……ラクス……？」

「……」

神妙な顔で、じっと僕を見つめるラクス。

改めて見ると、どうして間違えたのかさえ疑問に思えてくる。

「フレイじゃ……なかったのか……」

「体格だって違うし、雰囲気だって違うだろうし……ただ、かつらをかぶっただけ。それだけですわ、私がした事って」

「どうして、そんな事を……」

「そのくらい、キラの目は曇ってたって事ですわ」

「……」

意識が、また暗く深い場所に沈んでいきそうだった。

一歩、下がる。

「また、逃げるのですか？ キラ？」

目ざとく察したフレイが、少し厳しい口調で告げる。

「もう……逃げるのやめにしましょう……。フレイさんは……もう死んだんですよ」

「……何言ってるんだよ……そんなことない！」

むきになって怒鳴ると、ラクスはもっと声を張り上げて、僕の胸倉をつかんだ。

小さい手で。力いっぱい。耳がびりびり痺れるほど、大声でまくし立てて、叫びながらラクスは泣く。

「ううう……」

目頭が熱い。これは……涙？

僕が、泣いているのだろうか？

キラは頬に手をやる。

びしょびしょだ。

「僕……」

これは、まるで子供の泣き方だな。

そんな自覚をしながら、キラは泣いた。まっすぐに喋れないほど、激しい嗚咽をいくつもこぼして。

話した。

フレイとの事を。

わずかの間だったけれど恋人と呼べた、大切に思っていた、かけがえない存在だった少女の事を、嬉しかった事を、救われた事を、傷つけてしまった事をキラはひたすら話した。

ラクスは、そんなキラの頭を抱いて、上手にあいづちを打ってくれた。

それだけの事が、死ぬほど嬉しくて、キラはさらに泣いた。

今まで、自分を偽装していたため、流れる機会を失っていた涙を、全て出しきるように。

すべての呪縛から……解き放たれるように。

やがてラクスは、キラの肩を叩いて、言った。

「やっと、私を見てくれましたね」

そう言えば、人をしっかり見るのは久しぶりかもしれない。

「明日、慰霊碑に行きましょう。フレイさんのお墓はオーブにはないけど、気持ちは伝わりますわ。……ね？」

「うん……うん……」

キラとラクスは、濡れたまぶたをぬぐって、立ちあがる。

長い悪夢は終わりを告げ、ようやく、キラは自分の時間を歩き始める。かに思えた。

第15話「超種運命の大戦<15>

「アスラン！」

翌朝、食堂でモーニングコーヒーを飲みながらノートパソコンをいじっているアスランにカガリは声をかけた。

「おはよう」

「昨日はすまなかった。あの後もずっと行政府で……ああ今日も朝からずっと閣議になるからゆっくり話しもしてられないが、あの……」

「いいよ、解ってる。気にするな。それよりどうなんだ。オーブ政府の状況は」

「あ……」

カガリは沈黙する。アスランはその沈黙で状況を見て取る。

「……そうか」

「今は情勢がああ動くのも仕方ないかとも思う。他と比べれば軽微だろうがオーブだって被害は被った。首長達の言う事はわかる。けど、痛みを分かち合うって、それは報復を叫ぶ人達と一緒になってプラントを憎むって事じゃないはずだ！」

「……」

しばらくの沈黙が続く。

「俺は、プラントに行ってくる」

「ええ……？」

「オーブがこんな時にすまないが、俺も一人ここでのうのうとして
いるわけにはいかない」

「アスラン……けどお前それは……」

「プラントの情勢が気になる」

「あ……」

「デュランダル議長ならよもや最悪の道を進んだりはしないと思うが。だが、ああやって未だに父に、父の言葉に踊らされている人も

いるんだ。議長と話して、俺が：俺でも何か手伝えることがあるなら……アスラン・ザラとしてでもアレックスとしてでも……」

「あ……」

「このままプラントと地球が噛み合う事になってしまったら、俺達
は一体今まで何をしてきたのかそれすら分からなくなってしまっ」

「な、どこ行きたい？」

「うーんそうだなあ」

「俺腹減った！」

マユ達は、はしゃぎながらオーブ本島へ向かうバスに乗り込んだ。

その頃、ルナマリアは一人射撃の訓練をしていた。
撃ち終わって、隣をみるとレイが入ってきていた。

「上陸したかったんじゃないのか？ 出たる？ 許可」

レイが聞いてきた。

「後で行くわ。皆でわーきゃー行きたくなかっただけよ。あそこは

……そう言う所じゃないから」

「そうか」

それだけ言うと、レイは銃を撃ち始めた。

「では、お兄様、行ってまいりますわ」

「ああ、気をつけてな」

「でも護衛など必要ないのに……」

「お前はプラントのラクス・クラインに似ている。血迷った馬鹿が
出ると困るからな」

「ふふふ。ブータニアスがいれば大丈夫ですわ」

「まあ、確かにブータニアスは……」

なんと言うか、頼りがいのような物を感じてしまうのも確かだ。

「では、ブータニアス。セトナをよろしく頼むぞ」

ジブリールがブータニアスの頭を撫でると、ブータニアスは「にゃー」と鳴いた。

セトナとブータニアスは赤十字のマークが付いたヘリコプターに乗り込んだ。

窓からセトナが手を振るのが段々と小さくなっていく。

ジブリールは神々に、できる限りの祝福をセトナのために祈った。

汚れた手の自分よりも、はるかに幸福になる資格があの子にはあるのだ……。

プラントに出立するアスランを、カガリは時間を割いて見送る。

「ユウナ・ロマとのことは解ってはいるけど……」

突然アスランは言った。

「え？」

「やっぱり、面白くはないから……」

アスランは、赤い石の付いた指輪を取り出すと、カガリの手を取り、指にはめる。

「あ……ええッ!？」

アスランは顔を赤らめ、横を向く。

「ああ……う……お……おま……いや……あの……こういう指輪の渡し方ってないんじゃないか!？」

「悪かったな」

「あ……うふふ。気を付けて。連絡寄せよ」

「カガリも、頑張れ」

二人はどちらからもなく、身を寄せ合いキスを交わした。

アスランは迎えのへりに乗り込むと、旅立っていく。それを小さくなるまで、カガリは見つめていた。

「ここか……」

夕暮れ。ルナマリアは一人、あの場所を訪れていた。オーブ攻防戦の流れ弾により、父を、母を、妹のメイリンを失った場所。一面に花の株が埋まっている。戦争の傷跡なんてまるでない。そのせいだろうか。

「意外と、出ないもんね、涙」

……花束が……違う。傍らに植えられた花が花束に見えたのだ。石碑……慰霊碑だろうか。

その前に、男の人が立っている。

「慰霊碑……ですか？」

「うん。そうみたいだね。よくは知らないんだ。僕も此処へは初めてだから。自分でちゃんと来るのは……。僕は今まで、逃げてたから。自分から」

ひよつとしたら彼も、彼の知り合いを亡くしたのだろうか？

「せっかく花が咲いたのに、波を被ったからまた枯れちゃうね」

その男性が言った。

「誤魔化せないって事かも」

「ん？」

「いくら綺麗に花が咲いても、人はまた吹き飛ばす……」

「君……？」

「すみません。変なこと言って」

その男性にお辞儀をして、ルナマリアは踵を反した。

もう、ここに来る事はないだろう……。

「やっと着いたか」

シヤムスが言った。

「心細かったんですか？」

マホ・イサワ少尉が聞く。

「強がるなよ。誰だって味方の所に着きやほつとする」

「……そうね」

案外素直にマホは頷いた。12歳年上の彼氏の事でも思っているの
だろうか？

「よお、お前ら、お疲れさん！」

ネオが休憩所に顔を出した。

「ネオー！」

ミューディーが飛びついていく。

「なんだか基地はごたごたしているようですが」
スウエンが尋ねる。

「ああ。何か作戦があるらしい。だが、うちらには何にも命令は来
ていない。まるまる3日間休暇をくれるそうさ。しっかり休んどけ
よ」

「おー！ じゃ、基地のプールバーでも行くかな」

「じゃあ、あたしも付き合おう」

「スウエンはどうする？」

シヤムスはスウエンを誘った。

「んー。俺は、観測所の見学だ。すまん」

「いいって。お前は宇宙好きだからなあ。……DSSD（深宇宙探
査開発機構）でも行ければいいんだがな」

「……」

セトナは被災地の救護活動に勤しんでいた。

「これが被災地……」
でも。

火星の環境も厳しかった。運良くジブリールお兄様の世話になって、安楽とも言える生活もできた。

今度は自分が返さなければ……。

「あ、あんた、ラクス・クラインじゃないか!? プラントの?」

「何だつて?」

「プラント?」

いきなり上がったその声に、セトナに視線が集中する。

中には憎しみの籠った視線もある。

ブータニアスがセトナを守るように動く。

「静まれ!」

セトナの護衛が声を張り上げた。

「こちらに居られるのは、ジブリール家ゆかりのセトナ・ウィンタース様だ。断じてプラントのラクス・クライン等ではない!」

「ジブリール?」

「あのコーディネーター嫌いの?」

ロード・ジブリールがコーディネーター嫌いである事は広く知られていた。この場合は、その悪評? が役に立ち、周囲のざわつきが静まっていく。

「なあ、あんた」

一人の老婆がセトナに声をかける。

「ラクス・クラインにそっくりって事はさ、歌もうまいんじゃないかい? 歌っておくれよ、一曲」

セトナはちよつと戸惑ったが、両手を胸の前で組み、静かに歌いだす。

「Amazing Grace…… How sweet the
sound…… That saved a wretch l
ike me…… I once was lost, but
now I'm found, Was blind, but

now I see……」
セトナの歌うアメイジング・グレイスが、静かに流れてゆく……。

その頃オーブ内閣府

執務をしていたカガリのところにとんでもない知らせが舞い込んできた。

「そんな馬鹿なッ!? 何かの間違いだそれは!」

「いえ、間違いではございません」

カガリの願いを裏切るようにウナト宰相が言う。

「先ほど大西洋連邦、ならびにユーラシアをはじめとする連合国は、以下の要求が受け入れられない場合は、プラントを地球人類に対する極めて悪質な敵性国家とし、此を武力を以て排除するも辞さないとの共同声明を出しました」

「ああ……」

カガリはため息をつく。

プラント評議会は紛糾していた。

「全く以て話にならん! 一体何をどう言ってやれば、彼等に分かるのかね」

「何を言ったって分からないんじゃないですか? そもそも最初からそんな気などなかったように思えます。これではっ……」

「何を今更、テログループの逮捕引き渡しなどと。既に全員死亡しているとのこちらからの調査報告を大西洋連邦も一度は了承したではありませんか!」

「その上賠償金、武装解除、現政権の解体、連合理事国の最高評議会監視員派遣とは。とても正気の沙汰とは思えん」

「奴等だつて、こちらが聞くとは思つてないでしょうよ。要は口実だ。例によつてプラントを討ちたくて仕方がない連中が煽っているのでしょう。宇宙にいるのは邪悪な地球の敵だね」

「しかし、いくらなんでもこれは無謀です。連合は、本気でこのまま戦端を開くつもりなのでしょう。今そんなことをすればむしろ彼等の方が……」

「従わなければそうすると言つてきているではないか、現に！」

「月の戦力は無事らしい。被害の大きかったのは赤道を中心とした地域だ。大西洋連方とユーラシアは元気なものさ」

「戦争となれば消費も拡大するし、憎むべき敵が明確であれば意欲も湧く。昔から変わらぬ人の体質ですよ」

「しかし……それにしてもこれは……」

「やると言っているのは向こうですよ。我々ではない」

「皆さん」

デュランダルが発言するが、誰も聞いてはいない。

「弱腰では舐められる」

「ともかく、こちらも直ぐに臨戦態勢を」

「いや、それではあまりにも遅い」

「どうか落ち着いて頂きたい！ 皆さん！」

無視されて、デュランダルは少しいらついた声を張り上げる。

「お気持ちは解りますが、そうして我等まで乗ってしまつてはまた繰り返します。連合が何を言つてこようが我々はあくまで、対話による解決の道を求めていかねばなりません。そうでなければ、先の戦争で犠牲となった人々も浮かばれないでしょう」

「だが、月の地球軍基地には既に動きがあるのだぞ。理念もよいが現状は間違いなくレベルレッドだ。当然迎撃体制に入らねばならん」
「軍を展開させれば市民は動揺するでしょうし、地球軍側を刺激することにもなります」

「議長！」

「でも、やむを得ませんか。我等の中には今もあの血のバレンタイ

ンの恐怖も残っていますしね」

デュランダルは、結局軍の展開を許可した。

「防衛策に関しては国防委員会にお任せしたい。それでも我等は、今後も対話での解決に向けて全力で努力していかねばなりません。こんな形で戦端が開かれるようなことになれば、まさにユニウス7を落とした亡霊達の思ふ壺だ。どうかそのことをくれぐれも忘れな
いで頂きたい」

「やあ、また来たのかい」

観測所の職員は言った。

「すみません。またお邪魔します」

スウエンはすまなそうに答える。

「ははは。いって。宇宙ってきれいだものな。今度はどこを見た
い？ どこでも出してやるぞー」

「デュランダル議長がお会いになると？」

ナーエは驚きの声を上げた。

アグニス達はプラントに到着後、接触は友好的に進んだ。だがこの
緊迫した世界情勢の中、すぐに会えるとは思わなかった。

「火星とプラントは友好関係にある。マーシャンにはコーディネー
ターも多いしな……。だが、いつ開戦してもおかしくない状況で、
議長自ら俺達に会うとはな……」

「何か裏があると？」

「わからん。だが、実際会えばわかる事もあるだろう」

第16話「超種運命の大戦<16>

「アレックスさん」

アスランは無事プラントに着き、迎えの者と会った。

「すみません。状況はどうなっていますか？」

「良くありませんよ。プラント市民は皆怒っています。議長は、あくまでも対話による解決を目指して交渉を続けると言っていますが、それを弱腰と非難する声も上がり始めています」

「……」

「アス八代表の特使と言うことで早急にと面談は申し入れてはいますが、この状況ではちよつとどうなるか判りませんね」

「分かりました」

「……少なくとも、無能ではないな」

「しかし、それは善悪とは別ですね。そうでしょ？」

アグニス達とデュランダルの見は無事に終わった。デュランダルは、殊にオーストレール・コロニーの社会システムに興味を抱いているようだった。

オーストレールコロニーの社会システム　その特徴は必要とされる職業にあわせて遺伝子調整された人間で構成されている事である。そのような、余裕のない環境の証拠でもあるような事に若干コンプレックスを抱いていたアグニスには、デュランダルがそれを評価している様子を見て戸惑った程である。

「……」

「なんです、アグニス？」

アグニスは通路の向こうを見ていた。

「あれは……」

「ああ、ラクス・クラインですよ。驚いた。プラントに戻っていたのですか？」

「……………」

「なんですか？ アグニス？」

「いや、彼女の事はニュース映画で見た事があるが、なんとなく違和感がない」

「そりゃ、年月が経てば印象も変わりますよ。でしょ？」

「ああ……………しかし、あんな風かな」

「なんですか？」

「いや、セトナ姉さんが成長した姿は……………と行ってな。前に見たニュース映画ではおしとやか過ぎた」

ふふ……………とアグニスは笑った。

月面

「コンテナリスト、R34～R42は積み込み完了。レダニアフ搭乗のモビルスーツパイロットは第35ブリーフィングルームに集合して下さい」

「第34～37エレベーターは17時から18時の間、閉鎖されます」

「シャトル608便が12番ゲートに到着します」

「第4ダガーL部隊の補充パーツ、搬入完了しました」

プラント撃滅のための準備が進められていた……………。

「さて、それで、具体的にはいつから始まるのか？ 攻撃は」

ブルーノ・アズラエルは大西洋連邦大統領ジョゼフ・コーブランドに尋ねた。

「そう簡単にはいきませんよアズラエル老。せつかちですなあ。あ

なたも」

「ふ……」

「プラントは未だに協議を続けたいと様々な手を打ってきておるし、声明や同盟に否定的な国もあるのだ。そんな中、そうそう強引な事は……」

「おやおや。前にも言ったはずだがな。そんなものプラントさえ討つてしまえば全て治まると」

「はあ……」

「奴等が居なくなつた後の世界で、一体誰が我々に逆らえると言うのだ？ 赤道連合？ オーブ？ スカンジナビア王国？」

「まあ、オーブはすぐ潰せるだろうが、スカンジナビアは、怖いですな。何事かあれば48時間以内に200万以上の兵を動員可能な国を甘く見るべきではない。実の所彼らが昔からカレリア地方などの奪回を狙っている事はわかつている。戦争になつてヘイへ並みの兵が輩出されれば我らとて目も当てられません」

「ふん。世界はもうシステムなのだ。だから創り上げる者とそれを管理する者が必要だ。人が管理しなければ庭とて荒れ、誰だつて自分の庭には好きな木を植え、芝を張り、綺麗な花を咲かせたがるものだろう？ 雑草は抜いて。所構わず好き放題に草を生えさせてそれを美しいと言つか？ これぞ自由だと」

「アズラエル老……」

「人は誰だつてそういうものが好きなのだ。きちんと管理された場所、物、安全な未来。今までだつて世界をそうしようと人は頑張ってきたんじゃないか。街を造り、道具を作り、ルールを作つてな。そして今、それをかつてないほどの壮大な規模でやれるチャンスを得たのだ！」

ブルーノ・アズラエルはごほごほと、咳き込む。

「だからさつさと奴等を討つて早く次の楽しいステップに進むのだ！ 我々ロゴスの為の美しい庭。新たなる世界システムの構築と言うな！」

「……………」
結局のところ、この老人は息子の仇を取りたいだけなのではないか、
と言う思いをコーブランドは飲み込んだ。

程なく……全世界に向けて大西洋連邦大統領ジョゼフ・コーブランドから声明がなされた。

『是より私は、全世界の皆さんに非常に重大かつ残念な事態をお伝えせねばなりません。先のユニウス7落下事件より、プラントに対して、我々はいくつかの提案を致しました。……が、未だ納得できる回答すら得られず、この未曾有のテロ行為を行った犯人グループを匿い続ける現プラント政権は、我々にとっては明かな脅威であります。よって先の警告通り、地球連合各国は本日午前0時を以て、武力による此の排除を行うことをプラント現政権に対し通告しました』

「第44戦闘団は搭載機の発進を完了した。フォックスドロットノベンバー発令。現時点を以てオペレーションをフェイズ6に移行する。全ユニットオールウェポンズフリー」
ついに、月面の地球軍に対しプラント攻撃の命令が下った。

「やー。とうとう出撃か」

出撃していく艦艇を見ながらシャムスはつぶやく。

「俺らには関係ないけどな」

サノキチ・ハラダ少尉がシャムスに答える。

「でも、これで片が付けばいいな。そうすりゃ世の中平和になる」

「そんな簡単なもんじゃないだろう。内戦が始まるだけさ。東アジアなんかきな臭い」

「ふ……」

「マーシヤンの方々！」

プラントからつけられた案内人が血相を変えてアグニス達を追ってきた。

「申し訳ありませんが、待機所に来ていただきます！」

「何が起こった？」

「地球連合が宣戦を布告してきました！」

「なんだと!？」

「どうぞこちらへ」

「すぐに戦いになるのですか？」

ナーエは聞いた。

「月基地よりすでに地球軍の艦隊が発進しております！」

「そのような情報を……伝えていいのですか？」

「議長から、盟友であるマーシヤンの方々にはすべて伝えて保護するようにと言われております」

アグニスは、下を向くと憤怒を押し殺した。

「この地が……プラントがこれから戦場になると言うのか？」

「わかりませんが万一を考えて……我々にはあなた方の安全を守る義務があります！」

「我慢ならん!! すぐに議長に取り次いでもらおう！」

アグニスは駆け出した。

「アグニス? 一体何を考えているのです?」

ナーエも後を追う。

評議会が開かれている部屋……。そこに入るとアグニスは議長に向かって言った。

「出撃の許可をいただきたい！」

デュランダルは、微笑んで、頷いた。

『第一戦闘群、間もなく戦闘圏に突入します。全機オールウェポンズフリー』

『シエラアンタレス1、発進スタンバイ。射出システム、エンゲージ』

「結局はこうなるのかよ、やっぱり。こちらシエラアンタレス1、ジュール隊イザーク・ジュール、出るぞ！」

「ジュール隊、ディアツカ・エルスマン、ザク発進する！」

ザフトのモビルスーツも次々に発進し、とうとう戦闘が始まる。

「アグニス！ 出撃してどうするつもりですか？」

ナーエが、アグニスを止めようとする。だが、アグニスはかまわずモビルスーツを起動させていく。

「プラントは俺達に誠意を示した。俺は戦う力を持っている。だのに見ているだけなど……我慢できん！！！！」

「しかし、これは連合とプラントの戦いでしょ？ 私達が関与すべきではない。そうは思わないのですか？」

「下がれ、とにかく出撃する！」

アグニスは、強引に出撃した。

彼の乗機はデルタ

核エンジン、そして次世代の推進システムとして開発された新型スラストユニット『ヴォワチュール・リュミエール』を搭載した火星のファーストモビルスーツである。

「これが戦争……」

出撃したアグニスは、目の前で戦われている光景に目を奪われていた。

何機かの地球軍モビルスーツがデルタ目掛けて襲ってくる！

「くっ」

アグニスはソードを抜くと、斬り飛ばす！

「はぁ、はぁ、はぁ……」

無我夢中だった。

「おい、なかなかいい動きだな」

「ん？」

「お前か。マーシヤンの助っ人と言うのは」

ジュール隊のイザークだった。

「おい、失礼だぞ、イザーク」

ディアツカが突っ込む。

「うるさい！ 俺が隊長だ！ お前こそその口の利き方はなんだ！

……協力感謝する。認識コードは全軍に通達した。味方に撃たれ

る心配はない。だが、状況によっては撤退してもらう。ここでは俺

の判断に従ってもらう。いいな？」

「……ああ」

「では、武勲を祈る！」

あれがザフトの兵か……。

アグニスは気持ちを切り替えると、周囲の様子を探る。先程の初陣

の昂ぶりも収まったようだ。

「はぁぁぁ！ 核エンジン起動！ ヴォワチュール・リュミエー

ル展開！」

デルタはその高速で地球軍のモビルスーツを翻弄した。

……十機もやつつけた頃だろうか。

『アグニス！？』

ナーエから通信が入った。

『そちらは囿です！ 本体はプラントに！』

「なにー！！」

「本隊、戦闘を開始しました」
「よし、予定通りだな。こちらも行かず。この蒼き清浄なる世界に、コーディネーターの居場所などないということは今度こそ思い知らせてやるのだ！」
プラント本国を狙う艦隊はその身を現し、進軍を開始した。

「地球軍、モビルスーツ隊20、第二エリアへ侵攻中。第三管軍はオレンジ、ベータ15へ」

「敵主力隊の狙いは、やはり軍令部とアプリリウスか」

「だがまだわからん！ 敵艦の動き、どんな小さなものでも見逃すな！」

「哨戒機からの報告は？」

「極軌道哨戒機より入電。敵別働隊にマーク5型、核ミサイルを確認！？」

「なんだと！？」

「数は！？」

「不明ですがかなりの数のミサイルケースを確認したとのことですよ」

『全軍、極軌道からの敵軍を迎撃せよ！ 奴等は核を持っている。』

「一機たりともプラントを撃たせるな！」

「核攻撃隊？ 極軌道からだとお！？」

イザークは怒鳴った。

「じゃあこいつらは、全て囮かよ！」

「くっそおおお！」

ザフトが混乱に陥る中、地球軍の奇襲部隊の前面に、プラントの盾となるように立ち塞がる艦があった。

「全システム、ステータス正常。量子フレデル、ターミナル1から5まで左舷座標オンライン。作動時間7秒。グリッドは標的を追尾中」

「一発勝負だぞ。最大まで引きつけろ、いいか！」

「フルチャージオンライン。ニュートロンスタンピーダー起動」

「スタンピーダー、照射！」

「照射！」

何かが、その改造されたナスカ級から迸った　！

地球軍の核ミサイルが、艦艇に保管されていた物も合わせて、爆発し、盛大に宇宙に火花が咲いた。

「……核ミサイルは全て撃破。各攻撃隊は完全に消滅しました」
オペレーターは努めて冷静な声で報告した。

「よしやったぞ！」

「はあ……」

プラント評議会の会議室に、安堵のため息が広がる。

「スタンピーダーは量子フレデルを蒸発させブレイカーが作動。現在システムは機能を停止しています」

「まったく堪らん」

「スタンピーダーが間に合ってくれて良かったですわ」

「だが、虎の子の一発だ。次はこうは……」

「これで終わってくれるといいんですがね……とりあえずは」
デュランダルもため息をついた。

「んー……」

先程からアスランを迎えに来た男が、熊のように部屋を歩き回って

いる。

彼も、戦況が気になるのだろうか。

「ちよつと顔を洗ってきます」

「はい」

廊下に出ると、アスランはため息をついた。息詰る空間から逃れられてほつとした。

アスランは、顔を洗うと鏡を睨み付けた。

我ながらいい男……じゃない！

鏡に映った顔が、歪む。

祖国の危機に何にも出来ないとは、これほどまでに苦しい物なのか。アスランは顔を拭くと、部屋へ戻る階段を上がりかけた。

「ええ、大丈夫。ちゃんと解ってますわ。時間はあとどれくらい？」

「ん？」

あの声は……アスランは階段を駆け上がる。

聞こえてきたのは、忘れもしないオーブで会ったばかりのラクスの声だった。

第17話「超種運命の大戦<17>

アスランは階段を駆け上がった。

「ならもう一回確認できますわね」

向こうに見えるのは……。

「ラクス！」

「あ……あ……ああ……アスラン！」

「あ……ああ？」

これは……ラクス？ いや、最近のラクスはこんな笑顔を見せた事など……

「あー嬉しい！ やつと来て下さいましたのね」

ラクス？ は、待ち望んでいた恋人を迎えるかのような笑顔で、こちらに駆け寄ってきた。

「あ……ええ？ ……あ……」

抱きつかれた？ 何が起こっているんだ！？

「うふ」

「君がどうしてここに？」

こいつはラクスじゃない。

理性ではわかつている物の、アスランは、つい尋ねてしまう。

「ずっと待ってたのよ、あたし。貴方が来てくれるのを。うふ」

ラクスの姿をした少女は再び微笑んだ。

「なんですと！？」

ジブリールは届いた知らせに驚愕した。

「ですから全滅です。核攻撃隊は一機残らず跡形もなく全滅したんですよ。一瞬のうちに。地球軍は一旦全軍、月基地へ撤退しました」

「そんな……馬鹿な！？」

一体何が、起きたのだ？
ジブリールは混乱しながらも情報の収集と分析を命じた。

「おいおい、なんだよこれは」

ネオは報告される状況に思わずばやいた。

「核攻撃隊が全滅ってどう言う事だ？ まさか前大戦のフリーダムを量産して隠し持ってた訳じゃないだろうな？」

「艦艇も短時間に一気にやられています。その可能性は低いかと」

「やれやれ、だな。艦長。これで片がついてれば楽が出来たのに」

「はあ……………」

「どいてくれ！」

シャムスは人込みを掻き分けながら走った。
撤退してきた艦隊から怪我人が降りてくる。

「ごほごほ……………」

咳き込む音に視線をやると、血を吐いている男がストレッチャーに乗せられていた。

「オキタ！」

シャムスはその男に駆け寄った。ファントムペインで顔見知りの友人だ。

「大丈夫か、オキタ！」

「ああ、シャムス……………。大丈夫だ。ちょっと肋骨を骨折しちまった。面目ない」

「そうか…………。とにかく無事でよかった。しかしお前がやられるなんて」

オキタはファントムペインの中でも腕が良い事で知られていた。

「…………だが、作戦は失敗したようだな」

「ああ」

率直にシャムスは言った。今気休めを言った所でしょうもない。

「ザフトが、新兵器を使ったらしい。別働隊は……」

シャムスはうなだれた。

「おいオキタ、何をしている。怪我人はさっさと行かんか」

二人に声がかげられた。

「コンドウ隊長！」

敵つい顔をした男が立っていた。

オキタに隊長と呼ばれたその男も怪我をしたようで片腕を三角巾で吊っていた。

「コンドウ大佐！」

「おお、シャムス。敵に一機データに無いモビルスーツが居ってなあ、これが機動性が高いの何の。ワシもオキタもこのざまよ」

「ザフトの新型でしょうか？」

「かもしれん。やはり油断ならん奴らよ。……ヤマナミがやられた」

「！」

シャムスは絶句した。ヤマナミは彼の面倒をよく見てくれた先輩だった。誰からも好かれていた男だった。

「ちよつ」

コンドウは舌打ちした。

「さっさとザフトの奴らを砂時計から引きずり落とさねば安心して眠れぬわ。……にしても奇襲隊だ」

コンドウはぎよろりと目を光らせた。

「セリザワの隊もニイミの隊も、絶望的だそうだ」

「あのセリザワ大佐も……」

コンドウが挙げた名前の二人とも、シャムスやオキタにとってファントムペインの上官である。

シャムスはセリザワの剛胆さを懐かしく思い浮かべた。反面、医術に詳しく、シャムスも看護をしてもらった事があるのを思い出した。そして。懐かしいと思ってしまった事に愕然とし、セリザワ大佐達が死んでしまった事があらためて思い知らされるのだった。

「おおい、別働隊のモビルスーツが帰って来たぞい！」
向こう側で、声が聞こえた。

「　　！ オキタ、お前は早く医務室に行け！」
そう言うとコンドウは駆け出す。シヤムスも後を追う。

「ハットリ！ トウドウ！」

目が血走った男が二人、ストレッチャーで運ばれてきた。

「おう、コンドウ大佐、シヤムス！」

大柄な男　ハットリが答えた。モビルスーツの腕前はファントム
ペインでも随一　おそらくオキタよりも　と言われる男だ。

「俺達のほかには帰ってきたか？ イトウ隊のみんなは？ 隊長は
どうなった？」

小柄な美男子　トウドウが聞いた。

「……いや。お前達だけだ」

コンドウが答えた。

「いったい何が起こった？」

シヤムスは聞いた。

「わからん。とにかく核ミサイルは撃つたんだ。しばらくしたら、
いきなり周囲が爆発の嵐だ。揉みに揉まれて、モビルスーツはぼろ
ぼろよ。よくまあ助かったもんだと思うわ」

ハットリがぼやくように言った。

「おおい、別働隊の艦だ！」

「ぼろぼろじゃないか」

声が出た。

はっとハットリはその方向を注視する。

だが、しばらくしてイトウ隊の艦では無いとわかり、ため息をつく
とトウドウと二人で運ばれていった。

「ラクス様」

ラクス？ のマネージャーらしき男が声をかけてきた。

「ああ、はいわかりました。ではまた。でも良かったわ。ほんとに嬉しい。アスラン」

ラクス？ はアスランの前から去って行った。

「ああ……」

何がなんだかわからない。

「ん？ アレックス君」

その時、後ろから声をかけられた。

デュランダル議長だった。

「ああ君とは面会の約束があったね。いや、たいぶお待たせしてしまったようで申し訳ない」

「あ……いえ……ああ……」

アスランは混乱から立ち直ろうとする。

「ん？ どうしたね？」

「いえ、なんでもありません……」

議長室に通されたアスランは、そこで初めてプラントが核攻撃された事実を知った。

「核攻撃を！？」

「ああ」

「そんな……まさか……！」

「と言いたいところだがね、私も。だが事実は事実だ」
デュランダルはテレビを付けた。

『繰り返しお伝えします。昨日午後、大西洋連邦をはじめとする地球連合各国は我等プラントに対し、宣戦を布告し、戦闘開始から約1時間後、ミサイルによる核攻撃を行いました。しかし防衛にあたったザフト軍はデュランダル最高評議会議長指揮の下、最終防衛ラ

インで此を撃破。現在地球軍は月基地へと撤退し攻撃は停止しますが、情勢は未だ緊迫した空気を孕んでいます」

テレビは、緊急ニュースでプラントが核攻撃を受けた事実を伝えている。

「ああ……」

アスランは、絶望的な思いを感じた。

「君もかけたまえ、アレックス君。ひとまずは終わったことだ。落ち着いて」

「はい……」

「しかし……想定していなかったわけではないが、やはりショックなものだよ。こうまで強引に開戦されいきなり核まで撃たれるとはね。この状況で開戦するということ自体、常軌を逸しているというのに。その上これでは……これはもうまともな戦争ですらない」

「はい……」

「連合は一旦軍を引きをしたが、これで終わりにするとは思えんし。逆に今度はこちらが大騒ぎだ。防げたとはいえ、またいきなり核を撃たれたのだからね」

「くうう……」

アスランは歯噛みをした。祖国の危機に……自分は……。これから世界は……。

「問題はこれからだ」

「それでも、プラントは……この攻撃、宣戦布告を受けてプラントは……今後どうしていくおつもりなのでしょうか」

「んー……。我々がこれに報復で応じれば、世界はまた泥沼の戦場となりかねない。わかっているさ。無論私だってそんな事にはしたくない。だが、事態を隠しておけるはずもなく、知れば市民は皆怒りに燃えて叫ぶだろう。許せない、と」

「……」

「それをどうしろという。今また先の大戦のように進もうとする針を、どうすれば止められるというんだね。既に再び我々は撃たれて

しまったんだぞ、核を」

「しかし……でもそれでも、どうか議長！ 怒りと憎しみだけでただ撃ち合ってしまったら駄目なんです！ これで撃ち合ってしまったら世界はまたあんな何も得るもののない戦うばかりのものになってしまふ……。どうか……。それだけは！」

アスランの脳裏に、キラと憎しみ合い、殺しあつた過去が甦る。

「アレックス君……」

「俺は……俺はアスラン・ザラです！」

アスランは、アレックス、と呼ばれた事を訂正した。

「ん？」

「二年前、どうしようもないまでに戦争を拡大させ、愚かとか言いようのない憎悪を世界中に撒き散らした、あのパトリックの息子です！ 父の言葉が正しいと信じ、戦場を駆け、敵の命を奪い、友と殺し合い、間違いと気付いても何一つ止められず、全てを失つて……。なのに父の言葉がまたこんなつ！」

「アスラン……」

「もう絶対に繰り返してはいけないんだ！ あんな……！」

「アスラン！」

「うー！」

自分の言葉が感情の昂ぶりを呼んでしまったようだ。

アスランは我に返る。

「ユニウスの犯人達のことは聞いている」

「う……」

「君もまた、辛い目に遭ってしまったな」

「いえ違います。俺はむしろ知って良かった。でなければ俺はまた、何も知らないまま……」

「いや、そうじゃない、アスラン。君が彼等のことを気に病む必要はない。君が父親であるザラ議長のことをどうしても否定的に考えってしまうのは、仕方のないことなのかもしれないが。だが、ザラ議長とはじめからああいう方だったわけではないだろう？」

「いえそれは……」

「厳しい、だが、優しい父でもあったのだ。……母が生きていた時は、彼は確かに少しやり方を間違えてしまったかもしれないが、だがそれもみな、元はといえばプラントを、我々を守り、より良い世界を創ろうとしての事だろう。想いがあっても結果として間違ってしまった人は沢山居る。またその発せられた言葉がそれを聞く人にそのまま届くともかぎらない。受け取る側もまた自分なりに勝手に受け取るものだからね」

「議長！」

「ユニウス7の犯人達は行き場のない自分達の想いを正当化するためにザラ議長の言葉を利用しただけだ」

「……！」

天啓を受けたように、アスランの頭に電流が走った。

「自分達は間違っていない。何故ならザラ議長もそう言っていただろ、とね」

「ああ……」

「だから君までそんなものに振り回されてしまっではいけない。彼等は彼等。ザラ議長はザラ議長。そして君は君だ。例え誰の息子であつたとしても、そんなことを負い目に思っではいけない。君自身にそんなものは何もないんだ」

「議長……」

アスランは、ずっと心に背負っていた荷物が降ろせた気がした。

「今こうして、再び起きかねない戦火を止めたいと、ここに来てくれたのが君だ。ならばそれだけでいい。一人で背負い込むのはやめなさい」

「ああ……」

「だが、嬉しい事だよ、アスラン」

「……」

「こうして君が来てくれた、と言うのがね」

「あ……ああ……」

「一人一人のそういう気持ちが必要や世界を救う。夢想家と思われ
るかもしれないが私はそう信じているよ」

「……議長……長……」

いつしか、アスランは涙を流していた。

「おや。だいぶ、溜まっていた物があるようだね。泣きたまえ、泣
いてすべて出してしまおうといい」

アスランは、議長の胸に顔を埋めて、泣いた。泣いた。

『わたくしはラクス・クラインです』

「ああ……？」

ふいに飛び込んできたラクス？ の声で、アスランは、我に返った。

「すみません、みつともない所を……」

「いいのだよ。男も泣かねば成らない時ぐらいある」

テレビのラクス？ は語り続ける。

『皆さん、どうかお気持ちを沈めて、わたくしの話しを聞いて下さ
い。この度のユニウス7の事、またそこから派生した昨日の地球連
合からの宣戦布告、攻撃。実に悲しい出来事です。再び突然に核を
撃たれ、驚き憤る気持ちはわたくしも皆さんと同じです！ですがど
うか皆さん！今はお気持ちを沈めて下さい。怒りに駆られ想いを叫
べばそれはまた新たな戦いを呼ぶものとなります』

「議長、これは……？」

デュランダルは、微笑むとテレビに視線を向けた。

『最高評議会是最悪の事態を避けるべく、今も懸命な努力を続けて
います。ですからどうか皆さん、常に平和を愛し、今またより良き
道を模索しようとしている皆さんの代表、最高評議会デュランダル
議長をどうか信じて、今は落ち着いて下さい』

ラクス？ は、話し終わり、静かな歌を歌い始めた。

「笑ってくれて構わんよ」

「う……………」

「君には無論判るだろう」

「あ……………」

アスランは、自己嫌悪に駆られた。カガリともなかなか会えない。ラクスはもうキラの恋人だ。だが……………こうあつて欲しいと言う恋人像を、先程のラクス？ の中に見ていた。一瞬でも信じた……………いや、信じたかったのだ。こんな風な恋人がいたらと。

「我ながら小賢しいことだと情けなくもなるな。だが仕方ない。彼女の力は大きいのだ。私のなどより、遙かにね。評議会のお偉方があれこれ言うより、彼女の一言の方が有効なのだ。馬鹿な事と思うがね。だが今私には彼女の力が必要なのだよ。また、君の力も必要としているのと同じにね」

「私の？」

「一緒に来てくれるかね」

デュランダルは先に立って歩き出した。

アスランも後に続く。

デュランダルはエレベーターを上がり港湾部へと入っていく。何重ものセキュリティを通過して、辿り着いたのは格納庫。扉が開かれる。

闇の中にあるそれは、ガンダムヘッドのモビルスーツだった。

「ああ……………」

「ZGMF-X56S インパルスだ。性能は異なるが例のカオス、ガイア、アビスとほぼ同時期に開発された機体だよ。この機体を君に託したい、と言ったら君はどうするね？」

「……………どう言う事ですか？ また私にザフトに戻れと」

「ん……………。そう言う事ではないな。ただ言葉の通りだよ。君に託したい」

「……」
「まあ手続き上の立場ではそう言う事になるのかもしれないが。今度の事に対する私の想いは、先ほど私のラクス・クラインが言っていた通りだ。だが相手は様々な人間、組織。そんなものの思惑が複雑に絡み合う中では、願う通りに事を運ぶのも容易ではない。だから想いを同じくする人には共に立つてもらいたいのだ。出来る事なら戦争は避けたい。だがだからと言って銃も取らずに一方的に滅ぼされるわけにもいかない」

「……」
「そんな時のために君にも力のある存在でいてほしいのだよ。私は」
「議長……」

「先の戦争を体験し、父上の事で悩み苦しんだ君なら、どんな状況になっても道を誤ることはないだろう。我等が誤った道を行こうとしたら君もそれを正してくれ。だが、そうするにも力が必要だろ。残念ながら」

「……」
「急な話だから、直ぐに心を決めてくれとは言わんよ」

「あ……」
「だが君に出来る事。君が望む事」

「ああ……あ……」
「それは君自身が一番よく知っているはずだ」
「そう言うと、デュランダルは身を翻し、アスランを残し去って行った。」

俺は……どうすれば……。だが、アスランは気づいていた。自分の心がとっくに答えを決めている事を。

第18話「超種運命の大戦<18>

「冗談ではないよアズラエル。一体なんだねこの醜態は」

再び、ジブリールはモニターの前に座り、ロゴスの面々とテレビ会議を行っていた。

「しかしまあ…ものの見事にやられたもんじゃの」

「……ぬう……」

ブルーノ・アズラエルは歯軋りをする。

「ザフトのあの兵器はいつたい何だったのだ？」

「意気揚々と宣戦布告して出かけて行って、鼻っ面に一発喰らってすぐごと退却か。君の書いたシナリオはコメディなのかね？」

「くっ！」

「これでは大西洋連邦の小僧も大弱りじゃろうて」

「地球上のザフト軍の拠点攻撃へ向かった隊は未だに待機命令のままなのだろ」

「勢いよく振り上げた拳、このまま下ろして逃げたりしたら世界中の物笑いだわ」

「さて、どうしたもののか。我等は誰にどういつ手を打つべきかな。

アズラエル、君にかね？」

「くっ」

アズラエルは何も言う事が出来ず、歯噛みをする。

ここで、ジブリールが口を出した。

「お待ちを。皆さん。ザフトの新兵器の分析、今皆さんの下へ送らせました」

「ふむ？」

「……これは、奇妙な」

「左様、プラント奇襲部隊の中で、核ミサイルを持ち込んでいなかった艦、最初の攻撃で出払ってしまった艦のみがかるうじて生還しているのです。これが何を意味するのか！？ おそらくは核物質に

強制的に核分裂を起こし、爆発させると言う物です。そしておそらく、ザフトの新兵器がこのまま発展を続けた場合、地球に存在する核は無意味になると言う事です！ 地上に『あれ』が放たればおそらく再建した核発電所は爆発し、周囲に放射能汚染をもたらすでしょう。いや、彼らはそれすらしないで良いのです。ただ、『あの兵器』を地球に向けて放つぞと恫喝すれば……。まさしくエイプリルフール・クライシスの再来 国民の反応は最悪の物が予測されます。我らはエネルギーすら、彼らの手に握られて、地球人類はまさしくザフトの奴ばらの奴隷となるでしょう！」

「うむ！」

「報告書では、ザフトの技術力を勘案した結果、あのザフトの新兵器が地球全土に影響を及ぼすまでに発展するには、2年と予測されています」

「短いな」

「そう。やるなら今のうちだ、と言う事です。戦いは、続けなければなりません。最後まで。我らの、そして地球人類の未来のために！ ……核は封じられました。後は、まともに戦い、まともに勝つしかないでしょう。そして、今度こそ奴等を叩きのめしてその力を完全に奪い去るのです！ それを行わねば、2年後に地球連合は崩壊します。……ご静聴、ありがとうございました」

ジブリールは口を閉じた。

場を沈黙が支配した。

「……戦うしかないな」

「それも一刻も早くにだ！」

「ジブリール。指導は君に任せる。頼むぞ」

モニターの一画面で、ブルーノ・アズラエルが感謝の念を浮かべ、謝意を表すように頭を下げるのが見えた。

「ほう、地球に降りると言うのかね」

デュランダルはアグニスに尋ねた。

「ああ。俺達の任務はまだ終わってはいない」

「では、彼を連れて行きたまえ」

デュランダルは、一人の兵士を紹介した。アグニス達がプラントに着いてからアグニス達の係りになっていた者だ。

「アイザック・マウです。あらためて、よろしく！」

……

「地球連合と連絡を取ると言っても、どうやってするのですか？」

今は戦時ですし、落ち着かれてから行かれた方が……」

アイザックが心配そうに言う。

「それが、俺達の任務だ。まず月の地球軍基地に連絡を取る。その後は地球連合の指示に従う！」

アスランは、奇妙に落ち着いてしまった気持ちのまま、宿舎に帰った。

「ああ！ アスラン！」

「あ？」

「ああうふ」

「うわ……」

いきなりロビーから出てきたラクス？ にアスランは抱きつかれ、焦る。

「お帰りなさい。ずっと待ってましたのよ」

「ええ……あ……君……あの……」

「ミーアよ。ミーア・キャンベル。でも、他の誰かがいる時はラクスって呼んでね。うふ」

「ええ……？ ……はあ……」

その眩し過ぎると言ってもいい明るさが、やっぱり穏やかな春の光

のようなラクスとは違うのだと認識させられる。

アスランはため息をついて中に入ろうとした。

「うわぁ！」

ミーアはそのままアスランの腕に腕を絡めると、宿舎の中へ連れて行く。

「ね、御飯まだでしょ？ まだよね。一緒に食べましょう」

「え……いや……あの……」

「アスランはラクスの婚約者でしょう？」

「あ……いやそれはもう……」

結局アスランはミーアに押し切られ、レストランへと連れ込まれた。

「ええと、アスランが好きなのはお肉？ それともお魚？ んー…

…あ！ そうだ！ 今日のあたしの演説見てくれました？」

「え？」

「どうでした？ ちゃんと似てましたか？」

一瞬でも、ラクスが自分の元に戻ってきたように感じてしまったのが馬鹿だったのだ。

アスランは憂鬱になり窓の外に目をやる。

「……」

「……駄目……でしたか……」

ミーアの失望した声に、アスランは自分がどこにいるのか気づく。

「ああいや、そんな事はないけど」

「ええ！ほんとに!？」

「ああ、よく似ていたよ。まあほとんど本物と変わらないくらいに親しい人でもなければわからないだろう」

「やあああつ！ 嬉しいいい！ 良かった、アスランにそう言ってもらえたらあたしほんとに！」

その喜び様が、また違和感を感じさせ、アスランはまた夜景に目をやり、ため息をつく。

「私ね、ほんとはずーっとラクスさんのファンだったんです」
「……………」

「彼女の歌もよく好きで歌ってて、その頃から声は似てるって言われてただけ。そしたらある日急に議長に呼ばれて」

「はあ……………。それでこんな事を」

「はい！ 今君の力が必要だって。プラントの為に。だから」

「……………君のじゃないだろ、ラクスだ、必要なのは」

心をざらつかせる違和感。それから来るいらだちのまま、アスランは横を向いたまま皮肉のように言ってしまう。

「……………そうですけど。今は……………」

「あ？」

ミアの沈んだ声に、アスランはまた我に返る。

「ううん。今だけじゃないですよ。ラクスさんは、いつだって必要なんです。みんなに。強くて、綺麗で、優しく……………。ミアは別に誰にも必要じゃないけど……………」

「ああ……………」

「だから今だけでもいいんです！ 私は。今いらっしやらないラクスさんの代わりに議長やみんなのためのお手伝いが出来たらそれだけで嬉しい。アスランに会えてほんとに嬉しい！」

「……………」

「アスランはラクスさんの事、色々知ってるんでしょ？ なら教えて下さい。いつもはどんな風なのか、どんな事が好きなのか。えっ」とあとは苦手なものとか、得意なものとか、他にも色々……………」

ミアの様子に、自分の身を思う。必死で覚えた偽りの身分。オーブのアレックス・デイノ 偽りの自分……………。ユウナに引っ張られていくカガリを見送る事しか出来ない自分……………。

「ふ……………」

アスランはワインをあおった。

アルコールが気分を高揚させる。

もう自分はアレックスなんかじゃない。アスラン・ザラだ！

一気にワインを飲み干すと、ドンとテーブルに置いた。
ミアアがちょっとびっくりした顔でこちらを見ている。

「ふ……」

アスランは唇を吊り上げた。

「うまい酒だ。君もどんどん飲むといい」

「ほう、マーシャンとな」

ジブリールは、月基地からの知らせを読んだ。

「ふむ……今年の使節団の出身はオーストレール・コロニーか。なんだったかな、聞き覚えがあるが。ああ、セトナの出身地ではないか！」

セトナはどう思うだろうか？ 故郷の者に会いたいだろうか？ 会いたくないだろうか？ とりあえず、聞いてみるか。私もセトナに会いたい。

「ん？」

ジブリールは月基地の司令官から、補足という形で付けられているファイルを開いた。

見るに連れ表情が強張っていくのが感じられる。

「こ……これは！ 何を考えている！ マーシャン！」

「大西洋連邦との同盟か……」

オーブの氏族長会議は沈滞していた。

議題は大西洋連邦との同盟の是非。

大体の氏族長は、同盟を結ぶ事に賛成していた。

意見は出尽くしていた。

だが、代表首長のカガリは、反対するでもなく黙っていた。

「……………」

「カガリ、どうするんだ？」

隣の席のユウナが小さな声で囁く。

「お前はと思う」

「んー……。大西洋連邦は、今回は敵をプラントに絞っている。地球上のコーディネイターはむしろ保護の方針だ。その意味では、先の大戦のような、国民を切り捨てるとかしないとか言う事はないよ」「だよな。だが……。それで本当にいいのか？ 迷うんだ」

ユウナも気持ちちはわかる。ミネルバで知り合いも出来た。プラントに友人がいるカガリなら、迷うのも当たり前だ。

しかし、いつまでも決断を引き伸ばすのは事態を悪化させるだけとも思える。

このままでは埒が明かない、と見たのか、一人の氏族長が発言した。

「ウナト宰相……宰相は先程から黙っておいでだが、宰相からも代表にひとつ……………」

その言葉に、腕を組んで目を閉じていたウナトは、静かに目を開けた。

「……………カガリ様、オーブの中立を守りたいですか？」

「あ、ああ。できる物なら、そうしたい」

「……………」

「……………」

「……………いいでしょう。その方向で、大西洋連邦と交渉してみましよう」

議場を、ざわめきが走る。

「出来るのか？ ウナト？」

「セイラン家は幸い大西洋連邦に近い。話の持って行き方次第では、できるかも知れません」

「おお……………」

「ですが、皆がらとは行きませんか？ オーブ軍の諸君にも血を流してもらおう事になるでしょう。……………それでも、オーブ本国は、中立

を守れるかもしれません」

「では、ウナト。交渉一任する。中立が得られそうもない時は、しようがない。同盟を結ぼう」

「お任せください。まあ、詐術のような手ですがな。伊達に大狸とは呼ばれておりませんよ」

ウナトは右手で腹をぽんと叩いた。

「ふーん……」

ネオ・ロアノークは地球からの通信文を手にすると顎に手をやった。
「まあ、プラント狙った艦隊が消滅じゃあねえ、ま、しようがないか？」

「まず、地上からザフトを追い出す。その後宇宙へ。ま、順当な作戦ですな」

リーが答える。

「奇襲部隊が片をつけてくれれば、楽だったんだがねえ。スウエーソン達も連れて来いってさ」

「ほかの部署からも地上に引き抜きがあるようですな」

「戦力の集中は戦略の基本だからね。核の無い戦争、か。リー君、人類はどうやら退行しているようだぞ」

「核の冬よりはまし、と明るく考えましよう」

「そうだな。じゃ、すまんが留守を頼む」

「はっ。また大佐の指揮下で戦える事を願います」

「……いやしかしですな艦長、もう開戦してるんですよ？ 宣戦布告されたんですから」

アーサーは、開戦後ミネルバがオーブを出航しようとしないうちに

不満を持っていた。

「わかつてるわよそんな事。けどしようがないでしょう？ こっちは物資の積み込みもまだ終わってないんだし」

「いや……ですからもうそんな事を言っていられる場合は……」

「焦る気持ちは解るけどだからと言って今私達が慌てて飛び出して何がどうなるっていうの？ かえってバランスが微妙な時期でもあるのよ、アーサー。あのとんでもない第一派の核攻撃を躲されて地球軍も呆然としてるんでしょ？ カーペンタリアへの攻撃隊も包囲したまま動けないみたいじゃない」

「いや、だからこそですね……」

「今本艦が下手に動いたら変な刺激になりかねないわ。火種になりたいの？ 貴方」

「いええ！ そんな……」

「情勢が不安定なら尚のこと艦の状態には万全を期すべきだわ。幸いオーブはまだ地球軍陣営じゃないんだし、もう少し事態の推移を見てからでも遅くはないでしょ？ 出港は。軍本部からは何も言ってきてはいないんだし」

「はあ……『まだ』ですかねえ……」

「でしょうね。いつまでかは知らないけれど」

プラント

「では、プラント最高評議会は議員全員の賛同により、国防委員会より提出の案件を了承する」
デュランダルが宣言する。

「しかし、これはあくまで積極的自衛権の行使だということを決して忘れないでいただきたい。感情を暴走させ過度に戦果を拡大させてしまったら先の大戦の繰り返しです。今再び手に取るその銃が、今度こそ全ての戦いを終わらせる為のものとならんことを切に願います！」

「やっぱりそうだよなあ、プラントとしちゃあ」

プラントのニュースを見ていたアンドリユー・バルトフェルドはつぶやいた。

「せっかくキラも回復してきたんだ……」

バルトフェルドはしばらく目を瞑る。そして、目を開けると、ある所に回線をつなぎ、チャットを始めた。

第19話「超種運命の大戦<19>

「では、しっかりやって来い」

「はい、父上」

ユウナをある任務のためにシャトルに送り出すと、ウナトはジブリールに回線を繋いだ。

「どうしました？ ウナトさん。我が国との同盟、決まりましたか？」

「いやあの、それがですね……」

ウナトはハンカチで汗を拭いた。無論、演技である。

「実は、いざと言う時、大西洋連邦への亡命の手はずをお願いしたいと……」

「……！？ 一体なんなんです、急に」

「それが、その、オーブには未だウズミ派とでも呼ぶべき者達の勢力が強く……大西洋連邦と同盟の話が漏れますと、早速マスドライバー始め国内各所にテロの気配がありました」

「せっかく再建したマスドライバーを？ ウズミ派ってのは何を考えてるんです！」

「それですね、名目だけでも中立にしてもらえない物かと……そうしないと私の周辺にも危険を感じまして、はい」

「名目だけ？ 詳しく聞きましょうか」

……
数分後、回線が閉じた時、ウナトは満足そうに、笑みを浮かべていた。

その顔を引き締めると、別の回線を開く。

「私だ。ユーラシアの西部、中部と東部及び中東の独立派への資金と武器供与、いつでも開始できるようにしておけ。ああ、IRAや……」

ウナトはオーブを守るためのあらゆる方法に手をつけようとしてい

た。

誰もが忘れがちな事であるが、狸は立派な肉食獣である。

宇宙

ザフト軍事ステーション管制官では地球降下作戦の準備が始まっていた。

「しかし、なんとも篩った言い回しですな、積極的自衛権の行使とは」

「そう言ってくれるな。政治上の言葉だ、仕方ない」

ザフト司令官にリカルド国防委員長が答える。

「第一派で現在包囲されているジブラルタルとカーペンタリアから地球軍を追い払うと言うのはいいとしても、その後は？」

「さあてどうなるかな。無論我々として先の大戦のような戦争を再びやりたいわけではない。国民感情を納得させられるだけの上手い落としどころ見つけ、戦闘を終結させて後は政治上の駆け引き、と言う事になるのだろうが、またも核を撃ってきたナチュラルに対する憎しみは最早消えんだらうな」

「でしような」

「議長のお手並み拝見、と言う事になるか、その後は……」

呼び鈴が鳴ったので、アスランはドアを開けた。外出にプラントの者が付く手筈になっていたのだ。

外にいたのは……

「イザーク！」

「貴様あ！」

イザークはアスランの服の襟を掴み喉を締め上げ、部屋の奥へと連

れ込む。

「あ……うわ……」

「一体これはどういう事だ！」

「ちよっ、ちよっと待ておい……」

アスランはやっといザークを振りほどいた。

「何だって言うんだいきなり！」

「それはこっちのセリフだアスラン！俺達は今無茶苦茶忙しいつてのに、評議会に呼び出されて何かと思って来てみれば貴様の護衛監視だとお！？」

「ええ？」

「何でこの俺がそんな仕事の為に、前線から呼び戻されなきゃならん！」

「護衛監視？」

「外出を希望してんだろ？ お前」

もう一人、外にいたディアッカも部屋の中に入ってくる。

「ディアッカ！」

「おひさし。けどまあこんな時期だから、いくら友好国の人間でも勝手にプラント内をウロウロは出来ないんだろ」

「あ……ああ……それは聞いている。誰か同行者が付くとは。でもそれが、お前！？」

「そっだ！ ふん！」

「……」

「はあ〜」

相変わらずつんけんしているイザークにディアッカはため息をついた。

「ま、事情を知ってる誰かが仕組んだってことだよな」

エレベーターを降りながらディアッカが言う。

「……あ！……はあ……」

アスランの脳裏にデュランダルの顔が思い浮かぶ。アスランは微笑んだ。

「それで何処行きたいんだよ」

「これで買物とか言ったら俺は許さんからな」

「そんなんじゃないよ。ただちよつと……ニコル達の墓に」

「……………！」

「あまり来られないからな、プラントには。だから行っておきたいと思っただけなんだ」

アスラン達は車を借り、ザフトの軍人墓地へ着いた。

ミゲル・アイマン、ラストイ・マッケンジー、そしてニコル・アマルフイ等、先の大戦で亡くなった仲間達の墓に花束を置く。

「積極的自衛権の行使……やはりザフトも動くのか」

アスランが二人に尋ねた。

「仕方なからう。核まで撃たれてそれで何もしないと云うわけにはいかん」

「……………」

「第一派攻撃の時も迎撃に出たけどな、俺達は。奴等間違いなくあれでプラントを壊滅させる気だったと思うぜ」

「で、貴様は」

「え？」

「何をやっているんだこんな所で」

「あ……………」

「オーブは？ どう動く!？」

「……………まだ分からない」

「くっ……………。戻ってこい、アスラン!」

「……………！」

「事情は色々あるだろうが俺がなんとかしてやる。だからプラントへ戻ってこい。お前は」

「……いやしかし……」

「俺だって、こいつだって、本当ならとっくに死んだはずの身だ」
「ディアツカが口を挟む。」

「う……」

「だが、デュランダル議長はこう言った。『大人達の都合で始めた戦争に若者を送って死なせ、そこで誤ったのを罪と言って今また彼等を処分してしまったら、一体誰がプラントの明日を担うと言うのです。辛い経験をした彼等達にこそ私は平和な未来を築いてもらいたい』とな。だから俺は今も軍服を着ている。それしか出来ることがないが、それでも何か出来るだろう。プラントや死んでいった仲間達の為に」

「イザーク……」

「だからお前も何かしろ」

「……」

「それほどの力、ただ無駄にする気が」

「ふ……」

「何かおかしい」

「俺は、ザフトのアスラン・ザラだ」

「そうだ、戻って来い！」

「いや、それがわかるのに時間がかかったな、とね。ははは」
上を向いて、アスランは笑った。

「はい、デュランダル議長にアポイントを」
アスランは、議長に連絡を取った。

「良く来てくれた、アスラン」
デュランダルが言った。

「議長。議長の言っていた事……インパルス、ありがたくお借りします」

「うむ。制服を用意しておいた。着てくれたまえ」

「はい。ありがとうございます」

「……」

「わああ！」

制服に着替えたアスランを見てミアが歓声を上げる。

「これを」

デュランダルは何かの襟章を取り出した。

「これはフェイスの！」

「君を通常の指揮系統の中に組み込みたくはないし。君とて困るだろう。その為の便宜上の措置だよ。忠誠を誓うという意味の部隊、フェイスだがね。君は己の信念や信義に忠誠を誓ってくれればいい」

「……議長……」

「君は自分の信ずるところに従い、今に墮することなく、また必要な時には戦っていくことの出来る人間だろ？」

「そうでありたいと思っはいますが」

「君になら出来るさ。だからその力をどうか必要な時には使ってくれたまえ。大仰な言い方だがザフト、プラントの為だけではなく、皆が平和に暮らせる世界の為に」

「はい！」

「オーブの情勢も気になるところだろうから、君はこのままミネルバに合流してくれたまえ。あの艦にも私は期待している。以前のアークエンジェルのような役割を果たしてくれるのではないかとね。君もそれに手を貸してやってくれたまえ」

「はい！」

アスランは格納庫へ向かった。

機動力強化用のシルエット「フォースシルエット」を装備する。

「アスラン・ザラ、インパルス、発進する！」
目指すは、地球

「ん？ あれ、誰？」

マユが言った。ルナマリアがマユの視線の方を見ると、恰幅のいい男性が歩いてきた。

「あれ……オーブの氏族長の服よ」

「あら。いよいよ最後通告かなあ」

「……」

「結構好きだったのにな、この国。あ、ごめん、ルナマリアには辛いね」

「いいわよ、別に……」

ルナマリアは横を向いた。

「わざわざすみません、ご足労頂いて」

「いや、大切な事ですので直に伝えないと」

応接室に通されたウナトは答えた。

「では……早速ですが。今後のオーブは、中立を貫きます」

「ええー！」

アーサーが驚く。

「アーサー！……本当ですか？」

「本当ですとも。ただ、問題もある」

「なんででしょう？」

「わが国の法により、交戦国の艦船はわが国の領土に24時間しか留まれない」

「あー！」

ウナトが宰相になってから、オーブは「他国の軍隊を領海に入

らせない」と言う対応を取りやめていた。

それを唱えたウズミの時代に、すでにオーブの都合で恣意的に運用され、空文化していたと言う事もある。

「まあ、修理などで出航できない場合、相手国……この場合はオーブですな……の承認があれば引き伸ばしも可能だ。そしてオーブはそちらから要請があった場合、承認する気しております」

「ありがとうございます」

「もう一つ。オーブ自身は中立ですが、地球軍側に義勇兵を出す事になるでしょう。貴艦と戦う事になるやも知れん」

「それは……」

「気にせんで下さい。それが世の中です。そこで、話は元に戻るのです。……いつそ、戦争終結までオーブに留まりますか？ 我々としてはそれでも構わない。ミネルバへの警戒を名目にオーブ義勇海軍は領海外に遊弋させておくだけで済むかも知れない。オーブの血は流れずに済むかも知れない」

「それは……しかし……」

「ま、無理でしょうな。では、善意の警告です。出航するなら早い方がいい。現在もカーペンタリアを包囲している地球軍海軍から、フリゲート艦がこちらに向かって来ています。数は8隻。ミネルバがこのままここに留まれば、包囲の網もきつくなるでしょう」

「……よろしいのですか？ そのような情報？」

「あなたはこの話を誰にも言わない。私もこのような事があったなどと話さない。それでよろしい」

「ありがとうございます」

「修理させて頂いた者として、ミネルバならばその程度の相手、振り切れると思っっていますが、もし、無理なようなら、思い切っただけオーブへ引き返してもよろしいですよ」

「いいのですか？」

「ミネルバの出航の時、我が海軍も出航します。先頭艦の中身は無人です」

「無人……ですか？」

「もしオーブ海軍艦艇が、ミネルバに攻撃を受けたら、オーブは当然の権利として貴艦を攻撃する権利を得る。まず降伏を勧告する事になるでしょうな。受け入れられなければ攻撃です。いいですか。」

オーブの軍艦艇に攻撃を受ければ降伏を勧告する」

タリアはウナトの言外の意味を悟った。もしミネルバがオーブ軍に降伏すれば、ミネルバはオーブの物となる。乗員は拘束されるだろうが、安全は保障される。

タリアは自然と頭が下がる。

「何から何まで……ありがとうございます！」

「では、話はそんな所です。また、落ち着いたら会いたい物ですな」

「ええ、ぜひ！」

第20話「超種運命の大戦<20>

「あれが、『地球の天使』か」

フリーフォトジャーナリスト、ジェス・リブルは遠くからセトナ・ウインターズを見てつぶやいた。

「ああ。ほんとにラクス・クラインにそっくりだろ」

護衛のカイト・マディガンが言う。

「ああ……驚いちまった」

「ユニウス7落下までは医大に在籍。落下後は各地で救援活動を積極的に行っている。ラクス・クラインが『プラントの歌姫』と言われているのになぞらえて付けられた異名だ」

「なあ、生き別れの双子の姉妹とか……」

「ないない。『地球の天使』のバックはジブリール財閥だ。コーデイナーなんか支援するかよ」

「そりゃあ、ぜひ取材したいなあ！　おい！」

「あ、待て！」

「お断りします」

ジェスの取材申し込みを、セトナは言下に撥ね付けた。

「今は、仕事中です。フォトジャーナリストって事は、写真を撮られるのでしょうか？　被災者の方はそう言うの、嫌がる方が多いんです」

「そうですか……」

ジェスのがつくりした声を聞いて、セトナは少し口調を和らげた。

「仕事の後、写真を撮るのは私だけ、と言う事なら……」

「やったー！」

ジェスはガッツポーズをした。

ジェスは、許可をもらって被災者の簡易宿泊所を見学した。カメラをぶらさげていると、撮ってくれ、と言う人もいる。ぜひ世界に伝えてくれ、と言う人もいる。

ジェスは喜んで撮らせてもらった。

ついでにそう言う人からセトナの評判を聞きだす。

「そう言えば、あの大きな猫はセトナのペットなのか？」

「ほっほっほ。兄ちゃん」

老人が答える。

「あの大きな猫さんを撫でてるとな、元気が出るんじゃよ。近くの被災者達も、頷く。」

「お待たせしました」

ジェス達は、ようやく、セトナの診察室へ呼び出される。

「お疲れ様でした！」

「ふふ、ありがとう」

「じゃあ、さっそくなんだけど……」

外からへりの音が聞こえる。

その時、セトナの護衛が入ってきて、セトナに封書を渡す。

「急ぎだそうです。セトナ様」

「まあ、なんでしょう。ジブリールお兄様から？」

セトナは封書を開ける。

「……まあ！ まあまあ！ アグニス達が！ すみません、ジェスさん。急用ができました！」

セトナは急いでへりに乗り込む。

へりは飛び立つと、急速に飛び去っていく。

ジェス達はぽつんと残された……。

入れ替わりのように、一機のモビルスーツが降りて来る。

「セトナ様はどこだー！」

「あー。今のへりで、行っちゃったよ？」

ジエスはふぬけた声で答えた。

「あ……。くくう、セトナ様、今行きます！」

再びモビルスーツは飛び立っていった。

「なんだったんだ？ありゃ？」

「さあ？」

「進入角修正プラス0000015」

「進路クリアLC3バランサー、オールグリーン」

「アキダリア、地上に降下する！」

この日、アグニス達は地球に降り立った。

「タイムリミットか」

バルトフェルドはコーヒーを飲み干すと、通信機をいじりだした。

「艦長」

バートがタリアに呼びかけた。

「どうしたの？」

「これを」

『……ミネルバ聞こえるか。もう猶予はない。ザフトは間もなくジブラルタルとカーペンタリアへの降下揚陸作戦を開始するだろう』

「秘匿回線なんですがさつきからずっと」

『そうならばもうオーブもこのままではいまい。黒に挟まれた駒はひっくり返って黒になる。脱出しろ。そうなる前に。聞こえるかミネルバ』

タリアは送信ボタンを押した。

「ミネルバ艦長、タリア・グラデイスよ。貴方は？ どう言う事なのこの通信は」

『おーこれはこれは。声が聞いて嬉しいねえ。初めまして。どうもこうも言ったとおりだ。のんびりしていると面倒な事になるぞ』

「匿名の情報など正規軍が信じるはずないでしょ？ 貴方誰？ その目的は？」

『んー……アンドリユー・バルトフェルドって奴を知ってるか？

これはそいつからの伝言だ』

「砂漠の虎……」

タリアはまさかと言う思いでつぶやいた

「ええ？」

アーサーはやっぱり驚いた。

『兎も角警告はした。降下作戦が始まれば大西洋連邦との同盟の締結は押し切られるだろう。アス八代表も頑張つてはいるがな。留まらるることを選ぶならそれもいい。あとは君の判断だ、艦長。幸運を祈る』

通信は切れた。

「どうします、艦長？」

アーサーが尋ねた。

「どうするもこうするもないわ。どっちにしろ明日出航の予定に変更無しよ。準備、万全にね」

「へブズベースですか。地球軍の本部と言う事ですが？」

ナーエはアイザックに尋ねた。

「ええ。先の大戦でアラスカのJOSH-Aが自爆してから……」

「なんだか気分が悪そうですね？」

「ええ、私達ザフトにとって見れば、敵の総本部ですから……」
その時、通信が入った。

『こちら、ヘブンスベースコントロール。『アキダリア』 応答せよ』
「こちらアキダリア」

『誘導に従い第3番ゲートに入港せよ』

「こちらアキダリア。了解した」

「まあ、アグニスだわ！　ほんとにアグニスだわ！　大きくなって
！」

「セトナ……姉さん？」

アキダリアから降り立ったアグニスは目を疑った。あんなに探しても見つからなかった姉が、ここにいる。

「久しぶりね、アグニス」

「それにしても何故地球に？」

ナーエが尋ねる。

「あなたはオーストレールのシンボル。みんなのリーダーとなるべく生み出された人だったのに？」

セトナは一瞬目を閉じると微笑んだ。

「人はどのように生きるか。それを自分で決める事ができるのです。私は、皆のシンボルとしてお世話されて生きるより、人々に尽くして歩んでいきたい……そう思ったのです。でも、それは火星では許されないから……」

「それで地球に」

「ええ。運良く、ジブリールお兄様と知り合えて……」

そのセリフで、セトナの後ろに控えていたジブリールは前に進み出た。

「私は国防産業連合理事、ロード・ジブリールです。大西洋連邦大統領ジョゼフ・コーブランドより、あなた達への対応を一任されており。本来ならば、首都にでもお迎えしたかったのですが、なにぶんプラントと開戦してしまいました。いつそヘブンスベースなら訓練された兵士ばかり。間違いも起こらないかと思った次第」

「ご配慮、感謝する」

「では、積もる話もあるでしょうが、まずこちらへ」
ジブリールは微笑んだ。

セトナは、その微笑に微かに作ったような影を認めた。

「お兄様？　どうかありませんか？」

「いや、なんでもないよ」

ジブリールはセトナに笑った。

よかった……本物の笑顔だ。気のせいだったのね……。
セトナは安堵した。

「では、先に政治向きの話を済ませてしまつよ。待っていてくれ」

「ええ。では後でね、アグニス」

セトナは応接室を出て行った。

「では、火星はどこも敵になりたくない」と

「そうだ」

「地球連合も同じですよ」

「では、何故、プラントと開戦するなどと言う愚かな事を！」

「過去からの積み重ねがあるのですよ。アグニスさん。ニユートロ
ンジャマーの地球上への無差別投下からこっちの。プラントは……」

ああ、私はプラントとコーディネイターを一緒にたにはしません。
安心してください。プラントは、ユニウス7の落下で管理能力がな
かった事も露呈させ。要するに、地球連合はプラントへの信頼を完
全に失っているのです。この度の開戦は地球に対する危機を取り除
くための緊急避難と考えられたい」

「だが……！」

ジブリールは静かに片手を挙げ、アグニスのセリフを遮った。

「マーシヤンは敵を作りたくないとおっしゃった。そうですね？」

「ああ、そうだが？」

「これをご覧下さい」

ジブリールは、何十枚かの書類をアグニスに手渡した。

「……？」

アグニスはその書類を見た。なんの変哲もないような、ただの軍人の経歴書にしか見えない。しかし、凝ってはいる。

家族のデータ、写真まで載っている。

「この者なんかは子供が生まれたばかりでして。かわいいでしょう」
ジブリールが示す先には子供を抱えて幸せそうに笑っている女性が写っていた。

「ええ。これが、何か？」

「初陣は如何でした？」

さりげなくジブリールは言った。

「ああ、最初は緊張……あ……」

「半分ブラフで言ったのですがね」

ジブリールは唇を吊り上げた。そして、宇宙の戦場を捉えた写真を次々にテーブルの上に並べだした。

「……あ……」

アグニスは気づいた。皆、自分のモビルスーツ、デルタが移っている物ばかりだと。

「……何故殺した」

もはや作り笑いを消して、ジブリールは言った。

「……え？」

「渡したのは、先日のザフトとの戦いで君達マーシャンのモビルスーツに殺されたと推定された者達のデータだ　何故殺した」
再び、眼光鋭くジブリールは問う。

「こ、これは、戦いなど愚かだと思ったから！」

「だから殺した？　彼らが、地球軍がお前達マーシャンを敵ともしてもいないのに？」

「違う！　デュランダル議長は俺達に誠意を示してくれた。だから

……」

「だから殺した？ 地球連合は君達に誠意を見せた。では、次はザフトと戦い、ザフトの兵を殺してくれると？」

「違う！」

「では、何故殺した！ 中立を捨て地球軍を敵に選んでまで！

これは火星の地球への敵対行為とみなしてよいか！？」

「違う！」

「エイプリルフル・クライシスの惨禍から、這い上がった我らだ。火星との距離の防壁など、防壁になると思うなよ。地球の平和のために、必ず叩き潰す。火星が地球と敵対すると言っなら……かかってこい！ 相手になってやる！」

「ちが……」

言葉を失うアグニス。

その時、ナーエが進み出て、深々と頭を下げた。

「地球軍と戦ってしまったのは、我らの浅慮によるもの。決してマーシヤンの総意ではありません。この場では、如何様にお詫びしようにもしようがありませんが……罪は我らのみあるもの。なにとぞ、マーシヤンの総意と受け取られますな」

「ナーエ！ お前は俺を止めたじゃないか！ 罪があるなら俺に……」

……」

「アグニス。まずは謝罪を？」

「すまなかつた。俺の短慮だった」

アグニスは頭を下げた。

「……」

「……」

「……」

ジブリールは何も言わない。だが、アグニス達は頭を下げ続けた。

「……この事は、私の段階で留めておきます」

長い沈黙の後、ジブリールは言った。

「……」

「その書類は差し上げます。一生忘れないで下さい。それがあなたの贖罪です。……では、セトナを呼んで来ましょう。水入らずでゆつくりなさい」

アグニス達は再びジブリールに頭を深く下げた。

「ああ、ジブリール様、どうしましょう?」

セトナを呼びいれ、自分は外に出たジブリールは話しかけられた。
「ん?」

「セトナ様に会わせると言う方が、モバイルスーツに乗ってやってきてまして……。マーシャンと名乗っております。一応降ろさせ、監視をつけてありますが」

「ふむ。連れて来い」

連れて来られたのは黒髪の青年だった。

「ほう、マーシャンと言うのは君か。実はオーストレール・コロニアのアグニス・ブラーエ達も来ているのだがね、知り合いかな?」
「げ、アグニス!? ……ふん、俺はディアゴ・ローウエルだ。あいつらがさっさとセトナ様の搜索をあきらめた後も、探し続けていたんだ!」

「この事は、どうやって?」

「被災地からへり、飛行機と追ってきたんだ。苦労させやがって!」

「いいでしょう。セトナと会うがいい」

「ほんとか?」

「今、セトナはアグニス達と会っているところだ。行きなさい」
ジブリールは微笑んだ。

第21話「金色(こんじき)の艦隊<1>

「駄目ですね。地球軍側の警戒レベルが上がっているのか、通信妨害が激しくレーザーでもカーペンタリアにコンタクト出来ません」
バートはタリアに報告した。

タリアはため息をついた。

出航に当たってカーペンタリアの了承を取りたかったのだけ……。
「いいわ。命令無きままだけど、ミネルバ明朝出港します」

「艦長……」

「全艦に通達。出れば遠からず戦闘になるわ。気を引き締めるようにね」

「はっ！」

『……今回の地球連合とプラントとの開戦について、ウナト・エマ・セイラン宰相はオーブは中立を維持するとの方針を表明……』

「へえ、以外だったな」

休憩室でテレビを見ていたマユは言う。

「ん……」

ルナマリアはなんとも言えない顔をしていた。

「でも良かったじゃない。祖国と戦わなくて。知り合い、いるんでしょ？」

「まーね」

「でも、心配か」

その時、廊下から話し声が聞こえてきた。

「うふふ、シンったらもう」

「えへへ」

タリアとシンの声だ。

マユの顔が陰しくなった。

「あ、お姉ちゃん！」

シングがマユを見つけた。

「じゃあ、またね、シン」

「はい、艦長」

タリアはシンに手を振ると去っていった。

「このっ」

「いったー！ なに頭叩くんだよ、お姉ちゃん」

「ふん、おばさん相手に鼻の下伸ばしてんじゃないわよ」

「なに？ お姉ちゃん、艦長の大人の魅力って奴に嫉妬してるの？」

……シンはまた叩かれた。

「どうやら、オーブは中立を保つか……。我々の予想とは違ってたな」

バルトフェルドはつぶやいた。

「ええ、ですが、とりあえず、ですわ」

ラクスが答える。

「『とりあえず』かねえ？」

「……」

ラクスは右手の親指を噛み齧しい顔をして俯く。

「ラクス、探しちゃった」

その時、部屋に入ってきたキラが声をかける。

「ああ、キラ！ 調子はどうですか？」

顔を上げたラクスの顔は一瞬にして笑顔に変わっていた。

「うん、大丈夫だよ。オーブは中立を守るって」

「ええ、見てましたわ。良かったですわ、本当に」

「さすがカガリだよ！」

「ええ、そうね……。さあ、そろそろ食事にしましょうか」

ラクスはキラの手を握るとキッチンへ向かう。

残されたバルトフェルドは目を閉じてむっとり黙り込んでいた。

「どうしたの？ 食事よ？」

「ああ、ラミアス艦長、今行くよ」

バルトフェルドは目を開けるとキッチンの方へ歩いていった。

「ふう、なんとか無事に済みましたね？」

「……」

アキダリアの前で、ナーエの言葉にアグニスは無言だった。

「これでわかりましたね？ 短慮はいけないと？」

「……ああ」

「ベースマテリアル。どちらかと言えば不足しているのはプラントの方でしょうが、プラントにも供給、と言っわけにもいかなくなりませんね？ ジブリール氏は、二度目の利敵行為を決して許さないでしょうからね？」

「ああ……。俺は、俺が殺した人達の遺族に謝罪に回りたいが」

「それは止めた方がいいですね。ジブリール氏がわざわざ、テラナ―とマーシヤンの関係を考えて、無かつた事にくれたのですからね？ ディアゴ、あなたはこれからどうします？」

「決まってるじゃねえか。セトナ様の手伝いだ！」

「ふふ、ありがとう、ディアゴ。心配かけましたね」

セトナはディアゴに微笑んだ。

「……うう、感激っす！」

「そうですね。くれぐれもマーシヤンの評判を落とさないようにしてくださいよ？」

「当たり前よ！」

「セトナ様、ジブリール様はお見えにならないのでしょうか？ もしやまだ……？」

ナーエは心配そうにセトナに尋ねる。

マーシャンがジブリールの怒りを買ってしまった事を心配しているのだ。

「お兄様はそんな方じゃないわ」

セトナは答える。

その時、ジブリールが一人の兵士を連れてやってきた。

「やあ、積もり話も一杯出来たかな」

「はい。おかげさまで！」

「そうか。セトナはこれからどうする？」

「被災地での活動を続けます」

「そうか。……マーシャンの諸君、君らにはプラントのオブザーバーがいるそうだな」

「ええ、そうですが？」

「では、地球軍からもオブザーバーを出そう」

ジブリールが連れて来た女性兵士が前に進み出て、敬礼する。

「イサワ少尉であります」

「このイサワ少尉はエイプリルフル・クライシスで家族を失っている。プラントにも言い分はあるうが、アースノイドの言い分にも耳を傾けてくれたまえ」

「はい」

……

アキダリアが発進する。

「どう見る、ジブリールを」

「悪人ではないが、善人とも言いがたいですね」

アグニスの問題にナーエが答える。

「はあ？ 政治は善悪じゃないでしょう？ マーシャンってばそんな事もわからないほど初心ですか？」

イサワ少尉が口を挟んだ。

「いや……あー。イサワ少尉、名前はなんでしたっけ？」

「マホ・イサワです。まほりんって呼んでもいいですよ？」

「いやあ……。とりあえずオーブに向かいましょうか、アグニス？」

「……そうだな。では、行くぞ、オーブへ」
「了解。目標オーブ！」

アグニス達が去り、セトナ達も去った。

ジブリールには次の予定が待っていた。

「まったく忙しいな……」

ジブリールは飛行機に乗り込んだ。

……

「やあ、良く来てくれた」

飛行機から降り、自動車である邸宅に駆け込んだジブリールは急いで衣服を整え、ネオ・ロアノークを出迎えた。

「これはわざわざ盟主、ありがたくあります」

「さあ、フロントムペインの諸君もご苦労だった！ 良く任務をやり遂げてくれた。バヤン中尉、コーザー中尉、ホルククロフト少尉、それから……」

「ジョン・デイカー少尉です」

「ナイトハルト・ミラー少尉です」

「ほう。卿の噂は聞いている。鉄壁ミラーとは卿の事が」

「いえ、それほどでも」

「それで最後の君は……」

「サノキチ・ハラダ少尉です」

「ああ、そうだった。奇襲を見事成功してくれた。さあ、入ってくれたまえ。軽く食事でもしようじゃないか」

……

「ははは。実にうまい。イサワの奴に悪いな。我らばかりうまいものを食べて」

ハラダが笑う。他のメンバーもうまさうに食事を食べている。

「では、オーブに言っておこうかな。マーシャン達が着いたらうま

い物を食わせてやってくれと」

ジブリールが受けて冗談を飛ばす。

テールブルが笑い声に包まれる。

「ところで、新型機、ウィンダムはどうだった？ プラント攻略戦では手荒くやられてしまったが」

ジブリールが話を振る。

「基本的には機動性が高く、悪くはない機体です」とりあえずネオは褒めた。

「ですが、新兵には向かないでしょう。防御装甲が薄すぎる。訓練の様子を見ていましたが、新兵はウィンダムの機動力に振り回されていましたね。あれでは航空戦力としても中途半端です」

「んー。そうか。では、どうする？」

「空はレイダー制式仕様機を量産。ザフトにはあまり数はいないでしょうがPS装甲対策にアフラマズダとダガー用のMX703Gビームライフルを装備する後期型を量産すればいいでしょう。後、105ダガーとの連携を考えて、グラスパー系も量産したらよいでしょう。これなら戦闘機からモビルスーツへの転換がうまくいかなかった者達も拾い上げられます」

「ふ……む。現在開発が進められている大型モビルアーマーはどうだ？」

「……小官の考えですが……。モビルスーツは元来コーディネーター特有の反応速度や判断能力の速さを有効に活用するための兵器です。物量が圧倒的に劣るザフトが、コーディネーターの優位な『質』を生かすため、攻撃力が高く小回りが効く兵器を作ったのがモビルスーツです。そういう兵器であるモビルスーツをナチュラルパイロットに大量に配備するのがそもそも間違いです。先の大戦では、ほとんどのパイロットは、シールドの後ろに隠れて銃を撃つ、事しかできませんでした。これは、オーブ軍も同じです」

ネオはここで言葉を切った。

「興味深いよ、続けてくれ」

「では、どうするか。一つは、連合の圧倒的優位である『数』を利用する事です。先の大戦でのザフトの戦い方は、『質を生かして敵の中心に飛び込みフォーメーションを攪乱した上で、混乱状態にある敵を撃破もしくは、突破して艦を狙う』事です。その戦法は変わっちゃいないでしょう。それがわかつているなら打つ手はあります。数を生かして敵が飛び込めないほどの弾幕を張る、敵が飛び込んできたときに対応するフォーメーションを用意する、など。事前に訓練しておけばなお効果は上がるでしょう」

「うん」

ジブリールは頷く。

「もう一つは兵器にモバイルスーツが突破できないほどの防御力を持たせる事です。機動力では、コーディネーターにかなわないとあきらめて防御力に重点を置けばモバイルスーツを足止め・倒すことは充分可能です。その意味で、ザムザザーのようなモバイルアーマーは開発を進めてもよいかと思います。ですが、ザムザザーは機体が大きすぎます。しかもそのでかい機体をバーニアで強引に浮かして移動しています。このような方式では殆どスピードができません。しかも機体を支えるために大出力バーニアを複数装備しているので燃費が最悪です。このような機体は到底モバイルスーツ戦はできません。艦船攻撃に使うくらいしかありませんが、武装が貧弱。使い物にするにはもっと大型化して防御火器を充実、艦船攻撃用の大口徑砲を積んで、護衛にモバイルスーツを随伴させて……。いっそ陽電子砲リフレクターは艦船に載せた方がいいのでは？ いや、モバイルアーマーに積んでいてもいいですが、速度と機動性のいい奴を開発して欲しいですね。グラスパーやエグザスを強力にしたような。いや、私の好みも入ってますが。はは」

「やれやれ、ザムザザーも駄目出し食らったか」

ジブリールは面白そうに笑った。

「陽電子砲リフレクターか。宇宙艦に載せる計画は確かに上がっていたが。……ちょっと見てくれ」

ジブリールはネオにファイルを渡した。

「ほう、『プリンス・オブ・ウェールズ』ですか。新型ですね。月基地で建造中の」

「ああ、2年前の戦ではモビルスーツに戦艦を落とされまくったのでね、対空火器を充実させてある」

「……全部ビームになっていきますな」

「ああ、何か？」

「こちらで発明された技術は早晩プラントでも発明されると考えた方がいいでしょう。ビームシールド対策が必要です」

「では、どうする？」

「んー。アンチビームコーティングされた銃弾をイーゲルシュテルンで撃ち出す、と言うのはどうです？」

「わかった。検討させよう。話は戻るが地上戦力はどうする？ 地球軍はまず地球からザフトを叩き出す方針だが。モビルスーツが頼りにならないとなると……」

「まったく頼りにならない訳ではありません。やはりモビルスーツには汎用性と言う利点がありますから。それに、もうフォルタレザ市テロはご存知でしょう？」

「ああ」

「先の戦でのスエズ攻防戦の事もあります。やはり、もうリニアガンタンクでは力不足です。……しかし、装甲が薄いウィングダムは止めた方がいいでしょう。それよりも兵が扱いに慣れたダガー系列を……それも、ラミネート装甲を廃し、装甲を削減したダガーLより、装甲を強化した、PS装甲かTP装甲を使った105ダガーをお願います。これが現場の声です」

「……そうは言っても、君も直接に確認したろう。現在ザフトの武装はビームが主になっている。意味無いのでは？ それにコストがな」

「無いよりましです。全くビームを防げないということでは無く、ビームマシンガンレベルのダメージなら耐えられます。それに、ザ

フトは全てをビーム兵器に切り替えた訳ではありません。すべて105ダガーにすれば量産効果もあるでしょう。もしだめでも、モビルスーツに向いていない者を既存の兵器に振り分ける事で、数を絞る事もできます。盟主は、ザフトとの戦を長く続けるつもりはないのでしょうか？ ここはすべての力を集中し、一点突破を図るべきです」

「結局ウィンダムはだめだと言う事か」

ジブリールは苦笑した。

「……わかった。国防省に話を通しておこう。後で直接開発部に話してくれ」

「ありがとうございます」

「君達の奪ってきた機体はさっそく役に立っているぞ。ガイアを参考にしてバクウ等に対抗すべく新しいダガーが開発中だ。歓迎されるだろう……」

彼らが去った後、ジブリールは古いアルバムを開いていた。

二人の子供が写っている写真がある。

「くっ」

ジブリールは呻いた。

「幼い頃の友すら偽りの記憶で縛らねばならんとは……なさけないっ……」

「やあ、ギナ。お出迎えご苦労さん！」

ユウナが到着したのはアメノミハシラ オープの宇宙ステーションである。先の大戦以来、半ばオーブの支配下から外れ、サハク家の姉弟 ロンド・ミナ・サハクとロンド・ギナ・サハクが支配している。

「ふん」

ギナは鼻息を立てる。

「ありがたく思え」

「相変わらずモバイルスーツで一人でふらついているかい？」

「くっ……」

「ん？ なんだ？」

「なんでもない！ さっさと姉上の所へ行くぞ」

「やあ、ミナ！ お久しぶり！」

「久しぶりだな、ユウナ……。テレビは見た。オーブは大西洋連邦と同盟する物と思っていたが」

「さすが僕の父って所だね」

「ふ……。意外とやる。もし同盟していたらオーブとは距離を置くつもりだったが」

「おっと、僕は別に同盟を忌避しじゃない。国益になるなら同盟もまたよしさ」

「わかつているよ。で、用事は何だ？」

「うん。これを見てくれ」

ユウナはミナに書類を手渡した。

「書類は概要だけだ。残りはチップにある」

「ほう……。特殊な装甲……。ビームを跳ね返す？ 『ヤタノカガミ』？ もう一つあるな。ビーム兵器に対する耐性、物理的な衝撃に対する耐性共に非常に強い、か」

「それを、実際に出来るかどうか追試をして欲しいんだ。無重力でしか出来ない物もあるらしい」

「……。『ヤタノカガミ』はともかく、もう一つの装甲のデータ、地球にいるお前がどうやって手に入れた？」

「さあ？ 父上から預かったただだからね」

「子供の使いか、お前は。やってもいいが、代金は払ってもらっぞ。」

希少鉱物が必要だ」

「ああ。僕と一緒に運ばれてきたろう。現物で払うよ。はい、これがリスト」

「……希少鉱物などか……多すぎるな。国家予算並みだぞ」

「実は、話はこちらからね。オーブ宇宙軍を再建するのに力を貸して欲しい。君達は本国から距離を取っているが、そこをなんとか。月に置いてあるイズモ級2隻も指揮下に置いてくれ」

「大盤振る舞いだな」

「あ、その際には、『ヤタノカガミ』を艦船の装甲に使ってくれとの話だよ」

「もう一つの装甲の方は使わんのか？」

「あー、あれは、どうやら『ヤタノカガミ』と違って量産効果が認められないらしい。艦船に使うと金がかかりすぎる。エース用のモビルスーツにでも使ってくれ。……オーブ本土を制圧できるような奴を作ってくれ。雛形はいくつかつけて置いた。ブラックボックスになってる部分もあるがね。それはまあ必要なだけ持ってきた」

「……話が物騒になってきたな。裏に何がある。はっきり言え！」

「んー。父の言う事には、クーデターの危険があるそうだ」

「クーデター！？ 一体どこの派閥だ？ ウナト宰相は現実と理念とうまく合わせたと思うぞ。大西洋連邦派ではないとすると、アス八派か？ いや……」

「ああ、カガリと父上の間もうまく言っている。なんと言うか、不気味だそうだ」

「不気味？」

「ああ、はっきりとはしないが、知らずに真綿で首を絞められているように浸透しているような、そんな感じだそうだ。特にやっぱり軍があぶない。義勇兵として国の外に出すのもその対策を兼ねてさ。で、はい、これ」

ユウナはミナに封筒を渡した。

「なんだ？」

「カガリの委任状さ」

ミナは封筒からそれを取り出した。

『全責任は私が取る。危急の際にはオーブのために最善と信ずる行動を取られたし。』
オーブ連合首長国代表首長カガリ・ユラ・アス八

ミナは一瞬顔をほころばせた。が、すぐに顔をしかめる。

「余計な苦勞をさせる」

「それがノブレス・オブリージって奴だろう？ 僕も本国に帰れば義勇兵に加わる。国の上層部が参加していないのは士気に関わるからね」

「まあ、いいだろう」

『この時こそが、オーブ宇宙軍第一期黄金時代の始まりだったのだ』

CE300年代の歴史家ヨッシー・アラマッキー著『オーブ宇宙軍史』より。

第22話「金色の艦隊<2>

「では、こちらからもちよつと頼みがある。ギナ、ロウを呼んでくれ」

「ふん」

「なんだ？ 機嫌悪いな」

「ふふふ。凄腕の傭兵に殺されそうになった所を、今から呼ぶロウ・ギユール ジャンク屋に助けられてな。それ以来懲りたのか、一人で出撃する事がなくなつたわ」

「ああ！ それで！」

「おう、この人か？」

ギナが人を一人連れて帰ってきた。

「ああ、ロウ、こいつがユウナ・ロマ・セイランだ」

「やあ、よろしく！」

ロウは手を出す。

「よろしく。で、頼み事とは？」

「いやあ、俺ちよつと火星に行つてただけども、やっと地球つてとこで、一緒に火星から来た奴にモビルスーツをばくられちゃつて！」

「そりゃ、災難だつたねえ」

「で、火星から地球に使節団が来てるはずなんだわ。オーブにも寄るはずだから、待たせてもらおうかと思つて」

「もう、来て、すれ違いかもよ？」

「それでも、情報は手に入る……実は、ぱくつたのは使節団の一員じゃないんだけどさ。なんか手がかりがないかと思つて」

「おーけー！」

オーブ

『発進は定刻通り。各艦員は最終チェックを急いで下さい。砲術B班は第三兵装バンクへ。コンディションイエロー発令。パイロットはブリーフィングルームへ集合して下さい』

「やれやれ、せっかくオーブが中立守ったってのに、出航かぁ。もう少し居たかったな、この国」
マユは天井を見上げる。

「しかたがない。時間がたてばカーペンタリアの地球軍がこちらへやってくる」

レイが答える。

「ま、そうなんだけどね」

マユとレイが会話している間、ルナマリアはモニターから外を眺めていた。

「やっぱり名残惜しいかい？」

シヨーンがルナマリアに話しかけた。

「名残惜しい……かなあ。複雑です」

「まあ、帰る所がある奴はいい」

「……あ……」

シヨーンの故郷はユニウス7だった。

「ああ、気にするな。もう、吹っ切れてる」

さばさばした声でシヨーンは言った。

「カーペンタリアまで、頑張ろうぜ！」

「ええ！」

シヨーンは去っていった。

「シヨーンは……強いな」

ルナマリアはつぶやいた。

「あたしも……頑張らなきゃ」

「FCSコンタクト。パワーバスオンライン。ゲート開放」

発進準備を進めるアーサーの声を確かめて、タリアは命令する。

「前進微速。ミネルバ発進する！」

「前進微速。ミネルバ発進！」

オーブ軍本部

「ミネルバ出港しました」

オペレーターがウナトに報告する。

「かなりの高速艦と言う事だからな。領海を出るのも直ぐだろう。地球軍の様子はどうか」

「哨戒艇の報告から、もう領海の近くまで来ているものと」

「こちらの配備は終わっているな」

「はい」

「ふん、さあて、どうなる事かな？」

ウナトは、ザフトの最新鋭艦たるミネルバが情けない戦いを見せた場合、プラントを見限るつもりでいた。

もともと、ミネルバがあぶなくなつた時に、ウナトが示唆した行動をとつた場合、裏切るつもりは無かつたが。

もしそうなつた場合、オーブはミネルバを手に入れる事ができる。

地球軍はミネルバを無力化できる。ミネルバの乗員は身の安全を得られる。誰も損をする者がいない様にウナトは配慮したのだ。

「間もなくオーブ領海を抜けます」

「降下作戦はどうなつてるのかしらね。カーペンタリアとの連絡は？ まだ取れない？ シン？」

「はい。呼び出しはずっと続けているんですが」

「本艦前方20に多数の熱紋反応」

「え！？」

「これは……地球軍艦隊です。ステングラー級1、ダニロフ級2、他にも数隻ほどの中小艦艇を確認。本艦前方左右に展開しています」
「えええッ！」

「想定範囲内よ。驚かないの、アーサー。地球軍の足は速かった
ようね」

「後方オーブ領海線にオーブ艦隊」

「え！？」

「展開中です。……？ 先頭艦がえらく突出しています」

「先頭艦……？ そう」

タリアは微笑んだ。

「オーブ艦隊はとりあえず気にしないでいいわ。コンディションレッド発令。ブリッジ遮蔽。対艦、対モバイルスーツ戦闘用意。大気圏内戦闘よアーサー。解ってるわね」

「は、はい！」

「コンディションレッド発令。コンディションレッド発令。パイロットは搭乗機にて待機せよ」

「艦長、タリア・グラディスよりミネルバ全クルーへ」

タリアは全クルーに通達する。

「現在本艦の前面には空母1隻を含む地球軍艦隊が展開中である。地球軍は本艦の出港を知り、網を張っていたと思われる。本艦はなんとしてもこれを突破しなければならぬ。このミネルバクルーとしての誇りを持ち、最後まで諦めない各員の奮闘を期待する」

「ランチャー2、ランチャー7、全門パルシファル装填。シウス、トリスタン、イズルデ起動！」

「ルナマリアには発進後あまり艦から離れるなど言って。レイとマユは甲板から上空のモバイルスーツを狙撃」

「はい」

「イズルデとトリスタンは左舷の巡洋艦に火力を集中。左を突破する！」

「はい！」

『カタパルト推力正常。針路クリアー。セイバー発進どうぞ！』

「ルナマリア・ホーク、セイバー、出るわよ！」

「ザク、レイ・ザ・バレル機発進スタンバイ。全システムオンライン。発進シーケンスを開始します。マユ・アスカ機発進スタンバイ。ウィザードはブレイズを装備します」

「海に落ちるなよ、マユ。落ちては拾ってはやれない」

「意地悪ね」

レイとマユ、シヨーンとゲイルは上甲板に上がって対空砲火を作り出す。

セイバーはダイブ&ズームで襲って来る地球軍モビルスーツを翻弄する。

「このままなら、いける！……あ、あれは！？」

それはミネルバからも確認された。空母から何かが、発進してくる。

「アンノウン接近。これは……」

「ん？」

「光学映像出ます」

「なんだあれは！？」

「モビルアーマー……」

タリアはそのモビルアーマーの凶悪な人相に息を呑んだ。

「あんなにデカイ……！」

「あんなのに取り付かれたら終わりだわ。アーマー、タンホイザー起動。あれと共に左前方の艦隊を薙ぎ払う」

「ええー！？」

「沈みたいの!？」
「あはいー! いいえツ! タンホイザー起動! 射線軸コントロ
ール移行! 照準、敵モビルアーマー!」
「アーサーは、ごくつと息を呑むと言った。
「てえ!」

盛大に水煙が上がる。そしてそれが晴れると……

「「ああ……」」

「ああ……タンホイザーを……そんな……跳ね返した?」

「取り舵20、機関最大、トリスタン照準、左舷敵戦艦」

タリアが一瞬の呆然から立ち直ると指示を出す。

「でも艦長! どうするんです? あれ……」

「貴方も考えなさい! マリク、回避させる」

「はい!」

「シン、ルナマリアは? 戻れる?」

「あはい」

「させない!」

地球軍のモビルアーマーがミネルバを狙おうとする。

ルナマリアは上空から逆落として射撃する。

!

何かに弾かれる。モビルアーマーのビーム砲が、上空を狙う。

「くうう、相手がこいつだけならどうにでもできるのに!」

スラスターを吹かしてモビルアーマーを振り切り、上昇すると、ミネルバに接近する地球軍のモビルスーツを追い散らす。

「あ、艦長!」

「なに、シン？」

「通信です！」

「どこから？ 出して」

『……ミネルバ聞こえるか？』

ミネルバの状況とは打って変って落ちて着いた声が答える。

「聞こえるわ。貴方は誰？ こっちは忙しいのよ？」

『こちらはザフトのアスラン・ザラ。貴艦への着艦許可を求む』

「ええー！」

「アスラン・ザラ！？ 残念だけどその暇はないわ。本艦はオーブ

近海で地球軍と戦闘中よ」

『なんだと！？』

相手の声に初めて驚きが走る。

『位置を知らせろ！ 加勢する』

「シン、位置を知らせてやりなさい」

「あはい」

「艦長！？」

「アーサー、今は一機でも援護が欲しいの」

「は、はい！」

「……アスランが？」

ルナマルアは驚く。

その時上空から何かが急降下してきて、地球軍のモビルスーツを撃破する。

アスラン・ザラのインパルスであった。

「！ アスラン！ 地球軍のモビルスーツの相手、頼めますか？」

「ルナマリアか！ わかった！」

「艦長、敵空母を狙ってタンホイザーを撃ってください！」

「どう言ってる？」

「いいから早く！」

「わかったわ。アーサー、タンホイザー起動！」

「はい、タンホイザー起動。照準、敵空母！」

再び、あのモビルアーマーが空母を守るようにミネルバとの間に入る。

そして上面をミネルバに向ける。

「やっぱり！」

ルナマリアはすばやくモビルアーマーの後方に回り込むとビーム砲を連射！　そして急上昇！

後ろで、弱点の下腹をやられて爆散していくモビルアーマーが見えた。

「やった！」

「やったか！」

「タンホイザー、てえ！」

タンホイザーのビームが空母に伸びる！

水煙が止んだ時、空母は消滅していた。

「ふふふ。ざまあ見る！」

ルナマリアは急降下し、地球軍の戦闘艦のブリッジにビーム砲を叩き込む。叩き込む。

地球軍のモビルスーツはアスランのインパルスに牽制されている。

ルナマリアは軒並み地球軍艦艇のブリッジを潰すと、次に戦闘艦の砲塔、ミサイル発射管を狙う。とうとう、沈み始める艦が出る。

地球軍は、撤退を開始した。

「ザク全機、收容完了。セイバー、インパルス、帰投しました」

「もうこれ以上の追撃はないと考えるところだけど、判らないわね。パイロットは兎に角休ませて。アーサー、艦の被害状況の把握急いでね」

「はい！」

「ふう。ああ、それから、状況が聞きたいわ。アスラン・ザラ、連れてきて頂戴」

「はっ」

「ダメージコントロール、各セクションは速やかに状況を報告せよ」
「第4後方バンクに……」

「でもこうして切り抜けられたのは間違いなくルナマリアのおかげね」

「ええ、おお、信じられませんよ！ あのモビルアーマーにタンホイザーを防がれた時は終わりかと思いました！」

「でもあれがセイバー……と言っかあの子の力なのね」

「え？」

「何故レイではなく、ルナマリアにあの機体が預けられたのかずっと、ちよつと不思議だったけど。まさかここまで解ってっただってことなのかしら。デュランダル議長は……」

「かもしれませぬね。議長はDNA解析の専門家でもいらっしやいますから」

「ルナー！」

「ん？」

「あはは、おーい！」

シンはモビルスーツから降りた。

「よくやったな」

「お疲れさん」

「すげーなおい」

整備員が、声をかけてくる

「聞いたぜーこのー。すっげー活躍だったんだって？」

ヴィーノが抱きついてくる。

「いやーほんとよくやってくれたー」

ルナマリアは人垣の中からある人の顔を探す。

人垣の向こうで、レイが微笑んだ。ルナマリアは顔をほころばせた。

第23話「金色の艦隊<3>

「あ」

アスランが、モビルスーツから降りて来る。

「ふう」

アスランはヘルメットを脱いだ。

「認識番号285002、特務隊フェイス所属アスラン・ザラ。乗艦許可を」

「フェイス……」

その言葉に周囲がざわつく。そして、ルナマリア達はアスランに敬礼をする。

アスランも答礼する。

「ふ。艦長は艦橋ですか？」

「ああ、はい。だと思います」

「私が御案……」

マユが声をかける。

「アスランさん！ お待ちしてましたー
ご案内しまーす」

弾んだ声がアスランにかけられる。
向こうからやって来たシンだ。

「あ……」

マユは悔しそうにシンをちょっと睨む。

「あ……ありがとう」

「ザフトに戻ったんですか？」

ルナマリアはつつけんどんに尋ねる。

「そう言う事に、なるね」

「何ですか？」

「ふ……」

アスランは微笑んで、立ち去った。

「よくやったな、ルナマリア」

レイがルナマリアに話しかける。

「ううん。アスランが来てくれなきゃ、あのモビルスーツの数だったもん。倒せなかったかもしれない」

「なににせよお前が艦を守った。生きていると言う事はそれだけで価値がある。明日があると言う事だからだ」

そう言うとレイは去って行った。

「ふふ」

ルナマリアは暖かい物が胸に満ちるのを感じた。

「でもでも、なんで急に復隊されたんですか？」

シンはアスランに聞いた。

「え？」

「な〜んて、とっても聞いてみたいんですけど、いいですか？」

わくわくした顔でシンはアスランを見上げる。

「……復隊したというか、まあうん…ちょっとプラントに行つて議長にお会いして……そんな感じだ。そうだ。ミネルバはなんでオーブをこんなに早く出航したんだ？」

「んー。カーペンタリアとは連絡がつかなかったんですけどね、艦長情報だと、オーブから、地球軍が来るから早く逃げろつてこつそり言われたそうです。実際、オーブを出たらすぐ戦闘になったし」

「そうか……」

「でも嬉しいなー！」

「え？」

「アスランさんの話題、結構出てたんですよ？ お姉ちゃんなんか大喜びですよ、きつと！」

「ああ？」

「マユ・アスカ。覚えて、ないですか？」

「え……と」

「オーブの代表に嫌味言つてたつて」

「ああ！」

「お姉ちゃん心配してたんですよー？」

シンは上目遣いにアスランを見る。

「ん？ 何がだ？」

「アスランさんに嫌われちゃったんじゃないかって」

「ははは。嫌わないよ」

「よかつた！ ねえ。お姉ちゃんの事どう思います？ 弟の僕から

見てもかわいいなつて思うんだけど」

「あ……ああ、かわいいな」

「ほんと？ よかつたらお姉ちゃんと結婚しません？ アスランさ

んがお兄ちゃんになったら、僕、嬉しいな」

「え？ ……ええ？」

アスランがうるたえている間に艦長室に着いた。

「はい、艦長室、到着です。じゃあ、またね、アスランさん！」

「あ、ああ。ふう……」

アスランは溜息をついた。

「はあ……」

アスランがデュランダルからの預かつた物を渡されて、タリアは溜息をついた。

「貴方をフェイスに戻し、最新鋭の機体を与えてこの艦に寄こし……」

……

「あ……」

「私までフェイスに？ 一体何を考えてるのかしらねえ。議長は。

それに貴方も」

「申し訳ありません」

アスランは頭を下げる。

「別に謝る事じゃないけど。それで？ この命令内容は、貴方知ってる？」

「いえ、自分は聞かされておりません」

「そう。なかなか面白い内容よ」

タリアがパソコンをいじるとスクリーンに地図が映る。

「ん？」

「ミネルバは出撃可能になり次第、ジブラルタルへ向かえ。現在スエズ攻略を行っている駐留軍を支援せよ」

「スエズの駐留軍支援ですか！？ 我々が！」

アーサーは驚いた。

「ユーラシア西側の紛争もあって今一番ゴタゴタしてる所よ。確かに、スエズの地球軍拠点はジブラルタルにとっては問題だけど。何も私達がここから行かされるようなものでもないと思うわね」

「ですよ。ミネルバは地上艦じゃないです。一体また何で？」

「ユーラシア西側の紛争というのは？ 済みません。まだいろいろと解っておりません」

アスランが尋ねる。

「え……ああ」

「常に大西洋連邦に同調し、と言うか、言いなりにされている感のあるユーラシアから、一部の地域が分離独立を叫んで揉めだしたのよ。つい最近の事よ。知らなくても無理ないわ」

「……」

アスランは考え込んだ。

「開戦の頃からですよね？」

「ええ」

「確かにずっと火種はありましたが」

「開戦で一気に火がついたのね。徴兵されたり制限されたり。そんな事はもうごめんだと言うのが、抵抗してる地域の住民の言い分よ。それを地球軍側は力で制圧しようとし、かなり酷い事になってるみたいね。そこへ行けと言う事でしょ？ つまりは」

「あつ……」

「……」

「我々の戦いは、あくまでも積極的自衛権の行使である。プラントに領土的野心はない。そう言ってる以上、下手に介入は出来ないでしょうけど。行かなくてはならないのはそう言う場所よ。しかも、フェイスである私達二人が。覚えておいてね」

「はっ！」

「はい」

アスランとアーサー、二人が出て行った後、封筒を開いた。今回タリアに言付けられていた物で、個人的な物だ。

『やあ、タリア。相変わらず苦労をかけてすまない。前世の私ならきっと父親代わりなど迷惑に感じたろうが、最近は面白い。ジェイクはやつと平気で私に小遣いをねだるようになってきた……』
そこには、何枚かのレターと、デュランダルに預けられているタリアの息子 ジェイクが写っていた。タリアは微笑みながらそれを見ていく。そして、一枚を選び出すと、デスクに飾られている古い写真と換えた。

「ええ！マジで!?!」

ヴィーノが驚く。

「うん」

シンは頷く。

「ほんとのほんとに艦長もフェイスになったの？」

「うん。いずれ正式に通達するけど、そうだって副長が。なんか凄
い嬉しそうだったよ」

「えええ！」

「副長関係ないじゃん」

ヨウランが突っ込む。

「え？そうなの？ 副長は違うの？ え？ じゃあ俺達は？」

「関係ねえよ。あんな、フェイスってのはな、個人が任命されるものなの」

「え？」

「何で知らないんだよヴィーノ。お前はもう……」

「はあ……」

「個人的に戦績著しく、かつ、人格的に資格有りって評議会や議長に認められた奴だけが成れんの。その権限は、その辺の指揮官クラスより上で、現場レベルでなら、作戦の立案、実行まで命令できんだぜ？」

「へえ〜」

「評議会直属のザフトのトップエリートだぜ？ 何でお前が関係あるの？」

「ヨウランだってそうじゃん」

「そっだよ」

「トップエリート……お義兄さん。ふふふ」
シンは含み笑いをした。

アキダリア

「しかし、地球連合が便宜を図ってくれたおかげでパナマ運河が使えてよかったですね？」

ナーエがアグニスに話しかける

「ああ」

この時代、パナマ運河は20個もの核爆弾を使うと言ったたくの力技で全幅100mの艦船すら通過できるほどに拡張されていた。

「しかし、後ろの二人、黙ってばかりですけど、どうしたんです？」

「別に……特に話す事もないし」

マホはぶっきらぼうに言う。

「わ、私もです」

アイザックも言う。

「はあ……とりあえず一緒に旅する事になったんだからもうちょっと打ち解けてもらわないと……イサワ少尉」

「マホでいいですよ？」

「ではマホさん。あなたはエイプリルフル・クライシスで家族を失ったそうですが、もしかして復讐のために地球軍に？」

「いえ、学資稼ぎです。両親になくなっちゃったから。私、将来医者になりたいんですよ」

「前向きですね？」

「そうでもないです。でも、いつまでも過去見たってしょうがないでしょう？」

「プラントの人達を憎んでる？」

「憎んでるって言うか……嫌いなんですよね。何かと言えば血のバレンタイン、血のバレンタイン、謝罪しろ賠償しろ償^{まご}うてください償^{まご}うてください、まるでツエねずみみたい」

「ツエねずみ？」

「ちよ……」

アイザックが口を挟んだ。

「謝罪しろとか賠償しろなんて言ってませんよ！」

「そうね。でも、なにかあれば血のバレンタイン持ち出すのは間違っていないわよね」

「でも、ナチュラルが先に核を撃ってきたのは違いありません？」

「宣戦布告はとくにされてたけど？ それに、ナチュラル？ 地球軍じゃなくて、ナチュラル？ そうやって勝手に話を広げて無関係の人達まで巻き込むのが嫌いなものよ！ その調子で対戦国も中立国もお構い無しに無差別にニュートロンジャマーばら撒いたんでしよう？ 敵が増えるのも当たり前じゃない。迫害？ 自分で敵を作ってるんでしょうが。地球軍にもコーディネーターの人達がいるけど怒ってたわよ？ プラントは地上のコーディネーターの事を考え

てなんかないくせに都合のいい時だけ同胞扱いするって」

「うっ……」

「血のバレンタイン、血のバレンタイン言われれば、こっちもエイプリルフル・クライシス持ち出して反撃したくもなりますよ。とにかくあんた達って加害者でもあるのに被害者意識ばかりでそのくせ権利意識だけ強いよね。そんな所が嫌い。弾圧されてた？」

今月のプラントではジョンゴル鍋が大人気　はっ！　プラントのような贅沢な暮らしができるアースノイドの人口比ってどれくらいだかご存知？」

「……まあまあ」

ナーエが間に入る。

「同じ船なんだから仲良くしましょうよ、ね？」

ナーエは頼むから早くオーブに着いてくれ、と思った。

「調子はどうだ？」

ネオはスウエン達に聞いた。

「ほとんど違和感ありません」

スウエンが答えた。乗機はストライクノワールだ。もっともトランスフェイズ装甲になり、外側装甲にラミネート装甲を張り巡らすと言う贅沢な改修がされている。

「こちらもです」

ハラダが答える。彼の乗機はやはり同様の改修を施された105スローターダガーだ。

「よくやってくれたな」

ネオが技術官に礼を言う。

「これだけの贅沢な改修は、さすがに全機に、と言う訳には行きません。この間ジブリール氏が来られまして」

「ん？」

「戦時であるから、量産性、整備のし易さを優先せよと言われまして。この様な改修はエース機に限定されるでしょう。現状のダガー、105ダガーはラミネート対ビームシールドをとりあえず配る位になるでしょうか。後は、おいおい……」

「それでもいいさ。実験ではカラミティのスキュラを防げるんだらう?」

「はい! レールガンの速射性を維持する冷却装置の技術を取り入れまして。オーブからデータが届いていたフリーダム物よりも良い物が出来ました」

「ならいいさ。とりあえずの対策としては充分だ」

「大佐には感謝していますよ」

「ん?」

「この間、ジブリール様は、今は戦時であるから、信頼性を重視しるとも言われました。おかげで今はダガーシリーズと後期GAT-X制式機シリーズが大増産中です。正直、ウインダムはまだ満足はいく機体ではありませんでしたからね。生産中止になってほっとしています。若い連中の中には新技术を試したくてがっかりしている者もおりますが。はは」

「はは。確かに俺はあれこれ言ったが、ご本人も考えてはいたんだらう。聡いお人だからな」

「ただ、グラスパー系はダガーの数に準じた数に抑えられるそうです。その代わりに新型のモビルアーマーが良いのが出来たので、生産力はそちらに……」

「ほう、楽しみだなあ。さっそく見せてもらおうか?」

「はっ、こちらに……」

「はあー。やっとカーペンタリアに着いたわ」

「オーブのあれから襲撃無くてよかったね」

「カーペンタリア封鎖してた地球軍はザフトの降下作戦で追い散らされたってさ」

「あ、そうだ、アスランさん、ひまだったら一緒に上陸しません？」
「マユはアスランに誘いをかける。」

「あ…… ああ…… いや、ちよつと用事があるから」
「そう言うつとアスランは休憩室から出て行った。」

「あーあ、振られちゃったね」

「ふん。あきらめないわよ」

「あたしと一緒に上陸する？」

「ルナマリアはマユを誘う。」

「んー。中においてチャンス狙うわ」

「じゃ、レイ」

「なんだ？ ルナマリア」

「あたしと一緒に上陸ね」

「いや、俺は……」

「だーめ！ 上陸！ あんたオーブでも降りなかったでしょ？」

「わかった」

「よしー！」

第24話「金色の艦隊<4>

「やあ。ただいま戻りました。父上」

アメノミハシラから戻ったユウナは執務しているウナトに声をかけた。

「うむ。首尾は？」

「成功ですよ。やってくれるそうです。宇宙軍の再建」

「平和になれば、軌道エレベーターの計画も進めたいし、宇宙コロニーも再建したいが……一歩一歩進むか」

「それにしても、あれほどの希少鉱物の量、先方も驚いてましたよ。私も驚きましたが。一体どうやって手配したんです？ しかもまだあるんでしょう？ 宇宙コロニーを作る位の量が」

「……我がセイラン家には秘密があるのだ」

ウナトは視線を逸らした。

「じゃあ、お前は港へ行ってくれ。タケミカズチにトダカー一佐がいる。これだ。オーブ義勇海軍リスト」

ユウナはリストを受け取った。

「空母1にイージス艦8隻か……。なかなかの戦力ですね」

「とりあえず地上での戦いは、ザフトの降下作戦があつて様子が見えん。お前の任務はできるだけ被害を受けずに帰って来る事だ。いいな？」

「本気でやるな、と？」

「そうではないが……。もし万一地球軍の負けが込んだ時、地球軍と最後まで付き合う必要はない。オーブを無碍に扱えぬように手も打つてある。うまくやる事だ」

「はい」

「やはり、ずいぶんと被害を受けておるな」

老魔法王ベネディクトは辺りを見回しながら、呟く。

ここはローマの近郊。ローマ自体は無傷ながら、その近郊にはユニウス7落下の被害の爪跡が刻まれていた。

「それでも、猊下のお力でこの程度に収まったのです」

ベルットーネ枢機卿は言った。

「本来ならば、こちら辺り帯は壊滅していたでしょう」

「しかし、自分の力不足が身に染みるのじゃよ……。よいか、アナキン」

ベネディクトは傍らに控えていた少年に話しかける。

「フォースの力は限りがない。ワシは、ワシの力の後継者はお前だと思っっている。研鑽に励むのだぞ」

「はい」

その少年 アナキン・スカイウォーカーはしつかりとした返事をする、真っ直ぐな瞳でベネディクトを見つめた。

「あれです。あの少女です」

ベルットーネ枢機卿は立ち働くセトナを指して言った。

「そうか」

ベネディクトはセトナの元へ歩いてゆく。

「お嬢さん」

「はい……。あ、ああ！？もしかして！」

「よいよい。気楽にな」

緊張するセトナにベネディクトは手を振った。

「お嬢さんのおかげで、被災者達が大層助かっていると聞いてな、礼を言いに来たのじゃよ」

「そんな……。大した事なんて」

「国や、我々も活動しているが、組織が大きい分だけ、細かい所で見落としがあるかも知れん。何か気がついた事があつたら遠慮なく言ってきてくれ」

「は、はい……」

セトナはベネディクトに頭を下げた。

「ここがオーブか……」

アキダリアから降りたアグニスは感嘆の声を漏らした。赤道地域を通った事は、それはあるのだが、パナマでは運河の両岸はジャングルだった。しかし、ここでは海と陸がうまく調和を取って、美しい景観を作っていた。

「代表首長がすぐに会ってくださるそうです。対応が早いですね。」

……あなた達はどうします？」

ナーエがアイザック達に問い掛ける。

「オーブは地球軍に義勇兵を出すんでしょう？ 私は遠慮しておきます」

「わかりました。まほさんは？」

「あたしは行くわ。いつまでも艦の中つてもなんだし」

「じゃあ、アイザックさん、留守番をよろしくお願いしますね？」

「ええ、いいですよ。もう」

「やあ、火星の方々」

カガリは手を広げてアグニス達を出迎えた。

「私はオーブ連合首長国代表首長のカガリ・ユラ・アスハだ」

「ようこそ。宰相のウナト・エマ・セイランです」

「俺は使節団団長、オーストレール・コロニーのアグニス・ブラーエだ」

「副団長のナーエ・ハーシエルです」

「地球軍オブザーバーの井沢真秀です」

「まあ、座つてくれたまえ」
皆は椅子に席を下ろした。

「……つまり、火星はどここの敵にもなりたくない」と
「そうだ」

「よくわかるよ。うちの国だってどこの敵にもなりたくない」
カガリは溜息をついた。

「よく、オーブは中立を守られましたね？」

「幸いウナト宰相を始め優秀なスタッフに恵まれてね。遠慮なくこ
き使えと言う奴もいるな。ふふ……。それでも、義勇兵は出さざる
を得なかった。うちは小国だから」

「なにか出来る事があれば、力になろう！」

「ありがとう。嬉しいよ。友人が増えるのは心強い」
カガリはにっこり微笑んだ。

「少し、聞きたい事が。キラ・ヤマトと言う男を知っているか？」
アグニスは尋ねた。

「……ああ、もうこんな時間か。用事を思い出しましてな。では、
ごゆっくり」

突然そう言つてウナトは出て行つた。

「もしかして、ご存知ですか？ キラ・ヤマトを？」

ナーエはカガリに聞いた。

「ま……あ、知っている。だが、なぜわかる」

「ウナト宰相が、席を外してくれたような気が？」

「その通りだろうな。うん。キラ・ヤマトは知ってる」

「では、ぜひ会わせて欲しい！」

カガリの言葉を聞いてアグニスは身を乗り出し、言った。

「なぜ、そんなに会いたがる？」

「キラ・ヤマトは先の大戦の戦いを止めた男だと聞いた。敵を作りたくない我々にとっては、ぜひ会いたい相手だ」

「そうか……。我々はただ、大量破壊兵器を阻止しただけだ。後の事は地球連合の穏健派とプラントの穏健派がやった事だ。偶然だ。戦争まで終わらせたのは運が良かったのさ」

「そうであつてもぜひ！」

「だが、だめだな。今は会わせる事はできない」

「なぜ!？」

「キラは、心が優しい奴だった。それで、かな。戦争が終わった後心を病んでしまった。オーブで療養中だが……。なかなか。心の事の事だ。簡単にはいかない」

「そう……。か。では、一日も早い回復をお祈りする」

「ああ、元気になったら、伝えよう。さあ、座って話すのも飽きたろう。オーブ軍でもお見せしよう」

カガリ達はタケミカズチへと向かった。

「ほう、これがユークリッドかあ」

ネオは感嘆の声を上げた。

「ええ！」

技術官も自慢げに言う。

「メビウスに代わる連合の主力モビルアーマーとして鋭意増産中です！」

「武装は？」

「機体前面にM551 52mm7連装ガトリング機関砲2門、機体両側にM464 高エネルギービーム砲『デグチャレフ』2門です。機体前面にはさらにビームシールド『シュナイドシュツツ4179love』が展開できます！ 実弾も、ビームも防ぎます！ 機動性も速度も、メビウスやグラスパーに劣りませんよお！」

「うん、いいね」

ネオは満足そうに頷いた。

「大佐殿の専用機には、ザフトから奪ったカオスの機動兵装ポッドを参考にした無線式ガンバレルが4機取り付けてあります。地球上では無理ですが、宇宙ではオールレンジ攻撃が可能です」

「ガンバレルユークリッドか。いいねえ」

ネオの笑みは更に大きくなった。

「ラクス。ラクス、どこ？」

キラはラクスを探す。

「まあ、どうしましたの？ 向こうでお母様のお手伝いをしてましたのよ」

「いや、不安になっちゃって。ラクスがどこかに行っちゃうんじやないかと」

「私はキラから離れて、どこにも行きませんわ」

ラクスはキラの頭を胸に抱え込む。

「うん……」

キラは安心した声を出す。

「どうしたものかしら」

マリユーが心配そうな声を出す。

「フレイさんから解き放たれたのはいいけど、あれでは今度はラスさんに依存だわ」

「うーん」

バルトフェルドが呻る。

「どうしたらいいかしらね」

「ラクスともちよっと話したがなあ、ラクスは、まったく問題に思

「つてない」

「え？」

「むしろ、邪魔しないでくれと釘を刺されたよ」

「そうラクスさんも……共依存って奴かしら」

マリューは溜息をついた。

「やあ、どうしたんだい？ カガリ」

空母タケミカズチにカガリがマーシヤンを連れてやってきた。

「やあ、ユウナ。船酔いは大丈夫か？」

「さすがに大型空母だね。それほど揺れない。平気だよ。今日はどうしたんだい？」

「マーシヤンの使節団の方々だ。オーブ軍をお見せしようと思っ
ね」

「！ マーシヤン！」

「そう、火星人だ。そんなに驚く事か？」

「ロウ！ そうだ、君達ロウ・ギユールを知ってるか？」

勢い込んでユウナは尋ねた。

「ロウ？ これは懐かしい名前を聞きましたね。知っていますよ？」
ナーエが答える。

「今オーブにいるんだ！ ちょっと待て、呼んでくる！」

ユウナは駆け出していった。

「なんだ？ まあいい。トダカ一佐、オーブ軍の装備をお見せして
くれ」

「はっ」

トダカの指示で、ローター付きの翼を付けたモビルスーツが発艦して行く。

「あれが、前大戦時に活躍したM1アストレイに大気圏内飛行用オ
プシヨン『シユライク』を付け飛行能力を持たせた物です」

「ほほう」

「次に……」

戦闘機が発艦して行く。上昇してこちらに戻ってくると、変形する人型だ。

「モビルスーツだったのか！」

「ええ、現在のオーブ軍主力モビルスーツ、『ムラサメ』です」

「おおい、アグニスじゃねか！」

その時、ユウナと一緒にロウ・ギョールが入ってきた

「ひさしぶりだなあ！」

「どうしたんです？」

「どうもこうも、地球降下の時に俺のレッドフレイム、ディアゴに持ってかれちゃってな。ディアゴの奴見なかったか？」

「そうでしたか。ディアゴならセトナ様と一緒にいるでしょう」

「セトナ？」

ロウはナーエに尋ねた。

「あなたはまだ知りませんでしたね。アグニスの姉ですよ。医者のお卵で、現在各地で被災地の救援活動を行っています」

「セトナってセトナ・ウィンタースの事か？」

カガリが尋ねた。

「ええ。なにか？」

「いやー。お前達の知り合いだったのか。ラクスにそっくりだったから、地球軍がコマージュシャルのためにそっくりさんでも作ったかと……」

「ははは……。ラクス・クラインですか。確かにそっくりでしたね？」

「ああ、だが、紛れも無く俺と一緒に育った俺の姉だ」

「そうか。『地球の天使』とか言われて有名になってるから居場所はずぐに分かるだろう」

「『地球の天使』？」

ロウは頭を傾げる。

「ほら、ラクス・クラインが『プラントの歌姫』だろう。そっくりだから、自然にそんな異名が付けられた」
「そうか。じゃ、ユウナ、今までありがとな」
「なーに。簡単に見つかってよかったな」
「じゃ、アグニス達も元気だな！ 俺はそのセトナさんがいるところに行ってみる！」
ロウは去っていった。

「ほんとですか？ 補充されるのはこれだけ！？」
アスランはタリアに詰め寄った。

「本当よ。貴方のインパルス用の交換部品、ソードシルエットにブラストシルエット。後チエストフライヤー、レッグフライヤーがいくつか」

「それだけでジブラルタルまで行けと？ 地球軍が本腰入れてきたら間違いなく潰されますよ！」

「しょうがないじゃない。上がそう言っているんだもの。ああ、ボズゴロフ級のニーラゴゴが付くそうよ」

「それでも！ 飛行可能なモビルスーツが2機じゃあ……」

「ニーラゴゴにもバビが5機あるわ。与えられた中で最善を尽くすのが軍人よ」

この時期、可変型空戦用モビルスーツ『バビ』の配備を持って、ボズゴロフ級はVTOL機用のVLS（垂直射出装置）4基を廃し、モビルスーツ用VLS2基、計モビルスーツ用VLS5基に改装していた。

「そうは言っても……失礼します」
アスランは駆け出した。

「あれ、あれね？ ゲイル、アスランさん、見なかった？」

「いや、知らないなあ」

マユはアスランを探していた。

「マユ？ アスランさんならさつき基地の方へ出かけたぜー」

ヴィーノが言う。

「えー！ 用事があるって言うから残ったのにー！」

「まあまあ。じゃ、俺らと基地に出かけるか？ ちょうど俺ら出かける所だ」

シヨーンが言った。

「……。じゃあ、そうしよっかなあ」

寂しそうにマユは答えた。

「失礼する。フェイスのアスラン・ザラだ。基地司令官にお目にかかりたい！」

アスランは司令棟へ出かけていた。

「まあ、待ちたまえ。基地司令官は会議中だ」

瘦せぎすの男がアスランに声をかけて来た。

「御用は何かな？」

「あ、私はフェイスのアスラン・ザラです。実は……」

「ま、こんな所でもなんだ。来たまえ」

その男はアスランを応接室へ誘った。

「アスラン・ザラ。以前会った事があるね」

「そうでしたか。失念してしまい、申し訳ない」

「いや……。変わってしまったからねえ。人も、プラントも」

「……」

「私の名前はマイケル・ジェフリーだ。実は、私が君と会ったのは、私がまだこの基地の司令官だった頃だ。先の大戦だよ。あの頃の君はまだ初々しかったな。初めて隊を任されて頑張っていた」

「ああ……！」

「君のお父上の事は聞いている。君のヤキン・ドゥーエでの活躍もな」

「いえ……たいした事は……」

「だが、どうしても納得できんのだよ」

「何がでしょう？」

「ザラ議長は常々『戦争は勝って終わらなければ意味が無い』と言っておられた。それが、ヤキン・ドゥーエを自爆などさせるはずが無い」

「ああ……！」

「君が自爆スイッチを押したのでもないだろう？」

「もちろんです！ ジェネスシ発射とヤキン・ドゥーエ自爆は連動していました。あれはそう簡単な仕掛けではなかった。では、一体誰が……？」

疑念がむくり、とアスランの胸に沸き起こった。

「私は未だにザラ議長は何者かに騙されていたんじゃないかと思うのだよ。大戦後のザラ派への糾弾を知っているかね？」

「いえ……」

「ひどい物だよ。クライン派がまるで戦勝国側の様に振るまい、そしてザラ派を敗戦国側の様に扱う。軍事裁判でかなりの数の人間が有罪判決を受けた。死刑を求刑された人も多かった。……自分達が正義と信じていた物が、同胞であるコーディネーターによって次々と裁かれていく。信念を持って戦っていた仲間が、地球の言いなりになって、同胞を裁いていく。わかるか、この悔しさが」

「……」

「いや、埒もない事を言ったな。アスラン君、君の用事は何かね？」

出来る限り、力になろう……」

アスランは、元司令官に深々と頭を下げた。

第25話「金色の艦隊<5>

「レイは何も買わないの?」

「いや、特に欲しい物も無い」

「ふーん、そっかあ」

ちよっとつまらなそうにルナマリアは言う。

「ルナマリアもそれほど買ってないじゃないか」

ルナマリアが買った物はCD、何冊かの雑誌、化粧品、若干のお菓
子程度だ。

「そうかなあ。自分じゃ結構買ったつもりだけど。まあ艦内に持ち
込むってなるとセーブしちゃうのよね」

「そう言うものか」

「じゃ、そろそろお昼にしましょうか。ここのレストラン、なか
かいらしいわよ」

その時、後ろから声をかけられた。

「おーい、レイ、ルナ!」

「あ、シヨーン? あれ、マユも?」

「うっさいわね」

「さては振られたな」

「空振りだっただけよ」

「君達はデートかな?」

シヨーンが尋ねる。

「え……いや」

「ええ、そんな様なもんです」

ルナマリアは開けっぴろげに答えた。

「よかつたら、ちよっどお昼だし、なんか食べない?」

ゲイルが誘う。

「いいですよ!」

「って訳でさあ。マユの対アスラン攻略法を考えてたんだ」
シヨーンが言う。

「もうー」

脱力した感じでマユが答える。

シヨーン達の会話を無視して、ルナマリアはレイに話しかけた。

「レイ、しっかり食べなよ。さすがケアンズが近いだけあるわ。海産物も果物もおいしいよ」

「ああ、ありがとう」

ルナマリアはレイに料理をよそってやる。

「あんたって、ほっとくとエネルギーバーとビタミン剤だけ飲んでるイメージがあるのよねえ」

「い、いや、さすがにそんな事は……」

レイは、一瞬廃墟のような所でそんな生活をしていたような気がしてうろたえた。

「でさあ、アスランって、小細工するより一気に行った方がいいと思うんだよね」

ゲイルが言う。

「そうそう、地道なアタックより、一気に既成事実！」
シヨーンも煽る。

「き、既成事実……」

マユは顔を赤らめる。

「彼ってさあ、時間与えらとつだつだ悩んでいつまでも前に進まない気がするのよね」

「うんうん」

「……ばっかねえ。もう、シンったらー」
ん？

女が男に甘えるような声だ。

マユは声の聞こえた方を見た。

艦長とシンだ。

マユの顔が眉間に皺が寄った。
その顔を面白そうにルナマリアは見つめた。

「ひっさしぶりだなあ、リアム。みんな」

ギガフロートに着いたロウはジャンク屋仲間に会いに行った。

「ええ、ひさしぶりですね。ロウ」

ジャンク屋仲間、リアムが答える。

「ああ、じゃあ、私はこれで」

リアムと話していた男は立ち上がると出て行った。

「今のは？」

「大事なお客様ですよ。地球軍のね。なんでも地球軍の新型機ウィングダムを軒並み装甲強化してくれと。なんでも地球の工廠は満杯、大西洋連邦などで予約が埋まっているそうで、うちに話が回ってきました。大きな話です。金になりますよ」

「地球軍？ いいのか？ だってここは……」

「だいぶ交渉しましたよ。そもそもこの建設費用は地球連合が出していたんです」

「え？ ここはマルキオ導師が民間のために……」

「そうじゃなかったみたいですよ。私は最近あの方が訳わからなくなりました……はは」

リアムは気弱に笑った。

「まあいいや。とにかくここはジャンク屋ギルドが使えるんだろう？」

「ええ、かなり交渉に苦労しましたが」

「でもなんでここが見つかったんだ？」

「シャトルが飛ぶ度に、搜索範囲を絞り込まれまして。彼らも大金をつぎ込んだギガフロートですからね。本気で探されまして。それでとうとう乗り込まれまして。ははは……」

「マルキオ導師はどうなったんだ？」

「オーブに身を隠しているとか、言う噂ですけどね。未だに地球連合上層部とも繋がりがあるとか。なにしろ、まだ地球連合外交官の肩書きを持っているんですよ！？ もう訳がわかりませんよ。これがナチュナルと言うなら私には理解不能です……くふ……くははははは！」

リアムは笑い出した。

気持ちのよい笑い声ではない。病的な笑い声だ。

リアムはマルキオの事に話が及ぶと情緒不安定になるようだった。口ウは話をずらした。

「そついや、話は変わるんだけどさあ。セトナ・ウィンターズって知ってるか？ 俺のレッドフレームパクった奴がそいつの近くにいるみたいだな」

「！ 『地球の天使』ですね。知ってますよ。ニューズ映画で彼女がアメイジング・グレイスを歌ったシーンが流れた事がありますけどね。感動しました」

リアムは一転して夢を見るような、安らいだ表情になった。

「場所は、わかるか？」

「ええ、わかりますよ。今は……」

「ほんとに？ アスラン、あなた……」

タリアは驚きの声を上げた。

「ええ、基地と交渉して、バビ2機、ゾノ3機、グウル5機、それから……」

「タケダです」

一人の男がタリアに敬礼した。

「彼を、ミネルバに配属してもらいました。よろしくお願いします」
タリアはあっけに取られるしかなかった。

「もう、アスランさんだったら、どこ行ってたんですか？」
マユが基地から帰ってくると、アスランはモビルスーツの整備をしていた。

「あ、ああ、すまない」

「あたしの名前、覚えてます」

「ああ、マユ・アスカだろ」

「そうです！ 感激ー！」

「あ……うん」

「この機体は？ 最新鋭ですよねえ？ 合体機構を持ってるって聞きましたけどお」

マユはインパルスの操縦席を覗き込んだ。

「ああ……」

「うわぁ！ やっぱりザクとは全然違う！ セイバーとかと同じ？」

「座ってみたいか？」

「いいんですか!？」

「ああ、どうぞ。でも動かすなよ」

「解ってますよ。ああ、モードセレクタのパネルが違っんだあ」

マユはコクピットに乗り込んだ。

「あ！ 新しいプラグインですね？」

「ああ、うん……」

「さあ、お前ならどうする？」

ジブリールはネオに聞いた。

ここはデトロイトの軍事工場である。ネオの助言に従った兵装の改良が急ピッチで進められている。

「んー。僕はただの指揮官だ。難しい事はわからないよ」

「それでも構わん」

「なんでそんなに僕を信頼してくれるのかねえ」

「いずれ話せる時が来たら話してやる。で、どうだ？」

「んー。ザフトの地球の拠点はカーペンタリアと……」

ネオの指が地図をすべる。

「……ジブラルタル！ さあて、インド洋経由でこの二つを結ぶには邪魔者がある。スエズだ！ 果たして故意か否か、ユーラシア西部はごたごたしててジブラルタルは比較的安全だ。スエズ辺りのガルナハンじゃゲリラも沸いてるってじゃないの。俺がザフトならこちら辺に楔を打つね。そして後顧の憂いを無くして一気にスエズ！

現にガルナハン基地はザフトの攻撃受けたってじゃないの」

「そうか。ではガルナハンに増援した方が良いか？」

「いや……こいつはちょっと非人道的なやりかたなんですけどね？…

…」

ネオは声をひそめた。

その北領での暴動の報に、家康は目を剥いた。

これでは……ノヴァヤ・ロジーナは地球連邦の手を離れてしまう。

「上様」

本多正信が家康に声をかけた。

坂東太郎も、ちらりと家康の方を見る。

「しばし、待て」

家康は親指を噛み始めた。物を考える時の彼の癖だった。

信長様はいつたい何を考えているのだ。この期に及んで何も指示を出して来ない。これではまるで……

家康の動きが止まった。

そうなのか？ わざと事態を先鋭化させ、そしてノヴァヤ・ロジーナを地球連邦の敵と……

「上様」

再び、正信が声をかける。

いや、そうであっても。自分のやるべき事はなんだ。変わらないじゃないか。

「……出るぞ、馬を持って」

「上様！」

「いいのだ」

決意の籠った声で家康は言った。

「全軍に通達せよ。これより、我らはパナマへ向かう！」

「蛇口を閉める、か」

面白そうに坂東太郎が呟いた。

家康はその巨軀をひらりと馬上に躍らせると、軍の先頭に立ち突撃を開始した。

その様子を妙に冷静になった頭で正信は眺めていた。向こうに立ち上がる硝煙に混じってここまで肉の焼ける臭いがする気がする。無論錯覚であった。それは正信にもわかっていた。

もう、一生肉は食べられないな……

そう正信は思った。彼は良い父になるだろう。

……

……

「おう、ユウナ、義勇海軍の仕上がりはどうだ」

読書に没頭していたユウナに声がかけられた。ユウナは顔を上げる。

「ああ、父上。上々です。ですが、やはり軍の連中は気が進まないようです」

「そりゃそうだろう。私だって気が進まんよ。用がないなら、今日は久しぶりに一緒に帰るか。その本は？」

ユウナは表紙を見せた。

「……それか。続きが楽しみだな」

ウナトは、ユウナが2年前からその本を持っている事を知っていた。「ええ。本当に楽しみです。ここまで広げた大風呂敷をどうまとめ

るのか。本当に楽しみでたまりません」

まるで死児の年を数えるような口調でユウナは言った。

その本　架空戦記の著者は、2年前のオーブ攻防戦の折に行方不明となっていた。

ユウナは、言わば、オーブが外見には戦前と変わらないように見えても、永遠に失われた物もあるのだと言う事を忘れないために、その本を身につけているのだった。

　　ユナトが車のドアを開けた時だった。

爆音が、響いた。ユウナは空気の乱流に吹き飛ばされた。

「ち……父上！」

ユウナは良く見えない視界で必死にユナトを探した。

畜生、体中が痛い。

這いずる様にして探していくと、その先に父の身体があった。

「父上、父上！」

「……ユウナか、オーブを、た……の……」

まさか、父上が！

その思いがユウナの頭の中に広がり、ユウナは気を失った。

ユナト・エマ・セイラン死亡　この知らせはオーブに激震を走らせた。

オーブではユナト宰相の死亡に伴い緊急の氏族長会議が開かれる。

「カガリ様、この期に及んでは、もう中立などと言ってはおれませんか！」

タツキ・マシマがカガリに告げる。

「だが！　ユナトは中立を保ったではないか！」

「それもユナト前宰相と大西洋連合との緊密な関係があったればこそ。ユナト様が亡くなった今、もはやそれは望めません。現に、大西洋連邦からは同盟をと強く迫ってきている！」

「くっ」

せつかく保った中立を……どうすればいいんだ、ユウナ……。カガリは空席になって隣を見る。ユウナは未だ意識不明で入院中だった。

オーブが世界安全保障条約機構に入る事が決まったのはその日の事である。

「いいのですか？ あのような強引な……」
タツキ・マシマにタツキの息子が声をかける。

「いいのだ。この期に及んではオーブも大西洋に付くしかないのだ」
噛み締めるように、タツキ・マシマは言った。

「一体なにが起こったと言うんだ！」

ジブリールは、大西洋連邦はこの日混乱の中にあった。

ユーラシア西部の独立派の勢力が拡大。更に今まで平穏を保っていたユーラシア中部、東部、おまけに北アイルランドでも一斉に紛争が起こっていた。

「ん？ オーブから？」

オーブから通信が申し込まれていた。

「私だ」

『これはジブリール様。私はこの度暫定としてオーブ宰相になった
タツキ・マシマです』

「うむ。ウナトの事は聞いている。気の毒だったな。息子は助かったのだろうか？」

『はい。幸いにも。では、用件ですがオーブは世界安全保障条約機構に加盟する事になりました』

「ほんとか？」

『はい。オーブもごたごたしております。なにかの際には援助をよ

ろしくお願いします』

「わかった。この情勢だ。こちらも助かる。よろしく頼む」
通信は切れた。

確かにこの混乱の中、オーブが旗幟を鮮明にしてくれるのは助かるが……。義勇兵でも充分に思っていたのだが……。なんだ？ オーブの方から突然。これは一体？

なにか得体の知れない物が蠢いている事をジブリールは感じていた。

「ようこそ来てくれた」

ロンド・ミナ・サハクはケナフ・ルキーニを迎え入れた。

「おう。久しぶりだな。何のようだ？」

「調べてもらいたい事がある」

「ふうん？」

「オーブのウナト宰相が自動車テロで殺されたのは知っているな？」

「ああ」

「その裏を探ってもらいたい」

「裏があると？」

「オーブは、大きく分かれて大西洋同盟派、中立派に分かれていた。だが、ウナトはその所をうまく調整していた。今、殺される理由が無い」

「中立派は？ 名目は義勇軍でもオーブが他国に出征するんだ。気に入らん奴もいただろう」

「5大氏族長で中立派はアス八家のみと言う状況だった。それを、中立を保ったのはウナトだ。それで、大西洋連邦派の押さえたるウナト宰相がいなくなったとたん同盟だ。馬鹿でも……いや、単なる馬鹿がやったのか、それともまだ裏があるのか調べてほしい」

「おーけー。お代は高いぜ」

「心配するな。ウナトから受け取った物がいっぱい残っているから

な。義理なりなんなり、返さねば気が済まぬ！」

第26話「金色の艦隊<6>

「ニーラゴンゴ発進しました」

「こちらも出ましよう。ミネルバ発進する。微速前進」

「ミネルバ発進！ 微速前進！」

「あーあ」

「なによ、マユ」

「出航しちゃうんだなあって」

「怖い？」

「そりゃあ、いつだって怖いわよ。ルナは？」

「私だって、怖いわよ」

「ふ……ふふ」

「なによお」

「なんでもなーい」

「お嬢さん！」

「なに？ あ、タケダさん？」

「ははは。まあ、よろしく」

「アスランが引き抜いてきたんだから、頼りにしてるわよ」

「お任せください。ふふふ。大西洋なんて……アメリカなんて僕の敵じゃないよ……アメリカ帝国主義なんて、大嫌いだー！ 赤い嵐はいい嵐！」

タケダは去って行った。

「なあに、あれ？」

「危ない人ー」

「ラクス。オーブが、中立を破るって……ウズミ様の遺志を……泣きそうな顔でキラはラクスの元へ駆け寄る。

「キラ」

ラクスは優しく笑ってキラを腕の中に包む。

「大丈夫。大丈夫よ、キラ……なにも心配ないわ……そう、何も心配ないの……」

ラクスはにっこり微笑んだ。

「よし。うーん、いい風だねえ」

コーヒーカップを手にバルトフェルドはテラスに出た。

「ええ」

「昨日よりもちよいとローストを深くしてみた。さあてどうかかな？」
マリューはちよっぴり飲むと、いたずらっぽく笑った。

「うふ。昨日の方が好き」

「ん？ うーん……」

バルトフェルドもそのカップに口をつける。

「君の好みがだんだん解ってきたぞ」

「うふふ」

「それで……」

「でも……」

二人の言葉が重なった。

「どうぞ。レディーファーストだ」

「いえ、こういう時は男性からでしょ？」

「まあオーブの決定はな、残念だが仕方ない事だろうとも思うよ」

「ええ。カガリさんも頑張ったんだろうとは思いますが。ウナト宰相が亡くなられたのが痛かったですわ」

「代表といってもまだ18の女の子にこの情勢の中での政治は難しい」

「はあ……」

「彼女を責める気はないがね。問題はこつちだ」

「ええ」

「君等は兎も角、俺やキラやラクスは引越しの準備をしたほうがいいかもしれんな」

「プラントへ？」

「ああ、今地球連合は地球のコーディネイター保護を言っているが、いつ手のひらが返るかわからん。あーいや……あー良ければ君も一緒に」

「え？」

「まあ、あんな宣戦布告を受けた後だ。今はまだプラントの市民感情も荒れているだろうが、デュランダル議長つてのは割りとしっかりしたまともな人間らしいからな。馬鹿みたいなナチュラル排斥なんて事はしないだろう」

「どこかでただ平和に暮らせて、死んでいければ一番幸せなのにね。まだ何が欲しいって言うのかしら。私達は……」

「バルトフェルド隊長……」

「ん？」

バルトフェルドが振り向くと、ラクスがいた。

「ちよつとお話が」

まるでバルトフェルドを咎める様な表情で彼女は言った。

バルトフェルドは、その顔を一瞬見つめると、ため息をついた。

「始めちまった物は、戻れない、か……。血に汚れた手は……」

その顔をいぶかしそうにマリューが見つめた。

その夜

「ザンネン！ ザンネン！ アカンデエー！」

警戒用のハ口が大きな声を立てた。

キラは飛び起きた。隣でラクスの身体がぴくりと動いた。

隣の部屋でもマリューとバルトフェルドがすばやく起き上がる。

マリユールとバルトフェルドは顔を見合すと頷きあう。

「どこの連中かな。ラクスと子供達を頼む。シエルターへ」

「ええ」

「うー！ どうしたんですか!?!」

キラが入ってきた。

「早く服を着ろ。嫌なお客さんだぞ。ラミアス艦長と共にラクス達を」

「あ………はい!」

……

「さあ！ みんな起きて」

マリユールは子供達を起こす。

「シー。静かにね」

「ラクス!」

キラが飛び込んで来た。

「あ………キラ？ いつの間になくなって………」

ラクスはのんびりとした声で答える。目をこするが、目やになど付いてはいない。

「敵襲だ！ 服を着て!」

外からの銃撃で窓ガラスが割られる。

「窓から離れて。シエルターへ急いで!」

「はい!」

「うわー怖いよー」

「大丈夫ですからね。さ、急いで」

「うん」

「う！」

「マリユーさん！」

「早く！ えい！」

「さあ！」

「く……」

「はあはあ……」

「マリユーさん後ろ！」

「く……妙ね」

マリユーは違和感を感じていた。敵が、マリユーの顔を見ると一瞬硬直するような気がするのだ。

「う！ むう！ ふ……所詮はナチュラル、簡単な物だ……」

バルトフェルドは彼の姿を見るなりびくっと硬直した複数の敵を倒した。

『目標は子供と共にエリアEへ移動』

敵の無線から平坦な口調の声が聞こえる。

「ふむ。予定通りか」

『了解、了解。攻撃を続ける』

床に落ちた無線機から、これまた平坦な口調の声が聞こえる。

バルトフェルドは送信ボタンを押すと喋べる。

「あつちよんぶりけー！」

『了解、了解。攻撃を続ける』

無線機からは同じ台詞が流れてくる。

「ふん」

バルトフェルドは拾った無線機を捨て去り、悠然とその場を歩み去った。

「バルトフェルドさん！」

「さあ早く！」

「急げ！かなりの数だ」

一行はようやくシエルターに着いた。

「はぁ……」

「大丈夫か？」

「はい」

バルトフェルドにキラが答える。

「コーディネーターだ」

バルトフェルドがつぶやく。

「コーディネーター？」

「ああ。それも素人じゃない、ちゃんと戦闘訓練を受けてる連中だ」

「ザフト軍？ って事ですか？」

「……」

「コーディネーターの特殊部隊なんて……最低……」

「分からんがね。無線を聞いていたら、ラクスを狙っているようだった」

「……」

震えるラクスをキラが抱きしめる。

「大丈夫。ラクスは僕が守るから」

「ええ、キラ……」

ラクスはキラの腕に包まれて微笑んだ。

！

シエルターに衝撃が響く。

「うわぁ！」

「しつこい！ 狙われてるなまだ、くっそー」

「モビルスーツ？」

「おそろくな。何が何機いるか分からないが、火力のありっただけ狙われたら此処も長くは保たないぞ」

「……………」

なら、なんで最初からモビルスーツで攻撃しなかったのかしら？
マリューの胸に疑念が兆した。

バルトフェルドはラクスに尋ねた。

「ラクス、鍵は持っているな？」

「あ……………」

「扉を開ける。仕方なかるう。それとも、今ここでみんな大人しく
死んでやったほうがいいと思うか？」

「いえ！ あ…………それは……………」

「ラクス」

キラが決意の籠った声で言った。

「大丈夫…………。ラクスは僕が守るから。ラクスのためなら僕は戦え
る！」

「キラ……………」

ラクスは、お気に入りの八口のふたを開けた。そこには…………二つの
鍵があった。

キラとバルトフェルドは大きな扉の両側に別れて、両側に立つ。

「いくぞお。3、2、1、0！」

扉が、開いた。

「これで、僕はまた戦える！」

キラは格納庫の天井をぶち破り、外へ出た。

「間抜け面が！」

シエルターに撃ち込んでいるモビルスーツを見つけ次第、撃つ。撃
つ。

「ラクスに危害なんて、絶対に許さない！」

「あーはっはっは。見てよ。ラクスを狙った奴らなんか、僕にかか

ればほら！」

シエルターから出たラクス達が見たのは、どこかしらカエルに似たモビルスーツの残骸だった。

「キラ……」

「あー、またお家壊れちゃった」

「俺達の部屋どこだあ？」

「危ない！ 駄目よそんな方行っちゃあ」

マリユーは子供達を連れ戻しに走っていく。

「いいのか？ ラクス？ キラは……」

バルトフェルドはラクスに尋ねた。

「いいのかですって！ 少し前までのキラのままで良かったと言っ
の！？」

一瞬の激情の後に、静かにラクスは続けた。

「それなら……それくらいなら……キラはフレイさんより私に繋が
ればいいのです」

ラクスの頬を涙が流れた。

「ラクス、見てよ！ 悪い奴らなんか、ほら！」

フリーダムから降りてキラはラクスの元へ駆け寄ってくる。

ラクスは髪を直す振りをして頬の涙の後を拭き取ると、一瞬で笑顔
を作り、キラに向けた。

「ありがとう、キラ。助かりましたわ」

「それにしても、正体は何者かしら」

マリユーが向こうからやって来た。

「奴らが使っていたモビルスーツは、アッシュだ」

苦い顔でマリユーにバルトフェルドが言う。

「アッシュ？」

「ああ。データでしか知らんがね。だがあれは最近ロールアウトし
たばかりの機種だ。まだ正規軍にしかないはずだが」

「それがラクスさんを……と言う事は……」
「なんだか良く解らんが。プラントへお引越したのも、やめといたほうが良さそうだって事だな……行くか、アークエンジェルへ」
「アークエンジェル……」
前大戦の充実した日々がマリユートの胸に蘇る。
アークエンジェルに戻れば、何もかもうまく行くような気がする。
……頭が痛い。なんだこれは。
マリユートは右手で頭を押えた。
「では、参りましょうか。アークエンジェルへ」
ラクスはキラに微笑んだ。
「うん、行こう、アークエンジェルへ！」
キラが明るく言った。

「一体どういう事なんだ！ こんな馬鹿な真似をして！ あなた方まで何故！？ 国家元首を攫うなど、国際手配の犯罪者だぞ！？ 正気の沙汰か！？ 人を秘密の急用だと呼び出しておいて！」
カガリは怒鳴った。

キラ達から、秘密の用事と言う事で呼び出され、カガリ一人だけで来たなら、いきなり拘束されてしまったのだ。

「カガリさん……」
「いや、まあねえ……それは解っちゃいるんだけど……」
バルトフェルドは頭をかいた。

「でも、仕方ないじゃない。こんな状況の時に、カガリにまで馬鹿な事をされたらもう、世界中が本当にどうしようもなくなっちゃうから」

キラが言った。

「馬鹿な事？」

カガリは気色ばむ。

「く……なにが……なにが馬鹿なことだと言っただ！ あたしはオ
ーブの代表だぞ！ あたしだって色々悩んで、考えて、それで……
！」

「それで決めた、大西洋連邦との同盟が本当にオーブの為になると、
カガリは本気で思ってるの？」
キラは畳み掛ける。

「う……あ、当たり前だ！ もうしょうがないんだ！ 中立はウナ
トの死によって破れた。大西洋からの圧力は増す。オーブは再び国
を焼く訳になんかいかない！ その為には、今はこれしか道はない
じゃないか！」

「でも、そうして焼かれなければ他の国はいいの？」

「なんだと？」

「もしもいつか、オーブがプラントや他の国を焼く事になっても、
それはいいの？」

「いつかっていつだよ！ そんなの状況によっていくらでも変わる
だろうが！？ 私は地球大統領じゃない！ オーブの代表だ！ 私
はオーブの民に負託され、オーブのために働いているんだ！ オー
ブを第一に考えてなにが悪い！ 全世界の平和なんて御伽噺の正義
の味方にも任せとけ！」

「ウズミさんの言った事は？ 世界を二つに別けて、それで……」

「お父様の本当の想いも知らないお前が知ったような口を叩くな！」
ユウナから知ったウズミの真意……それを汚されたような気がして
カガリは叫んだ。

「カガリが大変なことは解ってる。今まで何も助けてあげられなく
て、ごめん」

カガリの言葉に何一つ答えず、浮かされたようにキラは語り続ける。
「でも、今ならまだ間に合うと思っただから。僕達にもまだ色々な事
は解らない。でも、だからまだ、今なら間に合うと思っただから」

「貴様あ、人の話を聞け！ 色々な事が解らないと言っなら、いき
あたりばったり動くなよ！」

「みんな同じだよ。選ぶ道を間違えたら、行きたい所へは行けないよ。だから、カガリも一緒に行こう」

キラはカガリを抱きすくめる。

「う……キラ……やめろ！　うう……」

カガリは本気で嫌がり逃れようとするが、キラは力を込める。

「僕達は今度こそ、正しい答えを見つけなきゃならないんだ。きつと。逃げないでね。カガリにもその内わかるから。大丈夫。僕達が憑いてる」

キラの体温が伝わってくる。キラの体臭に嫌悪感を感じる。

「うえっ……気持ち悪い……」

カガリは不快さで吐き気を催した。

意識を取り戻したユウナを待っていたのは衝撃的な現実だった。

父の死、大西洋連合との同盟。カガリの失踪。

「一体、なにがどうなっているんだ……」

幸い身体は軽症で動くのに支障は無かった。

「やあ、ユウナ。動けるようになったのかね」

「はい。マシマ殿」

「私が暫定的に宰相になる事になった。異存はないかな」

「かまいません」

「なにか言いたいのではないかね。大西洋との同盟について」

「……いえ」

「自分でもわかってるのだよ。自分には、ウナト宰相のような事は出来ない。ならば……オーブの力を出来るだけ高く売りつけるだけだね」

「はい」

「カガリ様は……」

「まさか」

ユウナはタツキの懸念を見て取ると、否定した。

「あれでも一度は大西洋との同盟を決意していたではありませんか。いまさらですよ」

「では……誘拐、かな？」

「……カガリの縁のある、ほら、マルキオ導師のところに行った形跡があります。そこでは、戦闘が行われた跡があります」

「む……それで？」

「わかりません。襲われた事は事実ですが、カガリの縁の者は去ってしまつたと」

「はつきり言おう。カガリ様の弟？ と。その母親もいるのだから？」

「知らぬ存ぜぬです」

「あやしいな」

「ええ。しかし何しろマルキオ導師は大西洋連邦外交官ですからね。へたに尋問する訳にも……」

「ふう、今はしょうがないか。秘密裏に搜索させるしか」

「しょうがないでしょうね」

「カガリ様はご病気と言う事にしておく。今は、オーブ国民にこれ以上の衝撃を与えるのは避けねばならん」

「ええ」

「……無事でいてほしいが……」

祈るように手を組み、マシマは言った。

「ウオッチャーからの情報だ。ザフトの新型艦がティモール海を通るらしい」

赤道連合の基地指令の言葉に、一同はどよめいた。

「攻撃、したくはないか？」

「したいであります！」

「妻と子の仇を取るんだ！」

「ザフトを許すな！」

賛同する声が続く。

「よし」

基地指令はにやりと笑った。

「攻撃に出たい奴は1万ルピア払え。そんでくじ引きだ！」

「艦長！」

「え？」

レーダーにミネルバに向かってくる反応があった。

『コンディションレッド発令。コンディションレッド発令。』

「ん！？」

「ん！？」

『パイロットは搭乗機にて待機せよ』

「熱紋照合……ウインダムです。数30！」

「30？ 一体どこから？付近に母艦は？」

「確認できません。が、おそらく赤道連合の島から発進したものと」

「くっ、近づきすぎたか。あれこれ言ってる暇はないわ。ブリッジ遮蔽。対モビルスーツ戦闘用意。ニーラゴンゴとの回線固定！」

「グレイデイス艦長」

アスランが艦内通話機でタリアに声をかけた。

「え？」

「地球軍ですか？」

「ええ。どうやらまた待ち伏せされたようだわ。毎度毎度人気者は辛いわね。既に回避は不可能よ。本艦は戦闘に入ります。貴方は？」

「……」

「私には貴方への命令権はないわ」

「私も出ます」

「いいの？」

「確かに指揮下にはないかもしれませんが、今は私もこの艦の搭乗員です。私も残念ながらこの戦闘は不可避と考えます」

「なら、発進後のモビルスーツの指揮をお任せしたいわ。いい？」

「解りました」

『インパルス、セイバー、バビ発進願います。ザクは別命あるまで待機』

「あ……」

『X23Sセイバー、ルママリア機、発進スタンバイ。全システムオンラインを確認しました。気密シャッターを閉鎖します。カタパルトスタンバイ確認。X56S インパルス、アスラン機、発進スタンバイ。全システムオンラインを確認しました。気密シャッターを閉鎖します。カタパルトスタンバイ確認』

「みんな、聞いてくれ」

「ん？ はい」

「発進後の戦闘指揮は俺が執ることになった」

「え？」

「いいな？」

「……はい！」

『右舷ハッチ開放。セイバー発進、どうぞ』

「ルナマリア・ホーク、セイバー、出るわよ！」

『左舷ハッチ開放。インパルス発進、どうぞ』

「アスラン・ザラ、インパルス発進する！」

第27話「金色の艦隊<7>

「敵モビルスーツ展開！」

「シウス、トリスタン、イゾルデ起動。ランチャー1、2、全門パルシファル装填！」

「ええい！ 数ばかりゴチャゴチャと！」

「落ち着け、ルナマリア。俺とルナマリアで敵を攪乱する。残りは防御！ できるな！？」

「はい！」

ルナマリアは戦闘機型になって飛び回る。

15機ほどが向かってくる。残りの半分がミネルバに向かう。

「くそっ！」

「ルナマリア！」

「なんです！？」

「10機は俺が引き受ける。残り5機、やれるな？」

「もちろん！ やりますとも！」

ルナマリアはM106 アムフォルタスプラズマ収束ビーム砲を連射する。

「5機くらい！」

「どうします？ 我々も浮上してバビを出しますか？」

「今浮上しても攻撃に遭うだけだ」

ニラゴンゴの艦長は副官の進言を否定した。

「ソナーに感！ 数3！」

「なに!?!」

「早い!これはモビルスーツ……ディープフォビドゥンです!」

「迎撃! グーンの発進、急がせい!」

8機のグリーンが3機のディープフォビドゥンを迎え撃つ。

「く、たかが3機ごとき!」

「隊長、数が!」

赤道連合のディープフォビドゥンの乗員が悲鳴を上げる。

「志願してきたんだろ! ぶち当たれ! 家族の仇だと忘れたか!」

「はいいい!」

水柱が上がる。

「ミネルバ! 今のは!?!」

アスランが問い合わせる。

「地球軍水中モビルスーツ! ニーラゴンゴのグリーンと交戦中」
シンが答える

「え!」

「でも相手は3機よ」

タリアが安心させるように言う。

「ニーラゴンゴの水中隊が対応します。それより敵の拠点は? そちらで何か見える?」

「いえ、こちらでも何も。しかし……」

「こいつを! こいつさえ落とせば!」

「うわああ！ エリザベース！」

「ザフトめ！ 妻と子の仇！ うわああ！」

「く……」

「対空砲急げ！ ええい！ ここまで追いやられるとは！ 残りのモビルスーツも出せ！ 作業に当たっている民間人の避難急がせろ！」

基地指令が叱咤する。

「こんな事なら……友好を深めるなどと言ってわざわざ非効率なのに彼らに基地設営を手伝わせるべきではなかったかもしれないね。民間人に被害が出るかも」

副官が、泣き言を言う。

「未来を予知出来る者などいけません。それより、急がせろ！ 民間人に被害が出たら、我らの恥だぞ！」

「何！？ ん？……基地？ こんなところに……建設中か？ あ！ まさかこの民間人……」

地元の住人だろうか、土嚢を自らの身体で運び、つるはしを振るっている。

ルナマルアは基地に降り立った。

「何だつて言うのよ！ まさか強制労働！？ 許さない！」

セイバーの機体に銃弾が当たる。

対空砲？ そんなの！

ルナマリアは片っ端から砲やハンガーを射撃する。

フェンスを大きく押し曲げる。

「さあ、今のうちに逃げ出して！」

「やらせはせん、やらせはせんぞお！」

「ザフトの奴等だ！ やっちまえ！」

「夫の仇！」

「父ちゃんの仇だ！」

「なに……？ なに？ これ？」

民間人が、機関銃を持って、セイバーに撃ってきていた。

作業に当たっていた者が……ルナマリアが救おうとした者達が、銃を持ってルナマリアに向かってくる。

女子供が、銃を持ってセイバーに撃ってくる。

「ルナマリア！」

「何なのよ！ なんで民間人が撃ってくるのよ！ なんで!?!」

偶然だろうか、バシツとカメラに銃弾が当たる。

「いやあー！！」

ルナマリアはC I W Sを彼らに向かって乱射した。正面にいた女子供が弾け飛ぶ。

「あああー！！」

「落ち着け、ルナマリア！ そこから離れろ！」

「くそう、仲間の仇だ！ 届けええええ！」

たった一機残ったディープフォビドウンがニーラゴンゴに突っ込む！

「艦長、船殻にダメージ！」

ニーラゴンゴのオペレーターが悲鳴を上げる。

「やむを得ん！ 緊急浮上！ 浮上と同時にバビ隊発進させる！」

「くううう……やられちゃったか……何？ 潜水艦、ちよつどいい！ 道連れになってもらうぜ！」

一機のウインダムが煙を吐きながら浮上してきたニーラゴングに突っ込む！

「ウインダム、突っ込んできます！」

「回避ー！」

「ミサイルが！」

「艦長！」

アーサーが言った。

「ニーラゴング、撃沈されました。その寸前に一機のバビ発射確認」

「……そう。こちらの指揮下に入るように伝えて」

「はっ」

戦況は、アスラン、気を取り直し、還したルナマリアが敵15機を引き付け、防御に成功しつつあった。

「は！ 地球軍の連中なんてちよろいぜ！」

「馬鹿！ 出過ぎるな！ タケダ！」

「なんの……うわあああ！」

タケダのバビは被弾して海上に墜落して行った。

「タケダの……馬鹿野郎！」

海戦は終わった。タケダのバビがミネルバが失った唯一の人材だった。

『ミネルバ、着艦許可願います』

バビのパイロットから通信が入る。

「ニーラゴンゴの生き残りですよ、艦長」

「すぐに降ろしなさい。そのくらいも判断できないの？　アーサー？　それからニーラゴンゴのグーンの乗員の収容急いで！」

「はいい！」

「やあ。君達。すまんが世話になるよ」

バビから降りてきたパイロットは言った。

「あ、ニーラゴンゴは……あれ？　タケダ……さん？　まさか幽霊？　足が……あるし？」

タケダにそっくりな男にマユが恐る恐る言った。

「戦争でしょ？　気にしないの。あ、俺はセイジ。セイジって呼んでくれ」

「はあ……」

アスラン、ルナマリア達もミネルバに帰還した。

ぱしっと言う音が響く。

「戦争はヒーローごっこじゃない！　自分だけで勝手な判断をするな！　力を持つ者なら、その力を自覚しろ！　基地を見つけたからといって勝手に攻撃していいもんじゃないんだ！　こちらが泳がせておいた基地かも……」

「アスラン……」

アスランから頬を叩かれたルナマリアは泣いていた。

「な、なんだ？」

「なんで！ なんです！？ 自分は民間人を助けようと……それが、その民間人が、女性も、子供も銃を撃つてきて、私仕方なく……うわああああん！」

「……泣くな」

抱きついてきたルナマルアをアスランは抱きかかえる。

子供にするように、優しく背中を撫でてやる。

「恨まれてたのかも……赤道連合はユニウス7の落下で被害が大きかったと聞く」

「……」

「ほら。もう泣くな。な？」

「は、はい」

アスランはルナマリアの涙を拭ってやる。

その様子をマユはじいっと見つめていた。

「……ほら、ルナ、泣かないの。アスランさんも迷惑してるでしょう？」

マユの言葉に巧妙に隠された棘が混じる。

「あ、マユ」

「い、いやあ、そんな事は」

「じゃ、アスランさん、しっかり休んでください。大活躍だったんですから！」

「あ、ああ」

そのマユの強い口調に気おされるように、アスランは下がっていった。

『このデモによる死傷者の数は既に1000人にのぼり、赤道連合

政府は……」

「18日の大西洋連邦大統領の発言を受けて、昨日、南アフリカ共同体のガドア議長は……」

「この声明に対しプラント最高評議会議長ギルバート・デュランダは昨夜未明、プラントはあくまでも……」

「オーブを脱出したアークエンジェルは海底に潜んでいた。

「毎日毎日、気の滅入るようなニュースばかりだねえ」

バルトフェルドがぼやく。

「ユーラシア西側地域では依然激しい戦闘が続いており、ユーラシア軍現地総司令官は周辺都市への被害を抑止するため、新たに地上軍3個師団を投入する声明を発表しました」

「なんかこう、気分が明るくなるようなニュースはないもんかねえ？」

「水族館で白イルカが赤ちゃんを生んだとか、そういう話？」

「マリーユはいたずらっぽく言う。」

「いやあ、そこまでは言わんよ。しかし、何か変な感じだな。プラントとの戦闘の方はどうなっているんだ。入ってくるのは連合の混乱のニュースばかりじゃないか」

「プラントはプラントですってこんな調子ですしね」

「ん？」

モニターにはラクスそっくりの人物が明るいテンポの曲を歌っていた。

「勇敢なるザフト軍兵士の皆さん！ 平和の為、わたくし達もがんばりま〜す！ 皆さんもお気を付けて〜！」

「皆さん、元気で楽しそうですね」

「ラクス、これで、いいの？ このままにしておいて」

キラが不機嫌そうに言う。

「……」

ラクスはキラから表情が見えない位置で、氷のような冷たい視線を画面の偽ラクスに浴びせていた。

「そりゃ、何とか出来るもんならしたいけどねえ。だが、下手に動けばこちらの居所が知れるだけだ。そいつは現状あまりうまくないだろ？ 匿ってくれているスカンジナビア王国に対しても」

「ええ、それは」

「……いいかげんに、私をオーブに戻せ。オーブが心配だ。いつまでもこうして潜ってばかりもいられないだろ。お前達の事はうまくごまかしてやるから」

今まで黙っていたカガリが、口を開いた。

「だめだよ。今はまだ動けない。まだ何も判らないんだ」

キラは拒絶した。

「そうねえ。ユニウス7の落下は確かに地球に強烈な被害を与えたけど、その後のプラントの姿勢は紳士だったわ。難癖の様に開戦した連合国が馬鹿よ」

「お前達はまだ悪者探しを続けているのか。こいつを倒せば全て良くなると言う様な、ゲームじゃないんだぞ？ 現実は何？」

「連合国じゃなくてブルーコスモスだろ？」

カガリの発言は無視された。

「まあね。でも、デュランダル議長はあの信じられない第一派攻撃の後も馬鹿な応酬はせず、市民から議会からみんなだめて最小限の防衛戦を行っただけ。どう見ても悪い人じゃないわ。そこだけ聞けば」

「……」

「お前ら馬鹿だよ。みんな。私はデュランダル議長に会った事がある。利口な人だ。ラクス暗殺？ もし彼がやるならまったく足がつかないようにやるだろうさ。正規軍にしか配備されてない新型機なんて馬鹿すぎる」

「じゃあ、誰がラクスを殺そうとした？」

「ん？」

「そしてこれじゃあ、僕には信じられない。そのデュランダルって人は」

「キラ……」

「みんなを騙してる」

「それが政治と言えば政治なのかもしれんがね」

「……」

「知らないはずはないでしょうしね。これ」

「それも政治だろう。私も政治家だ。プラントの混乱をラクスの名を利用して収めようとする気持ちぐらい判るさ」

カガリは挫けずに発言する。

「なんだかユーラシア西側のような状況を見ると、どうしてもザフトに味方して地球軍を討ちたくなっちゃうけど」

マリューはカガリを無視した。まるで彼女の言葉が聞こえないかのように。

「お前はまだ反対なんだろう？ それには」

バルトフェルドはキラに聞く。このメンバーの意思は、キラにあるかのように。

「ええ」

「ユウナ……」

思わずカガリはつぶやいた。

「どうしてる？ もう意識は戻ったろうか？ きつと驚いているだろうな。ウナトが死んで、私まで行方不明で……。私はこんなところに軟禁されたままだ。こんな事なら秘密ドックなど提供しなければ良かった。」

「カガリ？ なに、それ？」

キラが、険のある表情をカガリに向けた。

「カガリは大西洋と同盟を結んだ。アスランの事も、忘れてそいつと一緒に言うんじゃないだろうね？」

「馬鹿！ 政治と恋愛を一緒にするな！」

アスランも……。どこいつてんだよ。アスランでもいれば……。何とかなるかもしれないのに。

アークエンジェルで、カガリは一人孤独だった。

第28話「金色の艦隊<8>

「マハムール基地より誘導ビーコン捕捉しました」
シンが告げる。

「ビーコン固定。入港準備」

タリアはそれを聞いて命令する。

「ビーコン固定。入港準備開始します」

「ふう」

ティモール海の海戦からペルシャ湾奥のマハムール基地まで戦闘はなかったが、気は抜けなかった。
皆ほっとする瞬間である。

整備も戦闘準備体制から解かれて、やれなかった事をやってしまおうと活気に満ちる。

『CPU、生化学メインテナンス対チームに伝達。ザクの脳幹冷却システムの交換作業は15時に変更された』

「注文通りセンサーの帯域を変えてみた。確認してくれ」
令は頷くとコクピットに上がっていった。

「あ、アスランさん」

マユがアスランに声をかける。

それをルナマリアは複雑な顔で見つめていた。

どうにも引つかかるのよね。ルナのアスランさんに対する態度は、馬鹿言ってるんじゃないわよ。叩かれたのよ？ 私は？

その後抱きついたよね？ 叩かれた事気にもしないで。

それは……

ねえ、ルナ、好きな人作りなさいよ。レイでもいいし。シンで

もいわ。そしたら、あたし安心できる。

マユとの会話が蘇る。

「ばっかみたい」

ルナマリアは整備に集中した。

「でもいいよなあ軍本部の奴等。ラクス・クラインのライブなんてほんと久しぶりだもん。俺も生で見たかったあ」

ヴィーノがヨウランに言う。

「けど、だいぶ歌の感じ変わったよな、彼女」

「ああ、うん」

「俺、前々から今みたいなのがいいんじゃないかと思ってんだけどさあ。なんか若くなったって言うか、可愛いよな最近」

「それに今度、衣装もなぐんかバリバリ？」

「そうそう！ そしたらさあ胸、けっこうあんのなあ。今度のあの衣装のポスター、俺絶対欲しい！」

その時、アスランが二人の後ろに現れた。

「ああッ！」

「インパルスの整備ログは？」

「……ああとこれです！」

「ありがとう」

アスランは立ち去る。

「あっはは……」

「はあ……」

「婚約者だもんなあ。いいよなあ」

「ちえ。ケーブルの2、3本も引っこ抜いといてやるうか？ インパルス？」

「聞こえてるぞ二人とも」

アスランが振り向いて、言った。

「あっ!!」

「さっきのも全部」

「ああすいません!」

アスランは苦笑した。

『ナブコムオンライン。コンタクト。メリットファイブ。LHM - BB01ミネルバ、アプローチそのまま』

「コントロール、BB01了解」

ミネルバは無事にマハムール基地に入港した。

『入港完了。各員速やかに点検、チェック作業を開始のこと。以降、別命あるまで艦内待機。ザラ隊長はブリッジへ』

タリアとアスラン達は挨拶と打ち合わせのために艦外へ赴く。

「ミネルバ艦長、タリア・グラディスです」

「副長のアーサー・トラインであります」

「特務隊、アスラン・ザラです」

「アスラン……ザラ……」

マハムール基地の司令が何か思いついたように言う。

「アスランってクルーゼ隊の?」

基地の兵士達もざわつく。

「はい」

「いや、失礼した。マハムール基地司令官のヨアヒム・ラドルです。遠路お疲れ様です」

「いいえ」

「まずはコーヒーでもいかがですか?ご覧の通りの場所ですが、豆だ

「けはいいものが手に入りますんでね」

「ええ、ありがとうございます」

「なんだと？ アス八代表が攫われただと？」

「ああ。どうやらそうらしい」

ユウナはアグニス達に告げた。

「見当は付いているのか？」

「ああ……。カガリと一緒に前大戦を戦った仲間がいる。地球連合もプラントの者もいた。戦後、オーブに亡命した者達があった。彼らが、行方不明だ」

「では、彼らと？」

「おそらくね」

「代表が進んで着いて行っただけと言う事は考えられないのですか？」
ナーエが尋ねる。

「それはない。カガリは責任感のある娘だ。確かに父ウナトが亡くなった後、オーブは世界安全保障条約機構に加盟する事になったが、それで失踪するなんて、逃げ出すなんてありえない」

「ウナト様の後任の、マシマ様ですか？ 彼は信頼できると？」

「ああ、自分の実力をよく把握し、驕らない人だ。世界安全保障条約機構への加盟についても、自分の力では中立を守れないと思ったからだ。僕は信頼するよ」

「そうか……」

「これから、君達はまだまだ世界中を回るのだろうか？」

「ああ」

「では、頼む。カガリの情報を探してくれ」

ユウナはアグニス達に頭を下げた。

「頭をお上げください。当然、我々も協力されてもらいますよ」

「ありがたい！ では、オーブからオプザーバーと言う形で2名随

行させたい。……入ってきてくれ」

ユウナの声で2名の者が入ってきた。

「ガルド・デル・ホクハです」

「サース・セム・イーリアです」

「お前達、どうか、探しにいけない僕に代わってよろしく頼む」
二人に向かつてユウナは頭を下げた。

「お任せください」

ガルドは答えた。

「状況はだいぶ厳しそうですわね、こちらの」
出されたコーヒーに口をつけながらタリアは言った。

「ええ。流石にスエズの戦力には迂闊に手が出せませんでねえ」

「はあ……」

「どうしても落としなければ前の大戦の時のように、軌道上から大降下作戦を行うのが一番なんです。何故かその作戦は議会を通らないらしい」

「こちらに領土的野心はない。と言っている以上、それは出来ない
つて事かしらね」

「いたずらに戦火を拡大させまいとする今の最高評議会と議長の方針を私は支持していますが。ふん、だが、こちらが大人しいことをいい事にやりたい放題もまた困る」

「と言うと？ 何かあると言うこと？ スエズの他に」

「地球軍は本来ならばこのスエズを拠点に一気にこのマハムールと地中海の先、我等のジブラルタル基地を叩きたいはずです。だが今はそれが思うように出来ない。何故か。理由はここです」

「ユーラシア西側地域か」

「ええ。インド洋、そしてジブラルタルがほぼこちらの勢力圏である現在、この大陸からスエズまで地域の安定は地球軍にとっては絶

対です。でなきゃ孤立しますからね、スエズ。なので連中はこの山間、ガルナハンの火力プラントを中心にかなり強引に一大橋頭堡を築き、ユーラシアの抵抗運動にも睨みを利かせて、かろうじてこのスエズまでのラインの確保を図っています。まあおかげでこの辺りの抵抗勢力軍は、ユーラシア中央からの攻撃に曝され南下もままならずと、かなり悲惨な状況になりつつもありませんね」

「しかし逆を言えば、」
アスランは口を挟んだ。

「そこさえ落とせばスエズへのラインは分断でき、抵抗勢力軍の支援にもなつて間接的にも地球軍に打撃を与える事が出来ると、そう言う事ですね」

「おお！」

「ま、そう言う事だ。だが向こうだってそれは解っている。となれば、そう簡単にはやらせてはくれないさ。こちらからアプローチできるのは唯一この渓谷だが、当然向こうもそれを見越していてね。ここに陽電子砲を設置し、周りにそのリフレクターを装備した化物のようなモビルアーマーまで配置している。前にも突破を試みたが結果は散々だね」

「ああ！ あの時みたいな……」

アーサーはオーブ近海での戦いを思い出した。

「だが、ミネルバの戦力が加わればあるいは」

「なるほどね。そこを突破しない限り私たちはすんなりジブラルタルへも行けはしないと。そう言う事ね？」

「え？ ああ……」

「ま、そう言う事です」

「……」

「私達にそんな道作りをさせようだなんて、一体どこの狸が考えた作戦かしらね」

「ん？」

「ま、いいわ。こっちもそれが仕事といえは仕事なんだし」

「ふふ。では、作戦日時等はまた後ほどご相談しましょう。こちら
も準備がありますし。我々もミネルバと共に今度こそ道を開きたい
ですよ」

「あ……」

甲板に出ていたルナマリアが人の気配に振り向くと、アスランがい
た。

「……」

「……」

「どうしたんだ？ 一人でこんなところで」

「どう……って事もないですけど」

「最近話しかけて来ないな。気にしてるのか？ 叩いた事？」

「いえ、あの時は民間人が敵意向けてきた事の方がショックで」

言える訳ないじゃない！ アスランと話すとマユが機嫌悪くなるだ
なんて。

「そうか。嫌われてはないんだな」

「嫌ってなんか！ ……いません」

やばい！ 頬が赤くなる！

「そうか。……あー。ティモール海ではなんで君を叩いたかわかる
か？」

「その、勝手な事はするなと」

「ああ、それもある。だが……オーブのオノゴロで家族を亡くした
と言ったな君は」

「はい」

「考えなかったか？ あの時力があつたなら、力を手に入れさえす
ればと。民間人を助けようと思ったのは代償行為じゃなかったのか
？」

「そうかも、しれませんが。なんでそんな事言っんです？」

「自分の非力さに泣いたことのある者は、誰でもそう思うさ。多分、
けど、その力を手にしたその時から、今度は自分が誰かを泣かせる
者となる」

「……………」
「それだけは忘れるなよ。俺達はやがてまたすぐに戦場にでる。そ
の時にそれを忘れて、勝手な理屈と正義でただ闇雲に力を振るえば、
それはただの破壊者だ。そうじゃないんだろ？君は」

「……………」
「俺達は軍としての任務で出るんだ。喧嘩に行くわけじゃない」

「はい……………」

「ならいいさ。それを忘れさえしなければ君は優秀なパイロットだ
！」

「あ……………ありがとうございます」

「ははは。柄にも無い事言ったかな」

「……………アスラン……………あの……………私……………」

「なんだい？」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

あ、何見詰め合っちゃってるんだろっ！

「あ、な、なんでもないです！ 失礼します」

甲板から艦内へ戻る。

ルナマリアの鼓動はまだドキドキしていた。

「大丈夫か？ ラミアス艦長？」

頭痛が起こったマリユをカガリは部屋に送ってきていた。

「ごめんなさいね、いつもはノイマンが送ってくれるのだけど」

「ん？」

ふとカガリはゴミ箱の中を見た。

その、シートに見覚えがあるような気がしたからだ。

あれは……精神病薬じゃないか！

「これ……」

カガリはシートを拾い上げた。精神病薬だ。

「一日どれくらい飲んでるんだ？」

「寝る前に1シート10錠程度よ」

……！ 一時にそれではせん妄などの副作用が起きても仕方の無い量だ！ まさかそれを利用して洗脳を……？

「それを飲むとねえ、よく眠れるのよ」

当たり前だ！ 副作用に眠気に注意とある。眠気を起こす薬だ。

カガリは、キラの治療のために何かないかと色々調べた時にその薬の存在を知っていたのだ。

「飲みすぎる危険性は無いか？ 依存してしまう……」

「大丈夫よ。その時に飲む分だけ、持って来てもらってるから」

「薬は、誰が持ってきてくれるんだ？」

「え、ノイマンだけど？」

「……」

「カガリさん？」

「いや、なんでもない」

あんな薬飲まされてたまるものか！ 何とかしなきゃ……

カガリは焦り、決意した。

第29話「金色の艦隊<9>

よし、ドアに挟んで置いた髪の毛には異常はないな。
カガリは安心した。

寝ている間に何かをされる事がこしばらく一番の恐怖だったのだ。
しかしこれでは……神経が参ってしまうな。なんとかして早くここから出ないと。
あらためてカガリは決意した。

「間もなくポイントです」

「エコーからのシグナルは？」

ラドルは聞いた。

「まだです」

「カーゴハッチの用意はいいわね？」

「はい！」

「ポイント通過後はコンデイションをレッドに移行します。パイロットはブリーフィングルームへ集合」

「はい」

「けど、現地協力員で、つまりレジスタンス？」

ルナマリアはマユに聞いた。

「まあそういうことじゃない？ だいぶ酷い状況らしいからね、ガルナハンの街は」

その時、一人の少女が案内されてきた。

「あ、子供……?」

「……」

レジスタンスらしき少女は黙ってきつとルナマリアを睨んだ。

「着席。さあいよいよだぞ。ではこれよりラドル隊と合同で行う、ガルナハン・ローエングリングート突破作戦の詳細を説明する。だが知つての通り、この目標は難敵である。以前にもラドル隊が突破を試みたが…… ああ…… 結果は失敗に終わっている。そこで今回はアスラン」

「え?」

「代わろう。どうぞ。後は君から」

「ああ…… はい。ガルナハン・ローエングリングートと呼ばれる渓谷の状況だ。この断崖の向こうに街があり、その更に奥に火力プラントがある。こちら側からこの街にアプローチ可能なラインは、このみ。が、敵の陽電子砲台はこの高台に設置されており、渓谷全体をカバーして何処へ行こうが敵射程内に入り隠られる場所はない。超長距離射撃で敵の砲台、もしくはその下の壁面を狙おうとしても、ここにはモビルスーツの他にも陽電子リフレクターを装備したモビルアーマーが配備されており、有効打撃は望めない。俺達はオーブ沖で同様の装備のモビルアーマーと遭遇したな?」

「あ!」

「はい!」

「そこで今回の作戦だが…… ミス・コニール」

「あ、ああ。ここに……」

図が映し出された。

「本当に地元の人もあまり知らない坑道があるんだ」

コニールが説明する。

「中はそんなに広くないから、もちろんモビルスーツなんか通れない。でも、これはちょうど砲台の下、すぐそばに抜けてて、今、出口は塞がっちゃっているけどちょっと爆破すれば抜けられる」

「モビルスーツでは無理でもインパルスなら抜けられる。データ通

りに飛べばいい」

「ええ！？ そんな、真つ暗闇の中を行くなんて！」

マユは驚きの声を上げた。

アスランはそちらを向くと微笑んで言った。

「俺を信じる。信用できないか？」

「い、いえ……」

「君達が正面で敵砲台を引き付けろ。敵のモビルアーマーが必ず出てくるはずだ。俺は坑道から奇襲してそいつを倒す。盾さえなくなれば…… 攻略は可能だ。なんならお前達だけで攻略しちまってもいいぞ」

冗談めかしてアスランは言った。

ザフト軍は再びガルナハン・ローエングリンゲートの攻略に向かう。ミネルバと共に。

「ルナマリア達は？ じき作戦開始地点よ？ アーサーは？ 何をしてるの？」

「あはい。間もなくポイントB。作戦開始地点です。各艦員はスタンバイしてください。トライン副長はブリッジへ」

「ん？ なんだい？ ミス・コニール？」

なにか聞いたそうなコニールにアスランは聞いた。

「前にザフトが砲台を攻めた後、街は大変だったんだ。それと同時に街でも抵抗運動が起きたから」

「ああ……」

「地球軍に逆らった人達は滅茶苦茶酷い目に遭わされた。殺された人だって沢山いる。今度だって失敗すればどんなことになるか判らない。だから、絶対やつつけて欲しいんだ！あの砲台、今度こそ！」

「だから……頼んだぞ！ ううう……」
「任せろ」

アスランは優しくコニールの肩に手を置いた。

「俺達は勝つ！」

「なあ、キラ、戦争を止めるにはどうすればいいんだろう？」

「うん、むずかしいよね」

「オーブ軍はさあ、なんとか巻き込みたくないよな？ お前もそう思うだろ？」

「うん」

「また、オーブ本土で戦なんてごめんだ。お前達と一緒にだった子供達もどうなるかわからん」

「うん、そんな事には絶対させない！ 僕にはフリーダムがある！」
「前は、だめだったろ？ アスランのジャスティスまで居てさ」

「あ……」

キラがうつむく。

「国元でタツキ・マシマがうまくやってくるといいんだが……」

「マシマ家なんて！ 地球連合と同盟を結んだじゃないか！」

キラは怒った様子を見せた。

「そうだよな。それを思うとウナトはうまくやったもんだ。よく中立を守ってくれてたよ。本当に彼を失った事はオーブに痛手だな」

「そうだね」

「とにかく、何か考えようよ、なんとかなる。キラ。今までもそうだった。そうだろう？」

カガリはキラの怒りにまともに対応せず、受け流す。今までだったら言い返していただろうが。そして気安そうに肩に手を置く。微笑みかける。

「うん、カガリ！」

「1ツ隊発進準備」

「インパルス発進スタンバイ。パイロットはコアスプレnderへ。中央カタパルトオンライン。気密シャッターを閉鎖します。中央カタパルト、発進位置にリフトアップします。コアスプレnder全システムオンライン」

シンがアナウンスをする。初めての中央カタパルトの使用だ。

「ブリッジ遮蔽。対モビルスーツ戦闘用意。インパルス発進後、ヘズモンド、ワグリーの前に出る」

「シウス、トリスタン、イゾルデ起動。ランチャーワン、セブン、1番から5番、全門。パルシファル装填」

「X23Sセイバールナマリア機、発進スタンバイ。全システムオンラインを確認しました。気密シャッターを閉鎖します。カタパルト、スタンバイ確認。レイ・ザ・バレル、ブレイズザクファントム発進スタンバイ。全システムオンライン。発進シークエンスを開始します。ハッチ開放。射出システムのエンゲージを確認。カタパルト推力正常。進路クリアー。コアスプレnder発進、どうぞ」

「アスラン・ザラ、コアスプレnder出る！」

「カタパルトエンゲージ。チェストフライヤー射出、どうぞ。レッグフライヤー射出、どうぞ」

チェストフライヤーとレッグフライヤーがコアスプレnderの後を着いて行く。

「進路クリアー。セイバー発進、どうぞ！」

「ルナマリア・ホーク、セイバー、出るわよ！」

「レイ・ザ・バレル、ザク、発進する！」

「マユ・アスカ、ザク、行きます！」
「シヨーン・ホワイト、ザク、出る！」
「ゲイル・リバース、バビ、行きます！」
続いてセイジのバビも発進していく。

「よし、展開！」

「上昇。タンホイザー起動。照準の際には射線軸後方に留意。街を吹き飛ばさないでよ。モバイルアーマーを前面に誘い出す」

「はい！ タンホイザー照準、敵モバイルスーツ群！」

「フライマニ兵装バンク、コンタクト。出力定格、セーフティ解除」

「てえ！」

「うう……」

衝撃波が収まった時、ミネルバが見たのは敵モバイルアーマーに守られて無傷な敵砲台であった。

「行くわよ！ できるだけ引っ掻き回す！」

「了解！」

「敵砲台、本艦に照準！」

「機関最大！ 降下！ 躲して！」

「はい！」

敵砲台から陽電子砲が放たれる。

「うう……」

「あ……」

「この隙に！」

ルナマリアは敵モビルスーツを掻い潜り、敵砲台を狙う。

敵モビルアーマーが下がっていく。

その時！ 爆発が起こった！

「アスラン！」

敵砲台至近からコアスプレnderが飛び出す。そして、次々に合体し、インパルスになる。

「うおー！」

アスランはM71-AAK フォールディングレーザー対装甲ナイフを取り出し、操縦席らしき所を、エンジン部分らしき所を狙い、敵モビルアーマーに突き刺す！ 切り開く！ そして開いた破孔に胸部のCIWSをぶちかます！

敵モビルアーマーは機能を停止した。

「ミネルバ！ フォースシルエットを！」

敵モビルアーマーを蹴り落としながらアスランは叫ぶ。

敵砲台は地中に収納されていく。

アスランはそれにかまわず発射されてきたフォースシルエットと合体する。

「ああ！？」

ルナマリアは敵砲台にまっすぐ突っ込もうとする。

「ルナマリア、砲台なんかほっとけ！ すぐに退避しろ！ ミネル

バ！ 俺達が退避したら陽電子砲を敵砲台にぶちかませ！」

アスランがルナマリアを止める。

ルナマリア達は退避していく。

そして ミネルバから陽電子砲が放たれる！

「うう……」

土煙が晴れた時、砲台があつた山頂は消滅していた。

「ようし、ラドル隊とともにガルナハンの解放に向かう」

「了解」

……だが、ルナマリア達が戦う事はなかった。レジスタンスが蜂起して、地球軍は撤退して行つたのだ。

「連合は皆殺しだ！ 一人も逃がすな！」

ガルナハンの町の者達は、狂喜して、逃げ遅れた地球軍兵を追い回した。なにしろ逃げ遅れた地球軍兵士のその中には昨日まで傍若無人に振舞つて憎まれていた者達が多く含まれていたのだ。

『ご苦労だったわね、アスラン。あとはラドル隊に任せていいわ。帰投してちょうだい』

「……」

『どうしたの？ アスラン？』

「地球軍の撤退が早すぎます。町に誘い込む罫かも知れません。町の周囲に気をつけていてください」

『わかつたわ。あなた達も気をつけて帰って頂戴』

「はい」

「……アスラン」

ルナマリアがアスランに声を掛けてきた。

「どうした？ ルナマリア」

街のあちこちで、地球軍の軍旗が焼かれたりしている。

……嫌な物を見てしまった。

「アスラン、あれ、地球軍の人達が、殺されてる……いいんですか？ ガルナハンの人たちにひどい事してたつて言つても。裁判も無

しに、こんなリンチ」

「……今は、しかたないだろう」
アスランは苦い声で言った。

「この人達にとっては、ザフトも連合もよそ者でしかない。なに
かあれば彼らは敵に回る。……だが、この事は、ラドル隊に話をし
ておく。地元の人と繋がりを保っていたラドル隊から言ってもらっ
方が良いだろう」

「了解。じゃあ、帰艦しましょう」

「ああ」

ルナマリア達はモビルスーツから降りる事無しにミネルバへ向かっ
た。

みんなに担ぎ上げられて笑っていたコニールの笑顔が、ルナマリア
には素直に喜べなかった。

「ふーん、なるほどねえ」

地球軍がガルナハンの街中に仕掛けた監視カメラ、近くの高台に設
置した望遠カメラ、そして無人偵察機グロバルホークから送られ
て来る画像を見ながら、ネオは呻った。

「こりゃまた、ジブリール殿が喜ぶかな？ いいネタが出来たと。
ま、やられてる奴らは自業自得だけどね」

だれが思いつくだろう？ 逃げ遅れさせられた者達は皆部隊でも鼻
つまみ者だったと。

地球軍にとっては懐が痛む話では全然なかった。

ネオは、自分の謀略のもたらした結果を眺め続ける。

しばらくの後、ネオはガンバレルユークリッドを発進させた。

「艦長！ 東北東方面にアンノウン急速接近！」

「なに？ 警戒態勢に入れ！」

「速い、速いです！」

「迎撃体制に入れ！ コンディションレッド発令！ モビルスーツは？」

「間に合いません！」

「あんたらの行為が気に入らないんでね、予定には無かったが攻撃させてもらう！ まったくビクトリア大虐殺の時と変わってないよなあ！ あんたらは！」

それは、あるいは謀略のために犠牲にした者達への贖罪行為だったのかもしれない。

ネオはミネルバにまっすぐ向かい、すれ違い様に本体の機関砲とビーム砲、ガンバレルのビーム砲を叩き込む。

「ふん、今はこれで済ませてやる。仮初めの勝利に浮かれています。」

ガルナハンなんぞすぐに取り返してやる！」

ネオは去って行った。
この攻撃による機関部付近の損害が、この戦いで唯一ミネルバが受けた損害であったが、その修理には3日を要す、意外に大きな損害であった。

「アスランの警告が無ければもっと損害を受けていたかもしれないわね」

「あれは、ミネルバを狙った罠だったのでしょうか」

「アーサーがタリアに尋ねた。」

「うーん、そう言う感じの攻撃でもなかったけど。それにしても…

…」

タリアはため息をついた。
「なかなか完勝させてくれないものね、地球軍も」

ここはローマ周辺。ユニウス7の落下で、ローマは不可思議にも何の被害も受けなかったが、周辺の街にはかなりの被害が出ていた。
「まあ、ディアゴの知り合いの方ですか?」

「あ、ああ……そうでございます」

ディアゴはロウを見るなりセトナに向かって土下座した。

「まあ、どうしたんですか?」

「実はそいつ、地球降りる時に俺のモバイルスーツもってっちゃってさー」

「まあ! いけませんよ、ディアゴ!」

「お許しをー!」

「まあ、いいっていいって。返してもらえりゃ。役に立ったら、あいつ」

「ああ、大いに役に立った。おかげでセトナ様に会えた。礼を言うぞ。テラナー」

「へへ、そう言ってくれりゃ、ジャンク屋冥利に尽きるぜ! アグニス達に聞いたよ。お前、この人を守るんだろ?」

「ああ」

「じゃあ、俺の持ってきたシビリアンアストレイジャンク屋ギルドカスタムやるよ。マーズジャケットも付けられるぞ」

「いいのか?」

「ああ。セトナ様は被災者のために頑張ってる。俺、そう言う人みると応援したくなってるな!」

「ありがとう! お前はいい奴だ!」

「おーい」

ひよこつとジエス・リブルが顔を出した。

「あら、ジェスさん、どうしましたの？」

「おおー！ ジェスじゃねえか！ 元気でやってるか？」

「ああ、おかげさまで！ ロウもここに来たとはなー」

「まあ。ロウさんともお知り合いだったんですね。あらら、そう言えばお話はなんですの？」

「あの、ラクス・クラインが黒海沿岸の都市ディオキアに来るんだつてさ。それをちよつくら取材して来るわ」

「まあ」

「良かったらあんたも行くか？」

「いいえ」

セトナは首を振った。

「興味はありますけど、今は被災者の救援の方が大事です。ラクスさんとは、もし出会う運命ならまた出会えましょう」

第30話「金色の艦隊<10>

『こちらディオキアポートコントロール。ミネルバ、アプローチそのまま。貴艦の入港を歓迎する』

「ありがとう、コントロール」

ガルナハン攻略を成し遂げたミネルバはカスピ海を北上し、コーカサスを南に見ながら黒海へ出た。

「ディオキアかあ。綺麗な街ですよ。なんだかずいぶんと久しぶりですよ、こういう所は」

「海だの基地だの山の中だのばかり来たものね。少しゆっくりできたらみんなも喜ぶわね。でもこれは……」

「はあ……なんでしょうね一体」

基地中に響くような、賑やかな音が流れていた。

「「うわー!!」」

「みなさ〜ん! ラクス・クラインです!」

「「うわー!!」」

アスランはライブ動画を一目見て、胸を見て解った。

ミリアだった。ミリアが声を出すたび、ザフト兵は声を張り上げる。

「「うわあー!!」」

ヴィーノが休憩室のスクリーンに近寄る。

「おー! すげっ!」

「あ?」

「ま……」

なんだ、あのザクは！
この光景を見てアスランは絶句した。

ミーアがアップテンポの曲を歌う。
ピンク色に塗られたザクの手のひらの上で自由自在に歌って踊る。
皆ノリノリである。

もう、人垣で近くまで行けない。

「ご存知なかったんですか？ おいでになること」

ルナマリアはアスランに聞いた。

「ああ……ああまあいや……」

「ま、ちゃんと連絡取り合っている状況じゃなかったですもんね。きつとお二人とも」

「ああいや……まあうん……」

「ああ！」

その時、反対側にいたマユがアスランの方へ倒れ掛かった。

「す、すみません。誰かにぶつかられて……」

そのまま、アスランの腕をつかんでいる。

ルナマリアはよくやるわ、と思った。

「ま、ここは危ないな。向こうへ行こう」

「え？」

「あ！」

さりげなく、アスランはマユの腰に手を添えていた。
ルナマリアはそれをじーっと見つめていた。

「いやあほんとにこれは運がいい」

アーサーもノリノリである。

「まったく」
タリアは溜息をついた。

「ありがとう！ わたくしもこうして皆様とお会いできて本当に嬉しいですわあ〜！」

「うおおお！」

「勇敢なるザフト軍兵士の皆さん！ 平和のために本当にありがとう！ そして、デイクアの街の皆さん！」

「うおおお！」

「一日も早く戦争が終わるよう、わたくしも切に願って止みません！その日のためにみんなでこれからも頑張っていきましょう！」

「やっぱりなんか……変わられましたよねラクスさん」

「いや！ あ……それはまあ……ちょっと……」

マユの言葉にアスランはうろたえた。

アークエンジェルのお茶会。

「薬草茶、ハーブティーですよ。最近凝ってますの」

「へえ。それは楽しみだな」

カガリは表面上は気安くラクスに接している。

「くっさーい」

ポットのふたを開けて嗅ぎ、カガリは顔をしかめて見せた。

「ふふふ。良薬は口に苦しですわよ。慣れれば爽やかにありますわ」
そのお茶は意外とうまかった。

お茶を飲んで、たわいも無い話をして……昔に戻ったみたいだ。
カガリはちよっと嬉しくなった。

だが、そのお茶を飲んでしばらくした時だった。
頭が、痛い！

カガリは頭に手をやった。

「つつつ」

「ラミアス艦長？」

「ごめんなさいね、ちよつと頭が痛くなつて」

「カガリさんも、頭が痛そうね、大丈夫？ 身体に合わなかったのかしら」

優しい声でラクスが言う。

「痛み止めを、持ってきてきましょう。よく効く奴があるんです」

ノイマンが、出て行き、薬を持ってきた。

痛みが、急速に薄れていく。

なんだ、これは。この効き目は尋常じゃない。

何の薬だ？ さすがにカガリもすべての薬がわかる訳などない。わかるのはキラのためにと調べた薬だけだ。

錠剤とシートの記号は覚えておいた。後で調べよう。

あのお茶にも何か入っていたんじゃないか？

もうカガリは一口もお茶に手をつけなかった。

ラクスが何かしゃべっている。もう、雑談じゃない。戦争を止めなければとか、空疎な言葉をしゃべっている。どうやって止めるのかは一向に具体的な案が出てこない。

バルトフェルドが答え、キラがラクスに同調し煽る。

こうして皆を洗脳しているのか？ 皆疑問は抱かないのか？

心の中で思いながらも、カガリは表面はラクスの言葉に感心した様子を見せて頷いた。

お茶に入っていた何かの効果か、ラクスの言葉がもつとも聞こえてしまう時がある。妙に、心がゆったりとしているのだ。

カガリは太ももに爪を立てた。

確か催眠術に最も掛かりにくい人と言うのは、かかりたくないと思っ願っている人なのだ、と聞いた気がする。

「あ、なんでもないの。忘れて？」

「やれやれだな」

柵の向こう側からコンサートを見ていたジョンが言う。

ファントムペインは揃って偵察に来ていたのだ。

「ほーんと。なーんか楽しそうねえ。ザフト。警備もザルで。ここからバズーカでも撃ち込んでやりたいわ」

ミューディーが答える。

「街の連中も馬鹿だよな。ザフトが今おとなしくしてるからって警戒心無くしちまって。ビクトリア大虐殺やらかした連中だって言うのに」

シヤムスも言う。

「で、私達は、またあの艦追うのかな？」

ミラーがスウエンに尋ねる。

「沈める必要はないと言う事だ。適当に痛みつけければな」
スウエンが答える。

「ユーラシア中部の騒乱も一息ついた。ミネルバがジブラルタルに向かえば……反撃開始だ！」

「まったく、呆れたものですわね。こんなところにおいでとは」
タリアとレイが呼び出されたホテルに赴いたら、そこにはデュランダル議長がいた。

「はっはっはっ。驚いたかね」

「驚きましたとも。が、今に始まったことじゃありませんけど」

「元気そうだね。活躍は聞いている。嬉しいよ」

「ギル……」

レイの顔が輝いた。

「こうしてゆつくり会えるのも、久しぶりだな」

レイは、デュランダルに抱きついた。

久しぶりの、よそ行きの顔を被らなくていい時間である。

「ギルギルギル」

レイはぎゅうつとデュランダルを抱く手に力を込めた。

「でも何ですか？」

「ん？」

お茶の時間だ。3人は椅子に座って待っている。

「大西洋連邦に何か動きでも？ でなければ貴方がわざわざ御出になつたりはしないでしょ？」

「失礼します。お呼びになったミネルバのパイロット達です」

ミネルバのパイロット達が案内されてくる。

彼らはデュランダルに敬礼する。

「やあ！ 久しぶりだね、アスラン」

「はい、議長」

「ああそれから……」

「マユ。アスカです！」

「ルナマリア・ホークであります」

「君の事はよく覚えているよ」

「ああ……」

ルナマリアはちよっぴり首をすくめる。

そう言えば、議長の前でアス八代表に啖呵切っちゃったんだっ！

「このところは大活躍だそうじゃないか」

「ええ？」

意外な言葉にルナマリアは目を見開く。

「叙勲の申請もきていたね。結果は早晚手元に届くだろう」

「ああ……ありがとうございます！」

皆が席に着き、メイドさんがカップにコーヒーを注いでいく。

「例のローエングリンゲートでも素晴らしい活躍だったそうだね、君は」

デュランダルはルナマリアに話しかける。

「いえ、そんな」

「アーモリーワンでの発進が初陣だったというのに、大したものだ」

「あれはアスランの作戦が凄かったんです」

嬉しそうに、そして誇らしそうにルナマリアは言った。

「この街が解放されたのも、君達があそこを落としてくれたおかげだ。いやあ、本当によくやってくれた」

「ありがとうございます！」

会話は続く。

「兎も角今は、世界中が実に複雑な状態だね」

「宇宙の方は今どうなってますの？ 月の地球軍などは」

タリアが尋ねる。

「相変わらずだよ。時折小規模な戦闘はあるが、まあそれだけだ。

そして地上は地上で何がどうなっているのかさっぱり判らん。この辺りの都市のように連合に抵抗し我々に助けを求めてくる地域もあるし。一体何をやっているのかね、我々は」

「停戦、終戦に向けての動きはありませんの？」

「残念ながらね。連合側は何一つ譲歩しようとしなない。プラントも戦争などしてはいたくないが、それではこちらとしてもどうにもできんさ。いや、軍人の君達にする話ではないかもしれないがね。戦いを終わらせる、戦わない道を選ぶと言う事は、戦うと決めるより遙かに難しいものさ、やはり」

「でも……」

「ん？」

「あ……すみません」

デュランダルの話の腰を折ってしまった事に気づいて、ルナマリアは謝る。

「いや構わんよ。思う事があつたのなら遠慮なく言ってくれたまえ。実際、前線で戦う君達の意見は貴重だ。私もそれを聞きたくて君達に来てもらったような物だし。さあ」

「……確かに戦わないようにする事は大切だと思います。でも敵の脅威がある時は仕方ありません。戦うべき時には戦わないと。何一つ自分たちすら守れません。力が無ければ、なにも……」

「あ……」

マユは小さく息を呑んだ。

「普通に、平和に暮らしている人達は守られるべきです！」

そこにアスランが口を挟む。

「……しかしそうやって、殺されたから殺して、殺したから殺されて、それでほんとに最後は平和になるのかと、以前言われた事があります。私はその時答える事ができませんでした。そして今もまだその答えを見つけれないまま、また戦場にいます」

「そう、問題はそこだ。何故我々はこうまで戦い続けるのか。何故戦争はこうまでなくならないのか。戦争は嫌だといつの時代も人は叫び続けているのにな。君は何故だと思う？ ルナマリア」

「……。それはやっぱり、お互いに理解しようとしなから……」

オーブでは、私はナチュラルの友人もいました。でも、ただ怖がって苛めてくる人もいました」

「いや、まあそうだね。それもある。自分たちと違う。憎い。怖い。間違っている。そんな理由で戦い続けているのも確かだ、人は。だが、もつとどうしようもない、救いようのない一面もあるのだよ、戦争には」

「「え？」」

「例えばあの機体、ZGMF-X2000グフイグナイテッド。つい先頃、軍事工廠からロールアウトしたばかりの機体だが、今は戦争中だからね。こうして新しい機体が次々と作られる。戦場ではミサイルが撃たれ、モビルスーツが撃たれる。様々なものが破壊されていく」

「故に工場では次々と新しい機体を作りミサイルを作り戦場へ送る。両軍ともね。生産ラインは要求に負われ追いつかないほどだ」

「議長……」

「その一機、一体の価格を考えてみてくれたまえ。これをただ産業としてとらえるのなら、これほど回転がよく、また利益の上がるものは他にないだろう」

「「え！」」

「議長そんなお話……」

「……でもそれは……」

「そう、戦争である以上それは当たり前。仕方のないことだ」

「……」

「しかし人というもの、それで儲かると解ると逆も考えるものさ。これも仕方のない事だね」

「あ……」

「逆……ですか？」

「戦争が終われば兵器は要らない。それでは儲からない。だが戦争になれば自分たちは儲かるのだ」

「ああ……」

「ならば戦争はそんな彼等にとっては是非ともやって欲しいこととなるのではないかね？」

「そんな！」

「あれは敵だ、危険だ、戦おう、撃たれた、許せない、戦おう。人類の歴史にはずっとそう人々に叫び、常に産業として戦争を考え作ってきた者達がいるのだよ。自分たちに利益のためにね。今度のこ

の戦争の裏にも間違いなく彼等バンダ……いや、ロゴスがいるだろう！……」

デュランダルは露骨に『しまった』と言う顔をした。

「……」

「バンダ……い？」

ルナマリアは聞き返した。

「い、いや！ 忘れてくれ！」

デュランダルは顔を青ざめさせて否定した。額には冷や汗が浮かんでいる。よく見ると手が、震えている。

「ロゴスだ、ロゴス！ ロゴスだったら！ ロゴスなんだよ！ ルナマリア君、ロゴスなんだったら！」

「はあ」

ルナマリアは生返事を返すしかなかった。

「彼等こそがあのブルーコスモスの母体でもあるのだからね！」
デュランダルは強引に話を戻した。

「そんな……」

「ロゴス……」

「だから難しいのはそこなのだ。彼等に踊らされている限り、プラントと地球はこれからも戦い続けていくだろう」

「……」

「できる事ならそれを何とかしたいのだがね。私も。だがそれこそ、何より本当に難しいのだよ」

ルナマルアは考え込んだ。

なんとなく違う気がした。人類の歴史は、そんな、一部分の人達に操られたまま来たと言うのだろうか。そんなお粗末な物だったのだろうか？

……
そんな、そんなもんじゃないはずだ。もっと、人間の力を信じて……。

でも、ルナマリアは雰囲気にも吞まれて何も言えなかった。

「なんだと？」

お薬検索サイトで、昼間出された痛み止めを検索したカガリは驚きの声を発した。

それは……お茶会で出された痛み止めは、なんとオピオイド鎮痛薬モルヒネのよくなものだったのだ！

一般に出されるようなものではない。末期がん患者に出されるような物だ。

モルヒネではないだろう。モルヒネだったら、たぶん寝てしまっていたとカガリの医薬知識は言っていた。

これは間違いである。

無理もない。カガリの得たモルヒネの知識は軍事知識からである。

戦闘場面では、怪我人に唸っていられては敵の注意を引き付ける、などの理由で困る。そのため眠ってしまう量を処方するのだ。

普通に痛み止めのために処方されたモルヒネで寝てしまうような事はあまりない。

眠気の発生頻度はモルヒネ使用患者の約20%である。

「しかし……。ここまでやるか……？」

カガリは力なくつぶやいた。

気のせいか、いつもは時間通りに来る便意が来ない。お腹の中で便秘になっている気がする。

モルヒネの……副作用か？

カガリの不安は増した。

第31話「金色の艦隊<11>

「ほんとに、よろしいんですか？」

議長とのお茶会の後、ルナマリアは弾んだ声を出した。

こんな高級なホテルに泊まっつていいと言う。

「ええ、休暇なんだし。議長のせっかくの御厚意ですもの。お言葉に甘えて今日はこちらでゆっくりさせていただきなさい。確かにそれくらいの働きはしてるわよ、あなた方は」

「そうさせていただけ。ルナマリアもマユも。艦には俺が……」
アスランがそう言いかけると、レイが遮った。

「艦には私が戻ります。隊長もどうぞこちらで」

「いやそれは……」

「褒賞を受け取るべきミネルバのエースは隊長とルナマリアです。そしてマユは女性です。私の言っていることは順当です」

「レイ、俺達を忘れるな」

「あ、シヨーン、ゲイル！」

「明日の休暇も合わせて交代だ。じゃんけん！」

「いいから、お前達ここで休め」

「いや、じゃんけんだ。そーれ……」

「アスラン！」

その時、廊下の向こう側から声が聞こえた。

「ん？」

「あはは」

「ミーあ……」

ミーアと言いそうになりアスランは慌てて口を閉じる。

ミーアはデュランダルの前で止まるとお辞儀する。

「これはラクス・クライン。お疲れ様でした」

「ありがとうございます」

そう言うとミーアはルナマリアを押しつけアスランに飛びつく。

「あつ！」

押しのけられたルナマリアはむっとして睨む。

「ホテルにおいでと聞いて急いで戻って参りましたのよ」

「な……ミー……アはあ……」

「今日のステージは？見てくださいました？」

「え？ ああまあ……」

「本当に！？ どうでしたでしょうか？」

「あ……ああええ……ま……」

「ふん」

露骨にうろたえるアスランが気に入らなくてルナマリアは横を向く。

「彼等にも今日はここに泊まってゆっくりするよう言ったところですよ」

デュランダルが言う。

「どうぞ久しぶりに二人で食事でもなさってください」

「まゝ！ ほんとですよ！ それは嬉しいですわ！ アスラン、では早速席を」

アスランは引きずられていった。

「あーあ。アスランさんはラクスさんと食事か。いいなー」
マユがぼやく。

「しょうがないじゃない。久しぶりに会った婚約者だもん。さ、私達も食べよ？」

「しかし、ゲイルに悪いな」

レイが言う。じゃんけんは結局ゲイルが負けた。

「レイ、あんたもしっかり食べないと。あんたってほんとくと熱糧食とサプリメントで済ませそうな感じで心配なのよねえ」

「そんな事はない。……前にもそんな事言っただけか？ んー。じゃあ、俺はニンニクラーメン、チャーシュー抜きで」

「そんな物ここにある訳ないでしょ！ コースよ。議長が頼んでっ

てくれたんだからね、フルコース」

「やっぱりゲイルに悪いな」

「じゃあ、明日、交代の時に私が朝食弁当を何か作ってもらって持って行こう。レイ、お前は街でなにかお土産でも買ってやれ。それでいい」

シヨーンが言った。

「決まりね。フルコース、楽しみー！」

「ねえ、ルナ、起きてる？」

食事が終わり、ホテルの探検も済み、ルナマリアとマユは寢床に着いた。

「……うん」

「アスランさんってさあ……」

「アスランが何？」

「ラクスさんと婚約者なんだよねえ、悲しいよう……」

「マユ……泣いてるの？ 馬鹿ねえ」

「だって……」

「……アスランに、あの人は似合わない」

「えっ？」

「似合わないわ、絶対」

力強く、天井を見上げてルナマリアは言った。

ぎらっと、暗闇で、ルナマリアに向けてマユの目が光った。

「さあ、ラミアス艦長」

ノイマンが眠る前のマリユーに薬を持ってきた。

「ああ、いつもすまないわね。この薬がないと眠れないのよ」

「調子が悪いようですので、栄養剤を入れておきました」

「あら、ありがとう」

「では、おやすみなさい」

「はい、おやすみ」

ノイマンが出て行ってからしばらくたつて。扉が開いた。

ラクスが現れた。

ラクスが見たのは、ベッドで目を虚ろに開けているマリュー。唇からよだれが垂れている。

「助けて、助けて、ここは地獄……寒い……」

マリューは完全なバッド・トリップに入っていた。但し故意の。今回の精神薬剤は見た目こそ違い、成分が違う。そして、通常使用量を超えた幻覚剤が混ぜられていた。

「そう、ここは地獄。あなたは逃げ惑っています。空は黒く、悪魔があなたを襲ってきます」

ラクスが低い声で言う。

「いや、いや」

マリューは、目の前を手で払うしぐさをする。

「大丈夫。上の方から光が差してきましたわ。光の天使が降りてきて、悪魔を追い払ってしまいました。その光の天使があなたを救いました。ほら、もう大丈夫」

ノイマンがマリューの汗を拭き、バスタオルで低くなった体温を保温するように厚く包む。

ラクスは、哺乳瓶から飲み物をマリューに飲ませる。チョコレートと幻覚剤の緩和剤が入った物だ。

「ああ……」

マリューは幻覚剤の作用量がちょうど良くなったのだろう。プラスに効いた時の幸福感溢れた、安らいだ顔になった。そして赤ちゃんのように哺乳瓶の乳首から一心に飲み物を吸い続ける。

「光の天使、その顔は誰でしょう？」

「その声……ラクスさん……天使はラクスさんの顔をしています」

「そう、あなたの光の天使はラクス・クラインなのです。あなたはラクス・クラインの事を信じれば大丈夫。すべてうまくいくのです」
「はい……」

その時、ノイマンが小声で口を出した。

「ラクス様、契約どおり、私の事も……」

「ええ。これからやります」

そう言うとラクスはマリユールに向き直った。

「さあ、光に包まれて幸せなあなた。ここはあなたの結婚式です。隣にいるのはノイマン。あなたは彼の事をとて愛しています」

「え……違う！ 結婚式で隣にいるのは……。違う！ ノイマンじゃない！ 骸骨よ！ 彼は死んだわ、私を愛した彼は死んだ！ モビルアーマーの中で！ 死んだ！ あはは！ 死んだ！ 私を好きだったムウは死んだ！ ローエン格林で！ 跡形も残らず！ 死んだ！ 死んだ！ あはは！ 私は死に神だわ！」

「恋愛の事は、まだ予想以上に心の抵抗が強いようです。続きはまたで。今は、抵抗感を弱めるに留めます」

ラクスはノイマンに言った。

「しかたありませんね」

「さあ、全てあなたを悲しませるものは消えてしまいました。何も怖くありません。過去の恋愛は過去の事。彼らは幸せな光に包まれてあなたの幸福を祈りながら消えていきます。いつかあなたには素敵な恋人が現れます。あなたはそれを知っています。未来が見えます。あなたと彼は二人、幸福な生活をしています。あなたはただ幸せな光に包まれています。光の天使があなたを見守っていますよ」
マリユールは再び落ち着いた様子で哺乳瓶の飲み物を飲み続ける。
ラクスは優しくマリユールを抱きしめる。

「大丈夫。大丈夫よ。全てラクス・クラインに任せれば大丈夫……」
全部飲ませたところで、ノイマンは手馴れた様子でマリユールの腕を

縛り血管を浮き立たせると睡眠薬を注入する。
マリューはすぐ安らかな眠りにつく。
ラクスはマリューの身体の汗を拭いてやると、厚手の寝巻きを着せてやる。
そうして、二人はマリューの部屋をそつと出て行った。

翌朝

「おはようございます、アスランさん」
マユは、アスランの部屋の扉をノックした。隣にルナマリアも一緒だ。

結局けん制しあいながら二人でアスランを迎えに来た。

「お目覚めでいらつしやいますか？ よろしければダイニングにご一緒にと思ひまして」

「あああーあー、えつと……ええ？ あ……」

扉の向こうから焦ったような声が聞こえる。

「アスラン？」

ルナマリアも声をかける。

「あ……ああ！……え？ ああ……」
扉が開いた。

「「あ……」」

そこには、下着姿のラクス・クラインがいた。

「ありがとうございます。でもどうぞお先にいらしてくださいな。アスランは後からわたくしと参りますわ」

「ああ……」

「え……ああの……え……あはい……」

ルナマリアとマユは黙って閉じられていくドアを見つめるしかなかった。

「うーんふふ」

「どういうつもりだ!」

アスランはミーアに怒鳴った。

「え? だってあの子……」

「あの子じゃない! 一体どうして! いつ! 何でこの部屋に……」

「……」

「うふふ、お部屋に行くって約束してたのに寝ちゃったみたいってフロントに行って……」

「はあ?」

「そしたらほんとに寝ちゃってるしい」

「あー、だから何でこんなことするんだ! 君は!」

「え? だって久しぶりに婚約者に会ったら普通は……」

「ラクスは、そんなことはしない!」

「え?」

「……」

「しないの? 何で?」

「……」

アスランは沈黙する。

いきなりミーアの両肩を掴むとふいに湧き上がった乱暴な感情のままベッドに押し倒す。

「え? ちよつと!?!」

ミーアが狼狽した声を上げる。

それにかまわずアスランはミーアに唇を重ね、塞ぐ。

右手でミーアのふくよかな乳房をもみしだく。

「……あ」

ミーアが洩らしてしまったと言う様に小さな声を上げる。そして、ミーアの身体から力が抜ける。

アスランはその動きで我に返ったかのようにミーアから身体を離す。

「……あ……え?」

「くそっ！　だめだ！　掲示板のみんなを裏切る事はできない！」
うるたえるミアアの声を後ろに聞きながら、アスランは壁に拳を叩き付けた。
やっぱり違うのだ。ラクスとは……。

右手に残るラクスではありえない、ふくよかな乳房の感触が、残酷にもその事実を告げていた。

実はアスランは某掲示板ではフラット派の大物だった。

自作のつるぺた少女のイラストを貼りまくったりもした物だ。ハ口から定期的に送られてくるラクス・クラインの隠し撮り写真を巧妙にコラーージュに見せかけて貼り、「ネ申」と崇められた事もあった。だが、あの感触は……。くそっ、理想は現実の前に斯くも脆いと言うのか！？

「巨乳なんか……」

つぶやいたその声は弱々しかった。

アスランは今まで築き上げてきた自分が崩れ去るかのような恐怖感を感じた。

人生で最大の恐怖だった。

「調子、悪そうね、どうしましょう」

おろおろと、ラクスがカガリに声をかける。

カガリは壁に手を着きながらゆっくり歩いていた。身体がづらい。

身体中の関節に走る疼痛。発汗している。しかし熱いのか寒いのかわからない。吐き気もする。

おそらく、離脱症状。

身体のつらさから、カガリはラクスに渡された痛み止めは、ラベルだけは医療用薬剤でその実、ヘロインを強化した物を投与されたのではないかと疑っていた。

当たり前だ！　お前が盛ったモルヒネのような物の効果が切れたん

だよ！

そんな心の声はカガリは口に出さず。

「あ、ああ。今日、ちょっと女の子の日の前兆らしくてな」と壁に手を着きながら答える。

「まあ！」

ラクスの表情が明るくなる。

「わたくしも重い時があつて、でもノイマンがいい薬この艦には揃えてあるつて！ わたくしもすぐに回復しましたのよ！ すぐ持つて来させましょう」

「い、いや……」

……ためらうカガリをよそに、薬はすぐ持つて来られた。

なんだ、これは。またモルヒネのようなもんじゃないのか？ 持つて来られたのは粉剤だった。

これでは後から、それらが何か調べる事も出来ない。

「さあ、飲んでくださいな」

薬を差し出し、邪気のない顔でラクスが笑う。

「あ、ああ……」

一回ぐらいなら！

覚悟を決めてカガリは飲み干す。

身体のつらさがすーっと消えていく。頭が冴えて行く。

これは……モルヒネじゃない！ いや、モルヒネも入っているかもしれないが別の何かだ！ しかし。

「ああ、楽になった。疲労がポンと取れたようだ」

思わず声が出た。

「うふふ、よかった」

ラクスが笑う。

「それを、食事毎に摂つて下さいな。ああ、それから……」
ラクスが言った。

「食事毎にこれを飲んだ方がいいですわよ」

渡されたのは、酸化マグネシウムの顆粒包装一束だった。

一瞬にしてカガリの気持ちは冷やされ、カガリは背中に冷や汗をかいた。

カガリは知っていた。それが下剤だと言う事を。

そしてヘロインなどアヘンの仲間の副作用は便秘だと言う事を。

ラクスと別れてすぐ、カガリはトイレへ駆け込んだ。

そして飲んだ物すべて吐いた。水を飲んで更に吐いた。

もう薬物の成分は身体に吸収されてしまっているかもしれない。

無駄な行為かもしれない。

だが、カガリは吐いた。胃洗浄くらい吐いた。

身体がづらい位なんだ！ 耐えてやるさ！ ラクスになんか負けはしない！

涙と鼻水を流しながらカガリは誓った。

便秘は嫌だったので一応酸化マグネシウムは飲んでおいた。

第32話「金色の艦隊<12>

「え？ 議長はもう発たれたのか？」

「ええ。お忙しい方だもの。昨日ああしてお話しできたのが不思議なくらいでしょ、ほんと」

「あ、まあ……」

シヨーンは何か不機嫌なマユに気づいた。

「……彼女、どうしたんだ？」

ジヨンは小さな声でルナマリアに尋ねた。

「知らないわよ！」

こっちも不機嫌か……

シヨーンは首をすくめた。

その時、声がかかった。

「お前達、昨日のミネルバのひよっ子だろ？ もう一人のフェイスの奴はどうした？」

「ん？」

「失礼いたしました、おはようございます」

「あ、フェイス……おはようございます！」

レイとジヨンもそのニンジン色の髪の男に敬礼する。

「ふふ」

その男も答礼する。

「アスランさんはまだお部屋だと……」

その時、廊下の向こう側から声が聞こえてくる。

「……そしたらその兵隊さん……」

「あ……」

ルナマリアは気づいた。ラクス・クラインの声だ。

「顔真っ赤にしてね、ありがとっございまーすっですんぐくおっきな声で、うふふ」

「あ……」

アスランとミーアが腕を組んで現れた。

「なるほどね。分かった分かった、サンキュウ。おはようございます、ラクス様」

「あ！ ふん！」

アスランはみんなに見られているのがわかると、ミーアの腕を振りほどいた。

「あ……」

ちよっとミーアは悲しそうな顔をする。

「あーら、おはようございます」

「昨日はお疲れ様でした。基地の兵士達もたいそう喜んでおりましたね。これでまた士気も上がることでしょう」

「ハイネさんも楽しんでいただけましたか？」

「はい、それはもう」

そのハイネと呼ばれた男はアスランに顔を向けた。

「昨日はゴタゴタしててまともに挨拶も出来なかったな」

「あ……」

「特務隊、ハイネ・ヴェステンフルスだ。よろしくな、アスラン」

「こちらこそ。アスラン・ザラです」

「知ってるよ、有名人」

「ん？」

「復隊したって聞いたのは最近だけだな。前はクルーゼ隊にいたんだろ？」

「あはい」

「俺は大戦の時はホーキンス隊でね。ヤキン・ドゥーエでは擦れ違ったかな？」

その時、マネージャーらしき男が近寄ってきた。

「ラクス様。ラクス様には今日の打ち合わせが御座いますので申し訳ありませんがあちらで」

「ええ〜！」

「ちよっとお前！」

アスランはマネージャーの姿を見ると気色ばんだ。

「貴様……タケダと言う男とは知り合いか？」

「い、いや、自分、キングTAKEDA言いまんねん」

「タケダだと？ やはり知り合いか？ お前にそっくりな男だ！

この間までミネルバに乗っていた男だ！ 軍人に知り合いはいないか！？」

レイも、鋭い目つきでマネージャーを見つめていた。

「し、知らんがな。勘弁してや、ほんま」

「ふう……すまなかつたな」

「ほんまや。びびつたでえ」

「では、よくわかりませんが、アスラン、また後ほど」

ミーアはアスランにウインクをした。

「ああ……はい……」

ミーアは去って行った。

「仲いいんだな、けっこう」

ハイネはアスランに言った。

「え？ ああいやあそんな事は……」

「いいじゃないの、仲いいってことはいい事よ？ うん」

「はいまあ……」

「で、この6人と今いない奴全部で7人が、ミネルバのパイロットは？」

「え？ はい」

「セイバー、インパルス、ザクウォーリア、ザクファントム、バビカあ」

「「ん？」」

「はい」

「で、お前フェイスだろ？ 艦長も」

「はあ……」

「戦力としては十分だよなあ。なのに何で俺にそんな艦に行けと言うかね、議長は」

「え！？」

「ミネルバに乗られるんですか！？」

「ま、そう言う事だ。休暇明けから配属さ」

「ああ……」

「艦の方には後で着任の挨拶に行くが、なんか面倒くさそうだな、フェイスが三人つては」

「いえあの……」

「ま、いいさ。現場はとにかく走るだけだ。立場の違う人間には見えてるものも違っつてね。とにかくよろしくな。議長期待のミネルバだ。なんとか応えてみせようぜ」

「はい、宜しく願います」

ハインは去って行った。

「ではアスラン」

ミアが発発すると言うのでアスラン達は見送りに来ていた。

「はい、どうぞお気をつけて」

「キスクらいはするでしょ？普通。んー」

ミアはアスランに唇を近づける。

……！

アスランはふいに何かの感情に突き動かされたかのようにその唇に自分の唇を重ねた。

「！」

アスランはそつと唇を離す。

「……」

ミアはびっくりしたように少し口を開いて放心していた、が、その顔が花が開くように笑顔になる。

「ありがとう！ すごく嬉しい！」

「さ、遅れます」

アスランはミアをヘリコプターの方へ押しやる。

「また。また、きつとね！」
ミアはヘリコプターに乗り込んで、飛び立っていった。その姿が見えなくなるまで、アスランに手を振っているのが見えた。

「さ、どうしよっかなあ今日はこれから」

「んー……」

「せっかくの休暇だ。のんびりしてくればいい。艦には俺が戻るから気にしないでいいぞ」

アスランがルナマリアとマユに言った。

「そっか！ 隊長はもういいですもんねー。ラクス様と『充分ゆっくり』されて」

「えー！」

「そうですね、どうせならラクス様の護衛に就いて差し上げれば良かったのに」

「ルナ！」

マユは慌てた声を上げる。

「アスランはフェイスですもん。そうされたって問題はないでしょ？」

「ちよつと待て！ ルナマリア！」

「ふー」

「あ、ああ、マユ先に行ってくれ」

「あ、はい」

「……また叩きます？」

「はあ……今朝のことは、俺にも落ち度がある事だから言い訳はしたくないが。君は誤解しているし、それによってそういう態度を取られるのは困る」

「誤解……」

「……」

「誤解も何もないと思いますけど。分かりました。以後気をつけま

す。ラクス様がいらしている時は」

「いやだから……」

「大丈夫です。お二人のことは私だってちゃんと理解してるつもりですから……。う……ひつく……」

ルナマリアの目から涙がこぼれ出し、頬を伝う。

「おい、なに泣いて……」

「泣いてなんか……ひつく……」

「とにかく俺が悪かった。泣き止めよ、な？」

アスランはルナマリアにハンカチを渡した。

「アスラン……私……」

「ん？ なんだ？」

「……なんでも、ないです」

ルナマリアは泣きながら走り去った。

「あ……ふう」

アスランは溜息をついた。

「なあ、ラクス」

バルトフェルドがラクスに声をかけた。

「ラミアス艦長へのあれはなあ。薬、使いすぎじゃないか？ 他の奴らと同じ薬だけで十分……」

「彼女は鍵なのです」

ラクスは答えた。

「他の者などどうでもよろしい。艦の指揮も実質的にノイマンがすれば十分。元々艦長としての腕など最初から期待もしていません。ですが、前戦役の英雄である彼女は、なんとしても完全に駒にしておかなくてはなりません。その影響力を考えると……」

「そうかい」

「バルトフェルド隊長。わたくしは決めたのです。手を汚しても前

に進むと！ 世界平和の実現のために。わたくしは前戦役後、行動を間違いました。自分で蒔いた種は自分で刈ります」
「真つ直ぐな目をして口を引き締めて断言するラクス。
バルトフェルドはラクスを痛ましそうに見つめた。

「いやーしかし驚いたよ。プラントの議長が来てくれるとはよ
ディオキアの住人が話している。

「ああ、なんか同じようにこの辺の街、少し回っていくんだって。
ラクス・クラインも」

「前の戦争ん時は敵だ敵だって戦ってさ、それが今じゃこうだもん
な。ほんと分からねえもんさ」

「コーデイナーなんてやつぱりちよつとおっかない気もするけどさあ、あの乱暴者の連合軍に比べたら全然マシだよ。ちゃんとして紳士じゃないか」

「ふん。ちよつとお行儀よくされたからって」

「やめなよ、シャムス。聞こえるよ」

「うまいな。このサンドイッチ」

「ジョン、一人で食べるな」

ミラーがジョンの手からサンドイッチを取り、口に放り込む。

「まったく、熊スキーが乱暴だからこうなるんだ」

「ああ。だが、逆に言えばこちらが行儀よくしてやればよさそうだな。誰に支配されようが反抗するガルナハンとは違う」

「可哀想にな、ガルナハンの連中」

「それが、やつらの選択だ。そろそろ行くぞ。テレビを付ける。例のニュースの時間だ。町の連中の様子を確認しながら帰還、J・P・ジョーンズと合流する」

スウェンは車を発進させた。

街に軽いざわめきが走った。ニュースが始まったのだ。

それは、先のザフト軍によるガルナハン制圧の状況であった。監視カメラや偵察機から撮られた映像が、アナウンサーの声も無くただ淡々と流される。

目隠しをされ座らされる地球軍兵。をれを現地民がゲームでもするように頭に銃弾を撃ち込んでいく。

許しを請う地球軍兵。その頭を足で踏みつけ銃の引き金を引く現地民。近くにいたザフト軍は何も介入しない。

最後に、アナウンサーが『犠牲者のご冥福をお祈りします』とだけ言った。

次の番組は、各地のマスドライバーの特集だった。

最初は、オーブのカグヤ。軽やかな音楽とともに、輝かしい新造の再建されたマスドライバーからシャトルが発射する映像が映る。続いて混乱の続くカオシユン。そして、ビクトリア。

当然、前戦役でザフトが行った虐殺にも触れられる。

だが、決して番組の作り方は反ザフトを煽るような物ではなく、ただ淡々と事実を告げる物。生残者が持ち帰った映像が、奪回した地球軍が撮影した映像が、次々に流されていく。

先ほどのガルナハンの映像を規模を拡大したような、虐殺されていく地球軍兵の姿。ビクトリアから掘り出された腐乱した地球軍兵の死体の山……

どんな煽るような口調よりもそれは効果的に一般人の心の奥底に働きかける物だった。

最後に、パナマ。ここでもパナマでの虐殺が触れられる。そして一転、暗い雰囲気打ち消すように、パナマ・マスドライバーの再建苦労話になり、技師達が朴訥に話をしていく。そして終わりに明るい未来を象徴するように、パナマ・マスドライバーをシャトルが

駆け上がった。いった。

「やるわね」

その番組を見ていたタリアは右手の親指をかんだ。

その放送が引き起こす事が想像できたからだ。

アスランはそのニュースを見ると体を強張らせた。アスランだけではない。いや、アスランはまだまじだった。現地を見ている。しかし、その他の、ガルナハンを解放し、自分達を正義の味方と思っていた乗組員には、お前達は虐殺の手助けをしただけだと。お前達の手は血に塗れているのだと突きつけられる事はかなりの騒ぎを引き起こした。

それは、タリアが訓示をする事で一応収まったが、ミネルバの乗組員の胸には残った。自分達は無防備な者を殺したのだと。夜中に飛び起きる者もいた。だが逆に、ナチュラルへの蔑視を深めて心の平衡を保とうとする者もいた。

……タリアの想像通り、地球連合内では、中東、中央アジアの民族をユーラシアが弾圧していると言っような論調は息を潜めた。どっちもどっちだと一般人は思ったのである。

そして……地球連合からの離脱を目指してザフトに支援を求める地域は目に見えて減っていった。

「どうする？ キラ？ ザフトもやっぱり正義の味方って訳じゃないらしい」

「そうですね……」

「しっかりしろ！」

カガリはキラをどやしつけた。

ふう。まだ少し、つらいかな。もう少し、濃くても良かったかも。

カガリは心の中でつぶやくと栄養ドリンクの瓶からこくと一口、液体を飲んだ。

うん、元気が出る。活力が湧いてくる。

そう、カガリは元気に見えていた。理由があった。毎日行われるラクスのお茶会、お茶にまつたく手をつけないのも不自然だ。あれから、お茶会では気分が楽になるといつて毎日必ず薬を飲まされる。毎日薬を渡される。ラクスから渡される薬を捨てるのは簡単だ。だが、どうにも禁断症状の身体のつらさは……どうしても表に出てしまふ。ラクスからもらった薬を飲まずにつらそうにしているも疑われるだけだ。そこで、カガリは、ばて気味だからと毎日栄養ドリンクをもらった。一回は、そのまま飲んでみた。効果はすばらしい物だった。やはり、と思った。だが……

カガリはそれらを効果が出るまで、少なくとも元気に見せかけられるようになるまで薄めた物を飲んでいった。残りはトイレに捨てていった。

ラクスのお茶会でのゆったりとする薬物ともまた違うシャッキリさせてくれる薬物。カガリは覚醒剤ではないかと疑っていた。なぜなら、夕方以降は飲まない方がいいと言われ、ゆっくり休めば疲れも取れると睡眠薬をだされたのだから……

でも、いいよな？　ヘロインの禁断症状に比べれば覚醒剤の方が……。注射する訳じゃないんだ。大西洋連邦でも医療用に処方されるじゃないか。

カガリはそう自分に言い聞かせ、不安を押さえ込んだ。

オーブ軍令部

「黒海をですか？」

「そうだ。オーブは同盟条約に基づき黒海のザフト軍を討つべく派遣軍を出す事となった」

「ああ……」

トダカの問いにユウナが答える。

周りで聞いていた者達に溜息が漏れる。

「旗艦はタケミカズチ。総司令官として私が行く。代表がご病氣と言う状況の我が国だ。だからこそ国の姿勢ははっきりと示しておかねばならない」

「はあ……」

「しつかりと、宜しく頼むよ？」

「う……」

「いいね？」

「はっ！」

トダカから出て行くと入れ替わりのように二人の男が入ってきた。

「誰だ？ 君らは？」

髯を生やした男は敬礼して言った。

「オーブ陸軍大高一佐であります。ウナト宰相が極秘に作られた部隊『青風会』を率いております」

「は!？」

もう一人の男も敬礼して、言った。

「自分はオーブ海軍、高野一佐であります。同じく、『紺碧会』を率いております」

「なんだって!？」

再びユウナは驚きの声を上げた。

彼らから打ち明けられた物事は、もっと驚くべき物だったのだが。

「しかし、うまい報道の仕方だな」
バルトフェルドが唸った。彼は元は本業が広告心理学者である。
「これで、ザフトへ一旦傾いた一般市民の支持が元に戻っちまった」
「……まあ、僕らはザフトじゃない」
不貞腐れた様にキラが言った。
「で、どうするんだ？ キラ？」
カガリはキラに尋ねた。
「どうする……」
「情報では、地球軍はオーブに軍の派遣を強要したそうだ。どうする！」
「そんなの！」
カガリはキラを廊下に引きずり出した。
「介入するんだろう？ どうせ？」
「う、うん、そのつもりだけど。だって戦闘をやめさせなきゃ悲しみの種が広がるだけで……」
「なら聞け！ キラ、オーブ軍のモビルスーツは撃ち落とすな！ 艦艇も攻撃するな！」
「そんな！ 僕は止めなんて刺さないよ！」
「大切なオーブの財産だ！ 壊すな！ 攻撃は避けてかわせ！ 艦艇もだ。オーブのモビルスーツには攻撃するな。撃つな！ 止めを刺さなきゃ攻撃していいなんて思うな。お前にとって艦艇の砲やミサイルをかわすなんて簡単だろう？ あれだけの軍隊を維持するのにどれだけ金がかかっているとってる！」
「で、でも……」
「じゃなきゃオーブへ戻ったらおまえのこづかい減らす」
「う、うん」
「よし。さあ、部屋へ戻ろうか」
カガリはぱしっとキラの背中を叩いた。

「なに話してたの」

マリューが尋ねる。どこかぼんやりとした声だ。

「ん、ちよっとね。ところでザフト……ここらへん近辺で言つとミネルバか。ディオキアに入ったと言う。それと地球軍が戦闘になったらどうする？」

「……戦闘を止めるわ！」

「犠牲が出るぞ」

「少なくとも、するつもりよ」

マリューは後ろめたさそうに言った。

「モビルスーツはキラ君に任せるし、艦艇の砲撃は進路を妨害して防ぐわ」

「そうか。そこまで思っているなら。もう何も言わん」

「キラ。ここにいたのですか」

ラクスはキラに声をかけた。

キラは海底の見える窓で海底を眺めていた。

「あ、うん」

「……戦いが、またはじまりそうですわ」

「うん。オーブ軍が来るんだ。カガリに説得させて、なんとか退かさなきゃ。オーブの理念は……」

「キラ！」

ラクスはキラにすがりついた。

「ど、どうしたの？ ラクス」

「……ごめんなさい！ わたくしのせいで、またキラを戦わせてしまっ……」

「ラクスのせいじゃないよ、みんなで決めた事じゃないか」

「違う、違う……」

ラクスはかぶりを振った。

「すべてはわたくしが志など持たなければ、世界が混乱しようとお

「ブは、皆は平和でいられたのです」

「よくわからないけど、ラクス」

キラはラクスの肩に手を当て、微笑んだ。

「ラクスがしようとしてしている事だろ？ きつと立派な事だ。僕は

何であれ手伝いたいんだ。いいね？」

「ああ、キラ……」

ラクスは赤ん坊のように泣きじゃくりはじめた。

キラは困ったようにラクスを抱きしめ、背中を叩いてやるのだった。

『慰問のコンサートはどこへ行っても凄い人。地球の人もみんな待っててくれて、声かけてくれて、ほんとに嬉しい！ あたし用のピンのザク、初めて見たときはもう感動しちゃったよ！ あたしももっと頑張らなくっちゃ！ でも戦争はなかなか終わらないし、結構大変よね。議長の言うことは正しいんだからみんなちゃんとそれを聞けばいいのに。そ・し・て。すごいすごい！ アスランにキスされちゃった！ まさかやってくれるとは思わなかったからすごい嬉しい！ これって……あたしにもラクス様と同じ位の魅力感じてくれたって事だよね？ 嬉しい。やばい。本気で好きになっちゃいそうだよ。好きになっちゃだめなのに。だってアスランにはラクス様が……。でも、好き。辛いよ』

「また、パナマ運河を通るか」

「こつすんなり待たずに通れるのもまほりんのおかげですね？」

「えへへ」

ナーエは、井沢真秀がとっつき難い第一印象とは異なり、堅苦しい呼び方を好まず、本心では人との接触到に飢えている事を感じてい

た。

ゆえに、あえてあだ名で呼ぶ。まほりんと。最近では皆まほりんと呼び、真秀もまんざらではないようである。

「次は、スカンジナビア王国ですか？」

「ああ。あの国も先の戦いで中立を守るうとした。ぜひ伺いたい国だ」

「あのう、アグニス？」

気遣うようにまほりんが言った

「なんだ？」

「スカンジナビア王国に、それ程夢持たない方がいいと思うよ？」

「なんか、掴んでいるのか？ スカンジナビアに対して」

「って言うか。どこの国も自分のために一生懸命って事かな」

くすつとまほりんは笑った。

第33話「金色の艦隊<13>

「ゲイル・リバーズであります」

翌日、ミネルバ艦内。一人だけ、ハイネと顔を合わせていなかったゲイルがハイネに敬礼する。

「ああ。ハイネ・ヴェステンフルスだ。よろしく。しっかしさすがに最新鋭だなあミネルバは。な？ ナス力級とは大違いだぜ」

「ええ、まあそうですね」

アスランは答える。

「ヴェステンフルス隊長は今まではナス力級に？」

「ハイネでいいよ。そんな堅っ苦しい。ザフトのパイロットはそれが基本だろ？ 君はルナマリアだったね？」

「ああはい」

「俺は今まで軍本部だよ。この間の開戦時の防衛戦にも出たぜ？」

「隊長……あの私達は……」

「ヴェステンフルス隊長の方が先任だ、ショーン」

「ハイネだって」

確認するようにハイネが言う。

「あ……」

「あ、でも何？ お前隊長って呼ばれてんの？」

「ああいえまあ……はい」

「戦闘指揮を執られますので私はそう」

「えー。んー、いやでもさあ、そうやって壁作って仲間はずれにするのはあんま良くないんじゃないの？」

「ああ……」

「俺達ザフトのモビルスーツパイロットは戦場へ出ればみんな同じだろ？ フェイスだろうが赤服だろうが緑だろうが、命令通りにワァー群れなきゃ戦えない地球軍のアホ共とは違うだろ？」

「はい」

「だからみんな同じでいいんだよ。あ、それとも何？ 出戻りだからっていじめてんのか!？」

「え?」

「あ、あたしは名前で呼んでます!」

「あ、私だって!」

マユとルナマリアが争うように言う。

「なら、シヨーン、お前も隊長なんて呼ぶなよ？ お前もお前だな

アスラン。何で名前で呼べって言わないの?」

「すみません」

「ま、今日からこのメンバーが仲間って事だ。息合わせてばっちり行こうぜ!」

ハイネは歩いていく。

「俺もああいう風にやれたらいいんだけどね」

「え?」

「ちよつとなかなか」

「アスランはアスランらしくやればいいですよ」

ルナマリアはアスランに微笑みかけた。

「ありがとな。ルナ」

アスランはルナマリアに微笑みかける。

「おい何やってんのアスラン！ お前が案内してんだろっが!」

「あ、はい、すみません!」

「ラクス様」

廊下で、ノイマンはラクスに声をかけた。

「あ、ノイマンさん。どうしたのですか?」

「大丈夫なのか」

ラクスにだけ聞こえるような声でノイマンはささやいた。

「何がですか?」

「あなたは、目的のためにはどんな手もいとわないと言った。だから着いてきた」

「……わかっていますわ」

ラクスはきつとなった。

「昨日のD-1ブロックの監視記録を見つけた。海底の見える廊下だ。キラとの恋に引かれていいかげんになるなよ。引き返せると思うか？ 俺の手もあなたの手も、もう汚れているんだ。ウナト・エマ・セイランを殺した時から。その道を選んだのはあなただ」

ラクスは無言で俯いた。

「D-1ブロックの廊下の監視装置は切っておいた。またキラと話したければそこにしろ。ログも消しておいた。どうせ大した事はないだろうしな。見る者などいないし。だが注意はしておけ」

「あ」

ラクスがはつと顔を上げると、ノイマンはさっさと向こうに歩いていくところだった。

「ノイマン……ありがとう……」

「だいぶ荒れてきましたね」

オーブ軍のアマギー尉は言った。

ここはすでに大西洋である。

「まだ序の口だろうがな。一時間くらいか？こいつを抜けるのに」

トダカー佐は答える。

「そうですね。そう大きい低気圧ではありませんから。しかしまさか喜望峰回りとは思いませんでしたよ」

「仕方ないさ。ステージは黒海だ。インド洋じゃ観客がいらないんだ。戦う相手は同じでも」

「……しかし、このようなことは口にしてはいけないのでありますよ。今回の派兵、自分にはやはり疑問です。他国を侵略せず、

他国の侵略を許さず、他国の争いに介入しない。それがオーブの理念であり、我等オーブ軍の理念でもあったはずです。なのに……」
「ああ、解っている。だがこれも国を守るためと言えばためだ」
「はい」

「んー、オーブの派遣軍ねえ」

「空母1、護衛艦8、明日の夕刻にはこちらに入る予定だそうです
が」

「んー、それを使って黒海を取り戻せか。いろいろ大変だなあ俺達も。やる事多くて」

ネオはぼやいた。

「はあ」

「ま、いい。解った。確かにあの辺りは押さえとかなきゃならない所だからな」

346

「え！ それほんと？」

ミリアリアは驚きの声を上げた。

「ああ、間違いない。スエズに増援だ。こりやまた近くおっぱじまるぜ。市街地に被害が出ないといいけどな」

「ごめんなさいね、ジェスさん。セトナさんの取材に行くの、先になりそう」

「いって事よ。俺も、そんな事なら取材したいからな！」

スエズにいる諜報員からの知らせは、ミネルバにも届いた。

「ジブラルタルを狙うつもりかこちらへ来るかはまだ判らないわ。でもこの時期の増援なら巻き返しと見るのが常道でしょう。スエズへの陸路は立て直したいでしょうし。司令部も同意見よ。もう本当に鬨ぎ合いね。ま、いつものことだけど」

「はあ……」

「その増援以外のスエズの戦力は？　つまりはどのくらいの規模になるんです？　奴等の部隊は」

「10隻以上にはなるでしょうね。兎も角本艦は出撃よ。最前衛マルマラ海の入り口、ダーダネルス海峡へ向かい守備に就きます。発進は 六」

「はい！」

「はっ！」

「貴方も、よろしい？」

「タリアはハイネに聞いた。」

「ええ、それはもう」

「では直ちに発進準備に掛かります」

「アーサーが言う。」

「ええ、お願い。それとアスラン」

「はい」

「今度の地球軍の増援部隊として来たのは…… オーブ軍と言う事なの」

「え！？」

「なんとも言い難いけど今はあの国もあちらの一国ですものね」

「オーブが…… そんな……」

「でもこの黒海への地球軍侵攻阻止は周辺のザフト全軍に下った命令よ。避けられないわ。避けようもないしね。今はあれも地球軍なの。いいわね？　大丈夫？」

「……はい」

シヨックを受けた顔のままアスランは答えた。

「ええ！？ オープ！？」
「そ、援軍、オープだって」
ルナマリアにマユが言った。
「そんな……なんであの国が……」
「もう信じらんないわよねーほんと、こんなところまで。でも、今は地球軍だもんね、そゆ事もあるか」
「……」
ルナマリアは黙ってしまった。

「オープにいたのか、大戦の後ずっと。いい国らしいよなあ、あそこは」

甲板で夕日を見ていたアスランにハイネは話しかけた。

「ええ、そうですね」
「この辺も綺麗だけどなあ」

「はい」

「戦いたくないか」

「ん？」

「オープとは」

「……はい」

「じゃあお前、何処となら戦いたい？」

「え？ いや、何処とならって……そんな事は……」

「あ、やっぱり？ 俺も」

ハイネは笑った。

「あ……」

「……そう言う事だろ？ 割り切れよ。今は戦争で、俺達は軍人なんだからさ。でないと、死ぬぞ？」

真剣な顔になってハイネは言う。

「……はい」

いい台詞を聞いたな、とアスランは思った。ハイネをかつこいいと思った。

「ルナマリア」

アスランはあちこち歩き回り、ルナマリアを探し当て、声をかけた。

「はい？」

「戦いにくいな。オーブとは」

「そんなの！ オーブが敵になるって言うなら私がやっつけてやり
ますよ！」

「無理するな。お前がオーブとは戦いたくないのはわかっている」

「うっ」

「……じゃアルナ、何処とやら戦いたい？」

「え……そんな……どこことなんて……」

「はっはは。俺もだ」

アスランは笑った。

「……そう言う事だろ？ 割り切れよ。今は戦争で、俺達は軍人な
んだからさ。でないと、死ぬぞ？」

「はい……」

去っていくアスランの背中を見つめるルナマリアの視線には、憧れ
と尊敬が混じっていた。

言ってやった言ってやった！ 俺ってかつこいい！

艦内に入って行くアスランの心は弾んでいた。

実の所、2年暮らしたオーブに、カガリは別としてアスランはさほ
ど拘ってはいなかったのだ。

「はあ、捨てずに取っておいてよかった」

疲れた足取りのカガリは自分の部屋になんとか辿り着き、鍵をか

けるとノイマンからもらった栄養ドリンクの瓶を取り出す。本当は捨てるはずだった、その瓶の中身。そして……現れたのは封が切られていない瓶が2本。

もう、朝用意した薄めた栄養ドリンクはとっくに飲んでしまったのだ。そして、離脱症状でようようこの部屋にたどり着いたのである。

「そのままでも……少し……半分だけなら……いいよな？ 今朝もらった分が丸々2本もあるし」

一本の瓶の栓を開け。

コクつと中身がカガリの喉を通っていく。

半分で止めるつもりが一本飲んでしまった。

薬の効果がカガリの身体に染みとおっていく。

「ああ、いい。疲労がポンと取れるようだ」

カガリの声に張りが戻る。たとえ仮初だとしても、今はそれが必要なだとカガリは思った。

オーブ艦隊は地球軍艦隊と合流した。

合同で作戦会議が開かれる。

「なるほどね。黒海そしてマルマラ海。私ならこの辺りで迎え撃つことにするかな。海峡を出てきた艦を叩いていけばいいんだから。」

そう考えるのが最良かと」

ユウナはネオに作戦を告げる。

「ふん」

「ザフトにはあのミネルバがいると言う事だけれど、あれはあなた方大西洋連邦軍にお任せしてよいでしょうか？」

「おや？ やはり自国で修理された艦には戦いにくいと？ 縁があった艦とは？」

「そうではありませんよ。なにしろ我が軍は再建したばかりですね。討つ自信がないのですよ。何しろミネルバと言えばザフトの最

新鋭艦ですからなあ」

「またまたご冗談を。オーブ軍の精強さはよく知られておりますよ」
「いや、ほんとの事です。オーブ近海での戦いは我が国もよく観察
できましたからね。ミネルバの強さはよくわかっています。大西洋
連邦にもデータをお渡ししたはずですが」

ユウナの本音だった。オーブ近海での戦いの時に、大体の能力は掴
んでいる。相手などしたくもない。

「……いいでしょう。では先陣はオーブの方々に。左右どちらかに
誘っていただき、こちらはその側面からと言う事で」

これ以上は無理は押せないか。

ユウナは心の中で溜息をついた。

「……いいでしょう」

「海峡を抜ければすぐに会敵すると思えますが宜しくお願いしま
すよ？」

「ええ、お任せください」

「ダーダネルス海峡まで距離3000」

「コンデイションレッド発令。ブリッジ遮蔽。対艦対モビルスーツ
戦闘用意」

タリアが命令を下す。

「対艦対モビルスーツ戦闘用意」

「トダカ。モビルスーツは防空用にM1アストレイだけ出せばいい」

「いいのですか？ ユウナ様」

「いいさ。無駄に消耗する事もない。地球軍がモビルスーツを発進
させない限り、こちらも出さな」

「はっ！ モビルスーツ隊発進開始！」

「モビルスーツ隊発進開始！ 第一小隊、発進せよ！ イーゲルシユテルン起動、オールウェポンズフリー！」

「敵艦隊、射撃開始しました」

「セイバー、インパルス発進。離水上昇取り舵10！」

「ルナマリア・ホーク、セイバー、行きます！」

「アスラン・ザラ、インパルス、発進する！」

「取り舵30。タンホイザーの射線軸を取る」

「え？」

「海峡を塞がない位置に来たら薙ぎ払う。まだ後ろに空母がいるはずよ」

「あ、はい！」

「相手もモビルスーツを出してきたか。動きはどうだ？」
ユウナは尋ねた。

「たった2機だけです。相手も、こちらに向かってきません」

「ユウナ・ロマ・セイラン、敵に碌にダメージを与えられてないよ
うだが？」

ネオからの通話だった。

「ちっ、残りのムラサメ隊全機発進」

「いやそれは……」

トダカが異議を唱えようとするがユウナは構わず言う。

「3隊に別ける。2隊は各10機とする。その2隊は連携して敵のモビルスーツに当たれ」

「……それは、大げさ過ぎるのでは？ たった2機相手に」

「いいんだ。あの機体はオーブ近海で見た事がある。侮るべきじゃない。艦隊の安全が第一だ。落とそうなんて思っんじゃないぞ。邪魔すればいいだけだ。戦闘機型による一撃離脱戦法に徹しろ。その隙に1隊はミネルバ以外の艦を攻撃しろ！」

第34話「金色の艦隊<14>

「キラ！ 私を出せ！ 私を出したらオーブ軍は止まるかもしれない！」

カガリが怒鳴る。さっき飲んだ栄養ドリンクのおかげで元気いっぱいだ。

「うん！」

キラもうなづく。

「わたくしは反対ですわ」

ラクスが言う。

こいつは……いつもの言葉と反対の言葉を言う。見抜かれてる、こいつにだけは……。

こいつは表面の顔と違う、もっと恐ろしい者だ。こいつがキラを立て、仲間を操り……

カガリは、偽ラクスの画像を見るラクスの、冷たい憎しみのこもった表情を見てしまった事があった。カガリだけが知っているラクスの一面かも知れない。いや、バルトフェルド隊長はさすがに知っているだろうか。それにノイマンもあやしい。

カガリの背中に冷や汗が吹き出る。

「なんでだよ、いいじゃないか？」

気安そうにカガリはラクスの肩に手をかける。心の中は恐怖に震えながら。背中に冷や汗をかきながら。

「そうだよ！ なんでさ！」

キラが不服そうに言う。

「だって、まだカガリさんは……」

ラクスがしまったと言うように口を閉ざす。

「なに？」

キラが不思議そうにラク스에尋ねる。

「……」

ラクスは無言でキラから目をそらす。

「いいだろう？ カガリが出ればオーブ軍は止まるかも知れないんだ。大丈夫。カガリは僕が守る！」

ラクスはバルトフェルドの方を見る。彼は、どうしようもないと言うように肩をすくめる。

「……キラが、そう言うのでしたら」

不承不承、ラクスはカガリが出撃する事を受け入れる。

キラ、感謝だ！ 全てが終わってお前が生きていたら必ず救ってやる！ 最高の病院に入れて最高の医者をつけてやるからな！

カガリは心の中でキラに手を合わせた。

「さあて、始まったぞう」

バルトフェルドが楽しげな口調で言った。

「ええ、始まってしまったわ」

マリューが気遣わしげに答える。

「だが、奴らには我々など、大して眼中に入っていない。奴らの関心はすべて地球軍とオーブ軍。言葉で何か言っても意に介さないだろう。ならば我々がする事は、言葉で何か言う事ではない。最高のタイミングで、横合いから思い切り殴りつける！」

「ええい、なんだ、この数は！」

セイバーとインパルスそれぞれに10機程度のムラサメが張り付き、かわるがわる攻撃する。

反撃しようとする、後ろに別の敵機が付き、断念する事しばしば。群れて戦うナチュラルの戦法である。

セイバーとインパルスは大量の敵機に翻弄される。

その隙に残りの一隊がミネルバ以外の艦艇に次々に攻撃を成功させていく。

「タンホイザー、軸線よろし」

「よし！ 起動！ 照準、敵護衛艦群！」

「は！」

「タンホイザー起動。照準、敵護衛艦群。プライマリ兵装バンクコンタクト。出力定格。セーフティ解除」

ミネルバの陽電子砲が発射体勢に入るのはタケミカズチから見ても取れた。

「敵艦、陽電子砲発射態勢！」

「あ………」

「回避！ 面舵20！」

トダカは叫んだ。

「てえ！」

アーサーが叫んだ時、何かミネルバの陽電子砲を貫いた。爆発が起こる。

「「うわぁ！！」」

「ん？」

「何？」

「何よ？ 何処から！ なに………？」

天上から下りてくるモビルスーツがあった。

「ああ……フリーダム！？ キラ！？」

アスランは思わず声を上げた。

「タンホイザー被弾！ FCSダウンしました！」

「消火急げ！ FCS再起動！ ダメージコントロール班待機！

着水する！ 総員衝撃に備えよ！」

そして、そのモビルスーツの後方から姿を現したあの艦は……

「あれは……アークエンジェル！？」

アスランは再び声を上げた。

アークエンジェルから、一機のモビルスーツが発進する。

『私は、オーブ連合首長国代表、カガリ・ユラ・アスハ！ オーブ軍は軍を退け！』

「え！？」

「ええ！？」

ユウナ達は驚きの声を上げる。

「カガリ!？」
そしてアスランも、また。

『オーブ軍! タケミカズチに着艦する。用意しろ!』
その声が響くと、そのモビルスーツはタケミカズチに向かってまっすぐやってくる。
フリーダムは一瞬、慌てたような、後を追うような動きを見せるが、止まる。

「げ、迎撃を!」
アマギが叫ぶ。
「待て!」

ユウナが止める。
あれはカガリの声だ!
皆が呆然としている間に、そのモビルスーツはタケミカズチに着艦してしまう。

「カ、カガリ様!？」
そのモビルスーツから降りてきた人物を見ると甲板要員は驚きの声を上げた。
「そうだ。すぐブリッジに行く。案内しろ!」
「は、はいっ」

「艦長……あの……」
アーサーがタリアに恐る恐る伺いを立てる。
「いいからちょっと待って。本艦は今一番不利なのよ?」

「あああ……」

「まったく……何がどうなってるんだか……まさか、このままオーブが退くなんて事は……」

「艦長。動きがあったらこっちも出ますよ？いいですね？」

待機しているハイネが言った。

「ええ、お願い」

『ユウナ・ロマ・セイラン』

また、ネオからの通信が入る。

『これはどういうことですか？』

「あ……あ……いやこれは……」

『あれは何ですか？ 本当に貴国の代表ですか？』

ユウナは心を立て直すと言った。

「現在確認中です。ではまた！」

その時、カガリがブリッジに入ってきた。

「ユウナ！」

「カガリ！」

「話は後だ！　すぐモビルスーツを戻せ！　アークエンジェルの奴らは実力を持ってこの戦闘を止めようとしている！　被害が出ない内に早く！」

「わかった」

ユウナは答えた。

「トダカ。モビルスーツ隊を退かせろ」

「し、しかし……」

「いいから」

オーブ軍のモビルスーツは撤退していく。

『ユウナ・ロマ・セイラン』

また、ネオから通信があった。

『これは、どう言う事だ』

少し怒りの籠った声がする。

「いや、ロアノーク大佐。先程のはアークエンジェルに拉致されていた我が国の代表です」

『ならば、何故攻撃を止めた？』

「アークエンジェルが、この戦闘を實力を持って止めようとしているそうです。被害の出ない内に退いたまで」

『ほう……お国をも含めて色々面倒なことになりそうですが？』

「同盟国からの忠告です。被害の出ない内に、この場は退いた方がいい」

その時力ガリが横から通信機を取った。

「とにかくモビルスーツは出撃させるな！ 砲撃はしてもいい！」

『ふざけるな！ この事は必ず問題にさせてもらおう！』
通話は切れた。

地球軍艦艇からモビルスーツが発艦していく。

「よし！ 奇妙な乱入で混乱したが幸い状況はこちらに有利だ！

オーブ軍などいらん！ ザフト軍を打ち破れ！」

ネオが指令を出す。

「アーサー！ 迎撃！」

「は、はい！」

「シン！ モビルスーツ全機発進させて」

「はい！」

「ハイネ・ヴェステンフルス、グフ、行くぜ！」

「マユ・アスカ、ザク、行きます！」

「レイ・ザ・バレル、ザク、発進する！」

「ユウナ、いいのか？ もしオーブが再び焼かれるような事になれば……」

「心配するなよカガリ。今の国際情勢で、地球連合はオーブを敵に出来っこないさ。それに国元には彼ら、『青風会』や『紺碧会』が……いやなんでもない」

「そ、そうか」

父よ、貴方は偉かった！

改めてユウナは父ウナトに尊敬の念を新たにす。

ユーラシアと大西洋連邦を混乱に陥れ、この国際情勢を作り出したのは父上だ。いざと言う時、オーブの生きる道を広げるために……。そして灰田さんと言う得体の知れない、だがすごい力を持つ人物とも知り合い……。

「しかし、このままならねえ、カガリ。オーブの国際的信頼は地に落ちるな」

ユウナはカガリに助言した。

「あ、砲撃なら、砲撃ならやってもいい！ 砲撃なら、多分大丈夫だ。被害は出ないだろう。砲撃の場合は進路を妨害して邪魔するとか言ってた」

「ん？ そうかい？ じゃ、砲撃再開だ。トダカ。地球軍を援護してやれ。盛大にな」

「はっ。砲撃開始！」

「行くぞ！」

スウェンは号令をかける。スウェンはストライクノワール改、他の者はスローターダガー改だ。

「はいよ」

「了解！」

「あの赤い戦闘機型のは厄介だ。後回しにするぞ！」

「10時の方向よりミサイル8！」

「回避！ 取り舵10！」

「うう……」

「トリスタン、てえ！」

ザフト側に不利な戦いが続く。

「クラミズハとイワサコを前に出せ！ 二隻一気に追い込むんだ！」

第35話「金色の艦隊<15>

「回避！ 下げ舵15！ 降下！」

地球軍の攻撃に、マリューが叫ぶ。

「バルトフェルドさん！ アークエンジェルを頼みます！」

カガリの予定に無い突然のタケミカズチ着艦に呆然としていたキラが叫ぶ。

「了解！ でも俺、キラ程の腕はないからねえ。そちらもフォロー頼みますよ、ラミアス艦長」

「了解。ムラサメ発進後、本艦はミネルバに向かいます。オーブと地球軍を牽制して」

「はい」

マリューの言葉にノイマンは冷静に答えた。

「進路クリアー。バルトフェルド隊長、ムラサメ発進よろしいですわ」

「アンドリュー・バルトフェルド、ムラサメ行くぞ！ でえい！」

「俺はキラ程上手くないと言っただろうが！ 落としちゃっぞ！」

「うわぁ！」

バルトフェルドはアークエンジェルを攻撃せんとする地球軍のモビルスーツを落としていく。

「ミネルバ右舷へ！ モビルスーツ4！」

「間を狙える？」

「やります！」

「機体に当てないですよ？ ゴットフリート2番、てえ！」

「なんなの？ あいつ！？ 一体どっちの味方よ！」

ミネルバに取り付こうとしたミューディーが罵る。

「一旦退避だ。仕切りなおす！」

スウエンが言った。

キラはフルバーストで地球軍のモビルスーツを次々に撃墜していく。

「か、艦長！ あの艦が……」

「始めはこちらの艦首砲を撃っておきながら……どう言う事なの？

まさか本当に戦闘を止めたいだけなんて、そういう馬鹿な話じゃないでしょうね？」

アークエンジェルに救われた格好のタリアは訝しがる。

「ミネルバ以外の艦艇に射撃を集中しろ。その方が効率的だ」
ユウナが命じる。

「左舷前方、クラオミカミ級、あれの足を止める！ バリアント、
てえ！」

ミネルバを追い込もうと運動を続ける護衛艦を見て、マリューが命

じる。

「うわぁ！」

クラオミカミはバリアントによって作られた大波に、体勢を立て直すのに必死になる。

「ちっ」

2隻のクラオミカミ級でザフト艦艇を追い込もうとしていたユウナは舌打ちした。

「くっそー、冗談じゃないぜ」

ハイネが罵る。

「キラやめろ！ 何故お前がこんな！」

アスランは必死にキラと通信を試みるが通じない。

「手当たり次第かよ、この野郎生意気な！」

キラは向かって来るセイジのバビの翼を撃ちぬいた。

「はッ！？ ぐわぁー！ー！」

「セイジ！」

バビはアスランの声も空しく墜落していく。

「う……セイジ……！ キラ……！」

ミネルバと地球軍の間が開き、砲火が静まると、フリーダムとアーケンジエルは撤退していった。

まるで天上からの使者が帰っていくかのように……

「……資材は直ぐにディオキアの方から回してくれると言う事ですが、タンホイザーの発射寸前でしたからねえ。艦首の被害はかなりのものですよ」

「はあ……」

ここはダーダネルス海峡に近い港。ミネルバをはじめ親ザフト同盟軍はここまで撤退してきた。タリアは溜息をついた。

「さすがにちよつと時間がかかりますね、これは」

「そうね。兎も角、出来るだけ急いで頼むわ。いつもこんな事しか言えなくて悪いけど」

「いえ、解つてますよ、艦長」

「あいつらのせいよ……」

「ん！」

「あいつらが変な乱入して来なきゃセイジだって……」

「ルナ……」

セイジのバビの機体は翼を破壊されただけだった。だが……高所からの墜落によりセイジは死亡した。

「大体何よあいつら！ 戦闘をやめるとか。あれがほんとにアークエンジェルとフリーダム！？ ほんとに何やってんのよオーブ！

馬鹿なんじゃないの？」

「ルナ！」

マユがたしなめる。

「くっ！」

アスランはセイジの面影を思い出そうとする。ああ、もうほんやりしてわからない。前に戦死したタケダの顔も……どっちがどっ

ちだか判らない。なぜだかミーアのマネージャーの顔しか浮かんでこないのはどう言う訳だ？
「くっそー！ く……」

戦闘後、当然ネオはタケミカズチに乗り込んできた。

「さて、と言う事だかご説明いただきたいですな。……お初にお目にかかります。アス八代表……？」

ネオはカガリに言った。

「ああ。私は、アークエンジェル一味にかどわかされていた。これは国の信用に関わるので秘密にして欲しい」

「誘拐？」

「ああ、そうだ」

「しかし……アークエンジェルとフリーダム、どこに隠してあったので？」

「それは知らない」

カガリは平然と嘘を言った。

「私はマルキオ導師の家に行った所から意識を失って、目覚めたら、もうアークエンジェルだった」

「マルキオ導師が怪しいですな」

「と言うか。マルキオ導師はおたくの外交官だろう？」

「くっ。戦闘を止めるとは、どう言う訳で？ お言葉によってはお国もただでは済みませんよ？」

「彼らから脱出する方便だ。戦闘を止めたいとでも言わなければアークエンジェルから出してくれなかつたらう」

「彼らの目的は？」

「戦闘を止めたい、だそうだ。戦争を止めたいだと」

「しかしだねえ！ 彼らに撃墜されたモビルスーツの数わかりますか！？ 急所こそ外してある。ああ、すごい腕ですよ。だがね、ほ

とんど高空から墜落死ですよ。戦闘を止めたいと言うのは、戦う両者を滅ぼすとの意味か！」

「しかたない」

カガリは首をすくめた。

「彼らは心を病んでいる」

「心を病んでいる？」

「ああ。急所さえ外しておけば自分は人殺しじゃないと信じて疑わない。病んでいるんだ。こんな事なら、早く病院に入れるべきだった」

どこか突き放した口調でカガリは断言した。

「彼らとは……知り合いなのか？」

「うっ……」

「どうも……フリーダムのパイロットは先の代表首長ウズミ様の隠し子だったようで」

「え!？」

カガリが言葉に詰まると、ユウナは助け舟を出した。

「そんな訳でオーブ側も遠慮がありました。後は……お察しく下さい」

ユウナは困ったように両手を広げ、肩をすくめた。

ユウナが話している内にカガリは自分を立て直した。

「だから、モビルスーツは退かせると言った。砲撃はしていいとも言ったぞ。私は。邪魔をする方法は聞いていたんだ、私は。砲撃によるアークエンジェルからの被害は微々たる物のはずだ。違うか？」

カガリは言葉を続けた。

「うっ」

ネオは言葉に詰まった。

ユウナが口を出した。

「まあ、今後の事を前向きに考えましょう。ミネルバ以外の艦には撃沈及び再起不能の損害を与えたと判断します。ミネルバは逃がし、残った黒海を楽に我らが頂く。どうです？」

「そう言う訳にもいかん。が、考慮してもいい。だが、アークエンジェル、討つてよろしいか？」

ネオの目が鋭く光った。

もしアス八代表が躊躇うようなら……。

「討つてくれ。地球軍が討てるもんならな。邪魔などしない」

カガリはなんの躊躇もなく言った。

「まず現状の戦力では無駄だと思うが。オーブとしては相手するのはごめんこうむりたい。私はアークエンジェルを討つために核ミサイルを用意しろと言いたくなった程だ。逃げるのに成功した時は……まったく。妙に親近感が沸くのは何故だろう。この代表には。

追求はここら辺にしといてやるか。

ネオは仮面の下で苦笑した。

「え？ あの艦の行方を？」

タリアはアスランの要請に驚いた。

「はい。艦長もご存じのことと思いますが、私は先の大戦時ヤキン・ドゥーエではあの艦、アークエンジェルと共にザフトと戦いました。おそらくはあのモビルスーツ、フリーダムのパイロットも、あのアークエンジェルのクルーも、私にとっては皆よく知る人間です。だからこそ尚更この事態が理解できません。というか納得できません」

「それは確かに私もそうは思うけど」

「彼等の目的は地球軍に与したオーブ軍の戦闘停止、撤退でした。

しかし、ならばあんなやり方でなくとも、こんな犠牲を出さなくとも手段はあったように思います。彼等は何かを知らないのかもしれない。間違えているのかもしれない。無論、司令部や本国も動くでしょうが、そうであるなら彼等と話し解決の道を探すのは私の仕事です」

「それは、ザフトのフェイスとしての判断と言う事かしら？」

「はい！」

「なら私に止める権限はないわね。はあ。確かに無駄な戦い。無駄な犠牲だったと思うもの。私も。あのまま地球軍と戦っていたらどうなっていたかは判らないけど。いいわ、分かりました。貴方の離艦了承します。でも、一人でいいの？」

「はい、大丈夫です。ありがとうございます」

「なに？どうしたの？」

アスランが出撃したのを見てルナマリアは聞いた。

「さあ？ フェイスの仕事とかなんとか」

「ふーん」

「はい」

ノックの音にタリアは答えた。

「レイ・ザ・バレルです。よろしいでしょうか？」

「どうぞ」

部屋に入ってきたレイはデータディスクをタリアに差し出した。

「ん？」

タリアは怪訝そうな顔をした。

「カガリ、アークエンジェル一味はどうするつもりだい？」

ユウナはカガリに尋ねた。

「……難しいな」

カガリはむつつりと答える。

「国際指名手配をするつもりだが、もう少し考えたい」

「もしかして弟君の事を考えてるのかい？ カガリは優しいねえ」

「いや……問題はラクスだ」

「ラクス・クライン？ そのまま、指名手配してしまえばいいのでは？ プラントにもラクス・クラインがいる。混乱させられるかもしれない」

「なあ……ラクスを……」

「なんだい？」

「……ん、いや、いい」

カガリは思った。自分はラクスが怖いのだと。

そして……自分は何を言おうとした？ 一人の命を奪う命令を出しそうになった。

今更、かな。アフリカじゃザフト兵の命を狙ってたじゃないか。

しかし、やはり踏ん切りが付かない。ラクスの底が知れないのだ。

仮にもオーブ代表首長を、前大戦と一緒に戦った仲間をドラッグ漬けにするなどともな精神ではない。

それに、私を言うなりの人形にしたところで何をするつもりだったのだ？ オーブ軍の戦力など大した物でもないのだし。不審に思う者も出るだろう。

それに、小耳に挟んだ、ラクスを支援する組織だとか言う『ターミナル』。どれだけの規模なんだ？ まさかオーブにも手が入っているのでは？

うかつには手が出せない……

カガリの身体に一気に倦怠感が襲ってきた。

アスランは人気の無いところにインパルスを隠し、車を借りた。

ナビゲーションと検討しながら、アーケエンジェルが隠れていそうな所を考える。

「ん？ ミリアリア！」

歩道に、知った顔を見かけた。

そうなのか？

「あ……？」

その女性が振り向く。

「ミリアリア・ハウ？」

サングラスを外して、もう一度問い掛ける。

「アスラン・ザラ？」

その女性はやっぱりミリアリアだった。

「そう。それで開戦からこっちオーブには戻らずザフトに戻っちゃったって訳？」

「ああ、簡単に言っとそう言う事だ」

「……」

「あ……向こうではディアツカにも会ったが」

ミリアリアの沈黙が辛くてアスランはディアツカの名前を出した。

「ええ？」

ミリアリアは露骨に嫌な顔をした。

「あ……」

失敗したか！？ ディアツカ、お前何をした！？

アスランは焦った。

「はあ……」

「それは兎も角アークエンジェルだ。あの艦が一体何でまたこんな所で。あの介入のおかげで……だいぶその……」

「混乱した？」

「え？」

「知ってるわよ。全部見てたもの、私も」

「……混乱したし、死人も出た！ アークエンジェルがミネルバの陽電子砲を撃った時に！ それ以外にも！」

「ふーん」

「……」

「でもアークエンジェルを探してどうするつもり？」

「う……話したいんだ。会って話したい。キラと」

「今はまたザフトの貴方が？」

「それは……」

「それに、どうやって探すつもりなの？ ただ辺りをうろつろつして
るだけ？」

「うっ……街で、何か補給したんじゃないかと。聞き込みに回るつ
もりだ」

「ふう、非効率ね。いいわ。手がない訳じゃない。貴方個人になら
繋いであげる。私もだいたい長いことオーブには戻ってないから詳し
いことは分からないけど。誰だってこんな事ほんとは嫌なはずだも
のね。きつとキラだって」

「ありがとう！」

アスランはミリアリアに手を合わせた。

ふいに、疑念が兆した。

……ところで、なんでオーブを離れたミリアリアがアークエンジ
エルへの連絡方法を知っているのだろう。自分には何も……オーブ
で2年も暮らしていたのに。
アスランは軽くシヨックを受けた。

第36話「金色の艦隊〈16〉」

「でも、どうしたらいいのかしらね」

マリユールは言った。

「ん？」

「これから」

「ま、先日の戦闘ではこちらの意志は示せたと言ったところかな」
「ん」

「だが、これでまたザフトの目もこちらに向くところになるだろうし、
厳しいな。色々と」

「そうよね……。カガリさん……。大丈夫かしら。まさかオーブの
空母に降りるなんて」

「一旦は攻撃止んだんだがなあ」

「周りに押し切られてしまったのかしらね」

「だが、モビルスーツは飛んでこなかった。地球軍に対して、戦っ
てる所を見せただけ、とも考えられる」

「そうね……。つつ」

まただ。マリユールは襲ってくる頭痛に頭を押えた。

また、ノイマンに痛み止めもらわなきゃ。

一応の目的は達せたとか話す一同を背に、一人ラクスは壁を睨んで
いた。

カガリのあれはやはり演技だったのね。同じ考えになった振りの。
やっぱり、まだ早かった。もう少し薬漬けにして洗脳してから表に
出すべきだった。

誰にも表情を見られないようにして、ラクスは唇をゆがめ、目を吊
り上げた。

「大丈夫か？」

マリユールのために痛み止めを持ってきたノイマンがラクスに声をかける。

「大丈夫ですわ」

小さな声でラクスは答えた。

「大丈夫。まだ大丈夫。修正可能よ。くじけないで、ラクス！ 私の志はこんな事で潰れやしない。私は世界の物、世界は私の物」
ラクスは呪文のように唱える。

その言葉をラクスに言ったのは誰だったろうか？　ラクスが幼き頃に死んだ母か。

ともあれそれはラクスの心の深い所に刻み込まれた。自分が人類を導かねばと。

そして後悔したのだ。前戦役後に引き籠もってしまった事で混乱した世界を。

ラクスは決意したのだ。

もう一度、始めましょう。最初から。今度こそ間違わずに。

ラミアス艦長やカガリをはじめとする乗員に薬を盛ったのは確かに多少心が咎めるが。

状況が予測と違ってしまったためにウナトには死んでもらったが。それも志を遂げるため。

マリユール、カガリ。

彼らには前戦役の英雄としてお神輿になってもらえばよかっただけ。危険な目になど合わさないとはいはずだったのに。

どこで間違っただろう。カガリさんに薬など使わず正直に話せば……？　馬鹿な。私が世界を統治するなど一笑に伏されただけだ。

しかし、わたくしは世界を平和の名の下に治めると誓ったのだ。そのためにも多少手が汚れようとそれが何だろう。

大丈夫。わたくしはラクス・クライン。私は世界の物、世界は私の物。

「そう、たかがオーブですわ。国の後ろ盾という大義名分が無くなっただけ。計画を先に進めるだけですわ」

心を立て直すと、ラクスはいつものように微笑んだ。

「ありがとう、ノイマンさん」

微笑んだまま振り向き、キラに歩いていった。

「ありがとう。疲れたでしょう。ごめんなさいね。キラに頼るばかりで」

そう言つてラクスはキラにキスをした。

「任せてよ！ラクスのためだったらあれくらい軽いさ！」

キラは明るく笑った。邪気の無い、誰もが好意を抱くような子供のような笑いを。

ラクスの頬をなぜか涙が流れた。

「ルナマリア・HOOKです」

「入って頂戴」

ルナマリアはタリアの部屋に入った。

「あなたに極秘任務を与えます」

「ジェスさんごめんねー、ちょっと用事が出来ちゃった」

「いいさ、待つよ。まだまだこの辺で戦い起こりそうだしなあ。俺も戦いが起こったら取材行っちゃうかも知れねえし。はいこれ」
ジェスはミリアリアに連絡先を渡した。

「ん？ 艦長！」

「ん？」

「暗号電文です」

『ダーダネルスで天使を見ました。また会いたい。赤のナイトも姫を探しています。どうか連絡を。ミリアリア』

「ミリアリアさん？」

マリユーは驚きの声を上げた。

「赤のナイト？」

「あ……アスラン？」

「ん……」

「ターミナルから回されてきたものなんですよ？」

「はい」

「ダーダネルスで天使を見たって……じゃあミリアリアさんもあそこ？」

「彼女、今はフリーの報道カメラマンですからね。来ていたとしても不思議はありませんが」

ノイマンが答える。

「アスランが戻ってきたと言う事か。プラントから？ さあてどうするキラ？」

「え？」

マリユーは訝しげな声を上げる。

「誰かに仕掛けられたにしちゃあ、なかなか洒落た電文だな」

「でも、ミリアリアさんの存在なんて」

「確か、彼女自身は知っているはずですがね。この艦への連絡方法は」

「会いましたよ」

キラは言った。

「アスランが戻ったのならプラントの事も色々分かるでしょう」

「ん……」

バルトフェルドは唸る。

「でもアークエンジェルは動かないでください。僕が一人で行きま
す」

「え？」

「大丈夫、心配しないで。ラクス」

キラはにっこり微笑んだ。

「なあ、モビルスーツに乗ってこない奴を、なんとか倒す方法はな
いか？」

カガリは額の汗を拭きながらためらいがちにユウナに聞いた。

倦怠感が強くなっている。楽になる方法は、ある。ポケットの中の
栄養剤の瓶。

飲むものか。

カガリは唇を噛み締めた。

「そりゃあ……特殊部隊を送るとか手はあるけど

「ふう、相手は戦艦の中だ」

「……もしかして、ラクス・クラインかい？」

「ああ」

決意したように、カガリは頷いた。

「アークエンジェルはラクスが牛耳っている。ラミアス艦長やバル
トフェルド隊長を立てる振りをして、ドラッグまで使ってる。ラク
スさえ片付ければなんとかなるんだ」

「わかった。僕の方でも考えよう」

確か賛美歌13番だったかな？ とある有名なスナイパーへの連絡
方法をユウナは考えた。タツキ・マシマに命じて接触させてみよう。

「……カガリ？」

ユウナは焦った。

カガリの様子がおかしい。ぐったりしている。

「……心配ない……覚醒剤の効果が切れたただけだ」

「覚醒剤!?!」

「ラクスだ……ラクスに一服盛られた。あの船は狂ってる。コーヒ
ーとレキソタンでも持ってきてくれ。リタリンとデパスでも構わん」

「あ、ああ……」

カガリはそれで離脱症状が済むと思っていた。この時は。

「キラ!」

待ち合わせの場所に現れたキラを見て、ミリアリアは声を上げた。

「ミリアリア」

「あーもうほんとに信じられなかったわよー。フリーダムを見た時
は。いつオーブを出たのよ?」

「いやあ。それよりアスランは?」

「あ……ごめん。用心して通信には書けなかったんだけど、彼ザフ
トに戻ってるわよ?」

「ザフトに!?!」

「うん」

「あの機体……」

海の方こうからこちらに向かって飛んでくるモビルスーツが見えた。

彼らを遠くの岩陰から監視している者がいた。
ルナマリアである。

「キラ」

インパルスから降りたアスランはキラに呼びかけた。

「アスラン……」

「……………」

「あれは君の機体？」

「ああ」

「じゃあこの間の戦闘……………」

「ああ、俺もいた。今ミネルバに乗ってるからな」

「あ……………」

「お前を見て話そうとした。でも通じなくて……………。だが何故あんな事をした！ あんな馬鹿な事を」

「あ……………」

「おかげで戦場は混乱し、お前のせいで要らぬ犠牲も出た」

「……………でもそれで……………」

「ん？」

「君が、今はまたザフト軍だって言うならこれからどうするの？」

「僕達を探してたのは何故？」

「やめさせたいと思ったからだ。もうあんなことは。ユニウス7の事は解ってはいるが、その後の混乱はどう見たって連合が悪い。それでもプラントはこんな馬鹿なことは一日でも早く終わらせようと頑張っているんだぞ！ なのにお前達は、ただ状況を混乱させているだけじゃないか！」

「本当にそう？」

「え？」

「プラントは本当にそう思ってるの？ あのデュランダル議長って

人……………」

「……………」

「戦争を早く終わらせて、平和な世界にしたいって」

「あ……………」

「お前だって議長の一している事は見てるだろ！？ 言葉だって聞いたら！ 議長は本当に……………」

「じゃあ、あのラクス・クラインは？」

「あ……………」

「今プラントにいる、あのラクスは何なの？」

「あああれは……頼ったんだよ！ 議長はラクスの影響力に！ プラントの混乱を鎮めるために！ 議長は自嘲していた。ラクスの力を使わなければいけない自分に！」

「あ……」

ミリアリアは息を呑んだ。

「じゃあ何で本物の彼女はコーディネーターに殺されそうになるの？」

「え！？ 殺されそうにつて……なんだそれは！」

アスランは驚きの声を上げた。

「え？」

ルナマリアも驚きの声を上げた。

本物のラクスつて……？

「オーブで。僕等はコーディネーターの特殊部隊とモビルスーツに襲撃された」

「う……」

「狙いはラクスだった。だから僕またフリーダムに乗ったんだ」

「そんな……」

「彼女もみんなのもの、もう誰も死なせなくなかったから。彼女は誰に、何で狙われなきゃならないんだ？」

「う……」

「それがはつきりしないうちは、僕にはプラントも信じられない」「キラ！ ……それは……ラクスが狙われたと言っなら……それは確かに、本当にとんでもない事だ。だが、だからって議長が信じられない、プラントも信じられないというのは、ちょっと早計過ぎるんじゃないのか？ キラ？」

「アスラン……」

「プラントにだって色々な想いの人間がいる。ユニウス7の犯人達のように。その襲撃の事だって、議長の御存じのない極一部の人間が勝手にやった事かもしれないじゃないか！」

「アスラン……」

「そんな事くらい解らないお前じゃないだろ！」

「……それはそうだけど……」

「兎も角その件は俺も艦に戻ったら調べてみるから。だからお前達は、今はオーブへ戻れ」

「あ……」

「戦闘を止めたい、オーブを戦わせたくないと言っんなら、まず連合との条約からなんとかしろ。戦場に出てからじゃ遅いんだ！」

「カガリは、少なくともオーブの攻撃を一旦は止めたよ？ あれからモビルスーツの出撃もなかった」

「だが！ また出てきたらどうする！ 条約は条約だ。それをどうにかしなければオーブの立場は苦しくなるばかりだ！」

「でもそれじゃあ、君はこれからもザフトで、またずっと連合と戦っていくっていうの？」

「……終わるまでは仕方ない」

「じゃあこの間みにたいにオーブとも？ オーブ軍にはカガリがいるかも知れないのに？」

「……俺だって出来れば討ちたくはない。でもあれじゃ戦うしかないじゃないか！ 連合が今ここで何をしているかお前達だって知ってるだろ！？ それはやめさせなくちゃならないんだ！」

「……」

「だから条約を早く何とかしてオーブを下がらせると言っている！」

「……でも、アスラン……それも解ってはいるけど、それでも僕達はオーブを討たせたくないんだ」

「キラ！」

「本当はオーブだけじゃない。戦って討たれて失ったものは、もう

二度と戻らないから」

「 ! 自分だけ解ったような綺麗事を言うな!! お前の手だつて既に何人も命を奪つてるんだぞ!!」

アスランは一瞬怒りに身を包まれた。

「……うん。知ってる」

表情も変えず、淡々とキラは言った。

「う」

アスランの怒りは静かな怒りに変わった。

本当に知っているのか？ 単に先の大戦でニコルを殺した事とかをそう思つてるだけじゃないのか？ 自分の手が血に染まつていると自覚しているなら、なぜ武装だけ破壊して高空から墜落死させるような真似をする!？

戦闘を止めるために、どつちの陣営にも等しく犠牲を出す。それをわかつてやっているのか？

まともに見えて、こいつは狂ったままだ！ そのベクトルが違うだけ……

思いがアスランの胸に込み上げ、一気に迸る。

「お前は結局自分以外の誰も信用できないんだな。自分が間違つていると思つから周囲は全部間違つている。だからオーブには帰らない。とりあえずやりたい事をやる。そんな感じだ。結局お前は大きい情報を集める手段もなくせに、全ての物事を自分にとって都合のいい事にしかとらない。都合の悪い情報は信じない……俺の事だつて！ アークエンジェルへの連絡方法をミリアリアが知つていてなぜ俺には……!」

「だからもう、ほんとに嫌なんだ、こんな事は」

アスランの台詞を無視してキラは言った。

「キラ……」

「討ちたくない、討たせないで」

……恫喝と来たか……勇者症候群か……。

幻聴だろうか？

『やめてよね、僕にかなうわけないだろ』

そんな台詞が聞こえた気がする。

アスランは絶望的な想いにとらわれた。

キラは、自分がスーパーコーディネーターだから、フリーダムがあるから、自分が強いように、偉いように、だから何をしてもいいと錯覚している。キラの周りにまともな大人はいないのか？

それらの思いを押し殺してアスランは言った。

「ならば尚の事だ。あんな事はもうやめてオーブへ戻れ。いいな？」
そう言つと、後ろを振り向き、振り向く事無く去って行った。

3隻同盟と一緒に戦った仲間達から急速に心が離れていくのを感じる。

ラクスだって……アークエンジェルへの連絡方法を俺に教えもしなかった。くそっ！

キラ……次に会う時は……手加減せずにぶちのめしてやる。

アスランはそれがキラに対する自分の義務だと決意した。

第37話「金色の艦隊<17>

タケミカズチに帰還した翌翌日、カガリは目覚めると同時に強烈な咳に襲われた。

我慢しようとしても出来ない。

個室なのをいいことに遠慮せず咳をする。

だが咳が遠のいたと思ったら……

「うげえー！ー！ー！」

強烈な吐き気と発熱に襲われた。

悪寒がする。滝のように汗が出る。

「ど、どうしたんだい、カガリ？」

横になったまま身体を丸めて身動きできないカガリを見て、心配そうにユウナはおろおろする。

どうやら外から呼んでも返事がないので入ってきたようだ。

いつもならデリカシーのない行為だとぶっ飛ばすところだが今日は助かった。

「医者……離脱……症状みたいだ。あぶなかった。早くアークエソンジエルから逃げ出してよかった。うっおえーっ」

また吐き気だ。もう吐ける物などないのに。喉が焼ける。

もう出るものなどないのに、口から排出しようと腹の筋肉が凝集する。呼吸が、できない！ それでも、腹は、声を出そうとする。必

死で吸い込んだ空気を端から呻き声に変えて排出する。

「うー！ー！」

くそう、水にも食べ物にもなにか混ぜられていたに違いない。

「うー！ー！」

鼻水で顔を汚して、カガリは憤った。

覚醒剤かモルヒネを持って来い！ 医務室には常備してあるはずだ！
そう言つて暴れたくなる。

しかしその気持ちを抑えてカガリは言った。

「私をベッドに拘束しろ！ 離脱症状が抜けるまで！」

「先生、なんとかならないんですか？」

ユウナが船医に懇願する。

「カガリ様のおっしやる通り、ドラッグからの離脱症状でしょう。カガリ様から渡された瓶からはサイオキシン麻薬と覚醒剤が検出されました。他にヘロインらしきものを投与されていたと言う事で、最初の大量の鼻水や咳はおそらくそのせいでしょう。すでにメサドンは投与してその症状は落ち着きましたので。後はおそらく最悪と言われるサイオキシン麻薬の禁断症状でしょう。治療法はありません。点滴していますので脱水症状はないでしょう。後は時間を待つ事です」

その声を聞きながら、カガリは閉じたまぶたの奥にきらめく光を見た。まるで戦闘機で急降下しているような不快な感覚が駆け巡る。苦痛と不快感が体中に広がる。皮膚と筋肉の間、筋肉と骨の間を虫が這い回る感覚がする。

カガリはそれらにただ身を任すしかなかった。

……ようやく平静を取り戻してきたカガリが気づいて最初に見たのは、自分の顔を濡れタオルで拭くユウナだった。

「お前……」

パツとユウナの顔が明るくなる。

「気がついたのかい!？」

「なんとかねー」

「よかった！ほんとによかったよ！」

「ユウナ、お前、ずっと……」

「僕にはこれぐらいしか出来ないから」

ユウナは照れくさそうに笑った。

「……見つとも無いところをみせてしまったな」
「勇ましかったよ。カガリ。自分を拘束しろと叫ぶ所なんかね。カガリくらの薬の使用期間なら、薬を持って来いと暴れても無理ないそうさ。医者も感心していたよ。惚れ直したなあ」
カガリの頬が赤く染まった。
結局、カガリが一応動けるようになるまでにはそれから三晩が必要だった。

「キラ」

海中に潜むアークエンジェルから海底の様子を眺めているキラに、ラクスは声をかけた。

「ラクス」

「ここでしたか」

「うん」

「綺麗ですわねえ。地球って不思議」

海底の奇妙な景色を眺めながらラクスは言った。

「そうだね」

「アスランの事を？」

「うん。何が本当か、彼の言う事も解るから。またよく分からなくて」

「そうですわね」

ラクスは相づちをうった。

ああ、本当に彼はわからないのだろう。行き当たりばったりに行動しているだけ。……でも私は、そんな彼を……。

「プラントが本当にアスランの言う通りなら、僕たちは……オーブにも問題はあるけど、じゃあ僕達はどつするのが一番いいの？」

「分かりませんわねえ」

「ですからわたくし、見て参りますわ」

「ん？」

「プラントの様子を」

「ええ!？」

「道を探すにも手がかりは必要ですわ」

「そりゃ駄目だ! 君はプラントには……」

「大丈夫です、キラ」

「ああ……」

「わたくしももう、大丈夫ですから」

「ラクス……行かないで……」

キラは泣き出した。

「行くべき時なのです。行かせてくださいな、ね? キラ。キラは強い子でしょう?」

ラクスはキラの頭を優しく包み込み、撫で始めた。

「早くこんな事は終わらせましょう。そうしてキラにはゆっくり休んでもらうの。そうすればあなたもきつと治るわ。大丈夫」

「ラクス? 僕は元気だよ?」

「ふふ。わからなくてもいいですわ。大丈夫、大丈夫……」

キラは訳のわからないまま、心地よい感触に身を任せた。

キラと離れると、ラクスはノイマンに小さな声で声をかけた。

「わたくしもバルトフェルド隊長も宇宙へ行ってしまう。後は頼みます」

「はい、わかっております」

ノイマンも、小声で答えた。

「さーって、どうすっかなあ。スカンジナビアのシャトルでも借りるか、ジャンク屋ギルドに頼むか」

バルトフェルドが宇宙へ行く方法を考えていた時だった。

『先月より行われていた各地ザフト軍基地へのラクス・クラインの慰問ツアーも、いよいよ明日その幕を閉じることとなります』
テレビでは偽ラクスのニュースが流れている。

「おお？ ……んー……」

『先の大戦でも父、シーゲール・クラインと共に終始戦闘の停止を呼びかけ、またこの新たな戦いにも心を痛めて、早期の終結を願うデュランダル議長と行動を共にするこのザフトのカリスマ的歌姫の歌声は、長く本国を離れ厳しい状況下で過ごす兵士達にとってまさにこの上ない心のオアシスとなりました』
バルトフェルドはにやりと笑った。

「断る」

その東洋人風の男はタツキ・マシマに告げた。

「な、何故だ？」

「振り向くな。そのまま話せ。他の依頼で彼女を狙った事があっただが、失敗した。何かがあるのか、ただの偶然か。それがわかるまで依頼は無しだ」

「そ、そうか」

タツキ・マシマはそれ以上言うのをあつさりあきらめた。

男が流儀に反して色々しゃべってくれたのはタツキ・マシマにもわかった。こちらも誠意に答えなければならぬ。

「わかった。今回はあきらめよう。だが、依頼は継続していると考えてくれ。そちらから連絡があり次第、スイス銀行に金を振り込む手はずは整えておく」

「はいはいはい、どうもどうもどうも、あんじょうたのむでえ

」

「みなさ〜ん、こんにちわ〜。お疲れ様です」

ラクスがディオキア基地の空港に現れた。

「ラクス様こそ、本当に御苦労さまでした」

「いえいえ〜」

「早速で悪いんやけどなあ、時間がないんや。ケツかつちんやさかいシャトルの準備はよしてんか」

「あはい！ あしかし定刻より少々早い御到着なのでその……」

「急いでるからはよ来たんや！せやからそっちも急いでーな！」

「ああはい、ただちに」

ピンクハロが

「アカンデー」と飛び回る。

『ラクス様搭乗のシャトルは予定を早め、準備でき次第の発進となった。各館員は優先でこれをサポートせよ。繰り返す……』

椅子に座ったラクスは手馴れた感じで行列しているザフト軍兵士にサインを色紙に書いていく。

「はい」

「ありがとうございます！ 光栄です！」

「いいえ。うふ」

ラクスは笑った。

「失礼します！ シャトルの発進準備完了致しました」

「ありがとうございます。では、みなさま、また」

ラクスは立ち上がった。

偽ラクスのマネージャーに化けたバルトフェルドはシャトルを制圧した。

「ああ……」

「ふん」

『シャトルを止める！ 発進停止！』

「すまんなあ。ちよつと遅かったあ。さあて、では本当に行きますよ？」

「はい」

バルトフェルドはシャトルを発進させた。

「てええい！」

「ああ……」

「くつそー！ 上がれー！ くつ……」

下から対空ミサイルが襲って来る！

……と、ミサイルが一気に破壊された。

空の向こうからモビルスーツがディオキア基地に向かって来る！

「何だ？ ああ！」

「こいつ……うわあ！ 馬鹿なっ！」

「うわうわああ！」

シャトルを追跡していたバビが、一斉に撃墜される。

「ははは！ ラクスの邪魔をする奴はみんな死んじやえ！」
キラだった。

急所を避ける事もなく、効率的にザフトのモビルスーツを撃破していく。

ラクスの不在でタガが外れたように。

フリーダムは空中のモビルスーツを一掃すると、基地の施設の破壊に移る。

基地は大混乱に陥った。

十分なスピードを得たシャトルは、誰にも邪魔される事無く天空へと消えていった。

デュランダルの元に、強奪されたシャトルが発見されたとの情報が入った。

強奪犯は疾うにそのシャトルを去っており、縛られた乗員だけが発見された。

「そうか……。それでそのシャトルを奪った者達のその後の足取りは？」

『現在、グラスゴー隊が専任で捜索を行っておりますが、未だ……。ん……。しかしよりにもよってラクス・クラインを騙ってシャトルを奪うとは。大胆な事をするものだ』

『はっ！ 救出したシャトルのパイロット達も、基地の者等も本当にそっくりだったと。お声まで』

「兎も角早く見つけ出してくれたまえ。連合の仕業かどうかまだ判らんが、どこの誰だろうがそんな事をする理由は一つだろう。彼女の姿を使つてのプラント国内の混乱だ」

『はっ！』
「そんなふうにご利用されては、あの優しいラクスがどれほど悲しむ事か」

『はい』
「連中が行動を起こす前、変な騒ぎになる前に取り押さえない。頼むぞ」

『はっ！ 心得ました！』
通信は切れた。

デュランダルは考え込んだ。

やはりアークエンジェルか。それにしても何を考えている、ラクス・クライン。私の世界平和へのプランを阻むなら……。

デュランダルの目が光った。

「あ、アスランさん！ どこ行ってたんですか」
アスランが帰投すると、シンが飛びついてきた。

「ああ、ちよつとな」

「秘密任務ってやつですね！ わくわく」

「ふふ」

アスランは微笑んでシンの頭を撫でる。

俺は…… やっぱりここにいるのがふさわしいのかもな。

ミネルバの仲間を思い浮かべる。

自分を慕っていてくれるらしいルナ、マユ、無愛想なレイ。頼りになるハイネ。それからゲイルにシヨン。

うん。ここが俺の居場所だ。

ふと、カガリの事を思い出した。カガリの事だけが、胸の奥をちくちくと刺した。

戦場に現れたあれは本当にカガリか？ なんてあんな所に。本当だったら…… いや、なんと言ってもオーブ元首だ。とつくに安全な場所へ後送しているだろう。

ふいに、寂寥感がアスランの胸を襲う。

少し前までオーブと一緒に暮らしていた事が嘘みたいだ。

遠い、なんと遠い所に来てしまったのだろう。

もう、あの生活には戻れないだろう。

いや、自分で選んだのだ。

俺はザフトのアスラン・ザラだ！

そう心の中で唱えるとアスランは頭を振った。

カガリへの想いを振り捨てるかのように。

第38話「金色の艦隊<18>

『状況は聞いている』

画面の向うでジブリールはネオに言った。

『想定外の介入だ。仕方があるまい』

「そう言っただけで助かります」

ネオはほっと息をついた。

『だが、我が軍の目的は黒海及び中東地域の鎮圧だと言う事を忘れるなよ。ミネルバなど、たかが個艦だ。潜水艦多少が付いているとしても、ザフトの地上兵力は先の戦役で大部分を失っている。ミネルバがわれらの手をすり抜けて宇宙に行こうが地上にしようが一艦で何が出来る。こたわってはならんぞ。ザフトはコマースャルに使いたいようだがな』

「ええ、そのようで」

『アーケエンジェルがまた出てくる可能性もあるが……相手の戦力がわからん以上無理押しはするな。こいつらも所詮は個艦だ。アーケエンジェルが地中海に出てくるなら、我が軍はカスピ海の方から圧力をかける。準備は出来ている。こちらは順当に黒海地域を奪回するだけだ。ユーラシアが独立運動で戦力が低下しているのだ。増援はすぐ送れるかわからん。とりあえずジョージ・W・ブッシュにユークリッド隊を乗せてスエズに送った。手元の戦力、くれぐれも大事に使え』

「はっ」

『改アーケエンジェル級一番艦『ガルガリン』も、もうすぐ就役だ。楽しみにしておけ』

「楽しみにしておきます」

通信が終わるとネオは溜息をついた。

「ふふ。物分りのいい上司を持つと助かる」

「指示された物です」

ルナマリアはタリアに言った。そして、今日アスランを尾行した時のデータを差し出した。

「ありがとう。悪かったわね、スパイみたいな真似をさせて」

「いえ、艦長もフェイスというお立場ですので。その辺りの事は理解しているつもりです」

「ふふ」

「でもあの……」

「え？」

「できませんでしたら少し質問をお許しただけですでしょうか？」

「当然の思いよね。いいわよ、答えられる物には答えましょう」

「ありがとうございます。アスラン・ザラが先の戦争終盤ではザフトを脱走し、やはり地球軍を脱走したアークエンジェルと共に両軍と戦ったと言うのは既に知られている話です」

「ええそうですね。本人もその事を隠そうとはしないわ」

「しかし、その事も承知の上でデュランダル議長自らが復隊を認め、フェイスとされたと言う事も聞いています」

「ええ」

「ですが、今回の事は……あの……そんな彼に未だ何かの嫌疑がある、と言う事なのでしょうか？ 私達はフェイスである事、また議長にも特に信任されている方と言う事でその指示にも従っています。ですがそれがもし……」

「そう言う事ではないわ、ルナマリア」

「え……」

「貴方がそう思ってしまうのも無理はないけど、今回に関しては目的はおそらくアークエンジェルの事だけよ」

「あ……」

「彼が実に真面目で正義感溢れる良い人間だと言う事は私も疑って

ないわ。スパイであるとか裏切るとかそういう事はないでしょう。そんなふうには誰も思っていないでしょうし」

「ああ……」
ルナマリアはほっとしたように溜息をついた。

「でも今のあの、アークエンジェルの方はどうかしらね」

「あ……」

「確かに前の大戦の時にはラクス・クラインと共に暴走する両軍と戦って戦争を止めた艦だけど。でも今は？ 突然現れて先日のあれでしょ？」

「はい」

「何を考えて何をしようとしているのか全く解らない。どうしたって今知りたいのはそれでしょう」

「はい」

「アスランもそう言って艦を離れたのだけれど。でも彼はまだあの艦のクルーの事を信じているでしょうね。オーブの事も。ほんとは戦いたくはないんでしょう」

「ああ……」

「だからそうしたことだと思っておいてもらいたいんだけど。いい？」

「あはい。でしたら私もあの……」

「兎に角ご苦労様。この件はこれで終了よ。いいわね？」

「はい」

「モニターしていた内容もこの部屋を出たら忘れてしまっただい」

「あ……」

ルナマリアの記憶に、アスランと話していた男性が口にした『本当のラクス・クライン』と言う言葉が蘇ってきた。

「……」

「なに？ まだ何か？」

「……」

「ルナマリア？」

訝しげにタリアが聞く。

「あ！」

ルナマリアは我に返った。

「どうしたの？」

「あいえ！何でもありません……。ご指示通りに致します。すみませんでした」

「と言うように、まあ策としては至ってシンプルです」

ネオが、ユウナとトダカに作戦案を説明する。

ミネルバがディオキアを出航すると言う情報が入ってきたので早速ブリーフィングである。

「しかしそれで本当に上手くいきますか？」

トダカが疑念を言った。

「そもそもその情報の信頼度はどれくらいなのです？ 網を張るのはよいのですがミネルバがもしも……」

「トダカ」

ユウナが口を挟んだ。

「今回の作戦は、ミネルバを沈められたらいいなあ、程度の物だ。

本来の作戦目標は黒海の制圧。ミネルバが他のルートを取ればそれはそれだ。でしょ？ 大佐」

「あ……」

「ふ……」

ネオは首をすくめた。

「だが、本気で沈めたがっている事は沈めたいですからね。しっかりとお願いしますよ」

「微力を尽くしましょう」

「今度はあの奇妙な艦は現れないと思えますが……」

ここでカガリが口を挟んだ。

「いいや、奴らは絶対来る！」

「ふむ。万が一そのようなことになっても大丈夫ですね？ あれは敵だと、仰いましたな。カガリ様は」

「そうだ。だが討つにはオーブ軍は戦力不足とも言った。ただ一方的に損害を受けるだけだと。アーケエンジェルが出てきたら、おとなしく退け！」

「さて、どうしましょうかねえ」

ネオは確証を与えなかった。

「だったら自分で勝手にやれ！ 私は一度忠告したからな！ もう知らんぞ！」

周りの者は、はらはらしながら見ているのだが、ネオとカガリのやり取りはどこか兄妹がじゃれている雰囲気であった。

「あ、アスラン！」

艦長室を出たルナマリアは声を上げるとアスランに走り寄った。

「ああ。どうしたんだ？ 艦長に用事でもあったのか」

「うん、ちよつとね……」

「そうか」

沈黙が二人を包んだまま、二人は歩き出す。

「ねえ……」

ルナマリアがぼつりと言った。

「ん？ なんだ？」

「アスラン、離れないよね？ ずっと一緒だよな？」

「ん……さあ、どうなるかな。上が異動しろって言えば……」

「……アーケエンジェルに、行っちゃわないよね？」

ルナマリアは勇気を振り絞って言った。

「ふ……」

アスランは微笑んだ。

「俺は……ザフトのアスラン・ザラだ」

「ふふ。嬉しい」

ルナマリアはそっとアスランに肩を寄せた。

アークエンジェル

「オーブ軍がクレタに展開!?」

「と言う事はやはりまたミネルバを？」

マリューは心配気な口調で言った。

「ええ、確証はないですがターミナルもそう考えるのが妥当だろうと」

「ミネルバがジブラルタルへ向かうと読んでの布石か。連合も躍起になってますね」

「どうしたんです？」

キラが顔を出した。

「暗号電文です。ミネルバはマルマラ海を発進」

「え！」

「南下を開始したと」

「これで決まりね。オーブ軍はクレタでもう一度ミネルバとぶつかるわ！」

「ジエス！」

「よお、どうしてた」

ジエスは店に入ってきたミアリアに声をかけた。

「あは。私が前戦役の時アークエンジェルに乗ってたって話したわよね」

「ああ、すげえよなあ」

「会ってきたの。アークエンジェルの人達と。また、乗っちゃおうかなって思ってたんだけどね、まだ、ジャーナリストとしてやり残した事がある気がしたから……。私が一人アークエンジェルに乗ってもしょうがない気がしたし。ジェスさんとの約束もあつたしね」

「嬉しいねえ」

「ところで、こちらの方は？」

ミリアリアはジェスの隣に座っている男を見ながら言った。

「やあ。こんにちは、お嬢さん」

「こいつは、カイト・マディガン。俺の護衛つて所かな」

「そうなんだ。よろしくお願いします。……何見てたんですか？」

カイトの前には一冊のパンフレットが広げられていた。

「ああ、これが」

「『ダガー・PS・ダ・ガー』 プラスシチュエーション L
OGOS THE Best』？」

ミリアリアは表紙の文字を読み上げた。

「ああ、ダガーの最新ヴァージョンさ。伝手があるから買おうと思つてな。見てもいいぞ」

「へえ！ なになに？ 『前ヴァージョンから53点の改良を加えました。再び、ラミネート装甲を加えたダガーシリーズ。そんな新世代のビーム兵器への対処とストライカーが生み出す汎用性を考えた機体をベースに繰り広げられる安心で頼もしく、爽快な戦場ストリーが幕を開けます。ダガーLでは省かれていた、あんな機能やこんな機能も？ 新たにPS装甲も追加決定！ 耐ビーム性能は最初期版の2倍、システムディスクは2枚組と未曾有の大ボリュームでお届け！』……………」

……………ミリアリアは絶句した。

その時、一人の男が入ってきた。

「おい、ジェス。ミネルバをはじめとするザフト軍がマルマラ海を
出航したぞうだ。また戦闘になる可能性が高い」

「！」

「いよいよ出発かあ」

休憩室でジュースを飲み干しながらシンはつぶやいた。

「また、邪魔してくるんだろうね、地球軍」

マユも苦笑しそうに言う。

「じゃ、そろそろオンだから。お姉ちゃん気をつけてね」

「まっかせなさい！」

「はい、マユちゃん」

そこに、向うから声がかかった。

「あ、ハインさん」

「心配は猫をも殺すって言うぜ。そ・れ・に！　今回はボズゴロフ級が山ほど付いてる。それにグルジア艦隊もな」

ハインはマユの肩を叩いた。

「そうですね！　カーペンタリアから来た時とは大違い！」

「ああ、ミネルバだけでよく頑張ったな。今回負けたら大恥よ？」

「そうですね、うん」

「頑張ろう！」

「「おー！」」

「敵艦隊、艦影捕捉！」

タケミカズチのオペレーターが報告する。

「ん……」

ユウナは頷く。

「ミネルバと……情報に寄ればグルジアの海軍ですな。数が多い」
トダカが言う。

「そつだねえ。相手も本腰入れてきたな」

「距離60、11時の方向です！」

「総員合戦用意。繰り返す、総員合戦用意」

「前方に艦影」

バートがタリアに報告する。

「え？」

「なんだとっ！」

「空母1、護衛艦3！」

「それだけ？ 後の艦艇は？」

「確認できません」

「索敵敵に、急いで。オーブ艦だけなんてことはないはずよ」

「はい！」

「ブリッジ遮蔽、コンディションレッド発令」

「はい！ コンディションレッド発令！ コンディションレッド発

令！ パイロットは搭乗機にて待機せよ。繰り返し、パイロットは搭乗機にて待機せよ」

「目標、主砲射程まであと40！」

「敵艦隊からのモビルスーツの発進は？」

トダカが尋ねる。

「まだです！」

「よし！ 八式弾のシャワーをたっぷりとお見舞いしてやれ！」

「砲術！ 八式弾一斉射！ てえ！」

八式弾とは自己鍛造弾である。途中で子弾に別れ、シャワーのように、ミネルバを中心にザフト・グルジア合同艦隊に降り注ぐ。

「砲撃、来ます！」

「ええっ」

「モビルスーツ発進停止！ 回避しつつ迎撃！」

着弾による衝撃がミネルバを襲う。

「表面装甲、第二層まで貫通されました！」

「くっそー！ 自己鍛造弾のシャワーだ！」

「ダメージコントロール、面舵更に10！」

「9時の方向に更にオーブ艦！ 数3！」

「「えっ!?!」」

「意外と効いているじゃあないか」

ユウナはつぶやいた。

向こうに見えるザフトの新型艦 ミネルバは煙を上げている。

自己鍛造弾の貫通力は直径と同程度である。オーブの護衛艦の砲は250ミリ。子弹に分かれるので当然それより貫通力は落ちる。本格的な戦いの前に一発食らわす程度にしか考えていなかったのだが。「ミネルバは高速宇宙戦艦と聞くが、装甲は案外薄いようだな」

「そのようすな」

トダカが答える。

「道理で、修理の際にもオーブの作業員に装甲に触らせなかったわけだ。じゃ、攻撃隊発進中止。用意していた弾数が尽きるまで八式弾による砲撃を続ける。出来る限り対空火器を潰すんだ。そうすれば攻撃隊もやりやすくなる」

「はっ」

弾雨がミネルバに降り注ぐ。

「艦長、このままでは……!!」

「どうしようもないでしょう! モビルスーツを出すわけにも行かないわ!」

『艦長、発進させてください!』

通信が入る。

ルナマリアからだった。

「でも……」

『このままじゃ、やられるだけです! 大丈夫、セイバーはVPS装甲です!』

「……いいわ」

タリアは決心した。

「セイバーとインパルスを出して!」

「ルナマリア・ホーク、セイバー、出るわよ!」

「アスラン・ザラ、インパルス、発進する!」

第39話「金色の艦隊<19>

「敵艦からモビルスーツの発進を確認！」

「八式弾の中を……掻い潜って来ます！」

「ちっ。あの2機か！」

ミネルバから出撃してきたのがセイバーとインパルスである事を確認するとユウナは舌打ちした。

「八式弾砲撃中止、迎撃用意、攻撃隊発進せよ！ ミネルバの周囲の艦艇を叩け！」

「了解！」

「護衛艦は有線大型対艦ミサイルでの攻撃に移れ！」

「2時方向上空にオーブ軍ムラサメ9！」

「レイとマユを出して。トリスタン、イゾルデ照準左舷敵艦群！」

「はい！」

「まだあの空母がいるはずよ。索敵急げ！」

「はい！」

「またモビルスーツを出してきたか……ん？ あれは！」
ユウナはグウルに乗ったザクである事を確認する。

「攻撃隊に退避命令を出せ！ 敵艦に八式弾一斉射！」

再びミネルバに八式弾が襲い掛かる！

「きゃあ！」

『大丈夫！？』

ルナマリアから通信が入る。

「馬鹿！ こっちに気を取られるな！ ……無事か！？ マユ！」

「なんとかね……ちよつち被弾したけど、まだ動けるわ！」

マユはレイに答える。

八式弾にグウルを破壊された二人はミネルバの甲板に降り立つ。

「まだまだ！ 負けないわよ！」

「ちっ」

タリアは舌打ちした。

「甲板に落ちたならしょうがないわ。マユとレイのザク、ミネルバとエネルギー直結準備！ 防空に当たらせて！」

「はっ」

「これ以上自己鍛造弾を撃たせるな！ インパルスとセイバーには敵機をこちらに誘導するように言って！ 敵機を盾にするのよ！」

「はっ」

「トリスタン、イゾルデ、てえ！」

アーサーがもう何度か数え切れない台詞を叫ぶ。

一機のムラサメが射線に当たり、海上にその残骸を撒き散らす。

「グレートシトキン、パブロフ、トライデント、セントオーガスチン、レダウトおよびカトマイ浮上！ 各艦よりバビ隊発進しました」
すべてボズゴロフ級潜水艦だ。彼らの護衛はありがたかったが、逆にミネルバの行動を縛ってもいた。

ミネルバだけなら高空を飛んで逃げられたかもしれない。だが今は

そんな事を考えている場合ではなかった。

「9時方向よりオーブ艦群、更に接近！」

「アーサー、対艦ミサイル。レイとマユにも牽制させて。余裕が出来たらエネルギーをミネルバと直結させるのを忘れずに！」

「はい！」

「クレタを基点に挟むつもりね。はあまずいわ。転進しても、もう一方に追い込まれる……グリーン隊を出すように要請して！ 下から攻めて突破するのよ」

「グルジア所属の護衛艦群、上甲板に深刻なダメージとの事！」

「はあ、仕方ないわね、撤退させて」

「はい……『幸運を祈る』との事です」

「ソコワダツミ、ミサイル発射口被弾」

「クラミズハ、前へ出ます」

「目標、針路を二四に転進」

「意外とボズゴロフ級の数が多いな。これは手ごわいぞ」

「はい、ユウナ様」

「防空隊は例の敵モビルスーツ2機を牽制できているな」

ユウナは言った。

「はい。その後発進した別の敵飛行モビルスーツ群には別の隊を当たらせています……あ、地球軍艦艇より防空隊モビルスーツの発進確認しました」

「それでいい。今のまま牽制に専念させる。くれぐれも、色気を出させるなよ。八式弾を掻い潜って出撃してきた奴等だ。あれは特注品だぞ。機体も、パイロットも」

「はっ」

「八式弾はまだあるな」

「あるはずです」

「もつたいないな。一部の護衛艦を、迂回させる。八式弾を叩き込むんだ」

「しかし……この艦の防御が」

「この艦はムラサメで守る！ 後方にいるんだ。稀な攻撃位回避して見せる！」

「とうとう始まったなあ」

ジエスがミリアリアに言う。

「ええ。でも、モビルスーツから戦闘を見るなんて初めて」

『ほいほい前に出て行くんじゃないぞ』

カイトから通信が入る。

「はいはい」

「右舷後方、上空よりムラサメ12！」

「取り付かせるな！ 撃ち落とせ！」

「はい！」

ここでタリアは最後の予備兵力を出す決断をする。

「敵機がここまで接近してきたならもう自己鍛造弾はない！ グフ、バビ、発進させて！ ゲイルのザクもガナーウィザード装備、エネルギー供給ミネルバと繋いで甲板に上がらせて！」

「はい！」

「お前らいい気になるんじゃないよ！」

発進したグフが、ドラウプニルを連射する。降下体勢に入ったムラサメが被弾する。

「さて、どうするかな」
バビに乗ったシヨーンはつぶやいた。
「なんも指示がないとなあ。俺にはハイネほどの腕はない。単独行動は危険だな。ま、ハイネの援護でもするか」
シヨーンはハイネの後方に陣取った。

「奴等のモビルスーツはほっとけ。防空隊の連中に任せて我等はミネルバを！」

攻撃隊の馬場は叫んだ。

「馬場一尉！」

「あれさえ落とせば全て終わる！」

「は！」

「トダカー佐、別働隊より水中に感ありとの報告！ 反応約50！
モビルスーツの模様！」

「くっ！ 数が多すぎる！ 護衛艦を分離させるべきではなかったか？」

トダカは焦る。

「……水中電話は使えるな？ トダカ？」

ユウナは落ち着いた様子で言った。

「はっ。しかしあんな物で何を？」

「いいから僕のマイクと繋いでくれ」

「はあ」

マイクが繋がった事を確認するとユウナは言葉を発する。

「こちらはユウナ・ロマ・セイラン。ブラウ・サロン応答せよ」

古い時代の水中電話特有のくぐもった声でなく、デジタル復調されたクリアな声で応答が返ってくる。

『こちらブラウ・サロン。符丁を確認する』

「了解した」

『K 113203』

「Y-432210」

それからまた沈黙。そして通信が入る。

『了解。そちらをユウナ・ロマ・セイランと確認』

「よし、ザフトの水中用モビルスーツらしき物約50、展開中だ。叩けるな？」

『了解』

通話は終わった。

「……今のは？」

トダカが疑問符が顔に付いたような口調で尋ねる。

ユウナは肩をすくめていたずらっぽく答えた。

「なに、オーブの秘密兵器さ」

「セイバー、インパルスは？」

タリアが尋ねる。

「共に敵機10機余りと戦闘中！」

「艦長！」

降下してくるムラサメ隊を見てアーサーが叫ぶ。

「取り舵いっぱい！ 機関最大！」

ミネルバと繋がり、エネルギー切れの心配の無いガナーウィザード装備ザクのオルトロス高エネルギー長射程ビーム砲からビームが連射される！

2機のムラサメが被弾する！

「はあああつー!!」

ムラサメ隊からミサイルが放たれる!

そのミサイルが 一斉に爆発した。

「なに？」

「オーブ軍! ただちに戦闘を停止して軍を退け!」
天空から、フリーダムが舞い降りた。

アークエンジェルが、海中から上昇してくる。オーブ軍艦艇の前に
主砲を撃ち、進路を妨げる。

「オーブはこんな戦いをしてはいけないんだ! これでは何も守れ
はしない! 地球軍の言いなりになるな! オーブの理念を思い出
すんだ!」

一瞬、オーブ軍の手が止まる。

「ちゃんす!」

ルナマリアは一気に反撃に転じた。

「いい気になるんじゃないわよ!」

たちまち数機のムラサメを叩き落す!

ムラサメの包囲網を突破する！

「艦長！ 私が道を開きます！」

「了解、気をつけてね。アークエンジェル、フリーダムは攻撃されない限り攻撃するな。今はこれ以上敵を増やしたくない！」

「いつくわよー！」

セイバーは逆落としにオーブ護衛艦に突き進む。大出力プラズマ砲をぶち込む！

海面すれすれで引き起こし、隣の護衛艦へとまたプラズマ砲を叩き込む！

「ああ！」

カガリはオーブ艦がやられる光景に呻き声を上げた。ドラッグのフラッシュバックのように視界が歪み、めまいがして前に倒れかかる。その身体を脇から支える手がある。

「大丈夫か！？」

「あ、ああ。ユウナ。すまん」

カガリはぎりつと歯噛みをするとスクリーンを睨みつける。

そこでは、ザフトの赤いモビルスーツが次々にオーブ別働隊を攻撃していた。

「だるい……」

ふいに倦怠感が襲って来る。リタリンで押さえていた覚醒剤の禁断症状が現れてきたようだ。

「負けるか！」

カガリはフリスクと頓服のリタリンとL-チロシンのカプセルを口

の中に放り込み、噛み砕く。苦さと痛いほどの爽やかさが口の中に広がる。

「ルナ！ 援護する！ 思いっきりやれ！ 艦橋を潰せ！」

うるさく付きまとっていたムラサメを撃破して包囲網を抜けたアスランが叫ぶ。

「任せてください！」

アスランの言葉にルナマリアは勇気100倍！ アスランの援護に万全の信頼を置き、後ろの心配をする事無しに、目の前の護衛艦の艦橋に向かって大出力プラズマ砲をぶち込み！ 護衛艦は内部から破裂したように艦橋が吹き飛んだ。

「あ……」

キラはセイバーに向かってフルバーストする。

しかし大気圏内での空中戦・それに伴う砲撃戦に特化しているセイバーはそれを避け、セイバーはクレタ島西岸から回りこんできた護衛艦にプラズマ砲を叩き込み続ける。

「道が開いた！ 全速全進！ 僚艦にも伝えて！」

タリアは叫ぶ。

「あいつ……！」

キラは眉をひそめ、スラスターを全開にしてセイバーを追う。

「やめるキラ！」

そこに、インパルスが飛び込んできた。

「アスラン！」

「こんな事はやめると、オーブへ戻れと言ったはずだ！」

「……」

キラは無言で答えた。

アークエンジェルがオーブへ戻れない事情など、アスランは知らない。

「あれ……あのモビルスーツ、キラとアスランだ……」

戦いを見ていたミリアリアがつぶやく。

「なんだって！？ 前戦役時の英雄か？」

「ええ……」

「なんでまた戦う事に……」

「カガリ様……あれは……」

トダカが観戦しているカガリに尋ねる。

「ほっとけ」

少し怒りの混じった声でカガリは応じる。キラの言葉のせいで、ザフトのモビルスーツの逆檄をくらいムラサメが落とされたのだ。オーブの軍艦がやられたのだ。オーブ国民が死んだのだ。それもこれも……

「くそう、今は力が無い。だが……ラクスの野郎、いつか必ず……ぶっ飛ばす！」

「うおおおおー！！」

キラがアスランに拘束されている隙に。

ムラサメ隊がミネルバに向かってミサイルを発射する。彼らが機首を返したのと同時に、ようやく迂回に成功した護衛艦群が八式弾を連射する！

「きゃあ！」

甲板上のザクに着弾する。

「マユ！ ゲイル！」

ミネルバも八式弾の着弾に揺れた。

その時、アークエンジェルの主砲がミネルバとムラサメ隊の間をなぎ払う。護衛艦群の進路を邪魔するように海上目掛けてリニアカノンが放たれる！

「本格的に邪魔に入るねえ。潮時かな」

ユウナはむっつりと言った。

「残念ですが。潮時でしょうな」

トダカが応じる。

「攻撃隊下がらせて。別働隊、敵艦隊と距離を取らせる」

「はっ」

「下がれキラ！ お前の力はただ戦場を混乱させるだけだ！」

アスランはキラと対峙した。

「アスラン！ カガリのした事を無駄だつて言うの？」

「仕掛けてきているのは地球軍だ！ ならなにか！？ お前達はミネルバに沈めと言うのか！！」

「どうして君は！」

「『どうして君は』の後はなんなんだ！ 意味のある事が言えるなら言ってみろ！ まともな反論が出来るならしてみろよ！」

「なんで君は！」

「だからその後の台詞はなんなんだ！ どうせ言えやしないだろう！ 意味のある事なんか！ だから戻れと言った！ 討ちたくないと言いながらなんだお前は！！！」

「分かるけど……君の言うこともわかるけど……でもカガリは、今きつと泣いているんだ！」

「はあ！？」

「こんな事になるのが嫌で、今きつと泣いているんだぞ！ あのオーブ艦隊の中で！ 何故君はそれが分からない！ なのにこの戦闘もこの犠牲も仕方がない事だって、全てオーブとカガリのせいだって、そう言っ君は討つのか！ 今カガリが守ろうとしているものを！」

「カガリの名前を出すな！ 結局お前はお前の祖国を、オーブを優先的に守りたいだけじゃないか！ 男がピーシャカ喚くな！ お前がザフトを討つと言うなら……！」

アスランの目が光った。

「なら僕は君を討つ！」

「俺はお前を討つ！」

二つの機体がぶつかった。

キラは思った。

このアスランの攻撃は！

手加減できない！

まだ死ねない！

キラは無意識にインパルスの胴体を狙った！

「！」

ふいに、アスランを取り巻く世界が遅くなる。

フリーダムはまだほんのわずかな動き。だが……

「軌跡が見える！」

アスランは一瞬でキラの意図を把握した。

咄嗟にインパルスの下半身を切り離す！ 重量が軽くなったインパルスの上半身はフリーダムのビームサーベルを下にかわし、フリーダムの両腕を切り裂いた！

「あ……？」

キラは呆然とした。信じられなかった。フリーダムが、自分が、アスランに負ける事など。

「アスラン！」

その時、セイバーが下から上昇してプラズマ砲を打ち上げてきた。虚を突かれフリーダムの脚が撃ち抜かれ飛散する！

「くっ、脚なんか飾りだ！」

キラは気を取り直した。

スラスターを全開にして急上昇すると、フルバーストで牽制しながらアークエンジェルの方へ帰還していった。

「アスラン！ 大丈夫ですか！？」

「ああ」

アスランは再びインパルスの上半身と下半身を合体させる。

「さあ、ミネルバは敵陣を突破したようだ。俺達も帰ろう、ルナ」

「はい！」

『これはどう言う事ですか』

ユウナはネオに尋ねてきた。

戦いが終わった周囲では地球軍艦隊とオーブ艦隊の救助作業が行わ

れている。

『地球軍がもつと気を入れて攻撃してくれていれば、敵艦を撃沈できたかも知れないのに。あなた方は防衛してただけのようですか？ そう見えたのは私の気のせいですかね？』

少し怒りの混じった声でユウナは尋ねた。

ネオは唇を吊り上げた。

「正直に言いましょ。前回の行動から考えて、オーブ軍に全幅の信頼を置けなかった。それだけです。それに、こちらは元々ミネルバが沈もうが逃れようがかまわない戦いだっただけでね、あなた方と違って」

『！』

ネオの言葉に込められた意味をユウナは察した。この戦いは、オーブにとって身の証を立てなければならぬ戦いだったと言う事だった。地球軍の信頼を得るために。

「いやあ、しかし、あなた方はこうしてザフトと戦う意思を明確に示してくださいました。信頼していますよ。今は、ね」

『くっ』

「ああ、アスハ代表のご助言の通り、アークエンジェルを攻撃せず、に無駄な損害を出さずに済みました。お礼申し上げます。オーブの諸君の活躍、黒海の奪回の折にも頼りにしてますよ。では」

ネオは通信を切った。

「ふふん。まあ我が軍には損害は少なかったし、まあまあかな？」

「お人が悪い事で」

J・P・ジョーンズの艦長が笑った。

「しょうがないだろう？ 損害を抑えよ、とのジブリール殿のご命令だったんだから。まあ、オーブ艦隊はスエズに戻ったらしっかり修理してやるさ」

「キラ！ キラ君！ どうしたの!？」

コクピットから降りて「よつとしないキラを気遣ってマリユーが声をかける。

「アスランが……本気で僕を殺そうとした……許せない……」

キラはコクピットの中でガタガタ震えていた。その顔は恐怖と怒りの表情だった。

第40話「金色の艦隊<20>

「では行こうじゃねえか。お行儀よくな、おめえら」
地球軍のコンドラチェンコ大佐が言った。

周囲から笑い声が起こる。

ガルナハンで何が起こったかは既に地球軍に知らされていた。誰もガルナハンで虐殺された戦友の仇を取りたがっている。

カスピ海のトルクメニスタン沿岸から次々とジェットストライカーを付けたダガーLを主力としたモビルスーツ隊が発進していく。

その後を武装した兵員を乗せたヘリコプターが追う。

……

「第一小隊、準備良し」

「第二小隊、準備良し！」

「第三小隊……」

程なく。

暗闇の中、モビルスーツ隊はガルナハンを包囲した。

「降伏勧告をしる。一応な」

「はっ」

スピーカーからガルナハンに向かって降伏勧告がなされる。

『ガルナハン住民に告ぐ！ 先に行われた地球軍兵士虐殺の犯人、テロリストどもを引き立てて連れて来い！ そうすれば残りの住民には寛大なる措置を約束する。一時間待つ』

その時、ガルナハンから一斉に銃撃の音が起こった。バズーカの音も聞こえてくる。

「ガルナハンの馬鹿野郎どもが！ 攻撃開始！」

「了解！」

何機かのダガーLは飛び立ち、空中からロケット弾を浴びせる。

地上からはモビルスーツの援護で歩兵が地歩を固めていく。

わらわらと町の住人らしき者が銃を手に向かってくるが、スロータ

「ダガーの足の甲部に内蔵された50口径12.5mmの対歩兵用機関砲が火を吹き、彼らを掃討する。」

「大佐！ 子供が銃を持って撃っております！」

「潰せ」

「はっ、あの……」

「子供だろうが銃を手に取って向かってきたら敵だよ、少尉。子供でも立派なテロリストだ。彼らの勇敢な心に報いるには、弾丸を持って報いるしか俺は知らん」

「はっ」

「……ゲリラ戦なぞやる方が悪いんだ。民間人に多大な被害が出るのは当たり前だ。もし無実の者がいたならゲリラを恨め！」

そう言うとコンドラチェンコ大佐は夜明けの光の中を、そろそろ終盤に入った掃討作戦の指揮を執るために飛び立った。

……

この日、ガルナハンの町は崩壊した。生存者は当時の住人の1/5だったと言う。

その中にコニール・アルメダと言う少女の名前があったかは定かではない。

生き残った住人達はロシアの奥地へ強制移住を余儀なくされた。

ガルナハンの町には、寒冷なロシアの奥地から、エイプリルフール・クライシスに耐え抜いた者達が移住して来、明るい顔でガルナハンの町の再建に取り組み始めた。

「メインエンジンに深刻な損傷はありません。ですが火器と船体にはかなりのダメージを負いました」

「アーサーがタリアに報告する。」

「ふう、所詮は試験艦……か。もうちょっと装甲に気を配ってもらいたかったわね。いくら機動力に優れると言っても砲のスピードに

「対抗できやしないのだから」

「ここはギリシヤのイオニア海に接する西側の岩陰である。ここにミネルバとボゴスロフ級の7隻は息を潜めていた。」

「モビルスーツもウォーリア2機が大破、ファントムが中破と厳しい状況です。ボゴスロフ級の方も半数のモビルスーツがやられたとか。バビに……水中でも、データに無い巨大なモビルアーマーらしき物と真ん丸いモビルスーツ群に撃退された。敵の新型でしょうか？」

「はあ、新型、か。景気がいいことね、地球軍も。ジブラルタルまでもうあと僅かだというのに。またここで修理と言うのは辛いけど、仕方がないわね」

「はあ……」

「毎度毎度後味の悪い戦闘だね。敗退した訳でもないのに」

「……」

「対空、対潜警戒は厳に。あとお願いね」

「はっ」

「じゃあ結局またルナがやったのか？ 敵艦」
「ヴィーノがシンに尋ねる。」

「敵艦隊だって。ミネルバの前に立ちふさがる敵艦隊にさー、急降下してドドドーとプラズマ砲を」

「へえ」

「アスランさんもすごかったんだよ！ 迫り来るフリーダムのパールムサーベル。インパルスは咄嗟に」

「シン！」

そこに、マユが声をかけて来た。

「う、あ、お姉ちゃん！ 大丈夫？」

「『大丈夫？』じゃないわよあんたはもう……。人が被弾したって言うのに見舞いにも来ないで」

「うう…だって僕ずっとオンだったんだもん」

「……まあ、いいわよ。それよりアスランさんは？ どうしてるか知らない？」

「ああ、そう言えばあつこに居たかなあ……」

「く……あ？」

「あ、アスランさん！」

マユはモバイルスーツデッキにいるアスランに声をかけた。

「こんな所にいたんですね」

「あ、ああ」

「……私のザク、やられちゃって」

下ではマユのザクを前に整備員が頭を抱えていた。

「ああ。怪我は大丈夫か？」

「おかげ様で。機体が壊れてくれたんで、私は軽症で済みました」
「そうか……」

「見ましたよ、録画で！ すごいじゃないですか！ 咄嗟にインパ
ルスを分離させるなんて、さすがアスランさんです！」

「いやあ……。あ、ルナはどうしてる？ ルナもたいした活躍だっ
たじゃないか」

「ルナは……部屋で落ち込んでます」

「落ち込む？」

「ほら、あの子、オーブ出身でしょう？ だから」

「ああ……」

アスランは苦笑した。

そう言えば軽く落ち込んでいるこの気分はなんだろうと思っていた
所だ。

似た物同士、か……。

「さてさて、スエズまで下がれて良かったと言っべきか。しっかりと修理や整備が出来るな」

「さすがに被害が大きかったのですからな」

ユウナの言葉にトダカが答えた。

「少し、積極的になりすぎたか。ムラサメだけで遠くから攻撃させとけばよかったか？」

「さあ、どうでしょう。モバイルスーツに載せられるだけのミサイル、空対地ミサイル『ドラツヘASM』では、攻撃力もそれなりしかありません。八式弾の効果もありましたし。護衛艦が近づいての大型ミサイル有線誘導もそれなりに効果があったものと思われます」

「ふむ」

「……地球軍の奴ら……」

カガリは悔しそうに呟く。

「オーブは小国だからねえ」

ユウナはのんびりとした口調で答える。

「そうしてこのまま良い様に扱われるのか？ それでいいのか!？」

「オーブは中途半端なんだよ」

「中途半端？」

「スカンジナビアくらい国力が大きければ、侮られるほど弱からず、やれるだろうけどもさ。オーブは圧力掛けて使いやすい国力なんだ」

「スカンジナビアか。中立志向だよな」

「ああ。オーブよりはるかに強力な軍隊を持っているにも関わらず、オーブに対するような圧力は地球連合は掛けないね。強力な軍隊を持っていてからこそ、かな。オーブは再構築戦争で独立国として残ったのが不思議なくらいだ。ご先祖様達は思っただろうねえ、国力上げなきゃってさ」

「もっと、強くならなきゃいけないのか」

「逆の道もあつたんだよ。マスドライバーとか価値あるものを作らず、オーブの周辺の島国がやってるように原始生活のままです。そ

うすりゃわざわざ干渉もしてこない」

「だが、それは……」

「そうだね。今更できない。それに、大洋州との位置が悪すぎる。どっちにしても戦争に巻き込まれてたなあ。ははは。それでかな。小国にも関わらず宇宙コロニーを建設したのは」

「オーブが道を求めるなら、宇宙？」

「かも知れない。……資金はある。事態が落ち着いたらもう一度再建しよう」

「資金？ オーブの復興に大西洋の資金が関わってるんだらう？」

更に出させる気か？ あまりにひも付きになってしまわないか？」

「いや、まったくフリーの資金だ」

「そんな金がどこに!？」

「聞くな。僕にだって訳がわからない資金なんだから」

その時、兵士が入ってきた。

「カガリ様、飛行機の準備が出来たとの事です」

「そうか。じゃあ、ユウナ。無事だな」

「ああ、カガリも元気で。タツキ・マシマは信頼できる人だと思うよ。彼とよく相談して、やってくれ。国に帰ったら、身体を大事に、ゆっくり休んでくれ」

「ああ」

カガリは応接室を出て行く。ユウナも後を追う。

外に出ると、大型の飛行機が待っていた。これで、ビクトリア基地を經由して一気にオーブまで行くのだ。

カガリはそれに乗り込む時、後ろを振り向いた。

父　ウズミ、ウナト。アスラン。キラを始めとするアークエンジン
エルの乗員。

ある者はこの世を去り、ある者は行方知れず。またある者とはいつの間にか心が遠え……。

暑い砂漠であるのに、カガリは衣を剥ぎ取られたかのような寒さと寂しさを感じた。

また、会えるよな？

カガリは自分に言い聞かすと、飛行機の中へ入っていった。

「いやあ、とうとう来てくれましたか！」

ネオは手を広げてスエズ基地に着いた空母ジョージ・W・ブッシュの艦長達を出迎えた。

「ご活躍は常々。お待たせしました。新編なったユークリッド隊を持ってきましたぞ」

「期待しています。さあ、基地には地元のうまい料理が用意してありますよ！」

ネオは一行の先頭に立つと歩き出した。

その頃アークエンジェルは海底に潜んでいた。

「あーあ、どうしますかね」

アーノルド・ノイマンがぼやいた。

「ええ、ほんとに。フリーダム修理はなんとかできたけど……」
マリユールが答える。

「アークエンジェルだけじゃ、争いを止めるといっても限界があります。パイロットの替えがないのがどうしようもないですね」

「……待ちましょう。キラ君はきつと立ち直ってくれるわ」

「ええ……お茶でもどうですか？」

「頂くわ」

ノイマンは皆にお茶を配って廻った。

画面では、ニュース番組に混じって、時々CMのようにラクス演説映像が流されている。ノイマンが流しているのだ。

「またラクス様の映像か？」

茶化すようにダリダが言った。

「好きなんだよ」

照れたようにノイマンは言った。

「ラクスの歌じゃなく演説動画が好きってのも変わってるな、お前」

「ははは……」

ノイマンは苦笑した。その目は笑わず、乗員を観察していた。

「お邪魔してもいい？」

マリューはキラの部屋に入った。

「あ、すみません。こんなところでサボってて」

「いいわよ。貴方一人でほんとによく頑張ってるもの、また」

「え？」

「大丈夫？」

「……なんか、何でこんな事になっちゃったのかなって思ってた。何でまたアスランと戦うような事に。アスランの奴本気で僕を殺そうとした……。僕達が間違ってるんですか？ほんとにアスランの言うとおり、議長はいい人でラクスが狙われた事も何かの間違いで……僕達のやってる事の方がなんか馬鹿げた、間違った事だしたら……」

「キラ君……。でも、大切な誰かを守るうとする事は決して馬鹿げた事でも間違った事でもないと思うわ」

「え？」

「世界の事は確かに分からないけど。でもね、大切な人がいるから世界も愛せるんじゃないかって、私は思うの」

「マリューさん……」

「きつとみんなそうなのよ。だから頑張るの。戦うんでしょ。ただちよつとやり方が、と言うか思う事が違っちゃう事もあるわ。その誰かがいてこそその世界なのにな」

「……」

「アスラン君もきつと守りたいと思った気持ちは一緒のはずよ。だ

から余計難しいんだと思うけど、いつかきつと、また手を取り合える時が来るわ。あなた達は。だから諦めないで。貴方は貴方で頑張っ
て」

「はい」

「ね。うふふ」

「……マリューさん」

「なあに？」

「僕、宇宙に行ってきます！」

急に、躁転したようにキラは明るく口調を変えた。目がキラキラと輝いている。

「ええ！？」

「僕がアスランに負けるなんて、変だと思いませんか？」

「え？ え……」

いきなり変わった、憎しみの籠もるその表情にマリューは戸惑う。瞳が、ぎらぎらした物に変わった。マリューは思わず後ずさる。

そしてそれは気のせいかと思うほど一瞬に消え、寂しげな少年の表情に変わる。

「やっぱりラクスがそばにいないと僕は……だめなんです」

「そんな事ないわよ、あなたはしっかり……もうすぐラクスさんも戻るわ。そうすればきっと。ね？ だからそれまで頑張っ
て」

「もう、決めました」

キラはさっぱりした顔で微笑んだ。

「まず決める。そしてやり通す。いつもの事です。アーケエンジェルは、見つからないように海底に隠れていてください。必ずラクスを連れて戻ってきますよ」

「ふう。そう……」

マリューは気遣わしげに溜息をついた。

宇宙

「オーブの件ですが、どういたしましたでしょうか？ だいぶ、オーブ軍人への浸透は進んでおります。……例のサイオキシン麻薬も使っています」

『ターミナル』のメンバーがラクスに報告をする。

ターミナル 先の戦役時より以前に、ラクス・クラインが父、シゲルにも秘密に作り上げた組織である。

「それでいいわ。麻薬付けの軍人など使い物にならない物だけど、オーブ軍に戦う事を期待している訳ではないから。……カガリ・ユラ・アスハをクーデターの際に再び捕まえて駒にすることもできません。駒にできなければ表に出ずに代表首長として発言していてもらう事も。オーブの後ろ盾を得る事には大きな意味があります」

「では、計画通り、進めます」

「はい」

「ところで、プラントのラクス様の贖物の事ですが。一応の目処が付きました」

報告する、ラクスを支援する組織『ターミナル』の人員の『贖物』と言う言葉に嫌悪感が混じる。

彼はラクスの信奉者なのだ。

「仕込みは出来たのですね？」

ラクスは、ターミナルの組織の者に尋ねた。

「はっ。ターゲットにはさすがにガードが固く、近づく事が出来ませんでしたが、その身近な者達には」

そう、前戦役時に、いや、それより以前からラクスが作り上げた支援組織、『ターミナル』はプラントに深く食い込んでいた。

「後、報道関係の者にも手広く。大抵の出来事には対処できるでしょう。後はあなたが引き金を引けば、発動します」

「そう、ありがとう。わたくしはあのような者が存在する事が許せないのです」

壁に向かって、ラクスは冷たく嗤った。キラなどには決して見せない顔をして

「止めてくれ！　ここは俺達の土地だ！」

「ふん、動物が口を開くか」

ウラン鉱山の技術員らしい男が悪態をつく。

「やれ！」

銃声が響く。抗議したアボリジニの頭が弾ける。後ろのアボリジニの腹に血の花が咲く。次々にアボリジニ達が倒れていく。

「ははは」

オーストラリア人はかつてと同じように、まるで動物を狩る様にアボリジニを「狩った」。

しばらくの後、動いているアボリジニは一人もいなくなった。

銃を持った男が一人のアボリジニの死体に近づく。

そのアボリジニは手に絵筆を持っていた。

「ふん。少し留守した内にゴミが入り込みやがって。何が世界遺産だ」

男はつまらなそうにその絵筆を踏み潰す。

ここはオーストラリア　カカドウ。古くからアボリジニが太古から文化を刻み付けて来た場所である。

「さあ！　さつさと採掘を再開するんだ！　……へへへ、これでいかがです？」

「うん、ありがとう。綺麗になったね」

後ろに控えていた大洋州の要人達は鷹揚に頷く。

もし、カガリ・ユラ・アス八がその男を見れば気づいたかもしれない。その男達の表情が、目の輝きが、ラクスを称えるアークエンジン乗員の表情にそっくりだと。

アボリジニが世界最古の文化を刻みつけてきたカカドウ。

大湿原に水鳥が、ワニが命を育みつけてきたカカドウ。

世界遺産に指定された人類の宝であるカカドウ。

そこでは今、ブルドーザが大地を切り裂き始める。

地下のウランを掘り出すために

スカンジナビア王国

二人の男女が話していた。

「まったく！ ユーラシアの独立派！ この段階で暴発するなんてとんだ計算違いだわ！」

「さようで。まさか今、行動に移れるような装備、資金を調達できるなどとは思いません。供給元がどこだか調べさせますか？」

「いいわ、今更。十分な装備・資金があれば我が国が止めたって聞かない連中よ。我が国の働きかけで活動を休止したと言う事は追加の供給が無かったと言う事。裏にどこがいるか知らないけれど、彼らにとって独立派の役目は済んだ言う事だわ。さほど損害を受けないうちに潜伏させる事ができたのでしょうか？」

「はっ」

「それより、ザフトが黒海から撤退したようね」

「はい。ジブラルタル基地からも撤退する動きがあるようです」

「それは困るわねえ。ザフトにはまだまだ西ヨーロッパで頑張ってもらわないと」

女性がクスクス笑った。

「ザフトに、手助けをしてあげましょう。西ヨーロッパへの働きかけ、鈍り無い様にね。東アジアもね。混乱は大きい方がいいのよ」

「はっ」

男は出て行った。

……諸国民は混乱の収まる事を希求し……か。

女性はある言葉の一節を思い出した。確か前戦役時にスカンジナビア王国が出した声明の一説だった。

だが。混乱を望む者はいるのだ。今ここに。

スカンジナビア王妃アレクサンドラは声を立てずに嗤った。

「お願い！ レイジングボール、持ちこたえて！」

「行け！ バールディッシュ！」

「なーにやってんだ、おめえら」

「あ、隊長」

「いやあ、ただ黙々と作業するのも面白くないもんで」

ここはガルナハン。

地球軍兵士がモビルスーツに乗ってボールの様な物で作業をしている。

「これはなんですか？ 隊長？」

兵士が尋ねた。

そこにはモビルスーツの装備らしい新しいコンテナが運ばれてきていた。

「ああ……。これは、高周波円匙だそうだ」

「要するに、シャベル？」

「無駄に技術使ってませんか？」

「何を言うんだ」

心外そうに隊長は言った。

「塹壕戦でもっとも敵の命を奪った頼りになる相棒は拳銃でも銃剣でもなく円匙だぞ？」

隊長は高周波円匙を手に取った。

「す、すごいー！」

「まるでバターに突き刺しているようだ！」

ガルナハンの復興は順調に進みそうだ。

「ラクス！」

宇宙に来たキラは、エターナルと合流すると、ラクスに飛びつくようにして駆けてきた。

「来てしまったのですね」

ラクスは溜息をつくときラに言った。

元より、いざとなれば上昇するシャトルに追いつくほどの推力を持つフリーダムである。簡単なブースターを取り付けるだけで宇宙に来てしまった。

「うん……。これが正しいのかわからない。でも今行かなきゃ後悔する。そう思ったんだ」

「まあ、しょうがないですわね」

ラクスは少し嬉しそうに苦笑した。

「では、キラ、付き合ってくださいな」

「どこかへ行くの？」

「……メンデルへ」

「メンデル!？」

「ええ。ギルバート・デュランダルが研究員として勤務していたといます。そこに行けば、彼が何を望み何を考えているのかわかるかもしれません」

「不気味だな。まるで……」

ユウナはつぶやいた。

「ええ。もぬけの殻です」

トダカも訝しげに答える。

オーブ軍は指示された港湾に侵攻する計画だった。ザフトから奪回するために。

だが……そこにはすでにザフト軍は存在しなかった。

オーブの攻撃は、畏を警戒して長射程のミサイルとムラサメだけを

送り、すでに損傷も激しいまま係留されている現地の国の艦艇を沈めた。

攻撃が港湾施設を叩き終わる。程なく、降伏する旨と交渉を求める通信が現地政府より送られてきた。

「じゃあ、俺も出てくるわ。後を頼むぞ」

艦隊がディオキアが近づくと、ネオは副司令官に言った。

「はあ、しかし大佐の身で自ら出撃というのは……」

「いいじゃないの。第二次大戦で地上勤務拒否して出撃しまくったドイツのルーデルは大佐だぜ？」

ハンス・ウルリッヒ・ルーデル アンサイクロペディアに嘘を書かせなかった男 あんな人外を常人が真似していいものか？

副司令官は尚も諫言しようとしたが、ネオの猫を思わせる仮面が目に入る。

この人も常人じゃないよなあ。こんな仮面被ってるなんて。副指令はため息を一つついた。

第41話「不沈戦艦強奪作戦発動<1>

「じゃあ、坂井。頼むぞ。列機を失った事の無いお前の強運に期待する」

小園航空隊司令は、ネオの列機を務める事になった坂井三郎中尉に言った。

「任せといてください。司令官は俺が絶対守ります」
坂井は胸を叩いた。

ネオの率いるユークリッド隊は、敵を撃滅すべく勇躍して出撃した。
「……何も見えませんね」

坂井が、それでも注意深く目を皿のようにして辺りを見回しながら言う。

「西沢、お前はどうか？」

ネオは少し離れて飛行している西沢にも尋ねる。

西沢広義中尉 彼も坂井と同様に敵の発見が非常に早い事で知られている。

「こちらも、敵機発見できず」

「そうか。では、第一から第四小隊、引き続き上空の警戒に当たれ。残りは地上部隊の支援に当たる」

『ポートエリア3、制圧完了』

ディオキア上空を旋回し、指揮を取るネオの元に報告が上がってくる。

「よし。いいぞ。ザフトの置き土産があるかもしれん。注意しながら制圧を続ける」

地雷を警戒し、まずモビルスーツが先行、続いて歩兵が機敏な動き

で要所を確保していく。

『港湾エリア14、制圧完了』

『市政庁に突入開始、抵抗無し……』

「ふーん」

ネオは呻った。

「もぬけの殻か」

『司令官！ 市政庁にてディオキア市長と接触。抵抗はしないとの事、司令官との会談を求めています』

「わかった。俺も事情が知りたい。市政庁前の広場に着陸する。警戒に当たれ」

『了解！』

「一体どうしちゃったんだろうね、まったく。せつかく新型のダガーで乗り込んできたつてのにさ」

ミューディーがぼやいた。

彼らはモビルスーツに乗り、市政庁の警護に当たっている。

「戦いがないなら、その方が楽でいい」

スウェンが答える。

「何、ザフトが逃げたって、どこまでも追ってやる。追って行けばいつかは戦うさ」

シヤムスが言う。

「ま、そうだけどね」

「気を抜くな。司令官に何かあってみろ」

スウェンは油断無く辺りを見渡した。

「ようこそ、ディオキアへ！ いやあ、ザフトがこの町に居た期間、生きた心地もしませんでしたよ。地球軍が戻って来てくれて、まことに安心しました」

ディオキア市長は手を広げた。

ネオは苦笑した。この市長は、ザフトがディオキアに進出した時この調子で出迎えたのに違いない。

「ザフトとは結構うまくいっていたと聞いていますが？ ほら、先日のレストラン・クラインのコンサートの時など、ディオキア市民も盛り上がっていたようすな」

ネオはさりげなくディオキアの情報は知っているのだと漏らす。

「おお！ それはもう、市民の安全を守るために必死でしたからなしかし、本心からではありません。いや、まったく。ザフトの連中は来た時はうまい事を言っておきながら、逃げる時は後に残される市民の事なんぞ考えませんでね、まったく」

「ザフトは、逃げたと？」

「ええ、ええ。先日ザフトの艦艇が出航したのを皮切りに、シャトル、輸送機、詰めるだけ積み込んで町から去ってしまいました」

「ふ……む。いや、そうですね。まあ、再び彼らがこの町に来る事はないでしょう。今度こそ、我ら地球軍がザフトを本国まで追い詰めますからね」

「そう願いたい物です。ところで……ザフトがこの町に居た間、地球軍より礼儀正しいと言う者もおりまして。いや、まことに怪しからん事ですが、今後の地球軍との友好関係のためにも軍の規律の維持にはぜひご配慮を……」

下手に出ながら、言う事は言う男だった。ネオはこう言う男を嫌いではなかった。

「もちろんですとも。規律はしっかり守らせますよ。ウォッカ飲んで酔っ払っている連中と我々大西洋連邦は違います」

ネオはにこやかに微笑んだ。

「じゃあ、ルナ。邪魔しないでよね」

マユがきつい口調で言った。

「だーれが！ 勝手にやりなさいよ」

ルナマリアも刺々しい口調になる。

「じゃあ、そう言う事で」

マユは去って行った。

「……ふん、だ。私も誰か誘って外出しようかなあ」

ルナマリアは少し肩を落として呟く。

「やあ、ルナマリア。久しぶりだね」

その時、ルナマリアは後ろから声をかけられた。

「あ、貴方は！」

「さすがにいい基地ですね！ 景色もいいし」

「うん」

マユに引っ張られるようにして外出したアスランは、生返事を返した。

「後で、海岸に行ってみませんか？」

「ああ」

「アスラン・ザラ君だね？」

その時、アスランは、声をかけられた。

「あ、はい。そうですか」

「カーペンタリアのジェフリーから君がザフトに復帰したと聞いてね、待っていたよ」

「あ、元司令官の！」

「そうそう」

その男は嬉しそうに頷いた。

「あ、私、外そうか？」

マユは言った。

「あ、ああ、すまない」

マユは二人から離れて距離を取った。

「私は、この基地の警備隊長のケビン・ラッドだ。ザラ派さ」

「ザラ派……」

「おっと」

アスランの目に走った陰りを見て取ったか、ケビンは言葉をつないだ。

「ユニウス7を落とした連中とは一緒にしないでくれよ」

「はあ」

「確かに、ザラ議長は最後の方はやる事がおかしかったかも知れん。だが、君は人が人生にした最後の行動でその人全てを評価してしまふかい？」

「……いえ」

「うん。我々プラントは人口が少ない。圧倒的な兵器を作って、それで地球連合に妥協を迫ろうと言うやり方は、今でも正しかったと思っている」

「そう言っ頂くと、父も救われます」

「……君は、いつまで軍にいる？」

「はい？」

「ただの軍人で終わるなよ。上に行け、上に。……俺の目からすりゃあ、今のデュランダル議長も現場を知らん。黒海を制圧しろだのなんだの。ディオキアからの護衛、多いとは思わなかったか？」

「あ、はい。カーペンタリアを出発した時とは大違いで」

「黒海のボズゴロフ級、根こそぎ持ってきたのさ。撤退も兼ねてな」

「え？」

「今頃、ディオキアはカラだ。ディオキアだけじゃない。黒海の基地は全てな。現場の判断で、撤退させてる。先の大戦で消耗した我々にとっては黒海に手を広げるなんぞ過ぎた事なんだ。……ジブラルタルも、放棄される予定だ」

「ええ？」

「ジブラルタルを維持していても、意味は無いからな。地上戦力はカーペンタリアに集中する。カーペンタリアを防衛して、大洋州と

連絡さえ出来ていれば、ザフトはまだ戦える」

「そこまで……戦況は悪いのですか？」

「まだ、現実にはなっていないがね。今の内に退く所は退いて固めようって事だ。アスラン……助言だ。君は機会を見つけて軍を辞める。政治家になれ。ザラ派は、迫害されているが、今でも繋がりを取っている。何かあれば力になるぞ。じゃ、またな」

そう言っただけでケビンも去って行った。

アスランは、ただ立ち尽くしていた。

「マリユール、あなたが愛しているのは、アーノルド・ノイマン……だんだん彼が気になります」

知らずに飲まされた幻覚剤でせん妄状態に陥っているマリユールにノイマンはささやいた。

「いや、いやあ！ あの人は、私が愛したあの人は、陽電子砲で……

……いやあー！ マメル！」

「違う！ ちょっと気に入っただけだった。そんなにショックじゃなかった。そうなんです。たいした事ではなかった」

「違う……違う……」

「くそつ。ラクスのようにはうまく行かんか！ さあ、これからあなたにキスする人は、あなたをとて愛している人です」

そう言っただけで、ノイマンはマリユールにキスをする。

「……ムウ？ マメル？」

「くっ」

マリユールの呟いた男の名を耳にすると、ノイマンははっと身を起きました。

「くそつ、今はまだ。だが、今にこの女如き……」

ノイマンは目を血走らせて言った。

「たかが恋人を殺されたくらいで、恨むように、復讐のように反撃

しておきながら、憎しみは戦いを生む、だと？ はっ！」

ふと思う。ナタル・バジルールは最後に何を思っていたのだろう。あれだけ男がブリッジにいて、一人ぐらい男気のある奴はいなかったのか？

少なくとも自分が同じブリッジにいたなら、身を捨ててでも助けに入っただけだ……

偶然宇宙服を着て生き残りその情報 ナタルの最後を伝えたドミニオン乗員は、即座にノイマンに射殺されていた。「お前は何をしていた」との台詞とともに……

ノイマンは状況に流され、アラスカ戦後、地球軍に出頭しなかった事を死ぬほど悔やんだ。

あの時マリューが言った台詞 『ザフト軍を誘い込むのが、この戦闘の目的だと言うのなら、本艦は既に、その任を果たしたものと判断致します』 の通り、命令は果たしていたのだ。脱走せずに出頭していれば、もしかしたら、と。もし自分がバジルール中尉と一緒に艦に配属されたかもしれない。そうすれば。俺だったら。空しい後悔がノイマンの頭を巡る。

『マリュー・ラミアスがあなたを愛するようにしてあげましょう。後はどうするも自由』

ラクスの甘い囁き。

ノイマンがマリューにもそれなりに魅力を感じていた事をも見抜くような。

悪魔の囁きだったろうか。だがノイマンはその囁きに乗ってしまった。感情は妄執へと変わり……

「あなたはアーノルド・ノイマンが気になる。とても気になる。男性として気になる……」

ノイマンはマリューに向かって呪文のように、台詞をいつ終わるとも知らず繰り返す。

「いや、いや……」
うまくいかなしい事に、ノイマンは不意に乱暴な気分になった。そう
だ。どうせこんな女。
マリユーの拘束を少し結びなおす。
そしてノイマンはマリユーに強引に身体を重ねた。
「いや、いやあああああ！」
「ふふふ、もつと叫べ！ もつと悲鳴を上げろ！」
どうせお前がいくら苦しんでも、ナタルは帰ってこないのだ……
小刻みに動き続けるノイマンの頬に涙が流れた。

「アスランさん！」
「ん？ シンか？ どうした？」
アスランにシンが駆け寄ってきた。
「お姉ちゃんとデート中すみません」
「い、いや、デートとか……」
「驚かないでくださいよ？ デュランダル議長が、ジブラルタルに
来てるんです！」
「なんだって!？」
「それで、アスランさんを呼んで来いって!」
「わかった！ すまんが、マユに謝っておいてくれ」
「はい！」

「遅くなりました」
アスランはデュランダルの前に出ると敬礼した。
「何、構わんよ。私も急に来たのだ。君達の活躍を聞いているよ。
色々あったがよく頑張ってくれた。」
「ありがとうございます！」

「アスラーン！」

「あ……」

アスランにミーアが飛びついた。

「お元気でした？」

「ああ……」

「会いたかったですわ」

「うう……お久しぶりですラクス」

アスランは、なぜか横側から冷たい視線を感じた。

「さて、話したい事も色々あるが、まずは見てくれたまえ。もう先ほどから目もそちらにはかり行ってしまうているだろうか？」

「「あ！」」

格納庫に、明かりが灯される。

「ああ……」

そこには2機のモビルスーツが通電していないPS装甲特有の鈍い色を湛えて立っていた

「ZGMF-X42S、デスティニー。ZGMF-X666S、サイタマ。どちらも従来のを遙かに上回る性能を持った最新鋭の機体だ。詳細は後ほど見てもらうが、おそらくはこれがこれからの戦いの主役になるだろう」

「ああ……」

アスランは溜息をついた。

「君達の新しい機体だよ」

「私の新しい、機体？」

アスランは問いかけた。

「うん」

デュランダルは説明を続けた。

「右の物がデスティニー。デスティニーは火力、防御力、機動力、信頼性、その全ての点においてインパルスを凌ぐ最強のモビルスー

ツだ」

「ああ……」

アスランは再びため息を付いた。
インパルスの強化型と言う事はあれが、きっと自分の機体になるの
だろう。

「一方のサイタマは量子インターフェイスの改良により、誰でも操
作出来るようになった新世代のドラグーンシステムを搭載する実に
野心的な機体だね。どちらも工場が不休で作り上げた自信作だよ。
どうかな？ 気に入ったかね？」

「はい！ 凄いです！」

アスランは嬉しそうに言った。

「……」

対して、ルナマリアは何を思っているのか無言のままだった。

「アスラン、デステイニーには特に君を想定した調整を加えてある」

「え？ 私をですか？」

「最新のインパルスの戦闘データを参考にしてね。いや、フリーダ
ムとの戦いなどは、私も見たが感動した！ すばらしい瞬間的判断、
操縦だったよ」

「はあ。いやあ」

アスランは少し頬を赤らめて、照れた。

「君の操作の癖、特にスピードはどうやら通常を遙かに越えて来始
めているようだね」

「ええ……」

「いや凄いものだな君の力は。このところますます」

「いえ、そんな」

「インパルスでは機体の限界にイラつくことも多かったと思うが、
これならそんな事はない。私が保証するよ」

「はい！ ありがとうございます！」

「ルナマリア。君の機体はこのサイタマと言う事になるが、どうか
な？ ドラグーンシステムは」

「……………」

ルナマリアは無言だった。

「私は君なら十分に使いこなせると思うな」

「……………」

「どうした？ ルナ？」

暗い顔をしてうつむき無言のままのルナマリアを気にして、アスラ
ンも声をかける。

「ルナマリア？ どうかしたかね？ 具合でも？」

デュランダルも気遣うような声をかける。

「……………」

ようやく、腹の底から搾り出すかのような声をルナマリアは上げる。

「うん？」

「なんで……………なんで!？」

「うん？」

「なんで！ サイトマなんて名前なんですか!？」

「うん、命名者に言わせると、これは全く新しい簡単に印象的で独
創的な名前なんだそうだ。私にはあまり専門的な事は解らんがね」

「か、改名！ 改名してください！ どうか！ お願い！」

ルナマリアはデュランダルに縋った。

「うん？ 別に私はかまわんが……………なんと変えるのかね？」

「ええと……………レジェンド、とかどうですか？」

照れくさそうにルナマリアは答えた。

「いいとも」

デュランダルは鷹揚に微笑んだ。

「複雑な名前がいいんだね？ ボウモア・レジェンド。マツカラン・
レジェンド。タカラ純レジェンド。シーガスリーバル・レジェンド・
スペシャルリザーヴ、と言うのもいいね」

「ぎ、ぎちよ〜〜〜！ やめてください！ 頼みますうー！」

デュランダルの服の裾を掴み、ルナマリアの目尻には涙が浮かんで
いた。

第42話「不沈戦艦強奪作戦発動<2>

「お帰りなさいませ、代表！」

「「お帰りなさいませ」」

軍用機から降り立ったカガリを、マシマ・タツキらが出迎える。

「苦勞を掛けたな、お前達にも」

「いえ、代表こそ」

「ところで」

カガリは声を小さくした。

「マルキオ導師は尋問したか？」

「は、一応、話を伺いましたが知らぬ存ぜぬ。まったくモビルスーツが格納されたシエルターの事など知らなかったと」

カガリは難しい顔をした。あれはアス八家で作らせた物だ。マルキオも承知の上だった。

「なににせよ、尋問しようにも導師は地球連合外交官の肩書きを持つておりまして……」

「こうなったら私が直々に事情を聞くか……」

だが、カガリがマルキオ邸に着いた時、マルキオは姿を晦ましていた。

キラの母親にも事情を聞いたが、本当に知らないようだった。

カガリはカリダ・ヤマトを収監し、子供達は他の養護施設へと送った。

「そう言えば、ハルマ・ヤマトの具合はどうだ？」

カガリは随員に尋ねた。

キラ・ヤマトの養父ハルマ・ヤマトは前戦役後、しばらくマルキオ導師の孤児院の手伝いなどをしていたが、精神に変調を来し、病院に収容されていた。

「は、未だ回復しておりません。窓を異常に怖がります。相変わらず、変な視線を感じたり奇妙な羽音が聞こえると主張して……相変わらず『いあ！ いあ！』とか不明な叫び声も上げますし」

「そうか。気の毒にな。さて、まだやる事があるな」

「は？」

「アークエンジェル、アークエンジェル乗員の国際指名手配をしておいてくれ」

カガリは随員にファイルを渡した。

「……このリストの中には、キラ・ヤマトの名も入っておりますが、よろしいのですか？」

「構わん」

その時のカガリの顔は、紛れもなく為政者の顔であった。

「猊下、ここに居られたので」

ベルットーネ枢機卿は、テラスに立っていた老魔法王ベネディクトに話しかけた。

「ああ、夜空はいい。神の存在を実感できる壮麗さだ。いつか……行って見たいものだ。はは。夢物語だがな。で、なにか？」

「……オーブに居住していたマルキオが、いずこともなく姿を消したそうです」

「！ まあ、奴がどう姿を消そうと、どこに現れようと今更驚かぬが……。何を為そうとしているのか、引き続き奴の情報を集めよ」

「はっ」

「マルキオめ……」

ベネディクトは呟いた。

「もし神の道に沿わぬ背徳的な事を為そうとしているなら、再び矛を交わさねばならんかも知れん……」

誰もいなくなつたマルキオの館。

そこに、三人の男女がまるで空中から飛び出るように、姿を現した。

「タイムパトロール、両澤千晶よ！」

「同じく、福田己津央だ！ 時間犯罪を目論んだ罪によりおとなしく両手を上げて……」

「……誰もいないようだぞ」

「そのようだな、菁滋。ちつ。先を越されたか」

「だいぶこの世界の改変は進んでいる。早くしなければ……米帝に世界を支配させるなど！ なんとしても防がねばならん！」

「菁滋は相変わらずアメリカ嫌いねー」

「それにしてもマルキオ導師とは何者だ？」

「さあな。ミニスカトニツク大学入学以前の経歴はわからん」

「ふん！ あの下品な大学！」

両澤は罵った。

またか、と竹田菁滋は溜息をついた。

ミニスカトニツク大学の女子学生の制服はミニスカだった。

両澤はもはや自分がミニスカが似合わない状態であるので女子大生に嫉妬しているのだった。

「ともかく、奴を捕まえれば全てがわかる。行くぞ」
福田が言った。

次の瞬間、現れた時と同じように3人の姿は消えた。

「カーペンタリアに合流せよ、か。簡単に言ってくれる」

マハムール基地指令、ヨアヒム・ラドルは呟いた。

この地域のザフトの戦力は低下していた。

地球連合によるガルナハン奪回も指を加えて見ているしかなかったのだ。

『 空襲警報発令！ 空襲警報発令！』

サイレンが鳴り響く。

ヨアヒムは地下壕へと避難する。

「野郎ども！ ザフトの連中もちったあ骨のある奴らだろうが、どうにも放つちや置けねえ！ 気張れよ！」

野中五郎少佐は俠客染みた言葉で部下に叱咤する。

「合点でさあ！」

部下達も、俠客言葉で答える。

へへ。ここまで俠客としての演技を出来ているなら、心配する事はないな。

と野中は思った。

野中達が乗っているのはA-30対地攻撃機、通称サンダーボルト？。総勢10機。それを、20機のユークリッド隊が護衛する。

「わざわざ来てやったんだ。何かいい獲物はいねえか？」

「あれは、どうでやすか？ つかい陸上戦艦がありやすぜ！」

「ようし、第4と第5小隊は空港、地上施設を叩け！ 後は陸上戦艦にでかいのぶち込もうぜ！」

野中達の爆撃隊を発見すると、マハムール基地のバビ隊は迎撃のために飛び立った。

その数約60機。全力出撃である。爆撃隊と比べ約2倍。バビが垂直離陸が可能なために出来た芸当だった。

マハムール基地の誰しもが迎撃の成功を確信した。

迎撃に出てきたバビが、機関砲を撃つて来る。

「ふ……効かんよ」

爆撃隊の護衛隊長リチャード・ボング少佐はひとりごちた。

彼のユークリッドには操縦席の前に女性の絵が描いてある。リチャードの婚約者のマージの絵だった。

「マージ、君を傷付けさせたくないさ！」

すでにビームシールドは展開されている。

バビの機関砲弾はビームシールドに防がれる。

リチャードはバビがその機関砲弾を浴びせてくるのに構わず突撃すると、ユークリッドの52mm7連装ガトリング機関砲を叩き込む。バビは爆散した。

「ふ……バビごときにビーム砲を使うまでもないわ！」

「な、んだと!？」

バビのパイロットは驚愕した。

機関砲も、ミサイルも、効かない！ 敵機の前面に膜があるかのようには防がれている。

「こうなったら！」

一機のバビがモビルスーツ形態になり、バビの最も高い攻撃力を誇るアルドル複相ビーム砲を放つ。

だが、それも敵機の前面に膜があるかのように拡散してしまう。

そしてモビルスーツ形態になった事で表面積を拡大させたそのバビは、蜂の巣の様に敵機の機関砲弾を浴びると、墜落していった。

バビ隊は混乱し、一方的な狩の獲物となった。

後に、この空戦は『マハムールのターキーシュート』と呼ばれるようになる。

しばらくの後、警報は止んだ。地球軍の爆撃隊はようやく去ったの

だ。

「被害報告です
部下が報告する。」

「陸上戦艦『デズモンド』大破、『バグリイー』大破。もう使い物にはならんでしよう。敵の攻撃が陸上戦艦に集中したので、空港施設、地上施設の損害は、比較的軽微です」

「はは。陸上戦艦など。どうせ、もう使い道など無いのに……無駄な事を。」

「ははは……」

ヨアヒムは屈折した喜びを胸に覚えた。

ここまでやられればいっそあきらめもつくと言う物だ。

「基地を撤収する！ 詰めるだけボズゴロフ級と輸送機に積み込め。詰めない物は破壊しろ。ブービートラップも忘れるなよ！」

「ラクス、これを見つけた。見てくれ、とんでもない事が書いてあるぞ」

「ここはメンデル。」

バルトフェルドが、一冊の大学ノートを持ってきた。

「拝見しましょう」

ラクスとバルトフェルドは目で合図をし合った。

ラクスはそのノートを手に取った。何が書かれているか確認するようにパラパラとページをめくる。

「それではキラを、呼んでくださいな」

しばらく後、キラがやって来た。

「どうしたの？ ラクス？」

「デュランダル議長が、何を考えているかわかりました」

「ええ？」

「このノートは、メンデルでデュランダル議長の同僚だった者の物

です。これに、デュランダル議長が何を考えていたのか書かれました」

「それで、なんと？」

「デュランダル議長は、遺伝子によって職業を割り振る事を考えていたようです。それをデステイニープランと名づけていました」

「……？」

「運命計画 それは、遺伝子によって人生を決めさせられるのも同じ事。キラ。あなたはコンピュータをいじるのが好きでしょう？」

「うん」

「でも、コンピュータとまったく縁の無い仕事を強制されたら？」

そして、それを決めるのは誰なのでしょう？ デュランダル議長でしょうか？ それは全人類を支配しようとする事です。それは人が神になるうとするのと同じ……」

「そんなのんでもない！ 働いたら負けじゃないか！」

「そう。とんでもない事です。なんとか阻止しなくてはなりません」

「うん、絶対に阻止しなくちゃ！」

意気込むキラを、バルトフェルドは少し離れた所からなんとも言えない光を目に湛えて見つめていた。

黒海を制圧した地球軍とオーブ海軍はイタリアのタラントに入港した。地中海西部は彼らの物だった。

「景色のいい所よね。さすが地中海って感じ」
「ミューデーがはしゃぐ。」

入港したばかりだが、艦の外へ出る事を許されたのだ。

「ああ。休暇、取れるらしいな。トマト料理でも食べに行こう」
「シャムスも嬉しいらしい。声が弾んでいる。」

「そして鋭気を養った後は！ 一気にジブラルタルを取る！」

「はは。そう気張るな、原田」

スウエンが左之助の肩を叩く。

「簡単に考えるなよ。ザフトは黒海から無傷で撤退した。ジブラルタルに戦力を集中してると考えられる」

向こうから歩いて来た人がスウエン達に話しかける。

「あ、笹井少佐！」

スウエン達は敬礼する。ユークリッド隊の中隊長、笹井醇一少佐だった。

笹井も微笑んで答礼する。紅顔の美青年である。

「楽にしてくれ。ま、気を緩めず、楽しもうと言う事だな」

「はい！」

「うーん。デステイニーか……」

アスランは休憩室でコーヒを飲みながら考え込んでいた。

「あらためてデータを詳しく見るとなあ。試作品だけあってまだ練れていない様だが……。どう言った使い方をすればいいのか？ 格闘、砲撃。いずれにせよどちらかの装備がデッドウェイトになる、か。機動力を生かしてすばやく射点に着き、遠距離射撃、と言うのがいいかもな。格闘は緊急事態と割り切って。どうせ俺は前線には出ずに指揮に集中したいし。よし。次は、インパルスとセイバーを誰に任せるか……」

「よっ！」

声がかけられた。

「あ。ハイネ」

「色々考えてるんだなあ」

「ええ、まあ。各自の特長を生かして新しいフォーメーションをと」

「そうか。俺は戦闘馬鹿だからそう言うの苦手だな。尊敬するぜ」

「いやあ」

「お前、早く上に行つた方がいいかもな。いつまでも最前線で切つた張つたしてねえでさ。もったいねえよ」

「ありがとう、ハイネ」

「じゃ、あまり根詰めるなよ！」

ハイネは去つて行つた。入れ替わりのようにルナマリアが部屋に入つて来た。

「あ、アスラン！」

「やあ、ルナ」

「休憩中ですか？ はい、差し入れ！ 軽いものでもどうですか？

エビとカニのグラタンです」

「ああ、ありがとう」

「エビとカニって言つてもこれ、MREじゃないんです。プラントの物とは大違い！ 基地周辺で取れた物持つてきたんですよ？ タバスコ使わなくても臭みが無いんです！」

「ああ、そうなんだ」

プラントでよく食べられる海産物、エビ・カニなどの甲殻類は下水で養殖されており臭みがある。それをごまかすために唐辛子が用いられていた。海鮮ジョンゴル鍋が流行つたのも頷ける。

だが、ルナマリアの感動は、プラントの上流階級だったアスランにはいまいち伝わらなかつたようだった。

「何、してたんですか？」

「ああ。デステイニーの戦い方とか、インパルスとセイバーを誰に任せようとか、フォーメーションをどうしようとか、色々な」

「……それ、私も考えてたんですよ」

「うん？」

「宇宙と、地球上じゃ、フォーメーション変えた方がいいかもしれない。ほら、レジェンドつて、一応空飛べるけど、地球上じゃ機動性はセイバー程じゃないんですね。ドラグーンも使えないし。だから宇宙なら前衛から中衛までこなせると思っただけど、地球上じ

や中衛から多数の砲を生かして砲撃支援するのがいいかな、とか。まあ、ミネルバ、もうすぐ宇宙に帰れば必要なくなりますけどね」「そっか。そうだよな。地球上と宇宙じゃ別けるべきだな。じゃあ、ルナは地球上でのフォーメーションはどう考える？　ちなみに、俺の考えではデステイニーは遠距離からの砲撃がいいと思ってる」「そうですね、じゃあ、グフに前衛やつてもらって、レジエンドは中衛。バビ、セイバーが前、中衛、ガナーザクとデステイニーが後衛、インパルスは状況によりシルエットを切り替える、でしょうか？」

「うん、なかなかよさそうだな。……でも、結構しゃべってくれんだな。この間は機嫌でも悪かったのか？」

「え？　この間って……あ！」

ルナマリアは思い出した。

マユと一緒に居た時だ。

「あの時は……その……」

言える訳無いじゃない！　マユに遠慮してたなんて！

「あ……。その、女の子の曰、とか、ああ、なんだ、俺、無神経な事聞いたかもしれない。ごめん！」

「へ？」

アスランは真っ赤になってルナマリアに謝った。果たして彼は何を想像したのであるうか？

「でもよかったよ。嫌われてるようじゃなくて」

「嫌いだなんて！　むしろ私はアスランの事……あ……その……す

……」

ルナマリアの顔も真っ赤になった。

「その……用事思い出したんで失礼します！」

「あ？　ああ、またな」

どこまでもニブいアスランだった。

第43話「不沈戦艦強奪作戦発動<3>

「まあ、メンデルへ行ってきたの？」

「ええ、カーバさん。そちらは変わりありませんか？」

ラクスは誰もいないエターナルのブリッジで、アイリーン・カーバに語りかけた。

「順調に、状況は悪くなっているわ。つい先日配給制が再開されたわ。それで、メンデルには何を？」

「ええ、デュランダルの瑕疵になる物が見つかったのです」

「ああそう。彼も、クライン派からも非難する声が上がりが始めているわ。同士を取りまとめ中よ。無理ないでしょうね。戦争がうまく行っていないのも。プラント市民も気まぐれなものよ。私もユニウス条約を結んで早々に辞任させられて幸いと言ったところかしらね」

「カーバさん。先の戦役後、あなたが評議会議長を引き受けてくれた事は決して忘れませんわ。あなたが成し遂げた事の大きさもわたくしはわかっていきますわ」

「ふふふ。ありがとう。でも、あなたにも同じ事ができたと思うわ」「いえ、まさかわたくしにそんな……」

「あら本当よ？ まあいいわよ。あなたに泥を被らせる訳には行かなかったものね。プラント市民はそれはもうユニウス条約に不満を持ったようだから。それよりプラントにはいつ帰ってくるの？ ここではあなたの贖物が大人気よ。プラント市民にもあきたものね」

「今は……まだ。機会を待ってください」

「ああ、待ち遠しいわ、ラクス。早く帰って来てね？ あなたがいなければどうしようもないもの。待っているのよ、本当に」

「ええ、ありがとう」

通信は終わった。

ラクスはふいに眉をしかめた。何か、砂糖を入れすぎた紅茶を飲まされたような気分になったのだ。

このもやもやした気分は何だろう？

ラクスはぶるんと頭を振ると、大洋州に根を張るテロリストグループ、『海の猟犬』のボスに向けて次の通信をはじめめる。

「ああ、ポール・ワトソンさん。ご機嫌いかが？ 相変わらず捕鯨船に酪酸投げ込んでますか？ 大洋州の様子はどうかしら？ ウラんとプルトニウムの確保は……」

バチカン

「アナキン。君が友達に暴力を振るつたと言うのは本当ですか？」

一人の神父がアナキンに話しかけた。

「はい。事実です」

アナキンは悪びれずに言った。

「でも、そいつは殴られて当然の事をしました。ちゃんと手加減もしました」

アンデルセン神父は振り返ると言った、

「アナキン、君は強い。だからこそ、言います。今度やる時は、七倍、いや、七の七倍手加減をしてやりなさいと。外に出せば、普通の暴力事件の被害者で通る傷を負ったのですよ？ あなたの友達は何？」

「……はい」

アナキンはうつむいた。

「理解しているようですね？ では、友達に謝りに行けますね？」

「はい！」

「よろしい！ いいですか？ アナキン。よく覚えておきなさい。容赦なく暴力を振るって良い相手は悪魔共と……」

神父はにこりと笑って言った。

「異教徒共だけです」

「私がインパルスに？」

「そうだ。艦長とも相談して決めた」

アスランはレイに微笑んだ。

「マユは、射撃ならお前と同じくらいの腕前だが、お前は格闘戦でもそつなくこなせる。インパルスの特長を活かせるだろう」

「しかし、ハイネが居るのでは？」

「ハイネは、グフで対モビルスーツ格闘に専念したいそうだ。やれるな？ 俺はお前ならやれると信じている」

アスランは微笑みながらレイの肩に手を置く。

「はい、微力を尽くします！」

「私がセイバー……大丈夫かなあ？」

「マユなら大丈夫よ」

「格闘戦なんて自信ないし」

「あら、私だってセイバーで格闘なんてした事ないわよ？」

「そうだったっけ？」

「うん。とにかくまずはモビルアーマー形態を生かして敵の攻撃に当たらないように動き続ける事。それだけでかく乱と言う役割は果たせるわ。攻撃なんて慣れてからやればいいのよ。砲撃はマユのお得意でしょ？」

「うん、私頑張る。頑張るから！」

「やっと宇宙へ帰れるんだねえ」

シヨーンは呟いた。

「ああ。とんだ地上暮らしだった。ほっとするよ」

ゲイルが答える。

「そう言えば、カーペンタリアで積んだゾノ。なーんにも使わなかったなあ」

「使う機会がなくて幸いさ。護衛が付いててくれたからな」

「バビともお別れか。いい機体だったがな。機動性が高いのが、いいね」

「宇宙じゃねえ。ブレイズウィザード使うか、いつそグフでももらっちゃどうだ？」

「それもいいかもなあ」

「グフ！ いいねえ！」

二人の後ろから声がかげられた。

「あ！」

「ハイネ！」

二人は敬礼する。

「グフで活躍してぐふふ。なーんてな」

三人は吹き出した。

石鹸をたっぷりスポンジに付けて、身体を拭う。その刺激が肌に心地よい。ひとしきり洗い終わると、シャワーで石鹸の泡を流す。瑞々しい肌が水滴を弾く。

「ん……ふう」

水流が肌を流れる心地よさのため息を付く。

きゅ、と蛇口を閉めるとお湯が止まる。

肌に水滴が残る。キラキラとした宝石のようなそれをタオルで拭う。輝かしい肌が姿を現す。

「あ、アスランさん！」

シンが部屋を出ると、ちょうどアスランに出会った。

「お、シンじゃないか。シャワー浴びたのか？」

アスランは目ざとくしんの濡れた髪に目を留めると、くしゃっと撫
ぜた。

「は、はい……。いいなあ……」

シンはアスランの逞しい身体に見惚れた。

「ん？ 何がだ？」

「ほら、僕って男っぽくないでしょう？ お姉ちゃんはモビルスー
ツに乗って戦っているのに、僕はオペレーターで……」

「なんだ」

アスランは、シンの頭をもう一度くしゃっと撫ぜた。

「オペレーターだって大事な仕事だぞ？ オペレーターがきちんと
オペレートしてくれなければ、俺達はまともに戦う事もできん。自
分に自信を持って」

「……はい……。ところでアスランさん！」

シンは、明るい声が変わって聞いた。

「ん？」

「女の子の裸って見た事ありますか？」

「ぶっ……!!」

「僕、お姉ちゃんのならありますよ。よかつたら、お姉ちゃんのシ
ヤワーシーン隠し撮りしてきてあげましょうか？」

「ば……。！ からかうな、シン！」

「あはは、本気ですよ。お姉ちゃんも喜ぶかも知れないな。アスラ
ンさんが自分の裸に興味あるって知ったら！ その気になったらい
つでも言ってください。じゃー！」

シンは走り去った。

「まったく……」

アスランはため息をついた。

「あっ！」

アスランは向こうから歩いてくる二人組みを見つけた。ルナマリア

とマユだ。

「あ！ アスランさん！」

マユが敬礼する。ルナマリアも、少し緊張感の混じった視線をちらつとマユに投げかけると、アスランに敬礼する。

マユの……裸か……。

アスランは思わずマユの裸身を想像してしまった。

栗色の髪に肌を……。胸の大きさも。

うん、ミアよりも、俺の好みに近いかも知れない。

「どうしたんですか？ 顔、赤いですよ？」

マユがアスランの顔を覗き込む。

「わあ！ い、いや……」

アスランは慌てて心を立て直す。

「いや、マユ。セイバー、頑張れよ」

「はい！ 頑張ります！」

ルナマリアとマユ、二人が去って行く後姿をアスランは見る。

ルナマリアのミニスカートとニーソックスの間に目が吸い付けられる。そこから見える太腿の肌が艶かしく感じられる。その輝くような肌色がアスランの脳裏でルナマリアの身体全体に広がり、ルナマリアの裸体が完成する。

「ルナの裸か……見てみたいな」

思わず呟いて、アスランは慌てて周りを見回し、誰もいない事にほっとする。

「いかなな、シンがあんな事言うからだ」

アスランは2・3回頭を振ると、ルナマリア達と反対方向へ歩いて行った。

「うーん、おいしい！」

「ミューデーのおかげだな」

スウェン達は小さな小料理屋で食事をしていた。

「こう言う事は地元の人に聞いた方が一番だからね。イタリア語習ってて良かったわ」

ミューデーは得意そうにフォークにパスタを絡めて食べる。

「やあ、君達」

声がかけられる。

「あ！ 笹井少佐！」

スウェン達は立ち上がると敬礼する。

「この店はおいしいかい？」

答礼しながら笹井は尋ねる。

「はい！ おいしいです！」

「そうか。じゃあ、ここにしようか」

笹井は後ろに立っている坂井達に言う。

「ええ、そうしましょう。じゃあ、君達、ご一緒させてもらうよ」

坂井がスウェン達に言った。

笹井達はしばらくメニューを眺めると、笹井が注文を取りまとめ、注文していく。

「笹井少佐は、イタリア語がお出来になるのですか？」

シヤムスが尋ねた。

「ああ、士官学校で習った。君達は？」

「ミューデーが個人的に習っていて。ここの店も地元の人に紹介してもらったんですよ。おかげでうまい物が食べられます」

「そうか」

笹井は微笑んだ。

「ジョン、そのナイフは実用品かい？」

西沢が、ジョン・デイカーが腰に下げている小さなナイフを見て尋ねた。

「ああ、これですか。んー、お守りって言うか。家に代々伝わって

いる物でしてね。親父がお守り代わりに持ってけと」

ジヨンは鞘からナイフを抜いて見せた。黒い刀身が現れる。

「ふうん。珍しいな」

「ええ、どうやら黒曜石で出来ているみたいで」

「綺麗にクラック（内部のひび）が入っているな。光が当たると虹色で綺麗だ」

「ああ、祖父は『暁の剣』なんて呼んでましたっけ。惚けた祖父ですが、この剣が冒険に誘うとか何とか」

その時、店の中が急に騒がしくなった。

店の主人がラジオの音量を大きくする。

「なんだってんだ？」

笹井とミューデーは、ラジオの音に耳を傾ける。ラジオからは緊迫した声でアナウンサーが何かを伝えている。

「……ちよつと！ こりゃ、とんでもない事が起こったよ！」

ミューデーが驚きの声を上げた。

「ああ。艦に戻った方がいいな」

笹井も、その柔らかな顔を緊張させて立ち上がった。

「なんだと!？」

その知らせにジブラルタル基地司令官は驚きの声を上げた。

「間違いないのか？」

「間違いありません。西ユーラシア　スペイン、ポルトガル、フランス、ドイツでクーデターが発生。新政権は地球連合を非難、プラントへの支持を表明しております」

「……」

それは、外部の者から見ればザフトにとって喜ばしい状況になったと思っただけかもしれない。だが……

「これでは……」

司令官室はまるで通夜の様な沈黙に包まれた。

「この基地を撤退、する事はできなくなったか……」

「ええ。この状況でジブラルタルを放棄すれば、ザフトへの支持が
一気に崩れます」

「どうせ、クーデター政権など脆い物だと言うのに！ プラントが
彼らを支援する国力があればまだしも……」

「そんな物、ありませんな。プラントが支援を欲しいぐらい疲弊し
ていると言うのに」

「ここで耐久するしかありませんな。撤退が許されるくらいに損耗
するまで」

「……」

「そして壊走にならない程度に、か。難しい仕事だな」

「しかし、やらねばなりません」

「ともかく、デュランダル議長にはすぐにプラントにお戻り頂かね
ば！」

そして世界は更に混迷の度合いを深める。

東アジア共和国でクーデターが発生、ザフトへの指示を打ち出す。

これに反発した各地は東アジア共和国からの分離独立を宣言、地球
連合への支持を表明。

更に、中部ユーラシアでクーデターが発生、ザフトへの支持を表明。
スカンジナビア王国は現地民に治安維持を要請されたとして、中部
ユーラシアへ国境を越えて進出した。

第44話「不沈戦艦強奪作戦発動<4>

「ずいぶんと、地上は大騒ぎのようだな」

デュランダルは嗤った。

「さすがです、議長！」

ミアアがはしゃぐ。

「現場が勝手に黒海から撤退した時には驚いたが……。黒海制圧を命じたのは、私とてそれなりの目算あつての事だ。今回の事で現場もわかつただろう」

「ええ！ 西ユーラシアが親ザフトになるなんて！」

「しかし、ちょっと引つかかるな」

「え？」

「中部ユーラシアや東アジアには工作をしていなかったのだが……ふうむ」

デュランダルは考え込んだ。

「誰か、別の組織が動いているのか？ しかしこの一斉のタイミング。奴らの手も西ユーラシアに伸びていたという事か？ ……まあ、いい。では、ラクス。これから少し君の力を借りねばならん」

「はい！」

執務室の、扉が開いた。

「どうするのかね、ジブリール」

「まったく。せつかくザフトを追い詰められるか、と思つたら、これだ」

西ユーラシア政変より数日後。ロゴスの会合が開かれる。

「ふ……ん」

ジブリールは黙つたまま微かに眉をひそめる。

「ユーラシアにこの短い期間で何度動乱が起こったと言っただね？
君らのコントロールに何か問題があるのじゃないかね？」

ブルーノ・アズラエルが、ジブリールを庇う様に発言する。

「……」

ユーラシアのロゴス幹部は痛い所を突かれた、と言うように押し黙る。

皆が沈黙した所でジブリールは話し出した。

「配布した資料をご覧ください。各地に成立した親ザフト政権の評価です」

「……脆弱だな」

「政権と言えるのか？」

「ああ」

「ごたごたの中でユーラシア中央部はプーチンが台頭してきたか……
味方にすれば心強い」

「その通り。彼らの政権基盤は非常に弱い物です。親地球連合派が抑えている地域も数多く、新政権が成立したと言うより、半ば内乱状態。地球連合が実力で介入すれば簡単に引っくり返る程度のも物です」

「……だが、その戦力をどこから調達すると言っただね？」

「ジブラルタル攻略部隊からかね？ 中東を押さえている部隊からかね？ カーペンタリア攻略部隊からかね？」

「いずれから引き抜いても、ザフトが息を吹き返してしまうぞ」

「ええ。それで……」

ジブリールは言葉を切った。

「スカンジナビア王国に、西ユーラシアに進攻してもらいます」

「スカンジナビアだと！？ しかし、あの国はユーラシアへ攻め入ったのだぞ？ 現地民から治安維持を要請されたなどと理屈を付けてはいるが」

「しかし、事あるごとに自分達は地球連合の一員だと宣伝しておるな。完全に敵とも割り切れんよ」

「私もここしばらくスカンジナビア王国の代理人と腹の探りあいをして。彼らの真意がようやくわかりました」

ジブリールは言った。

「それは？」

「彼らの望む物は、『冬戦争』で失った領土の奪還です」

「『冬戦争』と来たか！」

「大昔の話ではないか。西暦1930年代か」

「執念深い物だな」

「いやいや、領土を失った恨みと言う物は……」

「と、言う訳で。中部ユーラシアは、スカンジナビア王国と共同して、速やかに親地球連合の政権を復活させます。……ユーラシア地区のロゴス幹部の皆さん、新政権には因果を含めて、スカンジナビア王国へ領土の返還をさせるようお願いします」

「まったく厄介な事を……」

「因果堂の最新作を贈ればいいのかのう？」

「いや、それは違うだろう」

「では因果応報氏自身を……」

「アッー！」

「貴様、軍事板住人だな！　そうに違いあるまい！」

「そこから離れる！」

コホン。

ジブリールは咳払いをした。

「そして、中部ユーラシアが収まれば、中部ユーラシアの軍を西ユーラシアへ、と言う訳にはいきません。まずは治安維持に忙殺されるでしょうから、代わりにスカンジナビアの軍をそのままドイツ、フランス、スペインへと進攻させます。幸い、西ユーラシア各地へ大規模なザフトの増援が送られたと言う情報も入っております。味方が苦しい時は敵も苦しいのです！　最初に負けた、と思った方が負けます」

まったく。早く西ユーラシアの親ザフト勢力を鎮圧しなければイタ

リアに居るセトナに会えないじゃないか。
とジブリールは思った。

「ジブラルタル攻略はどうするね？」

「予定通り、行きます。ただしゆっくりと進軍させます。ザフトは、対応する戦力を張り続けなければならぬでしょう。西ユーラシアを支援する余力を無くしてしまうのです」

その時、一人のロゴス幹部が慌てた声で叫んだ。

「大変だ！ みんな、DS放送のch・747、プラントチャンネルを見てみる！ デュランダルの野郎だ！」

「ch・747？ アニマルプラネットだが……。海亀の産卵がなにか？」

ブルーノ・アズラエルが訝しげに言う。

「それはCS放送だ！」

彼は思いつきり突っ込まれた。

「では議長、よろしいですか？」

テレビ局員が言った。

「ああ頼む。始めよう」

「3・2・1……キュー！」

「皆さん、私はプラント最高評議会議長ギルバート・デュランダルです。我等プラントと地球の方々との戦争状態が解決しておらぬ中、突然このようなメッセージをお送りすることをお許しください。ですがお願いです。どうか聞いていただきたいのです」
デュランダルは話し出した。

「私は今こそ皆さんに知っていただきたい」

「艦内に流して。各員可能な限り聞くようにと」

タリアはアーサーに言った。

「はい」

『こうして未だ戦火の収まらぬ訳。そもそも、またもこのような戦争状態に陥ってしまった本当の訳を』

「なにこれ？」

「議長の緊急メッセージだと」

「「え？」」

「各国の政策に基づく情報の有無により、未だご存知ない方も多くいらっしやるでしょう。現在、世界各地で、大きな動きが起こっています。プラントと地球、コーディネーターとナチユラルが手を取り合おうと言う！」

「ラクス……これ……」

キラは眉をひそめてラクスに話しかけた。

「ええ、では、私達もまいりましょう」

『我々の軍は連合のやり方に異を唱え、その同盟国であるユーラシアからの分離、独立を果たそうとする人々を人道的な立場からも支援してきました。こんな得る物の無いただ戦うばかりの日々に終わりを告げ自分たちの平和な暮らしを取り戻したいと。戦場になど行かず、ただ愛する者達とありたいと。そう願う人々を我々は支援しました。なのに和平を望む我々の手をはねのけ、我々と手を取り合い、憎しみで打ち合う世界よりも対話による平和への道を選ぼうとしたユーラシア西側の人々を連合は裏切りとして有無を言わず弾』

「押しようとしているのです！」

ここで、画面は地球軍によるガルナハンの住人への弾圧、そしてガルナハンの破壊の光景が映し出される。

更に、地球軍のプラントへの核攻撃シーンへと移る。

「ジブリール！ どう言う事だねこれは！」

「何をしようと言うのかねデュランダルは」

その時、ジブリールを心配するように黒猫のスキピオがペロリとジブリールの手を舐めた。

「ふ……」

ジブリールはスキピオに微笑んだ。

「落ち着きましょう、皆さん。彼が何を話そうとするのか？ 私も興味があります」

『何故ですか？ 何故こんなことをするのです！ 平和など許さぬと！ 戦わねばならないと！ 誰が！ 何故言うのです！ 何故我々は手を取り合ってはいけないのですか！？』

その時、一人の女性が、画面の横から現れ、デュランダルを指示する事を行為で示すかのように彼の肩に手を置いた。

『このたびの戦争は確かにわたくしどもコーディネイターの一部の者達が起こした、大きな惨劇から始まりました』

「ラクス様だ！」

「ラクス様！」

その放送を見ていたプラントのコーディネイター達から声が上がっ

た。

『それを止め得なかつた事、それによつて生まれてしまつた数多の悲劇を、わたくしどもも忘れはしません。被災された方々の悲しみ、苦しみは今も尚、深く果てない事でしょう。それもまた新たな戦いへの引き金を引いてしまつたのも、仕方のない事だつたのかもしれません。ですが！ このままではいけません！ こんな討ち合うばかりの世界に、安らぎはないのです！ 果てしなく続く憎しみの連鎖も苦しさを、わたくし達はもう十分に知つたはずではありませんか？ どうか目を覆う涙を拭いたら前を見てください！ その悲しみを叫んだら今度は相手の言葉を聞いてください！ そうしてわたくし達は優しさと光の溢れる世界へ帰るうではありませんか！ それがわたくし達全ての人の、真の願いでもあるはずですよ！』

再び、ここでデュランダルが話し出す。

『なのにならあつてもそれを邪魔しようとする者がいるのです。それも古の昔から。自分たちの利益のために戦えと、戦えと！ 戦わない者は臆病だ、従わない者は裏切りだ、そう叫んで常に我等に武器を持たせ敵を創り上げて、討てと指し示してきた者達。平和な世界にだけはさせまいとする者達。このユーラシア西側の平和を求め人達への弾圧も彼等の仕業であることは明らかです！ 間違つた危険な存在とコーディネイター忌み嫌うあのブルーコスモスも、彼等の創り上げた物に過ぎないことを皆さんは御存じでしょうか？』

「ん……？」

「ニヤー」

再び、スキピオがジブリールの手を舐めた。

『その背後にいる彼等、そうして常に敵を創り上げ、常に世界に戦争をもたらそうとする軍需産業複合体、死の商人、ロゴス！彼等こそが平和を望む私達全ての、真の敵です！』

「なんだと!？」

ジブリールは叫んだ。

画面には、ロゴス所属の財閥の情報が流され始めていた。

『私が心から願うのはもう二度と戦争など起きない平和な世界です。よってそれを阻害せんとする者、世界の真の敵、ロゴスこそを滅ぼさんと戦うことを私はここに宣言します!』

再び、デュランダルの後ろの女性、ミアが話し出す。

『わたくし達の世界に、誘惑は数多くあります。より良き物、多くの物をと。望む事は無論悪い事ではありません。ですがロゴスは別です。あれはあってはならない物。この人の世に不要で邪悪な物です。わたくし達はそれを……』

その時、画面が乱れ、回復する。そこには一人の女性が映っていた。

『その方の姿に惑わされないでください』

「あ!」

「ん?」

「え?」

その女性の顔は……

『わたくしはラクス・クラインです。わたくしと同じ顔、同じ声、同じな方がデュランドル議長と共にいらっしやることは知っています。ですが、わたくし、シーゲル・クラインの娘であり、先の大戦ではアークエンジェルと共に戦いましたわたくしは、彼女とわたくしは違う者であり、その想いも違うと言う事をまずは申し上げます』

「おい！ 何だよこれは！」

突然、画面が二分割され、ミアとラクスが並べて映し出される。

『わ、わたくしは………！』

ミアは必死に言葉を繋ごうとするが、言葉が出てこない。

『わたくしはデュランドル議長の言葉と行動を支持しておりません』
対してラクスは毅然と宣言した。

「こちらの放送を止める！」

うるたえるミアを見て、デュランドルカメラの前から走り去り、スタッフに叫んだ。

「は！ いやしかし………」

「いいから止めるんだ！ 奴等の思惑に乗せられているぞ！」

「は！」

だが、なぜか画面からうるたえるミアの姿は消えなかった。

「ええい！」

デュランドルは罵った。

『戦う者は悪くない、戦わない者も悪くない、悪いのは全て戦わせようとする者。死の商人ロゴス。議長のおっしゃるそれは本当でしょうか?』

ジブリールは、ただ画面を見つめていた。

『それが真実なのでしょうか? ナチュラルでもない、コーディネイターでもない、悪いのは彼等、世界、貴方ではないのだと語られる言葉の罠にどうか陥らないでください!』

「何が目的だ?」

いぶかしげにジブリールは呟いた。

『無論わたくしはロゴスを庇う者ではありません。ですがデュランダル議長を信じる者でもありません。我々はもつとよく知らねばなりません。デュランダル議長の真の目的を……!』

「ふざけんじゃないわよ!」

その時、ラクスの声をかき消すように叫び声が響いた。

「……!?!」

叫んだのは、うろたえる事をやめたミーアだった。

ミーアは腰に手を当てて叫び続ける。

「今頃のこのこ出てきて自分は本物ですとか言ってるんじゃないわよ! 先の戦役後、プラントも地球もガタガタしてるの放置してたくせに!! 自分だけどっかに引っ込んで、プラントを見捨てていたくせに! あんたがいらないからあたしがプラントを鎮めるしかなかったんじゃない! 勇気づけるしかなかったんじゃない! 今のプラントの『ラクス』はあたしよ!」

す……と一瞬ラクスの表情が消える。ミーアの台詞を放置し、言葉を紡ぐ。

「……皆、己の良心に従い、為すべき事を為してください!」

一人の男 ミーアのマネージャーがすごい勢いで突進してくるの

がカメラに映る。

彼はナイフを持っている。

「あのナイフはどこから出てきたんだ！」

「その警備員が渡した！」

「取り押さえる！」

その指摘された警備員は抵抗する事も無く、ただ虚ろな目をしていった。

「いや！ やめて！」

ミアは抵抗するが男の力にはかなわない。マネージャーはミアの腕をしっかりとつかみ、そして口を開いた。

「なあ。もう良心がうずいて限界や。こいつ、ラクス・クラインの偽者やでー。今まで騙しててごめんなー」

どこか棒読みのようにマネージャーは虚ろな目をしてカメラに向かって言うと、抵抗するミアの首筋目掛けてナイフを滑らせる！

鮮血が飛び散り、ミアは崩れ落ちる。マネージャーも、次に自らの頸動脈に深々とそのナイフを突き刺し、崩れ落ちる。

……誰もが、硬直していた。

「は、早く放送を止めろ！」

誰かが叫ぶ。だが、係りの者は放心した様に、惨劇の起こった方向へ向こうともせず、動かない。カメラマンも、どこか魂の入っていない様子で惨劇の後を映し続ける。

いつの間にかラクスを映していた画面は消え、ただミアが血だまりに倒れている画面だけがただ映る。

……しばらく後、プラントチャンネルはようやく、河を客船が航行している環境画面に切り替わった。

第45話「不沈戦艦強奪作戦発動<5>

「な……これは……」

ジブリールは、ロゴスの皆は、モニターに映し出されたこの惨劇に息を呑んでいた。

「ジブリール！ 助けてくれ！」

ユーラシアの、ロゴスマンバーの一人 フランス、LVMHグループの会長、サノレコツが悲鳴を上げた。

「どうしたんです！？」

「軍が！ クーデター政府軍が屋敷を取り囲んで……！ 群衆も大勢！」

「なんだって！？ 手際が良過ぎる。デュランダルめ！ 用意していたか！ 西ユーラシアは危険だ。脱出できる者は早く脱出を！

まずブリュッセルへ移動してください！ すぐにファントムペインの一隊を差し向けます！」

「ジブリール、私の所には親地球連合側の政権軍が保護に来てくれた。閣僚らも一緒だと言う。私は彼らと行動を共にするよ」

ユーラシアのロゴスの一人が言った。

「そうですか。お氣をつけて！」

会合は否応なく散会になった。

「ミ、ミア……」

アスランは放心していた。

ミアが……腕を組んできたミア、朝起きたらベッドに寝ていたミア、キスをせがんだミア、明るく笑うミア、だけど、心の底では寂しそうだったミア。

それが……。誰が？ 何のために？ ミアが死んで誰が得をする

？ アスランの思考は怒りをエネルギーにして駆け巡った。

ラクスカ！

アスランは確信した。

それは、密林をでたらめに進んだら偶然出口に出たのと同じ事だったのかも知れない。

だが、アスランは遮る枝を切り開き、底なし沼を泳ぎ切り、真っ直ぐに正解にたどり着いていた。

天然の振りをして、心の底ではとんでもない事を考えていた女。使える人材に目をつけ、使えない人材は切り捨てていた女。あの劇場で、職務を果たそうとしただけの、ラクスを逮捕に来た警官達を皆殺しにして平然としていた女。2年も同じ国　オーブに住んでいたのに、いざと言う時の連絡先をミリアリアには教えておきながら自分には教えなかった女。結局自分を信頼などしていなかった女。それが、自分に好意を寄せてくれていたミアアを殺した！

アスランの顔が歪んだ。

「許さんぞ、ラクス……」

低い怨嗟の言葉がうつむいたアスランの喉から漏れた。

その言葉を聞いたのは、近くにいたレイだけだった。が、レイは何も言わずにただアスランを見つめていた。

「カガリ様。あれは……」

「タツキ。とうとう出てきたな。ラクス・クラインが」

「ええ。しかし、何と言う事件が起こってしまったのか！」

「……ラクスの差し金かも知れんな」

「ラクス・クラインの？」

「ああ、あれは冷酷な所のある女だ」

「しかし、デュランダル議長の演説、リッターグループやグロート家の名まで出すとは、何を考えているのでしょうか？」

「ああ、提示された者の中にはオーブと深い関わりのある者もいる。いや、オーブだけじゃない。彼等のグローバルカンパニーと関わりのない国などあるものか！ それをどうしようと言うんだデュランダル議長は！ タツキ、会見の用意をしてくれ。デュランダル議長に反論するぞ」

「はっ」

「マンネルヘイム大将、前へ」

その声に従い、マンネルヘイムは前へと進んだ。目の前の玉座にはスカンジナビア国王、カールが座る。彼はマンネルヘイムに元帥杖を手渡した。

「汝をスカンジナビア王国、国家元帥に任じる。祖国のために、力を尽くせ」

「ははっ」

「閣下、おめでとうございます」

「おめでとうございます！」

マンネルヘイムの部下達が、次々に祝いの言葉を掛ける。彼は鷹揚に手を振る。

「で、これからの行動はどう致しますか？」

「我が軍単独で、ドイツからスペインまで進軍し、親ザフトのクイーター軍を叩き潰す！」

なんとも素早い事である。

理由があつた。混乱の中、ユーラシアに台頭してきたプーチンと言う男が、スカンジナビア軍のちよつとした助力を得る事でユーラシア中部をまとめると言う手腕を見せたためである。

彼はスカンジナビアからの影響を受ける事を嫌い、スカンジナビア

軍の撤退を要請。中部ユーラシアに派遣されたスカンジナビア軍の兵力は速やかにデンマークへと移動した。

なおプーチンはその卓越した能力をもって中部ユーラシアを治めると、東部ユーラシアの混乱を鎮めに軍を派遣した。

「現地の、親地球連合軍と協力した方が損害は少ないのでは？」

「今回は、時間をかける事が出来ないと言う政治的判断が優先されているのだ。いったん動き出せば、ジブラルタルまで止まらんつもりだ」

「補給は？」

「それはさすがに現地の親地球連合軍が協力してくれる。でなければ一気に南進など出来ない」

マンネルヘイムと彼の幕僚は、一見今更な事を話しているように見える。だが、こうして漏れが無いかチェックしているのだ。

この問答は彼の司令部に到着するまで続いた。

「では、少し時間をもらうよ」

マンネルヘイムは言った。

「はっ」

マンネルヘイムは整然と整列した兵士達に向き直る。

「兵士諸君、今回の任務は自分の下の世話もまともに来らん地球連合の阿呆共の尻拭い。要は連中がオムツを穿き忘れてしまったらしいと言う事だ」

兵士達が笑い声を上げる。

「連中の締りの悪いケツから漏れた糞の滓を始末するなど私もしたくは無い。だが！ この戦には冬戦争で奪われた領土の奪還がかかっている！」

「「おお！」」

「諸君、私は戦争を、地獄のような戦争を望んでいる。諸君、私に付き従う戦友諸君。君達は一体何を望んでいる？ 更なる戦争を望むか？ 情け容赦のない糞のような戦争を望むか？ 鉄風雷火の限りを尽くし三千世界の鴉を殺す嵐のような戦争を望むか？」

「戦争！！ 戦争！！ 戦争！！」

兵士達は歓声を上げる。
「よろしい。ならば戦争だ！ 我々は満身の力をこめて 今まさに振り下ろさんとする握り拳だ。だがこの北の果てで二世紀もの間堪え続けてきた我々にただの戦争では もはや足りない！！ 大戦争を！！ 一心不乱の大戦争を！！ 我々を忘却の彼方へと追いやり眠りこけている連中を叩き起こそう。髪の毛をつかんで引きずり降ろし眼を開けさせ思い出させよう。連中に恐怖の味を思い出させてやる。連中に我々の軍靴の音を思い出させてやる。天と地のはざまには奴らの哲学では思いもよらない事があることを思い出させてやる」

スカンジナビア軍の兵士達は戦意を湛えて傾聴している。

「我等スカンジナビア軍で、親ザフトの糞蛆虫共を地獄へと叩き込んでやるぞ！！」

「おおー！！！！」

「スカンジナビア軍総司令官より全部隊へ。 目標、ジブラルタル！ 西ユーラシア奪回作戦、状況を開始せよ！ 征くぞ、諸君！」

この日、200万のスカンジナビア王国軍がデンマークからドイツに向かって南下を開始した。

「なんと言う事でしょう」

ラクスは顔を覆った。

「わたくしが顔を出さなければ、わたくしの偽者さんは無事でしたかも……」

「ラクス、ラクスが悪いんじゃない」

キラが、慰める。

「そうですね、ラクスさんが顔を出さなくてもああなっていたかもしれない。犯人は、良心に咎められていたって」
ダコスタも慰める。

バルトフェルドは、我関せずとコーヒーを啜っていた。
それに、ノイマンが小声で文句をつける。

「あなたも何か言わないと。他の者に不審を持たれます」

バルトフェルドは、ふん、と鼻で笑い、ラクスの方を向くとただ一言言った。

「ラクス、気にするな」

どうせ気にしちゃいないだろうが………と言うバルトフェルドの眩きは誰にも聞かれる事なく彼の口の中へ消えた。

「あ、アスランさんだ」

休憩室にアスランの姿を見つけ、マユが声を掛けようとするより一瞬早く、別の声が出た。

「アスラン！ インパルスの操縦なんですけど」

「うん？」

アスランとレイは熱心に話し出した。

「……マユ」

「へ？ ああ、ルナ」

「どうしたのよ、ぼーっとして」

「ん、最近、アスランさんに声がかげづらいなあって………いつもレイがくつついてさ」

「それだけレイはインパルスの習熟に一生懸命なんですよ？ あんたもセイバーの習熟頑張りなさいよ。私が教えてあげるから」

「へーい」

「なあ、レイ」

ひとしきりインパルスの操縦について話した後、アスランはレイに聞いた。

「フリーダムを倒す、いい方法は無いか？」

「……私が見た所、フリーダムは相手の武装、カメラ等を優先的に狙い、急所は狙って来ません。そこを狙えば……」

「あいつは、自分の命が掛かっているとすれば平気で急所を狙ってくるさ。クレタでの戦いは見たろう？」

吐き捨てる様にアスランは言った。

「しかし、あなたはインパルスでフリーダムを破った」

「インパルスの、分離できると言う特徴で、裏をかけたただけ。また同じ手を通じるとは思えん。それに、今はデステイニーだ」

アスランはそれなりにキラを評価していた。

「……そうですね。フリーダムのデータをしっかりと検証してみましようか。一緒に考えましよう、アスラン！」

「よう、帰ったぜ」

ジエスは救援キャンプにいるセトナに声をかけた。

「あ、ジエスさん」

「それから……」

ジエスは後ろに居たミリアリアを前に押し出す。

「ミリアリアってんだ。俺と同じジャーナリストさ。セトナを取材したいってさ。いいかい？」

「ええ……構いません」

返事はした物の、セトナはどこか心がここにあらずといった感じである。

「ジエスさん、この間のプラントのデュランダル議長の放送は見ましたか？」

「ああ」

「あの放送の後、ロゴスの方達が襲われていると言うのは本当なのでしょうか？」

「ああ、西ユーラシアじゃクーデターで親ザフト政権になっちまってるからなあ。そいつらが、襲っているようだ」

「……ジエスさん。頼みがあります！」

決意を込めた声でセトナは言った。

「地球の皆さん。私はセトナ・ウィンターズです」

セトナはカメラに向かって静かに話し始めた。

「皆さんはもう、過日のプラント評議会議長、デュランダル氏のテレビ演説をご覧になりました事と思います。私は、皆さんに伝えたい事があり、こうしてカメラの前に立ちました」

セトナは震えを押し殺しながら、しゃべった。

「（落ち着いて!）」

ミリアリアが、声を出さないようにしてセトナを励ます。セトナはそちらをチラツと見ると小さく頷き、言葉を続ける。

「ご存知でしょうか？ デュランダル氏に批判された現代の財閥にとって軍需がどれ位の比率であるか？」

画面が切り替わる。デュランダル氏によって晒されたロゴスを主とした財閥毎の収入における軍需の比率図が示される。

「ご覧の通り、軍需の比率はとてとても小さな物です。それはなぜか？ 確かに、軍需産業は発注者が国家そのものという事で、契約履行がほぼ安定しており、受注が得られれば民間企業としては経営が安定できます。現在の世界の多くの財閥や巨大企業がその繁栄期には戦争特需で急成長した時期があったように、戦争によって繁栄する部分もあります」

画面は再びセトナを映し出す。

「しかし！ 現代戦は国家財政を大きく消耗させてしまったため長期

的な需要とはなりづらいのです。逆に戦争終結で投資が無駄になることも多いのです。そんな物に、果たして誰が財閥の繁栄を賭けられる物でしょうか？ 更に。再構築戦争終結後は軍縮が進み兵器市場が縮小していました。先の戦役が起こらなければ、更に軍縮は進んでいたでしょう。皆さん。現代の企業家は全世界を巻き込んだ大戦争などと言う物を決して望みません。なぜなら現代の戦争は彼らの資産を徹底的に破壊し、良質な労働者と言う資源を戦争に取られてしまうのですから。資本主義の発達した現代、最も大きな消費は民需です。これを減退させる戦争は企業にとって悪夢に他なりません。実際に、皆さんの国の経済白書を見てください」

再び、画面に図表が映し出される。世界各国の歳出の図表だ。

「そこに、答えがあります。エイプリルフル・クライシスの被害、そしてヤキン・ドゥー工戦役による被害の復旧のために、却って各国の歳出に占める軍事費は削られているのです！」

画面はまたセトナの姿を映し出す。ここで、セトナは言葉を切り、きつとカメラを見据えた。

「私は、今、皆さんに告発いたします！ ギルバート・デュランダールこそが真実を捻じ曲げ、大衆を扇動しようとするアジテーターであると！」

セトナは、胸の前で両手を組んで、静かな口調に戻って言った。

「皆さん。私の言った事をすぐに皆、信じてくれとは言いません。

しかし、一時の感情に流される事無く、冷静な心できちんとしたソースを見て判断して欲しいのです。真実は何かを……」

「カット！」

声が響いた。

セトナは緊張の糸が切れた様に、ふらつく。ミリアリアはバスタオルを持ってセトナに駆け寄り、震えるセトナの体を包んだ。

「セトナさん、頑張った！ よくやった！」

ジエスも駆け寄る。

「よかったぜ！ セトナ！ お前さんの言いたい事は、きつとみんな

なに伝わる!」

セトナはようやく安心したようにふっと二人に微笑んだ。

セトナの放送の効果は果たしてどれくらいの影響を世界に与えただろうか。確かな事は、同日、ドイツのベルリンに親地球連合の政権が復活し、親ザフトの軍はベルリンを追われた事である。

デンマークから一気にドイツに攻め込んだスカンジナビア軍は、即日の内にハンブルグに進駐した。

「まずは、幸先よしか」

ドイツの人口第二位の都市に軽く進駐できた事に幕僚は気をよくする。

「相手を甘く見るなよ。ベルリンの政権から追われたただけだ」

スカンジナビア軍のドイツ侵入と呼応してか、ベルリンには親地球連合の政権が復活していた。

ハンブルグの市民はそれを歓迎して、またスカンジナビア軍を歓迎して迎え入れた物だった。

「で、敵は今どこか?」

「ザールラント州、ザールブリュッケンに本拠を移したようです」

「そりゃまた……ずいぶんと逃げたな。フランスとの国境近いじゃないか」

「ブリュッセル　ベルギー方面からの攻撃も恐れての事と思われ
ます」

「フランスへの脱出も考えに入れてるか。良い街道がパリまで通っていますから」

「うん」

マンネルヘイムはうなづいた。

「後の処理は、ベルリンの政府にやらせよう。準備が出来次第、親ザフト軍をドイツから追い出す！」

「あ、アスラン！」

ルナマリアは部屋から出てきたアスランにちょうど出会った。

「ああ、ルナ」

「その、最近、すごく頑張ってるようだけど大丈夫？」

「ああ、気力は充実している」

アスランは笑った。

「色々、アスランと話したいなって思っ。その、ラクス様の事とか」

「ラクス……」

アスランは目を閉じると上を向いた。

「やっぱり、偽者だったんでしょうか？ デイオキアに来てたりした、あの……」

「知ってたさ」

アスランは言った。

「え？」

「知ってたさ。あのラクスが本物じゃない事くらい。当たり前だろう」

「あ、そうですね。アスランですもんね」

「だが、君は本物だから正しく、偽者だから間違っているとか言うつもりか？」

「え、いえ……」

「ミーアと言ったんだ。あの娘は……。プラントのために必死で頑張っていた。今のプラントにとってミーアがラクスだったんだ。贗者なんかじゃない。誰が否定しようと、俺だけはそれを認めてやる。俺は……ラクス・クラインを許さない」

低い声でアスランは言った。

「え？」

「俺は……それでいい」

そう言うとアスランは歩き去って行った。

ルナマリアは心配そうな瞳でその後姿を見送った。

その少し横、少し開いた扉を隔てた部屋の中で、レイは、椅子に座り俯いていた。膝に置かれた手にぼたぼたと涙が零れ落ちた。

第46話「不沈戦艦強奪作戦発動<6>

ザールブリュッケン

「もぬけの殻か」

「親ザフト軍は、既にフランス国内に脱出したとの事です。メス（metz）にかなりの規模の部隊を確認」

「ようし、メスへ進出する！」

メス前方にはドイツとフランスの親ザフト軍が共同で陣を張っていた。

戦いはスカンジナビアのサープ50グリペン多目的戦闘機が突撃する事で始まった。

グリペンは親ザフト軍のウイングダムらとともに戦おうとせず、その高速を生かして突破、地上部隊を爆撃した。

その攻撃は5波にも及んだ。祖国防衛のため、シエルターの様に整備が十分にできない場所でも整備ができるように、高い整備性を実現した、いいグリペンならではの成せる技、である。

ウイングダムが補給のために地上に降りた所に、スカンジナビア王国がオーブからライセンス生産をしていたムラサメが襲来、更に親ザフト軍は損害を受けた。

親ザフト軍バゼーヌ司令官は、メスに撤退し、救援を待つ。

スカンジナビア軍は第1軍及び第2軍でこれを包囲。

「元帥！ シャロンの地にて敵軍が集結中との情報が入りました！」

「うむ。第1軍及び第2軍はメスの包囲を続ける！ ワシは第3軍

を率いて敵軍の終結が完了しない内に、叩く！」

マンネルヘイムは第3軍を以ってシャロンの地の親ザフト軍を急襲した。損害を受けた親ザフト軍はセダンに撤退、補給と兵士の休息をさせた。

スカンジナビア軍第3軍は後を追いつセダンに到着。親ザフト軍はこれを確認するも、軍の消耗のために直ちに撤退することはできなかった。

翌日、Strv222リニアガンタンクを主力とするスカンジナビア軍3個装甲師団が到着。セダンでムーズ川渡河作戦を開始、グリペン、ムラサメによる激しい支援爆撃の下に橋頭堡を確保し、1個装甲師団が渡河に成功した。以後、ムーズ川各所で残りの装甲師団も渡河に成功し、マンネルヘイムはセダンを包囲する事に成功する。親ザフト軍は包囲を突破する努力を続けたが、司令官のマクマオン将軍が負傷し、兵員も多数負傷したため、ついに降伏するに至った。

フランス国内の親ザフト軍は壊滅したかに思えた。だが、パリの親ザフト政権軍はなおも抵抗を続ける。

「なんだと？ パリで奴らに捕まったロゴスの幹部と……」

「ええ、親地球連合派のクレマン・トマ将軍と、ルコント将軍も共に銃殺されたそうです」

「何考えてやがる」

「自棄になっただか」

「パリ第19区や20区の奴らが蜂起しました！ サンテ刑務所を襲撃！ フルーランスやアンベールと言った札付きの政治犯を釈放いや、開放しています」

翌日、パリ市庁舎に赤旗が立つ。親ザフト政権と共産主義者の醜悪な合体であった。

「姉さん……」

セトナのテレビ放映を見てアグニスは呟いた。

あんな必死な姉は、はじめて見る。

地球で、大切な人が、守りたい人がたくさん出来たんだな……

アグニスは少し寂しさを覚えた。

スカンジナビア王国、アレクサンドラ王妃はアグニスに話しかけた。

「あなたのお姉さまは立派ね。しっかりしていらっしやる」

「ありがとうございます。そう言われると私も嬉しくなります」

「ほんとに、こう二人の演説を並べてみると、プラントのデュラン

ダル議長の主張が無茶苦茶だと言う事がわかってしまっわねえ」

アレクサンドラは溜息をついた。

「どうして、デュランダル議長はあんな事を言ったのかしら？」

「……しかし、スカンジナビア王国まで戦争に介入するとは思いま

せんでした。これで仲裁する者がいなくなってしまう」

「ほほほ」

アレクサンドラは笑った。

「頭に剣を突きつけられて、気にせず眠れる者が居りますか？ そ

うした場合、対処は二つだけ。お分かり？」

「いえ……」

「こちらも相手に剣を突きつけて、いざと言う時は道連れだと宣言

する。……残念ながらこれはユニウス7落下で無意味になってしま

ったわ。残るは、力づくで自分に突きつけられた剣を振り払うだけ

よ」

「残念です」

「私も残念。まあ、大西洋連邦は最低でもプラント住民を地上に移

住させるつもりらしいわ。わが国もそれに協力してプラント住民の受け入れの用意はしているわ。それより……」

アレクサンドラは言った。
「オーブのアス八代表も、デュランダル議長に反対する声明を出したわ」

「……！ それは、文章だけではなく、実際に姿を現して、ですか？」

ナーエが驚きの声を出した。

「ええ、後で見るといいわ。録画してあるから」

「お前達、どうする？」

アグニスはガルト・デル・ホク八達に尋ねた。

「そうですね。アス八代表が見つかったとなると、いったん、我らはオーブに帰るべきかもしれません」

「そうですね。いったん、帰りましょうか？」

サース・セム・イーリアも答えた。

「そうそう、アグニス、あなた、キラ・ヤマトの事を話していたわね。先日オーブからこんな手配書が回ってきたのよ」

アレクサンドラは、アグニスに書類を手渡した。

「……これは！ アークエンジェルとキラ・ヤマトの手配書！？

署名はアス八代表！」

「アス八代表は、まっすぐで、それでいて統治者としての伸びしろを感じさせる、いい子だったわ。一体キラ・ヤマトは何をしたのかしらねえ？」

アレクサンドラはため息をついた。

「ええ。アス八代表については私もそう思いました。……状況を知らるべきです、アグニス。オーブに向かいましょうか？」

「そうだな、ナーエ」

「そう言う事なら、私はワシントンに連絡を取ってパナマ運河使用許可を取っておきましょう」

「ああ、頼む。まほりん」

「はいっ！」

井沢真秀はすっかりアキダリアの皆と打ち解けていた。

バチカン

「課長殿！ フランスで独・仏連合親ザフト軍が大敗したそうです」
法王庁特務局第13課、バチカンの表に出ない荒事を取り仕切るそれ
通称『特務機関イスカリオテ』の課員がアンデルセン神父に
駆け寄ってきた。

「結構なコトじゃないですか？ 独逸のプロテスタント共がたくさん死んだんでしょ？」

「あ、はあ」

「もし主を愛さない者があれば、呪われよ。マラナ・タ。エイメン！ さあ、フランスに巢食う、神を否定する背徳者共に神罰を喰らわすのです！」

「それから、各地の騎士団が参集してきています。……彼らの前では司教と呼んだ方がいいですかね？」

そう、実はアンデルセン神父は『特務機関イスカリオテ』を率いる司教だったのだ！

「いいですよ、いつもどおりで」

アンデルセン神父は課員に笑った。

「エイメン！ エイメン！」

「クールランテ剣の友修道騎士会総勢340名参陣！」

「聖ステパノ騎士団トスカナ軍団総勢257名参陣！」

「マルタ騎士団総勢2457名参陣！」

「ジェダイ騎士団総勢108名参陣！」

カラトラバ・ラ・ヌエバ騎士団はスペインが内戦状態のため来てい

ない。

集った騎士団はアンデルセン神父に膝まづいた。

「教皇聖下の御命により我ら参陣致しました。我らの参陣と共にアンデルセン司教はアンデルセン大司教とされます」

「我ら軍団は第9次十字軍を編成。総指揮権をアンデルセン大司教猊下に委ねます！」

「AMEN。全身全霊でお受けする」

アンデルセンは答えた。

「目標はフランス、死都パリ！ 熱狂的再征服を発動する！ コミ

ーどもを滅ぼせ！」

「エイメン！」

「エイメン！」

「全軍進撃！ 神罰の地上代行の時来たれり！！」

バチカンは動き出した。

「ええい！ 何者だ！ あのセトナ・ウィントースと言う娘は！」

デュランダル議長は怒鳴った。

「幸いにして、地球向け放送であるので。プラントで見る者は少ないでしょう」

評議会議員が言った。

「しかし、先の議長のテレビ会見の時の事件について、市民からの問い合わせが殺到しております。如何致しますか？」

「む……」

デュランダルはしばらく黙り込んだ。そして、晴れ晴れとした顔になっ

て言った。「私が自ら説明しよう。会見の準備をしてくれ」

しばらく後、デュランダルはカメラの前で全てを語った。ラクスの偽者を立てた事について総ての事実を包み隠さず語った自身の影響力の不足を補うために、ミアと言う少女をラクス・クラインとして登場させ、プラントの統治のため、政治的に利用したと……

それをよく思わない勢力のために、ミアが狙われた事、周囲の者に、正体不明の薬物の使用の痕跡が見られる事、精神操作の形跡が見られる事、下手人のミアのマネージャーは死亡した事、ミアは未だ生死の狭間にある事。

今回の事態を招いてしまった自身の愚かさをいつそ清々しいと感じるほど率直に語り、その非を詫びた。

プラントを統べる評議会議長が、プラント全市民に対し、己の非を認め、その頭を深く下げて許しを請うた……

この衝撃的な映像は数えきれないほど繰り返し報道され、今までプラント一般市民からは天才肌の、完全無欠の政治家とも錯覚されていたデュランダルが過ちも犯す等身大の人間であると、広く民衆に伝えることとなる。

こうなると、不思議なものでデュランダルを批判していた者達からも

『政治家は清濁併せ呑まなければならない』

『清廉潔白のみによって国は治まらぬ』

などとデュランダル擁護の意見が沸き起こる。

また、ミアに対しては一日も早い回復をと圧倒的な同情が寄せられた。

「ははは……」

「議長？」

秘書が訝しそうにデュランダルを見る。

「いや、自嘲していたのだよ。結局、自分の力を一番信じていなかったのは自分だったと言う訳だ。なんともはや」

「調子に乗ると、また失敗しますよ？」

「はつきり言う。気に入らん」

「どうも。気休めかもしれませんが、私は議長は補佐のし甲斐があると思つてますよ」

「ありがとう。しかし、サイオキシン麻薬か！ どの誰が？」

「サイオキシン麻薬ともなれば、地球連合も撲滅に躍起になるはず。刑罰も重い。個人ではなかなかできますまい。裏にそれなりの組織がいるものと」

「大洋州に使用している分が流出したのではないか？」

「可能性はあります」

「大洋州の警戒を厳にしろ、一層な。裏にザフトがいる事を悟らなくてはならん」

「はっ」

「……しかし、ミアには気の毒な事をしたな」

「未だICUだそうですね」

「ああ……。なんとか助かってくれればいいが……」

部屋の通話機のベルが鳴った。秘書が出た。

……秘書は、デュランダルを見ると、首を振った。

ミア・キャンベル死亡の知らせだった。

「なんだと！？」

「馬鹿な！」

「ありえん!?」

宇宙 アメノミハシラ近辺ではある実験が行われていた。試作されたある新装甲に対する実験である。

イズモ級の主砲225cm2連装高エネルギー収束火線砲「ゴットフリートMK・71」が確かに直撃したはずなのだが……その装甲は、原型を留めて其処に在った。

「物理的な力に対する耐性もPS装甲をはるかに凌駕する。おまけに電磁波に対してのステルス能力もある、か……」

「弟よ。ゴールドフレームだが。PS装甲&ミラージュコロイドと、あの新装甲どちらを取る?」

「決まっている! あの装甲だ!」

「ふふ。そう言うと思った。生産した装甲は優先的に廻そう。とは言え、まあ、せいぜい作れるのは2・3機分か。……にしても」

「ミナは考え込んだ。」
「こんな研究が行われていた形跡など、宇宙のどこにも、プラントにも宇宙樹にも、DSSDにもなかった。まるで突然この世界に現れたかのようだ。あの数多くのモビルアーマー、モビルスーツの設計図もだ。ウナト、お前は一体どこからこんなデータを手に入れたと言っただ? ウナト、お前は一体何者だったのだ?」

「援軍、出さざるを得ないか?」

ジブラルタルでは深刻な会議が開かれていた。空気が重々しい。

「ああ、各地の親ザフト政権が悲鳴を上げてザフトに泣き付いてくる」

「計画的に敗退するにしてもだ。このままでは一気に壊走になりかねん」

「ミネルバに行つて貰うか?」

「あの艦にはさっさと宇宙に行ってもらいたいのだがな。本国を固めてもらわねば」

「やむを得ん。ジブラルタルに余裕は無い」

こうして、ミネルバにユーラシア西部への派遣が命じられた。まず目指すはパリ。

だが、ミネルバがパリに着く事は永遠になかった

第47話「不沈戦艦強奪作戦発動<7>

「結局、パリはどうなつとるんだ？」

「パリの24の新聞は現在の政権に反対しています」

「騒いでるのは、19区と20区。外国人と貧しい者だけです」

「……では、無差別爆撃と言う訳には行かんか」

「後が怖いすな」

マンネルヘイムの司令部は頭を抱えていた。

親ザフト軍はパリの市民を露骨に人質に使っていた。

聖職者が監獄に収容された、と言う話を聞いた時は、誰しも嫌な気分になった。

共産主義者が宗教を敵視する事は予想されていたが、それが現実となると衝撃は大きかった。

「……ヴァンドーム広場の円柱が、引き倒されたそうです。帝政を象徴するからと言う理由で」

マンネルヘイムは顔をしかめた。

「良き伝統も、宗教も、連中は批判し弾圧するのだろう。そんな奴らは一人残らずこの世から抹殺せねば」

マンネルヘイムは胸の前で十字を切った。

このままでは凱旋門さえも破壊されてしまつかもしれない。

誰もが民間人に被害の及ぶ、悲惨な市街戦を覚悟した。

だが……その心配は杞憂に終わる。

偵察のためにパリの下水道から潜入したスカンジナビア兵が見たのは、あちこちに倒れている死体だった。

そう、クーデター政権に参加した者すべて　もちろん第19、2

0区の愚かにもクーデターに同調した者達も含め　が、女子供も、有象無象の区別無く、打ち倒され、血を流しゴミのように放り出されていた。

一体何者と戦ったのか、ぼろぼろに破壊されたモビルスーツがそこ

かしこで煙を上げている。

そして、親ザフト政権が立てこもっていたエリゼ宮では首班のエドワール・モローや共産主義者のリーダー、ヴァルランが体中を銃剣に貫かれて亡くなっていた。

近くにいた住人に聞いて見ると、つい先日の夜中、大量のヘリコプターがやって来、クーデター政権が保持する区画に次々と降下し、戦いの音が、絶え間ない悲鳴が続き、一夜にしてパリを支配していた賊徒は駆逐されたと言うのである。

この知らせを聞き、スカンジナビア軍はパリに入城した。

その少し前

「なにが、何が起こったんだ！」

セダンでの味方大敗の報を聞き、詰問に訪れたオルレアンの地区委員を出迎えたのは、昨日まで親しく会話を交わっていた者達の屍の山だった。

「……………くっ」

彼は踵を返した。

「何があつたので？」

部下が呼びかけてくる。

「うるさい！ ……いや、伝令を出せ。私はトゥールまで下がるとな。ルーアン、カーン、ナント、レンヌ、ル・マンの各地区に頼む。」

「アミアンはいかが致しますか？」

アミアンは、ブリュッセルのあるベルギーに対抗するため比較的有力な部隊が張り付いていた。

「ああ、一応出しておいてくれ。それからザフトに救援要請を。強くだ。もし受け入れられない場合には、我ら、ザフトの非道を世界に説いて地球連合に降伏してやる、とな！」

「何が、起こったんだ？」

奇しくも同じ台詞を、パリに入城したスカンジナビア軍もパリ市民に尋ねた。

「賊徒に監禁されていた聖職者達を連れてきました」

「おお、よくぞご無事で。賊徒はあなた方を殺害すると言う噂も流れておりましたでな、焦りました」

「ふふふ」

聖職者達はマンネルヘイムに微笑んだ。

「神の、ご加護があつたのですよ」

「神の、ご加護？」

「そう。神のご加護です。あの夜、パリに天使が舞い降りたのです」

「十字軍が発動されたのですよ」

「聖戦です」

にこにこ微笑む聖職者達に、マンネルヘイムはさっぱり分からんと言つように首をひねった。

第9次十字軍は任務を終えて早くも帰還の途にあつた。

「大司教様」

「普段どおり呼んでよいですよ、アナキン」

「はい。アンデルセン神父。スカンジナビアもプロテスタント異教徒でしょう？ なぜ、パリでは異教徒同士殺しあうままにしておかなかつたのですか？ わざわざ十字軍まで出すなんて……」

「それは、パリの異教徒どもが無神論者のコミーどもと手を組んだからですよ。異教徒でも、心ある人々は神への道に近い所にいます。神への畏れを抱いているのです。それは道こそ遠いものの正道へと

通じるものです。ですが！ コミの糞つたれの赤どもは違います！ 神への畏れなど毛頭無い！ 現にパリの聖職者を収監して殺害しようとしたじゃありませんか！ 彼らを救うためにも急がねばならなかったのです。エイメン！」

「あっという間にここまで追いやられるとはね」

「いや、まったく。弱いと言うか……」

「彼らの前でそれはだめよ？ アーサー？」

「は、はい！」

ミネルバはトウルでフランス残余の親ザフト軍と合流した。

「これで、全部、と言う訳かしら？」

「ええ、まあ。フランス東南部の軍がありますが……彼らは地球連合派でして」

「とりあえず、まあまあの戦力と言ってもよさそうね。スカンジナビアと戦って、一当たり位はできそう」

ここには、アミアンの部隊も参集していた。だが、アミアンを放棄した代わり、フランス北部は完全に親地球連合派の支配する所となっていた。

「しかし、ミネルバ一艦だけとは。これでは敗北しろと言うも同全ではないか」

ナントの地区委員が吐き捨てるように言う。

タリアはそれに不快を感じながら言った。

「我々は、負けに来たものではありません。私の策に従ってくれば勝てます！」

「ふーん。スカンジナビア王国軍、ドイツを解放、旬日を待たずしてパリ開放かあ」

シヤムスが休憩室のテレビを見ながら呟いた。

「おお、なかなかやるのう」

原田が、効果こそ元となった。グリフェプタンに比べごくわずかになってしまったものの、副作用を完全に解消し子供でも飲めるようになった栄養ドリンク『元気一発！グリフェプタン1000』をぐびつと飲む。

「なかなか、やるなじゃい。スカンジナビアも。ただ中立唱えて布団に潜り込んでいただけじゃないのね」

ミューディーも感心したように言う。

「おはよう諸君」

スウエンが休憩室に入ってきた。両手に何か持っている。

「お、出来たのか？」

「ああ、その他の衣服は別室でスタイリストが待っている」

スウエンは手にしていた物を広げた。Ｔシャツだ。アースグリーン
の地にスカイブルーの地球が浮かんでいる。そこに『ブルーコスモス』と言うロゴが浮かぶ。

「ふーん、なかなかいいじゃない」

ミューディーは手に取った。そして服を脱ぎ出す。

「わ、馬鹿！ ミューデー！ ここで脱ぐな！」

「きやはは、だーいじょうぶだって！ どうせ見せブラだからあ
ミューディーはさっさと着替えてしまった。

「どっつ？」

Ｔシャツを着たミューディーはくるりと回った。

「ああ、似合っている」

「なかなかいいな」

ミラーと原田が言う。

「シラクザ近辺に着きました。皆さんご用意お願いしまーす！」
部屋の外から声がかかった。

「おおう、しかし、俺がスタイリストにかかるとは。恥ずかしいの
う」

原田はあわてて部屋を出て行った。後の皆も続く。

「はい、もつと笑ってー。ミューディーちゃん、いいよいいよー」

「こそばゆいなあ、ミューディーちゃんなんて」

ミューディーは照れて顔を赤らめる。

「その照れた顔もグッド！ いただき！」

「もつ」

「ほら、ふくれつつらしていいのい？ いいの？ 笑う顔が君の

魅力だよ？ そう！ いい感じ！」

カメラマンの言葉に、ミューディーはどんどん魅力的になっていく。
ちなみに、今日の化粧はおとなしめだ。

「シヤムス！ そろそろ混じれ」

シヤムスの背が押される。

シヤムスはミューディーと手を繋ぎ、カメラに向かってウインクし
てみせる。

何枚かシヤムスとミューディーの写真が撮られる。

すぐにスウェン達も混じり、最後はミューディーを真ん中にしたカ
ットで終わった。

余談だが、カメラマンは男のイタリア人だけあって、ミューディー
一人に注いだ時間の方がはるかに長かったのである。

「はい、お疲れ様でしたー」

こうして世界遺産『シラクザとパンターリカの断崖の墳墓群』で

の撮影は終わった。

「次は、『ヴァル・ディ・ノートの後期バロック様式の町々』か」

「ああ、『アグリジエントの遺跡地域』までは車で行く予定だな」

「へっへっへー。どうだった？」

「ミューディーがやってきた。」

「ああ。見惚れた」

「ああ。見直したぞ」

「またまたー」

「ミューディーはシャムスの背中をバシッと叩く。」

「っ！ 本気で痛いよ！ お前！」

ふっつとスウェンが笑う。

「ミューディーの奴、照れてやがる」

「しかし、いいのか？ こんなにのんびりして？ まるで観光旅行だけ。写真まで撮って」

「時間調整だそうさ。ジブラルタルはできるだけスカンジナビア軍と同時に攻めるとき。映像は、宣伝で使われるそうさ。地球を守るファントムペイン！ ってな感じで」

「そう言えば。今日回ったのシチリアの南岸だけだな」

ふとミラーが気づいたように言った。

スウェンは顔を曇らせた。

「北岸のティレニア海にはユニウス7の破片が落ちてな。壊滅状態だそうさ。世界遺産の『エオリア諸島』も……」

「そうか……」

「ふあゝあ」

エジプト・カイロにある武器屋の店長はあくびをした。事故なのか生まれつきなのか。片脚がない。義足だ。

ふいに、その右脚がない体が緊張する。

「だ、誰だ……いやあ、あんたか」

店に入ってきたのは以前、武器を売った相手だった。

奇妙な相手だった。100発の弾丸が入った入れ物を80発まで試し、20発の残りを持って行ったが、その腕前と言ったらもう、1点に80発撃ち込み、まるで一発しか命中してないように見えた物だった。

「一体どうしたんで？」

店長は探るように問いかける。

「……お前が入れた不発弾、どこでどう言う役目を果たしたか……知りたくないか？」

「えー？」

店長はぎくりとした。

「い、いまなんとおっしゃいました？」

「100分の1の好奇心の結果を知りたくはないか……と言ってるんだ！」

「さ、さあ……旦那が、いったいなんの事をおっしゃってるのか、あっしにはさっぱり……」

「……」

男は無言で店長を見つめ続ける。

「……」

店長は、蛇に睨まれた蛙のようになった。

「聞きたくないんだな……」

ふ……と男は視線を外し、立ち去ろうとする。

「ま、まっってください、旦那！」

店長は土下座した。

「だ、だんなっ も、申し訳ございません！ つ、つい出来心で！ やっちまっただんでさー！」

男は立ち止まり振り向き、店長をじつと見つめる。

「い、一流と呼ばれるプロにちよいと小石を投げて見たくなっただんでさ……そ、そう思ったら……つい、この手が……100発の中に

「1発の不発弾を……」

「……」

「し、しかし旦那、どうしてあつしの事を……」

「不発弾が故意に入れられた可能性を当たっていった。最後に残ったのが、元プロで、まだ現役に興味のある……おまえだ！」

「うっ！！」

「最初にお前の目を見た時に、それはわかっていた」

「そ、そうですかい。何もかもお見通しだったんですかい。その通りでさ……あつしも、元はプロの端くれに数えられていた男なんです……この脚をちよいとしたりミスでもぎとられるまではね！……そ、それで……あの不発弾はどう言うシーンに登場したのです！？」

お、教えてくださいさ！ 旦那！？」

「……おまえの期待していた以上のシーンに登場したよ……」

店長の目は歓喜に輝いた。

「えっへへ執念でさ！ これこそ執念でさ！」

「……」

男は無言で銃に消音器を付けた。

店長の顔が恐怖に染まる。

「お前も元プロだ……その結果が、どう言うシーンを作り出すかはわかっていたろうな……」

「も、もとプロと言っても、あつしはこの通り片脚の哀れな年寄りなんですよ……お、おねげだ！ かんべんしておくんない！」

命だけは助けておくんないよ、旦那！」

「……」

「だ、だんなのおっしゃることなら、なんでもします！ 靴を舐めるとおっしゃるなら、よろこんで舐めます……」

店長はそう言つと、男の靴に口づけた。

「股をくぐれとおっしゃるなら、喜んでくぐります！ だんな！

こ、こんなあつしを……哀れなあつしを撃てるんですかい……だんな……」

男は無言で狙いを付ける。

「だんな……」

！

店長はよろよろと後ずさり、倒れる。胸には血のシミができていた。

「う、撃ちやしたね、だんな……こ、こんなあつしを撃ちやしたね

……」

「……」

男は無言で店長を見下ろしている。

「へへへ……」

店長の頭が、ずるつと床に付く。

「だ、だんなはやっぱり……あ……あつしの見込んだ通り……超……

…一流のプロフェッショ……」

店長は息絶えた。男はそれを見届けると、何もなかったかのような堂々とした態度で店を後にした。

「つまり？」

「街道を、指示した場所に陣地構築して下さい。戦闘開始後は各自知略の限りを尽くして、敵が固まるようにしながらゆるりと後退して下さい」

タリアはユーラシア西部の親ザフト軍に説明した。

「それだけで、いいのか？」

「ええ。河を渡れば、橋も落としてくださって結構！ 後はミネルバがやります！」

「セトナ！」

「お兄様！？」

セトナは信じ難い物を見た。

兄の、ジブリールが駆け寄ってくる。

セトナはふわりとジブリールの腕に包まれた。

「心配、したのだぞ。ドイツが親ザフト政権になった時は、お前と連絡が取れなくなってどうしようと思った……！」

「お兄様……うふ」

二人がひとしきり抱き合った所で声がかげられた。

「あのー、すみません」

「あ、ああ、何かな？」

名残惜しそうにジブリールはセトナから身を離す。

「俺、ジェス・リブルって言います！ フォトジャーナリストです

！ セトナさんの取材をさせてもらっています！」

「ふふ。力が入っているな。楽にしてもらっていいぞ？」

ジブリールは微笑んだ。

足元で猫のブーツとスキピオがじゃれあっている。

「ふふ。こいつらも久しぶりに会って嬉しいのだろう」

ジブリールはブーツの背を撫でる。

「いやあ。楽に、って言ってもらうと助かるわ。何しろロゴスの偉人だつて言うから緊張しちゃって」

「セトナが取材を許可したのだろう？ セトナの人を見る目は信用している。だから君も信用できる人物なのだろう」

「あ、あのー！」

ミリアリアが声をかけた。

「私もジャーナリストなんです！ 取材させてもらっていいですか？」

「いいとも」

ジブリールはミリアリアに向かって鷹揚に微笑んだ。

「……つまり、今回、そして前回の戦役は、昔からある植民地の独

立運動ではない。理事国が建設したプラント（工場）を占拠したテロリストに対する、つまりテロとの戦い、と言った側面の方が強いでしょう」

「では、プラントとの和平はありえないと？」

ジブリールへのインタビュウはもっぱらミリアリアが話し、ジェスは写真を撮る事に徹した。

「我々が望む物は、プラントで働くごく普通の労働者です。現在プラントに居住する者達は、自らその範疇から外れてしまった。ユニウスは彼らに思い入れがある地だと言う事で、彼らの管理に委ねたが、結果はご存知の通りです。彼らは施設の管理能力の欠如も露呈してしまった。要するに地球の人々の彼らへの信頼は回復不可能なほどに失われてしまっているのです」

「では、このままどこまでも戦いを続けるかと？」

「いや、戦いの拡大は我らも望みません。彼らにプラントから退去してもらえらるならばそれでよい。彼らにプラント（工場）での労働者としての資格がなかった、と言うだけの話ですので。現在のプラント住民の地球への移住計画も進めております。生活の面倒はプラントを離れてもきちんと見ますよ」

「地球上では、コーディネーターが不利益な扱いを受けるのでは？」

「そう、プラント住人、では無くコーディネーターとあなたも言います。ですが、それは間違いです。先の戦役では一部の先鋭化した者達が、単に理事国とプラントを占拠したテロリストとの争いに過ぎなかつた些細な事を、ナチュラルとコーディネーターの争いにすり替えてしまいました。それが、戦争が拡大した原因です」

「現在は、違うと？」

「ええ。実際に調べてみてください。確かに新しいコーディネーターの作出は禁止されております。ですが、すでに存在するコーディネーターに関しては、地球軍、あるいはそれ以外の職場に、かなりの地位に地球を愛するコーディネーターがそれなりの数で存在し、その能力にふさわしい敬意を示されております」

「先日の、プラントのデュランダル議長の演説については何か？」
ジブリールはあふれてくる涙を抑えるかのように目頭を押さえた。
「……残念ながら、ギルバート・デュランダル氏、彼に扇動された者によって、犠牲者が出てしまいました。LVMHグループの会長、サノレコツ氏が先日、パリで暴徒によって殺害されたそうです。痛ましい事です。デュランダル議長の論説への反論は、先日のセトナ・ウインタース嬢の会見を見てもらった方がいいでしょう。あれは非常によくまとまっています。ロゴスと名指しされたものを始めとする財閥は、現在行われているような戦争を望みません。一刻も早い解決を望んでいるのです」
「では、ロード・ジブリールさん、長時間に渡り、ありがとうございます
いました」

「ふう、疲れたあ」

「お疲れさん！」

「では、私は次があるので失礼するよ」

ジブリールはスキピオを抱き上げる。

「気をつけてね、お兄様」

「ジブリールさん、ありがとうございました！」

ミリアリアも挨拶をする。

「ふ。良いジャーナリストになるのだな」

「あ、そう言えばジブリールさん。今更ですがイタリアへは何の用事で来られたのですか？」

「え……何の、用事……」

ジブリールは珍しく口ごもった。

「もしかして！ セトナさんに会うためにわざわざ！？」

ミリアリアがわくわくした口調で尋ねる。

「あは。あはは。あははは……」

照れ笑いながらジブリールはへりに乗り込み去って行った。

「初めて会った時怖かったけど……普通の人ね」

「ああ。財閥のトップって言えばもっとエラーソーにしてるかと思っ
たが」

「ふふ。私の自慢のお兄様よ！」

セトナは胸を張った。

事による計画の変更、よろしくお願いします」

「ああ、わかっているよ。だが、オーブはもうあてにしない方がいいかもな」

バルトフェルドはため息をついた。

「所詮ザフトにも劣るオーブ軍なぞ元々頼りにしていませんわ。ただ、国からのバックアップを得られる体制が取れなくなると言うだけの事。それならいつそプラントを手中に収める方法を進めましょう。大洋州からの、例の物の手配は？」

「進んでいる。十分な。世界を2回は滅ぼせる」

「そう。ならよいのです。私は世界の物、世界は私の物」

呪文のようにラクスはつぶやいた。

親ザフト軍がトゥールを放棄　その報に接したマンネル Heim は機を逃さず追撃をする事に決定した。

戦いの様相は今までと違った。親ザフト軍はユーロファイタータイプーンを大量投入し、グリペンに対抗。スカンジナビア軍に制空権を取らせなかったのである。

戦いの主役は地上に移る。ポワティエの手前20kmの平原で両軍は遭遇。リニアガンタンク、そしてランチャーストライカーを装備したウインダム、ダガーが320mm超高インパルス砲『アグニ』を互いに撃ち合う。

親ザフト軍はじりじりと押され、ついにスカンジナビア軍はゆるやかな坂の頂上を占位する。

後は下方の親ザフト軍に向けてひたすら撃ち下ろし、斜面を下って突撃するだけである。

マンネル Heim は勝った　と思った。

「今よ！ ミネルバ、上昇！」

ロワール川の支流に身を潜めていたミネルバが姿を現す！

「……もう少し……そこ！ タンホイザー、発射！」

「タンホイザー、てえー！」

タリアの指示と同時にアーサーが叫んだ。

チエン・ジェン・イーがタンホイザーを発射する！

タンホイザーの射線は親ザフト軍を下に、斜面の頂上のスカンジナビア軍を一掃した。

「タンホイザー、エネルギー再充填急いで！ 『バルジファル』 発射！」

「はい！ タンホイザー、エネルギー再充填！ 『バルジファル』 発射！ 目標スカンジナビア軍中央！」

タリアの命令では省略されていた部分を補い、アーサーが指示する。彼もやる時はやるのだ。

地上用ミサイル『バルジファル』が混乱するスカンジナビア軍を襲う。

ミネルバは更に上昇する。

「タンホイザー、エネルギー充填完了！」

「マリク！ 俯角を取って！」

「了解！」

ミネルバがスカンジナビア軍を見下ろす形になる。

「タンホイザー、発射！」

「タンホイザー、てえー！」

再び、タンホイザーの光が街道上のスカンジナビア軍をなぎ払う

「……残存スカンジナビア軍、撤退を開始しました。友軍、橋を落とす、河向うの陣地に撤退完了！」

「ふう。なんとかなったようね」

「ええ、これでスカンジナビア軍の侵攻も一先ず止まるでしょう」

「あくまで一時の事でしょうけどね」

「それにしても、タンホイザー、地上で使用するとこれだけの効果

とは……陽電子博士がプラントに亡命してくれていなければどうな
ったか……」

「ともあれ、後は友軍に任せても大丈夫そうね。任務は果たしたわ。
帰還しましょう」

スカンジナビア軍は、悄然としながらトウルまで撤退した。

「調子に乗りすぎておつたな」

マンネルヘイムは呟いた。

「いつの間にか、兎を狩る獵師の気持ちになっておつた。ところが

！ 相手は爪も牙もある獣だったと言う訳だ」

「……」

幕僚達はうなだれて声も出ない。

「しつかりせんかい！」

マンネルヘイムは喝を入れた。

「這い上がるう。負けた事がある、と言うのが、これからのスカン
ジナビア軍の財産となるう」

これより、スカンジナビア軍は自軍のみで一気に攻めると言う方針
を転換し、フランス東南部の親地球連合軍と共同して、フランス西
南部に逼塞した親ザフト軍に両面から圧力をかける事になる。

「なあ、ミリアリア」

「なあに？ ジェス？」

「俺は、ジブリールさんが悪い人とは思えない。言ってる事はデユ
ランダル議長の方が間違ってる様に思える。セトナが言ってる事の
方がもつともだ。もちろんユニウス7が落下してからプラントがあ
ちこちに援助の手を差し伸べた事も知ってる。地球軍が強引だった

のもわかってる。だが……何と言うか、うまく言えねえが、まったくの善人も悪人もこの世には存在しないと俺は思ってる。だから……プラントでも地球連合でもない、アークエンジェルが何を考えているのか知りたいんだ。取材……できねえかなあ？」

「んー……ほかならぬジエスの頼みだしね。わかった！ つなぎ取って見る！」

彼は自分の運命を変えた2年前の事を思い出していた。

必ず倒すと思いつめた敵さえついに倒せず自分の運命を呪っていた、あの宇宙を漂っていた半壊したモビルスーツの座席。そこに、『彼』が現れたのだった。

いつの間にかいた、としか言いようがない。印象的な巻き毛と青い瞳のこちらを突き刺すような目をした少年。

『彼』は言ったのだ。

「そんなに寿命が短く生まれたのが憎いのなら、永遠の命をくれてやる」

と。

まるで魅了されていたようだった。『彼』から目が離せず、ただうなづく事しかできなかった。

そのまま『彼』の口付けを受け入れ、私は意識を失い、目が覚めた時には『彼』の一族となっていたのだ。

目覚めた私は、いつの間にか地球の鄙びた村にいた。『彼』はさまざまな事を語ってくれた。注意すべき事や、信じがたい『彼』の過去などを。

そして『彼』は来た時と同じように、いつのまにかいなくなっていた。

私は自分の体の変化をすぐに実感できた。なにしろ薬を飲まなくともなんともないのだ。

私はすぐにも私の可哀相な弟を一族に加えてやりたかったが、『彼』から注意されていたので、連絡を取るのには控えていた。もう少し、彼が大人になるまで……

私は方々をさまざまい、この町にたどり着いた。『彼』の過去に出てきた名前と同じ名前のこの町に。

この荒廃した町はずれに小さな家を建てた。

そして薔薇を植えたのだ。年を重ね、家の周りは薔薇に包まれるだろう。

そしてもし『彼』、エドガーがここに現れたら言ってやりたいのだ。

「ポアの村へおかえり」と。

そんな静かな暮らしをこれからも続けていくつもりだった。

だが……再び戦争が起こり、ザフトは各地で負け続けている。この町の近くにも親ザフト軍が逃げ込んできた。

私は決心した。荷造りをし、家の手入れを隣人に頼むと、ポアの町を後にしたのだった。

フランスでの戦況が動いたのはトゥール・ポワティエ間の戦いより10日が過ぎた頃である。

フランス東南部の親地球連合軍がスカンジナビア軍の要請に答え、また、イタリア軍の後ろ盾を得てマシフ・サントラル（中央高地）に進出してきたのである。

「將軍！」

とうとう、残存親ザフト軍の指導者となってしまうたモーリス・ト
レーズ大佐 暫定的に將軍のもとに伝令がやってくる。

「親地球連合軍はブリヴ・ラ・ガイヤルド、そしてトゥールーズか
らモントーバン、モンレジョーへ進出との事です」

「ううむ……」

モーリスは唸った。

しばしの沈黙の後、苦渋の決断をする。

「ポワティエを放棄する！ ボルドーを拠点にアングレーム、ペリ
グー、アジャン、タルブに防衛線を張るのだ！」

モーリスはその防衛線で長期持久を図るつもりだった。

だがその構想は短期間で崩壊する。翌日、大西洋連邦の大西洋艦隊
が、フランス西岸に進出しボルドーを攻撃するとの情報が入ったの
だ。

親ザフト軍は地球連合海軍が現れない内に、急ぎイベリア半島へと
脱出していった。

イベリア半島の情勢は、大きく東西に分かれていた。地中海側のバ
ルセロナ、バレンシアは親地球連合派。内陸部ではマドリードが親
ザフト派。他にリスボン、セビリア、マラガといったジブラルタル
基地近くの都市が親ザフト派であった。

しかし、それはマヌエル・アサーニヤ率いる共産主義派の人民戦線
政府がマドリードに成立すると変化する。

ポルトガルが人民戦線政府に反発、親地球連合派に着き、リスボン
から地球連合の軍が上陸、マドリードを目指したのである。

同時に、フランスから南下したスカンジナビア軍は大西洋連邦と協
力し、一気にバスク地方を奪回、バリャドリードを拠点とし、ドウ
エロ川を挟んで人民戦線政府と対峙する

「どうします？ 艦長」

「アーサーはタリアに尋ねた。

ジブラルタルからの司令は早急に帰還し、宇宙へ帰る用意をしろ、
と言う物。そして……親ザフト軍からは悲鳴のような救援要請がミ
ネルバに送られてきていた。

「んー」

タリアは悩んだ末、今一度親ザフト軍の救援に赴く事を決断した。

「お集まりの皆さん、グアディアナ川を使ってもう一度地球軍を罠
にかけます」

タリアが皆に語りかけた。

「なんと！ メリダから撤退すると言うのか！？ あそこはセビリ
ヤを守るための重要な要地……」

「また、取り返せばいいではありませんか。勝てばそれも可能です
少々いらついた声でタリアが説得する。

「しかし、再び罠にかかるのこのう？」

「再び、スカンジナビア軍と戦うなら、相手も警戒して来ましょう。
ですが、戦うのはリスボンから上陸したばかりの大西洋連邦陸軍で
す。仮に、警戒されていたとしても陽電子博士の開発したタンホイ
ザーはそれなりの被害を敵軍に与える事でしょう！」

「そう、あなたがジエス・リブルさん？ よろしくね」

マリューはジエスに微笑んだ。

「光栄です！ 前戦役時の英雄に会えるなんて！」

「英雄、ねえ」

マリューは苦笑した。

「大した事をした訳ではないのよ。英雄と言うなら、キラくんとかスさんね」

「もう一人、プラント側、ザフトにも居たのでは？」

「ああ、アスランくんね。そうよ。彼もそう。なんで忘れちゃったのかしら」

マリューは頭を押さえた。

「頭痛でも？」

「ええ、ちよつと。でも平気よ」

「では、取材を続けます」

ジェスは言った。

「今回の戦役、あなた方は何を為そうとしているのですか？」

「戦争を、止めたいのよ。前のようにうまくいかはわからない。

でも、何かせずには居られなかったのよ」

「ずいぶん少人数のようですが？ 失礼ですが、何が出来ると？」

「キラくんとラクスさんが帰ってくればなんとかなるわ。そう、私は彼らに希望を感じているの」

「そうそう、今までだってなんとかなってきたんだ」

「キラ達と合流すりゃ怖いもんなしさ！」

周りからも声上がる。

「今は、ここで何をやられているのですか？」

ジェスは尋ねる。

「キラくんとラクスさんを待っているのよ。さすがに今は動きようが無いわね」

マリューは苦笑した。

「今は、彼らはどこに？」

「宇宙よ」

「行かせた理由を聞いてもよろしいですか？」

「行かせた……理由……彼らが、行きたがったから」

「それでは、まるでこの組織の指導者はその二人みたいですね」
「指導者って……そんな訳でも……」

マリューは困ったように口ごもる。

「キラちゃんとラクスさんとは、あなた方にとって何ですか？」

「希望よ」

夢見るような表情に変わりマリューは言った。

「そつだ、希望だ」

「希望だなあ」

周囲からも、賛同の声が上がる。

「話題は変わりました、プラントのデュランダル議長についてはいかがお考えですか？」

「……怪しいわ。言ってる事、やってる事はまともだけど……でも、私達には彼を疑うべき理由が出来てしまったの」

「それは？」

「襲われたのよ。ラクスさんが、コーディネイターの特殊部隊に」
「なぜ、コーディネイターと？」

「まだ正規軍にしか配備されていないモバイルスーツに乗っていたし、ああ、バルトフェルド隊長が……」

「セトナ・ウインターズさんの演説についてはどう思われました？」

同じようにデュランダル議長には批判的なようですが？」

「……セトナ？」

訝しげにマリューは首を傾げた。

「ご存知、ありませんか？」

「ああ！ 思い出したわ。ええ、彼女の事をもっともだと思ったのよ。ラクスさんも同じような事を言っていたはずよね。デュランダル議長の発言には疑問が多いと。それで……なんで忘れちゃったのかしら？ あんなに感銘を受けたのに……頭が痛い……」

「大丈夫ですか？」

「……ええ、大丈夫」

「では、オーブのアス八代表首長を知っていますね？ 彼女の名前

でアークエンジェルに手配書が回っていますがご存知ですか？」

「まさか、彼女が？ だってカガリさんはこの船に…… いえ、オーブの空母に降りたんだった。そうよ。それつきりカガリさんには会ってないわ。なんで忘れてたのかしら。そう。彼女は監禁されているに違いないわ。オーブを牛耳っているウナト宰相が勝手に手配書を出しているのよ！」

「オーブ宰相、ウナト・エマ・セイランは暗殺されました」

「え？ あ、そうね、そうだったわ。何で忘れてたのかしら。そう、今はマシマ家ね。マシマ家にオーブは牛耳られているのよ。きつとカガリさんも軟禁されて……」

「アス八代表首長自ら会見を開いていますか？」

「そんな！ いえ、そう、そうだったわ。私はそれを見てひどくシヨックを受けたのよ。なんで忘れちゃったのかしら。頭が……痛い！ つつっ！」

「すみません。マリユール艦長は具合が悪いようですのでここまで！」

アーノルド・ノイマンがマリユールをかばうように、飛び出してきた。

「あ、ああ」

ノイマンはマリユールを抱えるようにして部屋を出て行った。

「……さ、ジエスさん、取材終わりよ。縁があればまた会えるさ！
ね？」

ミリアリアは努めて明るい声で言った。

「ああ。とりあえず、出ようか」

「さあ、艦長、この薬を飲んで」

「……ありがとう。ノイマン。楽になったわ。それにしても……」
ミリアリア達と別れたマリユールはため息を付いた。

「このまま海の底に潜って、何をしているのかしらね。私達は」
「修理の方は大体終わりましたが……どうしましょうね、本当に」

「今、地球軍の攻撃は、と言うよりスカンジナビアね。目指す所は明白。ジブラルタル」

「スカンジナビアには恩も在ります」

「攻める訳にも行かないわねえ」

「艦長」

ノイマンが言った。

「この状況でキラ君達が帰っても、出来る事はない、と考えます」

「……宇宙に行きましょうか？」

「ああ、いいでしょうね。何かあってもアークエンジェルなら地上のどこにでも降下できますし」

「そうしますか！ 決めた！」

マリューは久しぶりに明るい顔に戻った。

「なあ」

ジエス達はバレンシアの定宿に帰った。

「なんかあ、変じゃなかったか？ マリュー・ラミアス」

ジエスはミリアリアに話しかけた。

「うん、なんか、変だった。変だったし、キラやラクスさんの事を神様みたいに言うのも変だった」

「こういつちゃなんだが、洗脳と言うか、精神操作されてる人みてえだった。マリューさんは」

「そうそう、それよ！ マリューさんも、周りの人も！」

「……一人だけ、冷静な顔をした奴がいたな」

「ノイマンさん？」

「素人考えだが、彼がみんなに何かしているのかもしれないねえ」

「まさか！」

「まさかなあ。だが……今度、精神科医連れて取材に行ってみるか？ 専門家の目なら、何かわかるかもしれないねえ」

「……わかった。とにかくなんかおかしいもんね、アークエンジェ

ル。前はあんな風じゃなかった！」

だが、ミリアリアがターミナルを通じて再びアークエンジェルに
つなぎを持つとした時、既にアークエンジェルは地球上には居な
った。

「こうなりやあ、オーブに行つて見るかな。そしてアス八代表首長
に取材を申し込む！ このままじゃあ収まりがつかねえ！」

「うん！ 私もひさしぶりにカガリに会いたいし！」

第49話「不沈戦艦強奪作戦発動<9>

「まったく！ フランスでは勝ったつてのに……」
ルナマリアはぼやいた。

「ほんとよね。フランスから追い出されるだけじゃなくバスク地方まであつという間に取られちゃうなんて」
マユもぼやいた。

「仕方ないさ。ミネルバが居る所だけで勝つても多方面から押され
ちやなあ」

ハイネが宥める。

「それに……いや……」

アスランは口ごもった。

「なんだよ、アスラン。言いたい事があつたらはつきり言えよ」

「いや、ジブラルタルは、防衛線を縮小したいみたいだ。むしろこ
こまで退けてラッキーみたいな感じだろうな。俺が聞いた所だと
その方が防衛しやすいらしい」

「ふーん、なるほどねえ。内線防御か」

ハイネが納得したように頷く。

「ま、上が考えても、俺達は力を尽くして戦うだけだ」

「まーかして！ ミネルバを世界を狙えるチームにして見せます！」
シヨーンは明るい口調で言った

「ちよつと！ その動きは何だ、シヨーン？」

「……？ ポーリングですが？」

「戦闘と関係ないだろう！」

ハイネはシヨーンに凄んだ。

「……」

「不思議そうな顔をするな！」

「えーとえーと……隠し芸をしまーす！」

マユは右手で左の脇を隠して叫んだ。

「隠し毛！」

「女の子がそんな事言っちゃいかーん！」

ハインは涙を流してマユに訴えた。

「いやあ、場を和ませうかと。えへへ」

「ハインは女の子が下品な事言っるのが嫌いなのだ」

ゲイルがクスクス笑った。

グアデアアナ川の戦いは、フランスで行われたトゥール・ポワティエ間の戦いと同じ様相で始まった。

両軍が川を挟んで砲撃戦を行う。

親ザフト軍はじりじりと後退する。地球軍は機を逃さずと一気に川岸に迫る。

そこへ！ ミネルバが川中から姿を現す！

タンホイザーが発射され、地球軍をなぎ倒す！

「再チャージ！ 急いで！」

「はい、タンホイザー再チャージ！」

「アスラン達に隙を作るなど伝えて！」

「はい！」

「ははは、撃ち放題だ！」

ミネルバのデッキに陣取ったデステイニー、レジェンド、セイバー、ブラストインパルス、ガンナーザクはミネルバとエネルギーが直結され、混乱した地球軍に向けてひたすら撃つ。撃ち続ける。

「タンホイザー、再チャージ完了」

再び、タンホイザーが放たれる。

地球軍は後退を開始する。

「再チャージ！ 急いで！ もう一度！」
この戦いで、3度目のタンホイザーが放たれた時、地球軍はついに壊走へと移った……

この戦いの後、親ザフト軍はメリダを奪回し、さらにバダホスまで進出、同時にバレンシア・デ・アルカンタラを押さえ、リスボンからマドリードへの街道の防備を固める。

マドリード政府は北西はグアダラマ山脈、グレドス山脈を利用し堅固な陣地を築く。北東はサラゴサを拠点にエブロ川を挟んでフランスから南下してきた地球軍と対峙、クエンカ山脈にこれまた強固な陣地構築を始めた。

南東はセグラ山脈、シエラ・ネバダ山脈に陣地を築き、地中海方面からの地球軍の侵入を防ぎ、南西はポルテガナを押さえ、アヤモンテ、ウエルバ、カデイスと言った沿岸の諸都市を固める。

マドリード政府は、もうザフトを頼る気などなかった。ジブラルタルが落ちても自主独立を図る方針を固めた。

地球連合軍はマドリードの激しい抵抗を見て方針を転換する。

スカンジナビア軍はサモラからの別働隊が渡河に成功。サラマンカに拠点を移し、マドリードと対峙する。リスボンからの地球連合軍もイベリア半島西岸の諸都市を制圧しながらウエルバに陣を進め、セビリアの親ザフト軍と対峙した。

「よう！ よく戻ってきたな！」

「あ、ケビンさん」

ジブラルタルに降りたアスランを迎えたのはケビンだった。

「どうなんです？ その後？」

「んー。送れる物は潜水艦や輸送機に乗せてカーペンタリアに行かせたよ。シャトルで本国に送った者も多い」

「そうですか。ケビンさんは？」

「警備隊長だからなあ、この基地の。元ジブラルタル基地司令と言
うプライドもある。最後まで残るさ」

「！」

「そんな顔するなよ。死ぬと決まっている訳じゃない。限界になっ
たら降伏するさ。地球軍の奴らもビクトリア大虐殺を宣伝してる手
前、野蛮な事はしないでらうよ」

最後は少し自嘲気味にケビンは言った。

その女性は追憶に浸っていた。

ワシはな、それに気づいた時、こんな地球の姿を傍観しておれ
んようになつた。

そこで、ある誓いを立てた。何があるうと、この地球を自然の
溢れる元の姿に戻して見せるとなあ！

笑わせるな！ 貴様！ 優しいという言葉を勘違いしておるの
ではないか？

よいか？ ワシの目的はな、人類の抹殺なのだぞ！

わからぬか？ 地球を汚す人間そのものがいなければ、地球は
おのずと蘇る！

ふっはっは… ふっはっはっはっはっはっは… ふははははは

は！ そうだ！ それがいい！ それが一番だ！

その為ならば、人類など滅びてしまえ！ はあーははははははは！

「もうすぐですわ。もうすぐ。もうすぐ私が貴方様の望みをかなえましょう」

女性は誰もいない暗闇に向かって微笑んだ。まるで聖母の様に。

「私が、新しくミネルバに配属されたプロ・デューサーであります！」

ミネルバに配属された、その男を見てタリアをはじめ、ブリッジの者達は頭を抱えた。

今は亡きタケダ、そしてセイジに瓜二つだったからだ。

「わかりました。あなたの配属を認めます」

タリアは溜息をつきながら言った。

「部屋に戻って頂戴。しばらく休んだらパイロット達にも引き合わせるわ」

「は……」

しかし、デューサーは立ったまま動かなかった。

「まだ何か？」

「いや、まだ自分の部屋を教えられておりません」

「……ああ、そうだったわね。シン、案内してあげて」

「はい」

「……ああ、自分等は……？」

「え？」

タリアは驚きの声を上げた。

「……ああ、あなた達ね」

後ろめたそうにタリアが言った。

そこには、デューサーと同じく配属されてきたカン・トークとシリ・ズ・コウセイがすっかり忘れられ、所在無く立っていた。

「ねえ、おじさん」

シンはデューサーに尋ねた。

「おいおい、おじさんはよしてくれーな。お兄さんと呼んでちょーよ」

「はい、お兄さん。……自分そっくりの人に会った事あります?」

「いんや? 特にないよ?」

「そう……世界に三人は自分にそっくりな人がいるって言うけど……」

部屋に着いた。

「ん? なんや? あの写真?」

「あ、片付け忘れてた! ……セイジさん、ナルシストだったんだなあ」

部屋の棚には、セイジの写真が入ったスタンドが片付け忘れられ、飾られていた。

「これが、ここに前いた人なんですよ」

「嫌やわー。ワイにそっくりやないけ!」

「……あのね、ミネルバのみんな、貴方を幽霊を見るような目で見ると思うけど……」

シンはデューサーの手を取り、胸の前でぎゅっと両手を握ると言った。

「気にしないでね。じゃ!」

「……」

デューサーは顔を赤くしていた。

「へへへ。男の娘ってのもいいもんやなあ」

トラブルはデューサーがパイロット達に紹介された時に起こった。

一通り紹介された時、やはりみんな頭を抱えた。

そしてお流れで解散になる時……レイがデューサーを自室に呼び出

したのだ。

レイはいきなりデューサーを壁に押し付けた。

「聞いておこう。お前はクローンか!？」

「なんや、クローンって、そんな……」

「タケダも、セイジも、ミアのマネージャーも! 皆同じ顔、同じ声だ! 双子でもないと言う! これが偶然だとしても言うのか!？」

レイはデューサーの喉元を締め上げた。

「くるしいで……レイはん……」

その時、部屋の扉が開いた。扉の前にはアスランがいた。

「ん? 何をやっている?」

「たまらんわ、もう! 何が何やらわからんでえ、まったく!」

デューサーはこの隙にレイを振りほどくと、部屋を出て行った。

レイはベッドに座るとうつむいた。

「なんだ? 暗いなあ。しかし、デューサーにも驚いたな。まさか」

「アスラン……」

レイは座ったまま目使いでアスランを見上げた。

「なんだ?」

「聞いてくれますか? 俺の……秘密……」

「そうか……」

レイから、彼がクローンだと言う事を打ち明けられ、アスランは唖った。

何が言えるだろう。確かに自分達はクローンであろうとなかろうと、いつ死ぬかわからない存在。だが……レイは、生まれつき寿命が短いのだと言う。

レイは慰めの言葉など必要としていないだろう。励ましの言葉もまた。

「関係ない」

結局、アスランの口から出たのはぶっきらぼうな一言だった。

「お前はお前だ。俺にとっては。お前だけがお前が。二人目なんかいない！」

「アスラン！」

レイは、涙を流しながらアスランの手を取った。アスランはしつかり、その手を握り締めた。

「大西洋艦隊がウエルバを攻略したらしいねえ」

ここはバレンシア。ジョンがパエリアを頬張りながら新聞を見る。バレンシアはパエリア発祥の地である。

「うちらも何かした方がいいのかな？ マラガ辺り攻略とか」

「ところが。スペイン人はウエルバ陥落で一層各地の防備を固めたらしい。余分な事で戦力をすり減らすなとさ」

ミラーが答える。

「ま、セウタに入っちゃったらこっちのもんさも」

「ああ、うずうずするなあ。こんな所でのんびりしてられねえぞ！」
シヤムスが耐え切れないように、言う。

「まあまあ、これもジブラルタル決戦前にのんびりさせてやるうっという隊長の親心よ。ね、アルジェリアのオランに行ったら旧市街に行ってみようよ」

ミューディーが、ガイドブックを見ながら普通の女の子のようにはしゃいだ声を出した。

ミネルバが宇宙へと戻る準備は日に日に進んでいく。

バビ、ゾノを降ろし、代わりに予備機としてグフ、ザクが搬入されていく。

「あら、コアスプレNDERも一機配備？」

「ええ、これでインパルスが2機使えますね」

「それはいいんだけど……」

「すみません」

伝令が入ってきた。

「レイ・ザ・バレルに面会者です」

「誰？ IDカードは？」

「それが無いと言っております……顔を見せればわかると……」

「いいわ。レイは手すきでしょう？ 会わせて頂戴。一応警備はし

つかりね」

「はい！」

第50話「不沈戦艦強奪作戦発動<10>

「おお！ マーシャンの諸君！」

オーブに着いたアキダリア。

マーシャンを出迎えたのは、カガリ自身だった。

「いや、ご無事でなりよりだ」

「心配していたのですが……良く……」

「確かに本人だな」

「ですね？」

アグニスとナーエはすばやく視線を交わす。

「その様子だと、拉致されていたのは知っているようだ。はは、なんとか自分で抜け出してきたよ」

「ところで……」

ナーエは言った。

「キラ・ヤマト達を指名手配したと？」

「うっ」

カガリは辛そうになる。

「彼らに、私は拉致されたんだ。そう、彼らに拉致されていた。彼らは、精神を病んでいた。まともに見えた周囲の人達も。まるで精神病者のキラを指導者のように扱って……引きずり込まれた、いや、元凶はラクスかな。薬まで使ってラミアス艦長を洗脳していた。狂ってる。誰も彼も。こんな事ならもっと早く、医者に診せるべきだった」

「それで……アークエンジェルは今？」

「ニュースで見たらう。今は、前の戦役のような事をやっている、本当にそれが平和に繋がると信じて。彼らが哀れでたまらない。あんな事で戦争が終わると思っっているのだから」

「……」

「では、我々の任務は終わったと言う事でよろしいですか」

ここまで口を開かなかつたガルトが言った。

「お前達、氏族のガルド・デル・ホクハにサース・セム・イーリア
だったな」

「はい」

「今度作る、近衛部隊に入ってくれ。私はユウナの人を見る目は信
頼している。そのユウナが私を探すように頼んだお前達だ。頼む：

…！ 私には信頼できる人材が一人でも必要なんだ！」

「頭を、お上げください」

優しい声でガルトがカガリに手を差し伸べた。

「代表がそうおっしゃられるならせひ、我ら、加わらせていただき
ましょう！」

「まさか！」

部屋にいるのは3人のみ。レイとタリア、そして……ラウル・ク
ルーゼ。

「本当だよ。私はラウル・クルーゼだ。しかし、色々と覚えも無
い罪も付け加えられているものだ。どうせシーゲルの腰ぎんちゃく
の女、アイリーン・カナバがやった事だろうがな。ふん。フリー
ダムが強奪？ ジェネシス自爆？ 馬鹿らしい。地球が滅びればプ
ラントも滅びると言うのにわざわざ自爆など」

「成原成行博士でもあるまいしね」

成原成行博士は『自爆は男のロマンだ！』と公言してはばからない
人物である。

「残念ながら、彼には完璧なアリバイがある」

「それは残念ね、学会から追放するチャンスだったのに」

タリアはちつと舌打ちした。

タリアと成原成行博士の間には何かあったようだ。

「で、これから、どうするおつもりで？」

「……フランスの、とある町で静かに余生を送っていく予定だった。しかしまた戦争が起こり。だが……最近のザフトはなんだ。ここまですべて疲弊していたとは。助力をする気になった」

「しかし、助力と言っても、あなたは一応罪人ですよ？」

「ふ……ギルバート・デュランダル議長本人に連絡を取ってみてくれ。私の無実の罪など、あっさり覆るさ」

「私も、添え書きしましょう！ 彼が確かに本人であると！」

レイが意気込んで言う。

「わかりました。最優先で本国に連絡を取ります！」

タリアが本国に送ったその情報は、プラント上層部にちよつとした騒ぎを引き起こした。フリーダム―強奪などの事件があらためて洗い出され、その過程で、フリーダムの格納庫の前でカメラ目線を取るラクス・クラインが写っている画像が見つかったのである。しかし、それは後に評議会議長であった時のアイリーン・カナーバに握りつぶされていた事も明らかになる。

もつとも、クライン派の基盤を壊すという事でそれがプラント市民に公表される事はなかった。

だが即日、アイリーン・カナーバは拘束された。

ジエネシス自爆についてはラウ・ル・クルーゼ本人の弁明書から転載するのがよいだろう。

「確かに自分の生まれに絶望して全人類の滅亡を図っていた事もあった。地球を撃たせるようにザラ議長を志操したのも事実である。だが、それで人類滅亡には十分である！ わざわざジエネシスを自爆させるなど無意味極まりない！」

結局旬日を経ずして、クルーゼにはデュランダル議長直々の命令でザフト復帰とミネルバ配属が決められた。仮のフェイス任命と共に

……。

「どうでしょう？」

ルナマリアはアスランに尋ねた。

「ん？」

アスランはジェネシス自爆の事を考えていた。その犯人はクルーゼでもなかった。ではそいつは、今でものうのと、この世界に生きているのだ。

「ほら、モビルスーツですよ。レジェンドは、クルーゼさんに渡した方がいいような気がする」

「そうかもな。で、ルナはどうする？」

「ほら、インパルスが2機になったでしょう？ 一機をマユにして私は慣れたセイバーに戻ろうかと。マユもブラストインパルスからなら、ガナーザクから機種転換もスムーズに行くと思うんですよ」

「……これは俺がいわれた言葉だが」

「え？」

「上に行けよ上に、いつまでも切った張ったやってんじゃねえぞ」

アスランはルナマリアの顎を掴んだ。

「あ……、む……」

アスランは、隣に座ったルナマリアに口づけた。

それは、衝動に突き動かされたと言うような物ではなく、もっと温かい物であった。

「アイリーン・カナーバが拘束されたそうじゃ」

「ああ」

ロゴスの会議である。アイリーン・カナーバが拘束された事は、す

ぐに彼らに伝わった。

「西ユーラシアの奪回も順調だ」

「ジブラルタルもじきに落とせよう」

「プラントの奴らは、馬鹿だな」

一人が嘲笑する。

「ザフト全軍恐れるにたらないが、彼女の舌先は恐ろしい」

「なにしろ、プラントの独立を認めなければコロニーを落とすとしてやるとまで言われたからな」

ブルーノ・アズラエルが苦々しい声で言った。

「まったく！ ユニウス7が落下するとは思わなかったよ！ その被害と言ったら！ プラントの建設費なんてもんじゃない！ やはり奴らはプラントごとでもいい、絶滅させるべきだったのだ！」

「後知恵だよ、後知恵」

「我々が譲歩しなければ本気でやりかねん勢いだったのだよ」

「しかし、彼女が失脚したと聞いた時は実に嬉しかった」

「いつそ地球軍に引き抜きたいほどの手腕なのに、それをまあ拘束とは」

「ははは」

「しかし……」

ブルーノ・アズラエルは気がかりそうに言った。

「先の戦役時、警備が雑なプラントとはいえ拘束されてたのにもかかわらず、ほとんど自力で脱出して仲間を集めてクーデターを短時間で成功させた手腕も恐ろしい。もしかすると、もう一度同じような形で彼女に会うかもしれない……」

「そうですね。気を引き締めていきましよう、皆さん。『百里の道を行く時は、九十九里を半分と心得よ』ですからね」

アズラエルの言葉を引き取ってジブリルが言った。

「うむ、これからだな」

「ああ」

「……もし、もしだが彼らが地球に質量攻撃をかけたらどうする？」

「ダイダロス基地のあれは進んでおるのか」
「本体はほぼ完成だ。だが弱点がある。第一次中継点に不備が生じれば、事実上、目標への照準合わせが不可能になってしまう」
「ならば、デブリ帯から廃棄コロニーをもっと移動させ第一次中継点を増やすのだ」
「では……」
彼らは実務的な話に入ってしまった。

カガリ近衛部隊はカガリが通常寝起きしている内閣府官邸を取り巻くように配備されていた。
モビルスーツも、最新鋭の物が貸与されている。

「近衛部隊か、お前の家の家格も元に戻るかも知れんな？」
ガルドはサースに言った。

サースは没落した家を元に戻すため、幼い身でモビルスーツに乗っているのであった。

「そうでしょうか？」

「そうとも」

「……それを抜きにしても、僕は好きだな。カガリ様も。ユウナ様も」

「ああ、俺もだ」

「近衛部隊か！ やりがいがありそうですね。頑張りましょう！」

「ええ！」

オーブ艦隊某所

「同士の集まり具合はどうだ？」

その男は声をひそめて言った。

「上々だ」

相手も声をひそめながら答える。

「トダカー佐は引き入れるのは無理か？」

「トダカー佐か！」

その男は苦々しげに答える。

「最初はその人を旗頭にとさえ思ったのだがな。ユウナ・ロマ・セイランに取り込まれている。ユウナ・ロマの評価を聞いたらなかなか評価している、だとさ。無理だ」

「オーブの中立を破りここまで艦隊を率いているユウナ・ロマ・セイランを評価するなど！」

「しかし、残念だな。有能な彼のような者が上に立ってくれれば我らの大願も……」

「人間的には、もちろん信頼できる。私も彼が好きだよ。しかし、計画に邪魔になるならなんとしても排除する！」

その男の目は夜の暗さにもわかるほど爛々と輝いていた。兵士達はそれを、忠君愛国の念に燃えていると取った事だろう。しかし、実際は何の事はない。狂っているだけだった。

ジブラルタル

タリアがプラントにクルーゼの事について報告を送って旬日を待たず、デュランダル議長は再びジブラルタルを訪れた。

「わざわざ議長がお出でになるなんて」

「この危険な時に？」

「そもそも放棄されるんだろうここ？」

兵士のうわさ話に耳をかたむけながらデュランダルは真つすぐミネルバへと向かった。

ミネルバの前にはタリアをはじめ副官、フェイスの面々が並んだ。しかし、デュランダルは迷わず金髪の青年の所へと向かった。

「ラウ！」

「ギル」

二人はひしと抱き合った。

周囲の女性兵士がぎゃーと黄色い声を上げる。

そしてそれは諍いの声に変わる。

周囲の者達は何事かと思ったが何の事はない、どちらが攻めか受けかで争っているだけだった。

「マユとあんな風に抱き合えたらなー」

ハインが軽口を叩く。

「なーに、言ってますか！」

マユは赤くなりながらハインを軽く叩く。

「いてて。意外と本気よ？ 俺？」

「報告書を読んだ時は嘘かと思った」

デュランダルは言った。

「……命が助かった時、もう以前の知り人とは二度と会う事は無い、
と思っていたのだがね」

クルーゼが苦笑する。

「積もる話がいっぱいあるが……」

「ああ、今は余裕が無い。お前は本国でおとなしくしている。後は
……俺がお前の盾になってやる」

「わかった」

ほんの、2・3言の会話。しかし、二人にとってはそれで十分だった。

デュランダルは振り向くと言った。

「この男がラウ・ル・クルーゼである事は私が確認した。正式にフ
エイスに任ずる。以後、そう扱うように！」

周囲で話を聞いていた兵士達が一斉に立ち上がり、敬礼する。

「ではな」

「ああ」

「ああ、アスラン」

デュランダルがアスランに声をかけた。

「はい、なんででしょう？」

デュランダルはアスランに一枚のメモリーカードを渡した。

「ミーアの……形見だ。たぶん、君に見てほしかったと思う」

「ミーアの……」

「ではな」

デュランダルは、再び本国へ戻るためにシャトルへ乗り込み、出発していった。

「とうとうオランか」

スウエン達はアルジェリアのオランに到着した。

「さすがに今回は撮影時間が少ないね」

「最初はまったくなくなる予定だったらしいぞ」

「それを、イタリア人のカメラマンがごねたつてさ」

「ミューデー様様」

スウエンはミューデーに両手を合わせた。みんなも続く。

あのイタリア人カメラマン　ガウデンツィオ・マルコーニがミュー

デーをお気に入りなのは公然の秘密だった。

「やめてよ！　もう」

ミューデーは赤くなる。

「じゃ、行ってきますか！　最後の撮影！」

撮影自体はすんなり進んだ。最後に、みんなで集合写真を撮る時だ

った。カメラをセットして、ガウデンツイオが席の真ん中に座り、3回シャッターが焚かれる。

「おい、お前ら」

ガウデンツイオは両脇に座っていたミューディーとスウエンの肩を抱くと言った。

「ぜってえ、死ぬんじゃないぞ。いいか、おい、死ぬなよ、死んだらぶっ飛ばす！」

ガウデンツイオの声は涙声になっていた」

シヤムスがガウデンツイオの正面に回り、まっすぐな視線で言った。

「ああ、絶対に死にやしないさ。またあんに写真を撮ってもらうまではな！」

遠くから、ライ音楽の調べが風に乗って流れてきた。

『10月11日、今日やっと包帯が取れた。なんだか不思議な感じ。鏡を見たらそこには本当にラクス・クラインの顔が映ってた』

「これ……」

アスランはつぶやいた。デュランダルから受け取ったメモリーカードをパソコンで読み込んだのだ。

「ミーアの、日記……」

『不思議ー、不思議ー、だってこれはもうどこからどう見たってラクス・クラインだわ。大ファンのあたしが言うんだもの間違いはない！ その代行、身代わりなんて仕事ほんとに大変だろうけど、あたし頑張る！絶対バッチリやってみせるんだから！ 声は大丈夫。元々似てるって言われてたんだし。問題は喋り方とか草草よねえ。ラクス様は歌われる他はほとんどメディアに出ないから普段が全く分からない。演説の時みたいにも凛々しいのかなあ？うーん、そんなことないよね。ラクス様だって女の子なんだし。化粧品とかこの使ってるんだろ。出来ればそこまでちゃんと調べておいて欲しい』

いんだけどなあ」

「お仕事はほんとにある日突然やってきて、夢だったデビューとはちょっと違ったけど。でも考えてみればこれってそれより凄い事よね。あたしラクス様みたいになりたいってずっと思ってたんだし。ほんとにあたしなんか出来んのかなって心配は心配だけど。でもここでずっと夢見てるよりいいじゃない？先の事なんて分かんないんだもの、なんでもまずはやってみなくっちゃね。よし、頑張るぞ！」

「ラクス様のお仕事はまずは歌うこと。じゃなくてプラントや世界の平和のためにいろいろな活動をする事。大変なんだろうなとは思ってたけど、やっぱり大変！ 昨日は遂にギルバート・デュランダル最高評議会議長！ わおっ！ に呼ばれて、少しお話を聞いたけど、なんだか地球にユニウスセブンが落ちちゃったとかで大変なんだって。本物のラクス様は今プラントにいらっしやらないっていうし、もしかしてマジ私の出番なわけ！？ こんなに早く！？ うわくだったらどうしよう！」

「ミーア……」

「今日は今日はもうたいへん！ やっぱいいよいよやんなきゃなんなかったし！ アスランよ！ アスラン！ アスラン・ザラ！ 議長はそのうち会えるよって言ってたけどすご〜い！ ほんとに会えるなんて！ やっぱ真面目そうで格好良くて素敵な人〜！ 戦争のせいか今日はずっとブスっとしてたけど、でもお父さん裏切ってもラクス様のとこへ行っちゃった人だもんね〜。ラクス様には優しくてラブラブなんだろうなあ。う〜！ミーアも仲良くなりた〜い！」

「お仕事の方は本格的に始まって、ちょっと緊張、たいへん。戦争の中でお仕事するのって本当はとっても大変なのね。でもみんなほんとにラクス様のことが大好きなのね。凄く大事にしてくれる。あたし嘘だからちょっと気が引けるけど。でも、みんなを励ましたって気持ちには嘘じゃない。頑張らなくちゃ！ ラクス様の様に。」

ラクス様の様に。あたしの声もみんなに届きますように。早く戦争が終わるようにみんな、頑張ろうね！」

『アスランと会うのも久しぶり〜！ ちょうどミネルバが入港してラッキー！ でもアスランてけっこう照れ屋さんでおかしい。婚約者なんだからあもうちよつとそれらしくとも思っただけ。や〜っぱラクス様一筋なのね〜。でも、こんな人とマジラブラブだったらいいよね〜』

「ミーア……」

アスランの拳がぎゅっと握られる。

『慰問のコンサートはどこへ行っても凄い人。地球の人もみんな待っていてくれて、声かけてくれて、ほんとに嬉しい！ あたし用のピンのザク、初めて見たときはもう感動しちゃったよ〜！ あたしももつと頑張らなくっちゃ！ でも戦争はなかなか終わらないし、結構大変よね。議長の言ってることは正しいんだからみんなちゃんとそれを聞けばいいのに。そ・し・て。すごいすごいすごい！ アスランにキスされちゃった！ まさかやってくれるとは思わなかったからすごい嬉しい！ これって……あたしにもラクス様と同じ位の魅力感じてくれたって事だよ。嬉しい。やばい。本気で好きになっちゃいそうだよ。好きになっちゃだめなのに。だってアスランにはラクス様が……。でも、好き。辛いよう』

「ミーア……アあ……」

アスランの拳に涙が零れ落ちた。

あの明るい表情をした娘がもういないなど信じられなかった。

思い出される、触れ合った身体、感じた体温。唇の感触。

「ラクス様のために、か……」

皮肉な物だ。ラクスのあの最後の意味深な言葉。もしやあれがキーワードだったのでは？

なぜプラントの住人はラクスの言葉に価値を見出す？ あんな、あんな……

アスランはミーアに言ってやりたかった。俺はラクスなんかよりミ

ーアの方が好きだったと。

第51話「不沈戦艦強奪作戦発動<11>

日本

日本政府は、先頃ロシアのプーチン大統領がいきなり発表した宣言により混乱の内にあつた。

裏で以前より打診されてはいた。だが、日本政府は今まで断つていたのだ。北方領土四島返還その他、日本がかつて出した条件を全て飲む、と水面下でカードを切ってきたのは、中東の混乱の収束に日本を引きずり込もうとしての事だとわかつていたのだ。もちろんこれには日本国防陸軍の派遣も含む。

日本国防軍 自衛隊が本格的に法改正され、成立した日本国防軍は、現地とさほど摩擦を起こさずに活動する手腕が認められ、世界中の紛争地で引つ張りだこであつた。無論エイプリルフル・クライシス以後は世界中で救援活動に大忙しである。

閑話休題。

日本政府は、ひとまず二島返還、以後交渉続行でお茶を濁しておきたかつた。彼らはロシア側が切ってきたカードが、日本国民にとつてもあまりに魅力的過ぎて、おおっぴらに出来ない事を理解していたのだ。

しかし、プーチンはとうとうしびれを切らしたのだろう。

北方領土返還および樺太の有償譲渡

この宣言がプーチンから発せられた時、日本国中が沸き立った。それは日本政府にとって無視できるものではなかつた。

日本政府は、してやられたとの思いを抱きながらも資金の捻出と防衛のための兵力捻出に頭を痛めながらこれをもどにかして国益にプラスにするために動き出した。

日露平和条約と共に日露防衛協定締結

先の戦役で少なからず関係が悪化した大西洋連合とロシア。両国は、日本を介して関係の修復を図れるだろう。

両国に恩も売れる。

さらに、プーチンは日本企業のロシア国内への大規模な誘致政策も発表している。

「IT製品の機密開示せよ」……中国が外国企業に要求。

中国に進出している日本企業が不況を理由に全体の70%をリストラする計画を立てたが、中国当局がこれを却下。その企業は現地に建設した工場をただ同然の値で中国企業に売り渡し、ようやく撤退した。

「金を払うつもりはない」過去中国から流出した美術品のオークション、支払い拒否の中国人。

エアバス社が中国と結んでいる旅客機納入契約（150機分）が中国側より一方的に破棄。損失額は100億ドル。等々。

中国に対して日本は、そして世界も。信頼を失いつつあった。

日本企業の進出先として、中国に代りロシアがその位置を占めるなら、それもいいかもしれない。

ロシアにとっては……プーチンは現在ロシアに取り重要度が低下した地域を日本に押しつける事でガタガタになっているロシアの経済の回復を計画しているのだ。

ロシアンマフィアが暴れまくっている樺太と、住人がどんどん逃げ出しつつあって、インフラ維持もままならない四島と引き換えに、日本をシベリアも含む沿海州経済圏にリンクさせてしまえるならば、それは今のロシアにとっては願ってもない事なのだ。

また、今のシベリアにおけるロシア人人口は700万人でしかない。そこに中国人の人口圧力がかかっているわけで、それに対抗するためにもプーチンは日本を巻き込もうとしているのだった。

共同防衛協定により、ちゃっかりオホーツク海への出入り口は確保していたが

まあ、これでさすがにマスコミが発表する支持率も上がるだろうなと麻生総太郎は思った。

この時代、マスコミとネットの世論の乖離が明らかになっていった。大手動画投稿サイト「ニヤニヤ動画」山本一平太議員出演生放送時におけるリアルタイムアンケートの内閣支持率と、その前日に大手新聞社が発表したそれに、3倍以上の開きがあったのは記憶に新しいところである。山本議員が与党　自由民衆党の議員であるにしても……この差はいかがなものか。なにかマスコミはおかしい。そう、多くの人が思う時代になったのである。

マスコミの恣意的報道、捏造に近い報道がネットの興隆により明らかになり、マスコミはその勢力を減退させながらもなお特定アジアにおもねる姿勢を変えず、国民からの信頼を失い続けていた。

もともと俺は、支持率なんてさほど気にしじゃないが。日本のために俺に出来る事をやるだけだ……！
麻生は決意を新たにす。

部屋のテレビから、緊急ニュースが流れてきた。
野党第一党、民衆党党首の秘書が政治資金規正法違反で逮捕されたのだった。

麻生は歪んだ口元を更に歪め、にやりと笑った。

これで、与党が防戦に回っていた国会の様子も一変する事だろう。それに、この時期は、民衆党の立候補予定者が軒並み党首大沢と並んで写った選挙用ポスターが出来あがって配布された頃だ。この調子で兵糧攻めをしてやる。国民に人気の高い元党首の大泉も黙らせた、民衆党党首大沢の首を取った、反日的なマスコミはこれから放送法違反告発で血祭りに上げてやる。隣国の酋長にも”挨拶” 済みだ。

マスコミの支持率など馬鹿どもへのめくらましに過ぎん！

日本の行く末は、誤らせんぞ！

テレビを消すと、日本国総理大臣、麻生総太郎はすつくと立ち上がり、確かなとした足取りで議場へと歩いて行った。

福井県 越前和紙、若狭和紙の産地である。

清らかな水の流れる緑あふれる地。

日本中を包む喧噪をよそに、学徒動員された女学生達が和紙を漉いていた。

心を込めて、祖国の勝利を願いながら。

そのような光景は

岩手県 - 東山和紙、成島紙

秋田県 - 十文字和紙

山形県 - 深山紙、高松和紙、長沢和紙、月山和紙

宮城県 - 白石和紙、丸森紙、柳生紙

福島県 - 遠野和紙、上川崎和紙、山舟生和紙、野老沢和紙、郡

山紙

新潟県 - 越後和紙、小出紙、大沢紙、伊沢紙

茨城県 - 西ノ内紙

栃木県 - 烏山和紙、程村紙

群馬県 - 桐生和紙

埼玉県 - 小川和紙（細川紙）

東京都	-	軍道紙
山梨県	-	西島和紙、市川紙
長野県	-	内山紙、松崎紙、立岩紙
静岡県	-	横野紙Ⅱ、駿河紙、駿河柚野紙、修善寺紙
富山県	-	越中和紙（八尾和紙）、五箇山紙、蛭谷紙
石川県	-	二俣和紙、加賀雁皮紙（加賀和紙）
岐阜県	-	美濃和紙、山中和紙（飛騨紙）
愛知県	-	小原紙（森下紙）
滋賀県	-	揉唐紙、江州雁皮紙、桐生紙
京都府	-	黒谷和紙、丹後和紙
大阪府	-	和泉紙
三重県	-	伊勢和紙
奈良県	-	国栖紙、吉野紙
和歌山県	-	保田紙、古沢紙、高野紙
兵庫県	-	名塩和紙、杉原紙
鳥取県	-	因州和紙
島根県	-	石州和紙、出雲和紙、勝地和紙
岡山県	-	備中和紙、高尾和紙、津山紙
広島県	-	大竹和紙、木野川紙
山口県	-	徳地和紙
徳島県	-	阿波和紙
愛媛県	-	伊予和紙、大洲和紙、周桑和紙
高知県	-	土佐清帳紙
福岡県	-	八女和紙（筑後和紙）
佐賀県	-	名尾和紙、重橋和紙（唐津和紙）
大分県	-	竹田和紙、弥生和紙（佐伯紙）
熊本県	-	宮地和紙
宮崎県	-	穂北和紙、美々津紙
鹿児島県	-	蒲生和紙
沖縄県	-	琉球紙（芭蕉紙）

と言った地域で見られた。そう、まさに日本全国が一丸となって和紙の増産を図っているのだった。そして作られた和紙は続々と、登戸研究所へと輸送されて行く

「しかし、セベリアからの反撃がありません？ セベリアはスペイン南部で最も強力な親ザフト軍が集まっている場所です。放つてはおけません。我が軍にもセベリアに進撃するべきと言っ意見が…

…」
地球連合軍大西洋艦隊はウエルバを解放した後、その動きを止めていた。

「ジブラルタルだ！ ジブラルタルだよ、君！」

両手を大きく振り回しながら大西洋艦隊司令長官は言った。

「後は、幹から伸びた枝に過ぎんさ。それに……」
司令長官は声をひそめた。

「セベリアの指揮官との間では話がついている」

「と、言いますと？」

「戦後のスペイン軍内での地位の提供。それで、セベリアに閉じこもっていてくれるそうだ。悪い話ではあるまい」

「アフリカは、またイタリアとは違いますわねえ」

車中でセトナはぼやいた。ハンカチで汗を吹く。バッグの中からタオルを出したほうがいいかもしれない。

「すみません。冷房は最大まで上げているのですが」

「いえ、文句を言った訳ではないのよ。気にしないでくださいな」

「はい」

「……ああ！」

セトナは叫んだ。窓の外に『水をくれ』と書かれたプラカードを持った老婆が座り込んでいたのだ。

「車を、止めてください、水筒の水を、少しでも……」

だが、どうやら東洋系らしい、カミソリの刃のような鋭い目つきをし、猛禽類の翼のような眉毛が印象的な運転手はセトナの言葉を無視して無表情に、車を止めようとせず、逆に加速させた。

老婆は立ち上がると必死な様子で追いつがってくるが、取り残される。

「ああ……なんで？」

「限りが、ありません。運転手を責めないでやってください。それに、この気温で外気に当たると白人のあなたは火傷を負ってしまおうでしょう。呼吸器にも炎症を起こすかもしれません。ホテル、テントなどの日陰以外は決して直射日光に当たらないように」

ガイドの言葉に、セトナは今までとはまったく違う地へ来た事を実感せずにはいられなかった。

「なにか、方法は無いのですか？」

「無い事も無いです。資金さえあればね」

ガイドは言った。

「世界的な砂漠化の進行を食い止め、緑地面積を増やすのに一番手っ取り早い方法は、海水の淡水化装置を利用して砂漠の周辺に大量の淡水を流し込み、その土地を緑化した上で農業をおこなうことです」

「じゃあ……」

「少量の水を導入する程度では塩害が起りやすくなりますが、淡水化装置によって大量の水を流し込めば、地表に吹き出る塩分も淡水で洗い流すことができるので、塩害は発生しません。そうして大量の水を利用して土地を緑化し、農業をおこなう。そして収穫した農産物を原料にバイオ燃料を製造する。このバイオ燃料をエネルギー源にして海水の淡水化装置を利用すれば、低コストで淡水化装置を運用することができる。もちろん余った農産品やバイオ燃料を

外部に販売すれば、利益が出るようになる。近年の食糧価格や燃料価格が高騰している状態であれば、海水の淡水化装置を運用するコストを割り引いたとしても十分に利益を見込めるのは確実です。そして今後も中国やインドの経済成長によって食糧や燃料の需要は増加していくから、需要の減少による採算割れのリスクも無い」

「希望はあるのね？」

「はい。海水の淡水化装置を利用して砂漠を緑化できる面積など微々たる物であると思うかもしれませんが、しかしこれにはからくりがあるのです。一度海水を淡水化して緑地化してしまえば、その緑化した土地から水分が蒸発するようになり、その土地に雨が降るようになるのです。年間の降水量が増加すれば、農業を継続する上で海水の淡水化装置に依存しなければならぬ割合が減少する。そうすれば、淡水化装置の余った能力で、さらに農地を拡大していくことができるわけです」

「まあ、それじゃあ早速お兄様にお知らせしなければ！」

「問題が、あるですよ」

お菓子を貰った少女のように喜ぶセトナを見てガイドは苦笑した。

「このような海水の淡水化装置を利用した砂漠の緑化事業の有望最適地はオーストラリアだと思われませぬ。オーストラリアは砂漠の面積が広く、しかも大洋に面しているので海水の淡水化装置によって海水の塩分濃度が上昇することはなく、英語圏の国なので意思疎通をおこなう通訳の確保も容易で、治安も良い国なのでアフリカや中国に比べて設備の盗難に遭うリスクがきわめて低く、砂漠も海洋に近い地域まで広がっているため内地まで水を引き込む手間が少ない。それに比べてアフリカはまだまだ……」

「では、教育関係者とも話をしなくてはなりませんね、息の長い話です。チュニスのホテルに着いたら早速教育担当者と環境担当者にアポイントメントを取ってくださいな」

「はい！」

この決してあきらめない少女に、ガイドは尊敬を感じ始めていた。

「……そう、失敗しましたか」
『はい。使った道具の処理はどういたしましょうか』
「いつものように。処分……いえ、せつかくですからもう一度試みて下さいな」
表情も変えず、ラクスはターミナルの者に命令した。

「やあ、君がルナマリア君か」

「あ、クルーゼさん！」

慌てて敬礼するルナマリア、それをクルーゼは押し留める。

「気楽に行こう、気楽に」

「あ、はい」

「君の、レジエンドを譲ってくれるそうだね」

「あ、はい」

「君には本当に感謝しているのだよ」

「え？」

「サイタマなどと言うモバイルスーツに乗らずに済んでね」
クルーゼはルナマリアにウィンクした。

「へえ、かつこいいなあ」

マユが言った。

「レイを大人っぽくしてみたみたい」

「お姉ちゃん、気が多いよ」

シンが突っ込む。

「マユ、その瞳の中に俺はいないのかい？」

「あ、ハイネさん。まーた冗談を」

マユは笑いながらハイネを軽く叩いた。

ネオ率いる大西洋連合地中海艦隊は、アルジェリアのオランを経て、ジブラルタルと対峙する位置にある、親地球連合軍が支配するセウタに入港した。同時に、ウエルバの大西洋連邦陸軍はイベリア半島南端タリファに進出する。

「さあ、はやく。今の内だ。僕らの代わりに本国を守ってくれ」
ケビンはタリアに言った。

「……わかりました。あなた方も無理はしないようにね」
ハッチの扉は閉められた。

今、ミネルバは宇宙へと旅立っていく！

「……」

「どうしたんだ？ 黙って？ 何か言いたい事があるからこの部屋に誘ったのではなかったか？」

クルーゼはアスランに尋ねた。

「……」

アスランは、迷ったように頭を左右に振った。

「人類絶滅を図っていたと言っるのは本当ですか？ そのために父を志操していたと」

「事実だ」

きつぱりクルーゼは言った。

「……！」

「もし君がザラ議長の仇を討ちたいというなら討たせてやっても良いが、残念ながら死ねない身体になってしまっただね」

「……まさか奥さんが!?! お子さんでもできたのですか?」

「ぷっ……ははは」

クルーゼは笑い出した。

「そう言う意味ではないよ。残念ながら。いや、君らしいな」

「なぜ、今は人類絶滅を凶らないのです?」

「そうさなあ」

クルーゼは考え込んだ。

「地球に住んで、地元の人達に溶け込んで、憎しみから解き放たれて……初めて色々な事を経験したよ。畑を耕したり、料理を作ったりする人々に、本当の生活を見た、気がする。プラントでの生活など砂上の楼閣さ。彼らの続いていく生活を守らなくてはと思った。

……そんな所だな」

「では、なぜまたザフトに?」

「友を援けるために。一言で言えばこれだな。それではだめかね?」

「……あなたを信用します。クルーゼ隊長」

アスランは以前と同じようにクルーゼに敬礼をした。

「部屋は、レイと使ってください。積もる話もあるでしょうから爽やかな笑顔を見せて、アスランは部屋を出て行った。

「やあ、シン」

「あ、アスランさん」

アスランは廊下でシンにはったりと出会った。

ふと、シンの首筋にきらめく物を見つける。

「ん? ネットクレス?」

「ああ、これ……」

シンはいたずらっぽく笑った。

「デューサーさんがプレゼントしてくれたんですよ」

「あいつが? シンに? 変な奴だなあ」

「初心ですよ、お話しするだけでプレゼントしてくれるなんて」

くつくつくとシンは笑った。

「もつともつとお話しすれば、もつといろんな物もらえそう」

「おいおい、シン」

「でも、アスランさんからもらった方が嬉しいなあ、僕……」

シンは上目遣いにアスランを見上げた。

「う……」

「いけね、アスランさんはお姉ちゃんのだっけ！　じゃあまたね、

アスランさん」

シンは廊下を走り去っていった。

「おい……ふう……」

アスランはその場に立ちこめていた妙な空気を振り払うように首を左右に振った。

「これからどうする？」

アグニスが尋ねた。

「そうですねえ。廻れる国は全部回ってしまいましたしねえ？」

「この戦争、どう終わると思う？」

「地球連合が勝つでしょうねえ？」

「うん、その後だ。もし地球連合が火星にとって都合の悪い存在となった場合、火星に報告せねばならん」

「そうですねえ？」

「待つしかないか」

アグニスはどっしり椅子に腰を下ろす。

「ええ、落ち着きましょう。待つのも、大事な指導者としての資質ですよ？」

「ああ、わかちやいるが……」

「そう言えば、ガルトさんとサ・スさんは艦を降りましたが、まほさんは？」

まほりんは自分宛に届いた箱を開けようと苦労していた。

「はい、カッター」

「あ、ありがとう」

箱から出てきたのは、お茶と和菓子の詰め合わせだった。

「あ、食べてください。実家から送られてきた物です。今、お茶入れますね？」

「あ、はあ。まほりん、ご両親お亡くなりになっていたのでは？」

「それは本当。荷物を送ってくれたのはおじいちゃん。和菓子屋さんだ」

「へえ！」

「でね、私は、前にも言ったけど私が軍にいるのってあくまで医大に行くお金がたまればおーけーなのよ。今更ここ出て危ない目に遭いたくないわけ。ゆーしー？」

「あいしー！」

「ほら、アイザック！ あんたの分も入れたから！ お茶飲みなさいよ」

「はあ」

「ザフトの戦況が悪くて心配なのもわかるけど！ お茶の時は忘れなさい！」

「はあ」

アイザックはまほの入れたお茶をずつとすすった。

少なくとも、この瞬間だけは、和みを感じた。

ミューデューは焦っていた。実力では勝っていると思っていたナイトハルト・ミラーに言い様にやられている。

ミラーは対戦開始後全力を持ってミューデューのスローターダガーに打撃を与え、後は防御一辺倒である。

ミューデューは状況を打開しようと色々試みるが、すべてミラーに

防がれてしまう。

そして時間切れが来た。

「ふう」

ヘルメットから頭を抜き出すと、ミューデーはため息をついた。コンピュータの探点役3人全員がミラーの勝利と判定していた。

「ずるいよ、ミラー。防御専念なんて」

「あれこれしようとする姉さんに付けこまれますからね。亀にならせて貰いました」

「さすがは『鉄壁ミラー』だな」

スウエンが顔を出した。

「もし、ミラーがいなかったら、ユニウス7落下の時の戦闘で俺達はやられていたかも知れんぞ」

「ま、そりゃそうだけど」

「しかし、意外といいコンビになるかもしれないな」

「なんの話よ？」

「フォーメーションの話だな。こういうのはどうだ？」

スウエンが示したのは次のようなものだった。

前衛

ミューデー・ホルクロフト

ナイトハルト・ミラー

中衛

ジョン・デイカー

原田左之助

後衛

スウエン・カル・バヤン

シャムス・コーザ

「ふーん。ミラーの防御能力で敵前衛の一人は無力化できるわけね？ いいんじゃない？」

「一人とも限らんぞ。もつと出来るかも」

「いいかげんな所で勘弁してください。ユニウスの時は相手2機相手が精一杯で、3機目が来た時思わず救援呼んじゃったんですから」

「ま、頼りにしてるわよ！」

「しかし、ワシが中衛と言うのも気に入らんのか」

原田はぼやいた

「ばつさばつさと敵を斬りたいものだが」

「いや、原田さんは、前衛か中衛まで幅広く見てもらうと言う事でお願いします」

「ふーん。なら、まあいいかのう」

「ところで私だが」

「ジョンさん。何か？」

額に汗を浮かべながらスウエンは言った。

「いや、最近疲れ気味なんだ。無性にダガーの黒く塗ってある実体剣で敵を切りまくりたくなってるね。なぜだかそうすれば疲れが取れるような気がするんだ。それだけだ。いや、中衛でかまわない。」

「はあ」

スウエンはため息をついた。

「中間管理職はつらい……」

「だから、オーブは中立を守るべきなんだ！」

タキト・ハヤ・オシダリ三佐は同僚に向かって怒鳴った。

「だってよお」

「だいたいエーゲ海での損害はなんだ！ そもそも地球軍のいいな

りになつてこんな所にまで来なければ！」

「仕方ないじゃないかあ」

同僚の口調がタキトの正義感に火を付けた。

「オーブの理念を平然と破る無能な指導者であるユウナ・ロマ・セイランの横暴をこれ以上許すのか！ 立ち上がるべきだろう！？」

俺達が立ち上がればきつと！！」

「おい！」

その時、声がかかった。

「あ……はあ！ トダカー佐！？」

「何を物騒な事を言っている。聞き捨てならんな」

「い、いや、自分はそんな！」

「タキト・ハヤ・オシダリ三佐。上官侮辱罪により二尉に降格とする！ 以後気をつけるように！」
そう告げるとトダカは立ち去った。

決戦を前にしてのタキトの言動は反乱煽動罪、あるいは利敵罪に問われる物だったかも知れない。場合によっては銃殺刑になるほどの重い罪である。上官侮辱罪とし降格で収めたのは、エースパイロットであるタキトへのトダカなりの温情だった。

だが、タキトはただ屈辱に震え悔しそうに歯を食いしばっていた。

第52話「不沈戦艦強奪作戦発動<12>

「いよいよだな」

「ええ、いよいよジブラルタルです」

ロゴスの会合が、また開かれていた。

出席していないのは、パリで暴徒に殺されたサノレコツ、そして内戦が続くイベリア半島のミリオ・ボティン、マルチ一族（付け耳無し）と言った財閥である。

「ようやく……」

メンバーの一人が感に耐えないように言った。

「ようやく終わるのだな」

「カーペンタリアがありますからね」

冷静な声言う。

「プラントと大洋州が繋がっている限り、戦争は続く」

「カーペンタリアは、落とせるのかね？」

「いや」

ここで、ジブリールは口を挟んだ。

「ジブラルタルからボズゴロフ級が何隻も出航し、輸送機やシャトルも頻繁に飛んだそうです」

「カーペンタリアは相当強化されていると見たほうがいいな」

「ええ。試算では、直接プラントを攻めた方がまだましと。それに、核兵器の存在も考えに入れねば……」

「話は変わるが、マドリード政権、落とせるのかのう」

「う……む……」

ジブリールは唸った。マドリード政権は意外な耐久力を見せているのだ。

「まあ、主要な沿岸都市はこちらの物です。セビアの指揮官とは戦後の約束も出来ている。ジブラルタルさえ落とせばいいのでは？」

「そう言う事か」

「スカンジナビアも存外不甲斐ない」

「そういうな、久方ぶりに戦った軍だぞ」

「では、話をまとめましょう。ジブラルタル攻略の後は、最低限の防衛隊を残し、海上部隊はカーペンタリアの包囲に加わる。その他は宇宙へ送り込むと言う事でよろしいですか？」

「「異議なし」」

「ふうむ。宇宙では……ドラグーンがプロヴィデンスより若干少ないが！」

レジェンドのドラグーンが宇宙に踊った。

無論、シミュレーションである。

次々に破壊されていくザフトのモビルスーツ。

ハインは本気で悔しがっていた。

無事だったのは、ドラグーンの届く距離では無い所からすばやい動きで位置を変え、M2000GX 高エネルギー長射程ビーム砲を打ち込むアスランのデステイニー、ついに主な大型ドラグーンを叩き落とし、格闘戦にまで持ち込んだが、長大なアロンドイトビームソードで格闘戦をやる不利を悟ったのか、その後は距離を取ってシミュレーションが終わる。

「なかなか考えたな。昔の君なら、まっすぐ突っかかってきたろうに」

クルーゼはアスランの肩を叩いた。

「からかわないでください。引き分けに持ち込むのがやっとでした」

「だが、君の主武器はそのままだ。君の勝ちだ。上達したな」

「いやあ」
アスランは照れた。

次に善戦したのは、同じく距離を取り、時折本体をM106 アムフォルタスプラズマ収束ビーム砲でけん制しながら、まずは回避専念して決してドラグーンには囲まれずに攻撃を一個のドラグーンに集中し、隙が表れたらM A - 7 B スーパーフォルティスビーム砲を連射しドラグーンを一つずつ潰していくセイバーのルナマリアだろうか？

クルーゼはとうとう、M A - M 8 0 S デファイアント改ビームジヤベリンで格闘戦を挑んだが、ルナマリアはそれには乗らず、機動力を生かして避け続けた。

「君の機動もたいしたものだ。レジエンドの弱点を突いているというか、勘がいい」

「ありがとうございます」

ルナマリアは嬉しそうな顔で答えた。

「君ならレジエンドでどう戦う？」

「ドラグーンの距離まで近づいて、一気にドラグーンで逃げ場を作らせず四方八方から止めを刺す、でしょうか。レジエンドは、前に出るべきではありません。中距離からの支援攻撃こそ真価を発揮するでしょう」

「ふむ。君の機体とは相性が悪かった訳だ。参考にしよう」

プラント某所

「ラウ・ル・クルーゼか。よい時に復活してくれたものだ」

「だが、クライン派のデュランダルと親しいと言っぞ」

「逆に考えればよかるう。利点になる」

「これは、ザラ派の復活の狼煙だ！」

「アスラン・ザラ。ジェフリーからもラッドからも悪い噂は聞いていない。早く政界に送ってやりたいと言っておったな」

「ふん、エザリアの息子はさっさと前線に戻ったか。せつかく政界に送ったのに。猪武者だったか」

「エザリアの息子はあのラクス・クラインに近すぎないか？ 個人的に崇拜していると聞いている」

「アスランはどうなのだ」

「ラクス・クラインに強い憎しみを抱いているようだ、情報が入っている。ミネルバの同士からの報告だ」

「だが、アスラン・ザラも戦場の勇者で終わるんじゃないかな？」

「前戦役の情報では思慮深いそうだ。時には戦闘に不利を招いてしまっただけに。資質的には軍人より政治家向きかの。上に行くほど真価を発揮するだろうと。本人のためにもさっさと政界に行ってもらった方がいいな」

「まずはミネルバで武勲を立てて指揮官に、と言っのはどうです？」

「よいですな」

「賛成」

「では、会合を終わるとする。クライン派には気をつけるよ」

「ラクス様、ダコスタからの報告です。あのラウ・ル・クルーゼが生きていたようです。彼はザフトに復帰、フェイスです。上級指揮官になるでしょう。それに伴ってアイリーン・カナバは拘束されたようです」

ノイマンがラクスに告げた。

「……まさか生きていたとは」

ラクスは指を齧る。

アイリーン・カーバはラクスがプラントに持つ有力な協力者だった。ラクスにとつては打撃と言える。

「……いいでしょう。それはそれで。プラントの支配権を握ってしまえばなんともなりません。あなたの方は？ ノイマン？」

「は？ なにか？」

「もしかしたら、わたくしがクルーゼを部下にするかもしれませんが？ あなたはそれに我慢できますか？ ドミニオンからの救命艇を破壊した相手に」

「いえ……彼がバジール中尉を殺した訳でもない。それに、私はドミニオンの生き残りを手にかけた男ですよ？」

無表情にノイマンは言った。

先の戦役時、終局。ドミニオンからの救命艇……唯一宇宙服を着けていて助かったパイロットがナタル・バジールの最後の模様を伝えた。

ノイマンはその男を、『艦長とはいえ女一人を残して命令どおりおめおめ脱出したのか』と言って即座に射殺した。

「ふふ……恨むのはマリユー・ラミアスで十分ですか」

無邪気そうにラクスは微笑んだ。遠目から見れば仲の良い友人同士が話しているように見えたかもしれない。

「それほどまでに愛されて、ナタルさんは幸せでしたわね」

ラクスはため息をついた。

「ラクス様こそ、キラ・ヤマトと相思相愛ではありませんか」

ふつとラクスの表情に陰りが走った。

「キラは……本当にわたくしを好きでいてくれるのでしょうか？

病気が治ればどこかへ飛んでいってしまいたいそうなの……」

「あなたらしくもない。『自分には世界平和という志がある。そのために手を汚す覚悟もあるから着いて来てくれ』と言ったあなたはどこへ行った。恋如きで迷うな。目的のためにどんな手も使うと決心したのなら、何も躊躇うな怖むな、幾千幾万の血を流そうと平然としている。そのために罵られ憎まれ、全身を血で染めようと立ち

止まるな」

冷然と言える口調でノイマンは言った。

「ふふ……恋愛に一番捕らわれているのはあなたではないですか」
少し嬉しそうな表情でラクスは笑う。

「……我々はこんな話しをする間柄ではない」
再びぶつきらぼくにノイマンは言った。

「それよりラクス様、人員はターミナルを通じて集まってきたのですが、物資が足りません。モビルスーツあたりはジャンク屋からなんとかなるのですが……艦船が」

「あらあら、それはこまりましたねえ」

ラクスは右頬に人差し指を突いた。

「ええ、困っているですよ」

「では、ごうしましょう！」

ラクスは両手を合わせて笑った。

そして 手を打ち合わせる。

「服部正吾！」

いきなり、ラクスの前に中年の男性が姿を現した。

「ど、どこから？ セキュリティはどうなっているんだ！？」

その疑問に答えるようにラクスは言った。

「ふふふ。さすがにノイマンも驚きましたか？ この服部正吾は伊賀忍者として有名な服部半蔵から数えて25代目に当たる伊賀流忍法の末裔なのです」

「はあ……」

「服部正吾、あなたに100名のSPを与えます。月で竣工したと言う地球連合の不沈戦艦『プリンス・オブ・ウェールズ』を見事に強奪してくるのです！」

「はっ」

「作戦には私も参加しますわ」

そう言うとラクスは上着をばさつと脱ぎ去る。そこには、クノイチ風の服をまとったラクスの姿があった。

「では、な。死ぬなよ、レイ」
「はい」

どうしてもその言葉を口にしたかったのだろう。クルーゼはレイに話しかける。

「一族に加えてもらえるまでは、死にませんよ」
「ふ」

クルーゼはレイの髪をくしゃっと撫でるとランチの方へ進んでいく。ここでミネルバとクルーゼは別れるのだ。ナス力級3隻を率いてクルーゼ隊を率いる。すでに決まっている事だ。

ランチは離れていった。

「せっかく会えたのに、ねえ。話、一杯出来た？」
マユがレイに尋ねる。

「絶対、また会うさ。明日を、希望を貰ったからね」
レイは明るい声で言った。

いよいよジブラルタルに対し攻撃が始まった。

基地の左右より、フォビドウン・ボーテクス隊が上陸を試みる。

陸上からは、陸軍がタリファからアルヘラシスへ陣を進める。そこからへもジブラルタルは注意を払わねばならなかった。

両軍の水中用モビルスーツ同士で戦闘が始まる。

完全なる水中の戦いで、意外と役に立ったのは上陸戦も考えていた、陸上用兵装の多い新型機アッシュよりも、魚雷などの武装が多いグーン、ゾノだった。

だが、その抵抗も数時間すると弱り始める。

「次への準備、よろしいですか？」

ユークリッドに乗ってネオが問いかける。

「計画に変更は……ありません」

「では、ユークリッド隊発進！ 敵戦闘機部隊を軒並み潰してやる
うぜー！」

「ラジャー！！！！」

まずはユークリッド隊で全てを編成すると言うこのネオの策は当たった。ジブラルタル基地も、出撃させてきた全てを戦闘機で揃えてきたのである。

だが……爆撃機相手ならともかく……ユークリッドの相手はつらすぎる。

「ふ。ユーロファイタータイフーンか」

親ザフト軍から供給されたのだろうその機体。

後ろに着かれる。ネオは急降下に入る。ユークリッドは丈夫な機体だ。急降下速度も速い。ユーロファイタータイフーンが耐え切れずに機首を返す。そこを、坂井だろうか？ 西沢だろうか？ 列機が止めを刺す。

デイン、バビを初めとするモビルスーツも出撃するが、ユークリッドのビームシールドに攻撃が弾かれる。そしてユークリッドの機動性の前では単なる的である。

グフも現れるがユークリッドはグフのテンペストの攻撃範囲に入らない。遠距離からビーム砲で仕留めてしまう。

「こちらカラミティのスキュラにも耐えるんだよ！ グフのビームガンなど！」

グフが苦し紛れに放ったドラウプニルはユークリッドのビームシールド

ルドに簡単に弾かれてしまう。

ザフトのモビルスーツは無力感に苛まされていた。
その時。

地上から、大威力のビーム砲がユークリッドのビームシールドがない下腹を狙う。

ガナーザクのオルトロス高エネルギー長射程ビーム砲だ。

「あぶねえ、あぶねえ。おい、皆、時間だ。撤退するぞ」

ユークリッドとて無敵ではないのだ。前面以外を攻撃されれば、被弾する。

ネオ率いるユークリッド隊は引き上げていった。

そして、迎撃戦闘機が補給のために帰還した時、ネオの第二の罠は口をあけた。

アルヘシラス、そしてセウタから、ハソス「ウノレソツヒ・ノレーデノレ大佐率いるA-30対地攻撃機、通称サンダーボルト?。総勢20機がユークリッドの護衛付きで出撃してきたのである!

ザフトの迎撃機は、先の戦闘でやられるか、補給中である。

A-30対地攻撃機はろくに阻止攻撃も受けず、空港施設を狙い、その機能を消失させた。

ちなみにノレーデノレ大佐はボスゴロフ級を一隻撃沈した。おまけで敵機も撃墜した。これは彼にとってはほんの余技である。

「さあ! まだまだいくよお! もう獲物はないかもしれないけどね!」

ミューデーは機体のスローターダガーを発進させた。

とうとう地球軍のモビルスーツがジブラルタルに上陸したのだ。

スウェンのストライクノワール以外はスローターダガーだ。

海岸で、空爆にやられたのだろう、右腕が故障したザクが動いている。向こうでは、新たなアッシュの一团が地球軍の迎撃に向かっている。どうやら、アッシュの武装を考えて水中用途はおまけだと割

り切ったようだ。

「悪いけど！ 手加減できないわ！」

ミューデーはその右腕が故障したザクに正対すると、死角へ死角へと動き、ついにコクピットにビームサーベルを突き刺した。

ミューデー達が上陸した事で、これ以上の空爆はないと判断したのだろう。空爆を耐え切ったバンカーからザクが、グフが、ガスウート、そしてザウートまでもが出撃してきた。

「ミラー、防御専念！」

「はいはい、モード、パサラにゆう！」

敵の目前まで来て攻撃するでもないミラー。それに苛立ったのだろう。複数のザクが寄っていく。

「姐さん！ こんなに無理っす！」

「わかってる！ 原田、前線に突撃！」

「ふふふ、斬り捲ってやるわい！」

「スウエン、フォローお願い！」

「ああ」

「今日は俺だつて！」

シヤムスがスローターダガーで前に出る。

ヴェルデバスターが乗機と言う事で射手としてのイメージが強いが、近接戦闘も巧みにこなすオールラウンダーだ。

「やはり黒い剣は血を吸いたいようですね、ふふふ」

デイカーも前進する。

「シヤムス、デイカー」

冷静な声がそれを止める。

「お前ら、ミューデーとあっちのアッシュ部隊の方へ叩き潰して来い。ここは足りてる」

「はいよ」

「ジョン、相手はビーム兵器を持っている！ 両手のクローにも気

を付ける！」

シャムスがアツシユの特徴を仲間に伝える。

「おーけー」

「射手なめんな！」

シャムスは少し離れた場所から肩肘を突いて320mm超高インパルス砲「アグニ」を構え狙撃の姿勢を取る。

「やりい！ 一機撃破！」

アグニに撃破されたアツシユを見てミューディーが歓声を上げる。

「ミューディー、デイカー。支援する。思い切りやれ！」

「おおー！」

デイカーはお気に入りの黒い剣でアツシユをぶった切る。

「おおー！ 相手突き刺すと力が湧いてくるようだ！」

シャムスはミューディーとデイカーを狙うアツシユを狙撃し続けた。

戦いは海岸から地上へと移っていく。歩兵がモビルスーツの援護で突入していく。

「すべてはナチュラルどもがもたらした災厄だ」

またあいつか……

シユタウフェンブルクは不機嫌だった。

チビの緑服が演説している。

シユタウフェンブルクはこの自分よりも20以上も年上のちょび髭を付けたチビの緑服が嫌いだった。

チビと言うのは言い過ぎであろう。中肉中背と言った所か。前戦役時はザフトの上級指揮官でザラ派の上層部にいたらしい。だがナチュラル嫌いのチビ、で皆には通っていた。

実は、シユタウフェンブルクは第一世代だったのだが、チビの緑服

はそれを知らずにいた。

「今、我々、優秀なコーデイネイターがこうして苦難の道を歩まされてきているのはなぜか？ 皆ナチュラルの陰謀だ！ 前の大戦でプラントが敗者の立場に追いやられたのは、我々コーデイネイターが優秀ではなかったからなのか？ それとも努力が足りなかったのか？ 違う！ 断じて違う！ 国内の裏切り者ども、薄汚いナチュラルに買収された輩が結託し、背後から我々を刺したのだ！」

大したもんだ、とシユタウフェンブルクは思った。演説に関しては、中隊長の自分よりもこのチビの方がよほどうまい。ザラ派で伊達に指導的な立場に居たわけではないらしい。現に虚脱状態に陥りつつあった部下達に、ある種の活力が戻りはじめていた。

「中隊長殿！」

歩哨に立たせていた二人の部下の内一人が息せき切って駆けてきた。

「敵のモビルスーツがこちらに！」

「何？」

だらしなく座り込んでいた兵士達は感電したように飛び起きた。

「道路を挟んで、中隊を散開させる！」

そう命じたシユタウフェンブルクに兵士達の恨めしそうな視線が集中する。

その目は、モビルスーツも無いただの歩兵に、モビルスーツに対抗できるわけ無いじゃないか、無駄死にはごめんだと、無言のうちに語っていた。

「貴様ら！ 中隊長殿のご命令が聞こえなかったのか？ さっさと持場につけ！」

チビの緑服が大声で叫んだ。

すると、しぶしぶながらであるが、兵士達が動き出した。

俺の命令よりも、チビの緑服の方が効き目があるとは。これでは誰が指揮官かわからんな。

シユタウフェンブルクはなおも不機嫌になりながら、指示を出した。重機関銃で敵歩兵を撃ちすくめながら、対モビルスーツ肉薄攻撃をする。勝機はそれしかない。問題は、対モビルスーツ攻撃用の爆薬が3個しかない事であった。

その時、敵陣から銃声が響いた。それはおそらく威嚇だったろう。だが、シユタウフェンブルクの部下達はそう取らなかつた。止めるまもなく射撃が始まってしまった。

敵モビルスーツが上方から、銃弾の雨を降らしてくる。

シユタウフェンブルクは、援護射撃を命じながら、2名の部下に対モビルスーツ肉薄攻撃を命じた。敵の歩兵の制圧ができていない状態では無謀なのは覚悟の上だ。

彼らは、匍匐前進しながら、左右からじりじりと進んでいく。

胃液がこみ上げるような不快感に耐えながら、シユタウフェンブルクはその光景を見ていた。

モビルスーツは視界が高い。同じモビルスーツに気を取られがちだ。遮蔽物も手伝って、二名の部下はモビルスーツまで10mまで接近した。

「いいぞ！」

そう思った時だった。敵の歩兵に気づかれてしまったのだ。彼らは集中射撃を浴び、二人とも動かなくなってしまった。

俺が行くか！

シユタウフェンブルクが爆薬を手にとった時だった。彼の肩をがちりつかむ者がいた。

「中隊長殿、あなたはまだ若い。それは私のような年寄りの役目です」

そう言うと、チビの緑服は力尽くで奪うようにして爆薬を取り上げた。

「明日のプラントのために生きてください。では！」

その一言を残し、にこりと微笑むと、チビの緑服は飛び出していった。

前大戦でなんども死線をくぐり抜けたと豪語するだけに、彼の動きはすばやかだった。もう初老と言っていていくらいの年齢を感じさせずに、地形を巧みに利用しながら、敵モビルスーツに接近していったが、投擲動作に入ろうとした瞬間、敵機銃が火を噴き、彼はのけぞって倒れた。

「駄目か……」

シユタウフェンブルクだけでなく、全員が絶望のうめき声を上げた。が、彼は被弾したものの、まだ死んではいなかった。最後の力を振り絞ると、爆薬に点火し敵モビルスーツの足下に我が身を投げ出したのだ。

数秒後、轟音が響いた。

敵モビルスーツは片足を失い、地面に倒れ込んでいた。

それに動揺したのか、敵の歩兵も射撃を中止して退却する。

シユタウフェンブルクの頬を涙が濡らしていた。

彼はチビの緑服の墓標となった敵モビルスーツに向かって敬礼した。「我々は、君の事をけして忘れない。勇敢なるアドルフ・ヒトラーの事を……」

第53話「不沈戦艦強奪作戦発動<13>

サハロフは、海岸の方は大変だろうな、と思った。

彼は沈没したボズゴロフ級の生存者である。

彼ら、漂流生存者大隊は、内陸部に配備されていた。

海岸の味方が壊滅しない限り、この陣地へは攻撃はこないだろう。
だが……

いかに陣地を作られていると言っても、この程度の陣地では艦砲、そして大型ミサイルの攻撃には耐えられない事を曲がりなりにも水兵であるサハロフは知っていた。

サハロフのいる機銃座には射手を命じられた彼を含め5人の人間が配置されていた。その中に、『鉄の男』との異名で知られるヨシフ・ヴィサリオノヴィチ・ジュガシヴィリがいた。彼はザラ派の強硬派として知られていた。

サハロフは乗艦が沈没する際、ジュガシヴィリに命を助けられていた。老齢で、しかも片足が不自由だというのに、彼は救助されるまでの間、気絶したサハロフを抱えて洋上を泳ぎ続けてくれたのだ。サハロフは鉄の男に深く感謝し、同時に信頼するようになっていた。鉄の男と一緒にいる限り、どんなに苦しい状況でもなんとか切り抜けるように思えるのである。

その時、サハロフは、硝煙とは異なる煙が漂いはじめたことに気づいた。

「が、ガス!？」

彼の声は恐怖のあまり、上ずっていた。ガスマスクの数が足りず、この部隊までは行き渡っていなかったのだ。

こんな密閉された空間においてガス攻撃されたら、まず助からない。

「ど、どうしよう」

「落ち着け」

そう言う鉄の男の声は冷静そのものであった。

「で、でも……」

一刻も早く脱出すべきだとしか、サハロフには思えなかった。

「毒ガスじゃない。発煙弾だ」

確かに、濃密な白い煙の中で、味方の歩兵は咳き込みながらも、普通に動いている。

ふうつと言う安堵のため息が、一斉に漏れた。

「油断するな。来るぞ」

「えっ、なにが？」

「何のために、敵が煙幕を張ったと思う？ 突撃支援のために決まっているではないか！」

「来た！」

悲鳴が上がった。

白煙の向こうで、黒い影が動いている。

敵か？ 敵なのか？

「撃て！」

鉄の男が叫ぶと同時にサハロフは機銃の引き金を引いた。

命中しているのかわからぬまま、サハロフはひたすら撃ち続けた。

と、カラン、と射撃用の開口部から飛び込んできたものがある。

手榴弾だ！

サハロフは一瞬にして悟った。

もう終わりだ！

サハロフは覚悟した。

その時、ジュガシヴィリがその身をもって手榴弾の上に覆い被さるのを、サハロフは見た。

ず……んと言う腹に響く音がした。キーンと耳鳴りがする。だが、サハロフはまだ生きていた。

「鉄の男！ スターリン！ スターリン！」

サハロフは腹の下を血で濡らしつつあるジュガシヴィリに駆け寄った。

ジュガシヴィリの口元がわずかに動いた。

「なんだ？　なんて言ったんだ？」

「……神よ、今御許に参ります……」

それがジユガシヴィリの最後の言葉だった。無神論者が多いコーデイネイターらしくない最後だった。

「くそう！　スターリンの仇だ！　ナチュラルども皆殺しにしてやる！」

再び、機銃の引き金を引こうとした彼を、仲間が押さえつけた。

「なにしゃがる！　邪魔するな！」

「大隊本部からだ。射撃中止命令が出た」

「な、なんだつて！？」

「降伏したんだとよ」

外を見ると、薄れはじめた煙の中、友軍が武器を放り出して両手を上げて地球軍の方に歩いていく。

「じゃ、スターリンはなんのために……」

サハロフは力尽きたかのようにうずくまり、声を出して泣きはじめた。

その肩に仲間がそっと手を触れる。

「せっかく、スターリンが我が身を犠牲にしてまで救ってくれた命だ。大切にしよう」

それを聞くと、サハロフの泣き声はますます大きくなった。

「おめでとつございます」

「おめでとつございます」

「おめでとつございます」

ネオ、ユウナ、そして大西洋艦隊の司令長官は杯を干した

ジブラルタルは戦闘の傷跡が多いのでセウタで戦勝パーティが開か

れている

「これで、祖国に帰れるかと思うとほっとしますな」

「ああ、オーブ艦隊はカーペンタリアの封鎖に加わるのでしたっけ」

「ええ、ですが、大分楽が出来ます」

「われらもこれからは最低限の海軍力を残して、カーペンタリアに向かわねばなりませんからなあ、その時はぜひ」

「ええ、歓迎しますよ」

「ま、私もどうも宇宙に帰りそうで」

ネオが言った。

「それはそれは」

「宇宙でもご活躍される事でしょう」

「そう願いたいものです」

この日、地球軍は浮かれていたのだ。本当に

「あれほど修行をして、棒形手裏剣を使えるようになったのが1割とは！」

訓練を負かされたSP達の体たらくに服部正吾は嘆いていた。

「いやいや、棒形手裏剣は難しいですから」

副官が宥める。

「しかたない。棒形手裏剣を使えないものには星形手裏剣を配るよ
うに！」

「はっ！」

「では、ミラージュコロイドを使った船で地球軍の月基地近くまで
行くぞ！」

「ユニウス条約違反では？」

「我々はユニウス条約から外れた存在だろう君い」

そうであっても守るべき物もあるだろうと副官は思ったが何も言わなかった。

「ふっふっふ。こんなに月基地まで近づけるとはな」

「地球軍も油断してますね」

「進水式直後の戦艦を奪ってやるのだ。痛快だぞ」

「はあ」

「では、作戦開始！」

闇夜に溶け込む濃紺色で固めた宇宙用スクーターで皆は出発した。リーダーもこれほど小さな物が進入してくるとは考えていない。

皆は忍者熊手を使って艦内へ乗り込んだ。どうやったのかはわからないが。おそらくロック解除の機能でも仕組まれているのだろう。

「誰何！」警備員の声が消える前に、服部正吾の棒形手裏剣が警備の者の喉に突き立っていた。

なにしろ100人で1400人を殺さねばならないので大変である。

「声を出させるな！ 静かに死んでもらえ！」

服部の指示が飛ぶ。

賑やかな声がある。娯楽部屋のような。

「ようし、催涙弾、投擲開始！」

「はい！」

部屋の中に、催涙弾が投擲される。

ゴホゴホと咳き込む声がある。

「今だ！」

ガスマスクを着けた服部達が部屋に突入する。

服部は棒手裏剣で苦しんでいる。地球軍兵の止めを刺していく。

わざわざ手裏剣で止めを刺さなくても、消音ピストルでも使った方がいいのでは？ と考えた者もいるがもう何も言わない。

ぐさー！

棒手裏剣を投げずに、地球軍兵を刺し殺している者がいる。ラクス

だ。

「ラクス様！　ラクス様が手を汚される事など……」

「わたくしは、部下にだけ危険を犯させて自分だけ安全な場所にいるのがもう我慢できませんの。許してくださいませいね？」

そう言いながらラクスはナイフを突き刺す手を止めない。

「うっうー感動した！」

服部は感涙に咽んだ。

その時、銃声がした。

「誰だ！　銃を撃つたのは！？」

おどおどと、女性隊員が前が出る。

「ヒルダ、貴様か！　銃は最後から二番目の武器と言ったろうが！」

「は、はい。ごめんなさいい。……あのう、最後の武器はなんなんですか？」

「決まってるじゃないか」

あっさり服部は言った。

「核爆弾だよ、君い」

服部はにやりと笑った。

服部達はこの調子で艦橋に入り、艦長も手裏剣で仕留めた。

その時艦内通信が入った。

『隊長！　見つかってしまいました。機関部です！』

「なにー！」

服部は阿修羅のような形相になった。

「3名、艦橋に残れ。地球軍をごまかし続けるんだ」

「はー！」

服部達は機関部に向かった。

そこでは銃撃戦が起こっていた。

「くっく。忍者が銃撃戦などなんと無様なのだ！　催涙弾投擲！」

2・3人が投擲しようと立ち上がった所を撃たれる。だが、一人が

投擲に成功し、地球軍は混乱し始めた。

「こうするのだ！ よく見るがいい！ 伊賀忍術の真髄を！」
服部は突入し、棒手裏剣で止めを刺していく。

……結局1400人の乗組員のうち、半舷上陸で半分しかいなかった事もあり、午後9時頃SP部隊の侵入を受けた『プリンス・オブ・ウェールズ』は午後11時に制圧された。当然、約700名の乗組員はピストルで射殺されたごく一部を除き、全員が手裏剣で皆殺しにされたのだ。

「隊長、生き残りが59名しかいません！ これでは操縦が！」

「伊賀忍術を使えばなんとかなる！ さっさと配置に付かんか！」

「はい！」

「時間だな」

服部は時計を見た。

月基地に突入した時に使ったスクーターが一齐に爆発した。積んでいた核爆弾も一緒に

月基地は大混乱に陥った。

「この隙だ！ 脱出する！」

「はっ！」

こうして『プリンス・オブ・ウェールズ』は脱出を果たした。

「大変です！ 1隻、我が艦を追跡してくる艦があります！ 熱紋

照合、ネルソン級『レパルス』！」

「ふうむ、さすがに簡単に逃がしてはくれんか。主砲、発射用意！」

「相手はネルソン級ですよ、モビルスーツが出撃してきますう！」

だが、対空戦艦として設計された『プリンス・オブ・ウェールズ』

はその真価を発揮した。今までの味方に向かって。

「敵モビルスーツ撃破！ あは！ あは！」

針鼠のように増設されたビーム砲は、次々とモビルスーツを絡め取っていった。

そして……

「ええい、射撃とはこうするのだ！ 伊賀忍術の精髓を見る！」
服部が主砲の管制を取る。

「あ、我が艦の主砲、敵戦艦に直撃！」

ネルソン級と言えど、『プリンス・オブ・ウェールズ』の225cm2連装高エネルギー収束火線砲「ゴットフリートMk・72」に耐える事は出来なかったのだ。

レパルスは、爆散した。

「やったー！ やったー！ やったー！」

浮かれる乗員の前で、服部は沈んでいた。

「明日はわが身……死して屍拾うもの無し。それが伊賀者の生き様よ」

服部はつぶやいた。

一週間の韜晦航路の後、『プリンス・オブ・ウェールズ』は『エタール』と合流した。

マリューはラクスを迎えにいったが、すさまじい臭いに鼻をしかめる。なにしろ700名の敵乗組員の死体も一緒に運んできたため死臭がひどかったのである。

マリューはラクスに、顔をしかめて

「先に、風呂と着替えを……」
と言うしか出来なかった。

結局マドリードはジブラルタルが落ちても長期持久体制を崩す事はなかった。

地球軍はスカンジナビア軍を主体とした軍隊で北西から、フランス軍を主力とした軍隊で北東から圧力をかけるに留め、ジブラルタルには最低限の守備隊を置き、撤退する事になる。

「オーブに着いたら、観光スポットを案内しますよ。命の洗濯も必要でしょうからね」

「ははは、それはありがたい」
ユウナの台詞にネオが答える。

一週間後、南アメリカのホーン岬を廻ってオーブ艦隊はついに長い航海を終え、帰国を果たした。

「ユウナ！」

カガリがユウナに飛びついてきた。

「無事だったか。心配したぞ」

「あはは、君の姿をもう一度見るまでは死ねるもんかとね、頑張ったよ」

カガリの頬が赤く染まった。

「ひゅー」

ネオが口笛を吹いた。

「若いつてのはいいいねえ。いや、仲がいいのは結構な事だ」

「ともあれ、ご苦労様でした」

マシマ・タツキがネオに挨拶をする。

「ネオ・ロアノーク殿もご苦労様でした。ささやかながらジブラルタル解放パーティーが整っておりますので」

「わかった」

「では、トダカ」

「はっ」

「君のおかげでほんの予備仕官だった僕も無事に任務を果たせた。

礼を言うよ」

「いえ、私こそ、ユウナ様とご一緒できた事を光栄に思います。オ
ーブを離れ、あちこち見物できました。ジブラルタル攻略という大
作戦にも参加できた。もうすぐ生まれてくる孫にいい昔話ができる
でしょう。ひまになったら回想録でも書きましようかな。はは……」
「ではな。兵達も労ってやってくれ」
「はっ」

「君ねえ、ステディがいるって、いい事よ？」

パーティーで酔っ払ったネオがユウナに絡んだ。

「あなたこそ、地球軍大佐。お見合いの一つ二つあるでしょうに」

「それがさっぱりなくてねえ」

「そりゃ、やっぱり猫の仮面のせいじゃないですか？ 妙なんです
よ、やはり」

「うっ。まあ、傷跡を隠していると言う理由もあるが、被っていると
便利なんだよ」

「便利？」

「嗅覚と聴覚が猫並になる。暗視も利くぞ」

「そりゃ便利でしょうけど」

ユウナは苦笑した。結局ネオは女性が怖いのではないのか。

こんな妙な人を気に入ってくれる人は果たして現れるのだろうか？
神ならぬユウナは、それが結構間近なのに気がつかなかった。

「な、なあ、今、なんて言ったんだよ？」

タキトは恋人のリンナ・セラ・イヤサカの言葉を信じられない思
いで聞き返した。

「だから、あなたにはあたしよりもっと合う人がいるんじゃないか

なあって」

「そ、そんな事ないって！ 君だけだよ！ 君しかないんだ！」

「……うざい。はつきり言おうか？ 降格されるようじゃなかったわるい人、あたし、嫌いな。二尉ごときであたしと付き合おうとすんじゃないよ！ じゃ！」

……タケミカツチに戻り、デッキからぼんやりと海を見つめていたタキトは、不意にぽん、と肩を叩かれた。振り向くと、アマギ一尉がにこりと微笑んでいた。

ネオの艦隊は修理などに一週間オーブに滞在した。

「いやあ、ジャングルが続くねえ」

ネオとスウェン達はカガリ、ユウナ達とソロモン諸島のファロ島に冒険しに行った。これもユウナ達にとっては接待である。

「ジャングルを抜けると、それはきれいな浜辺に出るんですよ」

その時、突然カガリの体が宙に持ち上げられた。

「なんだ、あれは！」

「ゴリラ？ でもあんな巨大な！」

巨大な7メートル以上あるゴリラがカガリを捕まえていた。

「ファロ島の『巨大なる魔神』と呼ばれる生き物ですよ。本当にいたなんて！」

ユウナも、呆然としている。

「あはは！ キングゴングは美女にしか興味がないと言われている！ 私は美女と認められたのだ！ はははは」

巨大なゴリラに捕まえられたカガリは、ハイになっていた。

が、しばらく経つと興味を失ったように、キングゴングはカガリをぼとりと落とすと森の中へ去って行った。

「いやあ……あれを見ただけでもここに来た甲斐があつたねえ」
ネオは感慨深げに呟いた。

「そんな事より私を助ける……！」

木の枝に引つかかったカガリが叫んだ。

一週間後、オーブに、日本での最終艦装が終わった地球軍の改アー
クエンジェル級『ガルガリン』が到着した。

「貴様が司令官か！ ワシが艦長の大官寺じゃ！ この艦はいいぞ
う！ 大船に乗った気でいる事じゃ！」

「は、はあ？」

「最近のひよつこどもはなつとらんのう。敬礼ぐらいちゃんとせん
かい！」

「あ、はあ」

慌ててネオは大官寺に向かって敬礼する。

「うむ」

大官寺は頷いて答礼する。

なんで俺が先に敬礼するんだ？ 逆じゃないか？

ネオは混乱した頭に疑問を浮かべるが大官寺の態度が変わるわけ
もない。

「ほれ、これが仕様書じゃ」

大官寺はえらそーにネオに仕様書を放り投げる。

「は、はい、ありがとうございます」

ネオは、艦長の大官寺の調子に飲まれ、つい敬語を使ってしまった。
「ほう」

仕様書を読むとネオは、ほうと溜息をついた。

改アークエンジェル級と言ってもだいたい変わっている。アークエン

ジェルより一回り大きい。それは、左右舷側、下側に船体が増築がされたこともあるが……ラミネート装甲にさらに複合和紙装甲を重ねた事が大きかった。

複合和紙装甲　それは文字通り和紙を使った装甲である。ぴちぴちの女子学生が真心をこめて漉いた、畳一畳程の手漉きの和紙を数百枚ほど積み重ね、竹の繊維で綴じ、厚さ10ミリの標準鉄板で挟み込むと言う職人の魂が籠もった装甲である！　これが1ユニットになるのだ。それを積み重ねる。各ユニット間には1センチ程の隙間が空いている。ボルト締めするために生じる隙間だが、これが垂直からの圧力を実によく受け流すのである。ミサイルなんかへつちやらである。仮に、成形炸薬弾、ビームで攻撃されても、一定の防御力を発揮する。瞬間的な高熱に対しては、和紙は却って断熱性を示すのである！

特装砲には、プラントに亡命した陽電子博士をも超えると評される中嶋陽子博士が十二国記研究所で開発した『麒麟Mk・1　蝕』砲が搭載されている。地球軍の一部で開発が進められ、一時は搭載が検討されていた反物質砲とは違い放射能汚染を引き起こさないのが特長である。……なぜか研究中に謎の人体消失事件が起こった事は秘密だ。

主砲の225cm2連装高エネルギー収束火線砲「ゴットフリートMk・73」は上部に2門の他に左右に1門、下方に2門増設されている。

これは、アークエンジェルが海上でモラシム隊に苦戦した戦訓からだった。それに……宇宙であれば上下左右の区別など無い。一方向にだけ攻撃力があってもだめなのだ。

110mm単装リニアカノン「バリアントMk・8」も変わらず装備されている。

そして機動力だ。速力もかなり増加している。そして大気圏での限界高度が非常に上がっている。ぶっちゃけ、自力で大気圏突破できるのである。

「もしこれが前戦役時にあつたらねえ」

ネオは呟いた。アフリカの山地を飛び越えてビクトリア防衛に参加し、マスドライバーを守りぬけたかもしれない。あるいは、北方に抜け、ユーラシアを経てアラスカ・JOSH-Aに史実より早くたどり着けたかもしれない。もし、史実と同じ行動を取ったとしても、ザフトの水中用モビルスーツの遙か上を飛行し、史実のような危険な目になど会わなかったはずだ。

「准将？」

「……」

「ネオ准将？」

「わあ！」

そう言えば、自分はジブラルタルを落とした功で昇進していたのだ。つた。

そこにはヘイゼルの瞳と金褐色の髪を持つ美しい若い女性がいた。確か自分の新しい副官だった。

「ええと、君は確か……」

ネオは副官に名前を尋ねた。一度は聞いた筈なのだが失念してしまっていた。

「アンネローゼ・緑森中尉です。閣下」

「ああ、そうだった」

「もう！ 閣下は私と初めて会った時の事も覚えてないでしょう？」

「え？ 前に会ってた？」

ネオにはさっぱりわからなかった。

「1年前のベルファストの動乱の鎮圧の時ですわ。私が巴旦杏ケルシーのケ
ーキを持って行ったら、おいしそうにペロリと食べられましたわ。

他の人達の方まで！ それで、おかわりが欲しいなあって！」

緑森中尉は嬉しそうに言った。

「そんな事、言ったかな？」

ネオにはさっぱり覚えがなかった。

「ま、まあよろしく頼むよ、中尉」

第54話「マスドライバー破壊作戦発動<1>

『ガルガリン』が到着して2・3日後、ネオの率いていた水上艦隊はカーペンタリア封鎖のために出航していった。

「はは、急にいなくなると寂しくなりますな」

ユウナがネオに言った。

「オーブもだいぶ潤ったでしょう。彼らが落としたお金で」

「それは否定しません」

「では、私も行かねば成りません」

「御武運を、お祈りしています」

そして『ガルガリン』もネオやスウェンを乗せて宇宙へ旅立ってしまった。

その夜

ユウナの寝室の部屋が開けられる。

「誰だ！……お前は、高野！」

「お静かに。落ち着いて。クーデターです」

「なんだと？」

「今ならば逃げられます。お早く。アス八代表首長の元にもわれらの手の者が」

「わかった」

ユウナはすばやく身支度を整えると、高野の後に続いた。

高野の後に続き、見知らぬドッグの前に出ると、そこにはすでにカガリと、マシマ、彼の息子がいた。

新設されたカガリ近衛部隊……と言ってもまだ十数人しかいなかったが彼らもいた。

「では、皆様にはこれにお乗りください」

「これはなんだ！ こんな大きな潜水艦が建造されているなど聞い

た事がなかつたぞ！」

カガリは叫んだ。

「ユウナ、お前は知っていたか？」

「ああ、ぼくもオーブから出撃する前に彼らから聞かされたのが初めてだ」

「ウナト宰相ですよ」

高野が微笑みながら言った。

「オーブは海洋国であるのに水中用の兵器に関しては奇妙なほど無関心でした。それにウナト宰相は危機感を抱かれていたのです。さあ、この潜水艦 アッドマソグラーに乗ってください！」

「オーブ国民の諸君！」

オーブ国営放送 その一言でクーデター軍の発声は始まった。

「諸君は元代表首長ウズミ氏の理想を忘れたのか？ 大国の言うがままに兵を出し、兵士を死なせる今のカガリ代表を支持するののか？」

「我々は、ウズミ元代表の理想を実現するために立ち上がった！」

「たとえ国が焼かれようとも守るべき理想と言うものはあるのだ！」

「我々はカガリ代表を惑わす奸臣を除くために立ち上がったのだ！」

「カガリ代表が正道に戻られれば、我ら自ら縛に付き、クーデターを起こした罪を償う所存である！」

「オーブ国民よ！ 我らはここにオーブ救国軍事会議の設立を宣言する！ 国民の支持をお願いするものである！」

「トダカ一佐……どうしても我々に協力していただけないと？」

アマギはその瞳を眠たそうに、見ようによっては冷たく開き、もう一度トダカに聞いた。

「何度聞いても同じだ！ 俺はお前らの仲間にはならん！ お前ら

のやろつとしてゐる事は国を危つくる事にしか見えん！」

「残念です」

アマギは血走つた目に幾分かの力を込めると、右手の指に力を込めた。

トダカの体が銃声が鳴る度に跳ねる。

「……行くぞ。俗物に説得と言つ時間をかけるだけ無駄だつた」

「はっ」

タキト・ハヤ・オシダリはトダカの死体を担ぎ上げると、甲板に上がり、海に放り込んだ。

「で、どこに行きますか？ 代表？」

高野が尋ねる。

「そうだな。まずオーブを取り戻すとすると、アメノミハシラと連絡を取りたい。サハク姉弟と相談せねば」

「宇宙へ行くとなると、カオシユンかパナマだね」

ユウナが答える。

「東アジアは内乱中だろう。と、なるとパナマしかないか」

「そうなるだろうね。とりあえず近いところで大西洋連邦領のハウランド島を目指そうよ。そこから大西洋連邦に連絡しよう」

「ああ、それでいい」

「では、そう言う事で。では、我らが紺碧隊の装備でもご覧になりますかな？」

高野はそうカガリ達を誘つた。

「これは……大きい！」

水中用モビルアーマー『グラプロ』を見てカガリは感嘆の声を上げた。

「攻撃方法としては機首にフォノンメーザー砲を搭載、7連装噴進魚雷発射管2門、対空ミサイルランチャー2門も積んで、空からの攻撃にも対処できます。クローを装備しており直接攻撃も出来ます」カガリはそれをいつまでも見ていたいようだったが、ユウナが先に促す。

「ほら、カガリ。次もあるようだから」

次にカガリ達が見せられたのは水中用モビルスーツだった。

「水中用モビルスーツ『カプノレ』です。水中用モビルスーツと言っていますかね、実際は上陸作戦でも使えます。オーブを再び取り戻す時に役に立つでしょう」

「真ん丸だな」

「ああ、真ん丸だ」

「かわいい・(ハート)」

「あの形態により、水流抵抗が小さく耐圧性に優れ、は非常に高い水中運動能力を発揮するそうです」

「そうなのか！」

「レーザービーム、ソニックブラスト各1基。ミサイルランチャーを8基積んでいます。アイアンネイルはPS装甲製で大抵の装甲に効果があるでしょう」

「彼らは、地中海でのザフト軍との海戦の時にも陰働きをしてくれたんだよ」

ユウナがカガリに説明した。

「こんな、大西洋連合にもザフトにも対抗できるようなモビルスーツが我が国でも開発されていたなんて！」

カガリは素直にはしゃいでいる。

「……これが、半ば神がかりの気のいい悪魔のおかげで整えられたと言っ事はお忘れなきよう」

小さな声で高野はユウナにささやいた。

「ああ、判っているよ」

ユウナも囁きかえした。

「オーブでクーデターが起こった。どうする？ 姉者」

ロンド・ギナ・サハクは姉のミナに聞いた。

「カガリが捕まったと言う情報もないな。もう少し待つか」

「救国軍事会議か。言っている事はもつともらしいが。未だにウズミの言葉を至上とするただの馬鹿だな」

「違うない」

「このままカガリと連絡が取れなければ……降下作戦と言う事になるか。バリュートシステムか。ウナトはこのような事態を予測していたのかな」

「さあな。ウナトは謎が多すぎる」

カガリ達は無事ハウランド島へ到着し、海中ケーブルを使い大西洋連邦に連絡した。

その日のうちに、ジョゼフ・コーブランド大統領と話することが出来た。

「いや、今回の事は私も憂慮している」

大統領は言った。

「中立を謳うだけで、ザフトを支援すると言っている訳でもないの
で簡単に叩き潰す訳にもいかん。君と早々に話したいと思っていた
ところだ」

「すまないが、オーブ本国の救国軍事政権の事はしばらく様子を見
てもらえないだろうか？ できれば同じ国民同士で血を流したくな
いのだ」

「それはわかるが……」

「地球軍への支援は変わらずやらせてもらうつもりだ」

「と言うと？」

「オーブには宇宙軍があるのだ、コーブランド大統領」

カガリは笑った。

「これからの戦いは、宇宙に移る事になるだろう。私も、宇宙に上がるつもりだ」

そもそも とうすと敬まい奉るは

天地の御主 人間万物の御親にてましますなり

はじめに 天地万物を 創らせたまい

また土より五体をつくりて人となし

これ あだんとじゆすへるの二人なり

ばらいそに二本の天の木あれば 必ず食うことなかれと

とうす固く仰せあるを じゆすへる あだんを謀りて

あだんはまさんの木の実を採りて食い

じゆすへるはいのちの木の実を食しける

これより たちまち天の快樂を失い

あだん その妻えわと下界に追いやられ

畜生を食し 田畑を耕してまいるべし

また じゆすへるの子供 死ぬことなく生みふえれば

とうす これを憂いたまいて 地を開きて

いんへるのに落としたもう

その子孫 わずかに人から隠れ住み

いのこの木の実の功德にや 死ぬことなしといえども

とうすの呪い受けたれば 順次にいんへるのに引き込まれ

子々孫々 地の底に身をもがき

きりんと参る日まで 苦しみ尽きざるといふなり

「ふむ。アンデルセンよ。オーブはかのマルキオが宿を構えて居っ

た所。奴の痕跡はあるかの？」

老魔法王はアンデルセンに尋ねた。

「は、この度は、ラクス・クラインの手が伸びていると思われませう」

「そうか。引き続き監視を怠らぬようにな」

「はっ……。猊下、それは、エビデンス1の写真でありますか？」

「そうだ。ジョージ・グレンもとんでもない物を見つけてきたものよ。これを見つけて喜ぶとは無知とは怖いものよ。……もし生きているこれに出会っていたら、木星探索隊は全滅していたらうにな」

「ではエビデンス1とは……」

「まぎれもなく『星間宇宙を渡るもの』ハスターの眷属、有翼生物バイアクヘーじゃ！」

「なんと！」

「彼らに対抗するにはこちらにも相応の準備をせねばの。奴らが地球にやってくる可能性は常にある」

「はっ。ミラージュ騎士団、創設準備は進んでおります。彼らが装備するモーターヘッドの作成も……装備する『インフェルノ・ナパームシステム』も猊下のおかげをもちまして悪霊すら焼く滅ぼす物となりましょう……。しかし、赤い服の男、信用なりませんでしょうか？
彼のおかげでレッド・ミラージュの開発は順調ですが」

「ふふふ。あれは、サンジェルマン伯爵は、少なくとも今は信用できよう。それから、アナキンに対する教育、鈍るでないぞ。彼こそがフォースの申し子、選ばれし者、地球人類の希望なのじゃから」

「はっ」
アンデルセンは深くひざまづいた。

どこかの次元の某巨大掲示板

1 名前：灰田尽暎「sage」 投稿日：****/01/19

(木) 14:29:06 ID:tyb78/2GO

灰田だけど何か質問ある？

103 名前：以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします
「sage」 投稿日：*****/01/15(木) 19:29:
28 ID:GDYVAKFO
はよ『覇者の戦塵』の片付けろよ。

154 名前：以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします
「sage」 投稿日：*****/01/17(木) 17:28:
25 ID:ZYYVAKFO
次は中国ですね！ 期待してます！

211 名前：灰田尽暝「sage」 投稿日：*****/02/
20(木) 17:02:57 ID:qix2zjcx0
とりあえず何支援しよう。オーブに資金と資源は適当に支援した。
安価<<300

300 名前：以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします
「sage」 投稿日：*****/02/29(木) 20:30:
27 ID:KDYVAKFO
ガンダニウム合金作れ。あれならビーム耐性も物理耐性もあるし
つぶしがきく。

456 名前：灰田尽暝「sage」 投稿日：*****/03/
09(木) 21:41:01 ID:k+fsqq6p0

おk、とりあえずガンダニューム合金作らせる。でも2・3機分しか作らせないよ。あまり作ると面白くないし。
何作る？

安価<<600

600 名前：以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします
「sage」 投稿日：****/03/15(木) 23:30:
33 ID:nwhhk1ojj0
ゾック!!!

601 名前：以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします
「sage」 投稿日：****/03/15(木) 23:31:
45 ID:qGWQktcIP
wwwwwwwwwwwwwwwwwwww
これは草を生やすしかないwwwwww

こうして貴重なガンダニューム合金を使ったギナの乗機はゾックに決まったのである……

「ひっさしぶりの宇宙」
「嬉しそうだな、ミューデー」
「この月面の微妙な重力がたまらないのよ」
「そう言えばそろそろオーブ艦隊がアメノミハシラから来る時間だな」
「大変よねー。オーブも、クーデターなんて」

「お、あれか？」

1等星の様に光る点が3つ、現れた。それがだんだん大きくなってくる。

「あれは……」

スウェン達は絶句した。

「金キラ金じゃないか……」

「よろしく。私がロンド・ミナ・サハクだ」

「弟のロンド・ギナ・サハクだ」

二人は月面アルザツヘル基地の司令官に挨拶をした。

「とりあえずオーブはアメノミハシラに亡命政権を置く事となった。協力はオーブ宇宙軍が変わらず果すので安心して欲しい。どの道、地上はもうそれほど意味がないだろう」

「そうですな」

司令官はにこやかに答えた。

「いくらカーペンタリアが強固に防御を固めていても、プラント本国が攻められれば終わりですからな」

「オーブが、クーデター……」

その頃、南洋諸島に到着したジェスとミリアリア二人は困惑していた。

「どうしよう？」

「危険、だよなあ」

「とりあえず、カガリ様はアメノミハシラに逃げたみたい。しょうがないから、ここら辺の取材でもする？」

「ああ、そうしょっか」

「ふん。暫定代表首長にはワイド・ラビ・ナダガが立ち、わたくし達を新生オーブ軍に組み込むと言う事ですか……」

「はっ。一応の目的は達成できました」
服部が答える。

ラクスはつまらなそうにその報告書を見ていた。前戦役の英雄たるカガリ・ユラ・アスハが代表でなければ、小国オーブのバックアップを受けたとてさほどの効果はない。むしろカガリはアメノミハラに在り、敵対しているのだ。

ラクスは考え込んだ。

「どうしたのです？」

服部が尋ねた。

「いえ。マストドライバーは全て地球連合の物となつてしまいました。このままではザフトは……」

「……一つだけなら、なんとか破壊できるかもしれません」

「本当ですか？ それだけでもかなりザフトは楽になるのです。カオシユンは混乱、カゲヤは押さえましたし」

「私の最大の力を振り絞る所存です」

「では、SPを100人？ あるいはもっと必要ですか？」

「いえ、連中は忍者としての訓練が不充分です。自分一人でやりま
す」

「服部……」

ラクスは服部の手を握った。

「決して、死なないでくださいね」

第55話「マストライバー破壊作戦発動<2>

「ん……」

ルナマリアはため息をついた。

シャワーの水滴がルナマリアの瑞々しい肌をこぼれ落ちていく。

ひとしきりシャボンで身体を洗った後、冷水と温水を交互に浴びて肌を引き締める。

バスタオルにくるまって、水気を取る。

仕上げに、さりげなくお気に入りのコロンを一吹き。

「ふん…… ふん……」

ルナマリアは鼻歌を歌いながら冷蔵庫を開けた。注文しておいたレアチーズケーキがちょうどよく解凍されていた。

「アスラン、一緒にケーキ食べない？」

ルナマリアは書類仕事をしているアスランの元へケーキを持って行く。

「ああ、頂くよ」

ケーキをぱくつくアスランを見つめながら、ルナマリアはニコニコと微笑んでいた。

アルザツヘル基地では警備が厳しくなっていた。

なにしろ最新鋭の戦艦を強奪されたのだ。

「誰何！」

「ネオ・ロアノーク准将だ」

ネオの顔を見ても、警備兵は警戒した態度を崩さなかった。

「IDカードを拝見できますか？」

「ああ」

警備兵は機械にカードを通した。

「確認できました。ご容赦ください。これも任務ですので」

「わかっているよ。じゃ、緑森中尉、行こうか」

「はい」

服部正吾は夜になってからビクトリア基地へ侵入した。

暗闇に溶け込む濃紺の服装である。

マストライバーを警備する警備兵を倒すのは、もちろん棒手裏剣である。

気づかれないように、マストライバーの鉄骨に寄りかからせる。

結局、爆薬を仕掛ける位置に付くまでに、出会った11人の警備兵は全員死亡。

また服部は手を血で汚してしまった。

爆薬を仕掛けると、服部は急いでマストライバーから遠ざかる。

「そろそろだな……」

充分マストライバーから離れた場所で、服部はビクトリアのマストライバーの方を観察する。

と、轟音と、きのこと雲が現れる。

服部が仕掛けた物は 服部の言う最後の武器……核爆弾であった。

「ようこそ！」

「こちらこそ！」

ジェスとミリアリアは村人と挨拶を交わす。

赤道連合は、カオシユン カーペンタリアの通り道として一方的に侵略された前戦役時と違い、今戦役では直接的にはザフトと交戦

状態になかった。だが、ザフトの襲撃に遭ったと言う。その基地に勤めていた人物が見つかったのだ。

その人物は足に怪我をしていた。

「……そんな、いきなりザフトのモビルスーツが降りてきてな、あたりかまわず攻撃したんだ。俺らの事なんかお構いなしさ。せめてってんで、隣のジエクロの女房と息子が銃で立ち向かったらしいが、ザフトのモビルスーツの銃にやられてかけらも残ってないだとなさ」

「……」

「貴重な情報、ありがとうございます」

「いやなに、前みたいには動けなくなりそうだが、見舞金が予想以上に入ったでな、店でもやるわ」

「これで、基地司令の証言の裏が取れたわね」

ミリアリア達は、事前に基地指令に取材をしていたのだ。

「ああ、やっぱり、どうにも、ザフトが良い者って訳じゃねえようだな」

「次は、どこに行く？」

「ああ、なんとかオーブに潜入したいが。部外者は入りにくいそうだな」

「じゃ、どう言うのはどう？」

「ん？」

「あなたは私の婚約者。親に紹介をしに私はオーブに帰ってきたの！」

「ぶ！」

ジエスは吹き出した。

「ロアノーク准将！」
ネオは声をかけられた。
「おお、リー少佐じゃないか！」
「この度、私も中佐に昇進してネルソン級の艦長になりましたな。また、一緒に戦えますな」
敬礼しながらリー中佐の顔がほころんだ。
「ああ、よろしく頼むよ！」

地球軍提督達の会議は少々暗い雰囲気が始まった。
「ビクトリアのマストライバーが破壊されたそうだ。核だそうだ。当分復興は見込めんな」
「カオシユンも、東アジアが不安定で当てになりません」
「そして、オーブのクーデターか……」
「パナマの防備は強化されています」
「もっともだ」
「ともあれ、新編なった第3艦隊、期待しているぞ、ロアノーク准将」

一人が雰囲気を変えるように言った。
「は、微力を尽くします！」
「とりあえず、月基地の物資の備蓄状態はどうなのだ？」
「1年、飢えさせず」
「となると、一年のうちにプラントを叩き潰さねばならんか……」

「戦艦やモビルスーツを集めているようだけど」
マリユールがラクスに聞いた。
「なぜ、武力に頼るの？」
「え？」

不意の問いにラクスは不思議そうな顔をした。

「あなたの力なら、プラント市民に対して働きかければ政権など奪えるでしょうに」

「なぜですって!?!」

きつとなった表情でラクスは言った。

「私の父、シーゲル・クラインは民の手で評議会議長の座を追われたのです。そして評議会議長に付いたのはパトリック・ザラ。流されやすい民衆のの支持による権力など、頼りになるもんですか」
ラクスはぎりつと歯を噛み締めた。

オーブのクーデターも実質失敗した事にもラクスにとっては癢が触る。本来なら前戦役の英雄カガリがラクス達をバックアップし、オーブ全軍一体となってラクスを支援するはずだったのに。肝心の宇宙軍が、サハク家にしつかり握られていた。

「あきらめるもんですか。私は世界の物、世界は私の物」

「ここがアメノミハシラか」

オーブが所有する宇宙ステーション『アメノミハシラ』に上がったカガリは、はしゃいであちこち見回っていた。

「先の戦役で連合の支配下に入る事を良しとしない者達が逃げてきたとも言っね」

ユウナが答える。

「ふん。いずれ、ここも元の計画通り軌道エレベーターも作りたいたよな。オーブが進出するなら宇宙しかないから」

「ああ、情勢が落ち着けばね」

カガリとユウナは工廠に入った。

「ん？ あれは……」

作られているモビルスーツがカガリの目を引いた。

「M1アストレイではないじゃないか」

それはM1アストレイとはまったく違う、別の思想で作られている
モビルスーツのようだった。M1アストレイと比べると異形。どち
らかと言えば、ザフトの初期のモビルスーツに近い。

「ああ、あれは父ウナトの依頼で作られはじめたんだよ。いずれオ
ーブ本国を取り戻す時のためにね」
ユウナが答える。

「あれはパイマラソ、隣がギャブラソ、メダズ、ハソプラビ、ガブ
スレイ、ムッドウー、シャペリン。どれも大気圏内飛行可能モビル
スーツだ。そして、サハク家専用的高速高機動モビルスーツ
『ゾック』」

「シャペリンだけはアストレイに似ているな。に、しても、種類が
多いな」

「今は試作段階なんだよ。実際に使ってみて、これからの主力を考
える。その内教えるが、訳有りだ。この一戦だけで、後の使用は控
えたいと思う」

「実際に使ってみてか……」

カガリはうつむいた。オーブ奪回作戦の事を考えたようだった。

「そう言えば、私の専用機とか、ないのか？」

「あるよ」

ユウナは工廠の一角を示した。

「三ガンダムだ」

「……ふーん」

妙な名前にカガリは首をひねった。

「ところで、あのぼんやりと立っている三人はなんなんだ？」

「ああ、彼らはここの監督だよ。あれでも腕がいいんだ。三ガンダ
ムを作るために渡戸村から引き抜いてきたんだ。皆名前を『じゅわ
ん（ヨハネ）』と言ってね、3人いるから工員達はさんじゅわんさ
まと……」

「まったく……」

その時、後ろから声がした。

その声に振り返ると、ロンド・ミナ・サハクがいた。

「さんじゅわんとは聖ヨハネの事だ。三の意味では無いと言うのに。馬鹿な事を……。それに……。三ガンダムなんて名前はどう考えてもおかしいだろう。三じゃなくて（クスイー）ガンダムじゃないかと思うんだが……。灰田さんからもらった設計図の読み間違えなんじゃないかなあと……。」

眉をひそめてぶつぶつ言うミナ。

だが、聖書には3人の【ヨハネ】が登場する。洗礼者ヨハネ、使徒ヨハネ、そして福音記者ヨハネである。

そして……。灰田さんからの仕様書には墨痕あざやかに漢字の草書体で三と言う文字が書かれていたのである　　！

「さんじゅわんさま！」

「さんじゅわんさま！」

「おたすけくませ！」

「おすくいくませ！」

「な、なんなんだ？」

いきなりわき上がった、工員達が上げた声にカガリは驚いた。

「総監督が来るのさ。ほら、善次が来た」

歩いてきた男は叫んだ。

「みんなばらいそさいくだ！」

「ぐるうりやのぜずさま！」

工員達に歓声上がる。

「おらといっしょに、ばらいそさいくだ！」

「ぐるうりやのぜずさま！」

「ぐるうりやのぜずさま！」

カガリにはまるで訳がわからなかったが、ふと光に包まれて彼らと一緒に天上に昇るような心持ちがした。

SEEDとか言って訳のわからない事を言っていたマルキオよりも、この善次の方がよっぽど自分を救ってくれるような気がしたのである。特に理由はないが。

「ミリイ！ よく無事でオーブに入れたな！」

サイ・アーガイルはミリアリアに声をかけた。久しぶりの再会だった。

「まあ、オーブ人だし、ジエスは名が売れてるからね。そう追い返すって訳にも行かなかったんでしよう。相変わらずIT企業の社長やってる？」

「ああ」

前戦役後、サイはIT関連会社を興していた。

「君は前の戦役に従軍したって？ 君の話も聞きたいが、問題は今のオーブだ」

ジエスは言った。

「どうなんだ？」

「ひどいものさ。アス八家の独裁を叫んでおきながら、自分達はそれ以上に締め付ける。物資の流通にも支障が出始めている。統制すればいいと考える軍人の馬鹿さ」

「抵抗する人は、いないの？」

「片っ端から拘禁されているよ。だが、国会議員がデモをするとう噂もある。それに……」

サイは声を潜めた。

「アメノミハシラにいるカガリが、本土奪回作戦を立てているという噂だ」

「服部！ よく帰ってきました！」

ラクスは帰ってきた服部に駆け寄った。

「本当に、本当に心配していたのですよ」

「ははは、伊賀忍術の賜物です」

「とりあえず、ゆつくり休んでくださいな」

「はい。そうさせてもらいます」

服部は退出して行った。

そこにキラが現れた。

ラクスはキラの瞳に不満の色を見て取った。

「キラ？ 私が一番好きなのは、一番頼りにしているのはキラなのですよ？」

ラクスはキラにキスをした。

「そ、そんな事……」

キラの頬は赤くなった。

「キラ！ そう言えばプレゼントがありますの！ ストライクフリードムと言う新型機ですわ。あなたの命を守ってくれた二機のモビルスーツの名前から私が名前をつけましたのよ」

「新型機！？ ラクス、嬉しいよ！ 僕がガンダムだ！」

「その他にも驚かせたい事があるのですわ」

「なんだろう？」

「わたくしの、親衛隊を作ろうと思ってます！」

「ああ！ 遅すぎるくらいだよ！」

「親衛隊隊長、やってくてくださいませわね？」

「もちろんだよ！」

キラはラク스에キスをする。

ふいに、ラクスの目が翳った。

「……本当はあの孤児院で二人で子供の面倒を見ながら平和に暮らすという道もあったのですわ。そうしていつかキラも治って……」

「？ なにを言い出すんだ？ ラクス。僕はどこも悪くないよ？」

「キラ。わたくしはあなたに取り返しのつかない事をしてしまったかもしれない。今更ですが、ごめんなさいね」

「ごめんなんて！ 訳がわからないよ！」

「いいのです。キラにはわからなくて」

そう言っただけは澄んだ笑顔をキラに向けた。

「私がミネルバの艦長に!？」

いきなりの人事通達にアスランは驚きの声を上げた。

「そうだ」

「各方面からもパイロットとして使うには惜しいと言う意見が出てね」

人事課長はにこやかに告げた。

「それはもう、大勢の人達が、君を買っているのだよ」

「し、しかし……」

「大丈夫だ。副官はそのままだ。君を補佐してくれるだろう」

アスランは逆に心配になった。が、どうやら断る訳には行かないようだった。

「了解しました。微力を尽くします!」

「じゃあ、アスラン。頑張っただね。あなたなら立派な艦長になれると思うわ」

「はい。グラデイス艦長も、いえ、隊長ですね。お気をつけて引継ぎは終わった。」

タリアはナスカ級1隻、ローラシア級2隻からなるグラデイス隊の隊長に転出する。

「タリア艦長に敬礼!」

アーサーの号令でランチに乗り込むタリアに皆が敬礼する。

そしてランチは発進していった。

「さあ!」

ミネルバの皆に振り向いてアスランは言った。

「新米艦長で頼りない所もあるだろうが、よろしく頼むよ」

歓声が 沸き上がった！

第56話「正規空母強奪作戦発動<1>

「ネオ隊長も將軍かあ。第3宇宙軍を率いるなんてね」

「俺達も出世してるだろう。俺とスウエンは大尉。お前も中尉だろう」

シヤムスはミューディーに言った。

「そんな事じゃないのよ。なんか、遠くへ行っちゃったなあって」
「惚れてたのか」

「馬鹿！」

「わ、私がデステイニーに!？」

マユは驚きの声を上げた。

「ああ」

アスランは頷く。

「わ、私なんかより他に適任な人が……」

「俺は……」

アスランは語りだした。

「デステイニーはまだ試作機だと思ってる。バランスが悪い。俺はデステイニーを一番生かせるのは超長距離からの狙撃だと思うんだ。それには君が一番適任だと判断した」

「い、インパルスは……」

「ハイネに割り当てる。本人は前衛嗜好だが、中衛でも後衛でもやれる実力だ」

「……」

「やってくれるね？」

微笑みながらアスランはマユに顔を近づけた。

「は、はい! 一生懸命、やらせていただきます!」

顔を赤らめながらマユはうなづいた。

「戦艦は3隻ばかり手に入れましたけど、やはりモバイルスーツを搭載する艦が足りませんわねえ」

ラクスは溜息をついた。

服部達が奪ってきた戦艦は皆、新型艦ばかりである。首尾よく奪えたのは伊賀忍術の賜物であろう。

「今度は空母を手に入れましょうか？」

一休みして気力の充実した服部が言った。この短い時間で回復するのはやはり伊賀忍術の賜物であろうか。

「ザフト軍のゴンドワナでも奪ってまいりましょうか？」
服部は事も無げに言う。

ゴンドワナとはザフトの型宇宙空母であり、全長は1200mを超える。艦体の内部にナスカ級やローラシア級を収容する事が可能である。

「い、いえ」

さすがに焦ったようにラクスは答えた。

「大きすぎますし、碌に機動力もありませんわ。それにザフトの物を奪うと言うのはやはり……」

「では、次は地球軍の最新鋭空母を奪う事にしましょう」

「出来るのですか？」

ラクスの問いに服部はニカッと笑った。

「なーに見てんですか？ アスラン艦長？」

ルナマリアが尋ねた。

「気恥ずかしいな。今までどおりアスランでいいよ」

「はい、アスラン」
「フォーメーションを考えていたんだ。宇宙用の」
アスランはルナマリアに一枚の紙を見せた。

前衛

ハイネ・ヴェステンフルス　フォーサインパルス
シヨーン・ホワイト　グフ
ゲイル・リバース　グフ

前々中衛

ルナマリア・ホーク　セイバー
レイ・ザ・バレル　フォーサインパルス

後衛

マユ・アスカ　デステイニー（M2000GX　高エネルギー長射
程ビーム砲）
プロ・デューサー　ガナーザク
カン・トーク　ガナーザク
シリー・ズ・コウセイ　ガナーザク

「ずいぶん後衛が多いですね」

「ああ、あいつらひよっこだろう？　後ろなら焦らずに出来るかと思っ
てさ。マユも付けるし。可能ならエネルギーはミネルバと撃いで弾切れの怖れも無くす予定だ。ひよっこはどうしても余分に撃つて
しまいがちだからな」

「うん、いいんじゃないですか？　……アスランは、出撃しないん

ですか？」

「艦長は指揮をするのが仕事だ。艦長が留守になっちまったら後が困るだろう？ まあ、どうしてもって時は予備機のグフでも借りるさ！」

「これが、ストライクフリーダム！」

キラは新たに与えられたストライクフリーダムの機動に酔った。

ストライクフリーダム 形式番号ZGMF-X20A

ZGMF-X10Aフリーダムの直接の後継機である。

圧倒的火力を持った大部隊で敵部隊を殲滅することを運用思想とし、量産化を前提に開発されていた。開発自体はフリーダムと同時期にザフトで開始されており、その意味では後継機よりも双子機に近い。しかしドラグーン・システムと新型高機動スラスタの開発が予定より遅れた為、機体の完成は戦争終結に間に合わなかった。

その後、ユニウス条約の発効で核エンジンを搭載したMSの所有が禁止されたため、既に完成していた基本アッセンブリー及び開発・設計データは封印された。しかし、封印されていたアッセンブリーとデータはラクスの命令でターミナルが入手（この際、ザフト統合開発局のサーバーからは、本機のデータは削除された）し、キラ・ヤマト専用の短距離・中距離向き万能機として、オーブで復元されていたフリーダム及びセカンドステージシリーズのデータを投影した強化改造を施し、完成させた物である。

「ドラグーン射出！」

前戦役時に彼を苦しめたプロヴィデンスのドラグーン。それが、今度はこちらが使えるのだ。

仮想の敵に向かってオールレンジ攻撃をする。

そして、ドラグーンを射出した後、可能になる高機動！
「今度は、アスランに負けない！」

「おい」

「お、何だ？」

アスランはミネルバを訪ねてきたイザークの顔を見ると不思議そうな顔をした。

「なんだ貴様あ、せっかく祝いに来てやったというのに！」

「やあ、お久し」

イザークの後ろからディアッカが声をかける。

「あ！ ああ！ ありがとう！」

アスランは嬉しそうな顔をしてイザークの手を取る。

「ふん！」

「しかし、ザフトに復帰してからあつという間に艦長か。期待されてんね」

「ふん、どうやら覚悟は決めたようだな」

イザークは言った。

「覚悟？ ああ。俺はもうオーブには拘らない。祖国を守る事に力を尽くす。まあオーブの事を思うと胸がちよっとしくしく痛いんだよ」
「女のような事を。しかし、まあ覚悟を決めた事はよろしい！」

イザークはバンとアスランの背中を叩いた。

「しかし、どうだ？ 今日時間はあるか？」

アスランは尋ねた。

「ああ、今日は休みだ」

「じゃあ、食事でも行くか？ イザークのおごりで」

「ぶつ。なんで俺がおごらにゃならんのだ！」

「イザークが一番の出世頭だ。それに今回は俺の昇進祝いだろう？」

お前以外に出す奴いないじゃないか」

しれつとした顔でアスランは言った。

その頃……服部正吾は、今回はさすがに一人ではなく、100人のSPをつけてもらった。手裏剣の修行をやらせるのはもちろんだが、今回は催眠術の修行も課程に取り入れられた。果たして服部は何を考えているのだろうか？

「ザラ艦長！ 熱紋反応、敵艦です！ 相手も単艦の模様！」
それはミネルバがパトロール任務に着いていた時の事だった。

「よし、モビルスーツ隊出撃！ 慎重に行こう。デステイニー、ガナーザクはミネルバから離さず、エネルギー直結しろ。残りはまず防御だ！」

「はっ」

ガナーザク3機とデステイニーが撃ちまくる。

「ふ。相手は雑魚ね！」
ルナマリアのセイバーが相手のダガーの間に切り込み攪乱する！
慣れたもので、ハイネとレイが混乱したダガーを狙い、とどめを刺す。

こちらに向かつてこようとするダガーもあつたのだが、すっかりベテランのハイネ、ルナマリア、レイ、ショーン、ゲイルは敵モビルスーツをミネルバに近づけさせなかった。

結局デステイニーのM2000GX 高エネルギー長射程ビーム砲が敵戦艦を撃沈し、戦いは終わった。

「幸先がいいな。よし、今夜は俺の奢りで飲み放題食べ放題だ！」
アスランは叫んだ。

周囲は歓声に包まれた。

セトナはアフリカを後にした。被災地は乾燥地帯なのが幸いし、疾病もあまり広まらなかったのである。

セトナはアキダリアに乗っていた。オーブにただ居るだけなど『我慢できん!』と言うアグニスの主張でセトナと一緒に行動する事になったのである。

「セトナ様、最寄の赤道連合地球軍基地から救援要請が入っておりますが」

「救援要請? 地球軍基地から?」

「ええ、なんでも最近起こった戦闘で民間人が犠牲になったとか」

「……私、本格的な外科手術はまだ勉強中なのですけど」

「怪我がひどい者はもう皆死んでいるそうです。怪我の軽い者を最寄の大都市まで運んでいただきたいと」

「わかりました。参りましょう!」

アキダリアは赤道連合の地球軍基地に到着した。

「病気の方はおられませんか? 多少の事ならなんとか……」

セトナは呼びかけた。

「いや、病気の方はなんとかあっております。それより、運んでもらいたい怪我人が30名ばかりなのですが大丈夫でしょうか?」

そう基地の司令官は言った。

「ああ。そのぐらいなら大丈夫だ」

アグニスが答えた。

怪我人が運ばれてくる。

片手を失った少年、両足を失った女性……

「まだ、ましな方です。もっとひどい怪我人はもう早くに死んでしまいましたから」

「一体どうしてこんな怪我人が？」

「ある日、ザフトのモビルスーツがいきなり舞い降りてきたのですよ」

司令官は苦々しげに言った。

「それが、あたり構わず攻撃しまして。残念ながら民間人に被害者が出てしまいました……」

「なぜ、基地に民間人がいたのです？」

「この辺りは碌な仕事も無く、とても生活レベルが低いのです。非効率ではありますが、基地の設営の仕事を与える事で民間人との友好も図れると考えたのですが……」

「そうですか……では、怪我人は責任を持って搬送します！」

！

「セトナ様！」

ディアゴがセトナを突き飛ばす！

「な、なに……」

セトナを狙ったナイフが、空を切る。

「……撃て！」

アグニスがそう命令しながら銃を抜き、自らセトナを襲った者の四肢を撃つ。

「ぎゃひ！」

襲撃者 老婆が悲鳴を上げる。

「貴様、何者だ？ なぜ姉上を狙った！」

アグニスがその老婆の喉元を締め上げる。

「ぐふっ」

老婆は口から血を吐き、がくつと頭を垂らす。

「死んでますよ、アグニス？」

「毒か！？ しかし一体……なぜ姉上を！」

「とりあえず、セトナ様をアキダリアへ！」

その後、アグニスは基地指令を始め周囲の者に襲撃者の身元確認をした。だが不思議な事に、誰もその老婆を知らなかった。

「姉上、落ち着きましたか？」

「ええ……でも、私が狙われるなんて……」

「まったくこのどいつが！」

「デュランダル議長……」

ぼつりとナーエがつぶやいた。

「かも知れませんね？ セトナ様は彼に喧嘩を売ったような物ですからね？」

「そんな……」

アイザックは呆然とする。

「まあ、はつきりしませんからね？」

「なににせよ、姉上が邪魔な者がいるという事だ。ともかく姉上の安全にはこれまでに以上に注意を払う事にしよう」

「それで、怪我人達をどこに運んだらよいのでしょうか？」

セトナは悩んだ。ここらへんの地理には詳しくないのだ。

「ジャワ島まで行けば、かなり大きな都市がいっぱいあります。ユニウス7の被害を受けなかった内陸部でここから近い都市、となるとマランでしょうか」

まほりんが答えた。

「では、そうしましょう」

ほっとしたようにセトナは言った。

「インドネシア政府に話を通しておいた方がいいですね。私がやっておきます」

まほりんが言う。

「助かります」

この様子を、アイザックは辛そうに見ていた。

ミネルバは遭遇戦で地球軍戦艦一隻を撃沈した。これは司令部から大いに称えられた。異例な事だが、突然アスランは臨時と言う名目でナスカ級2隻も指揮する事になった。通称ザラ隊である。これには各所から強い働きかけがあったと言う事だった。

「ふむ。やはりデステイニーのM2000GX 高エネルギー長射程ビーム砲の威力はすごいな」

「うむむ、なんだ、お前の隊は！ 長射程ビーム砲ばかり揃えおつて！」

イザークが怒鳴った。

ザラ隊とジュール隊の模擬戦である。

ザラ隊はハイネ、シヨン、ゲイルが前面を固め、レイとルナマリアが攪乱する。その隙から数多くの長射程ビーム砲が次々と撃たれる。

模擬戦はザラ隊の優勢勝ちであった。

「もう、補充されてくるのはひよっこ達ばかりだろう？ 彼らを生かすにはどうすればいいか、考えた」

アスランはイザークに答えた。

「ふむむ」

イザークは考え込む。

「うむ。見るところがあるな。しかし、ジュール隊の不甲斐なさを見ると自分で出撃したくなかった」

「そんな事をする、余計に事態は悪化するぞ。指揮官が留守してどうする」

その台詞を聞いて、イザークはじっとアスランの顔を見つめる。そして言った。

「やっぱりお前、俺より指揮官向きだよ。上に行け、上に」
「よく言われる」
アスランは苦笑した。

「マユ、よかったぜ。お前さんにデステイニーやったのは間違っちゃいなかったようだな」

ハイネがマユに声をかける。

「あ、ありがとう、ハイネ！」

「うん、一時は俺にとって話もあつただけどね。俺じゃ使いこなせねーわ。対艦刀で斬りかかっちまうだろうからなあ。そうすればデステイニーの戦力はがた落ちだよ」

「でも、ハイネみたいに前線で頑張ってくれる人がいないと、私、だめです」

会話は弾んでいく。

それを見ていたシンが言った。

「お姉ちゃん、気が多い」

第57話「正規空母強奪作戦発動<2>

「また負けたあ」

ミューデーが嘆息した。

「何度やつても無理だつて」

ブルデュエル対ユークリッドのシミュレーションである。

「機動性だつてユークリッドの方が高いし、真正面から突っ込んでこられたら、ビームシールドがあるんだぜ」

「くやしいなあ」

「それより、ユークリッドの確保した制宙権の元で如何に戦つか考えた方が建設的だな」

「だな」

「そういや、ユークリッド専門の大型空母がもうじき完成するらしいな」

「ああ、ユークリッドは普通のモビルスーツより大きいからな」

「楽しみだな」

「確か、コバヤカワヒデアキだつて」

その頃、メキシコに潜入した服部達は街道の脇に陣取った。

走って来る車に手裏剣を投げ、パンクさせる。修理のために運転者が出て来たところを催眠術にかけるのだ。

100人も一台の車に乗れないのでこれを繰り返す。

同乗者が居た場合は催涙弾を投げて出て来たところを催眠術にかける。

服部達はこうしてメキシコのティファナまでたどり着いた。

運転者達には催眠術をかけ服部達の事を忘れさせる。殺しはしない。軍人ではなく民間人を殺すのは国際協約違反だからだ！

「なあ、親戚を捜しているんだが、知らないかね？ 私にそっくりなんだが」

服部は、ティファナで出会う人毎に声をかけていた。大抵は知らないと言われる。

しかし、とうとう10人目で違う答えが返ってきた。

「ホセじゃないか？」

「そうそう！ 確かホセだったよ。住所を教えてくださいませんか？」

首尾よくホセの住所を聞きだした服部は、ホセの家へ行き、催眠術にかけてしまう。ホセのパスポートを盗み出し、アメリカに入国する。

売春宿近くに拠点を構えた服部は、自分とよく似た体格の軍人が訪れるのをじっと待つ。

とうとうその男が来た！ 服部は歩き方の癖を盗みつつ尾行して、暗がりには引き込んでしまう。

そして催眠術にかけ、名前や階級、その他すり替わって日常生活を送るために必要な情報を全て聞き出すのだ。全ての情報を聞き出したら可哀想だが、この男には死んでもらう。顔がわからないようにぐちゃぐちゃにして、腐敗ガスで浮かんで来ないように腹を裂き、湖へ放り込むと、次は変装だ。オキシフルで髪を脱色した後、カラーコンタクトをする。これだけである。これだけで、誰にも咎められる事も無く服部はサンディエゴ基地に潜入を果たした。伊賀忍術の賜物である。

首尾よくサンディエゴ鎮守府に潜入した服部は、掲示板を見て回る。するとなんと言う事だろう！ 新しく建造されたユークリッド専門の大型宇宙空母の乗員を募集しているではないか！ 服部は早速志願した。

月基地へ出発し、その新造された宇宙空母コバヤカワヒデアキに乗り込むと、なんとと言う事だろう！ メキシコに潜入したSP忍者1

00人の内80名が新造された改アガムノン級に配属されていたのである。これも伊賀忍術のなせる技、であろうか。

服部はコバヤカワヒデアキの行き先も探らなくてはいけない。しかし、下っ端の兵隊に教えてくれるはずも無い。

そこで服部は警備の兵に催眠術をかけ、自分を見えなくする。そしてコバヤカワヒデアキの艦長、ミツチャーの寝室に首尾よく忍び込んだ服部は、ミツチャーにスコポラミン（自白剤）を注射すると、目覚めさせる。必要な事を聞き出した服部は、訓練のために独艦で航行するようにミツチャーの頭に吹き込み、自分達の事を忘れるように催眠術をかける。

訓練宙域付近に着くと、服部忍者部隊達は行動を開始する。就寝中の乗員を手裏剣で次々に刺殺していくのだ。不審に気づいて様子を見にやってきた乗員も待ちかまえていた忍者部隊が当然手裏剣で刺殺する。

仕上げとして、炊事係りに紛れ込んだ忍者部隊が朝食に食中毒菌を混入する。80名の忍者部隊は食中毒で身動きが取れないコバヤカワヒデアキ乗員を次々に手裏剣で刺殺していった……

「さあ、エターナルと合流しようじゃないか！」

「はい！」

コバヤカワヒデアキはエターナルと合流すべく動き出した。2000名の死体を乗せて。

「誰だ！ 新造宇宙空母にコバヤカワヒデアキなんて名前を付けたのは！ 敵の物になるのが当たり前のような名前じゃないか！」

コバヤカワヒデアキが強奪されたと言う知らせに一人の日系人が怒髪天を衝いている。

「ヘイ！ ケンイチ。コバヤカワヒデアキはシヨーグン、トクガワイエヤスに天下を取らせた武将と聞いたぜ！」

「間違つてない、間違つてないけど！」

「……じゃあ、いいじゃないか？」

「違う……違うんだよ！」

「ヨクワカラナイヨ！」

「ああ、イシダミツナリにしときゃよかったよ……」
当分誤解は解けそうも無かった。

「おいおい、また強奪かね。それも新造艦だぞ」

「うむ」

「それなりに警備を強化していたのだが……」

「このまま一ヶ月に1隻のペースで強奪されると士気が落ちるぞ」

「同僚に疑心暗鬼にもなる」

「早期に戦わざるをえんか……もう少し物資を充実させて一気に叩きたかったのだがな」

「そう言えばザフトが軍事ステーションを作っておったな」

「そこを目指すか」

「攻略できなくてもいい。優勢勝ちになれば」

「では、新編なった第3・第8艦隊と、第5・第6艦隊を当てればどうでしょう？ 負けはしますまい」

「了解した」

地球軍の新造空母を強奪したと言う出来事はラクス軍の戦意を向上させた。

もはや前戦役のように三隻同盟ではありえず、ラクス軍、と言
うのがふさわしいだろう。オーブクーデター政権からオーブ軍とし
て扱っ旨連絡が届いていたが、状況が変わった今それを受け入れる
のはマイナスが多いと思われたためラクスはそれを黙殺していた
しかし、それをさして嬉しい様子を見せない者もいた。

「ああ！ キラ！」

つまらなそうな様子のキラを見ると、ラクスは飛びついて頬にキス
をした。

「キラ？ ストライクフリーダムの様子はどうですか？」

一瞬で機嫌を直すとキラは弾んだ声で答えた。

「すごいよ！ フリーダムより動かしやすい！ ビームシールドも
すごい！ ドラグーンもすごい！ これなら……アスランに勝てる
！」

ラクスの顔が少し曇った。

そこに、悄然とした様子のヒルダがやってきた。

「ラクスさまー」

「あら、どうしたのです？」

「お願いです！ 忍者部隊から抜けさせてください！」

「あらあら、私の役に立ちたいと自ら志願したのに？」

「あいつらまともな精神じゃありません！ 2000人の死体を前
に平気で飯食ってるんですよ？ 頼みます！ 医者から貰った精神
安定剤1シート飲んで耐えられませんか！ 限界です！」

「……わかりましたわ。では、元の通り、モビルスーツのパイロッ
トに戻ってくださいな」

「ああ、ありがとうございます！ 一生恩に着ます！」

「ちょうどあなたに使って欲しい機体が届きましたのよ。ドムトル
ーパーとか言う……」

「第3艦隊、ネオ・ロアノーク准将だ。艦隊指揮は初めてでね、よろしく頼みたい。」

「第5艦隊、コーブアソ少将だ」

「第6艦隊、ホフアソ少将です」

「第8艦隊、ハノレパートソ准将です。よろしく」

「では打ち合わせ会議を始めろ」

最先任のコーブアソ少将が口を開く。

「今回の作戦は、ザフトの軍事ステーションに近づき、出血を強いると言うものだ。無理はしない。ひたすらザフトに戦い続ける事を強いて疲労させる。なに、同数の損害を与え続ければこちらの勝ちだ」

「しかし、地球で使えるマスドライバーはパナマの一基だけ。それほど時間が無いのでは？」

「まあ、ギガフロートも使えるがね。確かに、オーブかカオシユンが使用可能にならなければ、物資は厳しくなる一方だろう。司令部は月基地の物資を伝える1年の間にザフトを叩き潰す気だ」

「ふむ。面白そうですね」

「作戦としては、単純なものだ。四方から進軍し、戦う。それだけだ。但し！ 敵に、我々が攻略をまくろんできると思わせねばならん。本気にならせねばな。後先考えない反撃で疲労してくれればよいのだ。同時に我が軍の損害も抑えねばならん」

「単純な作戦ですが……」

ネオは発言した。

「艦隊によつて時間差をつけては？ 予備兵力もあるでしょう。それを投入する時間は同時にするのです」

「面白いかも知れんな」

「他に案は無いか？……では、その作戦で行く。我らが行く末に勝利があらん事を！」

「ところで……」

ネオはいたずらっぽく言った。

「本当に攻略してしまってもかまわないのですよね？」

オーブ。

この日、オーブ オロファトスタジアムで非合法の集会が行われていた。だが、非合法にもかかわらず3万人の民衆が参加していた。救国軍事会議のオーブ支配に反対する集会である。

「貴様等、すぐに解散しろ！」

救国軍事会議のクソステイマソ一佐がジープで乗り付けた。

「あなたがたに、そう言う権利がありますの？」

一人の女性が発言した。

「アス八家の専制を謳いながら、やっている事はそれ以上の独裁ではありませんか！」

「うう、一時の事でやむを得ん事だと言っておろうが！」

「カガリ様を戴くオーブ正統政府は相変わらずアメノミハシラに存在しています。地球連合にも協力しているとか。プラントとの戦いが終われば、地球軍の力はオーブに向けられる事になるでしょう。また、国を焼くおつもり！？」

舌鋒鋭くクソステイマソを責める女性に、彼は見覚えが歩きがした。……そうだ、常に軍事費の削減を叫ぶジェシア・江戸輪須議員だ。憎い奴だ。こいつがいなくなれば……

クリステイマソはいきなり銃の台尻でジェシアを殴りつけた。ジェシアは倒れこむ。何度も何度も、クソステマソは叩き続けた。ジェシアは、もう殴っても動かない。そして、クソステマソは近くにいた男性に聞く。

「なあ、さつき、民衆が、主権がどうか言っただよなあ、もう一度、言えるか？」

「……わ、我々は屈しない！ 救国軍事会議はすぐに権利を民衆に返せ！」

クリステイマソはその男も台尻で殴り倒した。

「さあ、隣の坊やに同じ事を聞こうじゃないか……」

「う、うわぁー！ー！」

混乱したのか、その若い男はクソステイマソに飛び掛った。

「くそが！」

銃声が響く。若者は倒れる。

「誰か撃たれたぞ！」

「救国軍事会議は我々を皆殺しにする気だ！」

次第にその声は大きくなっていった。

クソステイマソを包囲する人の輪がじりじりと狭まっていく。

「う、撃て！」

「しかし……」

「命令に従わず解散しない奴は、撃て！」

発砲が、はじまる。逃げ惑う民衆達。しかし、仲間の死体を盾にクソステイマソに近づく者も多かった。

そして、クソステイマソの身体は怒りざわめく民衆の足の下へを姿を消したのであった。

だが……この様子を見ていた各所の救国軍事会議派軍隊が攻撃を開始、最終的に、死者は市民20,000人、兵士1,500人にもぼった。この一件はオーブに潜入していたジェスとミリリアの手で世界中に発信され、『スタジামの虐殺』と呼ばれ、救国軍事会議が人心を失うに至った大きな一因となった。

「おい、あれは地球軍じゃないか!？」

「こちらの識別コードに反応無し！ 警戒警報を出せ！」

まずザフトの軍事ステーションに攻撃したのはネオ・ロアノーク率

いる第3艦隊だった。

「さあ、ネオ隊長の前でみっともない真似見せるんじゃないぞ」

「わかつてる！」

スウエン達は出撃した。

すぐにザフトのスクランブルしてきたモビルスーツ隊とぶつかる。

「く、こいつら、腕がいい！」

「無理をするな。これはそう言う作戦だ」

「パサラモードにゆう！」

ミラーが敵の前で防御に専念する。

「くそう、こいつ、固い！」

「なめられるな、一機で3機も相手に出来ると思うな！」

「ふふふ、隙ありだよ！」

ミューディーがミラーに攻撃している一機を後ろから倒す。原田とジヨンも一機ずつ倒す。

「ふふふ、相手の力が流れ込んでくるようだ！ まだまだ行くぞ！
黒い実体剣を構えてジヨンが吼える。

ミラーの防御を破ろうとする敵モビルスーツを、味方のモビルスーツが撃破していく。

だが、スウエン達は急に敵の数が増えたのを感じた。

「おい、敵の数が急に増えた。下がった方がいいか？」

「そうだな。各人、防御優先しながらゆっくり下がれ」

「よし、殿軍は俺に任せろ！」

ミラーは最後尾に位置し、防御専念を始めた。

ザフトのモビルスーツが急速に増えたのは、ザフトが第3艦隊の攻

撃に即応できた事を意味する。

だが……ザフトはあまりにも急速に第3艦隊への反撃体制を整えすぎたのだ。完璧すぎるほどに。

ザフトの司令部がどうやら第3艦隊の攻撃を凌げるか、と思い始めた時、第5艦隊が反対方向から姿を現した。

「敵は第3艦隊に集中しているぞ！ 突撃しろ！」

コーブアソ少将が吠えた。

若干残っていたザフトの戦艦が、第5艦隊の攻撃で撃破される。

ザフトは慌ててステーション内部から予備の戦艦を出撃させる。

「救援だ！ 近くのザフト軍に救援要請をしろ！」

軍事ステーションの指揮官は叫んだ。

「司令官！」

悲鳴のような声が聞こえた。

「敵の新手です！」

地球軍第6艦隊だった。

軍事ステーションの通信を聞き、アスランとイザークは軍事ステーションに駆けつけた。

近くに友軍もいる。

「あれは……」

「アスランにイザークか」

クルーゼ隊をはじめとする諸隊だった。

「ただ戦っても詰まらん。君らがまず戦端を開き、適当な所で私が参加する。どうか？」

「はい！」

「了解です！」
これだけなのだ。これだけの会話なのだ。だが、会話が無いよりはるかにましな戦いが出来る！

ザラ隊とジュール隊は地球軍第6艦隊に襲い掛かった。
ハインとシヨーン、ゲイルは前面で敵と対峙する。レイとルナマリもそれに加わる。

敵の新型モビルアーマー、ユークリッドはできるだけ相手にしない。牽制だけに留める。

「はっ！ こいつら、ほんとどうしようもねえって感じ？」
グフが近づこうにも、速度が違う。

「横と後ろはビームシールド無いみたいよ！」

ルナマリはセイバーの機動性を生かしてユークリッドと渡り合う。

「隙あり！」
ついにユークリッドが被弾する！

「ちい！ やられちゃったか！ だがまだまだ！」

ユークリッドに被弾したと言っただけだった。だが、ザフト軍の士気は上がる。

そしてユークリッド隊はより慎重に、ザフトのモビルスーツに注意を払わざるを得ない。

ユークリッド隊の作り出す鉄壁の防御が破れたのだ。

ルナマリは巧妙に、味方の陣の前にユークリッドが後ろや横面を晒すように誘導する。

そして　それを逃すマユではなかった。

「今よ、射撃管制、私に回して！」

マユが叫ぶ。

「はい！」

マユのデステイニーのM2000GX　高エネルギー長射程ビーム砲発射に合わせ、ガナーザク達のM1500　オルトロス高エネルギー長射程ビーム砲が火を噴く。

横を向いていたそのユークリッドは、長距離砲を合わせて散弾のように使うマユの戦法に敗れ撃墜……

「さあ、まだまだいくよお！」

その撃墜されたユークリッドの開いた隙間から、艦船を狙って長射程ビーム砲がつるべ撃ちに撃たれる。特にデステイニーのM2000GX　高エネルギー長射程ビーム砲はその威力を充分に発揮し、3隻の敵戦艦を撃沈した。

第6艦隊は若干油断していたと言えよう。思いもしない損害を被った。

「アスランもイザークもやるではないか。さて、そろそろ行くかな」
クルーゼは不敵に笑う。

軍事ステーションの救援要請を聞いて集まってきた緒隊も集結している。

それが、クルーゼの指揮の下、地球軍に向けて攻撃に入る。

クルーゼの指揮によるザフト軍の攻撃は狡智をを極めた。数で押し切っていたはずの地球軍の陣形にはころびが現れる。所属艦の撃沈報告が続く、ホフアソ少将は一瞬、撤退するか考えた。だがまだだ。まだ第8艦隊がいると思ひ直す。

ザフトの誰もが予想しなかった時に第8艦隊は現れた。

第8艦隊の前にはすでに一隻の戦艦もいなかった。皆他の艦隊に対応していたのだった。ザフトには既に一隻の予備兵力も存在しなかった。

ハノレパートソ准将は叫んだ。

「全軍突撃、軍事ステーションを落としまえ！」

「ようし！」

「予備部隊を」

「ぶつける！」

地球軍の各艦隊は温存していた予備兵力をザフトにぶつけた！

「もうだめだ……」

第8艦隊を確認した時、軍事ステーション司令官クリステイアン・ド・ラ・クロワ・ド・カストリは呻いた。

「司令官！ 何を気弱な！ まだまだやれます！」

「う、うむ、そうだな」

その時オペレーターが叫んだ。

「Nフィールド方面の艦隊……押し出して来ます！ あ……マルクス、レーニン、トロツキー通信途絶！」

ネオの第3艦隊の攻撃である。一撃でザフトの戦艦3隻を葬ったのはネオの乗艦『ガルガリン』の特装砲『麒麟Mk・1 蝕』であった！

「わはは！ 前進！ 前進じゃ！ いっちょ、ぶわあーっで行こう！」

「大官寺艦長！」

ネオは焦るが、貫禄が違う。ブリッジの皆は首をすくめて大官寺の

言葉に従い、単艦で突出を続ける。

「ほれ、撃ちまくれ！ スピードを上げろ！」

当然被弾もするが、幸い複合和紙装甲が役目を果たしている。

そして　とうとう軍事ステーションを指呼の間に捉えた！

「そりゃ！　目の前の軍事ステーションに撃ちまくれ！」

「Nフィールド、第13ブロック、被弾！」

だめだ……

軍事ステーションに直接被害を受けた事で、カストリ司令官の胸に再び絶望が兆した。もつとも戦力が集中しているNフィールド方面でさえこれなのだ……

「敵艦隊に、停戦の申し込みをしてくれ」

「司令官！」

「いいんだよ。もういいんだ……」

軍事ステーションからの停戦の申し込みをコーブアソ少将は受諾した。条件に、軍事ステーションの引渡しがあったからだ。その代わり、ザフト軍の本国への撤退は妨害しない条件である。

このコーブアソ少将の判断は、歴史上多くの賛同者と、同じ位多くの批判者を生む事になる。

カストリにとつて不運だったのは、電波のクラッターにより第8艦隊ではない新たな艦隊の出現が報告された事だった。実はこれは予備隊として第3艦隊から分派されたユークリッド隊で、実数より大きく表示されていたのだった。

更に、大官寺の指揮によるガルガリンの突出により軍事ステーションが攻撃を受けた事を、第3艦隊全体が押して来たと誤認した事である。

実はこの時点で未だ軍事ステーション内にはモビルスーツ300機

を数え、プリント本国から援軍が来るまで軍事ステーションを維持できた、と言う者もいたのである。

第58話「最終兵器発動<1>

「うっむ。ここまで追い詰められてしまつとは
デュランダルは唸った。

「軍事ステーションは所詮器です。ザフトの軍は致命的な損害を受ける事無く撤退できたのですから」

「しかし……これでは本国を守る要塞はメサイアしか無くなつたな
……」

「残存艦隊は、メサイアに向かう様に指示を出しましょうか?」

「そうしてくれ。私もメサイアへ向かう!」

「なんとか無事に本国に戻れそうだなシリー」

「ええ、カン、すごかつたわ。カン」

「君こそいい攻撃だつた」

休養室で、二人がいちゃいちゃしている。

「ルナ」

「あ」

休養室の入り口に居たルナマリアに後ろから声をかけたのはマユだつた。

「どうしたの?」

「ん? 彼らつて、私の部下だつたチアキとミツオに似てるじゃない? ちよつと、話すの辛くてね。思い出しちゃつて」

「そっか」

ルナマリアの肩をぽんと叩いてマユは休養室の中へ入っていった。

「よくやつたわねー! あんた達!」

そう言つてマユはカンとシリーを抱きしめた。

「私も、ああ出来ればいいのにな」

「ルナ、慣れん方がいい、人の死になど」

「え、あ、アスラン！」

「お前はお前らしくやれよ。前に言われたな」

ほんとルナマリアの頭を叩いてアスランは去って行った。

「まさか軍事ステーションを落としてしまうとはなあ」

「それほどザフトが弱体化していると言う事でしょう」

「第9から第12艦隊にも軍事ステーションに向かうように指示を出しました」

「この機を逃さず！ ザフトを敗北させましょう！」

「うむ！」

「軍事ステーションは取られたか……」

アスランは嘆息した。

「ああ。残念だ。しかし、貴様の考えたフォーメーションは効果があつたな」

イザークは言った。

「そうか」

「この際全軍に通達するべきかも知れん」

「ああ、やってくれ。俺からもデュランダル議長に進言しよう」

アスランの考えたフォーメーションはこの後の戦いで意外と地球軍を苦しめる事となる。

アミノミハシラでは、降下作戦の準備が行われていた。

「どうだ、サース？」

ガルドが尋ねる。

「はい、いい機体です！」

サースの機体はパイマラソだ。

「ああ。しかし、俺はこのシャペリンの様なオーブらしいほうがいいが好
きだな。」

ガルドの機体はシャペリンだった。

「サース、無理はするなよ！」

「はい！」

『各員降下準備開始』

アナウンスが入る。

オーブ本土奪還作戦が始まった。

月面アルザツヘル基地から第9艦隊、第10、第11、第12艦隊
が攻略した軍事ステーション目指して進発していく。

「できれば我らも行きたかったがな」

第1艦隊司令長官のラザーノレ・ロポス中將が呟いた。

「我々はいざと言う時のために残っていないければ」

第2艦隊司令長官のバエシタ中將がたしなめる。

「ああ、わかつているとも。だが、どうにも心が逸る……」

「……と言う事で、まだ経験の少ない者達はガナーザク装備で後方
から狙撃すると言う事だ。前面はベテランに任せる」

デュランダルは軍部の首脳に言った。

アスランの考えたフォーメーションの案はクルーゼからもその利点

を進言されていた。

「うむ」

「もつともな話だな」

「後方に置くと言う事で、戦場、新兵特有の恐慌状態にも陥りにくいでしょう」

「で、ここで言いにくい事を言わなければならないのだが……」

デュランダルは口ごもった。

「なんででしょう？」

「徴兵年齢を引き下げたい。13歳に。まだ学生の身分の者を徴兵する事になるが、後方から狙いをつけて撃つだけならさほど難しい事でもないだろう」

後ろめたそうにデュランダルは言った。

「……それは！」

「そこまで。厳しいのですか？」

「元々プラントの人口は2千万だ。地球連合と戦うにしても限界が出始めていると言う事だよ」

デュランダルの言うとおりだった。既に物資の配給制は実施され、先の戦役による消耗、それを補うための更なる徴兵によりプラントの社会システムは限界に近づいていた。

少々暗い雰囲気の中で、その案は決定された。

「第9艦隊、アノレ・サレム少将だ」

「第10艦隊、ウラソフ少将です」

「第11艦隊、ムーマ少将だ」

「第12艦隊、ポロティソ中将だ」

軍事ステーションに集まった面々が自己紹介する。

軍事ステーション攻略を成功させた第3、5、6、8艦隊は補給及び軍事ステーションの周囲を警戒に当たっている。

「我々の情報では、もはやザフトに軍事的要衝は無い。一気にプラントを攻略し、城下の盟をさせるべきだと思うが」

「ふう」

ウラソフは溜息をついた。

「長かったですな。ここまで」

「まさか人口2000万人の集団があればほどに地球に被害を与えるとは思わなかった」

もはや、プラント攻略に区々たる戦術は必要ない。軍勢の多寡を利用して押して行けばよいだけである。しかも、ザフトはプラントと言う民間人の居住する施設を抱えているのだ。プラント攻略作戦会議は自然と雑談になっていった。

「地球連合は、プラント住人を全て地球に移住させる計画らしいですな」

「2千万か……なんとかなるかね？」

「しかし、差別が起こるかも知れんな」

「当然の報いだよ。私の祖父母もエイプリルフル・クライシスで死んでいる。田舎で静かに暮らしていただけだったのに」

会議は、3日後の出陣を決定して、解散した。

「こんな要塞が作られていたとはな」
アスランはイザークに言った。

「ああ、こんな時だ。心強い」

「絶対に成功させようぜ、この作戦」

「ああ、ディアッカ！」

「ジュール隊長！」

その時、部下の一人が声をかけてきた。

「あん？　なんだ？」

「お母様が、おいでになられております」

「なんだと！？」

「ギル。今度の作戦、自分の案が受け入れられたようでありがたい」
クルーゼがデュランダルに話しかける。

「ああ」

「もう一つ、ある」

「なんだ？」

「今度の作戦、ナスカ級とローラシア級に完全に運用を別けたいのだ。そして迎撃作戦は……」

クルーゼは手元のコンソールを操作した。

画面上の敵味方が動いていく。

「どうだ？」

「いいだろう」

デュランダルはクルーゼの出した案に承認を与えた。

同日

宇宙軌道上から超巨大円盤機『ヴリル・オーデイン』がオーブ上空に舞い降り、オーブ本土奪還軍は一斉に降下した！

まずは高野一佐率いる『紺碧隊』を中心とした部隊がカプノレを主力とした水中用モビルスーツでオーブ近海に着水、そのままオーブ本土上陸作戦へと繋げていく。

救国軍事会議側が配置した軍艦は軒並みグラプロとカプノレにやられていた。

救国軍事会議側があわててその方面に兵力を集中した時だった。

大高一佐率いる『青風会』を中心とした部隊が降下し、首都オロフアト 行政府、内閣府官邸、国防総省。オノゴロ島 国防本部 モルゲンレーテ社。カグヤ島 マスドライバー施設の制圧を目指す。

オーブ本土奪還軍の装備するモバイルスーツは、灰田氏による設計図の調整により、この時代のモバイルスーツとしては最高の性能を誇っていた。

各地で救国軍事会議側の軍を包囲するようにいくつもの輪が閉じ、潰れていった。

「これで！ 家を復興するんだ！」

サーズの気迫はいつもの雰囲気とはまるで違い、凄まじかった。敵の攻撃をビームシールドで防ぎ、お返しとばかりに大型ビーム砲をぶちまかし、敵モバイルスーツを消滅させる。

「熱くなるな」

そうサーズに助言をしながら、さりげなくガルドはサーズを狙ったモバイルスーツをビルライフルで撃破した。

「ちくしょう！ 上の奴らもだらしない！」

タキト・ハヤ・オシダリは悪態をついた。

「どうします？」

部下が焦った声で指示を求めてくる。

「ようし、敵の奴らが見逃している所がある。そこを狙う！」

「一体どこで？」

「オーブ中央銀行さ」

タキトはにやりと笑った。

「救国軍事会議はもうだめだ。銀行を襲って金を手に入れ、モバイルスーツは乗り捨てて逃げる！」

「いいですな」

「そりゃあいい!」

タキトの提案に驚くどころか、部下達は賛成の声を上げる。

「では、行くぞ! ヤマダ、ワダ、スズキ、タナカ!」

「イザーク……元気な姿を見られてほっとしたわ」

イザークの私室に通されたエザリア・ジュールは、安心したような笑みを浮かべた。

「どうしたというのです、母上?」

「いえね、プラントも追い詰められているわ。プラント本国がいつ攻撃にあってもおかしくない。そう思ったら、あなたに無性に会いたくなったのよ。でも安心した。これでもう思い残す事は……」

「母上……プラントは、俺が守ります!」

「ふ……そうね。頼りにしてるわ」

「ええ、頼ってください!」

「でもね、もし、もし私が死んでも、あなたはひとりぼっちじゃないのよ」

「何の事です?」

「あなたには、弟がいるの」

「なんですって!?!」

「ふふ……驚いた?」

「驚きましたよ!」

「まあ、残念ながら私の生んだ子供じゃないけどね。この際教えておこうと思って。ほら、この子よ」

「これは……!」

エザリアから渡された写真を見たイザークは言葉を失った。

軍事ステーションを根拠地とした、地球軍のプラント攻略部隊は順調に歩みを進めていた。

「ザフト軍はプラント本国前に陣を敷いているようです」

「そうか。布陣は？」

「中央部が厚く、周辺部が薄い。まあ、順当な陣形ですな」

「中央部が厚いと言っても、今のザフトの戦力だ。我々の兵力と比べればたいした事は無いだろう？」

「それは確かに」

「では、我が軍は鋒矢の陣形を取る！ もはやザフトに我が軍を包囲する戦力は無い！」

「はっはっは！ 大金持ちだぜ！」

銀行強盗を首尾良く果たしたタキトは、元恋人のリンナ・セラ・イヤサカの元へと混乱した町中を車を走らせた。

「あ？ タキト？ 何よ今更？」

家の扉を開いたリンナはそっけなく言った。

「おいおい、そんな口聞いていると後悔しちゃうぜ？」

「なによ。いい？ 今のあんたがあたしと釣り合つとでもおもっているの？ あたしは二尉に降格されたあんたなんかいらぬの！ 愛想が尽きたの！」

「お、俺と一緒に来たら、警沢できるぜ！」

「ばーか。気持ち悪いのよ！ もう来るな！ もう私には彼がいるの！ あんたよりずっと素敵なね！」

リンナは扉を閉めようとした。が、タキトは怒りの表情でそれを阻んだ。

「何よ！ きゃ、うぐう……」

「貴様、貴様、貴様、この売女！」

タキトはリンナにのしかかり、その細い首を締め上げた。リンナは必死に抵抗したが、やがて動きが止まった。

「はっ……俺は……何を……」

タキトは我に返り、その場を逃げ出した。駆け出した。

その時、タキトはいきなり周囲が暗くなったのに気づいた。

子供のような素直さで上を見上げたタキトの上に、撃墜されたM1アストレイが落下してくる！ その真下には幼児が危険に気づきもせずふらふら歩いていた！

タキトはダッシュして子供を、横の方へ、悲鳴を上げている幼児の母らしい女性の方へと投げ出した！

瞬間、M1アストレイがタキトの下半身を押しつぶした。

へへ、こんな俺の最後としちゃ、まあまあかな……

満足そうな笑みを浮かべながら、タキトの意識は薄らいでいった

オーブでの戦闘は急速に収束へと向かっていった。

一時間後、救国軍事会議の首班であるプロソズ將軍、ストークス將軍始めノレクランシュー佐、エペソスー佐、と言った首魁が自決。オーブのクーデターは鎮圧されたのである。

「とうとう、地球軍がプラント本国を攻めるようだ、ラクス」
バルトフェルドが言った。

「そう。でも、地球軍にはメサイアの情報は漏れてはいないのでしよう？」

「そのようだな。でなければあんな陣形を取るはずがない」

「地球軍は、痛い目に遭いそうですね。その時が、わが軍の動く時

となりましょう。準備を怠らないように」
「わかった」

自室に戻ったバルトフェルドは、亡くなった恋人、アイシャの写真に語りかけた。

「もうすぐだよ、もうすぐ……」

3日後、地球軍はプラント攻略を目指して出撃した。
プラント前面に陣を張るザフトと砲火が交わされる。

だが、ザフトの砲火は地球軍のそれと比べて弱々しく感じられた。

「今だ、突撃して奴らの陣を食い破ってやれ！」

先鋒を任された第9艦隊、アノレ・サレム少将は吼えた。

ユークリッド隊が敵陣を食い破っていく。

ザフトの陣を突破できる……そう感じた時だった。アノレ・サレムは何か違和感を感じた。如何にしても、弱すぎる。

その時、ザフト軍は中央部を破られるのではなく、自ら中央部から撤退していた。高速なナスカ級のみで構成された周辺部艦隊が、急速に地球軍の側面を逆進して行く。

「急げ！ 急がんとネオ・ジェネシスに巻き込まれるぞ！」

ザフトの陣形はまるでチューブの様に中央部がぼっかり開いた。

そして……最後方に、ミラー・ジユコロイドを解いたメサイアが姿を現す！

「あれは……急げ！ 急いで中央部から撤退するんだ！」

そのアノレ・サレムの命令は全てに遅すぎた。
光が、アノレ・サレムを包んでいった

いつの間にか、地球軍はコップの内部に入ったかのような形になっていた。

コップの底は要塞砲、コップを形作るのは地球軍を包み込むように急激に前進してきたナスカ級を中心としたザフト艦隊だ。

補充された新兵も、艦に乗って狙いをつけて撃つだけならできる。

ミネルバも当然先端にいる。マユが、カンが、シリーが、デューサーが撃ちまくる！

「マユさん！ 私……撃沈しちゃいました！」

「よくやった！ さあ、撃ち続けるのよ！」

「撃て、撃て！ 撃ちまくれ！」

ザフト軍の司令官が吠える。そして、ネオ・ジエネシスの第2射地球軍第10艦隊司令長官ウラソフ少将の意識はネオ・ジエネシスの光の中へ消えた。

第59話「最終兵器発動<2>

プラント攻撃にあたった地球軍艦隊は3度に渡るネオ・ジエネシスの発射によりその8割を消失した。

「どうやら、一先ずは地球軍の攻撃を防げたようだな。次はなんとか交渉に持ち込んでプラントの存続を図らねば……」

デュランダルがひとまずアプリリウスへ戻り、プラント評議会の会議が終わらせて執務室へ戻ろうとした時である。

「か〜ん〜ぞ〜く〜!」

前から突進してくる男の言葉が『奸賊』を意味する言葉だと理解した時だった。デュランダルの腹部に、熱い物が突き刺さった

「議長の容態はどうなのだ？」

「……」

医師は首を振った。

「後は本人の体力次第です」

「犯人は？」

「奥歯に、シアン化化合物の入ったカプセルを仕込んでいました。それを噛み砕いて……」

混乱するプラントに近づく艦隊があった。

「あれはなんだ!？」

「地球軍の艦艇だぞ!」

「いや、待て、先頭はエターナルだ!」

その時、謎の艦隊から通信があった。

『ザフトのみなさん。わたくしは、ラクス・クラインです!』

苦しい状況の中、地球軍の艦艇を数多く強奪してきたと言うラクス軍の行為はプラント市民に英雄のように捉えられた。

フリーダム強奪事件の真相などは、まだ一般市民に知らされていないかったのだ。

『で、あなた方はどうしたいと？ ラクス・クライン?』

「もちろん、祖国の勝利に貢献する事ですわ」

「っこりラクスは微笑んだ。

「わたくしが持つてきた艦隊もお役に立ててくださいな」

『……条件は?』

「そうですねえ。今はまだ、わたくしが上に立つのもおかしいでしょうから、アイリーン・カナーバを釈放、評議会議長に復帰させてくださいな」

「ラクス・クラインが？ 私を釈放？ 評議会議長に?」

知らせを聞いた拘禁されていたアイリーンは驚いた表情をした。そして突然笑い出した。

「ほほほほ!」

笑い止んだアイリーンは言った。

「いいでしょう。これが運命と言う訳ね。引き受けましょう!」

地球軍のプラント攻略部隊は、アノレ・サレム少将、戦死。ウラソフ少将、戦死。ムーマ少将、戦死。

かろうじて一番後方にいたポロティソ中将だけがなんとか生還を果

していた。

「どうすればいいのだ、どうすれば……」

その時、颯爽とサハク姉弟が現れた。

「ヤキン・ドワーエのジェネシスと同じ武器にやられたようだな。

若干威力は弱いようだが」

「代わりに、連射ができるようだ。それで、8割まで艦隊が損害を受けた」

「どうしたのだね？ なにか用なのか？」

ポロティンが質問した。

「ザフトの新要塞、要塞砲、正面はオーブ宇宙軍に任せてもらおう！」

ギナは自信ありげに言った。

「なんだって？ オーブに戦艦なんか4隻しかおらんだろっが！」

「残りは無人艦でも配置して増量して艦隊に見せかければよい。とにかくオーブ宇宙軍のイズモ級をジェネシスに狙って欲しいのだ」

「あの金ピカの艦か？」

「ふふふ。金色こんじきの艦隊と呼んでくれ。あの金ピカ装甲に秘密があるのだよ。ザフトの奴ら、驚くであろうな」

ミナはほくそ笑む。

「ザフトが混乱したら、地球軍に側方から攻撃してもらえばよい」

他に適当な案もなかった。もしジェネシスが撃たれても、被害はオーブ宇宙軍4隻と無人艦だけである。

サハク姉弟の案は承認された。

地球軍のプラント攻撃は再開された。ただ、とりあえずの目標は変更されている。新しく確認されたザフトの要塞だ。

そこに、オーブ宇宙軍の金ピカのイズモ級4隻を先頭に無人艦がまるで艦隊が行動しているように見せかけ、続く。第3、5、6、8艦隊は前回の戦訓から、ジェネシスの効果範囲に入らないように注

意してオーブ艦隊の周囲を取り囲み、全体として紡錘形を保って進んでいく。

「どうやら、勝ったな。このカシオミニを賭けてもいい」
アミノミハシラで戦況を見ていたユウナが言った。

ここでザフト軍が地球軍を撃退したとしても、もう次の攻勢に耐える体力がない事に気づいていたのだ。

「ああ。オーブもクーデターが鎮圧完了と言う。早く本土へ戻ろう。私のむじな姿をオーブ国民に見せて、笑顔を取り戻してやりたい」
「そう思って、準備しといたよ」

そう言うユウナはタヌキの着ぐるみを取り出した。

…… 10分後、彼らはシャトルでオーブ本土を目指した。

「また懲りずにやってきたか」

メサイアに向かってくる地球軍を見て管制室のクルーが馬鹿にしたように言う。

「……？ ただメサイアのまん前に進んで来るだけではないか？

何かの罠では？」

「どつちにしる撃たずには居られまい。対空砲火開始！ ネオ・ジエネシス発射用意！ 狙い、敵中央部！」

メサイアからの対空ビーム砲がオーブ艦隊を包み込む。

メサイアの司令室から金ピカ艦の後ろの艦隊が撃破されていくのが見えた

そして……メサイアが揺れた　　！

「主任！　メサイアに衝撃！」

「何事だ！？」

メサイア前面表面、対空施設、全滅！　応答ありません！」

メサイア表面に多数設置されていた対空ビーム砲　それは『ヤタノカガミ』の反射によって破壊された。

「ええい、細かい事はいい！　ジエネシスを撃てば終わる！　ネオ・ジエネシス発射！」

ネオ・ジエネシスが発射され、光がオーブ艦隊を包み込む！

そしてネオ・ジエネシスも

金ピカの『ヤタノカガミ』でネオ・ジエネシスの光を真っ直ぐに反射されたその光はネオ・ジエネシスの砲口に威力を減衰しないまま突き刺さり……その内部で爆発！　メサイアは崩壊した。

660

「なんと言う事だ。悪夢だ」

プラント評議会の皆はアイリーン・カナーバを除いて頭を抱えた。アイリーンは何を考えているのか、表情に変化を見せない。

「おい、なんでコロニー全基に急にフレアモーター付けるなんて？」
「さあ？　とにかく評議会議長からの命令だ。手早くやっちまおうぜ！」

「……どのような手か知りませんが、地球軍にも策があったと言う事ですね」

エターナルの艦橋でラクスは冷静に言った。

「では、マンハッタン作戦の発動を命じます。各艦には事前に送ってあったコード1945を開き、それに従うように伝えてくださいな」

「ラクスか」

通信を開くと苦々しげにアスランは呟いた。

「あの女……」

アスランはラクスを憎んでいると言っている。

だが、ラクスは何か事態を開き、策を持っているらしい。

また、自分の地位も何かを為せる地位にある訳ではない。3隻の艦を統率するだけのただの臨時のザラ隊長だ。

アスランは感情を理性で抑えた。

不本意ながらそれに従うしかなかった。

メサイアを崩壊させた地球軍は、プラント目指して突き進んだ。

突然、一隻の戦艦が爆発した。その爆発は数を増していき、地球軍は混乱に陥った。

「今だ、行くぞ！ イザーク！ アスラン！」

「はい！」

上級指揮官となったクルーゼの声に従い、イザークとアスランは旗下の艦に攻撃を指示する。

メサイアの崩壊に巻き込まれなかった残存ザフト軍が攻撃を開始する。

「なんだ、あの金ピカの艦は！？」

後ろに引き連れていた無人艦艇はネオ・ジェネシスに破壊され、イズモ級4隻だけが孤立して、崩壊したメサイアの前面に存在している。

た。

「いい度胸だ、やつちまえ！」

「あれだけ突出していると言う事は何かの罠かも知れない！ 気を付けて！」

マユが叫ぶ。

「罠なんてありませんよ！」

カン・トークがM1500 オルトロス高エネルギー長射程ビーム砲を放つ。

一瞬、何かが光った。

「ああ！？ カン・トーク！」

何故だかわからないが、カン・トークのザクが爆発した。

「よくもカン・トークを！」

シリー・ズ・コウセイが叫んだ。シリーはカン・トークと恋人同士の間柄だったのだ。

シリーは顔を歪ませてオルトロス高エネルギー長射程ビーム砲を構える。

プロ・デューサーも同じくオルトロス高エネルギー長射程ビーム砲を構える。

そして……発射。

次の瞬間、シリーもデューサーも訳もわからずザクの爆発の中で命を落とした。

「ははは！ 見事な物だ。この金ピカ装甲は。ザフト軍に突っ込むぞ！」

ギナが笑った。

「物理的攻撃には無力だと言う事を忘れるな。あと、ビームサーベルにもな」

ミナが指摘する。

「わかつている。最大戦速で一回だけ、突き抜ける。どうだ？」
「いいだろう」

イズモ級4隻は地球軍を攻撃するザフト軍に突撃した。

ザフト軍の内側に入り込み、『ローエン格林』、『ゴットフリートMK・71』を撃ちまくる。

ザフト軍艦艇は内側に入ったイズモ級を攻撃するが、イズモ級の金ピカの装甲『ヤタノカガミ』で反射された自らのビームでわけもわからず撃破されていく。

「行くよ！ こいつら、なんとしても許さない」

「ああ、姐さん！」

ヒルダ達はオーブ艦隊に接近、攻撃を仕掛けた。

JP536X ギガランチャーDR1マルチプレックスで実弾とビーム砲を発射する。

ヒルダは実弾が金ピカ艦隊の装甲に食い込み破裂するのを見た。

「はは、ざまあ……」

その時、ヒルダは何かが高速で迫ってくるのを感じた。

「くっ」

あやうく何かの攻撃を躲す。

「くそ、なんだってんだい！ レーダーには何も……」

向こうで何かが急速旋回してくるのが見える。

「まあいいさ！ いくよ！ ジェットストリームアタック！」

「おつよ」

「いいともさ！」

「く、スピードが！ 間に合わない!？」

ヘルベルトとマーズのドムトルーパーからJP536X ギガランチャーDR1マルチプレックスが放たれる！

ヒルダは咄嗟にドリルランスMA-SX628フォーディオを手に

取り、突き立てた。

「ざまあ！　これで……効いてない!？」

「はははは！　貧弱、貧弱っ！」

それは、ギナの操る高速高機動モビルスーツ、ゾッグであった。ガンダニューム合金の装甲により、ヒルダ達の攻撃をいとも簡単に受け止めたゾッグは、頭頂部のメガ粒子砲を発射する！

次の瞬間、ヒルダのドムトルーパーは、ビームシールドを使う余裕もなくメガ粒子砲に貫かれ爆散、ヒルダの意識は四散した。

次に突進に移ったゾッグは両手のツメにドムトルーパーを引っかけ、急激な加速を行う。

「ち、装甲が剥がれた！」

その代わりにゾッグのツメからは逃れられたのだが、マーズとヘルベルトは喜んではいられなかった。

「遅いわ！」

いつの間にか、真つ正面にゾッグがいた。そして、両肩から放たれる四つの光　！

「行動不能！　脱出する！」

だが、その瞬間マーズとヘルベルトのドムトルーパーは再びのゾッグからの光を浴びて、破壊された……

「あっけない、つまらんな」

ギナはつぶやき、それ以上艦隊に近づくモビルスーツが無いのを確認するとイズモに帰還する。

このオーブ宇宙軍の突撃により、混乱する地球軍は撤退する貴重な時間を得た。

「あれは、あの爆発は何だったの？」

撤退していく地球軍を見ながら、エターナルに連絡士官として派遣されていたザフト軍人がラクスに尋ねた。

「ああ、あれ。核爆弾ですわ。ミラーシユコロイドをつけてあらかじめあの宙域に設置しておいたのです」

「か、核爆弾!？」

「あらあら、宇宙には原子爆弾の発する以上の放射線が飛び交っているのに今更ですわね」

あわてふためく軍人に嫣然とラクスは笑った。

「どうやって、核物質を手に入れたの？」

プラントには、ニュートロン・スタンピーダに使っただけでほとんどの核物質を消費していたと言うのに。

「大洋州の同士が、協力してくれましたのラクスはくすくす笑った。

「後は、地球連合に、もう一度ユニウス7を経験したいかと脅しつけて交渉するだけですわ! 核でもよいですけど」

「すごいや、さすがラクスだよ!」

キラがはしゃいだ。

「キラ……今、幸福かい?」

ふいに、バルトフェルドが聞いた。

「うん? 幸福だけど? だってラクスが希望を果たして……」

「そうかい」

バルトフェルドはつぶやくように言い……

!

バルトフェルドはいきなり左腕の義手を抜いて、キラに向けて銃を連射した。

キラは倒れこんだ。血溜りが広がっていく。どう見ても死亡するのに十分な流血の量だった。

「 ! どうして? どうしてこんな事を!? キラ君を!?! 」

混乱した様子でマリユールが叫んだ。

「こいつはアイシヤを殺した」

ぼつりとバルトフェルドは言った。

「で、でも! あれは戦いで! 」

「ああ、最初は恨みになんか思っっちゃいなかったさ。キラが心を病んだ時も本気で心配していた。だがねえ」

バルトフェルドは溜息をついた。

「楽しかったよなあ、ラクス。世界をこの手に握る計画を練るのはさ」

バルトフェルドは両手を広げて見せた。

「でもな。俺が、ラクスと作ったデュランダル議長の野望の書。粗末なもんさ。デュランダル議長本人が書いたと言う事にした訳でもなかった。知り合いが書いたと言う事にした。筆跡ではれるからな」

……それを簡単に信じ込み、ラクスの言葉を簡単に信じ込むキラを見ている間に、思ったんだ。……ああ、こんな奴なら、アイシヤの仇を取ってもいいかなあつてな」

「そんな……」

「一度思っちまうと、恨みが表れてきた。募ってきた。だが、これでも我慢したんだぜ? 義理を果そうつて。ラクスが天下を取るまではつてな。さあ、行けよ、ラクス。その血だらけの手で世界をつかめ! 」

「くっ」

ラクスはキツとなるとキラの死体から銃を取り出し、バルトフェルドに向けて発砲した。

銃声が響く。

「あ。ああ……」

数発発射した後、ラクスは自分がした事が信じられないかのように気が抜けたように座り込んだ。

バルトフェルドはその身体から血を流し倒れこんだ。

「……へへ。いい顔だったぜ、ラクス……いつもの作り笑いよりよっぽど……」

「しゃべらないで！ 衛生兵！」

一番早く正気に戻ったのはマリューだった。

最近いつも感じていただるさを、精神の高揚が吹き飛ばす。

マリューは呆然と座り込んでいるラクスの頬を叩いた。

「しっかりなさい！ ラクス軍の皆の命はあなたに掛かっているのよ！？ さあ、気を取り直してアプリリススに向かいなさい！」
もう一度、マリューはラクスの頬を叩いた。

「……大丈夫……」

低い声でラクスは声を出した。

「負けるもんですか。私は世界の物、世界は私の物！」

血を吐くような口調でラクスは言い、立ち上がった。

「アプリリウスに行きます！ 用意しなさい！」
張りのある声でラクスは命令した。もう後ろは、キラの姿は振り返らなかつた。

「ラクス！ 会いたかつたわ！」

アイリーン・カーバが言った。

評議会室にラクスが入ると、銃を構えた男達が周囲を取り囲み、ラクス達に狙いをつけた。

「これは一体どう言う事です？」

予想と違うアイリーンの出迎えの様子に、硬い声でラクスが尋ねた。
アイリーンはプラント内の腹心のはずだった。はずだったのだが、これはなんだ？

「お黙りなさい。この父親殺しが！」

アイリーンは怒鳴った。

「私をプラント内の腹心と置いていたわよね。おあいにく様。このような時が来るのを待っていたのよ！ シーゲル様の仇のお前を始

末できる時をね！」

「父親殺し？　なぜわたしくがそのような事をしなければいけないのです？」

「今更しらを切る気？　フリーダム強奪の際、監視カメラにわざと顔を見せたわね。そして、わざわざシーゲル様と別れて身を隠し、シーゲル様の潜伏場所を通報した！　全てネタは上がっているのよ！　不肖の子が！」

「……ええ。確かに私は父親殺しをしたと言えるかもしれませんがラクスは認めた。」

「でも、それは父、シーゲルが人類滅亡を企んでいたからです！　とんでもない言葉だった。」

だが、それを聞いても、アイリーンの表情は変わらなかった。

「知っていたわ」

表情も変えずアイリーンが言った。

「え？」

ラクスが戸惑ったような顔をする。

「知っていたわ。そんな事。奥様が死んだ後、誰よりもシーゲル様に近かったのはこの私よ」

「そんな……」

「シーゲル様は地球環境が悪化していく事に非常に苦悩していたわ。そして気づいたのよ。人間がいなくなれば全ては解決するってね」

「狂ってる……」

「そうかも知れないわね。」

アイリーンはにっこり笑う。

「では、私の狂気はあなたが保証してくれるという訳ね。では、あなたの正気は誰が保障してくれるのかしら？　あなたがオーブのウナト宰相を暗殺し、デュランダル議長を暗殺しようとした事はネタが上がっているのよ。ああ、ついでにあの可哀想なあなたの偽者、ミアもね。そこまでして落ち目のプラントの支配権が欲しかった

？ それとも地球の支配権かしら」

「……」

絶句したラクスをよそに、アイリーンはデスクにある通話機を取った。

「緑の豆へ。『最後のラツパを吹き鳴らせ』」

「……？」

「同士への暗号よ。これで、全てのプラントのコロニーが地球に落下を始めるわ」

「そんな！ 地球が滅びてしまう！」

「些細な事よ、そんな事」

アイリーンは事も無げに言った。

「地球は、太古に植物を繁栄させて嫌気性生物の発展の道を奪ったわ。それって地球環境には大変化じゃない？ 大体大昔は人類が住める環境じゃなかったのよ。そこまで昔に行かなくても、古生代のオルドビス紀末、約4億3500万年前の大量絶滅では、当時生息していた85%の生物種が絶滅したと言うわ。2億5000万年前、古生代後期のペルム紀末に過去最大規模の大量絶滅が起こっているわね。当時、海洋生物のうち96%、全ての生物種でも90〜95%が絶滅したと言われるのよ？ 最近じゃあ白亜紀末、6500万年前には大型爬虫類の恐竜やアンモナイトなど地球上の全生物の70%が絶滅したと言われているわ。……ふふ、地球環境を守るって何よ？ 人間に都合のいい環境の事だけじゃない。些細な事よ、地球にとっては。プラントが落ちて起こる災害なんか。プラントが落ちて地球は平気で存在するわ」

「く、狂っているわ！ あなた！ 父は、父はそれでも現在の地球環境を守ろうとして！」

「どうでもいいのよ。今更ね。シーゲル様はシーゲル様。私は私。私にとっては現在の地球環境もコロニーが落ちた後の地球環境も等価値なのよ」

「くっ」

「…」

皆がラクスとアイリーンの会話に注目する中、隙を掴み、突然、アイノルド・ノイマンがマリューの身体を掴み、部屋の外へと脱出する。

「撃ちなさい！」

度重なる銃声。

背中から血を流しながらノイマンは、重い扉を閉め、自らの身体をもたれかけさせ扉が開くのを防ぐ。

「ノイマン！ あなた！」

「これを……お飲みください」

ノイマンは胸ポケットから小瓶を取り出す。

マリューはそれを飲んだ。どこかだるかった身体が、さーっと軽くなる気がする。

「身体がだるかったでしょう？ それが取れたはず。覚醒剤です」

「覚醒剤！？」

「ラミアス艦長……謝罪します。私はあなたを洗脳する役目を引き受けていました。ラクスの思い通りになる人形に……」

「なんですって！」

「あなたに使われた薬剤と治療法のデータは自分のパソコンの中に。パスワードは『N a t a r l e B a d g i r u e l』」

「ナタル！？」

思いがけない懐かしい名前にマリューは驚いた。

「バジルール中尉を殺したあなたは、愛する男を殺された、ただの私怨でローエングリン発射を命じた様に見えた……。そのくせ憎しみあつて戦争は終わるのかときれい事を言う。それがずっと拘りだった。先の戦役が終わった時から、ラクスはそんな自分の気持ちをすべて見抜いていました。そしてユニウス7落下事件の後、自分に声をかけてきた。復讐だったのですよ。あなたに自分を愛させてやると言うラクスの言葉に乗って……。あなたに自分を愛させ、そして自分は……」

「あなた……ああ、ごめんなさい。血が止まらない……」

マリユーはノイマンの告白を聞きながら彼の止血を試みるが、見るうちに血溜まりが作られていく。

「もう、いいんです。やっとわかった……ああ、バジール中尉！ 迎えに……？ ラミアス艦長？ 早く、早く逃げてください！」

私はもうだめです！ 自分はこのままバジール中尉と……」

すでにノイマンの意識は混濁しているようだった。

「わかったわ！」

マリユーはノイマンの唇にキスをする、救命艇のある場所を目指して走り出した。

「絶対、生き残ってやる！」

「ふ……まあいいわ。さあ、抗うものは抗えばいいわ。私達は人類滅亡までゆつくり楽しみましょ。あなたは生かしておいて上げるわ」

そう言いながら、アイリーンはラクス四肢に銃弾を撃ち込んだ。

ラクスはその痛みに悲鳴を上げる事すらできなかった。

「椅子に座らせて上げなさい」

「はっ」

四肢を破壊され身動きできなくなったラクスは男達の手で椅子に座らされた。

ラクス、そしてアイリーンの前には刻々と近づいていく地球。

「さあ、このアプリウスもどこまで持つかしらね。その内自壊するわ。地球に激突するまで生きていられないのが残念。ワイン、飲む？」

男の手がワイングラスをラクスの唇に近づける。

「ええ、頂くわ」

ラクスは一気に飲み干した。こぼれ落ちたワインが首を伝う。アルコールが身体に廻り熱い。どの道できる事はもうないのだ。

「お望みなら毒入りのワインにしてあげるけど？ この光景を見て

いられないと言っならね」

「結構よ」

ラクスはアイリーンの提案を断った。

この結末を出来る限り自分の目で見届ける事……それが自分の責任だと　世界をこの手に握るために、最初にウナトを殺し、ミアアを殺し……デュランダルを襲わせ　次々に引き起こした事態への責任だと思っただのである。

「ほほほ。さすがね。ウナト・エマ・セイランを殺し、ミアア・キヤンベルを殺し、ギルバート・デュランダルの暗殺を謀る女だけはあるわね」

「……」

ラクスはただアイリーンを睨み付けた。

「否定しないのね」

「今更しいですわ。ただ、私には志がありましたわ。手を汚して悔いない……」

「へえ、どんな？」

「世界を平和の内に治める事ですわ。もう少しで可能でしたのに！」
「あはは！　核やコロニー落としで脅しつけて作り出す平和の世界？　笑っちゃうわ。……ねえ、聞かせて頂戴。何故、世界を混乱に落としいれ、そして世界の覇権を握ろうとしたの？　普通に選挙に出てプラントを支配しなかったの？　そうして、コロニー落としで地球連合を脅せばよかったじゃない？　ねえ、何故？　そうすれば、私だってあなたの目を掻い潜ってこんな事は出来なかったかもしれないのに」

「こちらも聞きたいですわ。なぜ、前戦役の終わった時に事を起こさなかったのですか？」

「ジェネシスで十分と思っただからよ。見事にあなたたちに邪魔されただけ」

「では、あなたが！　……その後評議会議長になったのにコロニー落としをしなかったのはなぜですか？」

「地球軍に警戒されていたからに決まっているじゃない。それに平時にコロニー落としをしようとしてもプラント市民が邪魔するわよ、さすがに。コロニー落としを成功させるには今のようになら攻撃されて混乱している時でないとねえ」

「まさか！ ユニウス7を墮として再び戦争を起こしたのは！？」

「それも私よ。もっともギルバート・デュランダルも彼なりの思惑があつてテロリストに手を貸していたようだけど」

アイリーンはにいつと笑った。
ラクスはアイリーンから目をそらした。
敗北感が身に満ちた。

スクリーンを見つめ、もはやアイリーンに話しかけなかった。
ただ、後、思う事は……

ああ、今更かもしれないけれど。あなた達はなんとか助かつて、ラミアス艦長達……

！

その時、どこからともなく飛来した一発の弾丸が、ラクスの頭を吹き飛ばした

それは、神の慈悲であつたのだろうか？

「依頼、完了……」

地球へ向けて動き続けるアプリリウスの中で、裏の世界で有名なスナイパー、ゴルゴ41はそうつぶやくと、焦る様子もなく手に持ったフォーティワンアイスをなめながら、コロニーから脱出するために移動をはじめた。

「なんだと？ ふざけるな！」

デュランダルが暗殺されかけたと言う事で慌ててアプリリウスへ詰

め掛け入港したクルーゼである。

いきなり、通信方向が全方位に向けた広域発信通信を受信した。

それは……アイリーンとラクスの会談の映像だった。

「くっ。ギルを暗殺しようとしたのか、許さん！ お前らだけは……」

クルーゼは立ち上がった。

「レジエンドで出る！ 用意しろ！」

「お待ちを」

レジエンドを出し、評議会議長室へ行こうとしたクルーゼを押えたのは副官だった。

「あなたが先の戦役で何をしようとしたのかは存じております。ですが！ 今、ここにあなたの指揮を待っている者がおります！ あなたを信じて指示を待っている者が居ります！ それでも行かれませんか！？ あなたの個人的な事情を満足させるためだけに！ それでも、それでも自決に行動なされるというなら勝手になさるが良い！」

「……くっ……」

クルーゼは呪った。かつてなら面白がってみていたであろう、この世界を滅ぼさんとする者達を。

席に座りなおすと指揮官として言った。

「港に、避難者が退去して来よう。限界まで、避難者を救助せよ！

離脱限界高度までだ！ 港にも伝える！」

「何が起こった！」

アスランは目の前の光景が信じられなかった。

プラントのコロニー全基が、地球に向けて落下をはじめていく。

ユニウス7落下の時の光景が頭を過ぎる。

「ミネルバのタンホイザーで……」

プラントから脱出艇が次々に発進しているのが見える。

「だめだ。プラントには人が居る！」

アスランは決意した。自分の父の、ある意味では呪われた名前を利用する事を。

「全軍、聞いてくれ！ 俺はパトリック・ザラの息子、フェイスのアスラン・ザラだ！ 一時的に全軍の指揮を取らせてもらう！ まず地球軍に休戦を申し出る。プラント住民の救援のためである！ どうか、受け入れられたい！」

そしてシンに言った。

「シン、長距離通信で地球軍に講和と救援を申し込め、アスラン・ザラの名でだ！」

「はい！」

「続いて、ザフト軍残存全艦に告げる！ プラントから脱出艇が発進している！ 彼らを一人でも多く助けるんだ！ もう戦っている場合じゃない！」

「ふ」

イザークはその通信を聞くと微笑を浮かべた。

「やはり。これでこそアスラン・ザラだ。いつも俺より上を行きやがる。自慢の……弟だ！」

そして部下に命令した。

「プラントに急行しろ！ できるだけ多くの人々を助けるんだ！」

その光景は地球軍艦艇からも確認されていた。

「おいおい、なんだこれは！」

「まさか、戦争に負けるからって俺達を道連れにする気じゃあるまいな！」

「なにかできる事はないのか！？」

その時、アスランからの長距離通信が届いた。
「なに？ 講和と救援要請！？」

「ええい、私の独断で構わん！ レクイエム、発射用意！」
「はっ」

地球連合軍ダイダロス基地の司令官は命令した。

『レクイエム』 巨大ビーム砲を、月の周辺に配置されたビーム偏向装置を設置した複数の廃棄コロニーで全方位に攻撃可能と言う代物である。その威力は前戦役時のジェネシスに匹敵する。

「とにかくできるだけ多くのプラントを破壊できるコースを取らせる！」

「プラントからは、まだ脱出艇が……」

「知るか！ 奴らの自業自得だ！ 人類を心中させる訳にはいかんだろうが！ これこそ積極的自衛権の行使って奴だ！」

軌道間全方位戦略砲『レクイエム』が発射された。

レクイエムは数基のプラントを両断した。

だが、両断されたプラントはそのまま落下を続ける。

「司令！ あの大きさでは落ちたらどの道……」

「わかっておる！ だが、何かやらなきゃいかんだろうが！ 1%でも可能性がある内はよう、あがくのが男つてもんだ！ レクイエム撃てるだけ撃て！ 撃ちまくれ！ プラントを細かく破壊しろ！」

「アスラン！」

帰還したルナマリアがブリッジに入ってきた。

「何が起こったの？」

「プラントが……全基、地球に向けて落下を始めた」

「何か……できないの？」

「メテオブレイカーも無い！ それにプラントの中には人が居るんだ！」

「地球、滅びちゃう……」

「地球も滅べば宇宙に居る俺達も、終わりだ……」

「アスラン！」

ふいにルナマリアは叫んだ。

「何だ？」

「死んじゃうなら、私言いたい！ 私、あなたが好き！ ずっと前から好き！」

「俺もだ！ ルナ！」

二人は抱き合い、むさぼるようにキスをした。

その間にもプラントは地球に落下していく。

677

全基のプラントは、大気との摩擦熱で赤熱しながら、地球に落下していく。

「ああ……！」

ルナマリアとアスランはその様子をどうしようもなく見つめていた。

「お兄様……」

セトナがジブリールの手を握る。

ジブリールはシャトルまで使って赤道連合までやってきた。

プラントが落下を始めたとき、ジブリールの頭に浮かんだのはセトナのそばに行きたい、ただそれだけだったのだ。

ジブリールは優しくセトナの髪を撫でる。

「この様な事が起こらないよう、なんとかしようと思って来たが、

すまん。力不足だった」

「いいえ！」

「不思議だな、こんなに穏やかな気持ちなのは。セトナと一緒におかけかな。出会ってくれてありがとう」

ジブリールはセトナに微笑んだ。

「ユウナ、あぶないぞ！ さっさと避難を……」

カガリの声に、海岸に出ていたユウナは振り返った。

「やれやれ。アメノミハシラが出る時はこれで事は済んだと思ったのにねえ。ユニウス7一基であれほどの被害だったんだ。今度こそ地球は終わりさ」

「ユウナ……」

「カガリ、こんな時だから言うけど」

「なんだ？」

「ありがとう。僕の人生を豊かにしてくれて。君と一緒に楽しかったよ」

ユウナはカガリに向かって微笑んだ。

地球滅亡

地上のある者は絶望に陥り、ある者は覚悟を決めた

最終話

地球の人々が覚悟を決めたその時

その時 地球に住む全ての人々の頭に、『声』が響いた

『みんな！ 少しずつでいい、地球を救うためにワシに力を貸してくれ！ 祈ってくれ！』

「神様！ まさか!？」

テレビ等の宗教説教番組で、その声に常日頃から馴染んでいたエドワード・ハレルソンは、驚きと共にすぐさま胸元から十字架を取り出し、ひざまづくこと祈りだした。

ハレルソンの周囲の人々も次々にそうしている。

日本の麻生総太郎首相もひざまづいてロザリオを取り出す。

『声』に応じて祈りを捧げる人々は、南米に、イタリアに、フランスに、アイルランドに 　そして全世界へと広がっていった。

全ての人々が、その『声』に一筋の希望を見出し、祈った。

そして 　イタリア、ローマ 　バチカンに、一点の染みの様に黒い点が出現した。

それは、見る見る内に広がり、地球を包み込み、黒い球になると、地球に落下してくるプラントを粉碎・消滅させながら、宇宙へと拡散した

「やったか……」

老魔法王ベネディクトは力を使い果たしてばったりと倒れこんだ。

その眼前に、ふいに影が射した。

「貴様か……マルキオ！ いやさ、這い寄る混沌　　ナイアルラトホテップ！」

マルキオと呼ばれたその男は、静かな雰囲気なたたえ、その閉じられた両眼でベネディクトを見下ろしていた。

「……人の身でここまでやるとはな」

感慨深そうにマルキオは言った。

「……なぜ、邪魔をせんかった？ この混乱はお主がもたらした物だろうに」

「いや、私にも予想外だったよ。人類が滅びそうになると言うのはね」

マルキオは、いや、ナイアルラトホテップは言った。

「こうなったら、自らの力を持って人類滅亡を防がねばならんかと思っただ位だ」

「……お主がそんなに人類に対して優しいとは思わなかったな」

「何、人間は面白いからね」

ナイアルラトホテップは嗤った。

「滅びてしまつては、私がつまらないだけさ。……だいぶ苦しそうだな」

「ダーク・ギャラクシー・エンド　　生命と引き換えに全てを破壊

するエネルギーを放つ技だ。さすがにこのワシも、そろそろおさらばじゃ……さらばだ、ナイアル……」

ベネディクトの声が小さくなってゆく。

「そうか。じゃあ、おさらばだ、友よ。まったく君は大したものだ。まさか人間風情にこれほどの芸当ができるとは思わなんだ。君こそ

は真の天才の名を冠するにふさわしい存在だ。だが……残念だ、もはや二度と会うことはできんとは。いかに君が希代の人物とはい

え所詮は人間。これで死ぬか。……もう一度君と矛を交えてみたかった物だが……何にせよ、それは叶わぬ望み……君に敬意を表し、

君が守ろうとした人類がもう少し復興するまでしばらくは大人しく

してやるよ……面白かったよ……本当に……」
その声はまるで泣いているように聞こえた。

その時、その空間が霧がかかったようにぼんやりとし始めた。

そこに、いきなり三人の人影が登場した。

「タイムパトロール、両澤千晶よ！」

「同じく、福田己津央だ！ 時間犯罪を目論んだ罪によりおとなしく両手を上げて……」

「動くな、フリーズ……あ……」

タイムパトロール、竹田菁滋は見てしまった。マルキオの閉ざされた眼が開くのを。

いきなり銃を構えて登場した彼らは、彼らは見た。マルキオの閉ざされた目が開いてしまうのを。

マルキオの炯炯と紅く光った目に言葉を失い、彼らは身体のコントロールを失った。

「友との別れの最中だと言うのに無粋な……。己の次元世界の歴史のみを正しいと信じ込み、他の次元の歴史を一方的に改ざんする愚か者どもよ。その驕りにふさわしい結末を用意してやろう。次元世界の狭間には、お前らが想像もしないような化け物がある事を思い知らせてやる！」

「おう！ 身体が！」

「助けてくれ！」

「いやー！」

マルキオの言葉とともに、タイムパトロールと名乗った三人の身体が、変形していく。

「心配するな。君らの同僚も同じようにしてやる」
マルキオの声が冷酷に囁く。

そして、ふいに、もはや言葉すら発せられない名状しがたき形態に変わった三人が部屋から消える。

しかし、今後彼らの心配はする事はないだろう。これから三人は、三人をサポートしていたタイムパトロールの同僚共々、人間とは似ても似つかぬ姿に変わり、おぞましきものへの供物として奉げられるのだから。

「うわぁー！ なんだ!？」

次元の向こうで上げられる悲鳴をマルキオは聞き取った。

マンス・エヴァラードが、ヴィンス・エヴェレットが、ジユリ・ムギンガが……。己の歴史のみを正しいと信じ込み無数に分岐した平行世界の存在などしらず、多々の次元世界の歴史をねじ曲げその流れを途絶えさせ、思うがままにしてきた傲慢なるタイムパトロール員達が次々におぞましい姿に変えられていく。

「さあ、邪魔者は消えた。友よ……。逝ってしまったか」

マルキオはベネディクトを抱え、仰向けに寝かしつけ、クロスを持たせた両手を胸の前で組ませてやる。

「さらばだ」

其の声が途絶えた時、出現した時と同様に、一瞬にして人影は消えた。

「猯下！ 猯下！」

ドアを叩く音がする。

「あ、開いたぞ！」

入って来た者達は、寝かされているベネディクトを発見した。

「猯下！」

彼らは慌てて駆け寄る。

……ベネディクトの脈は永遠に止まっていた。だが、その顔には静

かなる微笑を湛えていた。

「猊下は、地球を救ってお亡くなりになったのだ。皆、その事を忘れるでないぞ」

そう告げたベルットーネ枢機卿の頬に、涙が止め処なく流れた。

『こちらは、ザフトのフェイス、アスラン・ザラである。一時的に全軍の指揮を取る事を宣言する。戦闘は終結した。無事な艦、救命艇はL5宙域、アプリリウス1跡に集結せよ。余裕のある艦は救命行動に当たれ。繰り返し。こちらはアスラン・ザラである……』

生き残ったザフトの者達は皆、パトリック・ザラの息子、アスラン・ザラの名を覚えていた。この事態に、どうしたらいいのかわからないままだった彼らは指示してくれる者を得、行動を開始した。

同時に、アスランの呼びかけに答え、地球軍第3、5、6、8艦隊が軍事ステーションより進出。生き残ったザフト軍と協力して救命行動にあたる事になる。

この戦争が終わった事を感じさせる光景であった。

「じゃあ、後は任せた」

服部はコバヤカワヒデアキの忍者SPクルーに言った。

服部が鍛えた、少ない人員で艦を操れる忍者SPは人員の少ないラクス軍の貴重な要員として強奪した各艦に配属されていたのである。

「ええ!？」

副長は驚いた。

「どうするんですか？」

「面倒な事ならん内におさらばさせてもらつよ」

そう、服部には戻らねばならない場所があった。

地球上で異変に気づいたのは車を運転していた一人の少年だった。

『……政府の指示に従って……危機は去りました！ 落ち着いて政府の指示に従ってください！』

「まさか！ 周波数417がこんなに遠くで聞こえるなんて！」
少年は驚いた。

周波数417は少年がよく聞いているコミュニティラジオ局のチャンネルだった。エイプリルフル・クライシスからこっち、かなり基地局の近くへ行かないと聞こえなかったのに……

「もしかしたら！」

少年は興奮してダイヤルを回し始めた。

「聞こえる！ こども！ こども！」

全世界で、同じような喜びの音が沸き上がった。

そう、ダーク・ギャラクシー・エンドが地球を包み込んだ時、すべてのニュートロン・ジャマーを破壊していったのである……

プラント地球落下未遂事件から一カ月後。

ジブリールは再び、ロゴスの面々と会合をしていた。

今回の議題は、プラントの生き残りをどう処分するかだ。

「100万か」

「ええ、プラントの生き残り、約100万人」

そう。プラントの生き残りは100万人まで数を減らしていた。残りは砕け散るプラントと共に宇宙にその命を散らしていた。若い者が多いのが幸いと言った所だろうか。

「……ずいぶん減ってくれたが、今更皆殺しと言う訳にもいかんかな」

「しかし、まさかアイリーン・カナバとはな。しかし、アイリ

ーン・カナーバとラクス・クラインの最後を世界に発信したのは誰だったのだ？」

「さあな」

それは、情報屋ルキーニの仕掛けだった。特定方向へのみデータを発信するはずが、故意か否か、アイリーンとラクスの会話を全方位で発信したのである。

ちなみに、映像の最後はレクイエムの光に包まれて終わっていた。

「ともかく戦争犯罪者は収監するとしてあとはどうする」

「どこかに隔離してしまえ！」

「ユダヤ人のようにマダガスカルとかか」

「馬鹿な！ あんな大きな島を奴らにくれてやるなど！」

「再教育して社会に戻す、と言うのは？ ほら、ブーステッドマンに使っていた揺り籠。あれで記憶操作して……」

「国民が許さんよ。そんな金と手間があるならブレイク・ザ・ワールドの被害救済に使えとな」

「IMF管理になっていく半島国家がありましたな。借金を棒引きにしてやるという事で、押し付けてしまうのは？ 100万位人口が増えても大丈夫でしょう」

「そう言う訳にも行くまい。人口2000万で人類を滅ぼすような事を3度も出来たのだ。奴らと一緒にまとめておくなどとてもない！ どんな化学反応が起こるか！？ どんな大火事が起こっても知らんぞ？」

「我が国としてはごめんこうむりたい。絶対。とにかくやめて！」

頼むから！ 大陸と半島だけで充分なんだよ！」

日本の財界代表が喚いた。地球連合の運営資金16%を拠出している日本の声は無視できるものではなかった。

「では、こうしたら如何です？」

ジブリーは口を挟んだ。

「家族単位で、世界各国へ散らばせるのです。公式にはコーディネーターと言う事は秘匿させます。そうして常に動静を監視させます。」

なに、1世代も経てば純粹コーディネーターの数なんて激減しますよ。そうしてコーディネーターをナチュラルへと帰還させるのです」

プラントの生き残りは地球連合の提案を受け入れた。

受け入れざるを得なかった。

地球連合はこの度のプラントコロニー群の地球への落下未遂事件に対し、情報を一切隠し立てしなかった。

自分達の評議会議長 アイリーン・カーバが為した暴挙を知るに、プラントの生き残りの者達は反抗する気力も失っていた。

もう一つ。自然とプラント生き残りのリーダーの役割を果たすようになっていたアスラン・ザラが地球連合の提案を受け入れる姿勢を示したのも大きいだろう。

一カ月後

二人の客を乗せた船が棧橋に着いた。

「本当にいいのか？ 君はオーブ国民として生きる事も出来たはずだ。一生監視されて生きるなど……」

アスランはルナマリアに尋ねた。

「いいのよ。私はあなたと一緒にいいの！ 私、どの道一人ぼっちだから」

ルナマリアは両手を広げるとくるりと回って微笑んだ。

「それに、いい所じゃない？ このプリンスエドワード島って！」

「これで……終わったのかな？」

カガリは信じられないように呟いた。

「そうだねえ。プラントもきれいさっぱり無くなっちゃったし」

ユウナが、のんびりした口調で答えた。

「だけど、はじまりは今、だよ。オーブがはじまるのは。忙しくなるぞお！ 大西洋連邦もユーラシアも、まずはこの戦争で受けた被害を立て直さなきゃいけない。人類の宇宙開発はオーブの双肩にかかっている」

「ヘリオポリス、再建しないとな」

「ああ、一基だけじゃない。いっぱい作ろう。ヘリオポリスと言う大仰な名前も変えよう。そう、ビレジがいいな、うん。一歩一歩着実に進む感がある。もう、呼び方も決めてあるんだ。住所は、ルフトアイステイ アレクタウ ヘリオビレジ。それにマクティービレジも作るぞ。そしてベルビレジ、ベツレビレジ……」

空を見上げてしゃべるユウナの顔を見て、カガリは微笑んだ。

「ああ！ それから！ やっとかなきゃいけない大切な事があった！」

「ん？ なんだ？ ユウナ？」

ユウナはカガリに正対するとひざまづいた。

「そう言えば、ちゃんと申し込んだ事がなかったね。……結婚してくれ、カガリ。人生を共に歩んで欲しい」

カガリの頬が赤く染まった。

「……と、言う訳だ」

あの戦いで辛くも生き残ったマリューとバルトフェルドはカガリの前に出頭した。

マリューはドラッグの禁断症状でだいぶ苦しんだらしいが。いや、今でも苦しんでいる。治療は一生続くかもしれない。

カガリとて、時々フラッシュバックが襲い、完全に回復したわけではないのだ。

カガリの机の前で全てを話し終えたバルトフェルドは清々した顔を

した。

「カガリさん、例え、洗脳されていたとしても、知らなかったとしても私にも罪はあるわ。謝って済む問題じゃないのはわかっているけど。本当にごめんなさい」

マリューは深々と頭を下げた。バルトフェルドも頭を下げる。

「銃殺されても文句は言わんよ」

「……」

「……」

「………長期休暇でリフレッシュできたか？ マリア・ベルネス」

「え？」

長い沈黙の後、カガリが発したのはマリューの思いもよらない言葉だった。

「さつさと工廠へ戻れ。工廠長が怒っているぞ。ああ、無断の長期休暇の分の給料は出ないからそのつもりで」

「ああ！ カガリさん！」

「ところで、アンドレイ・バルアミー」

カガリはバルトフェルドの方へ顔を向けた。

「へ？ 俺の事？」

「他に誰がいる。オーブでは今度宣伝省を作る事になってな。ポストに空きがある。広告はお前の専門だろう？ そこで働け。人間暇を持って余すと碌な事を考えないからな」

「痛い所を突くなあ。だが、いいのか？ それで？」

カガリは無言で頷いた。

マリューとバルトフェルドは頭を下げると、部屋を出て行った。

後年、バルトフェルドはリディアと言う子役をめぐってラドモーズと言う男とちよっとした騒動を引き起こすのだが、それはまた別の話である。

「……」

二人が出て行った執務室に、ユウナが入ってきた。

「あれでよかったのか？ ユウナ？」

「いいさ。オーブにとって人材は宝だ。使える物は使わなきゃあもつたいない。きつと生きていたら父もそうしてたよ」

「そうか……お前がいいなら、いいんだ」

カガリはほつと溜息をついた。

飛行機かなにかの飛ぶ音がする。

二人は、誘い合わせたかのように、窓から高い空を見上げた。

オーブ近衛軍の機体だった。

「さあ、今日の訓練も終わりだ」

「はい！」

ガルドの言葉にサーズが答える。

「明日も頼むぞ、相棒」

ガルドは頼もしそうに飛行ユニットをつけたシャペリンを見上げつぶやいた。

オーブ近衛軍は、本土防衛軍とは別に、完全にカガリ一人に忠誠を誓う部隊だ。救国軍事会議のクーデターがそうさせた。粛清のリストはいまだ粛々と消化され続けている。

相対的にガルド達の地位が上がっている。サーズの望み、家の再興も、そう遠くはなさそうだった。

近衛軍は、度重なる実験の後、シャペリンを主力機種に選定した。但し、デチューン物である。偽装ではなくデチューン物を設計しなおしたのには、情報の秘匿と言う訳がある。

もつともデチューンされたと言っても最新鋭のビームシールドを装備し、大気圏はストライカーのように飛行ユニットをつけなければ飛行できない……とは言ってもその性能はすばらしい物だったが。

最も近衛軍で主力として考えられているのはライセンス生産されたユークリッドだろうか？

そして、一般オーブ軍の主力機はあくまでムラサメである。オーブ本土奪還戦に使われた各種新型モビルスーツ達はアメノミハシラに封印されている。

何故か。それは三ノフスキー物理学による三ノフスキー・イーヨ・ネス湖型熱核反応炉を初めとする各技術。それによるオーブの地位の向上を狙ったのである。

但し、今、世に出すのは得策ではないとカガリ達は判断した。

オーブが、宇宙に再び拠点を築き、他国と肩を並べられるだけの国力を得、三ノフスキー物理学を完全に使いこなせるようになれば、その時初めて、宇宙での覇権を確立するために世に出す予定だった。

「あーあ。アスランとルナはカナダに行っちゃうかあ」

マユはぼやいた。

「いいのお？ アスラン、狙ってたんでしょ？ 僕も義兄さんって呼びたかったのに」

「いいのよ。あんなキスシーン見せ付けられちゃあねえ」

ルナマリアがブリッジに入った後、マユも送られてブリッジに入り、濃厚なアスランとルナマリアのキスシーンを見せ付けられたのだった。

「ま、私ならいい男もいくらでも捜せるってもんよ！」

「おい、マユ・アスカ」

「あ、ハイネさん」

「俺の、連絡先だ。よかつたら連絡してくれ！ じゃあな！」
そう言っつてメモを渡すとハイネは去って行った。

「……お姉ちゃん、顔赤いよ？ 惚れっぽいんだからもう！」

「俺も早く成長したいものです」

レイはクルーゼに言った。

「死なない事ができるとなると、気が焦る。前は、死など怖くなかったのに」

クルーゼは、地球連合に対し、自分が先の戦役で地球連合のスパイであったと主張したのである。その発言は確認され、先の戦役でクルーゼがニュートロンジャマーキャンセラーの情報を地球連合に流した事が非公式に評価され、自由の身となったのである。レイも、クルーゼが保護者となる事で自由の身となった。

だが、クルーゼはポーの町に帰る事を避けていた。十字架や聖書は慣れる事である程度苦手を克服できるが、十字架そのものよりも、それに込められた信仰が彼らにとつての脅威となるからである。プラント落下時の奇跡によって、フランスはカトリックの力が強くなっていた。

「そう焦るな」

「しかし、便利ですね。『バンパネラ』と言うのは」

「まあ、一所に長く留まれないのがやっかいだが。また仮面でも付けるか？ はは。嫌になって死のうと思えば死ねるしな」

「俺が大きくなった時には、ポーの町のバラはさぞ増えている事でしょうね」

「ああ。だが……カトリックの力が強くなって行きにくくなったな。

……そうだ！ 東アジアにでも行くか？ その奥地で桃源郷のようなバラの園を作るんだ。そしてバラだけで生きるんだ。ロマンチックだろう？」

夢見るようにクルーゼは言った。

「いやよ、嫌！ あなたが死ぬなんて！」

タリアは泣きわめいた。

「しょうがないさ、誰かが責任を取らねばこの世界は収まらん」
強化プラスチックの向こうで、デュランダルは静かに微笑んだ。
戦後、デュランダルは軍事裁判を受ける事になった。

ユニウス条約後のプラントが真つ先に作った新規コロニーが農業用でも工業用でも資源採掘用でも新規移民用の居住用でもなく、軍事兵器生産コロニーだったという点、運用環境が地球環境である新型量産機・局地戦対応型（ガイア、アビス、セイバー）の開発、幾らでも保有数のごまかしが聞く機体インパルスの開発、対核攻撃迎撃用兵器の開発、ジェネシスの改良、月軌道への要塞建造、大気圏突破可能なモビルスーツ運用艦、ユニウス7落下にまぎれた都合の良すぎる潜水艦基地（ラガシユ基地）降下、e t c……

デュランダルは、ユニウス7落下及び今回の戦役の発端に責任ありとして死刑を宣告されたのだった。

「せつかく、せつかく傷が治ったのに、なんで死ななきゃならないのよ……地球連合は殺すためにあなたを治したって言うの!？」

「……ジェイクの事をよろしく頼む。おかしなものだな。すっかり自分の息子のようだ。強い子に育ててくれ」

「さあ、時間だ」

係員はタリアの退出を促した。

タリアはあふれる涙を抑えながら部屋を出て行った。

「目隠しはいるかね？」

「いらん」

「そつか」

壁の前に立たされたデュランダルは、前方の銃を構えた地球軍兵達をまっすぐ見つめた。

銃声が立て続けに響き、彼はその場に崩れ落ちた。

ふいに地球軍兵達がざわめく。

不思議な事に、デュランダルのその骸は霧となって、跡形もなく消

えていたのである……

「ああ、そう言えばラミアス艦長つと、この呼び方も変えなきゃいけないか」

「そうね。ふふ」

オーブに帰ったマリユールとバルトフェルトは、カガリとの会見の後、また一緒に暮らしていた。

マルキオは行方不明だったが、また、その邸宅を与えられている。子供達も帰ってきていた。

カリダ・ヤマトも釈放され、ハルマ・ヤマトも回復傾向にあり病院を退院していた。

「マリヤ、どうだろう?」

「……ああ、私の事ね。何が?」

「新しく人生をやり直すんだ。お互い過去にこだわらなくても、そろそろいいんじゃないかってね」

「……?」

「ええと、つまりだな、その……」

バルトフェルトは言いよどんだ。

「僕は君をだましていた立場だし、生活人として欠けたところもあるし、その他にも欠点だらけだし、いろいろと顧みてこんなことを申し込む資格があるか疑問だし……」

色々言い訳じみた事を言った後、バルトフェルトは勇気を振り絞って言った。

「要するに……要するに、結婚してほしいんだ」

バルトフェルトの顔は赤らんでいた。

ふふ、とマリユールは笑った。

全てを赦したい気になっていた。全てを受け入れたい気になっていた。薬のフラッシュバックだったのかも知れない。

だが、マリユールはそれらを含めて赦した。受け入れた。

「ええ、いいわよ」

二人の影が、重なっていった。

「お前さん、まだ落ち込んでるのか」

ジエスがミリアリアに聞いた。

「んー。なんか、アークエンジェルの雰囲気変わったのは感じてたし。元々ラクスさんは昔からの知り合いじゃなかったし、ノイマンさん以外はアークエンジェル乗員も助かったし、なんて言うのかな？キラが死んだ事にこれほどショックを受けてる自分にショックを受けてるのよ。キラの事、それほど、どうでもよかったし」

「ん……複雑だな」

「私……意外とそんなにキラの事好きだったのになつて。ツールに比べれば、ディアツカも小さく思えた。どうでもいいやと思った。なのに何でよ、キラごときに」

「さあな。恋愛以外でも好きってあるだろう？ さあ、次の取材場所行くぞ。仕事に集中で忘れるや。俺やカイトなんかなあ、何度失恋したか……」

ジエスは失恋した昔話を面白おかしく話しながら、バックホームにミリアリアを乗せて、アウトフレームを立ち上げらせる。

「ジエス……」

「ん？」

「ありがとね……」

「いいって事よ。……付け込む様で悪いが、俺、最初に会った時から、気になつてた。お前の事好きみたいだ」

「ふふ。ありがと。私もあなたの事、最上級 I l i k e y

o u y o

「なんだそりゃ。liveじゃないって事は振られたって事か？

はつきり言ってくれ」

「ふふ。恋人でもなくて、友達だけでもないわ。ただ守っていたいの。失くしたくない」

「恋か？」

「違うわ。あなたが悲しい時、どこにいても、私、祈るわ。あなたが嬉しい時、どこにいても私、必ず喜べる……。恋ってはじまった瞬間から終わりに向かうでしょ？」

「ああ」

「だから、いつか二人が愛を語れるようになるまで。『最上級 I

like you』よ」

これじゃまるで恋じゃなくて愛の告白じゃないか……

ジェスの頬は紅潮していた。」

日本 三重県・伊賀忍者村

「あー！」

受付の女性職員が大声を上げた。

「村長！ どこへ行ってたんですか！」

「え、村長？」

その声を聞いて他の職員も集まってきた。

「ほんとに？」

「ほんとに村長だ！」

「ははは。みんな元気だったか！？」

服部正吾は大きく手を上げた。

「客の入りはどうだ？ ちゃんと忍術の修行はしてるか？」

「たまに金持ちの道楽者が来るぐらいで……赤字です」

「まあ、このご時世だからな。だが！ きつと今に娯楽が必要とされる時代が来る！」

「そうですね！」

「忍者が受ける時代が必ず来ます！」
「実はな、ちよつと出稼ぎしてきたんだ。当分金には困らないぞう！」
「そう言つて服部は片眼をつぶつた。」
「ほら、忍者村の口座の残高証明書だ！」
「わあ、こんなに！」
「これで忍者村はあと十年は戦える！」
「はっはっは。伊賀忍法に不可能はない！」
服部は胸を張つた。

「スウエン、これからどうすんだ？」
シヤムスが聞いた。
「ん。DSSDに行こうと思つてる」
「げ。難しいんじゃないか？ あそこ？ 確かナチュラルだと7年勉強しなきゃなれないとか……」
「贅沢をしなければその位食えるさ。夢のためだ」
結局スウエンはネオ・ロアノークのコネですぐにDSSDの警備員に採用され、そこで勉強をしながら正規職員を目指す事になる。そこでセレーネ・マクグリフと言う女性と運命的な出会いをするのだがそれはまた別のお話である。

「なあ、ミューディー。お前は、これからどうすんだ？」
「うーん、軍縮で解雇って言われてもねえ。コーディネーターにも勝つちやつたし気が抜けちゃつた」
「じゃ、やる事無いんだな？」
「うん」
シヤムスはニヤリと笑つた。

「じゃあ、俺を手伝えよ」

「ん？ 何かやんの？」

「プールバーを開こうと思ってさ。ちょうど人手が足りなかったんだ」

シャムスが開いたこのプールバーは、シャムスが趣味に走り過ぎそうになるとミューディーがストップをかけるという具合で、それなりに繁盛しているようである。

「なんじゃ、デイカーか」

大官寺はつまらなそうに言った。

「あちゃー！ せっかくの休暇に大官寺艦長に遭うとは！」

デイカーは額に手を当てる。この人と出会って、とんでもない事になる方が多かったのだ。

「あちゃーとはなんじゃい！ 上官に向かって！ お、おぬし、面白いもんもつとるのう？」

大官寺はさつと手を伸ばしてデイカーの持っていた小さなナイフの鞘を抜く。

「あ、ちよー！」

「な、なんじゃー！」

大官寺が鞘から小さなナイフ『暁の剣』を抜くと、それが光りだした！

そして その光が消えた時、大官寺とジョン・デイカーの姿はこの世から消えていた。

「……ここは、どこだ？」

「いや、私にもさっぱり……」

ジョンが目覚めた時目にしたのは、まったく見知らぬ光景である。いつのまにか手には黒い剣を握っている。父からもらった小さなナイフ『暁の剣』はどこに行ったのだろうか？ 見当たらない。

「まあいいわい。ほれ、行くぞー！」

「お、驚かないんですか〜!?」

「馬鹿もん！ いちいち驚いてなんぞおれるかい！」

この後、ジョン・デイカーはエレコーゼと言う名前をはじめ様々な名前を持ち、数々の異世界を冒険するのだが……なにしろ大官寺も一緒なのである。

英雄的な冒険譚になるはずが、デイカーはどここの世界に行っても大官寺のわがままにため息をつきながら付き合う羽目になるのだが、それはまた別のお話である。

ナイトハルト・ミラーは戦後、その腕を買われてモビルスーツの教官になる。

ミラーの戦方は防御を最優先にしてまず自分が生き残る事、そして相手が隙を見せたら一気にそこを突く事である。

海賊対策にも出撃した。ある時は相手の数に圧倒され、次々に乗機を壊される事になるが、ミラーは乗機を取替え戦闘指揮を取り続け、とうとう戦闘を勝利に導いた。

この事から彼は『鉄壁ミラー』と言う異名を尊敬を込めて呼ばれるようになる。

原田左之助は戦後も軍に残り、最終的には一艦を率いる中佐にまで出世した。但し、自分で出撃をする癖が治らず、ネオ・ロアノークの弟子と言われた。

29歳で退役。その後の消息は不明。

ただ、後年、動乱の東アジアを訪れたジェス・リブルとミリアリア・ハウが原田左之助と名乗る馬賊の頭目と出会っているが本人であるかは定かではない。

「あなた達は火星に帰っちゃうのねえ。なんか寂しいなあ」

まほりんはナーエにぼやいた。

「私もですよ、まほりん。でも、約束しましょう。アグニスは責任ある立場ですのでどうかわかりませんが、私はまた必ず地球に来ますよ？ あなたに会いにね？」

「本当？」

「本当ですよ。ところでまほりんはこの後どうするのですか？」

「ん。退役して、医科大学に行くわ」

井沢真秀はその言葉どおり、退役後、医科大学に進学、卒業後は日本の総合病院に脳外科医として勤務する。

そして、2年後中学生の時から付き合っていた12歳年上の恋人、貴志優介と結婚する事となる。

その婚礼の席には火星からの使節団として地球を再び訪れたナーエの姿もあつた。

シヨーン・ホワイトは戦後、世界各地を放浪し、日本に落ち着いた。そこで偶然出演した『ウノレトラマンマックス』と言う作品で日本DASH唯一の外国人隊員として、英語と日本語が入り混じった妙な言葉を喋り、主にメカニック・装備開発を担当して、糸のこぎりとハンマーで戦闘機を修理する脅威の腕を持つと言う役をこなし、それなりに俳優として人気が出たようである。

ゲイル・リバーズはニュージールランドに渡り、傭兵、作業員、経営者、作家と様々な仕事を経験した。最近では傭兵を引退し、航空輸送会社の経営、および特殊用途用の武器販売を手がける。著書は日本語訳もなり、それなりに人気が出たようである。

ネオ・ロアノークは戦後、ジブリールによってムウ・ラ・フラガとしての記憶を戻された。

ネオは戻った記憶を落ち着いた態度で受け入れた。

そして真っ先に知りたがったのはかつての恋人、マリユール・ラミアスの事であった。

ジブリールからマリユールがバルトフェルドと結婚した事を知らされると、20本のウイスキーを抱え込んで部屋に閉じこもった。皆が心配したが、3日後部屋から出てきた時は、いつもと変わらぬ態度であった。

「ねえ、私の作ったサンドイッチおいしいですか？」

「ん、うまいよ」

「良かった！ 私挟む物は得意なんです」

「ふむ」

そう言いながらネオは書類をめくった。

「ほら、食べながら書類見てたら汚れますよ。食べる時ぐらいゆっくりなさら？」

「むう」

ネオは椅子を横に回すと、書類を汚さないように、食べる。

その様子をアンネローゼはここにこに見つめている。

記憶が戻ってからのネオはまるで仕事場が憩いの場であるかのように仕事に精勤している。

それに付き合っ副官のアンネローゼもネオの元に日参する事になる。

だが、二人がくつつくのはまだ先になりそうだった。

戦争が終わってから一年後、ジブリールとセトナは結ばれた。この時初めて、セトナが火星人^{マイジャン}であると知った者も多かった。

「お兄様……いえ、もうお兄様じゃありませんわね？ ええと、あ、あなた」

セトナは頬を赤らめた。

「いいよ。好きなように呼んでくれ」

ジブリールは微笑んだ。

「はい。でもアグニスに結婚式に出てもらえなかったのが残念ですわ。仕方の無い事ですけど」

そう言えば、宇宙の各地にビームの拠点を作ってそのビームを宇宙船の帆で受けて進む計画があったな、とジブリールは思い出した。

あれなら相当火星と地球との往復時間を短縮できるはずだ。確か3ヶ月で往復できるんじゃないかなかったか？

資金がかかりすぎると言う事で否決したはずだが……
やってやろう。セトナのために。ジブリールは心に決めた。

……プラント落下事件からちょうど3年が経つ。

人々は、奇跡が起こった事に感謝し、教会で祈りを捧げる。カトリックでない人も、家々で祈りを捧げる。

バチカンでは、前戦役の犠牲者を追悼する儀式と共に、死後一向に腐敗の兆候を見せない前老魔法王ベネディクトを正式に聖人に加える儀式の準備で奇妙な活気に包まれていた。

「見えますか、アナキン。あの星々が」

儀式を抜け出してきたアンデルセンはアナキンに語りかけた。

アナキンは無言で頷いた。

「ベネディクト殿下の行きたがっていた所です。いつか、我らはあ

の星々に満ち、正しき教えを広げ、そして……」
ふいに込み上げてきた感情が、言葉を止めた。だが、アンデルセンの思いはアナキンにも伝わってきた。
アナキンは、満天の星空を振り仰いだ。

「あなた、手紙よ」

ルナマリアが一通の手紙を持ってきた。

宛名は、アスラン・ホーク。

アスランは、知られすぎているザラ家の名前を名乗る事を遠慮し、ホーク姓を名乗っている。

「ん……。へえ！ 懐かしいなあ。ジブラルタルで会ったケビン・ラッドさんからだ」

ケビンは地球への移住の際、アスラン達と同じ、カナダに割り振りされていた。

プラント崩壊から5年、元プラントコーディネーターへの締め付けも緩み、ケビンは移住した土地の市会議員になっていた。

アスランは手紙を開く。

手紙には、近況とアスランに、引きこもっていないで政治の世界に進むように勧める文章が連ねてあった。

「引き籠もっているつもりは無いんだけどな」

アスランは苦笑した。アスランは地元の青年団の団長を引き受けていた。プリンス・エドワード州の議員にならないかと言う誘いもある。

夜になり、アスランは返信の筆を取る。

□

あなたは一年で、つるはしと三本の鍬だけで七畝ほどの荒地を開墾

する事ができますか？

それは僕達宇宙育ちからみればとんでもない能力なんです。

でもそれは”進化”したわけではなく人間がもともと持っている力

”環境”にあわせて身につく人間自身の力

僕達は人間のコーディネイトと言う力を手に入れ、それに酔っていた様に思います。

今は、僕は人間の自然の力を感じて生活したいのです

□

手紙を書き終えると、アスランは娘のマーヤを抱え、家の外へ出る。空には、満天の星々

「パパ」

「え？ マーヤ？」

「パパ！」

もう一度、マーヤが言葉を発した。

「おおいー！」

アスランは家の中へ声をかけた。

「マーヤが言葉をしゃべったよ！」

「まあ、ほんと？」

ルナマリアが慌てて外に出てきた。

「ママー！」

マリーヤがむずかるようにルナマリアに手を伸ばす。

「まあまあ！」

プラントが、そして多くの友人、知り合いが失われた悲しむべき日は、彼らにとつて喜ばしい色彩を加える事になりそうだった。

ふいに、何かの思いに突き動かされたかのように、マリーヤは上に手を上げ、星空を掴もうとした。

それは、人類誰もが持つ宇宙への憧憬かも知れなかった。

二十年後　そして、星へ行く船

『じゃあ、パパ、ママ行つてきます！』

マリーヤはモニターの向こうで明るく言った。

ジョージ・グレンの木星往還船『ツィオルコフスキー』以来、人類の宇宙開発は地球、及び火星近辺に留まり、戦乱の残した傷を癒す事に力を注いでいた。

だが、ついに、第二次木星往還船『フォン・ブラウン』が発進する時が来たのだ。

マリーヤはその乗組員に志願し、見事に合格した。

「身体に気をつけるのよ」

ルナマリアは心配そうに言う。

いくら木星往還船開発計画責任者ウエルナー・ロックスミス博士の作り上げた『フォン・ブラウン』が新型エンジンにより、『ツィオルコフスキー』程の時間は掛からないとはいえ、地球と木星間の往復の期間は年単位だ。

だが、マリーヤはそれを気にもしないようだった。

「元気でやれよ」

とだけアスランは言った。

『じゃあ、時間だから。またね！ 時々連絡するから！』
慌ただしく、マーヤとの通信が切れた。

「ほら、あなた、早く！ テレビを」
ルナマリアが急かす。

『……とうとう『ツイオルコフスキー』から84年ぶりの木星往還船が発進しようとしています！』

応接間の大型モニターからアナウンサーが興奮した様子で実況している声が聞こえ始める。

『ここで乗組員の皆さんに地球を離れる前の最後のインタビューをしたいと思います！ まず、船長のアナキン・スカイウィーカーさん！……』

ふとアスランは思った。

自分の世代は、地球の周りで無駄に戦争に明け暮れてしまった世代だったと。

ネビュラ勲章か……

タンスに放り込んである勲章を思い出した。

戦争で伝説の英雄と持てはやされた所で、そんな物は時間が経てば忘れ去られるに決まっている。もう今ではアスラン・ザラの名前を聞いてもわからない人の方が多いだろう。……うん、それよりは、やはり宇宙飛行士だな。現実には木星を間近に見る方が素晴らしいに決まっている。

きつとすばらしい光景だろう。

自分にはできない。だが、マーヤが代りに見てくれるだろう。

マーヤの世代の前には星の世界へと進む道が拓けているのだ。

そう、星へ行く道が……

伝説が終わり、歴史が始まる

∨FHZ∧

あとがき

えっと、あとがきです。

この作品は私の五作目の作品に当たりまして2008年の春から書いたお話です。

前作の話数を越えたんだなあ、今更ながら感慨深いものがあります。

このお話は『そして、星を継ぐもの』と言うガンダムSEEDの世界にルナマリアが巻き込まれると言うお話の後に書きました。

『そして、星を継ぐもの』と言うガンダムSEEDのお話は一応満足いく物を書き上げられたので今度はガンダム機動戦士ガンダムSEED DESTINYのお話を書きたくなったのです。

さて、これは、ルナマリア主人公の作品と言われた事もありましたが、自分では群像劇を書きたいと言う思いで書いていました。でも、ルナマリアになると描写に力がこもっちゃいますね。自分がルナマリア好きだとあらためて自覚させられた作品でした。

このお話の構成は、二転三転しました。当初は題名『超種運命の大戦(仮)』と言う名前の通り、ミスターグレイがオーブに肩入れをしていくというお話を考えていました。ですが、ミスターグレイが本格介入すると話がすぐ終わってしまいそうで……結局資金と資源と若干の技術供与に押さえておきました。(しかし技術供与はお話に生かせず><)それに一般的に軽く 親地球連合派の作品でも

扱われるジブリーも書きたいと言う気持ちが沸いて来ましてそのせいで書きたい事が焦点がぼやけてしまったと言う後悔があります。

あと、スウエン達も、もつと書きたかったんですね。やはり、いまいち描写不足に終わったと言う後悔があります。

二回目に題名を付けたのは『金色こんじきの艦隊（仮）』で、『ヤタノカガミ』を付けたオーブ艦隊が大活躍する予定でした。でも、結局活躍が終盤になってしまいましたのが残念です

三回目に題名を付けた『不沈戦艦強奪作戦発動（仮）』、『正規空母強奪作戦発動（仮）』これは、題名の作品を見て大笑いをしました。あれほど笑ったのはそうありません。完全に受け狙いの命名です。この回は真面目に読まないください。笑ってください（笑）

正式な題名を考え付いたのは、ラストの構想ができてからです。星空を見上げる、と言う光景を思いついた時に、正式な題名の案も浮かびました。

ザフトが負けるのは当初からの予定でした。末期戦万歳です。でもその中で、ルナマリアとアスランが一緒になると言うのも決めていた事でした。どうも自分、このカップルが好きみたいです。後、くっつけようと思っていたのはマリューとバルトフェルド。これは、前作で考えていたんですが果せず。この作品で実現しました。一時構想の中でバルトフェルドが死にそうになって際どい所でした。セトナとジブリールがくっつくのは当然ですね。これは、アズラエルに比べていまいちな描写のジブリールをセトナで補強したかった意味合いもありました。

後、テレビ本編ではなされなかった、結婚による、愛によるナチュラルとコーディネーターの融和。これを実現できて嬉しく思います。なんでテレビ本編がミリアリアとディアッカと言うネタを捨ててしまったのかわかりません。

ミリアリアと言えば、アークエンジェルに乗せませんでした。乗せても、モブキャラ化するだけだし、なんとかせっかくのジャーナリストと言う設定を生かしたいと思ったからです。今回はその設定を生かして書くことと思いましたがどうだったでしょうか。もう少し、ジャーナリストとして活躍させたかったなと思います。

キラが殺されるのは当初の予定からでした。だって、恨みって、そう簡単に消えるもんじゃないと思うんです。ううん、消えて欲しくない。アイシャの写真を飾っていたバルトフェルドには特に。

心の裏で、恨みを持ち続けていて欲しかったのです。無いように見えてもなにかのきっかけで現れて欲しかったのです。

ただ、最初はアスランに負けてラクスの元へ帰還、射殺。と言うシーンを考えていたのですがアスランが以外に人間的に成長してモビルスーツのパイロットに拘らなくなったのでこのような形になりました。

ノイマン。この人物も恨みを持ち続けていた人物です。種は前作を書くのに何回も見ましたが、アークエンジェルがドミニオンを撃つシーンはどう見ても愛する男を殺された復讐としか見えませんでした(撃つ事自体は戦場で当然なんですけどね)

ドミニオンにナタルが残っていた事を知ったノイマンはどう思ったでしょう? やっぱり、恨んで欲しい。その思いがこの作品のノイマンとなりました。

キラ。この人物は悲劇を表現しようと思って出しました。キラ。キラ自身は何も悪くないんですね。ただ、先の戦役で心を病んでし

まっただけ。でも。キラは最初はフレイの面影、後はラクスに依存しました。治るきっかけもあつたんです。フレイの幻影から解き放たれた事。しかし、オーブは中立を宣言しました。そこでラクスは自分の野望を選んでしまった。キラは歪みが直らないまま戦い続けました。カガリの言葉も、アスランの言葉も届きません。最後に望んだ事はアスランに勝つ事、でしょうか。でも、アスランはとつくにそのモビルスーツパイロットと言う段階を過ぎていました。もし対決が実現していたら、アスランは後方で部隊の指揮を取り、冷静にキラを仕留めたでしょうか。ラクスの野望実現と言うキラにとつて喜ばしい状況で死ねたのはあるいは幸せな事だつたかもしれませぬ。もし、ラクスが野望を抱かなかつたなら、キラは回復して幼稚園の先生でもやっていたかもしれませぬ。

ラクス、黒いです。ある意味、銀河英雄伝説のラインハルト・ローエングラムに似てるかも。種死の最初が、宇宙を征服した所で引っ込んでしまった。その結果なんですね。だから、彼女はその点については挫折感が無い、成功体験しかないんです。今回も、自分が望めば世界は手に入れられると信じていた。そしてそれはある程度事実です。そう、ラクスは天才なんです。種死の今回でもターミナルと言う組織を作り上げ、数々の計算違いを乗り越えてもう少しまた世界征服してしまつたかもしれぬ。アーケエンジェルの乗員を薬漬けにしましたが、それは彼らがラクスにとつてさほど価値がなかったからでしょう。マリユールとカガリは前戦役の英雄と言うお神輿やってもらえばよかつたわけです。ラクスが当てにしていたのはターミナルの人員でしたでしょう。当然自分の陣営だと思つていたアイリーン・カナバの裏切りが無ければ、コロニー落としに恐怖する地球はラクスと妥協したかもしれませぬ。あるいは愛する男を殺された女の怨念がラクスの野望を阻んだ、と言つていいかもしれませぬ。

テレビ本編でラクスが民意を問うと言う正道を行かない訳をこの作品では、父が、民意によって失墜させられたから、としましたがどうでしょうか。そして、父を陥れるような行動をした訳は……。この事については後段におきます。

とりあえず自分の正義を疑ってないんですね。この人。本当に人類に責任感を持ってしまっている。ルドルフ・フォン・ゴールデンバウムです。だから、民意には問わない、武力で征服と言う考えが出てくる。その統治は策略有り謀略有りのものになるでしょうが。

ただ、仲間にはそれなりの仲間意識がさすがにあっただろうと、そしてキラとは純粋に愛し合っていたと思います。

ネオはどうしようかと悩みました。マリューがバルトフェルドとくつついてしまう予定で、地球連合が勝利する予定ですから。戦死してもらうのも忍びない。ですので、中の人ネタの美人の副官を付けてあげました。そのうち彼女とくつつくでしょう。

彼にはユークリッド隊を率いて戦ってもらおうかとも考えましたが、やっぱりルーデルみたいな人を出すのは……と言う事でユークリッドは二次大戦時の撃墜王達に頑張ってもらおう事に。言いながらノレーデルがw

マユ&シン

マユは当初死ぬ予定でした。死にキャラがいっぱいいたために生き残りました。それがなんと最後は乗機がデステイニーですよ！ 作者もびっくりです。戦後はハイネとくつつくか？

実は、ルナマリアの位置を彼女の位置にするかどうかで悩みました。シンは、シンちゃんと言った方がいいでしょうか。和みキャラ？ 妖しい一面も。

ハイネ……彼も、当初は死ぬ予定でした。そしてアスランが彼の言う『群れて戦わなきゃいけないナチュラルの戦法』を取り入れるきっかけに、とっていたのですが。アスランの成長が作者の予想より早く。死に時を逃しました。ラッキーですね。

ミア。死ぬ予定であり、死んだ人物。もし、自分の好みのアスラン×ルナでなければ生き残っていたかもしれない。デュランダルの演説の時に殺されたので、内面を深く書く事ができませんでした。後悔しきり。

後。サブキャラ達。

フロントムペイン側

ナイトハルト・ミラー……はい、銀英伝からですね。『ユ』が入るかどうかだけの違いです（笑）。無事、『鉄壁ミラー』の異名を得ました。

原田 左之助……新選組十番隊組長から。ニユートロン・スタンピードで近藤達がやられる場面で、駆けつけるのはシャムスではなく原田にした方がよかったかもしれません。

ジョン・デイカー……はい、エターナエル・チャンピオンのエレコ―ゼの一般人として暮らしていた時の名前です。最後は無事？ 冒険の旅に出たようです。大官寺と一緒にですから相当苦労するでしょうが。

井沢真秀^{いさわまほ} 出演作は『彼氏彼女の事情』です。最初はつつけんどんだった彼女も、最後にはナーエ達に『まほりん』と呼ばれるくらい仲良くなっていたようです。

ザフト側

シヨーン・ホワイト……ラストの話の通り、ウルトラマンマックスに登場した人物の役名です。本名はシヨーン・ニコルスと言うアメリカの俳優さんです。

ゲイル・リバーズ……ウィキペディアに出ています。ニュージューランド生まれの傭兵で、作業員、経営者、作家と多彩な活動をしています。元SAS隊員。航空輸送会社の経営、および特殊用途の武器販売を手がけるそう。一方で傭兵として、各国諜報機関の依頼で数々の対テロリスト工作に関わったそうです。著書の日本語訳は主に作家の落合信彦が手がけたそうですので興味が湧いた方はご覧ください。

その他

ガルト・デル・ホクハ……漫画での死に際が気の毒過ぎたので登場。ジャベリンを気に入ったようですがあれはオーパーツ過ぎました。ごめんなさい。

サース・セム・イーリア……ガルトのお供で登場。本当は、救国軍事会議との戦いをもっと詳しく書くつもりだったんですが、ザフトと地球軍+オーブ艦隊の戦いで心が満足してしまったのです。ごめ

んなさい。とりあえず、お家再興です。おめでとう！

そして……モロサワ、フクダ、タケダその他多くの名前を持っていた死にキャラ達……。

彼らもエターナル・チャンピオンでしょうか（笑）

ネタ元は、わかりますよね？ 遠慮なく殺せる名前と言う事で何度も登場してもらいました。

スカンジナビア王国。これは、絶対にお話に絡ませようと思いましたが。参戦させようと思いませんでした。だって、オーブより遙かに軍事力持っていそうで、ただの仲介役で終わるなんてもつたいないじゃないですか。直接の切っ掛けは『かかってこい！ フィンランド流血の夏』と言うH.O.Iハート・オブ・アイアンと言うゲームのリプレイを読んだ事でしょうか。燃えました。スカンジナビアの進撃路　ヨーロッパの地図を見るのは楽しかったです。

お話の終わりをどうするかには悩みました。地球連合の勝利で終わる事は確定だったんですけどね。それが決まったのは、東方不敗マスターアジアの台詞からです。あれで、シーゲルの行動が説明できると思ってたんです。ニユートロンジャマーを過剰過ぎる程に地球に打ち込んだのも、最終的にプラントが負けるような行動を取っていたのもすべて人類絶滅のため！（笑）

でもシーゲルは死んでいます。復活はさせたくありませんでした。代行者が必要です。それが、アイリーン・カナバ。彼女に決まった時、ラクスの死亡も確定しました。女同士のドロドロを書きたかったのです。

とはいえ、当初はアスランがラクスを殺すと言うシーンも考えていたのでラクスの死亡はかなり当初から決まっていたね（笑）

復活した人もいますね。はい、ラウ・ル・クルーゼです。これは、私が以前に書いた『ポーの一族』とのクロス短編を流用しました。クローンで寿命が短いレイ。それに何とか救いを与えてやりたかったのです。

それから触れておかなければいけないのはやはり、老魔法王ベネディクトでしょう（笑）これは、最初は前作のエターナルフォースブリザードから検索して見つけた、単なるネタだったのですが、ラストがプラント全基の地球突入と言うアイデアが浮かんで、どう收拾をつけようと思ったところからキャラが出来上がりました。はい、デウス・エクス・マキナです（笑）

アンデルセン神父とアナキンはリクエストに答えて。登場させただけでそれ程活躍させる気はありませんでした。種死のキャラを食ってしまいますものね。

ちなみに、私はカトリックではありません。ただ、1年に一回ルルドのお水を10リットルお頒けしてもらいます（笑）

マルキオ　正体はナイアルラトホテップ（笑）　実はこの案は前作の時に考えていたんです。でも前作ではマルキオはただのやられ役になってしまいましたので、今回はちゃんと這い寄る混沌になってもらいました。あまり活動はしませんでしたが。だって、彼がまともに活動したらお話が終わっちゃう（笑）

結構いい奴？　な最後でした。

ちなみにわかると思いますが自分はタイムパトロール系の話が苦手

です。結局夢落ちだと思っからです。
歴史改変を成功させる話は好きです。

……さて、後書きもだいぶ長くなってしまいました。

応援ありがとうございました。

そして最後に。

もし、もしもこの作品が気に入っていたただけたとして。

もしもまた次の作品が書けましたら、いつの日か、また、お目にか
かりましょう……。

再掲版あとがき

あとがきであります。

過去作品を再掲するのほもとまず終わりとなりました。

再掲したわけは、感想がほしかったからです。

小説を書く気がまったくなくなってしまい、ずいぶんたちました。

でもそろそろ書きたいなとまた思えてきたので、あらためて感想がほしくなったのです。

感想付かないかもしれませんが（汗

またがんばって行きたいと思しますのでよろしくお願いします。
では最後に。

もし、もしもこの作品が気に入っていただけたとして。

もしもまた次の作品が書けましたら、いつの日か、また、お目にかかりましょう……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8858o/>

千億の星、千億の光

2011年2月2日17時51分発行